日本戯曲全集
第二十七卷

舞踊劇集

東京
春陽堂版

これは「式三番」の翁の圖であります。能樂中でも最も重いものになつて居りますが、歌舞伎でもこれを取入れ、正月の「仕初め」又は「顔見世」の三日間等、重大な儀式には必らず舞つたもので、翁の役は座元が勤める事になつてゐました。筆者は勝川春章。

日本戲曲全集　第貳拾七卷　目次

舞踊劇集

再春菘種蒔

――舌出し三番叟

昔を今に
志賀山三番叟
あゝらやうがましや

文化九年九月中村座で、三世中村歌右衛門が大阪へ歸るお名殘に踊つた所作事で、すべて中村仲藏の昔を學び、志賀山流に據つたものであつた。「又來る春」といふ名題はその意味からで、歌詞にもその意が籠めてある。作詞は二世櫻田治助で、豊後路淸海太夫連中と、長唄芳村伊十郎杵屋正次郎との掛合ひであつた。淸海太夫といふのは元の富本齋宮太夫で、家元と爭つて退き、この時豊後路の一派を開いたのであるが、間もなく淸元と改めた。これが初代延壽太夫である。爲に今日でも淸元長唄ともにこの曲が殘つてゐる。振附は藤間勘十郎である。千歳は中村明石、三番叟は歌右衛門であつた。今日も絶えず舞臺に上るが、いつも千歳三番叟、二人の踊である。ところがこの脚本で見ると中村七三郎が出て最初本行通り翁の舞臺があつて、それが濟んでから三番になつた事が解るこれから引拔いて角兵衛になる型があるが、それは歌右衛門が後に又江戸へ來て、文政十一年九月に中村座で踊つた時にやつたものなのである。

最初に載せた「かつこほうろく」の狂言は、初演の折、序曲として添へられたものである。

再春菘種蒔（舌出し三番叟）

能舞臺の場

役名――三番叟。千歳　　長唄囃子連中

本舞臺、三間の間、見附け一杯、大松、根笹を描きたる張り物、誂らへあり、橋がゝり付き、これに根松、すべて、本行能舞臺の飾り付け、狂言のあしらひにて、幕明く。

ト橋がゝりより、目代、段熨斗目、素袍、立烏帽子、小さ刀、中啓を携へ、高札を持ち、狂言師の大名こなし、よろしく出て舞臺へ來り

罷り出でたる者は、この所を支配いたす目代でござる。當神社幣帛に付き、萬民の濡ひの爲、今日より新市を立てうと存ずる。それに付き、一の見世を飾りたる者には、この高札を與へ、諸役を赦し、受領を出さうと存ずる。先づ札を上げませうず。

ト高札を好き所へ立て

一段札形見事にござる。未だ夜更けにあれば、市人商人、見世を飾るは間もあらう程に、暫時休息いたさうと存ずるエイ〳〵。

ト云ひながら下座へ入る。ト橋がゝりより、鞨鼓賣り、無地熨斗目、輕衫、狂言上下の肩を着て、角帽子を被り、鞨鼓、撥を首にかけ、狂言師のこなし、出て、舞臺下手にとまり

罷り出でたるは、山一つ彼方に住居いたす、鞨鼓賣りでござる。左樣にござれば、この所富貴に付き、新市をお立てなされ。一の見世を飾りたる者には、御褒美として諸役御免の受領を下されんと承つてござる。今は斯樣の物をば商ひまするとも、この度の新市に一の頭をして受領を請ひ受け、末々は金銀などを商ふやうにと、夜更けに出かけて參つたが、よもや某より先に見世を開くものもござるまいと存ずる。先づ、そろ〳〵と參らう……イヤ、誠にかゝるめでたい御代に住めばこそ、我れ〳〵が如き末々の商人も、繁昌いたすと申すは有り難い事でござる。

ト云ひながら舞臺を一遍廻り、元の所へ來り

イヤ、何か申すうち、程なう市場さうにござる。さても
さても、繁昌の市は鍵手形に立つと申すが、あれからこ
れへ、これからあれへ、さても〳〵好いものでござる。
先づ市頭へ參らう。

ト舞臺上手へ來て

さて喜ばしいは第一番でござる。先づ見世を飾りませう
ず。

ト高札を見て

ハア、爰許に受領の高札を立てさせられてござる。某
第一の見世を飾つてござれば、文書の通り、札を拜領い
たさう。

ト高札を取つて

この札さへ拜領いたせば、拙者が滿足でござる。未だ夜
更けにござる。市盛りには間もござらう程に、ちつとま
どろみませう。エイ〳〵。

ト右の高札を持ち、そこへ寢る。ト橋がゝりより、焙
烙賣り、無地熨斗目、輕衫、同じ肩衣を着て、角帽子
を被り、大きなる焙烙を首にかけ、同じく思ひ入れよ
ろしく出て、舞臺下手にとまり

罷り出でたるは、山一つ彼方に住居いたす、焙烙賣りで
ござる。左樣にござれば、この所富貴に付き、新市をお
立てなされ、一の見世を飾りたる者には、御褒美として
諸役御免、受領を下されんとある、高札を立てさせられ
たりと承る。拙者一の見世を開き、その高札を申し請け
んと、夜更けに參つた。よもや某より先に見世を飾る者
はあるまいと存ずる。先づそろ〳〵と參らう……誠に、
かゝる繁昌の御代なればこそ、我れ〳〵如きの商人も、
めでたう榮ゆると申すものでござる。

ト舞臺を一遍廻つて元の所へ來り

イヤ、何か申すうち、程なう市場でござる。どこ元に札
が上がつたぞ。

トあたり見廻し、鞨鼓張りを見て

イヤア、さても〳〵、某よりも先へ來う者はあるまいと
存じたれば、鞨鼓張りが先へ參つて、高札を取り、キヨ
ロリと心をゆるし、高鼾で居る。先づ何か差措き、彼奴
が眼を覺まさぬやう、札は此方へ拜領いたさう。

トそつと札を取る。

まんまと仕負ふせてござる。高札さへ申し請くれば、某
が一の見世でござる。まだ夜更けさうにござる間、ちと

まどろみませうず。エイ〳〵。

ト同じく札を持ち寝ると、鞨鼓張り、眼を覺まし

鞨鼓　ハア、さても久しう寝た事かな。段々時刻にもならうずる間、見世を開きませうず……ヤア、さて不思議な事かな。大切に持つて居つた高札が見えぬでおぢやる。

トあたりを見廻し、焙烙賣りを見て

さて〳〵世には横道者がござる。先づ何がなしに、彼奴が目を覺まさぬやうに、札を取戻しませうず。

ト焙烙賣りが側へソッと行き、高札を取らうとするを、目を覺まし留めて

焙烙　コリヤ、横着者、何事ぢやぞ。

鞨鼓　イヤ、横着者とは、和御寮の事ぢや。某一の見世を飾り、拜領いたした受領の高札。餘り夜更けに參つた程に、少しまどろむうち、奪ひ取つたであらうが。

焙烙　イヤ、推參でおりやる。これは某が一の見世を飾つたる證據に、拜領いたした。

鞨鼓　これは如何な事。奇怪盗人でおりやる。

焙烙　イヤ、某は焙烙賣りぢやワ。

鞨鼓　商人なら、札を戻し、ズッと市末へ參つて商へ。

焙烙　ハア、おぬし、脇へ寄つて商へ。

鞨鼓　實正渡さぬか。

焙烙　弓矢八幡渡さぬ。

鞨鼓　ヤ、こゝな奴は、渡せ。

焙烙　理不盡な。

鞨鼓　横道者。

ト兩人、高札を奪ひ合ひながら

兩人　出合へ〳〵。

ト呼び立てる。下座より、目代、出て來り

目代　これ〳〵騷がしい。何事ぢやぞ。

鞨鼓　お前はどなたでござりまするぞ。

目代　所の目代ぢや。

焙烙　ハア、燭臺にしては、頭に蠟燭を立てる所がござらぬ。

トきつと云ふ。

目代　何を申す。この所を支配いたす目代ぢや。

鞨鼓　ハア、存じませんでござる。

兩人　お禮申しまする。

ト兩人、辭儀する。

目代　禮までには及ぶまい。先づ何事を爭ふぞ。

鞨鼓　その御事でござる。禮を上げさせられたる如く、私

しか一の見世を飾り、受領の高札を拜領いたしてござる
を、餘り夜更けゆゑ、市盛りを見合せ、少しまどろみま
してござる間、彼奴めが奪ひ取りましてござります。
日代　言語道斷な事でおりやる。
焙烙　申し〳〵、あの鞨鼓賣りが申す事は、僞はりでござ
る。某が一の見世を飾りましてござる。その證據には、
同じやうに拙者も、市盛りを見合せ、まどろみましてご
ざる。なれども高札を拜領いたしてござる。
鞨鼓　イヤ〳〵、キッと某が先へ拜領いたしたを、奪ひ取
りましてござる。
焙烙　イヤ〳〵、某が拜領いたしたを、奪ひ取らうと致す
のでござる。
鞨鼓　イヤ、おぬしが。
焙烙　イヤ、和御寮が。
ト爭ふ。
日代　これは如何な事、左樣に爭うては、理非が判らぬ。
鞨鼓　それに付きましても、この鞨鼓などの側に、なんぞ
よ土焙烙などは、かたする物ではござらぬ。罰が當りま
する。ズッと市末へやらしやれませい。
日代　して、その鞨鼓には系圖があるか。

鞨鼓　なか〳〵。キッと致した系圖がござるが、あの土焙
烙にも系圖があるか、問はしやれませい。
日代　心得た。
焙烙　申し〳〵、これで承つてござる。この焙烙賣りには
殊の外キッと致した系圖がござる。
日代　それは一段の事でおりやる。然らばこの所に於て、
双方系圖を申し、勝れたる方を市頭として、高札を遣は
し、負けたる者は市末へ參れ。先づ受領の札は、これへ
立て置く程に、勝負に依つて頂戴しやれ。
ト高札を元の所へ立て、床几にかゝり。
その分心得候へ。
兩人　これは依怙なき重疊の事でござる。
焙烙　先づ彼の者から、あらば云へと御意なされませい。
日代　心得た……早うそれにて申してよからう。
鞨鼓　畏まつてござる。鞨鼓と申しまするは、天照大神素
盞嗚尊の、荒きお心を慰らしめの爲、天の岩戸へ入らせ
給ひし時、世は常闇となりしを歎き、八百萬の神達、日
の御神を慰めんと、岩戸の前にしてさりかけ、榊に鷄明
を告げさせ、天の鈿女の尊、神樂を作ふす。その樂器の
隨一にして、古歟にも引いて、めでたき樣をかつこくふ

からして鳥威ろかずと、世話にもあり、それより神いさめの器に定められ、かゝるめでたき品ゆゑ、幼な子若衆達が、鞨鼓遊び八撥などと申してござりまするが、焙烙には斯様なめでたき、系圖、また焙烙遊び八撥などゝ申す事はござりますまい。

目代　オヽ、これも斯うおやわいやい。汝聞いたか。

焙烙　なか〳〵承りましたが、如何程彼奴が申すとも、あのやうな卑劣な事ではござらぬ。上もない系圖でござる。抑々焙烙と申しまするは、畏れ多くも天神七代、地神五代、人皇に移るまで、すべて鐵器を用ひず、この焙烙をわさなべと申して、命を養ふ随一の器。されば今の世も、年越しの鬼打ち豆は、焙烙にて煎る。古歌にも引いて、高き家に昇りて見れば煙立つ、民の竈は賑ひにけりと申すは、おわさなべをお祝しなされたるお歌でござる。なんぼう天照大神さまが、岩戸から出さつしやれても、稚な子若衆達が、あの鞨鼓を打たうとも、この焙烙と云ふ物がない時は、一切の食物を煮る事がなりませず、よもや生きては居られますまい。さすれば命を繫ぐ最上の器、鞨鼓などと同じやうに申すは、愚かな事でござる。

目代　誠に、謂れを聞けばめでたき系圖はこれで落ちた。

もう外に系圖はないか。

鞨鼓　イヤ、この上は、互ひに藝道を比べ、勝負づくに致しませう。

目代　オヽ、それが一段であらうぞ。

鞨鼓　拙者は棒を振りませうか、焙烙賣りも振るか、問はつしやれませい。

目代　ヤイ〳〵、あの者は棒を振らうと申すが、汝も振るか。

焙烙　彼の者さへ、振りませうならば、なんとやうにも振りませう程に、先づ急いで振れと仰しやれませい。

目代　これへ出て振りませい。

鞨鼓　畏まつてござる。

ト立合ひ棒を取つて

イヤエイ〳〵、イヤッと振つてござる〳〵。

ト鞨鼓賣り、右の棒をよろしく振つて納める。

目代　ヤイ〳〵、汝も急いで振れ。

焙烙　畏まつてござる。あの棒を貸せと仰しやれて下さりませい。

目代　心得た。ヤイ〳〵、彼の者に棒を貸して遣はせ。

鞨鼓　イヤ、これは拙者が所持の棒でござれば、貸す事は

なりませぬ。面々の物で振れと仰しやれませい。
焙烙　ア丶、承つてござる。イヤハヤ、氣強い奴でござる。焙烙なりとも振つてこませう。これへ出て見さつしやれませい……イヤ、エイ〳〵、イヤツと振つてござる。
ト焙烙にて不器用に振る。
目代　ハア、見事振つたワ。
鞨鼓　また某は、鞨鼓を打ちませうが、彼奴も打たうか。問はしやれませい。
焙烙　承つてござる。なんの彼奴に劣りませうず。
目代　然らば、急いで鞨鼓を打て。
鞨鼓　畏まつてござる……エイ〳〵ヤツトナ。
トよろしく持つたる鞨鼓を打つ。
目代　汝も急いで打て。
焙烙　畏まつてござる。さりながら、あの鞨鼓を貸せと仰しやれて下さりませい。
鞨焙　イヤハヤ、これで承りました。面々の物で打てと仰しやれませい。シタガ、何は嫌かは嫌と申すれば、彼奴がむげないと存じませう程に、この撥は貸すと仰しやれませい。
目代　オ丶、……ヤイ〳〵、鞨鼓はならぬ。撥は貸すと云ふぞ。
ト撥を鞨鼓賣りより受取り、焙烙賣りに渡す。
焙烙　さては彼奴も、ちつとは心が直つたと見えました
目代　急いで打て。
焙烙　畏まつてござる。
ト焙烙を鞨鼓のやうに打たうとして
ハア、爰ぢやな。
ト考へる思ひ入れ。
目代　なんとしたぞ。
焙烙　イヤ、彼奴心が直つたかと存じたりや、焙烙を割らする企みでござつた。
鞨鼓　ちつとさうもおぢやるまい。
焙烙　所を打つて見せ申さう……ぽつひやとうろぴやりとうろろうろ、ヤツと打つてござる。
ト鞨鼓賣りの通り焙烙を打つ事よろしくある。
目代　オ丶、一段打つた。
鞨鼓　この上は相打ちに致しませう。
目代　急いで相打ちに致し、勝つたる者に高札を遣はすキツと申し渡したぞ。
ト目代、下座へ入る。

両人　畏まつてござる……ほつひやとうろでやりとうろ。

トこれより両人、いろ〳〵、鞨鼓賣りがする通り、焙烙賣り、不器用に眞似をして、鞨鼓賣り、鞨鼓をころがす。焙烙賣り見て、焙烙をソツところがす。鞨鼓賣り、焙烙にて出來兼ねる事をいろ〳〵する。焙烙賣り、その通りやう〳〵する。トゞ鞨鼓賣り、無性に鞨鼓を抛り受ける。焙烙賣り、いろ〳〵困り、やう〳〵ソツと抛る。鞨鼓賣り、図に乗つて焙烙賣りを浮かし、鞨鼓を抛る、焙烙賣り、浮れて焙烙を無性に抛り、受け損じて微塵にぶち毀し

焙烙　南無三寶、しなしたる事かな。

鞨鼓　今こそ札は拜領いたす。

ト高札を取つて下座へ入る。焙烙賣り見て

焙烙　コリヤ、勝負は付かぬ。横道者、やるまいぞ〳〵。

ト下座へ追ひかけ入る。トよろしくあつてこれより翁千歳三番叟の所作にかゝる。

翁千歳、本行の通りあつて、揉出しになり、三番叟、立ち上がり

三番　おゝさへ〳〵、喜びありや〳〵、我がこの所より、外へはやらじと思ふ。

トこれにてチョンと正面の看板を打ち返す。これに清見太夫連中居並び、直ぐに呼び出しの淨瑠璃になる。

淨〽その昔、秀鶴の名にしおふ、都上りの折を得て、数へ請地の親方に、舞の稽古を志賀山の、振りもまだなる稚な氣に、忘れてのけし三番叟、繰り出し揉み出し一奏で、めでたう榮屋仲藏を。

トばつくりをしてキツと見得。この付けにて、下の方の看板を打ち返す。これに長唄囃子連中居並び、

唄〽似せ紫もなか〳〵に、及ばぬ筆に寫し繪も、池の汀の石鶴や、ほんに鶴の眞似烏飛び、

淨〽とつばひとへに有り難き、花のお江戸の御贔屓を、頭に頂き立烏帽子。

唄〽さつばもおのが故郷へは、錦と着なすお取立て、烏滸がましくも五年の、

淨〽今日ぞ名殘に。

唄〽候ふよ。

トよろしくあつて

三番　物に心得たる、あどの太夫どのに、そとけんざう申さう。

初演當時の錦繪　三世中村歌右衛門の三番叟

千歳　丁度參つて候ふ。
三番　某が呼び申す所に、はや／＼とのお立ち、先づ以て祝着申し候ふ。
千歳　されば候ふ。
三番　あどの太夫どのを、目利きいたいて候ふ。
千歳　何と御覽じ候ふぞ。
三番　福人と見申して候ふ。
千歳　言語道斷、お目が利いて候ふ。また色の黑い尉どのを目利きいたいて候ふ。
三番　何と御覽じて候ふぞ。
千歳　德人と見申して候ふ。
三番　さん候ふ。某は德人の中にても、子德人にて候ふ。子を十人持つて候ふが、上五人は玉をのべた女やうなるめなごにて候ふ。
千歳　先づは揃へてお持ち候ふよ。
三番　十人の子を車座に置いて、一口に呼ぶやうに名を附けて候ふ。
千歳　何とおつけ候ふぞ。
三番　先づおッ取り違へて、おとよ、けさよ、たつまつ、いるまつ、だんだらいなごに、かいつくひつく、燒き袋にぶらりと付けて候ふ。

千歳　ア、ラめでたや。その若子達の祝ひ日、一段と賑にしき事に思はれて候ふ。
三番　仰せの如く、あらましこれにて申さうずる間、先づあどの太夫どのには、重々と元の座敷へお渡り候へ。
千歳　某、座敷へ直らうずる事は、何より以て安ふ候ふ。先づ／＼それにてお語り候へ。
三番　イヤ／＼、お直りなうては語り候ふまじ。
千歳　先づ／＼、お語り候へ。
三番　ア、ラ、ようがましや候ふ。

　トこれより振りになる。千歳を相手に使ふ事あり

唄〽天の岩戸の神樂月とて、祝ふほんその年も、五つや七三ツ見しよと、縫ひの模樣のいとさま／＼に、竹に八千代の壽こめて。
淨〽松の齢の幾萬代の、變らぬ例し鶴と龜、ぴんと跳ねたる日出鯛に、海老も曲りし腰熨斗目。
唄〽寶づくしや寶船。
淨〽やら／＼めでたい世の。
唄〽四海浪風納まりて。
淨〽常磐の枝ものほんよえ、木の葉も茂る、ゑいのんゑ

いつそいさら、鯉の瀧登り、牡丹に唐獅子唐松を、見事に見事に。

唄〽さつても見事に手を盡し、仕立て榮えあるよい子の小袖、着せて着つれて參ろかの、肩車にぶん乘せて。

淨〽乘せて參ろの氏神詣で、宜禰が鼓のてんつくでん。

唄〽笛のひしぎの音も冴えたりな、冴えた目元のしをらしき、中の〳〵中娘を、ひさつ長者が嫁に欲しいと望まれて。

淨〽藤内次郎が朽ち栗毛に乘つて、エイ〳〵〳〵、えつちおつちらわせられたので、その意に任せ申した。

唄〽さて婚禮の吉日は、縁を定の日を選み、送る荷物はたに〳〵やろな、瑠璃の手箱に珊瑚の櫛笥、玉を延べたる長持に、鍋も調度の潔よく。

淨〽様になア百までナアエ、わしや九十九までナア、エエ

唄〽共になア白髪のナアエ、生ゆるまでもよナア、エ。

淨〽嫁とは云へど世間見ず、駕籠の内外の思惑が、はづかしみ〳〵案じられ、初に添ひ寢の新枕、交す詞もなんと云うて、どうして宵の口と口

唄〽雌雄の銚子の杯も、飲まぬうちから殿御にのまれ、耳より先へ染めて濃き、頬も紅葉の色直し、それから床に差向ひ、怖さ半分嬉しさも、先へは出でず後じさり。

淨〽互ひに手さへ鶏鐘の、聲が取持ちやう〳〵と、明け行く空を月にして。

唄〽いざ脊結んで女夫仲、睦月と岩田帶。

淨〽やがて孫曾孫玄孫を儲け、末の樂しみこの上や。

唄〽あら喜ばしの尉が身と。

淨〽心浮き立つ踊り唄。

　ト　これより手踊り模様になり

唄〽花が咲き候黄金の花が、てんこちない、今を盛りと咲き包ふ、てもさても見事な黄金花。

淨〽ほしかおましよぞ一枝折りて、そりや誰れに、いとし女郎衆のかざしの花に、ほうやれ戀の世の中。

唄〽實戀の世の中。

合〽面白や。

淨〽直ぐにも歸りお目見得を。

唄〽又こそ闘ふ種蒔や。

　ト　少し鈴の段あつて

淨〽千秋萬歳。

唄〽萬々歳も。

合〽賑ふ芝居と舞ひ納む。
ト段切へかぶせ、片シャギリにて

幕

再春菘種蒔（終り）

歌舞伎十八番の内

景清

——牢破り景清

これは純舞踊劇とは云へないが、地に常磐津を使つてあるし、全體が半樂劇の荒事であるから、この卷へ收錄したのである。そも〳〵景清といへば、江戶芝居の大立者で、春狂言には必らず現はれ、しかも座頭俳優の役ときまつてゐたので、隨つて景清の狂言は無數に作られてゐる。この「牢破りの景清」もその一種で、明和四年の春中村座「初商大見世曾我」で四世團十郎の勤めたのが最初であるが、これを訂正して、享和二年の春河原崎座「初紋日粉飾曾我」で五世團十郎が勤めた。それを又更に補訂して、地も大薩摩であつたのを常磐津に改め、天保十三年四月の河原崎座で七世市川團十郎、(この時海老藏)が、初めて歌舞伎十八番の名を冠して上演した。本卷收錄の脚本がこれである。興行中海老藏は奢侈の科で咎め仰せつけられ江戶お構ひになつたので「景清は牢を破つて手錠くひ」といふ落首が出來た。後に八世團十郎が一度演じ、九代目は演ぜず、今の幸四郎が二度演じたきりである。この時の役割は、景清(七世市川海老藏)重忠(市川九藏)忠常(八世市川團十郎)宗連(三世嵐吉三郎)景時(嵐猪三郎)長谷八郎(大谷万作)忠太(市川川藏)成清(市川升五郎)阿古屋(尾上榮三郎)人丸(尾上菊次郎)であつた。

堀越宗家がこの脚本所載を許された事に感謝する。

景清（牢破り景清）

土牢の場

役名＝秩父庄司重忠。岩永左衛門宗連。仁田四郎忠常、梶原平三景時、榛澤六郎成淸。番場の忠太。長谷の八郎。敦盛嫡子、保童丸、海野小太郎。竹の下孫八。景淸妻、阿古屋。同娘、人丸。惡七兵衛景淸。

常磐津連中

本舞臺、三間の間、誂らへ二間の牢を取付け、この上に大木大石を乘せ、左右舞臺後とも一面に竹を描きし見事なる大襖。折り廻し、岩組み、松の模樣。下の方、淨瑠璃臺、爰に文字太夫ワキ咲太夫、三絃式佐、上調子一人、扣へ並び、上の方、振り好き松、すべて、鎌倉決斷所の體、尤も舞臺一面、所作臺を置き、破風口、結構なる拔き形、シヤギリあつて、時の太鼓にて幕明く。

ト頭取出て、歌舞伎十八番の內、景淸の狂言、七代目白猿相勤め候ふと云ふ事、口上觸れあつて、その爲口上左樣と入る。向うより、海野太郎、大紋、立烏帽子。竹の下孫八、同じ拵らへにて出て來り、直ぐに本舞臺へ來て

孫八　如何に海野どの、先達て捕はれとなりし七兵衛景淸、最早日數も五十日に及ぶと雖も、二品の寶、今に於て白狀せず、なんと死太い奴ではござらぬか。

太郎　それのみならず、一滴の水、一粒の穀精をも、源氏の祿は受けぬとて、咽喉を通さず、それゆゑ今日賴朝公より、岩永左衛門、添へ役として仁田梶原の御兩所も、出仕召さるゝとの事でござる。

孫八　梶原岩永の御兩所は、範賴公より御內意ござれども

太郎　秩父仁田は賴朝公より、仰せを受けし事なれば

孫八　景淸降參なす上は、賴朝公のお味方は知れた事。

太郎　どうぞ範賴公へお味方を、勸めたいものでござる。

孫八　何に然れ、非常を糺す今日の役目。

太郎　然らば、これにて相待ち申さう。

ト兩人、思ひ入れあつて、牢の左右へ扣へ、桂桶へ腰をかけ、中啓を持ち居る。前彈きにかゝる。常磐津の床の下に毛氈を敷き、囃子方四人居並ぶ。笛、太鼓、小鼓、大鼓なり。

〽國政を聞く事三月にして、魯國大に納まる、御代の譽れは今も世に、直ぐに導く勳しや、禮をそれ〴〵の姿勇ゝしき鎌倉い。

ト時の太鼓になり、花道より、重忠、忠常、何れも大小、上下衣裳、後より軍兵四人、結構なる蒔繪の膳にいろ〳〵盛り並べ、三方に土器、長柄の銚子、持ち出て來る。東の口より、宗連、景時、同じく上下衣裳、大小にて、出て來る。後より、軍兵四人、大きなる鮑貝に飯を盛りしを持ち、三方に乘せ、手桶、梯子を持ち、付添ひ出で來る。兩方花道好き所に留まり

重忠　政事の爲に德を以てすれば、譬へば北辰のその所に在つて、衆星これに向ふが如く、六波羅より仰せを蒙むり

宗連　我れ〳〵とても範頼公より、重き仰せは惡七兵衛景淸を、味方に勸むる今日の役目。

忠常　添へ役として仁田の四郎忠常、私しならぬ重き嚴命、

景時　味方に付かねばその身の破滅、直ぐにお祟り、否か應かの一口商ひ。

重忠　最早未の上刻なれば

宗連　屠所の歩みの囚人景淸。

忠常　拷問の刻限。

景時　イザ、御一緒に

重忠　相詰め

四人　ませう。

〽白洲へこそは打通ふ。

ト時の太鼓になり、舞臺へ持々來り、上手に、重忠、宗連、下手に忠常、景時、軍兵左右へ別れ、何れも桂桶にかゝり、よろしくあつて

太郎　何れも方には、今日のお役目。

兩人　御苦勞に存じまする。

宗連　これは〳〵、何れも方、今日拙者が拷問の次手。

景時　以後の手本に見物さつしやい。

重忠　我れ〳〵は遁がれぬ役目。

忠常　御苦勞千萬。

宗連　イヤナニ、重忠どの、靑山の琵琶、靑葉の笛詮議、

景時　もし白状いたさず、お味方にも参らぬ時は由井ヶ濱に引出だし、首打ち放し、軍門に曝せとある、範頼公の

宗景　御上意でござる。

〽重忠耳にも入れ給はず。

重忠　イヤモウ、頼朝公にもお味方に、招きたいとの事なれども、捕はれとなつて今日まで、最早日數も五十日、湯水を始め日夜の食事も、源氏の祿は一粒も、咽喉へ通さぬ我強き景清。

忠常　此まゝに致し置けば相果てまするは治定。さすれば二品の在所も死人に口無し。それのみならず、お味方の沙汰も水の泡。

重忠　只この上は景清に、食事を與へ、身體を養ひますが肝要かと存じまする。

宗連　ヒ、ハ、、、。いづれも聞かしやつたか。いま鎌倉で四海を覺ると、噂のある重忠どのゝ計らひも、矢ッ張り食事を進めるのでござるか。

景時　我れ／＼とても矢張りその通り、同じ事でござる。ハ、、、。誠に景清が娘人丸、先達て小袋坂にて召捕り置き、只今これへ召連れましてござる。

重忠　それは好い者がお手に入つてござる。拙者方へも景清が妻阿古屋、自身に名乘り出で、今日これへ召連れてござる。

忠常　双方とも、これへ呼び出しましては、如何でござりませう。

景時　イカサマ、左樣いたさう。梶原が家來番場の忠太、人丸を、キリ／＼これへ引摺り出せ。

重忠　重忠が家來榛澤六郎、囚人の阿古屋を召連れい。

ト東西にて

兩人　委細畏まりましてござる。

〽今は便りも涙にて、胸はほどけぬ思ひの色香、また孤兒のきづなさへ、引かれて憂き目みち奥の、阿古屋と同じ人丸も、姿の花もうつろいて。

トこの文句のうち、花道より、阿古屋、やつし形、腰繩にかゝり、侍ひ、繩を取り、成清、付添ひ出る。東の口より、人丸、振り袖、これも腰繩にて、侍ひ、繩を取り、忠太、惡丸が刀を持ち、付添ひて出て來り、花道にて、ちよつとこなしあつて、本舞臺へ來る。

侍ひ　下に居らう。

ト引据ゑる。

成清　仰せに從ひ先達て、我れと我が身に名乘り出で、縊しめ受けまする景清が妻阿古屋、召連れましてござります。

ト宗連、思ひ入れあつて

宗連　ヤイ阿古屋、人丸景清に逢ひてえか。

〽それとその名を聞くにさへ、みちくる涙押拭ひ。

阿古　我が夫捕はれの身と聞きしゆゑ、逢ひたさ見たさそれゆゑに、名乘つて出ました心の內、御推量なされて下さりませ。

人丸　さう仰しやるは母上樣、お懷かしうござりまする。

阿古　其方は娘人丸、逢ひたかつたわいの〳〵。

〽逢ひたかつたと母親が、寄らんとすれば縛り繩、娘も共に縮め締む、血筋の緣の。

ト兩人、立ちかゝるを

侍ひ　下におらう。

トこれにて、ヂッと下に居る。

〽親と子が、大地へ撞と伏しまろぶ。

ト兩人寄らうとする、捕り手、繩を扣へるゆゑ、寄られぬこなしあつて、泣き伏す。重忠、思ひ入れあつて

重忠　ハア、、親子の愛憐、さもありなん。一つ所に引かれて來て、名乘り逢ふ喜びの中にも、淺ましいこの對面。

忠常　嘆きの程察し入る。この上は景清に、對面いたさせましては如何でござりませう。

重忠　如何にも左樣仕らん。ソレ、兩人、牢の格子を、開き召され。

成忠　畏まつてござる。

ト兩人、鍵を持ち、牢の格子を開く。

〽祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の限りあらず、されば平家世を取つて二十餘年の榮耀も、夢と覺めたる無漏の海、浪間の月の景清が、夢を覺ませし妻や子の、聲懷かしく流石にも。

トこの文句のうち、景清、百日、半切れ、小手臑當の形、大綱にて縛られたる儘にて、五器口より顏を出す。この時、兩人、景清を見ていろ〳〵、焦せる思ひ入れ。

景清　懷かしや、阿古屋人丸、右幕下に見參なすまでは、逢ひ見る事も叶ふまじと思ひしに、今日優曇華の對面。これで滿足、日頃信ずる菩薩の功力、有り難や、忝なー。さはさりながら人丸、阿古屋、變り果てたる有樣ぢやなア。

〽見交す顏に驚の、ほう法華經の普門品。

阿古　絶えて久しき景清どの、お目にかゝつて嬉しいが、
浅ましいその姿。
人丸　幼ない時にお別れ申せし父のお顔、母様のお顔さへ、
見るに甲斐ないこの縲目。
阿古　さぞ御無念で
兩人　ござりませうなア。
〽深き歎きは母娘、泣く音を包む袖さへも、哀れ彌増す
ばかりなり。
侍ひ　扣へて居ろう。
重忠　イヤナニ、岩永どの、景清をこれへ引出し、拷問い
たしては如何でござらう。
宗連　それようござらう。何れも、景清めをこれへ。
景時　引出し召されい。
軍兵　ハアヽ。
ト皆々立ちかゝり、牢の中より、景清を引出す。
〽手枷足枷それよりも、妻と娘に羈しさへ、心にかけぬ
大丈夫、食を絶せし衰へに、心ばかりは瘦せねども、身
こそ弱りて見えにけり。
ト皆々立ちかゝり景清を連れ出す。舞臺の眞中へ据ゑ
る、阿古屋、人丸、思ひ入れ。

〽重忠景清が側へ寄り、地上に描く情の牢屋、縛めの縄
引解けば。
ト重忠、刀の鐺にて丸を描き、景清の縄を解く、景清、
思ひ入れ。
景清　重忠、なせ縛めを解き召された。
重忠　不審な尤も。
ト丸の内へ思ひ入れ。
景清　ムウ。
トこなし、景清、圖の内へ入る。
〽強氣に恐れぬ景清も、智仁を悟りて座に直れば、岩永
左衛門聲荒らげ。
宗連　不念でござらう、重忠どの、未だ善惡解らぬ景清、
縛めを赦したは、さては御邊が今日の拷問、生温らやら
るゝな。
景時　その上、地上へ丸い物を描いて、その中へ景清を入
れ召されたは
兩人　どう云ふ心か、承りたい。
重忠　イカサマ、御合點が參るまい。周の文王が政道にて、
如何なる五刑の罪人なりとも、地の上へ繪圖を描き、そ
の中へ入れ放ち置く。これ聖人の仁義の獄屋。例へ鐵

の柵は破るとも、重忠か寸志の獄屋、この牢ばかりは破れまい。

ト小鼓の合ひ方。

〽情も籠る仁義の獄屋、景清は感じ入り。

景清　こは忝なき重忠が寛仁。さほどの厚き志しあるこの獄牢、摧いた牢でも、むざとはどうも破られぬ。この上の願ひには、一目なりとも頼朝公の御顔せ、拜し奉らんものならば、生前の大慶。重忠、偏へに願ひ奉る。

重忠　如何にも、さもあらん。ソレ、榛澤六郎、申し付けた品これへ。

成清　ハア。

ト成清、烏帽子、直垂の箱を三方に載せしを持ち出て、重忠に渡す。

〽お召しの烏帽子直垂を、重忠取上げあなたなる、松に引掛け。

ト重忠、上手の松へ烏帽子直垂を引掛け

重忠　これ見られよ景清。あの松ケ枝に掛けたるは、頼朝公の御烏帽子、直垂。

ト景清、これを見て

景清　ナニ、頼朝公の御烏帽子直垂とや。

重忠　如何にも。時に取つての頼朝公。

忠常　イザ、お目見得

両人　致されよ。

景清　アラ珍らしや、右幕下の御尊顔を、拜せし心地なしたるぞや。アヽ、さりながら、重忠どの、あの頼朝公にては、まだまだ摧いた牢でも破られぬ。

重忠　然らば時の面目は雪がれつらん。あの松ケ枝の頼朝公へ、何卒心を和らげて

忠常　お味方を承引せられよ。

宗連　イヤ景清、範頼の味方に付きやれ。まだその前に尋ね問ふは、青山の琵琶、まつた青葉の笛の在所をば、

キリキリ

景時　吐かしてしまへ。

ト景清、これを聞いて、思ひ入れあつて

景清　知らないワ。又しても寶の在所、頼朝どのが善根をするなんのと、善心の面で、平家の菩提を弔らひ、追福追善の大法事の管絃を奏し、萬僧供養あるゆゑに、その管絃の音律を揃へん爲に、青葉の笛と琵琶を加へるなんどゝ云つて、平家の重器を源氏の寶になさんとするにもせよ、平家の法事を源氏の大將にしてもらふやうかな

い。誠平家の追善と云ふは、千僧萬僧の供養、百律千呂の管絃を奏さんより、頼朝公の御首を賜はるが、平家の爲の大法事。これがいつち好い弔らひだ。また二品の寶の在所、知つたればとて云ふものか。元より知らないから、白狀する筋がないワ。聞きしに劣つた岩永、梶原。けちな根性の侍ひだなア。

〽云ひ廻されて口あんぐり、岩永は面脹らし。

宗連　ヤア、白狀せざるのみならず、憎くき雜言。ヤアヤア、長谷の八郎、保童丸を召連れい。

八郎　心得ました。

ト八郎、上下衣裳、大小、股立ちをとり、保童丸、着流し、廣振り、丸絎を締め、これを引抱へて出て來り

仰せに從ひ保童丸を、引据ゑましてござります。

ト阿古屋、人丸、これを見て

阿人　ヤ、保童丸さま。

宗連　その童めを、牢の內へ叩き込め。

八郎　心得ました。餓鬼め、うせろ。

阿人　ア、モシ。

ト留めるを、八郎、突き退け、保童丸を牢の內へ入れる。景清、思はず立ち上がる。皆々見て

皆々　牢を破るか／＼

トこれにて、景清、ヂッと下に居る。

八郎　サア、何奴も此奴も敦盛の、忘れ形見の保童丸、鶴ケ岡から引摺つて來た。どうで物を吐かさぬからは、味方に付く所存もあるまい。コレ、景清、いま見る如く保童丸も、牢獄へ叩き込み、穀を絕てば命がねえが、それでもわれは吐かさぬか。サア、保童丸が助けたくば、寶の在所、云つてしまへ。

景清　否だわえ。うぬ等が面を見るも穢はしい。さては岩永梶原が仕業よな。その後御行くへ知れざりしが、御機嫌の御顏、見奉る某が大慶。まだ幼なき保童丸君を、牢獄へ押込め奉るとは大人氣なし。岩永梶原、取り所のない白痴だなア。

宗連　イヽワ、さう吐かしやア、骨を拉いでも云はせて見せうワ。

景時　ヤア／＼、景清に水喰はせる

兩人　用意をしろ。

皆々　ハア、、。

重忠　ア、、イヤ／＼、御兩所暫らくお扣へなされい。その責め道具は、重忠用意いたしてござる。

宗連　すりやアノ、責め道具を。
重忠　如何にも。榛澤六郎、申し付けたる責め道具、これへ持て。
六郎　ハッ。
〽はつと答へて責め道具、いとも優しき爪琴に、哀れ催ふす胡弓をば二人が前に直し置く
トこれにて、侍ひ、謎らへの琴、胡弓を直す。
重忠　これ見られよ景清。この琴に見覺えござるか。
トきつと見て
景清　如何にも、この琴こそ、三位中將重衡の重器、朝霧と名けたるこの倭琴、如何いたして、貴殿の御手に入り申した。
重忠　不審な尤も。旣に平家に三つの重器、太夫經政が重器青山の琵琶、二つには無官の太夫敦盛に重器青葉の笛、三つには重衡が重器朝霧の琴、存命の砌り、深くこの琴に執心なす事、世以て人の知るところ。
忠常　さるに依つて死後の今、鎌倉の寶となるを
重忠　賴朝公のお目鏡を以て某へ預け置かるゝこの倭琴。
忠常　まつた重忠どのが心を籠めしそれなる胡弓、時に取つての責め道具、胡弓の弓の矢筈責め、智略の程、感心仕る。
宗連　コレサ〳〵、重忠どの、責め道具〳〵と、なんぞ嚴しい事と思へば、遊興らしい琴胡弓。ハヽア、こりや氣晴らしを召さるゝな。
景時　責め道具とは片腹痛い。見事琴や胡弓が、責め道具の役に立ちませうか。
重忠　ハヽヽヽ。こりや、御兩所のお詞とも存せぬ。古へ博雅の三位が調ぶる琴を、稱識と云ふ者よく聞いて賞嘆なす。これ音律を知るゆゑなり。この琴、阿古屋に彈かせ、また胡弓をば人丸に摺らせ、兩器の在所を白狀させん。
忠常　阿古屋、人丸、それにて調べい。
阿古　面伏せなるこの責め苦、仰せを請けて調べるも
人丸　この世からなる苛責の琴。
阿古　胡弓の弓に引かるゝ親子。
景清　二十餘年の星霜も、盧生が夢の夢現。
阿人　ほんに果敢ない。
重忠　コリヤ、琴に數多の調子あり
忠常　人悲しみに堪えざる時は
重忠　哀傷の調子を發し

天保十三年四月河原崎座上演

市川九藏の重忠　七世市川海老藏の景清

景清　心に恨みを含む時は
宗連　殺伐の調子となる。
阿古　思ひある身は
忠常　相思の調子。
人丸　曲れる時は
景時　亂調子。
重忠　直ぐなる心で調ふれば、自然と響く常音の、調子を
假の責め道具。
忠常　よし又阿古屋、文句を替へ、白状せずとも、その音
聲の清濁にて
重忠　寶の在所を覺る重忠。人丸、阿古屋、早う彈け。
宗連　キリ／＼彈かぬか。
皆々　どうだエヽ。
ト これにて、阿古屋は琴、人丸は胡弓にかゝる。
〽是非なく二人立向ひ、甲斐なき調べ掻き鳴らす。
ト 阿古屋、人丸、式佐の三味線にて、これより三曲に
かゝる。
〽翠帳紅閨に、更け行く月や散る花の、惜しみしものを
徒らな比翼の枕いつしかに、朽ちて跡なき夢心。
ト 重忠、思ひ入れあつて

重忠　榛澤、その膳部これへ。
宗連　番場、鮑貝を景清へ。
兩人　ハツ。
ト 成清は薄縁の膳、忠太は鮑貝の三方を景清へ据ゑる、
重忠　精力疲れし七兵衛景清、身體を養ひ、何卒頼朝公へ
御味方。
宗連　コレサ／＼、重忠どの、待たつせえ。御自分は頼朝
公、又この岩永梶原も、範頼公より景清を　味方に乞は
るゝ、思ひ付きの食ひ物。
景時　五十日がその間、湯水を斷ちたる飢渇を助くる、兩
人が寸志
宗連　有り難いと三拜して
景時　頂戴をしやれ。
ト 大小コイヤイになり、宗連、以前の鮑貝を景清へ差
付ける。
景清　香新らしといへども冠にせず、鮑貝で食ふものは、
犬か猫より外にやアねえ。景清程の武士を、畜生にして
嘲弄するか。岩永梶原、なぜ景清を畜生にするのだエヽ。
宗連　オヽ、ちつと口惜しからう。腹が立たうわえ。
人丸　同じやうに並んでお出でなさんしても、なされ方は

また格別、重忠さまのこの御膳。

阿古　あがつたとて、源氏の味方になるぢやなし、力を固め身を固め、余りしたその上で、なぜお望みを達さうとは思し召さぬぞ。

人丸　五十日がその間、物をもあがらず、湯水を断ち、どうマアお命が續きませうぞ。

阿古　どうぞ此まゝ、ちつとも早う、上がつて下さりませ。

人丸　父上様。

阿古　景清どの。

景清　ハヽヽヽ、さほどの事を女童に習はうや。今日まで喰はぬ穀類を、女房のすゝめで喰はれうか。娘の進めが嬉しいとて、これを喰ふ景清と思ふか。ハヽヽヽ、馬鹿な事を。七兵衛景清は、日頃信心なし奉る、清水寺の観世音を念じ奉り、朝暮夜に千巻づゝ、普門品を喰つて居れば、千日萬日恙はない。右幕下の見参に入るまでは、死ぬ事ではない。女房、娘、落ちついて居らうぞ。

宗連　ヤイ景清、範頼公のお味方になりやア、この五器に引替へて

景時　珍膳高味は望み次第だ、

太郎　コレ、命を取らうと云ふのぢやない。命を助け、お味方に招くのだ。

孫八　有り難いと三拜して、早くその飯を

兩人　頂戴しろエヽ。

ト景清、こなしあつて

景清　伯夷叔齊は首陽山に跡を隱し、蕨を喰うた例もあり、賢人の魂ひは大鵬。うぬらがやうに、源氏へ付いたり、平家へ付いたりひろぐ、うろたへ侍ひは、鴻の巣の死巣を喰ふ雀も同然。どうして大鵬の心が知れるものか。悪七兵衛景清は、源氏の禄は一粒も喰はず、踏み留まつて平家の仇を報ぜん料簡、爰に並んだ侍ひめらは、二十餘年がその間、平家の禄を取つた奴ら。これ皆平家の恩澤ならずや。うぬらが心に引比べて、鼻の下を養ふ野郎めらと、二君に仕へぬ景清を、味方に付けんなんぞとは、穢らはしい。むさい汚ないこの穀類、喰つてよけりやアうるさい餓鬼めら、片ツ端からこれを喰へ。

ト膳を蹴返し

この五器で景清に食を進め、一粒でも喰へば範頼公が扶持人、味方と云はん計り事の進め膳、喰つてよけりやア此方から喰つて見せるワ。味はつたになるが穢らはし

い。源氏の米は一粒でも、喰はずに居たいワ。その景清に向つて、畜生の器に手向けた岩永梶原。われより白痴な範頼どのへ、なんの命惜しくつて、お味方に参るものか。喰つてよけりやア岩永梶原、その飯はうぬら喰へ。

ト鮑貝を蹴返す。

景時　ヤア、重々の過言雑言。この上は責めを變へ、青山の琵琶清葉の笛、詮議せにやア置かぬ。

宗連　これからは岩永が、詮議の奥儀を見せてくれん。忠太、その刀を持て。

ト人丸を引付け、忠太、刀を持つて來る。宗連、受取る。

これを見ろ。これぞ景清が所持の人丸の像を、目貫に入れし痣丸の劍。この刀で今、人丸めを芋刺しだぞ。それが否なら二品の寶の在所を

宗景　白状しろエヽ。

ト刀を人丸へ差付ける。阿古屋、こなし。

阿古　アモシ、どうしてその二つが寶の在所を。

宗連　但し範頼公へ、景清を味方に付けるか。

阿古　サア、それは。

宗連　人丸をおツ殺すか。

阿古　サア、それは。

宗連　サア。

兩人　サアヽヽヽ。

宗連　どうだ。味方に付かざア、景清が鼻の先で、人丸を先ツこの如く。

ト人丸を突かうとする。景清、その刀をもぎ取り、人丸を引付ける。阿古屋、思ひ入れあつて、景清に縋り

阿古　コレ、景清どの、なんでその子を。

景清　妻子の愛にほだされて、心に染まぬ源氏の奴等に手を下げようか。娘の一人や二人、おツ殺したとてその吠え面。白痴者、足手纏ひのこの餓鬼め、いま目の前で親が手にかけ殺すを見ろ。南無阿彌陀佛。

阿古　マアヽヽ、待つて下さんせ。

景清　未練な女め。なぜさし付けて立派に殺せと云ふべきに、源氏の武士の嘲りをも顧ず、その吠え面。放せヽヽ放せエヽ。

重忠　ヤア、早まるな景清どの。先づヽヽ。例へ親子なればとて、囚人の身を以て、私しに殺害はなり申さぬ。人丸、阿古屋、憂ひを顯はす心の音律、サヽ、今の後を

阿人　それぢやと云うて。

皆々　キリ〳〵彈かぬか。
ト皆々思ひ入れ。
重忠　コリヤ。
ト阿古屋、人丸、これにて、琴胡弓にかゝる。
〽隈啼きしたる夕べより。
阿古　小鳥可愛と。
〽母烏は、なき潰したる目なし鳥、闇の方ゆく時鳥、血を吐く思ひ果てしなや。
トこの時、薄ドロ〳〵になり、阿古屋、人丸の絃口より、雲氣二つ立ち登り、日覆へ引いて取る。これと一時に向う引舟前切り穴へ雲氣顯れる。皆々見て
皆々　これは、
ト見得になり、小太鼓の樂。
景清　ハテ怪しや。阿古屋が彈ぜし朝霧の音に連れて、祥祥然たる一つの氣顯はれ、空中に靉き渡る、その色靑く黃を帶びて、靑海波の如くにして一體水の形を顯はす。
重忠　まつた一つは竹葉に似て、しかも地中へ散亂と、埋もれし形なり。
忠常　音律に連れて氣を感じ、同氣直ぐなるその風情。
景清　笛は正しく水中に、沈んだりと覺えたり。

重忠　琵琶は地中に埋もれ隱るゝ事必定なり。
景清　然らば朽ちず失せもせず。
重忠　誠に阿古屋景清が
忠常　知らざるに疑ひなし。
景清　琴の音に連れ奇瑞を顯はす。
重忠　笛と琵琶との
忠常　同氣感通。
景清　思へば
忠常　思へば
景清　世にも妙なる糸竹の
三人　奇瑞ぢやよなア。
〽どうでも重さん粹ぢやもの、問はでやみなば嬉しからまし。
ト琴唄切れる。雲氣引いて取る。宗連、キツと思ひ入れあつて
宗連　ヤア、イケ面倒なる重忠の物知り顏、手ぬるい〳〵邪魔な女郎め、長谷の八郞。ソリヤ。
八郞　心得ました。
ト八郞、阿古屋へかゝる。人丸、よろしく支へて、ちよつと立廻り、景清、八郞を取つて投げ、又かゝるを

引ッ捕へ、八郎が腕を引拔き、噛みこなす。

皆々　ヤア。

ト驚ろく。

八郎　オヽ、痛い〳〵。大事の手を引拔かれちやア、大磯の女郎どもに、なんぼ男がよくつても、手のないお客だと云はれるだらう。併し、景清に手を拔かれちやア、おれも本望、大願成就片腕ない。

景時　待て景清。源氏の祿を喰はぬと吐かしたが

太郎　源氏の武士の肉を

孫八　なぜ喰つた。

宗連　さすれば源家へ

皆々　お味方なすか。

景清　イヽヤ、此奴は源氏の領の武士でない。

皆々　イヤア、

景清　某が家代々所領の內、上總の長谷にて生れた此奴が親仁に、祿を與へて人間に拵らへたを、源氏に喰ひ付く猫股武士。生れた所が某が所領にて、育つた奴だに依つて、此奴が肉は景清が肉。これを喰へば源氏の恩は受けないぞ。

皆々　イヤアヽ。

景清　サア、腹內に力が乏しく、ヂッと無念を堪えたが、これで餘ッぽど力が付いて來たわい。

皆々　イヤアヽ。

ト景清、立ち上がり、キッとなつて

景清　先づ目前の御敵たる、右幕下賴朝公へ見參せん。

トつゝかけになり、景清、松に掛けし二品を取上げ

晋の豫讓が例しに習ひ、この御烏帽子直垂は、今日右幕下賴朝公、思ひ知り給へ〳〵。

ト刺し通す。

太郎　ヤア景清、大地に描いたこの牢を

孫八　いま目前に

皆々　打破つたな。

景清　賴朝公の御着用を裂く上は、秩父仁田が仁心もこれまで。この上は重忠が、情の牢は愚かな事、此方の牢も次手に破り、保童丸君の御供する。行儀正しく見物しろ。

皆々　イヤアヽ。

宗連　者ども、ソリヤ。

皆々　やらぬワ。

ト軍兵、皆々立ちかゝるを投げ散らす。

景清　アラ心地よや。星霜々たりといへども、月の光りに

勝つ事能はず。イデもの見せん。
ト早笛になり、皆々かゝるを取つて投げ、立廻りあつて、吹替への軍兵を投げつけ、右の手を格子へかけ、よろしく見得。
〽牢の格子に右手をかけ、力を籠むればゆさ／＼／＼、又もかゝるを。
トこの時、格子砕ける。保童丸を中より出し、阿古屋に渡し、角柱を持つて、皆々を散らし、シヤンと見得し
〽打拂ひ、ふんばかつたる有様は、目覺ましくもまた凄まじゝ。
重忠　如何に景清、いま討取るは易けれども、兩三度まで見遁がせと、賴朝公の寛仁大度。それゆゑ保童丸の命を助け、汝に得さする。
忠常　それを功に立別れ、妻子諸とも早くこの場を。
宗連　イヽヤ、この牢は打破るとも、我が君の御威光で搦め捕る。
景清　愚かや。斯く虜となりしも、大將へ見參を願ふゆゑ。一旦この場は別るゝとも、保童丸を守り、赤旗諸とも平家の御世に飜すワ。
重忠　ヤヽ、賴もしゝ潔よし。
忠常　時節を待つて鎌倉山。
景清　先づ、それまでは、重忠忠常。
四人　七兵衛景清。
景清　弱虫めら。
皆々　さらば。
〽さらば／＼と景清が、英雄豪傑並びなき、譽れは代々に殘りけり。
ト此うち、阿古屋、保童丸を連れ、人丸、付添ひ向うへ入る。景清、軍兵殘らずかゝるを睨む。これにて、軍兵殘らず下の方へ倒れる。宗連・景時、刀へ手をかけるを、重忠、忠常、留める。引張りよろしく。
三重にて、幕
幕外、誂らへの鳴り物にて、景清、向うへ振つて入る。

（上演轉載等に際しては堀越宗家の許諾を要す）

景清（終り）

花川戸身替の段 ——身替りお俊

天明三年の春、中村座「江戸花三升曾我」の二番目に出たもので、元來が通し狂言の一部分なのである。義經の一子冠者太郎恒若を慕つて閻生の前が家出する。それが清見ヶ關の關所を拔けたのでお尋ね者になるのを、藝者お俊實は景清の娘人丸が身替りになるといふ筋で、傳兵衞も源太も各々本名があり、この後にも狂言があつたらしいのだが、詳しい筋は判然しない。白藤源太は當時有名な力士小野川喜三郎に市川門之助が似てゐた所から當込んで勤めさせたので、文句にも「深き思ひは小野川の」とその意を寓してある。作詞は初世櫻田治助、富本豐前太夫と名見崎德治の出語りであつた。役割は、おしゆん（四世岩井半四郎）傳兵衞（三世市川八百藏）源太（二世市川門之助）であつた。今日でも富本に殘つてゐるが、文政八年三月、中村座で「其噂櫻色時」といふ名題で清元でやつて以來、芝居では大抵清元にきまつてしまつたが、詞章は勿論、節附等にも勿論大差はない。この外に「昔形松白藤」といふ題でやる事もある。明治前には傳兵衞と源太を早替りで演じる事が流行つたものである。本卷收錄の臺本は、前記「其噂櫻色時」の時のもの、

花川戸身替の段（身替りお俊）

花川戸お俊内の場

清元連中

役名――關取、白藤源太。井筒屋傳兵衛。鎌倉武士、海野平次。園生の前。藝者、お俊實ハ景清娘人丸。

本舞臺、三間の間、常足の二重、向う暖簾口、押入れ、腰貼りの茶壁、上の方、一間障子屋體、下の方、折り返し黒塀、この間路地口、いつもの所、門口、二重の上に丸行燈、鏡臺、楠道具、直しあり、爰に酒肴取散らし、虎、着流し、黒の羽織を前から引ッかけ、百日の棕梠鬘、鉢巻にて、立ちかゝり居る。辰、棕梠鬘、三尺の形にて、留めて居る。下手に、馬、棕梠の頬鬘にて、立ちかゝり居るを、丑、棒茶筅の棕梠鬘にて、留めて居る。おせん、茶屋娘にて、取散らした物を片付け居る。見得よろしく、屋體囃子にて、幕明く。

辰丑　料簡しやれ〳〵。

虎　料簡しろもよく出來た。おれが閑兵衛で唸らせようとするに、馬の野郎、墨染の態を見やアがれ。

馬　吐かしやアがるなえ。斯う見えても藤間直傳の墨染だ。うぬが閑兵衛にやア過ぎ物だ。

辰　コレサ、馬や、どうしたものだ。年に一度の祭だから、仲好し同士寄合つて、思ひ付いた仁和賀ぢやアねえか。

丑　それだからおれも、宗貞を凝つて稽古はしたものゝ、惣浚ひをするには、此方の内が廣いから、無理に頼んで始めた浚ひだ。

せん　そりや、お俊さんも合點で、お前方にお貸し申しましたが、お俊さんは湯へ行つて留主なり、仁和賀の役のごて附きなら、外へ持つて行て下さんせ。

虎　成る程、こりやアおせんさんの云ひなさる通り、此方の内へは濟まねえが、あんまり彼奴が間が惡いから。

馬　べら坊め、おれよりうぬが間が惡いわえ。

辰　コレサ、どうしたものだ。云はゞめでたい祭ぢやアねえか。好いも悪いも不承して、思ひも附かねえをかしいのが仁和賀だワ。

丑　逢ひなしサ。山谷の辰が云ふ通り、土手の團子を一本貰やア、一つ宛喰ふ仲ぢやアねえか。

辰　虎も馬も野暮を云はずと、わつさり一杯呑み合つてしまふがいゝ祭だ。

虎　そりやア、友達手合ひの挨拶だから、此方は笑つてしまふ積りよ。

丑　そんなら、馬も料簡さつし。

馬　なんのおれだつて、其方が折れて出りやア、いさくさなしサ。

丑　面白い。一番〆めてくれ。

四人　ヨイ〳〵〳〵。

ト手を打つ。おせんは此うち、燗徳利を出し

せん　サア、お燗も丁度好うござんす。辰さん、お前、始めなさんせ。

ト辰へ渡す。

辰　丑公、主から始めさつし、この猪口は虎にさすから。

丑　さうするがいゝ。馬や、一つ呑んで大〆めに〆めさつし。

ト馬にさす。辰は虎へさす。おせん、よろしく酌をして

せん　虎さん、皆さんが飲つてお出でのうち、わたしやちよつと大三ツへ行つて来るから、留主をお頼み申しますぞえ。

虎　オイ〳〵、留主は合點だが、馬の内はよしか。

せん　アイ、次手でもようござんす。

馬　エヽ、虎が嗅アめ、巧くするな。

せん　オヤ、嬲つておくれでないよ。

ト門口へ出る

丑　オイ〳〵、おせんさん、次手に湯へ行つて、お俊さんを見て来てくんねえ。

せん　アイ〳〵。

辰　カウ、おせんさん、行きは急いで、歸りは早くよ。

せん　知らぬわいな。

ト聖天になり、おせん、向うへ入る。捨々、捨ぜりふあつて

丑　マア〳〵、これで仲は直つたと云ふものだ。

虎　サア、大〆めに〆めようぜ。

四人　コイ／＼／＼。

ト手を打つ。時の太鼓を打ち込み、段々御輿太鼓にな
り、向うより、平次、くりさげ、半纏、股引にて、出
て來り、花道にて、ちよつと思ひ入れあつて、直ぐに
門口へ來り、窺ふ事あつて、ズツと内へ入る。皆々、
恟りして

ヤア、なんだ／＼。

平次　エヽ、姦ましい、靜まり居らぬか。

ト四人、侍ひを見て

虎　ヤア、おせん坊だと思つたら

辰　いつの間にやら胡散な侍ひ。

馬　此方の内へ斷りなしに

丑　天から降つたか。

四人　地から湧いたか。

ト皆々、立ちかゝる。平次、思ひ入れあつて

平次　イヽや、身共は天からも地からも湧かぬ鎌倉武士。

四人　イヤア。

平次　見れば、この家の主たる、お俊とやらが相見えぬが、
いづれへ參つた。それ吐かせ。

虎　カウ、みんな見や。なんだか知らぬが、横柄な侍ひ
だぜ。

辰　さうよ。お俊さんに逢ひたいと云ふからは

馬　此奴はてつきり、口を拭ひにござつたか。

丑　但しは外に、なんぞ御用が

平次　オヽ、あると云ふのは外でもない。いつぞや恒若丸
が後を慕ひ、家出なしたる園生の前、當所にしれ忍ぶ由、
注進あれど雲を當、尋ねあぐみし折に幸ひ、この家の主
お俊と云ふは、以前館に勤めし者と、聞いて直さま駈け
附けしが、主の留守も不審の一つ。其方どもはこの家に
居らば、定めて樣子存じて居らう。包まず申して來に、
手柄をさせなば褒美はズツシリ。隱し立てせば爲にたら
ぬ。キリ／＼と吐かし居らう。

虎　アヽ、モシ、お侍ひ樣、藪から棒に何を仰しやりま
す。爰に居ります四人は、この花川戸の若い者、内の者
ではござりませぬ。

馬　それに祭の狂言で、いま惣淩ひの最中だ。園生の前
とやらよりも、墨染が肝心だ。

平次　すりや、なんと申す。おてまへ方は他所の者ゆゑ、
存ぜぬ知らぬも尤もながら、その祭禮の仁和賀より、二
つ取るなら金と轉んで、身共に荷擔いたすべき、所存は

なきや。なんと／＼。

辰　飛んだ事を云ひなせえ。十日も前から稽古して、今夜の宵宮に押出さうと、待ちに待つた鍔際で、どうこれが止められるものだ。

丑　さうよ。百両が千両になつても、褒美の金を貰ふより、今夜近所の姫達に、この宗貞を惚れられにやア、おつちの男が立ちやせぬ。

ト虎、思ひ入れあつて

虎　カウ／＼、みんな待たッし。今お侍ひ様がお望みの、姫を見付けて差上げれば、褒美の金の摑み取り。こいつは乗つたぢやあらうぜ。

辰　成る程、虎が云ふ通り

三人　一番乗つても悪くねえわえ。

平次　ムウ、すりや四人とも、身共が味方に。早速の承知忝ない／＼。

虎　して、閑生とや　の年恰好は。

平次　この繪姿に委しく記す。

ト懐より、人相書を出し見せる。皆々見て

四人　成る程、こいつはいゝ女だ。

トこの時、屋臺囃子になり、家主、祭の手拭、扇を持ち出て來り

家主　オヽ、町内の若い衆、みんな爰に居たか。いま練り物が通るから、わしと一緒に、ござれ／＼。

ト皆々をせり立てる。

虎　マア／＼、待たつせい。そこ所でない。

ト平次へ思ひ入れ。

家主　これサ、何をウヂ／＼。早く來さつせいと云ふに。

虎　モシ、お侍ひ様、今の者を誘ね出したら

平次　褒美の金は身共と山割り。

四人　そんなら、必らず。

家主　わしと一緒に。

四人　さうしてあなたは。

平次　この家の主に

四人　忍んで様子を

家主　サッサとござれや。

四人　隣も、毎年毎年。

家主　祭の仁和賀だ。

平次　身共と一緒に。

家主　サッサとござれや。

四人　ござれや／＼。

ト屋體囃子になり、平次、奥へ、家主は四人をせり立て、節季候のこなしにて、向うへ入る。

ト頭取出て、淨瑠璃名題、太夫連名、役人替名、觸れよろしくあつて、淨瑠璃始り左樣と知らせにつき、下手の黒幕、折り返す。爰に、清元連中居並び、直ぐに淨瑠璃になる。

〽雨の降る夜は一しほ床し、冴えては月に猶床し。

ト合ひ方になり、向うより、お俊、湯歸りの拵らへにて、浴衣を抱へ、駒下駄にて、出て來り、花道にて

〽お俊は一ト湯歸りに、浴衣をちよつと抱へ、帶、紅葉袋にうつろいて、柵ならぬ横櫛に、つい髷あげの平元結、顔にかゝれば仇名草、夜は嵐の花川戸、馴れにしくゞり押開けて、内に入るさへ物案じ

トこの文句にて、よろしくあつて、門口へ來て

お俊　兄さん、今戻つたわいな。

ト内へ入り、こなしあつて

なんぢや、兄さんは樂寢して居やしやんすさうな……アア、それはさうと、昨日秋葉で傳兵衛さんに、心に思はぬ愛想盡かし。さぞ腹が立つてでござんせう。傳兵衛さん、堪忍して下さんせえ……それに付けても、わたしが爲にもお主筋、あの團生の前さまのお行くへをお尋ね申さんと、心には思へども、何を云うても藝者のこの身、いつ儘になる事やら。ほんにわたしとした事が、ひよつと人が聞いたなら

トあたり見廻し、思ひ入れあつて

誰れも來ぬうち、ドリヤ、身じまひなどしてしまはうか。

〽昨日より、今日は思ひの増鏡、映るとならば花の容、上野の鐘か淺草か、無常を告ぐる風の聲。

ト鏡臺を出し、よろしく身じまひにかゝる。時の鐘になり、向うより、傳兵衛、一本差し、頬冠り・尻端折りにて、出て來り

〽浮名が中に傳兵衛は、お俊が心思ひて、人目を忍ぶ頬かむり、佇む軒端見覺えの、慥かに爰ぞと門の戸を、叩く内にも心せき。

ト傳兵衛、舞臺へ來り、よろしくあつて、門口を叩き

傳兵　爰明けてもらひませう／＼

お俊　さう云ふ聲は、慥かに傳兵衛さん

ト門口へ來り、戸を明けて

マア、なんと思うて。

ト思ひ入れ。
傳兵　イヤ、おれはなんとも思うては來ぬ。コレ、お俊、其方の心を聞きに來た。
お俊　わたしが心を聞きに來たとはえ。
傳兵　サア、昨日秋葉で、思ひも依らぬ愛想盡かし。どうも合點がゆかぬに依つて、おぬしの心を聞いた上。
お俊　わたしが心が聞きたくば、さう云ふお前の心から、先へ云うたがよいわいな。
傳兵　おれが心とは、そりや何を。
お俊　この頃、白藤さんの話しを聞けば、お前も元に立派なお侍ひ樣、今ではアノ關生の前さま……とやら云ふお方を、詮議なさんすとやらぢやござんせぬか。
傳兵　成る程、これまで深う云ひ交した其方なれど、隱したはおれが悪かつた。兼ねて範頼公、心をかけたる關生の前は、恒若丸と云ひ號けゆゑ、範頼公を嫌ひ、駈落ちしたとやら。關生の前を今宵中に尋ね出し、首討つて鎌倉へ渡さねば、この傳兵衞が一生の身の願ひも叶はぬ。ぢやに依つて詮議最中。それをおぬしに話したとて、なんの女子の役に立たぬ事ゆゑ、話さなんだが、それがどうした。

ト お俊、これを聞いて、思ひ入れあつて
お俊　マア、思ひがけないと云はうか……そんならさうと、疾に云うて下さんしたがようござんす。……傳兵衞さん、歸つて下さんせ。戻つて下さんせいなア。
ト傳兵衞、不審の思ひ入れ。
傳兵　コレお俊、いま思ひ出したやうに歸れとは、エヽ、聞えた〱。この傳兵衞が、浪人の身となつたに依つて、わりやアノ姉輪の平次が所へ行く氣になつたな。
お俊　アイ、襟に附くのが當世でござんす。
ト向うを見て、よろしくこなし。
傳兵　エヽ、おのれはなア。
〽變る心に傳兵衞は、急き立つ胸を押鎭め、思ひ直して凭れ寄り、女子心は疑ひの、深い中にも猶深い、二人が仲に水さして、たとへ退かしてあるとても、云ひ交したを反古にして、其方は添はぬ心かと、無理に引寄せ裏問へば。
お俊　傳兵衞さん、切れて下さんせ。
傳兵　何がどうした。
ト思ひ入れ。
お俊　サア、お前のやうな水臭いお方と、添うて居やうよ

り、わたしやアノ、姉輪さんの所へ行く氣になつたわい
なア。
傳兵　そんなら、いよ〳〵われが心は……エ、、おのれは
なア、
ト脇差へ手をかける。
お俊　モシ、傳兵衞さん、お前、其やうに腹立てなさんし
てもナ、お前より先へ、わたしが變つたゆゑ、アノいつ
ぞや貰うた替へ紋の小袖、あれがあるゆゑ心が殘つて、
未練らしう思ふゆゑ、今お前の見る前で、ずん〳〵に引
裂いてしまふ程に、サア、それから見て居やしやんせ。
〽押入れの戸を引明くれば、
ト お俊、立上り、押入れの側へ行き、戸を明ける。
内に團生の前、姫の形にて居る。兩人顏見合せ、恟り
思ひ入れ。
ヤ、あなたは。
ト戸を引立て、思ひ入れあつて
ほんに、わたしとした事が、未練らしう小袖を引裂くの
なんのと、モシ、傳兵衞さん、たつた今、切れ文書いて
下さんせ。
傳兵　何がどうした。

お俊　サア、今の戸棚の小袖の代りに、わたしを切れ文…
…サア、わたしへ切れ文、書いて下さんせ。
傳兵　ハテ、合點のゆかぬ詞の端々。今のは慥かに染め模
樣……小袖代りの切れ文……そんなら切れ文、いま書く
ぞよ。
お俊　アノマア、仰山な……顏わいなア。
〽世の中を、何に譬へん飛鳥川、昨日の淵は今日の瀨と
變り易さよ人心。
ト傳兵衞、硯箱を取り
〽硯引寄せ傳兵衞は、墨さへ薄き縁ぞと、思ひあきらめ
書く文の、參らせ候も後や先、側にお俊は見ぬ振りも、
風につれなき露の蝶、今はこの身に愛想もこそも、月夜
の空や鳥鐘を、恨みし事も仇枕。
ト傳兵衞、この文句のうち、切れ文を書きしまひ、思
ひ入れあつて
傳兵　根性骨の腐つた女、口でわざ〳〵云ふも穢らはしい。
望みの切れ文。世の切れ文には返事はなけれど、この切
れ文には返事がある。お俊、サア受取れ。
ト渡す。
お俊　こりや、切れ文の

ト取つて見て、思ひ入れ。

これで心が、さつぱりとしたわいなア。

ト傳兵衞、門口へ出て

傳兵 可哀やお俊は。

お俊 エ。

ト思ひ入れ。

傳兵 もう、この世では逢はぬぞよ。

ト門口を締める。

〽遠けて砧の音さへ床し。

ト傳兵衞、向うへ行きかゝり、花道にて、思ひ入れあつて、下の路地口へ入る。お俊、思ひ入れ。

〽お俊は後を見送り〳〵、鎌な心のつれなさを、さぞや恨んで腑甲斐ない、女子心と思はんせうが、云ふに云はれぬ身の願ひ、愛想づかしのあり條も、胸に詞を押入れの、側へそろ〳〵立寄つて。

トお俊、押入れの側へ行き、戸を明ける。内より、園生の前、顏を出す。お俊、あたりへ思ひ入れあつて

お俊 あなたのお行くへを方々と、お尋ね申しましたわいな。

園生 ヤ、其方は人丸。

お俊 思ひがけない、園生の前さま。

ト園生の前、押入れより出て

園生 恒若さまに云ひ號けの自らを、範頼公の横戀慕、頼む木影に雨漏る思ひ、力と頼むは其方ばかり……して、今の世渡りはや。

お俊 アモシ、壁に耳あり、お聲が高うござります。

〽人が聞くとも白藤が、暖簾の内より。

ト好き時分より、源太、關取の拵らへにて、暖簾口より、窺ひ居る。

お俊 お話し申すも恥かしい只今の身の上。これもお二方のお行くへを尋ねん爲め。追ッつけ御代に出し參らせ、めでたう御祝言を致させませう程に、必らずお氣遣ひ遊ばしまするな。

園生 便り少ない妾が身の上。この上ともに好いやうに。

お俊 それはモウ、お氣遣ひなされまするな。さりながら、今日は祭の宵宮と申し、往來も繁く、殊には人の出入りも多うござりますれば、お氣詰まりにはござりませうなれど、戸棚の内で今少しの間、御辛抱なされて下さりませ。

園生 そりや、わが身が云やらずとも、戸棚の内は愚か、例

へどのやうな奔走でもする程に、必らず共に、好いやうに頼むわいの。
お俊　これはしたり、勿體ない。其やうに仰しやつては、却つて私しがお氣の毒にござりまする。必らずお氣遣ひなされぬがよろしうござりまする。
園生　それ聞いて、自らも安堵したわいの。
お俊　左樣なれば園生の前さま
園生　そんなら、人丸。
お俊　アモシ、お聲が高うござりまする。
　ト園生の前、屋體の内へ入る。源太、出て來り
源太　お俊ばう。
お俊　エヽ、
　ト恟り、門を出て、思ひ入れあつて
源太　ハテ、仰山な膽の潰しやうの。
お俊　白藤さん、わたしや恟りしたわいなア。お前マア、何しにござんした。
源太　イヤ、おらア貰ひに來た。
お俊　そりや、何をえ。
源太　傳兵衞どのに頼まれて、否や應かの返事次第、二つに一つの、男の顏の立つやうに。
お俊　なんぢややら、白藤さんの譯も云はずに、立つの立たぬのと、怖らしい事は、止めにして下さんせいなア。
源太　時にお俊ぼうや、おぬしが留守に女を一人、匿まうて置いたぞよ。
お俊　そんならアノお前が……お匿まひ申して下さんしたかえ。
源太　如何にも、恒若丸の云ひ號け園生の前……とサ、云つても大事ないやうな、女を一人匿まつて置いたよ。
お俊　そんならいよいよお前が……エヽ、嬉しうござんす。
源太　お俊ぼう、何が嬉しい。
お俊　サア、これはな……ホヽ。
源太　ハヽヽヽ。
兩人　ホヽヽヽ、ハヽヽヽヽヽ
　ト兩人、思ひ入れ。
源太　ドリヤ、歸らうか
　ト立ち上がるを、お俊、留めて、源太の袂を見て
お俊　待ちなさんせ。白藤さん。お前の袂が、綻びが切れてあるぞえ。わたしがちよつと縫うて上げうかいな。
　ト源太の袂へ思ひ入れ。

昭和三年六月本郷座所演　坂東秀調のお俊

市村亀蔵の傳兵衛　市川壽美蔵の源太

源太　ドレ、ほんに、とんだ大きな綻びだ。世話ながら、ちよつと縫つて下んせ。
お俊　サア、脱がしやんせいな。
源太　イヤ〳〵、此まゝちよつと一針。
お俊　アイ。
〽脱いで渡せば針差しの、脇目も振らず飽打眺め。
ト お俊、針箱を出して來て縫ひ、思ひ入れ。
源太　でも、美しいものだなア。
トお俊へ思ひ入れ。
その愛嬌で、あの傳兵衛と色事だもの。おたまりがあるものか。エヽ、茲な畜生めが。
トちよつと寄り添ふ。
お俊　白藤さん、お前、矢ッ張り邪慳かえ。
源太　なにサ、邪慳でないと云つて、誰れがわしがやうな者に、構ふ人があるものでごんすか。
お俊　イエ、構ひ手があるまいものでもない……モシ、白藤さん、アノお前に、いつぞやから云うた事、忘れて居やしやんすかえ。
源太　止しねえな〳〵。お前には、傳兵衛どのと云ふ、歴とした亭主があるぢやアないか。
お俊　サア、その傳兵衛さんとは、切れてしまうたわいなア。
源太　ナニ、傳兵衛と切れた。そいつはとんだ事だ。
お俊　サア、その切れたと云ふ證據はナ、これ見て下さんせ。
ト以前の切れ文を出して見せる。
源太　ドレ。
ト取つて見て
成る程、こりや傳兵衛どのゝ手に違ひはない。そんならお前、本當に切れたのかえ。
お俊　アイ、味に切れ文が書かれるものかいな。
源太　フム、これで讀めた。縁に切つても其方を切れ……ハテ、變つた色事の勝負でごんすの。
ト立ち上がるを
お俊　コレ、待たしやんせ。
源太　ヤ。
お俊　オヽ、憎。
源太　そりや誰れが。
お俊　白藤さんが。
源太　憎いとは。

お俊　わたしやお前に。
源太　何がどうした。
お俊　待つて居たわいなア。
〽松になりたや有馬の松に、寝て見て譯も白藤に、逼ひまつはるゝ嬉しさは、菜種の花も山吹の、云はぬ色なるしなし振り。
ト兩人、よろしくあつて
〽それと人目に關取は、行かんとするを引留めて、見て見ぬ振り一春と春、男の髪を櫛で、搔き撫でながら耻曇り、そりや素氣ないぞえ白藤さん。源太さん如何に關取さんぢやてゝ、力ばかりか心まで、其よに強いものかいな、ほんに角力の隙にも、手取り〳〵と開き馴れて、思ひ染めたるその日より、氣にくせ附けて忘られず、心の丈ヶ打明けて、云うて島田の縺れ髪、取上げられぬ仇惚れに、女子の道が立つものか、憎からうとも渡り合ひ、投げの情と一夜さの、枕交して下さんせ、やいの〳〵と喞す、深き思ひは小野川に、濡れて戀増す風情なり。
ト兩人よろしく振りある。
源太　それ程までに思うてくれる志し。其方の願ひ、叶へてやらう。
お俊　そんなら、寝て下さんすか。
源太　イヤ、そりやならない。
お俊　して、なんの願ひをえ。
源太　傳兵衞どのゝあの切れ文、ナ、……其方を切れ文……サ、願ひを叶へてやらうわサ。
ト　お俊、白藤に抱き付く。
お俊　エヽ、嬉しうござんす。
源太　アヽ、女に稀れな。
ト思ひ入れあつて、ちよつと柄へ手をかける
お俊　エヽ……嬉しうござんす。
〽月と日の内に心隔け、義理と忠義の假枕、思ひは二つ二筋の、帶こそ戀の命ぞと、云ふうち粹な風吹いて、消ゆる燈火暗きより。
ト時の鐘、風の音にて、行燈の灯、仕掛けにて消える、お俊、覺悟の思ひ入れにて、手を合せる。源太、ちよつと抜きかけ、有り合ふ屏風を立て廻す。
〽心の闇の屏風山、内に思ひや籠るらん、思ひぞ内に籠るらん。
ト段切りにて、太夫連中を消す。バタ〳〵になり、奥より、傳兵衞、走り出て來り

傳兵　園生の前が首討つ時刻、延引いたさば役目の越度。
ト此うち、屏風の内にて、エイと聲して
源太　その御首級は、お痛はしくも、今只討ち奉り、即ち
これに……。
ト屏風の内より、源太、お俊の切り首を花籠に入れて
園生の前の御首級、イザ。
ト衝の中より出して、傳兵衛へ渡す。傳兵衛、探り取
つて
傳兵　ヤ、不便な女がこの最期……イヤ、如何にも御首、
慥かに落手。
トこの時、奥より以前の平次、窺ひ居て
平次　ヤア、園生の前と思ひの外、正しくお俊。
ト云ふを傳兵衛、拔打ちに浴せ
傳兵　これより直ぐに。
源太　片時も早う。
傳兵　範頼公へ。
ト傳兵衛、刀を引く。平次、見事に返る。これを木の
頭。
ござれ。
源太　ハツ。

ト傳兵衛は首を抱へ、ホロリと思ひ入れ。源太はこれ
を窺ひ見る。時の鐘の送りにて、　　よろしく幕

花川戸身替の段（終り）

奴島田の八幡大名
奴容形の太郎冠者

花舞臺霞の猿曳——うつぼ猿

天保九年十一月、市村座の初演で、「白旗世界樹顔鏡」といふ顔見世狂言の四建目淨瑠璃、作詞は中村重助常磐津は文字太夫に岸澤式佐、振附は松本五郎市である。土臺は狂言の「靱猿」であるが、誠に歌舞伎式に巧く消化してあつて、狂言臭味が無い。今日、舞踊に常磐津に大流行なのも無理はない。尤も「靱猿」は近松の「松風村雨東帶鑑」に早く取入れられ、歌舞伎でも文化十二年の七月中村座で「寿靱猿」といふ名題で常磐津の舞踊にした事はあつたが、この時は松羽目を使つてスッカリ狂言式にやつたので餘り好評ではなかつたが、松羽目を使つた所に當時としては記錄を破る大事があつた。この時の猿曳は三世中村歌右衛門が勤めたので、その緣から四世歌右衛門に重助がこの淨瑠璃を書いて與へたので、當時はこの方を俗に「新うつぼ」と呼んでゐた。役割は、女大名三芳野（市川九藏）奴橘平（十二世市村羽左衛門）猿曳しイ四郎（四世中村歌右衛門）であつたが、役名はいづれも俳優に因んで附けられてあるので、上演の度毎に役名は變るのが習慣になつてゐる。

花舞臺霞の猿曳（うつぼ猿）

鳴瀧八幡の場

役名＝女大名、三芳野。奴、橘平。猿廻し、イ四郎

常磐津連中

本舞臺、三間、正面廻廊の中遠見、上手に梅の立ち樹、下手に楓の立ち樹、ズッと下手に浄瑠璃臺に常磐津連中居並び、紅白の梅の吊り枝、すべて鳴瀧八幡神前の模樣、大拍子にて幕明く。

ト直に浄瑠璃になり

〽新玉の春ぞと告げて人來鳥、睦月の名にしおふ、これも歌舞伎周の春、姿も花の返り咲。

ト文句の止り、セリ上げの鳴り物になり橘平、奴好みの着附け、靫を擔ぎ居る。三芳野、素袍着附け、烏帽子にて、これを持ち、兩人よき見得にてセリ上がる。

〽時も一陽來復の、當りを願ふ弓始め、弓矢八幡大名の賴うだ人の代參に、向ひ町から又今年、歸りもうしろのねぎ事も、戀と云ふ字が花靱、脊中に脊負ふ太郎冠者、傘をさそなら春日山、霞を分けて梅笑ふ、森の野面の色含む、爰鳴瀧の野の顔見世。

ト兩人振りあつて納まる。大拍子になり、

三芳　立歸り、今を春邊とこの花の、色香爭ふ源平の、それは隔てし須磨潟、都の內は穩やかに、袋に弓の八幡大名。

橘平　賴うだお人は北面の、更科玉水經春さま。今日例年の弓始め、猶太平を祈りの爲、この鳴瀧の八幡宮へ、御代參の三芳野どの、お役目御苦勞に存じまする。

三芳　イエ、その御苦勞は互ひの事。願ひ叶うて又今年、お前と二人、神詣で、こんな嬉しい事はござんせぬ。もう御代參の役目をしまうたからは、春の野もせを眺めながら、サア〳〵一緒に。

〽手を取るを振り拂ひ。

橘平　ア丶、これはしたり、寄らしやりますな〳〵。狂言詞もかたくなに。

〽烏帽子素袍を假初めたらぬ、傾うだ人の御名代、御用であらば横に。

三芳　太郎冠者あるかいやい。

橘平　ハア、、御前に。

〽と蹲まる、此方に元より使はれ者よ、色紙の道白川や、人目の關の相棒ならで、綱引く餌引く四手引く、山ちやえゝ木を引く碾の臼、廻らば廻れ伊勢同者、昔は車今は[illegible]、抜けさんせ〳〵島さん紺さん花色さん、これ〳〵小紋さん、やてかんせと、引戻されたア、永縄手、心もうた太郎冠者。

ハ、、、もう道草のおどけは取措いて、サア、お館へ早うお歸りなされませ。

三芳　イヤ〳〵、まだ滅多には歸れぬわいなア。

橘平　そりや、なぜでござりまする。

三芳　サア、御主人綱春さま、毎年の吉例ゆゑ、弓矢と靭を此やうに、持たせて、氏神樣へ參らせ給へど、今年はいかう靭が損じたゆゑ、戻りには靭になる、皮を誂へて來いと、申し付けでござりまする。

〽詞し中へ、向うより、手飼ひの小猿の折よくも、二人が中へ駈け込めば、慌りして退き。

ト風の音になり、向うより、子役の猿、走り出て來り二人の廻りを駈け廻る　兩人悄り飛び退き、思ひ入れあつて

橘平　ヤア、なんだと思つたら、こりやア猿であつたわえ。

三芳　よい所へ放れ猿。皮を取つて幸ひ靭に。

橘平　イエ〳〵、これは大方主がござりませう。なんでも猿使ひなぞが、放した猿と見えまする。

三芳　そんなら、その主に斷わらいでは惡いかえ。

橘平　何にしろこの主に、どうか逢ひたいものおやなア。

〽見やるあたたへきよろ〳〵目、爰ら在所の得意旦那をくるり〳〵と猿廻し。

ト向うよりイ四郎、ぼつと鬘、裁付け形、鞭を持ち出て來り

〽降り村から今日爰へ、罷り出でしは御贔屓の、風葺屋町初舞臺、初心は顔に眞赤な、猿に曳かれて成駒屋。

〽酒のさの字のその隙に、見失うたる猿丸の、迷子の迷子の太夫やい、迷子の〳〵お猿やアいと呼子鳥、さておめでたの、顔見世と、浮かれ〳〵て來りける。

トイ四郎、花道にて、ちよつと振りあつて、猿を見て

安政二年三月市村座所演

関三十郎の女大名　　中村福助の猿廻し

思ひ入れあつて、舞臺へ來り、猿に取縋り、

イ四　オヽ、太夫、爰に居たか。サ、爰へ來い〳〵

〽寄るを隔て、

ト猿曳を見て

橘平　すりや、その猿の主は貴樣か。コレ〳〵、たんと物は相談ぢやが、その猿をどうぞ、讓つてはくれまいか。

イ四　これは滅相な。この太夫を手放しましては、明日から商賣がなりませぬ。

橘平　成つ程尤もぢやが、アレ、彼所にござる女中は、更科主水經春さまと云ふ、お大名の御代參。今度お弓のお遊びに、大内で用ふる靱に、猿の皮が入用ぢや程に、あなたに猿を賣つてはくれまいか。

イ四　イエ〳〵なんぼう大内の御遊でも、これぼつかりは御免下さりませ〳〵。

〽詫びるに此方は附けあがり。

三芳　そんならどうでもならぬと云やるか。女と侮り上樣の、上意を背けば仕樣がある。

〽素袍脫ぎかけ大名の、威を張り詰めし弓張りの、矢先鋭く立ち上がる、猿曳驚ろき飛びしさり。

ト三芳野、弓矢を持ち立ち上がり、矢を番へ、猿を覘ふ。イ四郎、悔りして、三芳野を止め、猿を圍ひ

イ四　アヽモシ、待つて下さりませ〳〵。成る程、斯うなるからは、猿の皮をあげませうが、射殺されては猿の皮に疵が附いて役に立ちますまい。ハテ、どうか仕樣が。

〽小首傾けうなづいて。

ト イ四郎よろしく考へる事あつて

オヽ、よい事がござります。猿の一打ちと申して、急所がござります程に、皮にも疵が附かぬやうに、打ち殺して上げませう。

三芳　そんならキッと打ち殺して。サ、早う渡しや。

イ四　ハッ、畏まつてござる。

〽泪ながらに、立ち上がり、叉あるまじきお望みは、只今殿樣殺せとある、ならぬと云へばおれ諸ともに、只一矢にて射殺すと、引くに引かれぬ強弓の、仰せ果敢なき今日の仕儀。

コレましよ。

〽小猿の時から飼ひ置いて、朝夕の煙さへ、其方が庇にて樂々と、暮らせしものを情ない。畜生なれども、よう聞けよ。

安政二年三月市村座上演　中村鶴蔵の奴

〽せめて今度は人間に、生れ變つて來るやうに、敎へ込んだる一節に。

エヽ、さりとは〳〵、エヽ又あろかいな。さんな又あろかいな。

〽是非なく〳〵も立ち上がり、振り上げし鞭の下、廻る小猿のいぢらしさ。

ト イ四郎、鞭を振り上げる。猿は踊る。イ四郎、泪にてちよつと振りあつて、鞭を捨て思ひ入れ。猿は船を漕ぐ眞似をする。

アレ〳〵、今のを御覽なされしか。打ち殺さるゝ鞭とは知らず、船漕ぐ眞似をしますわいの。

三芳　そんなら何と云ふ。殺さるゝとは知らいで、藝をするかや。

橘平　畜生でさへ物を知るに、如何に主命なればとて

三芳　物の哀れも顧みず、どうしてそれが殺されう。命は助けた。連れて歸りや。

イ四　エヽ、それは誠でござりまするか。

三芳　オイナウ。

ト これにてイ四郎、嬉しき思ひ入れ。

イ四　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。お禮に猿を舞はせませう。

天下泰平、御武運長久、御祈禱に、猿が參つて能仕る。

〽御知行も勝るめでたき、踊るが手元面白や、ハンヤコリヤ〳〵〳〵、黄金の數々積み揃へ、庭に黄金の花盛り、花實も榮ふめでたさよ。

ト 鳴り物になり、イ四郎振りあつて

〽さらば我れらはお暇と、行くをやらじと引とゞめ。

ト 振りあつてイ四郎、猿を脊負ひ行かうとするを三芳野留めて、

三芳　コレ待つた。

〽そりやマア何の事ぢやいな、わたしやお前に打込んで、だまされて咲く、これは何ぢやい室の梅、笹啼きかける鶯菜、なと納豆の朝毎に、飛んで行きたや主の側、見れば見る程くつきりと、水際の立つ好い男、男やもめと南瓜の蔓は、どこまでも、さいかち原の中までも、こちやお前ならば構やせぬ、お前と抱かれて寢るならば、お蓐や好きないし〳〵を、斷ち物したが憎いかえ。

ト 此うち三芳野、イ四郎を捕へて、クドキよろしくあつて、猿ちよつと邪魔に入る事あつて

〽えゝ女子には、何がなる、焦れ〳〵しお姿を、繪には描かせはせぬものを、のろけざ惚れたが分るまい、まい

まい廻るは牒猻ひ、枝も榮えて葉も茂る、おめでたや、千代の子おめでたや〳〵。おきよ所の笑ひ。

イ四　ムヽヽ。

橘平　ハヽヽ。

三芳　ホヽヽ。

〽ぐさ、おどけ交りに小垣の小影の、小暗い所で夜の大臣がねんねこ、エ、念が届いてばつちりと、焙烙調とは大膽な、亭主をよくも猿座頭、二人袴の綻びし、中を押へて。

トこれにてイ四郎、三芳野の手を取つて行かうとする橘平、隔て

橘平　やるまいぞ〳〵。花盗人をやるまいぞ。

〽おのれ逃げよとておいそれと、やつちやしてこい寢ずの番、棒と手拭ひ枕もと、疲れに他愛轉寢の、鼾息窺ひ寄る鼠、そろ〳〵這ひ出しちよつかいに、箸箱鼠棚を踏み荒したる畜生め、これも喰はず擂の棒、すぢつてもぢつてかぎやりや、エイ〳〵トウ〳〵、やつとうの納め太刀、隱の御代の一踊り。

トこれより三人、肌脱ぎになり、

二上り〽一の幣立て二の幣立て、三に黑駒信濃を通る、船頭どのこそゆうけんなれ、泊り〳〵を眺めつゝ、千秋や萬歳と俵を重ねて面々に、樂しうなるこそめでたけれ。

〽立舞ふうちに以前の小猿、あたりの梅へ駈け上がれば、見るより悔り。

ト三人、手踊りあつて、この時、猿、梅の立ち木へ上がる。三人悔りして

橘平　アレ〳〵、猿が梅の枝へ。

イ四　コレ〳〵、太夫、下りてくれ。

〽左右に三人立ちかゝり、屆かぬ梢の綱渡り、三筋の霞猿曳や、橘花薫る花舞臺、笑ひ興じて祝しける

ト三人よろしく引張りの見得。大拍子にてよろしく幕

花舞臺霞の猿曳（終り）

道行念玉蔓——長作

文化二年四月の中村座で「練供養妹脊緣日」といふ狂言を興行した。義太夫の「新薄雪物語」を歌舞伎化したものであつた。この時は、いつもの「地藏の五平次內の場」を書き替へ、五平次の妹お光が園部左衞門を戀ひ慕ひ、兄の手にかゝるといふ筋で、その次にこの淨瑠璃が附いて終つてゐた。作詞は初世櫻田治助振附は藤間勘十郎、富本豐前太夫の出語りであつた。その後舞臺では再演されないが、稽古物としては盛んに流行し、富本衰微の今日でも、この曲は可成り廣く行はれてゐる程、有名なものである。薄雪道行としては外に二三種殘つてゐるが、これが一番行はれてゐるのである。曲としても慥かに名作には違ひない。役割は、およし實はお光の靈（五世岩井半四郎）薄雪姬（瀨川龜三郎）左衞門（尾上紋三郎）妻平（三世市川八百藏）長作（三世坂東三津五郎）等であつた。淨瑠璃の口上觸れにもいろ／＼趣向があるが、これなぞは頗る奇拔である。

道行念玉蔓（長　作）

木津川渡し場の場

役名――南部左衛門。幸崎娘。海雪姫。奴、妻平。天野一學。引田村のおよし實ハ五平次妹おみつの亡靈。船頭、長作。

知らせの拍子木にて口上役出て、狂言名題役人替名の次第南部の奴妻平、市川八百藏、天野一學、坂田半九郎と讀むうち、向うバタ／＼にて、一學妻平、兩人、密書を奪ひ合ひ爭ひながら花道より出て、一學口上役を突きのけ、役觸れを引ったくる。口上驚ろき「それを」ト云ふうち、兩人烈しき立廻り。これにて口上役、逃げて入る。一學、一通を懷中し、今の役觸れを持つて逃げるな、妻平引附ける。一學、振り切つて逃げる。此うち早神樂にて、トヾ一學逃げて入る。妻平、續いて追つて入る。早神樂にて幕明く。

本舞臺、三間の間、一面の淺黄幕。上の方、流れの浪板、これに蘆の葉のあしらひ。苫船一艘あり、よき所に蛇籠、これにも蘆の葉。下の方に木津川渡し場と書いたる榜示杭。左右の柱、柳の立ち木。日覆より茂る柳の吊り枝、この飾り付けよろしく幕明く。

ト花道より妻平、一學、書き物を爭ひながら出て、立廻りに妻平、一通を取り、一學を押へ

妻平　動きやアがるな。サア、持つて居る小枝の笛を、この妻平に渡してしまへ。

一學　いんにや、この一學は、小枝の笛は知らないワ。

妻平　なんぼ知らぬと吐かしても、この一通が慥かな證據だ。

ト一學、この間に探る立廻り、しやんと引敷き

逃ぐるとて逃がさうか。先づ手がゝりは。

ト一通を開き

なんだ。淨瑠璃名題、道行思玉蔓、淨瑠璃太夫富本豐

前太夫、ワキ富本和太夫、ワキ富本和泉太夫、三味線名見崎喜惣治、上調子名見崎市十郎、相勤めまする役人。引田村およし、岩井半四郎。園部左衛門、尾上紋三郎、薄雪姫、瀬川龜三郎。渡し守長作、坂東三津五郎……オ

オこりやコレ密書と思ひの外。

ト一學、跳ね起き、キッとなつて

一學　怪しく吐かした密書は觸れ書。それで疑ひ晴れたであらうが。

妻平　イヽヤ、名笛は正しく。

一學　なにを。

ト立廻り。懷より笛を引き出し

妻平　さてこそ名曲

一學　野郎め、觀念

ト切つてかゝる。ちよつと立廻り

妻平　これより淨瑠璃始まり左樣に。

ト早神樂になり、妻平、笛を持つて、一散に下座へ入る。一學、追つて入る。

ト淺黃幕切つて落す。正面、草土手の上に毛氈を敷きこれに富本連中居並び直ぐに淨瑠璃。

〽般若が愚痴にはあらで愚かなる、身は木津川の渡し守、軒の聲も筒洩れて、笑ふ雲雀に濡れ燕、姫と園部の左衛門は、

ト園八節のかゝりになり、花道より左衛門、薄雪姫、緋の頰冠り、手を引き合うて出て來る。

〽心せかれて旅立に、日のよしあしと夏衣、よしなき戀の誠と誠、いつか女夫と奈良坂や、あれあれ〳〵懐かしき、紀の森の陽炎も、當麻を出でゝ昨日今日、飛鳥も後に遲れ咲き、椿も數ゝ渡りより、狗の船場に着きにけり。

薄雪　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。そして爰はマア、何と云ふ所でござんすえ。

左衛　爰は山城と大和の境、木津川と云ふ所ぢやわいの。

薄雪　そしてマア、この妻平は、何して遲い事ぢややら。わたしや案じられますわいなア。

左衛　なんの案じる事はないわいなう。妻平には秋風の硯を預け置いたれば、定めて小枝の笛の手がゝりでもあつて、二種の寶揃へて持つて來ようと思ひ、そんな事で遲いのであらうわいの。

薄雪　ほんに、それならようござりますが、マア、誰れぞに逢はぬうち

左衛　成る程〳〵。そんならこの木津川の渡しを越えて、妻子を待つて居やうわいの。

薄雪　それがようござりませう。

左衛　コレ〳〵、船人、早う渡してもらひたい。

兩人　船人なう〳〵。

〽船よ〳〵と起されて、寢耳へ水の船長が、笘押しあけてどつてう聲。

ト長作、船より出で

長作　どいつだえ。どのべら坊だ。渡し錢なら五文や十文出すと云つてアタやかましい。折角面白く見て居た夢を、どういふ奴等が起しやアがつた。見かけた夢を返しやアがれ。

左衛　それは何とも氣の毒千萬。此方はちつと道を急ぐ者ゆゑ、早う渡してもらひたい。

薄雪　どうぞ渡して下さんせいなう。

長作　イヤ、しやらのしやんぷくりんな。オヤ〳〵、見ればこなたは、燒きざしを一腰さして居る。さては侍ひぢやな。せう事がない、渡してやりませう……イヤア、びらしやらな連れて來たからは、さては彼奴めは、オ、それよ。

〽長作はたと手を打つて、それよ〳〵オ、それよ、大膳さまからお尋ねの、園部薄雪ござんなれ、搦め取らんと身拵らへ、鉢卷しめて櫂押取り、振り上げしが思案顔、イヤ待て暫し我が心、つく〴〵見れば形素振り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、梅川もどきをやり居つて、二十日餘りに四十兩、遣ひ果して二分殘る、なぞと二人がやりかけて、すつぽらぽんと逃げる氣か、但し船にてゐた舌たるい、二人死なうと云ひ交し、爰までござれであらうかの、オ、そりやならぬ、ならぬ〳〵と意氣張り、櫂を構へて立つたりしは、目も當たさに見えにける。

左衛　コレ〳〵、滅多な事云ふまいぞ。其やうな者ではない。こちら二人は、何でやらあつた。オ、それ〳〵、札所を巡る順禮ぢやわいなう。

薄雪　それ〳〵、こちらは順禮とやらぢやわいの。

長作　ハテ、順禮にしては、可愛らしい順禮ぢやな。

兩人　どうぞ渡して下さんせいなう。

長作　順禮ならば報謝、渡し一文も取らぬが、サア、そこで順禮の御詠歌が、聞きたい〳〵。

兩人　サア、その御詠歌は。

長作　知らぬと云へば、この船に乘せる事は、ならぬ〳〵

兩人　どうでもならぬかいの。

長作　ならぬとも〳〵。しかも奈良の街道の渡してござんす。

兩人　そんなら、どうでも御詠歌を。

長作　サア〳〵、早く〳〵聞きたい〳〵。

〽早く〳〵と煽てられ、詮方もなく御詠歌も、後や先なる父母の、惠みも深き粉川寺の、不孝者よと我れ我れをさぞ未來から三熊野の、瀧津思ひに胸せまり、ゆうべの儘と帶さへも、結び捨てたる藤井寺、南圓堂を行く先も案じ過して賴もしく、佛の誓ひ願ふにぞ、イヤ仰しやつたりな、そのじだらくやの二人連れ、合點のゆかぬ美濃の國、親と親みし仲人にも、沙汰なで惚れた帆かけ船、おりや駈落ちと見て取つた、ちん〳〵加茂、はまだ一里、サア梅が谷へ廻るがよい、船へは乘せぬ渡しやせぬ。ならぬ〳〵と枕箱、煙管で叩き立つたるは、思ひの外の悋氣場に、二人は返す詞なく、人の情を待つばかり。

ト長作、煙草のむ。兩人、困りしこなし。

〽住み馴れし、菅原村に夏の來て、干すてふ布も女子業。

ト在郷唄のかゝりになり、花道よりおよし、染めやつし、三ツ大の附きし手拭を冠り、盥へ晒しを入れ、下駄がけにて出て來り、花道にて

〽色氣ないとて苦にせまいもの、見やれ茨にも花が咲くエコノアイ、脊戸や川原で袖褄引きやる、引田生れの氣散じは、般若寺あたりで一口は、なりそに見えてぶつきらぼう、晒し盥を引つ抱へ、笑顏作つて立ちとまり。

よし　東西々々、淨瑠璃のお邪魔もかへり水仕事、船と盥は一長屋の、長作さんを譽めやんしよ。先づその煙草の阿房草、をかしらしいと見ゆれども、さぞ色事に手を取り楫、おも梶枕を交すなら、焦るゝ操のかみこま三味線、テンテットンと打込んで、誰れも女子は御亭樣、こちの男と云ひたさに、お免し受けて、イヨおらが喜の字やさんとホヽ、敬つて、ヤツチヤ〳〵。

〽（四月中旬より同人、船づくし譽め詞、認め入れる）

東西々々、淨瑠璃の半へちよつと出船とは、邪魔な船込みどこへなと、早う筏とお叱りも、かへり水棹の渡し守、長作さんを譽めやんせう。先づ江戸川の氣に合うて、屋形の評判吉野丸、川一丸で親船に、荷足と聞けば供船の、坂三津山谷の二丁立ち、心が扇蝶花形、傳馬にあらば比翼紋、また地にあらばもやひ綱、手を取り楫の色事で、

おも栂枕を交すなら、焦れし權ある身は浮舟、茶船もまはの川舩に、乘り出す河岸はおちやっぴい、お免しなされて下さんせと、ホ、敬ってオ、しんど。

へ袖打覆ひ走り來る。

ト舞臺へ來る。

長作　ヤレ〳〵、およしぼう、待って居た〳〵。

よし　わたしとした事が、お前に逢ふのを樂しみに、道を急いで來たわいなア。

長作　コレ〳〵、金儲けが出來た〳〵。

よし　そりや何のこっちやいな。

長作　何の事か知らぬが、園部の左衛門と薄雪姫を尋ね出せば、褒美の金は、大膳さまから遣らうとの事。アレ、あの二人こそ、それに極まった。なんと、金を貰うて、二人して、食ひたい物を食はうぢやないか。

よし　わつけもない。この木津川の川上には、お前、どこぢやと思はしやんすえ

長作　それは知れた事、伊賀の國々。

よし　ソレ、その伊賀の國は、幸崎伊賀守さまの御領分。その幸崎さまのお姫樣を、どうして〳〵、其やうな事がなるものかいなア。

ト長作、思案して

長作　イカサマ、そこもあれば蓋もある。こりやマア、どうしたらよからうぞ。

よし　なんであらうと、わたしに任せて置かしやんせ。

長作　置かしやんせ。オヽ、置かしやんせう〳〵。

トおよし、二人が側へ行き

よし　モシ〳〵、お隱しなされまするな。あなた方は園部の左衛門さま、薄雪姫さまでござりませうがな。

ト兩人、思ひ入れ。

兩人　イヤ〳〵、そんな。

よし　お氣遣ひな者ではござりませぬ。あの人は伊賀守さまの御領分の船頭、長作どのと申す者。また私しは園部村の百姓、太次兵衛と申す者の娘、よしと申す者。何なりと御用があらば、仰しやつて下さりませい。

左衛　成る程、其やうに云うてたもる事、隱し包むやうはない。如何にも二人は園部の左衛門、薄雪ぢやわいの。

薄雪　供と云うては、妻平と云ふ者一人。それゆゑ遲れて、いかう難儀をするわいなア。

よし　それはマア、お氣の毒でござりまする。コレナ、長作どの、わたしがあなたを、あの船へ乘せまして、お渡

し申すうち、こなさんはこの帯を、どうぞ晒して下さんせいなア。

長作　こいつは面白い。おぬしは船を漕いで見る氣があるし、我れらは又、この布を晒して見たい〳〵。

よし　サア、好いた同士でなければ、女夫にはなられぬわいなア。

長作　そんなら待ちやよ。この長作は天婦羅と、丼酒が好きだに依つて、定めしこれも、夫婦になれるであらうの。

よし　なにを。好いた同士と云ふはナ、あなた方のやうなが、好いた同士ぢやと云ふのぢやわいな。

長作　ハヽア、そんならお前方は、好いた同士の出來合ひかえ。

兩人　サア、それは。

よし　マア〳〵、その妻平どのとやらの見えられまするうち、モシ、あなた方のお仲の睦ましいお話しを、お聞かせなされませぬかいなア。

左衛　成程〳〵、憂き事の

薄雲　初め思へば、

よし　どうぢやえ。

〽逢ひ見し時は過ぎし春、地主の櫻の眞盛り、ほんに思へば淸水の、觀音樣のお仲人、互ひに人目包ましく、忍ぶ離が褄浸し、解いて寢よとの判じ物、出したこの手が我れながら、いたづら者ぢやないかいな、その憂き事も今は早、我が身の曇り晴れ渡り、家の寶も手に入れば、小枝の笛も尋ね出し、二つ揃はゞ幸崎の、家をも立てたき我が願ひ、そのお心の嬉しさを、離れ交野の雉子ぞと、夫に添ひ侘ぶ風情なり。

ト長作、裾を斜に構へ

長作　サア、好いた同士の正體を、見屆けたぞ〳〵。

よし　何云はしやんすぞいな……ほんに、御緣と云ふものは。

薄雲　ナ、恥かし。

ト顏を隱す。およし、これより所作。

〽あれ聞かしやんせ長作さん、羨ましうはないかいな、わたしやお江戸の競ひ肌、聞けば地廻り節とやら、手拭取つて頰冠り、可愛い男の聲がすりや、蝶々の簪挿んで出る、こりや又何のこつた〳〵え、下駄で長屋の前渡り、こんな勇みか但し又、野暮で律氣で御贔屓の、今たんとある役者なら、三津五郎さんに似た者あらば、のろくな

りたい願ひとは、ちよと例ね者ぢやないかいな、おや〳〵どうせう・そりや嬉し・ちよつと聞いても初鰹、とく咲、鳥と氣が合うて、焦るゝ船の楫枕、横から見ても半四郎、此方から見ても半四郎、これ〳〵〳〵、こんな噂衆が持つたさに、待つは烟管茶碗酒、ぐつと一杯やりかけて、なう〳〵布は色ます晒しのや。

トこれより晒しの拍子に、大小の合ひ方になり

〽ゆたのたゆたに船さし入れて、おつとまかしよと一日を、横に暮らした渡し守、そんなら其方は、やつしつし。滑がいでどうせうお前はえ、晒して振りを見せ參らせう〳〵、女々晒しの水仕事。

ト千琴の晒しになり、長作、およし、布を取つて

〽立つ浪は〳〵瀬々の網代にさへられて、流れる水をせきとめ〳〵、所柄とてな〳〵布を手事に横の里へと打連れ立ちて、見ろやれ賤が家へ。

トこの淨瑠璃の切れると、ドロ〳〵になり、日覆より魂ひ上がる。およし、これにてアッと苦しみ倒れる。皆々もろき介抱して

長作　コレ〳〵、およしぼう、氣を附けてくりやれ〳〵。

薄雪　なんぞ藥はないかいな〳〵。

長作　ござります〳〵。慥かこの煙草入れに。

ト出して

オヤ〳〵、これはお藏前の七味唐辛子だ。

左衛　なんの事ぢや。およし、心を附けい〳〵。

トおよし、ズッと立つて

よし　ヤア、あなたは園部の左衛門さま。

三人　心が附いたか〳〵。

よし　モシ、あなたはお忘れなさんしたか。

左衛　ヤ。

〽忘らるゝ身に何がなる、あの清水で逢うた時、物心とやら教へられ、又も扇の形見とて、おくれなさんしたぢやないかいな。

よし　エヽ、恨めしい薄雪姫。

〽見返られしも無理ならず、及ばぬ戀に病みほうけ、命も當麻祭りの日、又も逢ふ瀨が身の因果、お顔が見たうて來たものを、えゝ妬ましや。

ト左衛門、薄雪を見る。

長作　サア〳〵、およしぼう〳〵、おいらも好いた同士の相伴せう程に、サア、船へ來やれ〳〵。

〽およしと思ひ長作は、さア〳〵と手を捕へ、忽ち

吹き來るはやち風。

ト大ドロ／＼、立廻りにおよし、長作を投げ退け、引拔きの形になり、ズッと立ち上がる。三人悄り

二人　この體は。

ト鼓唄のかゝり。

〽我れはおみつが亡魂の、浮びもやらで髣髴と、宙宇に迷ふも淺ましや。

トどろ／＼。これより大小のあしらひ。

〽邪淫の罪に犯されて、角ぐむ芦の劍の山、肌の卯の花紅躑躅、この世からなる苦しみも、思ひ知らせん思ひ知れ、恨みの苔打ち寄する、紅蓮の藤浪とう／＼／＼、烈し恐ろし。

ト躑躅の枝を錫杖に持ち、立廻りよろしく、この時、下座より妻平、硯と笛を持つて出て來り、兩人を圍ひドッコイと見得、長作は始終およしを介抱の心にて、付添ひ歩く。

左薄　ヤア、其方は妻平。

妻平　合點の參らぬこの場の樣子。

左衞　サア、これもおみつが

薄雪　嫉妬　念慮。

よし　よも安穩で添はさうぞ。

トどろ／＼。

長作　そんなら、およしではなかつたか。

妻平　何は兎もあれ、二種の寶、首尾よく手に入れてございます。

左薄　エ、有り難い。

妻平　寶の威德、例しは眼前。怨敵退散。

ト寶を差しつける。大ドロ／＼にて立廻りにおよし、杖にて打つてかゝる。皆々ドッコイ。

〽寶揃へば雲晴れて、皆紫の杜若、今こそ解脫の花衣、化城偸品の敎への道、有り難かりける次第なり。

ト段切り、大ドロ／＼、この時下座より捕り手、網の四天、弓張り提灯、十手を持ち、バラ／＼と出て、アリヤ／＼の聲にて取卷く。

捕手　動くな。

皆々　ドッコイ。

長作　先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し。

道行念玉蔓（終り）

上巳を飾る御誂へを
漸く出來恐入候

京人形左彫

左甚五郎

彫刻師の左甚五郎が精神籠めて京人形を作ると、魂ひ籠つてその人形が動くといふ趣向は、紀海音の淨瑠璃に始まつて、人形に歌舞伎に幾多の作を殘してゐるが、最後には所作事としてのみ殘つた。今日傳存してゐるのは、三世櫻田治助の作と、それを補訂した默阿彌の作とであるが、爰へ出したのは治助の方で、四世歌右衛門の爲に書いたのを、その子鶴助の爲に書き直したが、事情あつて上演されなかつたのを、更に文久三年五月中村座で補訂の上、舞臺へ出した脚本で、所作事よりも八人藝の笑劇の方が大部分を占めてゐるのは、餘りに治助臭を發揮してゐて嫌味だが、維新に近い頃とて可成り新らしい當込みの詞なども入つてゐて面白いので全部を收錄して置いた。この時の役割は、甚五郎（五世坂東彦三郎）京人形（三世澤村田之助）おつや（市川新車）千島の前（河原崎國太郎）照平（市川八百藏）道順（嵐冠五郎）お辨（中村相藏）等であつた。この時の常磐津は小文字太夫と文左衛門、長唄は吉住小三郎、杵屋喜三郎、振附は藤間勘十郎であつた。

京人形左彫（左甚五郎）

甚五郎住居の場

役名――彫り物師、甚五郎。同女房、おつや。同娘、お澤實ハ鑾冬息女千鳥の前。雇ひ女、お辨。醫者、道順。請負ひ人、佐助。講中、門八。大工、十吉。同、三吉。家主、万藏。神主、鈴成。易者、平内。魚賣り、拾六。番太郎、大藏。木拾ひ、千平。奴、照平。京人形。

常磐津連中
長唄連中

本舞臺、三間の世話屋體。向う茶壁、納戸口、上手折り廻し障子屋體、いつもの所門口、下手、小高き黒板塀、後に打返す事、すべて、橋場川口貳階下を借家して居る體。爰に、佐助、普請受負人の拵らへ、門八、講中の形、十吉、三吉、大工の拵らへ。万藏家主の拵らへにて立ちかゝり居る。お辨、雇ひ婆の拵らへにて、膠鍋をかけ、掻き廻して居る見得よろしく、浪の音、網の騒ぎにて、幕明く。

佐助　今日は留主とは云はさぬ。

四人　甚五郎を出せ〳〵。

べん　ナニ、狆ころを出せ。掃溜の際に幾らも居るから、選り取つて持つて行きなせえ。

門八　イヤ、おぬしの茶羅苦羅も聞き倦きた。甚五郎が居ずば、かみさんを出せ〳〵。

べん　燻ぶり切つて居る神棚を、何にするだらう。

　ト荒神棚を下ろしに行く。

十吉　エ、、それは神棚だワ。かみさんとは、女房の事だワ。

べん　ソレ、にうぼう。

　ト膠を掻き廻したる棒を出す。

三吉　エ、、解らねえ。夫婦ながら留守なら、娘を引立てて來い。引立てゝ來い。

べん　オツト合點。ソレ、薄縁を引つてるぞ。

　ト舞臺の薄縁を引立てる。

佐助　エヽ、只さへ風氣で咽喉が痛いに。
べん　ソレ、退いたり〳〵。
四人　薄緣ではない。娘だと云ふに。オホン〳〵。
　ト此うち、奥より、おつや、世話女房の拵らへ、千鳥の前の世話娘を連れて出て來り
つや　これはしたり、お辨どの、家中が埃りだらけ……お澤、もつと其方へ寄つて居やいの。いま結立ての髪が、臺なしになるわいの。
佐助　ヤア、こなたはかみさん。
万歳　こちとらが息せい張つて、喧ましう云ふに、素知らぬ顔で引込んで居られたものだなう。
十吉　イヤ、亭主が亭主なら女房まで
四人　どの位太いか知れぬな。
つや　さう仰しやるは、御尤もではござりまするが、今日はお隣の川口の二階に、御大名がござりまして、その物音でお前さん方の、お出でなされたを心付かず、あの子の髪を結うて居ましたゆゑ、お腹をお立せ申しました。どうぞ御料簡なされて下さりませ。
千鳥　私しもお隣の三味線に聞き惚れ、皆さんのお出でを存じませなんだ。どうぞ御免なされて下さりませ。

べん　これサ〳〵、何も盗人騙りでもしやアしまいし、其やうにあやまる事があるものかいな。
佐助　なぜあやまる事がない。コレ、大切なお屋敷から請合つた、御普請の彫り物、今月中に出來上がらぬと、大勢の役人衆の越度になるわいの。
門八　人様は料簡もなからうが、わしは講中の金を集めてこのお葺式までに、本堂の普請を殘らず出かさうと受取つたところ、今以て欄間の彫り物が上がらぬので……コレ、でんど沙汰になつて居るわいの。
十吉　その荒木をば、こちとらの叩き大工に木取らせて
三吉　今日來いの、明日來いのと、爰までござれの甘酒挨拶は聞いては居ぬ。
門八　如何にあんよが上手でも、この橋場まで幾度來ると思はつしやる。
佐助　サア、甚五郎を連れて行つて、この云ひ譯をせねばならぬ。
四人　サア、爰へ出せ〳〵。
　ト皆々、口々に云ふ。
つや　サア、重々御尤もではござりまするが、高聲で皆さんの御催促を受けまするも、こちの人が去年の秋からぶら

ぶら病ひ、それゆゑしかけた仕事も、今以て其まゝにて、職人衆へも作料のたゝまり、何やかやで義理の悪い事ばつかり。私しも思案に盡き果て、いつそ年はゆかねど、このお澤に聟でも取つて、方々様の不義理を償ひませうと、仲間衆やお得意方へ、お頼み申しましたりや、あちらからもこちらからも、地面を持参の、ヤレ敷金を持つて行かうのと、云ひ込んで参りますれど、年端がゆかぬゆゑ、慾徳には構はず男選み。それゆゑこちの人に繪圖を書ゝせて、皆さんにお頼み申しましたゆゑ、もう程なく調ひませう、左様いたしたりや、主の病氣も直らうし、細工なりと金なりと、早速に片を付けませう程に、今少しの御勘辨を、お願ひ申し上げまするわいなう。

佐助　イヤ、さう聞けば尤もだ……ドレ〳〵。ヨウ、この娘ツ子なら、どんな金持ちの聟でも取れる。

門八　わしは内の嬶がなくば、地面を持つて養子に來やうものを。

万藏　お前方が納得して、ワイ〳〵と猛り立つて騒ぎさへしにやア、何も半年壹年、爰を貸して置いても、わしらの家でも、無理に立てと云ふ筋もないわな。

十吉　こちとらも共々世話をして、一日も早く、ナウ。

三吉　それ〳〵、作料も貰ひ、また仕事にやつて下さりませ。

佐助　時に、繪姿を引合せて、寸分違はぬやうにせねばならぬ。

門八　銘々一枚づゝ受取りませうか。

つや　ハイ、これでござります。

ト莨盆の間より、一枚出す。

佐助　ホ、オ……こりやとんと彦三郎の似顔繪に似て居るではないか。

十吉　わしらにも一枚づゝ

つや　サア、主が内に二三日、おち〳〵と居ませぬゆゑ、後が間に合ひませぬわいな。

万藏　ハ、ア、みんな賣切れたかね。

べん　オイ〳〵、お前方、別段に出てもらふには及ばぬ。歸りに繪双紙屋で、彦三郎の似顔繪を買つて行きやア同じ事だ。

三吉　違えねえ。こりや馬鹿にも鳥居だ。

皆々　ハ、、、、。

ト此うち、お辨、膠の擂粉木を削り、丸盆へ茶碗を並べ、銘々へ茶を汲んで出す。

べん　サア〳〵、仲直りに煮花をあがれ。
四人　イヤ、氣の利いた年増だ。
万藏　おいらは茶は嫌ひだ。
べん　ムウ、悟つたな。
万藏　なにを……ハヽヽ、面白い女中だ。イヤ、面白いと云へば、おらが内の二階と、奥の離れ座敷と、南方立分れで、長唄と豐後節の掛合ひが始まるから聞きなせえ。その外題の書付けを持つて來た……これだ〳〵。
　ト貫入れの端より淨瑠璃觸れを出す
つや　ドレ、ちよつとお見せなされませ……ほんにマア、むづかしい字が書いてござんすな。
べん　所をわたしが讀んで見せませう。エヘン……。
　ト所作、名題、太夫連名、役人觸れあつて
なんと、えらいものでござんせう。
つや　ほんに、こりや聽き事でござんす。お前さん方も、御綴りとなされて。
門八　好い時分に來合せて、ぴやばせぼぼります。
佐助　ぼッ〳〵ぼう〳〵。
十吉　夏に喰ひたいが呆れる。この日の穢かいに長ッ尻だから、煮花の中へ、この膠の擂粉木を削つて呑ましたのぢやわいな。
十吉　ぼふりこそべんなにほひだとぼゝッぽう。
つや　マア、惡いてんがうばつかり……モシ、どうぞ御料簡なされて下さりませ。
万藏　あのお辨どんだと云つて、惡氣でしたのぢやアねえ。
べん　膠は薬なものゆゑ、振舞つたのぢやわいな。
佐助　御ちんぺつ有り難い。
門八　ぼんならぼしらも
四人　パア〳〵。
万藏　とんだ横濱の客人だ。
皆々　サア、行きませう。
　ト唄になり、皆々、唇を動かしながら向うへ入る。万藏は、橋がゝりへ入る。おつや、思ひ入れあつて
つや　ヤレ〳〵、ほつとりとしたわいなア。
べん　さぞマア、お疲れなされましたらう。あのやうに云うて追ひ散らすが、わたしが一徳。
千鳥　わたしは又、どうなる事かと、胸先が痛うなつたわいなア。
　ト此うち、おつや、あたりへこなしあつて

つや　幸ひあたりに人目もなし。先づ〳〵。
　ト合ひ方になり、千鳥の前を上手へ直し
時代とは申しながら、誰れあらう、兼冬卿の御息女、千鳥の前さまが、下ざまに勤めて居つた我れ〳〵夫婦の者を便りに遊ばし、それも何ゆゑ、王子樣の無理所望、殊には焦れまします名古屋山三さま、この東路にお忍びある由、夫に申したとて、この程の病氣ゆゑ、名古屋さまの繪姿を廻し、聟選みと僞はり、多くの人に頼みましたれば、定めて諸方から世話して參りませうが、名古屋さまでなければ、斷わりを申すまでの事。必らずお心遣ひをなされまするな。
千鳥　さまでの恩もあるまいに、其方一人の氣遣ひ、死んでも忘れはせぬわいなう。さはさりながら、戀しと思ふ山三さま、この東へお下りなされしと、お跡を慕ひ來りしが、もしや逢はれぬその時は。
べん　ハテ、お氣の弱い。淺草寺の觀音樣は、枯れ木に花を咲かす御利益。よう御信心なされませや。
つや　ほんに、私しとした事が、お前さんまで家來のやうに、必らず氣にさへて下さんすな。
べん　なんのマア。御覽の通りの武骨者。併し、男勝りの其方を見立て、供に遣はすと、お乳の人の云付け……それはさうと山三さまも、人目を忍ぶお身の上。もしや頭巾手拭にて、面體包んでお出での時、實正紀すにどうしたなら。
つや　サイナ。さうした時には……オヽ、よい事がござんす。モシ。
　ト囁く。
べん　そんなら、何がなしに床を取つて、お姫樣の名代に。
つや　ア、コレ……ナ。
　トまた囁く。雨車、謠の合ひ方になり、道順、慈姑頭醫者の拵らへにて、出て來り、空を見て
道順　ヨウ、なんだ、春雨だな。これでは一句はんべらずばなかるべからず。カウト……春雨や〳〵。
　トこの時、お辨、心付き
べん　オヽ、ほんに親方さんが、蓮を煮て置けと云はしやんしたつけ……オイ、蓮はどんなだえ。大きいかえ。
　ト門口を明け
オヤマア、八百屋だと思つたら、道順さん、冗談ばつかり。

道順　ナニ、冗談申すものか。いま春雨が降つて参つたゆゑ。
べん　それで、蓮の根や／＼とお云ひのかえ。
道順　イヤ、話せぬ女だわえ。醫者と八百屋と間違へると云ふ事があるものか。
べん　それでも、お前の頭は、慈姑と云ふではないかえ。
道順　イヤ、こいつに一番押へられた……時に、御病人は如何だね。
つや　これは／＼、ようお出でなされて下されました。折悪しく又今日も。
千鳥　ほんに、お氣の毒でござりますわいな。
べん　イヤ、また居合せて、盛り殺されるよりましであらうかえ。
道順　そりやこそ又、しやべり出した。併し、あんな不器量な者もある中に、斯うした鮮かな娘御の、容顔美麗、芙蓉の顔。ホ、オ、見事々々。
べん　又お嬲りなされますかいな。
つや　なんにも解りもしない癖に、高慢な事ばかり。
道順　ハテ、物を知つて居る位なら、醫者にはならぬワ。
千鳥　ホ、、、、氣散じな道順さま。あなたがお出でなさるゝと、賑やかでお腹を抱へまする。それに引替へ、こちの甚五郎どの、この春からうつら／＼鬱いでばかり。お醫者様も彼れこれと取替へ、この中よりあなたのお薬になりましてから、次第によいと見えまして、夜もスヤスヤ寐られまするが、あの分では、段々と肥立ちませうかいな。
道順　ア、、肥立つとも／＼。全快するは目のあたりに見えては居るが、良薬を用ゆるには、餘程の金がなければならぬゆゑ、それにて甚だ困却いたすて。
つや　そりやモウ、主の病氣の癒る事なら、どのやうな事をしてなりと……さうして、病は、なんとお見立てなされました。
道順　ハテ、知れた事、戀煩らひ。
つや　オホ、、、。あの武骨ないこちの人が、ハ、、、。お前様も冗談ばつかり。
道順　これはしたり、お前はさう思うてござるが……ソレ、いつやらの事ぢや。オ、、この春、下谷の廣徳寺様の御門の建前の時。
千鳥　それ／＼、職人衆に誘はれて、廓へお出でなさんしたと仰しやつてこの方。

つや　ほんに、さう云やれば、仕事の歸りに、今日も明日も仲の町へ行たとの話し。それからこの方、川岸の仕事場へ、弟子衆は元より、わたしもこの子も寄せ付けず、不思議な事と隙間より覗いて見れば、なんぢややら結構な、錦を縫うた女の鏡袋を出し、肌に付けたり眺めたり、餘念のない顏付き。そんなら、主の病の根は、戀煩らひでござんしたかいな。

道順　愚老も段々と口裏を引いたところが、あの甚五郎どのが何か斯う云ひ憎さうに、廓の内で名高い太夫を、身請けするにはどの位、また一日一晩抱いて寐るには、どれ程金を出せばいゝと聞かれたゆゑ、ア、埒もない事を云はつしやる。身請けは千兩金、又一夜買ふと金を出しても、自由に逢はれるものではない、どう云ふ譯で其やうな事をと問うたれば、有やうはこの春、廓一番の傾城を見染め、後から付いて行つたら人込みの中、その傾城が懷中より鏡袋を落したゆゑ、呼び返して屆けようと焦つたれど、櫻の初日、その日はたうとう見失ひ、それから毎日仕事の戻りに、幾度も行て見れど、先が美しいゆゑ、ツイ云ひそびれては戻りましたと、淚をこぼしての話し。ハヽア、さては彼の女郎に焦れての煩らひと見たゆゑ、コレ甚五郎どの、貴樣は氣の小さい、その拾つた鏡は即ちその女郎の魂ひ、それさへ大切に持つて居れば、今に年季が明け、ズル／＼とソレ、一文も出さずに、女房に出來ぬ事はあるまいと云うたら、正直者ゆゑ、成る程と心が開いたゆゑ、先づ夜は寐らるゝと云ふもの。後戻りが致さねばよいが。

つや　そんなら、なんと仰しやる。その戀病ひは癒らぬものでござりまするかえ。

道順　さて、そこぢやて。戀煩らひはお醫者さんの藥を合せるより、その女に逢はせるが、いつち近道でござる。

べん　併し、親方さんの病氣の癒る程、傾城とか云ふ藥を用ゆるには、餘程お金が。

道順　所で名醫が匙を振つたら、不躾ながら、この家財を賣つたところが、一晩の揚げ代、雜費にも足らぬゆゑ、持參金の聟を世話を致しまするは、また娘御にその聟が氣に入らずば、後でどうとも配劑するとして、その金持ち男が甚五郎どのを廓へ連れ行き、お醫者却つて太皷持ち、萬事愚老が匙加減、その傾城を買はせまするワ。

千鳥　ほんに、さう云ふ事になつたなら……あの甚五郎が……サア、父さんの病も癒るでござんせう。さにさりな

から、その男が。

つや　ア、コレ、何事も……ハテ、わが身の親ぢやもの、悪いやうにはせぬわいの。さうして、敷金持つたこの子へ聟は。

道順　サア、見合ひ婚禮一時にささうと、おれが病家を一軒廻つて來る間があつたれば、もう來る時分だが、何をして居る事やら。

ト門口を出て、向うを見て

オ、、來た〳〵。あれだ〳〵。

べん　エ、、唐突に聟が押かけて來るのかえ。

千鳥　母さん、わたしやどうせうぞいな。

つや　ハテ、彼のお方でなければ、サッサと變替へする分の事。

道順　彼のお方とは、そりやどこの。

つや　サア、娘が氣に入らぬ時は、お氣の毒ながら。

道順　勿論の事。緣づくだからお目にかける。併し、頭から爰に居るもをかしなもの。

つや　奥へ行て顔を直しや。又お辨はお隣へ行て、お肴の用意を。

べん　畏まりました。なんぞめでたいお肴を。

千鳥　わたしやどうやら。

べん　ハテマア、お出でなされませいなア。

ト流行り唄になり、通り神樂、雪颪しになり、千鳥のお辨、奥へ入る。この鳴り物を借りて、照平、くり下げ奴、好みの拵らへ、捻切り端折り、袴を懷に入れ、塗り樽を下げ、出て來る。道順、捨ぜりふにて招く。

道順　オ、イ〳〵。

照平　イ、サ、いま行くと云ふに。おらも花聟だ、ちつとは見得もしにやアならねえ。お飛脚にでも行きやアしめえし、さう急ぐにやア及ばねえぢやアねえか。

ト云ひながら門口へ來る。道順、焦れて

道順　なんの、誂らへの繪圖に合して、聟に取るこなた。見得も絲瓜もいるものか。

照平　さうして、おれが聟に取らうと云ふ内は。

道順　爰の内だよ。

照平　ナニ、爰だ。それ見さつせいな……おれだとて、一生に一遍の祝言だ。花聟にこんな頭では。

道順　そこに拔りはあるものか。

ト袂より、棕櫚の鬘を出し

この髪を斯う被つて、オヽ、さうだ〳〵。イヤ、なかなか髪付きは好いわえ……御覽じませ、とんと八代目のやうでござります。ハヽヽヽこれなれば娘の氣に入るに違ひなし。嫁御も疾から待兼ね山の寒ざらし。

照平　オツト、おいどはこの袴でフン。

ト手早く懷の袴を出す。

道順　サヽ、支度がよくば、入つた〳〵。

ト樽を持ち、內へ入る。照平、上へ通り、恥かしき思ひ入れ。

さて姑御、お誂らへの繪圖に合して、田原町で看板うつた奴鰻、ぬらくら者に見ゆれども、旅ぢやござらぬ江戶前は、何れも樣がお請合ひ。寒の師走もかんまけねえ、捻切り端折りの花聟どの、なんと寸志はござるまいな。

つや　これはマア、ようお出でなされました。兼ねて道順さまが內外の事は、よう御存じでござります。何事も御緣づくゆゑ、娘にもお逢はせ申したその上で。

照平　ネイ〳〵、左樣にごわりまするでごわりまする。

トこの時、お辨、出て來り

べん　おかみさん、お隣へ行つてお頼み申したら、聟めが來る前に、ちよつと知らせて。

つや　これはしたり、聟樣はもウ爰へ、お出でなされましたわいの。

道順　コレ〳〵お辨、聟樣へ御挨拶申しや……エヽ、花聟どの、これはこの家の下女でござる。幾久しくお目をかけ下されい。

照平　これは〳〵、始めてお目にかゝつた。おらはてつかちねえ武骨者、何事もこんたの指圖を頼みます。遠慮なしにやつて下せえ。頼む〳〵。

ト辭儀する。これにて、棕櫚の鬘、前へ落ちる。

べん　聟樣は奴さんだね。

トこれにて、うろたへ、また筋違ひにかけ

照平　どうやら夏めいて參りました。ハヽヽヽ。

ト廻りの澁團扇を取つて煽ぐ。おつや、お辨、氣の毒なるこなし。これより雪は巴の唄になり、向うより、平內、小紋の着付け、小紋の上下。鈴成、烏帽子、木綿襷の刺貫、神職の拵らへにて出る。少し後より、捨六、黑の着付け、赤き扱きを締め、腰に打鍵帳面を提げ、魚賣りの形、大藏、茜木綿の着付け、更紗模樣の袖なしを引ッかけ、この上へ、丸絎やうの帶を猫ぢや

らしに締め、茶色の風呂敷にて、首を包み、綺麗なる面を被り、捨六に手を引かれ、出て來り。

捨六　オイ〳〵、そこへござるは、小梅の占者さんぢやアねえか。

平內　オヽ、こなたは花川戸の魚賣りどの、連れの衆も見たやうな。

捨六　この頃種痘をしたゆゑに、顏も何も包んで居るが、何事も今日は、ちと仔細があつて、云はず語らぬ我が心

サァア、貴樣達も甚五郎の內へ、聟の目見得にござるのぢやな。

鈴成　よく當りました。そんならお前も。

平內　わしは仲人で、いま連れて行く所でござりまする。

大藏　何事も緣づくの事なれば

鈴成　黙量任せに談合いたさう。

皆々　サア、行きませう。

ト合ひ方、鳴り物にて、皆々、舞臺へ來り

平內　ヨウ、お內儀、お宿にか。彼の人相書の聟どのを、同道いたしてござる。

べん　サヤ〳〵、おかみさん、聟さんがいくらも〳〵來ましたよ。

つや　オヽ、お前は小梅の平內さん。

平內　やう〳〵の事で、人相書の花聟に見當りました。

捨六　次に扣へましたは、花川戸の捨六でござりやす。

道順　ヤア〳〵、そんなら貴樣も。

照平　それ見さつせえ、おれが聟入りの口明けをしたら、素敵に流行つて來たわえ。

大藏　そんならアノ、嫁御さんの內は、もう爰かえ。わしや恥かしい。

鈴成　オヽ、何事も御緣づくでござれは、肝心の嫁御に見せての上の御分別。マア、平に〳〵。

べん　なんだか立ちはだかつて、嫌味ばつかりして居ては見立てる事がならぬ。先へござつた聟さんから、サア、順々に、並んだり〳〵。

トこれにて、皆々よろしく住ひ

照平　差詰めおらアお職の居所だ。

鈴成　お職の次に神職が坐りませう。

道順　第二番目の聟どのは、神道者と見える。

鈴成　如何にも、手前事は、熊谷稻荷の社家でござる。

道順　社家ではあるまい。蛸ではござらぬか。

鈴成　兎も角もよろしうお賴み申しまする。

ト此うち橋がゝりより、万藏、臺に酒肴を載せ、後より、千平、やつし着流し、引詰めに髷を結び、杖を突き、腹へりしこなしにて、出て來り

万藏　僉ねえ〳〵、蹴躓きなさんな……ハイ、お誂らへの肴を持つて參りました……ヨウ、こりや大入だの。

べん　あれがみんな、聟に目見得だとサ。

万藏　さう聞いたゆゑ、わつちも一人連れて來ましたが、もう一人どこかへ割込めますまいか。

つや　サア、繪圖に似寄りならば、幾人でも連れて來て下さんせ。又と云ふと面倒ぢや程に。

万藏　併し、急いで連れて來ましたから、支度をしませんが、それさへ御承知なら。

つや　なんのマア、繪圖に違ひないなら、裸でも大事ないわいな。

万藏　そいつは妙だ。お辨どん、このお肴をあすこへ……サア、聟さん、しつかりしねえ。敷居を跨ぐのだ。

千平　もう一寸も歩けねえ。

万藏　仕方がねえ。そんなら爰へ坐んなせえ。

ト下へ座らせる。

道順　なんだ〳〵。後から來た聟は病人と見える。

万藏　イエ、病人ではござりませんが、一昨日後膳を食べたつきり、支度を致しませんから、それで支度を致さんと、お斷わり申しました。

道順　ハテ、支度をせぬとは、飯を喰はずに來たと云ふ事か。お辨、何はなくとも、お茶漬を上げやれ。

べん　アイ〳〵。丁度爰に、膳拵らへが出來て居た。サアサア、ソレ、お茶も爰にござんす。手盛にしてたんと上がれ。

千平　エヘヽヽヽ、左樣なら御馳走になりませう。

大藏　時に、花嫁御はいづれにござるか。斯うやつて居るも大儀なもの。

べん　ほんに日が短い……サア〳〵、お澤さん、何も恥かしい事はない……ハテマア、お出でなされませ。

ト合ひ方になり、恥かしがる千鳥の前を無理に連れて出て、おつやの際へ坐らす。

捨六　何もコレ御縁づくの事だから、お仲人に來たこちとらでも、氣に入つたら聟にしなさるがいゝ。

道順　イヤ、さう聞いては愚老も、ちと氣が張つて參つたわえ。

ト衣紋を直し

先づ第一番から、名乗りを上げるがようござる。
皆々　サア／＼、名乗つたり／＼。
照平　今日聟の出陣いたしたるやつがれは、いつも櫻の花見前、床の障子の伊達奴。
平内　拙者は賢顯功利てい、嘘ぢやござらぬ本所にて、小梅、平内と云ふ賣卜者。
鈴成　どんなに娘が氣儘をしようと、心に諸々の不淨をする、ずんと心も稲荷の神職。
捨六　しんぞ命をすねものゝ、捨六とも又花川戸の、捨六とも云ふ肴賣り。
大藏　我れに元々人と身々、離れし仁王の大藏と云ふ、草鞋の達人あたんの力士。
万藏　此方は生れ吹けば飛ぶ、風に任せてごろついて、料理番やら煮方やら、譯の解らぬ風雷神。
　ト此うち、千平、飯を喰ひしまひ
千平　ゲエイ……さて入口に坐つたは、あんまり御飯を喰つたゆゑ、太神宮よう云はれません。
道順　ハテ、云はずとも御存じの、皆觀音の厄介者、見留めが付いたらお多福お辨、早く杯をさせてくりやれ。
　ト此うち千鳥の前、恥かしきこなしにて、お辨に囃く。
べん　サイナア、お嫁御さんの仰しやりまするは、どれも男に云ひ分はなけれども、御注文の繪姿とは違つてあるゆゑ、お斷わり申し上げて、中でお氣に入つたは、風呂敷包みのお方を、聟様になされうとの事でござりますわいな。
捨六　そんならわつちが世話をした、聟へ札が落ちたか。
道順　それぢやア此方の組合は。
つや　御縁がなうて、お氣の毒さまでござります。
鈴成　イヤ、何事も出雲で結んだ縁。
千平　お飯を喰つたを儲けにして
皆々　ア、歸りませう／＼。
大藏　ア、コレ、歸るとは婚禮の忌み詞。
平内　なんの、其方の忌みに構ふものか。
道順　とてもの事に思ひ入れ云つて、しかも追ひ出されて
皆々　歸らう／＼。
　ト立ち上がる。この時、千鳥の前と照平、顔見合せ
千鳥　ヤ、こなたは。
照平　あなたは姫君。
つや　ア、コレ、姫……夢にも知らぬ縁定め。もう此お方

が聟殿なれば
大藏　さうとも〳〵、例へ以前がどうであろとも、滅多な
事を云ふと間男だぞ。
道順　併し、この衆達を此まゝ歸しては、途中で聟どのが
逢つたら間が悪からう。
つや　爰は不遠慮、奥へ行て
捨六　近付きがてら
べん　わつさり御馳走。
鈴成　又もや御意の替らぬうち
照平　これから奥へしけ込んで
千平　また御馳走かな。
大藏　イヤ、氣の毒千萬。
道順　そんなら皆の衆。
皆々　サア、お出でなさりませ。
ト唄になり、この人数殘らず奥へ入る。千鳥の前・お
辨、こなしあつて、上の屋體へ入る。おつや殘り、こ
なしあつて
つや　あの肴賣りの捨六が、連れて見え　聟と云ふは、顔
を包むが合點ゆかぬ。もしや尋ねるお方か。眞僞を糺す
は兼ねての手番ひ……さうぢや〳〵。

ト合ひ方になり、障子屋體より、木綿布團を出し、よ
ろしく枕を並べ、屏風を立て廻す。此うち、捨六、大
藏が手を引き出て、おつやと顔見合せ
捨六　これは〳〵、姑御の手づから床を敷かせまして、聟
さんに罰が當りませう。
大藏　もう御寐なりまするかな。
捨六　按摩のやうだ。
つや　いま直ぐに娘を連れて來ます。捨六さんも、爰には
不遠慮、お前は奥で。
捨六　わつちも酒盛りの方が、勝手でござりまする。
つや　モシ、まだ一向に年がゆかぬゆゑ……よいやうに頼
むぞえ。
大藏　ハイ〳〵〳〵、なんだか、ガタ〳〵慄へて居りますす
る。
つや　お前もマア、初心らしい。今に慄へが直るわいな。
大藏　オヽ、嬉し。
捨六　畜生め。
つや　ドレ、あの子を寄越しませうわいな。
ト上手の屋體へ入る。捨六は暖簾口へ入る。大藏、物
音を考へ、誰れも居ぬと云ふ思ひ入れにて、風呂敷を

俤き、側へ置いて、頭を掻きなどして、ホッと息を吐く。これなをかし味の合ひ方になり、楊子齒磨を出し、無性に遣つて唾を吐く所に當惑して、上手、切り穴の揚げ板を二三枚取退け、吐込み、床へ戻り、元の如く面を被り、風呂敷を被る。此うち、上手の屋體より、お辨、扱帶形、バタ／＼と出て、恥かしきこなし。大藏、足音を聞いて狼狽へ、狸寢入りをする。お辨、覗いて見て、屏風を引廻す。この時、道順、暖簾口より出て、屏風の外に聞耳立て、こなしあつて

道順　推量に違はず、甚五郎が娘と云ふは、兼多の息女千鳥の前、おれが連れて來りし奴めが、最前娘と顏見合せ、物云ひかねし樣子は正しく、名古屋が家來、照平めに極まつた。先づ差當り姫を捕へ、王子さまへ差上げるか、左なくば首にして、都へ持つて行けば、褒美はズツシリ、嬉い／＼。

トこなし。この時、バタ／＼になり、お辨、駈け出し、道順に行き當る。

エ、、悔りした……。屏風の内は正しく娘と思ひの外。

べん　靜かにおしよ。わつちやア賴まれて、娘ッ子の名代新造サ。

道順　そいつア惡くねえ賴まれものだ。

べん　それはいゝが、なんだか氣味の惡い、いゝ男だよ。

道順　そいつは儲け物だ。

べん　イヽエサ、聞いておくれよ。あんまり色が白くて、テラ／＼光るやうだから、頰ぺたを撫つたらね、堅くつて／＼。

道順　そいつア、のつぺら棒かも知れねえ。ドレ、おれが脉體を伺つてやらう。

ト屏風の下手より窺ふ。床の内に、大藏、心得ぬ思ひ入れにて、面と風呂敷を取り、下手の方へ聞耳立てゝ居る。道順、見屆けて、下手へお辨を連れ來り

主は嘘ばかりつくぜ。おれが近眼の所爲か知らぬが、どこにあの男が色が白い。ありや、何だらう。おらが町内の番太郎にも似て居るし、翫太郎にも似て居る。

トこれを聞付け、大藏、うろたへ、面を逆さまに被り濟まして居る。

べん　それでも、たつた今、わつちが見た時には

ト覗き

あれ御覽な。あの通り色白だわね。

道順　ドレ／＼

ト覗いて

成る程、たつた今おれが見た時とは違ふ。どうかおれが近眼の所爲か、首が逆さまではないか。

トこれにて、大藏、面を直す。

ヨウ／＼、今度は風呂敷を忘れて來た。

トこれにて狼狽へ、面を捨て、手拭を咥へて被る。

そりやこそな。口のとんがつた正體を顯はした。なんでも狐に違ひはない……オイ／＼、狐が出た。皆來い／＼、

ト呼び立てる。これにて、奥より、捨六、藤色の手拭を頬被りして、千平、平内、鈴成、万藏、縫ひぐるみを持ち出て來り

皆々　どこに狐が／＼。

道順　サア、先刻の風呂敷の聟は、野良狐の化け損なひだ生捕つて回向院の開帳へ、見世物に出すがいゝ。

ぺん　オヤ、わつちやア狐と寐たのかね。

平内　一體狐を仲人したは誰れだ。

鈴成　慥か爰に居る魚屋だ。ハヽア、このしろの得意先だから、さては狐と一つ穴だな。

捨六　途方もねえ。おらア知らねえ／＼。

万藏　知らねえも凄まじい。この男から先へぶッちめろ。

皆々　やつつけろ／＼。

捨六　アヽ、助け舟／＼。

ト逃げ廻るはずみに屏風を押しこかす。雷序やうの鳴り物になり、大藏、ヒョイ／＼と飛んで歩き、誤まつて以前の上げ板に躓き、切り穴へ落ちる。此うち、千平、捨六の足を掻く。これにて膠の鍋へ尻餅をつくをちよつと見物に見せて、鍋を取り、捨六を皆々引据ゑる。

千平　また悪い病氣でも流行らせやうと思つて、太い奴だ

万藏　サア、あんな野狐を、どこから連れて來た。

捨六　なんと云つても、狐を連れて來た覺えはねえ。

鈴成　コリヤ、僞はりを申すな。斯く云ふ某は、安部泰親が末葉、狐を見出すは得手ものだワ。

平内　いつその事に、ぶち殺さうか。

捨六　それだと云つて。

道順　それが嫌なら、今の狐を連れて來い。

捨六　なんの雑作もねえ事だ。

ト立ち上がらうとして、膠にて、板の間へ付きしこなし。

アイタヽヽヽ、膠の鍋へ尻餅をついた所を、この板の間

へ押付けられてから、くッ着いて。

べん　なんと、わたしの煮た膠はよく利くだらう。縛つたより大丈夫だ。

平内　狐の出ぬうちは、いつまでも窮命だ。

万藏　併し、口をきくと面倒だ。なんぞそこらに。

鈴成　爰に鍋釣の笊があつた。

ト捨六に被せ

斯うして置けば氣遣ひなし。

千平　時に、狐は、あの緣の下へ飛び込んだ筈だが。

べん　それなれば、脇へ出る穴がないから、生捕つてやりたいものだね。

道順　好い事を思ひ付いた。狐を生捕つた者を、娘の聟と極めようではないか。

鈴成　こいつは妙々。

ト手を打つ。この時、捨六、尻へ板を付けた儘、宙返りをする。

皆々　エヽ、愕りした。

捨六　尻の膠が温たか味で、溶けたはずみに返つたのだな。

平内　四囲を廻つて笊となる。また捨六に替つたのだな。

千平　そんなはずみに逃げようと思つて、元の所へ坐つた坐つた。

トまた笊を被せる。

べん　サア、聟になる氣なら、誰れぞ早く、お入り／＼。

鈴成　聟にはなりたし、氣味は悪し、一思ひに生捕つてくれう……ドリヤ。

トこの時、切り穴の内にて

大藏　暫らく。

皆々　暫らくとは。

大藏　暫らく／＼／＼、しばらプウ。

皆々　ヨウ。

トこの時、大藏、矢張り手拭を被りし儘、半身出して

門八　かゝる所へトテチリ……コレ／＼、皆の衆騒ぐまい。聟にするなら、ナニ人様の苦勞にかけるものか。わしが方から出ませうわえ。

道順　そんなら狐と思つたは

皆々　人間であつたか。

ト上へあげる。

べん　オヤ／＼、道理こそ、わたしの手拭が見えぬと思つたら、風呂敷と間違へて。

大藏　ヤア〳〵、こりやアおぬしの手拭か。道理こそ稀有な。
万藏　ハヽヽヽ。こいつは大笑ひだ。締めて下せえ。
皆々　ヤ、ヨイ〳〵〳〵。
ト手を打つ。捨六、宙返りをする。
大藏　ハア、慌りした。
捨六　こんたのお庇で、仲人のおれまで、難儀。
道順　それも何ゆゑ、蛸になりたいばつかりよ。
千平　落つれば同じ谷川の
平内　見ず知らずの仲ではなし
捨六　仲直りに奥へしけこみ
万藏　肴はおれが働らきで
べん　お酌は差詰め神主さん。
鈴成　とは又何ゆゑ。
道順　ハテ、肴はきどり。
平内　酌は蛸。
鈴成　エヽ、しつツこい。
皆々　サア、ござらつしやい。
トしんみりとした流行り唄、雨車になり、この一件残らず奥へ入る。よき程に向うより、甚五郎、ぽつと好みの拵らへ、頬かむり、堂島下駄を穿き、おしよぼからげ、懐手にて、悄れて出る。後より、十吉、番傘をさしかけ、三吉、番傘、安下駄を穿き、出て來り
十吉　イヤ、段々譯を聞いて發明しました。併し、人は見かけに依らぬもの。甚五郎どのなぞが、廓へ通ふとは思ひも付かなんだ。
三吉　併し、今の話しの樣子では、もう傾城の事は思ひ切り、仕事を精出さつしやるのだな。
甚五　イヤモウ、今まではわしが體に魔がさして、どのやうに仕事をしようと思つても、その魔が邪魔をして働らかさぬ。この譯は女房にも云はぬ程の事。モウ〳〵、さつぱりとようなりましたわいの。
十吉　イヤ、それでわしらも安心しましたわいの。
三吉　併し、彫り物師では名人も幾らもあるが、こなたの彫つた上野の鐘樓堂の龍は、池の端へ水を吞みに出たとの事
十吉　また淺草觀音の寺内の鷄は、折々時をつくつたとやらでは
兩人　ござらぬかいの。
甚五　なんのわしが名人……何分よろしくお頼み申します

る。

十吉　能ある鷹は爪を隠すとやら。何も其やうに卑下するには及ばぬわいの。

三吉　甚五郎どの、また傾城の事を思ひ出し、仕事を怠けて下さるなや。

甚五　ハヽヽヽなんの其やうな事があるものでござらうか。

十吉　病み揚句の事ゆゑ、體を大事にさつしやれや。

甚五　イヤモウ、さつぱりと……御深切に有り難うござりまする。

兩人　そんなら、甚五郎どの。

甚五　皆様へ、よろしう仰しやつて下さりませ。

　ト唄になり、兩人、向うへ入る。甚五郎、門口へ來て

嚊、いま戻つたぞよ。

　ト内へ入る。奥より、おつや、出て來り

つや　オヽ、こちの人、戻らしやんしたか……病み揚句と云ひ、あんまり戻りが遅いゆゑ、少しは好いと云はしやんしても、また途中で悪うなりはせぬかと、大抵や大方、案じた事ぢやござんせぬわいな。

甚五　コレ、嚊喜んでくれ……達者になつたわいの。

つや　イエ／＼、達者になつたとて、まだ顔の色も常ならず、輕率に出歩いては悪い程に、藥を服んで寝やしやんせ……藥と云へば、最前のお醫者様が、まだ奥に來て居やしやんす程に、ちよつと見てもらひなさんせ。

甚五　アヽコレ嚊、もう見て……癒つたわいの。

つや　モシ、こちの人、この中からのぶら／＼病ひ、急に病氣が癒つたと云はしやんすか、わたしや合點がゆかぬわいな。

甚五　ほんに斯うばかりでは……マア、一通り聞いてくりやれ。

　ト合ひ方。

去年の秋、仲間の者に連れられて、吉原へ見物に行た時、フツと見染めた小車太夫、それからは寝ても覺めても忘られず、あんまり思ひに堪えかね、われには内證で、小車太夫の姿を京人形に彫り上げたれば、それでモウ太夫を身請けした氣になつて、わしが病氣もさつぱりとした。もう心配には及ばぬわいの。

つや　そんならこちの人が見染めた花魁の通り、人形を彫り上げたゆゑ、病氣も癒つたと云はしやんすか。それ聞いて、わたしも安心しましたわいな……この花は何にし

明治六年六月中村座上演

八世岩井半四郎の京人形　中村芝翫の甚五郎

やんす。
甚五　ハテ、人形ぢやに依つて、金やつて喜ばすにも及ばぬ。それで、生きた花、買つて來たのぢや。
つや　ほんに好い花を買つて來やしやんしたな。定めて人形の花魁さんが、喜ぶ事でござんせうな……ソシ、こちの人、その花魁さんを、わたしにも見せて下さんせぬかいな。
甚五　オヽ、わが身にも見せう程に、必らず悋氣する事はならぬぞや。
つや　なんのわたしが、悋氣してよいものかいな。
　トこれにて、甚五郎、上手へ行く。
甚五　コレ／＼太夫、おれが嚊が、そもじに逢ひたいと云ふ。どうぞ逢うてやつてたもや。
　ト上手の細工場を開く、爰に大きなる京人形と記せし箱を前へ引出す。甚五郎、この蓋を取る。京人形、好みの拵らへにて立ち身。おつや、こなしあつて
つや　オヽ、あれをお前が彫つたのでござんすか。わしは又、生きて居るかと思ひましたわいな。ほんにマア、女子さへ惚れ／＼するものを、お前の惚らはしやんしたも無理ではござんせぬ。一體、初手からわたしに明かして下さんしたら、仕樣もやうもあつたもの。なぜ其やうに隔てがましい事をして下さんすぞいな。
甚五　イヤモウ、何を云うても後の祭り。併し嚊や、おれもえらい者になつた。斯うして傾城に打込んで、揚句の果に身請けして、箱入れの妾にするとは、大盡の天井拔けぢや。なれども、本妻はわが身ぢや程に、惡う思やんなよ……ハヽヽヽ。
つや　半年振りのその笑ひ顏。ほんにめでたい／＼。こんな嬉しい事はござんせぬ。
甚五　イヤ、そのめでた次手に、一合買つてくれんかえ。
つや　ほんにさうぢや。買はいでも、奧の客に出してある酒肴を、取分けて來るわいなア。
甚五　奧の客とは、なんぢやい。
つや　イエナア、娘に盃を取つて、お前に樂をさせうと思うて。
甚五　イヤ又、賢い事を思ひ付いたな。イヤモウ、めでたい時には、めでたい事が、ヒヨコ／＼と湧いて出るものぢやな。
つや　マア、なんにしても、明日から仕事にかゝると云にしやんすりや、今日一日の宿入りぢや、心よう太夫どの

と杯事して楽しんだがよいわいなア。

甚五　エヽ、粋な奴ぢや。カウト、揚屋で云へば、わが身は仲居ぢやな……コレ、仲居の嬶や、酒を早う持つて來んかいやい。

つや　アイ〱。

　トこなしあつて入る。

甚五　ハヽヽヽ。イヤ、なか〱味をやり居るわえ。

　ト知らせに付き、人形箱を殘し、正面の障子を引抜く。向う雪の積りし隅田川の遠見。瑠璃燈を繰り下ろし、道具とまると、直ぐに唄になる。

〽身を捨つる、里あればとて浮む瀬の、あるを頼みの憂き勤め。

ヨウ〱、えらいと申します。

　トこの時、おつや、酒肴、燗徳利を持ち出て

つや　サア〱、お大盡様、お燗がちと通り過ぎたも知れませぬぞえ。

甚五　イヤ〱、おりや通り者だから、通つた方がよからうわえ。

つや　オホヽヽ、今日は取分けお隣に、唄や浄瑠璃をお好みのお客様がお出でゆゑ、丁度幸ひ。

甚五　イヤ〱、ありや、この大盡が呼んだのぢや。耳の端で聞かうより、矢ツ張り隣座敷で唄はせて置きやれ。

つや　ほんに、さう申し付けませうわいな。わたしが爰に居てはお邪魔。お次へ行て、扣へて居りませう。

甚五　オヽ、それがよい〱……コレ〱、酒が切れたら、ま一合買つてくれよ。

つや　アイ〱〱。

〽わたり比べて名を流す。

　トおつや、入る。

甚五　サア太夫、これから二人、しつぽり酒ぢや。

〽夜毎に替るまだ〱の、誠と嘘を問ひかけられて、暫し眺める顏世花。

　ト此うち、甚五郎、酒を一口呑んで、人形に差寄つて、腹這ひになり人形の顏を見上げ、勝手惡きゆゑ、また上手へ廻り、横になり、いろ〱あつて、正面を向き腕組みをする。これをキッカケに下手の張り物を打返す。爰に常磐津連中居並び

常〽草に隱くの辟あれば、木にも直さま心の操、まして五體の備はれば。

唄〽迷ふまいもの二世かけて、登り詰めては命さへ。

ト此うち、人形よろしく箱の外へ歩み出る。

オヽ、この人形を誰れが出した……ハ、ア、解つた。さては嬶めが、おれを喜ばさうと思うてぢやな……コレコレ、てんがうすな。手垢が附くわえ。

常〽あらぬ限りと身を盡し、魂ひ籠めて名作の、不思議や人形生けるが如く。

トよろしく、京人形、スル／＼と前へ出る。

ヤア／＼／＼。この人形は……ほんまに歩くワ……。

常〽心ならずも立寄つて。

トつか／＼と側へ立寄り、京人形が顔を彈き見て

矢ツ張り木に違ひない。さつても不思議、こりやどうぢや。

常〽呆れて暫し詞なし。

トよろしくこなし、京人形、甚五郎の通りに仕方する。

ハ、ア、どうぞ太夫に生寫しにせうと、一心籠めて彫り上げたれば、魂ひ入つて動らくか。

常〽訝かしさよと立ちつ居つ佛の。

唄〽替らで年は百歳に、なるとも朽ちぬ作り花。

ト甚五郎の振りの通り動く。

ハ、ア、讀めた。おれが魂ひを籠めて造つたゆゑ、形は女でも、心は甚五郎。こりや、ひよんな事をしたなア……オヽ、よい事がある。この鏡は太夫の持ち料。鏡は女の魂ひとやら。さうぢや／＼。

常〽と差入るれば、姿心もうつろひて、松の位のしなし振り。

唄〽歩み廓の八文字、月のさす夜は窓の戸明けて、容をまつ葉の疊み算。

ト京人形、女の振りになる。

そりやこそ／＼。ほんまの太夫になり濟ました。太夫の魂ひ入つたれば、おれが迷ひの一通り……コレ、忘れもやらぬ。

常〽紋日に雪の仲の町、入り來る太夫のその中に、一際目立つ褄姿、ふつと見惚れてうつとりと。

唄〽蛻の蟬の果敢なくも、風に吹き飛ぶ物思ひ。

常〽歩みを運ぶ形ふりを。

唄〽現に拾ふ延べ鏡、肌身に添へて抱き〆めて。

トこの文句のうち、京人形の懐より鏡を出すと、また男の振りになる。

常〽其方の鏡と大切に、抱けば抱き又元の、姿ばかりが

女なら、同じ手振りで試さんと。

唄〽ちよぼ／＼ちよぼ／＼ちよぼさんの、なん／＼なりは、むつくりしやつくり椋鳥ぢや。

常〽聲は。

唄〽うぐひす。

常〽しをらしや。

唄〽眉目がよござれば、聲も詞もならこれさ、したやりやる。

常〽おつとこれぢやと心付き、入るれば忽ち手弱女に。

ト甚五郎、これにて心付き、また懐へ鏡を入れる。

常〽思ひ焦るゝ胸の内、推量してと人形に、よれつ纏れつ抱き付き、離れ難なき風情なり。

トよろしく、京人形に抱き付く。この時、奥パタパタになり、おつや走り出で

つや　コレこちの人……モシ、甚五郎どの。

甚五　エヽ、悔りした。わりや悋氣するな。

つや　イヽエイナア、それ所ではござんせぬ。あの醫者の道順めが、娘のお澤を姫君と知つてナ。

甚五　ナニ、娘のお澤を姫君とは。

つや　サア、お前とわたしが御恩になつた、兼冬公の御息女、千鳥の前さまぢやわいなア。

甚五　アノお主樣の姫君。ヤア／＼／＼。

つや　お前が病氣ゆゑ、養女に貰うたとばかり、今日まで隱して居たわいなア。

甚五　エヽ、そんなら早く、おれに云へばよいになア。

トこの時、道順、片肌脱ぎ、出かゝり居て

道順　オヽ、吠え面かいても、もう叶はぬ。村雲王子より草を分つて、お尋ねの千鳥の前。首にして渡すか。但しは術より差上げるか。返答ぶて。ドヽどうぢや。

甚五　オツト、皆まで云にんすな。病氣と云つたも、實は嘘、姫を捕へて褒美を貰ふ爲ばかり。

つや　エヽ、すりや大恩あるお主樣を

甚五　エヽ、この拙者、風の好い方へ付くわえ。

道順　オヽ、流石は甚五郎、出かす／＼。併し年端のゆかぬ千鳥の前が、節くれ立つた王子樣の、とても心に從ふまい。都まで連れ行かうより、首にして脊負つて行けば先づ第一道中の失費がかゝらぬ道理。

甚五　首にして渡します。

道順　そんなら、おれは立歸つて、一杯やつて待つて居る。必らずぬかるな。

甚五　承知々々。
道順　ソレ。
　ト橋がゝりへ入る。
つや　コレイナア、お前は氣でも違つたかいな。
甚五　エ、、退け〳〵。
常〳〵奥へ行くよと見て悔り、留むる女房を突き退け蹴退け、側なる人形惜氣なく、鋸おつとり滅多挽き。
　ト此うち、甚五郎、ちよつと立廻り、道具箱より鋸を出し、横になつて居る京人形へ足をかけ、首を挽く、おつや、合點のゆかぬこなし。トド引ッかけにして才槌にてポンと打つ。これにて首、轉げ落ちるを取つて袖にて鋸屑を拂ひ、ヂッと見詰め、ホロリとする。おつや、こなし、甚五郎、涙を拂ひ
嗅、その血を掃き集めて、五種香の代りにでもしてくれい。
　トこの時、橋がゝりより、道順、目を拭き〳〵出て
道順　甚五郎々々々、われが討つと云つたが、どうも覺束ないから又來た。
甚五　丁度好い。今挽立ての……イヤサ、切立てのホヤホヤぢや。
つや　三代相恩のお主の姫君を、情ない事をして下さんしたなア。
甚五　エ、、金にさへなりやア構ふものかい。
　ト件の切り首を渡す。道順、袱紗を出し、包みながら
道順　オ、、出かした〳〵。疑ひもなき千鳥の前の首、受取つた。褒美は後より下さるゝぞ。
　トこの時、後へ、照平、出かゝり
照平　お主の天罰、思ひ知つたか。
　ト、甚五郎の右の腕へ切り付ける。これにて、アッと苦しむ。おつや、照平を留める。
道順　さてこそ姫にゆかりの照平。
甚五　コレ、こなたは構はず、この首を。
道順　合點だ。
　ト曲撥になり、一散に向うへ入る。照平、おつやを振り拂ひ、また甚五郎に打つてかゝるを、ちよつと見得よく留めて
甚五　コレ待つた、早まるまい。
照平　この期に及んで、ナニ猶豫。
甚五　サア、さう思し召すはお道理なれど、今打つたるは人形の首。

照平　何がなんと。
　トこの時、上手の暖簾口より、お辨、お澤の手を引き、
〇ツカ／＼と出て
べん　斯うした事を氣取つたゆゑ、わたしの葛籠へ押込ま
　せましたゆゑ、御身に恙はござりませぬ。
照平　ナニサマ、御無事で。
千鳥　主從爰に落合ふも、盡きせぬ奇縁。
つや　兎角う云ふうち道順が、引返して來るは必定。
照平　さはさりながら狼狽へて、利腕を切つたれば。
甚五　ナニこれしき、細工場の怪我と思へば、なんでもな
　い事。われも共々お供申して。
つや　とは云へ此まゝ。
甚五　早く／＼。
常〽背立つ夫に心を殘し、知る邊便りて。
　ト四人支度して、早足に向うへ入る。甚五郎、手拭に
　て右の腕を括る。
〽出で行く、折から以前の間者ども、どや／＼と追つ
　取り卷き。
　トこの淨瑠璃にドン／＼を被せ、奥より、鈴成、捨六、
　平内、千平、万平、大藏出て來り

鈴成　さてこそ／＼、斯うした事もあらうかと、姿をやつ
　し入込んだ我れ／＼。
捨六　神主、八百屋、魚賣り、思ひ／＼に出立つて
平内　釋仲人の喰はせ者、云ひ合せて來たからは
千平　あの道順は、人形の身替りで濟まさうが
万平　此方に喰はぬ料理の献立。
大藏　サア、甚五郎親方でも師匠でも、もう斯うなつた容
　赦はねえ。姫の行く先。
六人　吐かしてしまへ。
〽と勢ひかゝれば甚五郎、かんら／＼と。
甚五　ム、、ハ、、、。
〽打笑ひ。
性根の知れた鋸屑ども、左の腕の働らきを、試すに丁度
　よい相手。一度にかゝつて、來い／＼／＼。
大藏　何を小癪な……ソレ。
五人　合點だ。
〽手斧初めは好い吉日よ、しかもその夜に嫁取つて、女
　の顏を三つ目錐、心墨壺曲尺付けさせて、水も洩らさぬ
　濡鉋、氣まゝ鑿ではないかいな。
　トよろしく所作ゞテ模樣になる。甚五郎、道具箱より、

いろ〳〵の道具を出して、六人を相手に左手の立廻り、よろしくあつて

甚五　ハツ、これわいしよ。

トこれにて一度に返す。見得。　　よろしく幕

京人形左彫（終り）

杜若七重の染衣

――半四郎七變化

「變化物」が舞踊史上特筆すべきものである事は云ふを俟たない。一人の俳優が容形の成べく違つた人物や動物に扮裝して踊り分けるといふ趣向で、それが五つの場合は五變化、それが七變化となり遂には十二支十二ケ月とまでなつた。その初めは正德元年十一月森田座で榊山助五郎の踊つた「紅梅百夜車」だといふ說もあるが不明である。水木辰之助あたりも既に手がけてゐたらしい。寶曆頃からは中村富十郎、中村粂太郎が追々と出し始め、女形の出し物として重要なものとなつてゐたが、文化文政度には俄然變化物が大流行を來し、名ある俳優は競つて踊りつくしたもので、幕末までその餘波は續いたものである。爰へ出したのは寛政四年四月、河原崎座で四世岩井半四郎の踊つた七變化で、先づは古い方である。七種の中で「手習子」だけは今日まで曲が傳はり、踊としても盛んに流行つてゐる。作詞は增山金八で、地はいづれも長唄、松永忠五郎、杵屋正次郎、西川新十郎の連中で、振附は西川扇藏であつた。變化物の拵らへのツナヤザ、誰れしも注目する所であるが、この脚本で先づ見當がつく。隨分踊と踊の間は下らないものである。

杜若七重の染衣（半四郎七變化）

細川勝元館の場

役名…七星の鏡の化身（小町、手習ひ子、座頭、汐汲の松風、浦島、おぼこ八形、石橋の獅子）熊川太郎友時。岩倉源吾雲鶴。犬上權藤虎岩。

長唄囃子連中

本舞臺、一面に誂らへの築塀。すべて細川勝元館のかゝり、爰に源吾、權藤、好みの通り四天の形。忍びの侍ひ六人、黒具の形にて、左右に引ッ張りよく、この見得、時の太鼓にて幕明く。

上三　源吾さま。

下三　權藤さま。

源吾　やかましい。かねて、斯波の重寶七星の鏡を、當館の主細川勝元、不思議に手に入れ、武將足利義政公へ差上げ、斯波家を取立てんとする勝元が計らひ、奇ッ怪なりと

權藤　主人、山名持豐入道宗全公、その七星の鏡を密かに奪ひとり、直さま當今の叡覽に供へ、勝元が威勢の鼻をひしがん爲、主人宗全公の仰せを受け

源吾　岩倉源吾雲鶴。

權藤　犬上權藤虎岩。

源吾　我れ〳〵に、大切の役目を仰せ付けられた。これより汝等を引連れて、この館へ忍び込み、腰元が秘め置く七星の鏡を、引ッ浚はにやならぬ。

權藤　妨げひろぐ奴ばらあらば、片ッ端からぶつた切れ。者どもぬかるな。

六人　心得てござる。

源吾　然らば、片時も早く、寶藏へ忍び込み、七星の鏡を奪ひとらん、權藤、合點か。

權藤　源吾、ぬかり召さるな。イザ、この塀を乘り越えん。

源吾　皆、續け。

六人　ハア、。

ト源吾、權藤、皆々、この塀を乘り越えんと立ちかゝる。大ドロ〳〵にて、皆々、眼くるめき、下座の方へ

逃げて入ると、またドロ〳〵のキッカケにて、この塀を引いて取ると、眞中に結構なる御簾屋體。うしろ二段に長唄囃子連中、居並び、鳴り物にかゝり、程よくキッカケにて唄になる。

〽玉垂れの内やゆかしき七重八重、けふ九重の納櫻。

ト この文句にて簾上がる。小町、十二單衣の形にて出る。所作。

〽小町櫻の花の色、紅の裙たをやかに、大内ぞゆかしける、雲井櫻の袖の香に、かざしまばゆき檜扇や、かをりもそよと春風の、うつりにけりないたづらも、鸚鵡がへしの文車、通ひ車の三つ扇、思ひのますわいな、その約束は簡井筒、井筒にかけしまれ人を、こがれ消の濱びさし、眞砂の數や和歌の道、三十一文字や慕ふらん。

ト よろしく振りあつて、よきキッカケに、源吾、切つてかゝる。立廻りにて小町、上の方にある野立ちのふん廻しにて消える。ドロ〳〵になり、源吾、心得ぬ思ひ入れにて、一散に下座へ入る。所作の合ひ方になり唄になる。

〽今を盛りの花の山、來ても三吉野花の蔭、飽かぬ眺めの可愛らし。

ト この文句にて稽古、娘振り袖にて草紙を持ち、手習ひ子の形にて花道より出で、よろしく所作になる。

〽遲櫻、まだ莟なり花娘、寺子戻りの道草に、てんと見事な色櫻、雛草結ぶ島田わげ、はしたないやら戀ぢややら、肩縫ひあげのしどけなく、紙撚くいきる縁結び、ほどけかゝりし繻子の帶、振りの袂のこぼれ梅、花の笑顏のいとしらし、二つ文字から書き初めて、悋氣恥かし角文字の、直ぐな心の一筋に、お師匠さんの仰しやつたを、ほんに忘れはせぬけれど、ぷつつり悋氣せまいぞと、嗜なんで見ても情なや、まだ娘氣の後や先、あづまへもなきあどなさは、粹なとり形目に立つ娘、娘々と澤山さうに、云うておくれな手習ひ覺え、琴や三味線踊りの稽古。

〽云はず語らす我が心、亂れし髮のみだるゝも、つれないはたゞ移り氣な、どうでも男は惡性もの、櫻々と唄はれて、云うて袂のわけ二つ、勤めさへたゞうか〳〵と、どうでも女子は惡性もの、東育ちは蓮葉なものぢやえ、戀のいろはにほの字を書いて、それで浮名のちりぬるを、わがよたれぞつねならぬ、心おくやまけふこえて、逢ふたゆめみしうれしさに、飲めども酒にゑひもせず、京ぞ

戀路の誓書なり〳〵夫の爲とて天神樣へ願かけて、梅を斷ちますめいはく、サア我れ一代斷ちますめいはく、梅を斷ちますめいはく、サア我れ一代、實ほんにさうぢやいな、品もよや。諸鳥の囀り、梢々の枝にうつりて、風に翼のひら〳〵〳〵、梅と椿の花笠着せて、梅と椿の花笠着せて、眺め書きせぬ春景色。

　ト振りよろしくあつて、納まる。トよきキツカケに權藤、出て、これを見て悧りし立ちかゝる。ドロ〳〵にて、これに惱まされ、倒れるうち、手習ひ子、ぶん廻しにて消える。奥より源吾、出て來て、權藤を見て

源吾　こりやどうだ。爰に寐てゐるは、權藤ぢやないか。大切な役目も仕負せぬうち、酒でも喰つたのか。コレコレ、權藤〳〵々々。

　ト呼び起す。權藤、心付いて、起き上がり

權藤　源吾どのか。この權藤を無性に呼ばつしやるのは。

源吾　外でもない。大切な御用を蒙りながら、こなたはふん反り返つて、爰に悠々となぜ寐ておゐやる。

權藤　されぱでござる。たんでも、寶藏へ忍び込まうとした所に、こましやくれた振り袖の、あまツ子めが出て、邪魔をするから、ぶツちめべいと思ひの外、投げられたか、抛られたか、ウンと云ふと、それから先は覺えませぬて。

源吾　この岩倉源吾も、寶藏へ立ちかゝると等しく、怪しい女めが出て、邪魔をしたが、なんでも此奴は稀有な事だわえ。

權藤　勝元がこの館は、化物屋敷に極まつた。そりやさうと、いま、化性めに投げられた所爲か、兩方の肩が張つて、腕が自由に使はれない。斯う肩が張つて、腕が使はれない樣ぢや、大切な御用を蒙つても

源吾　それぢや、覺束ない。その腕の直る仕樣はあるめえか。

權藤　こんな時、一揉み揉んでもらふと、肩の張りも、腕の痛みも、ツイ直るものだが、源吾、モシ。

源吾　斯う云ふ所へ、よい按摩が

兩人　欲しいものだがなア。

　トドロ〳〵にて唄になり、花道の中程へ頭巾、袴、座頭の形にてセリ上がる。直ぐに所作になる。

〽誰が袖を、引かばむつじよ、可愛らしやの、締めて寐た夜は、三筋がいとし〳〵、おらがやうなむくつけは、仇にや思うたらてんと樣。

座頭　てんと、罰が當つた。
〽君ゆゑすとんと撚つた、おらゝもぬかりておはまり申したよな、色にや目のないざつとの坊〳〵、探り〳〵探り廻つて行き當つて、後へひよつくり、ひよ〳〵ひよつくり〳〵、ひよつと忍ぶ夜は辛い、杖を便りに來りける。
ト本舞臺へ來て、權藤が按摩を取つてやる事云ひ合ひの通り、捨ぜりふよろしくあつて、また所作になる。
〽なにわりさんが、彈く手わかれてどつこで彈くやら、さつてもよう彈くきよく撥、打ち撥、刎ね撥、ぽへんとぽへんと〳〵〳〵と鳴らせば、どへんと響く〳〵、さつても上手に彈く撥、或る時は町家お屋敷三味彈き鳴らして、月待ち日待ちには彈いて語れば、我れながら我が身ながら面白や、東金のもんじり茂右衛門がさ。
座頭　サア、きた〳〵せい。
〽嫁を三人持つたがなよえ、三人目のなア中の嫁がサ、おれに三味彈けとはなる日へ、罪も滅する業なれば、この世は我れも聞くとも、來世は闇ら春の日の、花もろともに往が頭げせ、見たいものぢや〳〵、しんぞざつとした〳〵、ア、浮かれざつとの坊、面白や。

ト唄切れる。トヾ兩人、曲者めと切つてかゝる。立廻りにて權藤、倒れて、下座へ入る。座頭、ぶん廻しにて消える。
源吾　どう盲目め、觀念。
ト切りかける。何もなきゆゑ、恟りして
こりやどうだ。今の座頭めも、姿を見失つたか。殘念なイデ寶藏へ。
ト行かうとする思ひ入れ。かすめたるドロ〳〵にて、日覆より七曜の星、現はれる。これをキツカケに花道より熊川太郎文時、荒事の拵らへ、大小、衣裳、上下、高股立ちにて出て來り、この星を見て、キツと思ひ入れ。源吾も見上げて思ひ入れ、小太鼓の樂になる。
太郎　アヽラ怪しやな。いま、熊川太郎文時が、寶藏の宿直せんと、これへ來かゝるお庭先、天地の動搖、心得ずと、見上ぐる空に星のたんだく、かくやくとして見えれるは、心得ぬ。
源吾　それ、正に北斗星の氣、七曜つらなる分野の有樣、六つの數は陽數にて、陽氣至からねば、我れ〳〵が身の上なるか。
太郎　北斗星の一曜を樞と云ふ、これ天なり。

源吾　二星を璇と云ふ、これ地なり。
太郎　三曜を璣と云ふ、これ人なり、
源吾　權、玉衡、は時と音。
太郎　開陽搖光は、律と星。七曜全くつらなると雖も、第三の璣星、光を失ふは、人來り、君を害するの前表あり。
源吾　我れ／＼この館へ忍び入り、鏡を奪ひとり、勝元を討たんと計る、その殺氣、星の分野に現はれしか。
太郎　吉事か。
源吾　凶事か。
太郎　何にもせよ。
兩人　怪しき星の、有樣ぢやなア。
トどろ／＼にて星、消える、矢張り小太鼓の音にて太郎、本舞臺へ來り、互ひに空を見上げながら、入れ違ひ、顏を見合せて、ギヨッと思ひ入れ。
太郎　待て。
源吾　ヘイ、拙者が事でござりまするかな。
太郎　如何にも。見れば、常ならぬ形かたちと云ひ、怪しい出で立ち、心得ぬ。其方は、先づ何者だ。
源吾　ヘイ、拙者は。
太郎　イヤサ、何者だ。
源吾　サア、拙者めは、なんでござりまする。ナニ、アノ、オ、それ／＼、今日、若殿樣へ召されましたる輕業師、ヘイ、田樂法師に附いて參つた、俳優の者でござりまする。
太郎　ムウ、今日召された、田樂法師に附いて參りし輕業師とな。
源吾　左樣でござりまする。
太郎　けいせうの業をなす者か。既に田樂は、堀川の院の御宇に始まり、北條高時、田樂法師を好んで愛してぞ、亂國の端なりと、古き文に記しあり、前兆よからぬ其方らが身の上、武家の近付くべき者でない。御用濟まば、下がれ／＼。
源吾　イヤ、モシ、お侍ひ樣、餘り其やうに、安く云はつしやりますな。田樂法師も、古へは大いに行はれ、その形は、今も殘つて、木の目田樂の串數も、祇園豆腐の二本差しさま。武家に近付くものぢやねえと仰しやるが、けいせう早業は、柔術、劍術にも、あんまり負けるものぢやござりませぬぞ。
太郎　イヤ、小癪な事を云ふ輕業師め。けいせう、早業は、

臆病の看板、國に敵たふ叛逆人か、まつた怪しい曲者と見る時は、武勇を以て縛しめる、まさかの時のけいせう、早業。そんな手緩い事が、埓のあくものぢやねえワ。

源吾　怪しい曲者と見る時は、武勇を以て縛しめると云はつしやる、その武勇と云ふは。

太郎　わりや、武勇と云ふものを、見たいか。

源吾　拜見が致したい。

太郎　見たいと云へば、まツこの通り。

ト手水鉢を持つて、打つてかゝる。掻い潜つて源吾、拔き合はせ、立廻りのうち、源吾、何か一卷を落とす。

太郎　その一軸は。

ト取りにかゝるを、突きのけ、立廻り

源吾　おさふ、さらばだ。

ト源吾、ツイと奥へ入る。

太郎　何にもせよ、怪しき曲者、引ツ捕へて、ソレ。

ト一散に追ひかけて入ると、鳴り物になり、キッカケにて、花道、本舞臺附け際まで波板を押し出す。舞臺先きも波の打ちかけたる景色になる。上の方の見付け柱、振り出しにて、松の枝、一面に出る。柱は松の幹になる。この見得の道具になると、唄になる。風折り烏帽子、水干を着たる形の汐汲み、桶をかたげ、松風の見得にて、花道より出て、所作になる。

〽須磨明石、詠めな爰に寫し繪の、汐汲み車寄るべなき、身は海女人の袖ともに、思ひを干さん心かな。さしくる汐を汲み分けて、裾もほらほら磯傳ひ、君が一夜の情には、妾が百歳契るらん。まして三歳の添ひぶしに、磯馴れ松風戀すてふ、浮名は磯の松一木、そりや行平さんぢやないかいな、都へ登り給ひしが、御立烏帽子、狩衣を殘し給ひし忘れ草、これを見る度にいやましの思ひ草、我れも小蔭にいざ立寄りて、磯馴れ松のなつかしや。梅の花笠、三笠山、秋の最中は石山の月、月も笠を召すならば、我れも派手な塗り笠で、打連れ來つれ、信濃よいのは姥捨田毎、一つの月に影二つ、二蓋、三蓋揃うた笠の、しやんと召したる御所笠や、暇申して歸る浪の音の、須磨の浦、けて吹くやうしろの山颪し、關路の鳥も聲々に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と見えしも今朝みれば、松風ばかりや殘るらん〳〵。

ト所作よろしく納まると、奥より太郎、出で來り、松風を見て、思ひ入れあつて

太郎　曲者。

ト立ちかゝる。この立廻りにて、松風、ぶん廻しにて消える、太郎、思ひ入れ。

ハテ、心得ぬ今宵の有様。最前の曲者と云ひ、今また怪しき女が振舞ひ、いづくともなく姿を失ひしは、化生の業に極まつた。兼ねて主人勝元。斯波家の重寶、七星の鏡を預かり置き、義政公へ差上げんと、賢慮をめぐらさるゝ折から、奸侫、邪智の山名宗全、斯の名鏡を奪ひ取らん結構ありと、兼ねての風聞、さては宗全に荷擔の奴ばら、若殿、御祝誕の御祝儀を幸ひ、いろ〳〵の姿に變じて、入込んだに違ひない。大切なる七星の御鏡、宿直の役目、ソレ。

ト一散に下座へ入る、次第の鳴り物になり、よいキツカケに唄になり、よき所にて花道より浦島、翁の面、水衣、浦島の形にて、玉手箱、びく、釣り竿を持ち、出で來たり、所作になる。

〽朝日かゞやく金門に、浪の障子や浪枕、浪のふすまのたてあけの、その乙姫に年を經て、契り重ねし花婿の、人の羨やむ浦島は、今ぞ故郷へ歸る浪、青海波濤はるばると、濱邊をさしてぞ歩み來る。手には馴れし釣り竿と彼の龍宮の玉手箱、明けて悔いたる老の浪、我が古里に吹く風も、今はなつかし山々の、木々に咲きそふ梢かをる、手折りて宿跳にと、杖を力に踏みしめて、おらが若い時やな、文や玉章付けられました、今は年よりましたで、杖突きののらく隠居々々、如何なる深山なりと年よりましても、いつかな〳〵若い者にも負けはせぬ、なんとあやかり者かいの、面白や。さるにてもこの箱を又も打明け見てましと、濱邊に据ゑてア、辛度、眞紅の紐解きて、不思議や一片の煙りとなりて立ちのぼる、不思議なりける次第なり。

ト所作、納まる。トゞ權藤、出で來たり

權藤　曲者。

トかゝる。立廻りにて、浦島、ぶん廻しにて消える。權藤、そこにある玉手箱を見付け

今の老ぼれめは、どこへかツン逃げたが、なんだか結構な箱が、爰に落してあるワ。こりや、慥かに七星の鏡に違ひあるまい、忝ない。今の親仁めが盗んでうしやアがつたのか。手も濡らさず、うまい仕事だ。片時も早く、主人宗全公の御覽に入れて、御褒美にあづかるべいか。ドリヤ。

ト玉手箱を持ち、行かうとする。後より太郎、出かゝり、この玉手箱へ手をかける。立廻りにて、しやんと見得。

太郎　こりや、おぢいどの、何をするのだ。
何をするとは、曲者め。正にその箱こそ、七星の鏡を納めし器ならん。兼ねて聞く、山名宗全、主人勝元が威を挫がんと、その神鏡を奪ひ取り、禁廷へ差上げん工みありと、とつくに聞いてのこの宿直。熊川太郎が目にかゝつては百年目、引ッ縛つて拷問する。腕を廻せ。ナナなんと。

權藤　ハ、、、、こりや、何を云ふかと思へば、むづかしい詞を吐き出したな。おらア、何も怪しい者ぢやねえ。爰に落ちてあつた結構なこの箱、かたかはせうぶの足しにもならうかと、攫つて行くのだ。熊川とやら、邪魔をせずと、そこを退きやれ。

太郎　不敵な匹夫め、やわかうぬ等に、その箱を持たせてやつて堪まるものか。尋常に置いて行け。否だと吐かすとたつた今、首と胴との生別れだが、曲者、箱を渡すまいか。

權藤　いんにや、渡す事はならない。おれが手に入つた物を、取るべいとは、猫の額にある物を、廿日鼠が狙ふやうなもので、及ばぬ事だ。よせ、野郎め、二才め、退きやアがれ。

太郎　渡せ。

權藤　退け。

太郎　渡せ。

トちよつと立廻り

兩人　どつこい。

トこれより兩人、鳴り物をかり、この玉手箱を棚に立廻り、存分あつて、トゞ、眞中にて兩人、箱に手をかけ、この蓋をあける。大ドロ〳〵にて箱の内より、仕掛にて、白氣現はれ、虚空へ上がる。これにて兩人、目くろめき、苦しみ、下座へ倒れて入る。此うち道具立て、元の通りになる。白氣立ちのぼるとキツカケにて、上より京人形と書きたる白木の箱をセリ下げ、舞臺へ落ち付くと、キツカケにて、前側の蓋を仕掛にて引き上げる。此うちに結構に仕立てたるからくり臺、これに、おぼこ人形、持ち遊びの獅子を持ち、この見得にて前へ押し出す。ト唄になり、人形箱は疊んで取る。鳴り物にかゝり、所作になる。馬具の所作、

存分にあるべし。

〽百千鳥囀る春はもの事に、改まりゆく日の數の、頃は彌生の雛まつり、おぼこ人形、一飾、にこ／＼と笑ひ顔見渡せば桃と柳の花錦、普賢櫻、獅子がしら、撫でつさすりつ頑是なく、見かへる姿皆の、猛き心の優しくも、花に戯むれ狂ふらん。數の手遊び車でん／＼太鼓、爰までござれ、花見に行かうぞ、花の蔭で隱れんぼ、ころりや／＼やつころりんと、ぬめらしやんすはおうやれおうやれ、さつてもの／＼惡さ遊ひのいたづらや。男獅子、女獅子のさても優しや、てんと出づかひは、花に小蝶を目がけ頭を振りて、さながらに狂ふ姿のしほらし可愛、飛び上がりてはひらりくるり、ひらり／＼しやんと乘つたる獅子の駒、天晴れ手綱の見事さよ、笛や太鼓にのせて／＼、吉野、初瀬の花紅葉、櫻かざして歸りけり。

トとゞ所作、納まる。源吾、權藤、出て、切つてかゝる。立廻りにておぼこ人形、ぶん廻しにて消える。兩人、思ひ入れして

源吾　權藤か。

權藤　源吾どの。

源吾　今の餓鬼めを、お見やつたか。乳くさい形に似合はぬ、我れ／＼を惱ませたは、怪しい奴に極まつた。

權藤　さればサ、なんでも寶藏へ忍び込み、七星の鏡を引ツたくらうとすると、いろ／＼な、けうけれつな奴が出て、邪魔をするが、どうも合點のゆかぬ儀でござるて。

源吾　化性の奴が支へるのか、但し七星の鏡の精が現はれ出て、我れ／＼を妨げるか、何にせよ、この上は無二無三に寶藏へ込み入り、宗全公のお望みなさる、七星の鏡を奪ひとる手段、合點か。

權藤　如何にも心得てござる。兼ねて用意の者ども、來いエ、。

トどん／＼になり、奥より幕明きの忍びの侍ひ六人、牡丹を付けたる四天に衣裳を着替へて、出で來る。

源吾　者ども、參つたか。これより寶藏へ込み入らん。邪魔する奴は、片ッ端からぶつた切れ、合點か。

忍一　心得てござる。仰せに從ひ、我れ／＼これに罷りあり

忍二　妨げひろぐ奴あらば、太刀の刃金の續くだけ

忍三　幾人あつても皆殺し、彼の七星の鏡ばかりか
忍四　轉元が生けッ首も、お取りなさるが上分別。
忍五　何かにつけて宗全公の、邪魔になる奴、
忍六　片ッ端、おッ殺すが、ようござりまする。
權藤　出かした／＼。何にもせよ、目ざす所は七星の鏡た
　源吾どの。
源吾　權藤、お來やれ。
兩人　皆、参れ。
六人　ハア、
　ト源吾、權藤、先に六人、皆々、花道へかゝる。石橋の鳴り物になり、花道より獅子、獅子頭、壺折り衣裳にて、左右に牡丹の枝を持ち、出て來る。押し戻し、所作になる。道具、すべて石橋の道具立てになる

へ清涼山を見渡せば、雲よりかゝる瀧の絲、巖峨々たる巖ほや、縦へば夕陽の雨の後に、虹を放せるその風情また弓を引く形にて、幾代苔蒸す石橋の、面は尺に足らずして、下は泥梨も白浪の、音は嵐に響くらん。今を時とや咲き満ちて、富貴の色を深見草、花を目がけて舞ひ遊ぶ、蝶の翼のひらめけば、戯むれ遊ぶその風情、おのが友呼ぶ獅子の曲、暫らく待たせ給へや、影向の時節も、今いく程によも過ぎじ、獅子とらでんの舞樂のみぎん、牡丹の花ぶさ匂ひみちみち、大巾裏金の獅子頭、打てや囃せや牡丹ぼう／＼、黄巾の蕊顯はれて、花に戯むれ、枝に伏しまろび、實にも上なき獅子王の勢ひ、靡かぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞ひ納め／＼、獅子の座にこそ直りけれ。

　ト狂ひのうち、源吾、權藤を相手に、立廻りよろしくあつて、トヾ獅子の精、眞中の岩臺の上にシヤンと見得。源吾、權藤は左右に引ッ張りよろしく、牡丹の衣裳六人の捕り手は、前へ竿に並ぶ、奥より太郎、以前の形にて出て、上の方へ立ちかゝり
太郎　七星の鏡の神靈、有り難やなア。
權藤　ぶッちめろ。
六人　どつこい。
　ト皆々、キッと見得になる。
獅子　行く末長く守るべし。
　ト唐樂になり、虚空より花降つて來る。獅子の精いづれも引ッ張りよろしく、この見得にて、頭取、上下にて出で

頭取　日も晩景に及びますれば、先づ今日はこれぎり。

打ち出し。

幕

杜若七重の染衣（終り）

夜咄しの古きをもつて
又新らしき怪談の百物語

來宵蜘蛛線 ——蜘蛛の糸

土蜘蛛は前太平記を世界にした顔見世狂言には殆んど附き物であつた。随つてその折の淨瑠璃には蜘蛛の怪の現はれ事が随分多い。明和二年の「蜘蛛絲梓弦」の常磐津は今日でも傳存してゐるが、これが先づ蜘蛛の淨瑠璃のはじめで、その後富本にも淸元にも長唄にも殘つてゐるのは、いづれも顔見世の餘波である。天保八年に出來た常磐津の「來宵蜘蛛線」はその中でも評判がよくて、その後多くはこれを範に取る事となつた。爰へ收錄したのは元治元年十月、守田座で上演したもので、三世櫻田治助が更に手を加へて複雜なものに仕上げたのである。これは臺本で、實演の際は更に訂正されたらしい。廓を御所にしたといふ好みが如何にも治助式である。常磐津は文中と文字兵衛、岸澤は三登勢太夫と式佐、これは常磐津と岸澤が喧嘩をなして兩派に別れた時代なのである。役割は、座頭、駒之丞、季武（中村芝翫）賴光、豆腐御用（澤村訥升）公時、父平（市川九藏）鈍八（市川小文次）綱手（中村歌女之丞）呉竹（尾上梅幸）荒井（坂東玉三郎）紀之助、薄雲（三世澤村田之助）等であつた。

來宵蜘蛛線（蜘蛛の糸）

九條の里新御所の場

役名　渡邊娘、網手。卜部妹、吳竹。碓氷妹、荒井。坂田の金時。卜部季武。座頭駒市實ハ變化。吃り又平實ハ變化。太皷持ち鈍八實ハ變化。若衆紀之助實ハ變化。若衆駒之丞實ハ變化。御用松二實ハ變化。傾城薄雲實ハ變化。源朝臣賴光。

常磐津連中
岸澤連中

本舞臺、一面、雪の道具、幕。日覆より紅白梅の吊り枝。すべて九條の廓、外構への體。爰に幸升、被布、ぱつち、きめ頭巾、雪の蛇の目傘をさし、鮑を提げ、足駄がけ、下の方に、中間、絹羽織の侍ひ、引越しの荷を擔げ、立ちかゝり居る見得。すべて三人、丸腰の體。雪おろし、通り神樂、淸搔にて幕明く。

幸升　初雪や〳〵でもねえ、エ、と……三味線の遠音に流石里の雪、とはどうでげす。

侍ひ　でもありますまい。引越して狂ひの雪に降られけり。

中間　お前なんざア、年中振られて居なさるからね。

侍ひ　馬鹿を云へ。今夜引けを打つてから、おれが連れて行つて、もてる所を見せたいやい。時に幸升先生、結構な物を提げてお出でなさるね。

幸升　貴公達に、その引越しの荷を擔がせ、おれが鮑を提げた形は、とんと古い錦繪にあるゆゑ、思ひ附いた譯よ。

中間　成る程、昔の田之助、加賀屋の芝翫、源之助時分、顏見世の二番目によくある形だね。

幸升　所で、おれは高麗屋の心意氣で出て來やした。

侍ひ　そんな鼻の低い高麗屋があるものか。

幸升　ハテ、愚僧が姓名は松鶴幸升と云ひやす。引ツ張つて云ふと、松鶴幸四郎と聞えやせう。

中間　てめえ極め何とでも云ふが、お前、剃髮して幸升と

云ふ假名になんたすつたが、矢ッ張り世間では、あの幸作の野郎々々と云ひますぜ。

幸升　そこで以て、誰れが何と云はうとも、顔見世氣取りでこの大當り、肴を料つて、松龜幸升と云ふ名披露目に、みんなを呼ばうと思つて。

侍ひ　イヤ、そいつは有り難い。わしも色を四五人連れて行きませう。

中間　ハヽヽ、多田の御所へ化け物が出ると云つて、俄かにこの九條の廓内へ、假御所をお建てなされたゆゑ、こちとらも引越しの荷を運んで居るが、矢ッ張りこんな化け物が附いて來たわえ

幸升　色を四五人連れて行くなどは、定めて狸、川獺などでありませう

侍ひ　イヤ、無駄は置いて、化け物位に弱る、頼光公ではないが、病氣と云つて殘黨餘類を、御詮議なさるに違ひない。

幸升　その證據には、四天王の面々を遠ざけ、娘子供にばかり宿直をさせ、用心堅固の多田の御所を捨て、町の内へ御所の假宅を拵らへるは、豪遊ではござらぬか。

中間　金時さまばかりは、女嫌ひで女房子がねえから、お次へソッと行つて宿直をしてござると聞いたが、女ばかりの中へ、惡くねえぢやアござりませぬか。

侍ひ　それはさうと、松龜さま、先刻お役所で書いたものを渡されたが、ありや何でござります。

幸升　ハテ、知れた事。臣下の者は、殘らず丸腰で勤めろと、何せ渡されたが、誰れがまた廓の內を、大小差す野暮もねえものだ。それに又、今に遊女屋の假宅が引ッこんでゝも來た日には、ごつたけえすから、その心得方を書いてある觸れ書だらう……ちよつと讀んで見てくりやれ。

ト渡す。侍ひ開き、淨瑠璃名題、太夫連名まで讀む。幸升、取つて、相勤めまする役人を讀み終る。

中間　モシ、幸升さん、お前の名が無いねえ。

幸升　松龜幸升左樣。

ト辭儀をする。

二人　ハヽヽ、サア、行きませう。

ト矢張り右の鳴り物にて、三人上手へ入る。鳴り物打上げ、引幕を切つて落す、

本舞臺、三間の間、中足の御殿、向う銀張り附け、竪

龍膽の紋ちらし、欄間づらに御簾を卷き下ろし、上の方、折り返しの大襖、明け立て。よき所に、誂らへの大衝立を置き、下の方、襴欄間、銀張り、同じく模樣の蹴込みの淨瑠璃臺。爰に岸澤連中居並び、直ぐに前彈きになり、道具納まる。

へ月花の、都九條の雪の日に、越して廓の色ある中へ、御大將の假宅は、娘の宿直武士の、堅氣を捨てゝ多田の御所。

ト淸搔の入りし誂らへの鳴り物になり、上手に綱手、文金島田、振り袖、矢の字結びの上へ、渡邊の紋附きたる素袍の上を引ッかけ、下に吳竹、同じ拵らへ、占部の大紋、兩人、白と紅との梅の枝を分け持つて、眞中の炬燵に黃紺碁盤縞の小袖を掛け、これを盤面にして、碁を打つて居る、荒井、碓氷の大紋、同じ拵らへ、軍配を持ち、眞中に見て居る見得よろしく、舞臺眞中へセリ上げる。これと一時に正面の御簾を卷き上げる。爰に金時、赤塗りかけ、烏帽子、金の字染めしかちんの大紋、碁盤を橫に枕にして、眠り居る見得、双方よろしく納まる。

へ梅を碁石に美しい、炬燵にかけし橫竪は、色香競ぶる振り袖の、席を隔てゝ獨り武者、赤いは酒の櫃の盤、よい木枕の高鼾。

吳竹　アレ、金時さんが、夢に魘はれておやござんせぬか。

荒井　早う起してあげなさんせ。

三人　金時どの〱。

ト これにて目を覺まし

金時　ムウ、エ、、夢か、いま〱しい。天狗の雌雄を捕まへたから、毛を引いて、煮て喰はうと思つたところ、アヽ、大事の夢を覺ましてのけた。

綱手　わたしどもゝ、どうぞ其やうな怖い夢を、見たいものでござります。

金時　オヽ〱、流石は四天王の娘ほどあつて、賴もしい賴もしい。我が君の御不例、物の化のやうに世間では云へど、なんの、そんな事怖がる親玉ではねえ。これも殘黨を詮議の爲。遊女町の中へ急に假宅の思ひ附き、その上、四天王にも出仕は叶はぬ、女ばかりとの仰せなれど、おらは女房も娘もねえから、その名代に、ソッと爰まで出張つて、宿直をするのだ。コレ、必らず大將には沙汰なし〱。

綱手　それはよう心得て居りまする。父樣方は內に居て、

あなたお一人にお番をさせます。
金時　イヤ〳〵、こりやアおらが勝手と云ふもの。イヤ、お番と云へば、おぬし達の打たうと云ふ碁盤を取上げ、枕にして、氣の利かねえ事をした。
荒井　なんのマア、ほんの並べるばかりぢやゆゑ、碁盤縞の小袖に、花の碁石で、間に合はせましたわいなア。
呉竹　何にせい、爰は九條の遊女町なりや、ナア、綱手さん。
綱手　サイナア、なんぞ伽になる、面白い者が參りさうなものでござりまする。
金時　イヽ、何でも構ふ事はねえ。外を通る奴を呼び込んで、慰んだがいゝ。おれが呼んでくれべえ……オヽイオオイ。
ト この時、薄ドロ〳〵、笛のヒシギになり
〽呼ぶは木魂か、あら訝かしや、座頭一人顯はれ出で。
ト大ドロ〳〵になり、花道に影煙硝立つて、田舎座頭の駒市、須磨琴を風呂敷に脊負ひ、杖を突き立ち、よろしくせり上げる。
〽杖を力につッつく〳〵〳〵つッつくぼう、つッつく次手に、名所古蹟い見たけれど、見えぬは笑止、諸藝も上手、ようい〳〵よい〳〵〳〵、アリヤリヤコリヤリヤ、何でもせ、石に蹴躓いて、がつくりこそつくりこ、がつくりそつくりひつこすか、探り廻つて來りける。
ト舞臺へ來る。
呉竹　アレ、金時どの、法師が參りましたわいなア。
金時　當づッ方に呼んだら、按摩か。丁度いゝ、爰へ來う來う。
駒市　ハア、お療治かな。ドレ〳〵、揉んであげますべえ。
ト包みを取りのけ、呉竹の方へ探り寄る。
呉竹　アレ、氣味の惡い。
駒市　ハア、揉むのではござんねえかな。
荒井　ハテ、療治も頼むのぢや。有やうは長の夜のお伽に、何ぞ面白い話しが聞きたい。殊に其方が持つて居やるは、何ぢやいなう。
綱手　オヽ、ほんに、そりや須磨琴ぢやないかや。
駒市　オヽ、須磨琴〳〵、よく知つてござるの。こりや久しい後に、おらが親仁が、ペロ〳〵やらかして、皆様の御機嫌を取つたものゆゑ、引ッ脊負つて歩くのでござる
金時　ハア、そんならそれが、親の形見の一本琴か。こい

つは面白かんべい。やらかせ〳〵。

駒市　おらアハア、無器用だから、ほんの眞似事をするばかり。須磨琴でなくて、こりやア眞似事よ。ハヽヽ。

三人　サヽ、所望ぢや〳〵。

〽心得たりと包みより、今は仇なれ須磨琴の、これも形見と掻き鳴らし

トよろしく構へ

〽立別れ、稻葉の山の峰に生ふる、まつとしきかば今歸りこむ、それは稻葉の遠山松の、立別れても歸りこむ。

金時　ヤンヤ〳〵。

荒井　ほんに面白い事で

三人　あつたわいなう。

金時　コレ〳〵、お坊、娘達には氣に入らうが、おらは生得山家生れ。もつと賑やかな藝を、やつてくれ〳〵。

駒市　ハヽヽ。その方が、おらも勝手だ。あんにしべえか。

綱手　其方は、どうやら奧州詞。仙臺淨瑠璃を語つて聞かしやいの。

駒市　アヽ、占い〳〵。

吳竹　人さんは聞かしやんしても、わたしは初めて。

金時　さうだ〳〵、得手ものをやつてくれ。

駒市　そんなら、三味線を貸さつしやりませ。

吳竹　サ、これにあるわいの。

駒市　ドレ、やりかけますべえ。

〽これはさて置き、爰に漢の高祖の臣、樊噲と云ふ兵一人おわしますとな思し召せ、主君の歸還を迎ひの爲、鎧兜に身を固め、鬼面の樫大どうれん、小どうれん二振りの劍、金太郎かな銀太郎かな、あたり八間タンダハア、ぴかり〳〵と光り渡るを、十文字にさすまゝに、さて鐵門に着きしかば、踏んばたがつてどさ聲あげ、主君の迎ひに樊噲が、出張つたアてば、門の開け〳〵と呼はつたり、内には官人大きにたまげ、オヤホヽヽ、でかばちねえ暴れ者、それ通すなと、扉をさへて押へれば、何かは以て堪るべき、胸張り閂ユサ〳〵〳〵、ドロドロ〳〵、メキ〳〵〳〵と押し破られ、水もたまらず官人ども、押しに打たれて眼玉サア飛び出で、首は胴へへし込んで、臍のあたりで桑原々々々々々々とぞ稱へける、彼の樊噲が力の程、勇々しかりともなか〳〵に、申すばかりはなかりけり。

綱手　でもマア、いつ聞いても面白い事でござりまする

金時　この上は、爰に木琴がある。これを打つて聞かせろ。

荒井　こりや又、一人でござんす。サア〳〵、呉竹さん、あそこへ。
呉竹　畏まりました。
ト二重より木琴を持ち出し、座頭の前へ出す。
駒市　ハ、ア、琴に三味線木琴で、丁度三曲になり申す。イヤ〳〵、こりや打つまい。
女三　そりや又なぜ。
駒市　それでも、そこに、親代々から打たつしやる人の前で、よしませう〳〵。
荒井　なんの遠慮があるものぞ。
呉竹　わたしは不器用。せめて人様の打つのでも、聞きたうござりまする
駒市　それでも、こりやア無茶苦茶に打つては、いづれも様に叱られますワ。
金時　お坊、わりや目が見えるな。
駒市　エ、、、あに、とんでもねえ。
金時　見えずば誰れにも遠慮はねえ。サア、打て。
駒市　でも、これを打つては。
呉竹　早う打つて、身抜けをしなさんせ。
駒市　サ、それは。

金時　サア。
四人　サア〳〵〳〵。
駒市　そんなら皆様、御免なされませ。
トよろしく撥を取つて
〽兼ねて手管とわしや知りながら、口説き上手につい乗せられて、騙されて咲く室の梅〳〵。
ト此うち金時、三人に目くばせする。これにて梅の枝を持ち、窺ひ寄る。
〽それで未練でまた立踊る、今度逢ふのは命がけ。
トこの節の間、一つ〳〵に枝にて打つて行きよろしく大間に立廻り。金時、此うち目釘を濕し
金時　覺悟。
ト打つてかゝる。
〽さしつたりとかい潜る、拂へば後に有明の、突きとめんにも陽炎稲妻、形は消えて。
ト駒市、仕掛けにて欄間の上へ飛び上がり、消える。
御寢所が心元ねえ。お身達は何氣なき體。
三人　心得ました。
〽股立ち取つて甲斐々々しく、奥殿さして
ト金時、一散に上手へ入る。

初演の錦繪　三世澤村田之助の薄雲

綱手　この新御殿へお引移り遊ばしたら
荒井　よもや付いて參るまいと思ひしに
又平　ヘエ、參りました。
ト衝立、仕掛けにて、前へツル／＼と出る。ぼつと石持ち、好みの拵らへ。
吳竹　オヽ、愕りしたわいな。
綱手　さうして其方は、いづくの人。
荒井　何の用事で。
又平　ハヽハイ、本所の多田の藥師の、吃りでござります る。
綱手　多田の藥師の吃り……アヽ、堂守りかや。
又平　マヽ、毎年の通り、お供物納めに。
荒井　遠路のところ大儀千萬。さうして其方の名は。
又平　マヽ、又平。
吳竹　吃りの又平と云やるかや。
綱手　下總には松戸の鄕と云ふ、色所があるさうな。話して聞かせてたも。
荒井　どうしてマア此やうに吃つて。
又平　ヒエ、唄に唄ひマますれば、ツヽつかへは致しませぬ。

吳竹　こりや面白い。其方の身の上、唄うて聞かしやいの。
又平　ハヽ恥かしい。
綱手　なんのマア、恥かしい事がある。遠い下總の話し。
三人　サヽ、早う／＼。
トこれにて又平、手拭をかぶり
〽松戸出る時や涙で出たがえ、今は松戸の風もいやよ、國ぢやごてどの夢にもさつぱり、白胡麻土産におさん女連れて、逢うて愕り肝玉ひつしやげた、ほんに山の芋は鰻にもなるが、こちの女房は江戸さへ出やり申して、小野の小町になられた。オヤ／＼魂消た、寄れは在所の話し草、面白や。
トよろしくあつて
〽御寢所目がけ入らんとするを、さてこそ曲者逃がさじと、追ひかけ追ひ詰め取圍めば、姿は消えて。
ト大ドロ／＼になり、上の襖へ田樂にて入れ替はる、これを鈍八にて、薄鬢、黒羽織、太鼓持ちの拵らへにて、扇を持ち、ちよいと出る。女形三人、持ち物を捨て
綱手　いま爰に居やつた又平と思ひしに
荒井　いつの間にやら見馴れぬ町人。

呉竹　さうして其方は、いづくの者。
鈍八　ハイ、私しは、この廓に住みます、太皷の鈍八と申
　しまする者でござりまする。
三人　それが何ゆゑ。
鈍八　これへ上がりましたは、御町内で家業を致し居りま
　するゆゑ、お客様でもござりました節は、お呼び下され
　まして、御贔屓なされて下さりませ。
荒井　ほんにマア、廓へ越して來れば、此方の御殿も揚屋
　同然。
綱手　併し、其方は都の者と云へど、詞つきなら形恰好。
呉竹　東の者で
三人　あらうがの。
鈍八　イエ〳〵、どう致しまして、づんと昔から爰に居り
　ますさかい。
綱手　そんなら、わたしの父さんが、羅生門へござんした
　事、知つて居るかや。
鈍八　あなたの御紋……オヽ、渡邊さまでござりますな。
　羅生門の御高名、それを存ぜぬ者がござりませうか。
荒井　そんなら話して
三人　聞かしやいなう。

鈍八　太皷の儀にござりますれば、ちよつと略して
三人　サヽ、早う〳〵。
　トこれより小皷をあしらひ
〽綱は印を賜りて、〽羅生門へとさしかゝる、折しも雨
風烈しく後より、兜の錣を引ツ摑み、引き戻さんとエイ
と引く、こなたも知れし強者にて、彼の曲者の諸手を取
り〽よしやれ放しやれ錣が切れる、錣切れたにやこちや
構やせぬが、たつた今結うた髱の毛が損じるわ〽七ツ過
ぎには行かねばならぬ、そこへ行かんすがこちや氣にか
かる、サア兜も錣もなつちもいらねえ、サアサ持つてけ
脊負つてけ〽たゆむ心に付け入つて、走り入らんとする
所を、三人は心得紅白の、花を亂して打ちかくれば、爰
よかしこと追ひ廻され、姿は消えて。
　ト大ドロ〳〵、三重になり、衝立へ消える。これにて
　岸澤連中の前簾を巻き下ろす。この時、上下の淨瑠璃
　臺の蹴込み田樂にて、上手に駒之丞、下撫での若衆、
　振り袖、着流し袴、蒔繪の文箱を持ち、ツル〳〵と前
　へ出る。下手の淨瑠璃の田樂より紀之助、同じ拵らへ、
　同じ文箱を持ち、ツル〳〵と一時に出る。
駒之　如何に案内申し候ふ。

綱手　それ〳〵、案内かあるではござんせぬか。
荒井　ほんに御案内と、何れから。
紀之　典薬の頭より御薬を持つて、小姓が参つたる由。
両人　御申し候へ。
綱手　それはマア御苦労様。
ト下へ行きかける。
呉竹　ア、モシ、綱手さん、御案内は、此方ぢやわいな〳〵。
荒井　オヽ、ほんに此方にも同じやうなるお小姓。
三人　こりやどうぢや。
トこの時、上手の浄瑠璃臺の御簾を巻き上げ、爰に常磐津連中居並び、直ぐに浄瑠璃。
〽爰に消え、かしこに結ぶ水の泡の、いづれあやめと見え分かで、暫し詞もなかりけり。
駒之　ア、コレ〳〵、妾はしくばこの文箱。
紀之　開いて御覧なされませ。
ト両人同じ見得に差出す、荒井、綱手、程よく取つて、手早く開き、内より同じ色の短冊を取出し
三人　我が存ずるべき筈なり蜘蛛の
荒井　蜘蛛の振舞ひ兼ねてしるしも
呉竹　どちらも同じ、衣通姫の古歌。

紀之　君のお居間へ
駒之　お通しなされて
両人　下さりませ。
荒井　フム、同じ姿で来たからは、いづれ一人は紛れ者。
綱手　ア、モシ、それを糺すは、よい事がござりまする……ナア、呉竹さん。
呉竹　ほんにマア、恥かしい事ながら、綱手さんもわたしも、疾から焦れ文玉章。
荒井　それを覚えてござんすかえ。
駒之　なんの忘れて
紀之　よいものでござりませう。
綱手　オヽ、ソレ、しかも彌生の雛祭り。
呉竹　お夜詰め引けて物思ひ。
〽世にも又、かゝる若衆の有馬山、否との文の返事さへ、泣いて明かしてまた書き送る、筆の運びも長廊下、待たるゝ身とも白鷺の、背の踏みども忍び路に、花を明りに見かはす顔、嬉しと云ふも胸の内、手に手を取つて懐に、ひつとしめたるさゞめ言、それから絶えて逢ふ事も、なんのあらうぞ餘所外に、そりや此方から云ふ恨み言、情ないぞと取縋り、抱きしめたる。

トこの時、荒井、持ち物にて

〽折こそと、打つてかゝれば身もすくみ、三人は一度にたぢ〳〵〳〵、また立ちかゝるその隙に、消えて形は。

ト三人一度に打つてかゝるを、かい潜り、紀之助、上手。駒之丞、下手へよろしく消える。三人こなしあつて、ゴン、風の音になり、二重へ上がり

荒井　ありやモウ丑滿、必らず油斷なさんすなえ。

兩人　心得ました。

〽積るとも、いざ白雪の夜の道、唄ふ小唄のしどもなく。

ト薄ドロ〳〵になり、下手の衝立、田樂にて、御用の松次、ばつてう笠、下駄がけにて、丸盆に豆腐を乘せ、ツカ〳〵と出る。

〽これは葛西の源兵衛堀、合羽に代る竹の子笠、御用と呼べば豆腐でも、また近くでも頓着ねえ、類は友呼ぶ初雪や、おれも人の子あれも又。

トよろしくあつて、手眞似をする。これにて文次、角大師、同じ御用、跣足にて樽を提げ、ツル〳〵と出る。

〽樽を集めて打連れて、聲高岸屋よろ〳〵と、醉ひつ醉はれつふざけ來る。

荒井　ほんにマア、可愛らしい子供達、さぞ寒からうなう。

松次　イエ〳〵、ちつとも寒いとは思はぬ、それが酒の德でござるわいなう。

綱手　高慢な事云やる。そんなら酒の始まりを知つて居やるか。

文次　こつちやア親方に敎はつて知つて居らア。

吳竹　そんなら話して

三人　聞かしやいのう。

文次　本か嘘かは知らねえが。

〽おらが聞いたは横丁の、お伊勢さんの兄弟が、内をおん出て小遣ひも、使ひ果して百藥の、長兵衛とやら云ふ人に、酒を造らせ呑んでから、名もさゝのをと付けざしは、否と云ふのを引寄せて、しやんときまつたお床入り

綱手　ほんにマア面白い、よう覺えて居やつたなう。

荒井　あんまり面白いによつて、もう一度、なんぞ話しをして聞かしやいの。

三人　サア、早う〳〵。

〽今度常陸の文福長者から、おかゝを貰うた、年は二十一、名はうぶ女、添うてござつたはな、鷺の娘に雪女郎、見越し入道は猫間を連れて、めでたう嫁入り、魑魅どの

誂ひ、そつこで狸の腹鼓。
〽物凄さ、手取りにせんと大手を廣げ、爰の隅々かしこの詰り、水の月かげ姿は消えて
トよろしくあつて三人打ちかくるを、かい潜り、松夫文次、二重へ上がるを追ひかけ立廻つて、雨人臺より欄を引き出し、三ッ目になり、松次、飛び上がり欄間へ手をかける。綱手、文次を引きつける見得よろしく、この前へ一面の蜘蛛の巣を畫きし道具幕を振り落す。大ドロ〳〵になり、日覆より土蜘蛛下りて、幕前に吹替へ、子役の土蜘蛛になり、蹲まり居る。知らせにつき、正面の幕を切つて落す。
本舞臺、淨瑠璃臺より下の柱まで、一面通し白木造り、常足の御殿、蹴込み、塗り框、花の丸の彩色縮、欄間、同じ模樣。奥、漏斗御殿の遠見。爰に朱塗りの短檠を照らし、眞中に賴光病ひ鉢卷にて、錦の褥へ住ひ、脇息に凭れ、居眠り居る。側に太刀を掛け、かいぐるみに纏はれ居る見得。此うち土蜘蛛は、ノタ〳〵這つて、花道へ消える。これを一時に道具納まる。
ト本釣り鐘、寢鳥、ドロ〳〵になり、花道へ薄雲、傘をさし、好みの傾城の形にて、セリ上がる。
〽凡そ廓は小車の、飛花落葉の世の慣ひ、迷ひの雲に隔つれど、耳に近き戀慕の碊、逢ひたや見たや戀しやと、淚の玉の魂よばひ。
ト始終薄ドロ〳〵にて、二重下に立つ。賴光、けはしく目を覺まし、刀掛けへ手をかけ、薄雲を見て、ホッとこなし、また本釣り鐘。
賴光　ヤ、其方は薄雲。
薄雲　怖い夢でも見なんしたかえ。
賴光　オイナウ、わが身に逢ひたさ、この廓へ移りしが
薄雲　相馬に由緣のわたしゆゑ、逢はす事ならぬと、意地の惡いお方々。
賴光　それゆゑ、男を遠ざけ、女子ばかりに宿直さすは、其方に逢はうばかりぢやわいなう。
薄雲　そのお心を聞いたゆゑ、幾世の思ひで來たわいなア
賴光　そりや眞實に。
薄雲　ハテ、疑ひ深い。いつまでも、傾城ぢやと思うてかコレ。
〽勤めの憂を打滅して、二世と交せしかね言に、女心は淸水の、觀音さんへ茶斷ちして、逢ふ夜逢はぬ夜恨み

ては、外に悪性誓文と、仇し男の仇心へ我れも思ひを交したる千鳥の前に結びてし、女夫の仲も其方ゆゑ、薄き縁と云ひ送り、別れの淵の憂き思ひ、語れば薄雲つれづれと御大将を打守り。恨めしの頼光さま、我れは誠の薄雲ならず、一度御身に情を受け、じげつの雪と果敢なくも、非業の刃に消え失せし、千鳥の前の靈魂なり。

頼光　ヤ、すりや千鳥の前が亡魂、、太夫が姿假初めに。

へ仇し枕のお情が、結句思ひの深き淵、浮まぬ罪科淺ましく、共に奈落へ伴はん、來れや來れと夕時雨、紅葉に置けば白露も、紅染まる龍田川、果敢なく消え　この世から、修羅の巷にうす椿、つのぐむ芦は自ら、劍の山吹鬼百合に、ほのふ緋櫻炎々と、苛責の責めの地獄の有様、遁がれうべくもあら不思議や、お枕邊の鬼切丸、おのれと拔け出で大將の、御手にとまる折柄に。

季武　待ちやアがれ、エ、

ト　なかし、バタ／＼になり、向うより季武、半切り一本隈、大太刀、鉞を持ち走り出で

ト部の次官季武が、イデ顯はしてくれべえか。

ト　さらしになり、よろしく舞臺へ押し戻し

へ神變不思議の妖怪も、劍の威德猛勇の、威勢に恐れて消えにける、めでたき御代とぞ祝しける。

ト　よろしくあつて

先づ今日はこれぎり。

ト　めでたく打出し

・幕

來宵蜘蛛線（終り）

六歌仙容彩 ――六歌仙

六歌仙のうち五歌仙を一人で踊り分けるといふ趣向は、初世嵐雛助が「化粧六歌仙」といふ名題で既に踊つてゐたのである。がそれを當時に合ふやう賑やかに書き直したのが、これである、天保二年三月、中村座で「櫻直砂白浪」の大切に初演。大好評を得て今日まで流行を極めてゐる。遍照が大薩摩、文屋が清元、業平が長唄、喜撰が長唄清元の掛合ひ、黒主が長唄といふ順であつた。今日では遍照は竹本でやる事になつてゐるが、大薩摩の原曲は今猶長唄に傳へられてゐる。度々上演されたうちには、文屋や喜撰を常磐津でやつた事もある。作詞は松本幸二、大薩摩は歌扇太夫と杵屋六左衛門、清元は延壽太夫と齋兵衛、長唄は富士田吉藏、杵屋六左衛門、寶山左衛門等、振附は藤間勘十郎、中村勝五郎、西川扇藏であつた。役割は、遍照、康秀、業平、喜撰、黒主(中村芝翫、後の四世歌右衛門)小町、茶汲(岩井粂三郎)等であつた。この五役を一人で踊るのが原作であるが、俳優階級の都合で黒主を座頭俳優が踊ると、孔雀三郎といふ押戻しに變つて出る事もあつた。今日では各役いづれも俳優を變へてやつたり、一部だけ分離して出したりする習慣になつた、本卷收録の臺本は、嘉永五年正月大坂中座で、歌右衛門が踊つた時のもので、俳優の都合で多少訂正してあるが、却つて面白いと思つたので、わざとこれを選んだのである。歌右衛門はこれがお名殘で黒主の顔のまゝで死んだ。

六歌仙容彩（六歌仙）

大内山の場

役名——僧正遍照。文屋康秀。喜撰法師。在原業平。大伴黒主。茶摘み女、お花。御所女中、お梅。小野の小町。

竹本連中
長唄連中
清元連中

造り物、一面、筋塀の道具幕、櫻の吊り枝、爰に仕丁四人、水打ち手桶、箒を持ち、立ちかゝり居る。管絃にて幕明く。

仕一　今日大内の歌合せ、天下の美人と名に立ちし、小野小町と云ふ官女。

仕二　殿上人から地下侍ひ、如何なる名僧智識でも、一目見ると戀風が、ゾッとする程惚れ込んで

仕三　思ひを通はす千束の文、色には名うての豆男、業平どのから康秀どの。

仕四　悟り切つても僧正遍照、お歌所の太鼓持ち、喜撰法師が墨染衣、面の憎いは黒主どの。

仕一　最前ちよつと聞いたには、口說で聞かぬその時は、小町どのゝ身の上と、味な所へ謎の意趣。

仕二　娘一人に聟五人、五分も承知の小町どの。

仕三　さりながら、小町に難題云ひかけたれば

仕四　こちらが寄つて

仕三　必らずぬかるな。

三人　合點だ。

ト始終、管絃にて、皆々、上手へ入る。道具幕切つて落す。

造り物、一面、通しの翠簾の御殿、臆病口の所、黒塗りの衣桁。これに几帳を掛けあり、吊り枝は其ままにして、よろしく道具納まる。

ト音樂になり、向うより、雀の局、柏の局、鶴の局、鶯の局、園生、千種、桔梗、葵、二葉、小笹、初瀬、

吉野、いづれも、官女の拵らへにて、檜扇を持ち、出て來り

雀局　なんと皆さん、八重九重をこぎ交せて、咲きも殘らず散りやらず、盛りまばゆき花舞臺。

柏局　その花王や和歌の道、譽れを取つた家櫻、

菅局　眞名と假名との手爾葉さへ、なんにも知らぬ山櫻、

園生　その腰折れの歌合せ、神風かをる伊勢櫻。

千種　不斷櫻の詠めより、小町櫻の花の色。

葵　移りにけりな浦櫻。

小倉　その粧ひの楊貴妃櫻。

二葉　君が心も有明櫻。

小笹　花を飾りし御趣向も

初瀨　盡きぬ御題の歌くらべ。

桔梗　そんなら皆さん。

皆々　御同道いたしませう。

ト皆々、舞臺へ來り

雀局　それに付けても、今度召されし小町さま、御器量と云ひ悧發と云ひ、さぞマア公卿のお方々に、戀歌を讀みかけられる事でござんせう。

柏局　さう云ふ時に、わたしなら、直ぐに返歌をするわいなア。

雀局　これはしたり、憎からぬ。

四人　オホヽヽヽ。

ト上手の翠簾卷き上げ、竹本の太夫、三味線居並び居て、淨瑠璃になる。

〽爰に僧正遍照の、昔は花の良峯と、嵯峨の宮居に通ひ路も、その浮雲にさへられて、比叡の御山に墨衣、橫川の杉の闇さそふ、思しの床にぞつきにけり。

ト此うち、遍照、襟立て衣、九條の袈裟にて、中啓を襟に差し、水晶の珠數を爪繰り、几帳より出て來て

遍照　これは僧正遍照と申す、智識にて候ひしが、身に纏うたる色衣、未來永劫佛罪を

〽受けなば受けよ玉椿、落ちての末に芥とも、是非に小町に對面と、立寄り給ふを局達。

ト此うち、遍照、翠簾の內へ行かうとする。

雀局　小町さまには今日の、お歌合せに一間の內。

皆々　御對顏に叶ひませぬ。

〽さなきだに、車に積める玉章も、括り枕の仇事と、驚ろかしぬる悲しさを、推量あれと折も折。

ト正面の翠簾の內にて

小町　色見えて、うつらふものは世の中の
遍照　ヤ、さのたまふは我が仇人。
小町　人の心の花にぞありける。
遍照　心深しの歌人よなア。
〽僧正、垢離の珠數の緒に、繋ぎとめよと手を揚げて、これ／＼と招かるゝ、小町はいともしとやかに、長掛け捌き御所育ち、雲井に名をも揚げ翠簾を、離れて席に歩み出で。
ト遍照、下手に扣へる。正面の翠簾巻き上げると、小町、好みの着付け、道行ぶりにて、椽の上に、檜扇をかざし、その脇に文箱、歌書き机を置き、瀧花、吉野官女の拵らへ、檜扇を持ち扣へ、女の童小菊、居並び下舞臺へ下りて
小町　僧正さまには今日も又。
〽春咲く木々の花盛り、はてし渚の詠めなく、夏は青葉の秋來れば、雁なら知るに散りもすれ、冬の凩などかせん、さりとては、生者必滅會者定離、三悪道を出でながら、猶も鬼畜に迷ひしは、志賀の性空上人も、悟り兼ねてか戀の道、ましてや我れに於てをや、人の常とは云ひながら、悟道智識もその色の、白きを赤きと云はざりき、善悪邪正に心の現世、迷へば煩惱、悟れば菩提、分けて女犯は眼の迷ひ、情と云ふを知れぞかし、佛も假に夜叉と云ふ、得心あれや僧正と、行かんとするを押止め、暫し／＼とのたまふを、側から寄つて局達、
ト此うち、遍照、小町、よろしくあつて、小町、行かうとするを、遍照、引き留める。官女支へて
閑生　あはれ智識の御身にて
千種　戀侘び給ふは、はしたなし。
桔梗　歸らせ給へ。
皆々　僧正さま。
〽扣ゆる衣の、袖打拂ひ、
遍照　花咲くと、うはべに見えぬ姿かな。
〽小町御前を打見やり、御法の庭にぞ歸らるゝ。
ト遍照、几帳の内へ入る。
〽小町は跡を見返り／＼、悲しと思ふ心根を、衣紋に含むばかりにて、局ら連れ入り給ふ。
ト小町、思ひ入れあつて立役の官女、付いて二重へ上がると、翠簾を下ろす。几帳の内より康秀、烏帽子、狩衣、刺貫にて、走り出て、翠簾の内へ行かうとする。四人の官女、止める。これと一時に、下手の屋體の翠

簾を卷き上げる。爰に清元連中居並び居て

へ屆かぬながら覗ひ來て、行くをやらじとこれ待つた、あだ憎らしい、なんぢやいな、お清所の暗まぎれ、晩にやいのと耳に口、むべ山風の嵐程、ぞつと身にしむ嬉しさは、秋の草木かしほ〱と、獨り寐よとは男づら、鮑の貝の片思ひ、情ないではあるまいか、寄るを突き退けこりやどうぢや、鼻の障子へたまさかに、葱のかをる仇口は、時節違ひの鰻汁で、獨りばかりか盛替へを、強ひ付けられぬ御馳走は、そも〱お辭儀は仕らぬ、これを思へば少將が、九十くよくよ思ひつめ、傘をかたげた丸木橋や、おつと危ない、既の事、鼻緒は切れて片足は、ちんが、ちか〱、オヽ冷た、その通ひ路も君ゆゑに、衣は泥に垢付きの、すご〱歸る憂き思ひ、ならぬながらも我が戀は、末摘む花の名代を、突き付けられて恥かしい、地下の女子の口癖に、田町は昔、今戶橋、法印さんのお守りも、寐かして猪牙に柏餅、夢を流して隅田川、男除けなら其方から、ほうは高天がはらの上、乘せる手事はお斷わり、逃げんとするを戀知らず、引きとめるのを振り拂ひ、イヤ〱〱、逢ふ戀、待つ戀、忍ぶ戀、蟲籠に、して來い、萠黃の蚊屋、呼んで來い。

四人　「問ひませう〱。

康秀　問はしやれ〱。

雀局　四疊半のしつぽりは。

康秀　これを圍ひと云ふならめ。

柏局　十七八の生娘は。

康秀　目顏を忍んでソツと來い、

鷲局　給仕のいらぬ据ゑ膳は。

康秀　喰はぬが損ぢや、持つて來い。

鶴局　屋根でガサ〱騷ぐのは。

康秀　そりや知れた事、猫の戀。

雀局　白玉入れた汲立ては。

康秀　そりや氷水、冷ツこい〱。

柏局　大晦日には一やうに

康秀　掛取りならば後に來い。

鷲局　さて成駒屋の所作事は

康秀　アタしつこいと云ふ事か。

鶴局　お船は。

康秀　浮いて來い。

柏局　鳶は。

康秀　飛んで來い。

天保二年三月市村座

初演當時の繪番附

雀局　烏は。
康秀　かつて來い。
雀局　水鷄は。
康秀　水鷄は。
皆々　水鷄は〳〵。
〽ぎつちり詰まつた脂煙管、廬の息浮くばかり、これぢやゆかぬと康秀が。
ト狩衣を脱ぎ、前へ出て
〽富士や淺間の煙は愚か、衞士の焚く火は澤邊の螢、燒くや藻鹽で身を焦す、さうぢやいな、合ひ縁奇縁は味なもの、片時忘るゝ隙もなく、いつせつ體もやる氣になつたわいな、さうぢやいな、花の嵐の色の邪魔、寄るを此方へ遣り戶口、中殿さしてぞ走り行く。
ト康秀、いろ〳〵あつて、トヾ四人を蹴飛ばして奧へ入る。
雀局　アイタヽヽ。さつて素氣ない戀知らず。
柏局　情容赦も荒々しい。
鶴局　玉の杯底なし男。
鷺局　この上は、どこまでも追ひ駈けて
ト上手にて

小菊　皆さん、お待ち遊ばしませいなア。
ト狆を抱へ來る。
雀局　オヽ、小菊どの、なんの用でござんす。
小菊　サア、この狆、お目にかけうと思うて。
雀局　その狆が、どうぞしましたか。
小菊　イヤ、あんまり可愛らしいゆゑ。
雀局　ほんに可愛らしい狆ぢやわいなア。
柏局　オヽ、その狆で思ひ出した。お前が習うてゐやしやんす、あの舞の合の手。
鶴局　ほんにさう〳〵、チントンオイ、とアノ間は、餘ツほどむづかしさうにござりますが。
鷺局　ちよつと爰で、舞うて見せなさらんか。
小菊　滅相な。どうして此やうな所で私しどもが。
雀局　なんの〳〵、小町さまを始め、皆樣は奧殿で、お歌合せの最中。なんぢやあらうと
四人　所望ぢや〳〵。
トこれにて小菊、前へ出て、所作あつてチラシになり、上手へ入る。
雀局　なんと皆さん、今の舞に私しは、感心いたしました。

鶴局　わたくしどもも、習うて置きましたら、こんな時に
お目にかけるもの。

柏局　イエ〳〵、舞や三味線は、御所方に入らぬもの

雀局　地下の者は、器用でござります。

鷺局　私しなぞは、一體蓮葉な育れでござりますゆゑ、御
所で、ヤレお歌合せでござるの、十種香、續松貝覆ひな
ぞは、とんと辛氣でなりませぬ。

雀局　左やう〳〵、詩歌、管絃の調べより、よしこのゝ方
が、氣が發してよろしうござります。

鶴局　私しは又、いま流行いたしまする、ぢやんぢやかの
拳、あれが好きでござります。

柏局　拳と云へば、この頃出來ました拳は、面白いぢやご
ざりませぬか。

鶴局　あの拳を、ちよつと爰でやつて見ませうか。サア、
あなた。

柏局　私しは不調法でござります。

鶴局　其やうな事仰つしやらずと

柏局　これは又、迷惑な。

鷺局　そんなら私しとやりませう。

柏局　どなたもお先へ。

鷺柏　ヤ、一イ、二ウ、三イ。
ト謡らへの拳になり、兩人、よろしくある。跡の兩人
も浮かれて、ト〻四人、踊りながら、下座へ入る。返
し。

上より一面の網代塀、眞中に中門の道具下りる。よ
き程に知らせに付き、この道具、東西へ引込むと、
一面、春草を書きし道具幕になる。止めの木にて、
右の鳴り物打上げ、直ぐに唄にかゝる。

〽千早ふる、昔男と名に龍田川、戀には身をも、伊達
姿

ト知らせにつき、道具幕を切つて落すと、眞中、出囃
子の雛段、これに長唄連中、囃子方居並び、うしろ一
面、芥川の遠見、舞臺前、草土手、爰に業平、弓を持
ち、靱を脊負ひ、小町、十二單衣にて、櫻の枝に、雉
子のとまりしを持ち、居並び、前へ出る。

〽梓弓、引けば元末、我が方へ、よるこそまされ戀の道、
しのぶの亂れ限りなき、身にも山にも春霞、立つ名いと
はじさりとては、靡き給へと夕しでの、神に誠を明石潟、
幾夜か通ふ浦々千鳥、啼いて濡れなん涙の雨に〽いゝや

曇らじ胸の月、花の色香の情は仇に、移りにけりないたづらな、我れは戀慕のやみ〳〵と、戀ひ死なん身も惜しからじ、いとはぬ我が身我れながら、なううつゝなの人ぢやえ、〽今宵扇のその約束を、忍ぶ心の細殿に、月の扇の翠簾洩れて、薫りも床し七重八重、九重かざす誰が花扇、待つ身は永き檜扇と、焦れ焦るゝ思ひもほんに白扇、胸に疊んで獨り氣を、紅葉扇のやる瀬もなうて、閨の扇の〽繪そら事、あらうたての御事やと、拂へば猶も離れじと、袂を取つて引きとむる、重きが上の小夜衣、重ねて參らせ給ふなと、振り切る手爾波、思ひの丈、心あまりて詞なく、讀み人知らずと歸らるゝ。

ト兩人、いろ〳〵振りあつて、小町は上手、業平は、花道へ行き、振り返る。これを下がり葉になり、向うへ入る。此うち、出囃子、上手へ寄せ、下手より、淨瑠璃臺を引き出すと、眞中へ一面、段幕を振り落し

〽世を宇治へ、遁がれて墨の衣手は、昔渋茶を立てすぎし、袖の移り香なつかしく、焦れて今日も九重に。

ト向うより、お花、茶摘み女の拵らへにて、出て來り

〽豆を苅るなら月夜に苅りやれ、月夜恥かしこちや闇がよい、このよんやな。

ト向うより、喜撰法師、出て來り

〽世辭でまろめて、浮氣でこねて、小町櫻の詠めに飽かぬ、餘所に心は移らねど、人も見る愛敬は、てんとおてんと天から落ちた天人か、わつちや否やの、なに馬鹿らしい、とても色にはこんな身で、成駒屋ならそれこそは。

〽わしは瓢簞浮く身ぢやけれど、主は鯰の取りどころ、ぬらりくらりと今日も又、浮かれ〳〵て來りける。

ト兩人、振りあつて、舞臺へ來る。上手より、お梅、御所女中の拵らへにて、被衣を着て、出て來り

〽もしやと翠簾を餘所ながら、喜撰の花香、茶の給仕、浪立つ胸を押しなでゝ、締りなけれど鉢卷を、幾度締めて水馴れ棹、濡れて見たさに手を取つて、小野の夕立緣の時雨。

〽化粧の窓の手を組んで、どう見直して胴震ひ。

〽今日の御げんの初昔、惡性と聞いてこの胸が、朧の月や、松の蔭。

〽わたしやお前の政所、いつか果報も一森と、褒められたさの身の願ひ。

〽惚れ過ぎる程愚痴な氣に、心の底の知れかねて

安政元年三月中村座上演
尾上梅幸の小町　中村福助の喜撰

〽おれつたいでは、ないかいな、なぜ惚れさせたこれ姐え。
トお梅、法師、よろしくある。この中へお花、割つて入り
〽えゝ措きなされ人さんの、引く手數多に引きかへて。
トお花、前へ出て
〽わしが引くもの大根に牛蒡、ちや〳〵茶うけのな、團子の粉よ、淀ぢや船曳く、濱邊ぢや綱を、鼠や餅引く、猫が三味彈く、せねば跡引く、ちつくり色上戸、面白や、
ト此うち、法師、錫杖を持ち、前へ出て
〽愚僧が住家は、京の巽の、世を宇治山と、人は云ふなり、ちや〳〵くちや茶園の、はなす濃茶の、緣の橋姬、夕べの口舌の袖の移り香、花橘の小島が崎より、逸散走りに走つて戻れば、內の嬶アが悋氣の角文字、牛もよだれを流るゝ川瀨の、內へ戻つて我れから焦るゝ、螢を集めて手管の學問
〽唐、倭も、廓の戀路が、山吹流しの水に照り添ふ、朝日のお山に、誰れでも彼れでも、二世の契りは平等院とや、さりとはこれはうるさいこんだに。
〽奇妙頂來、どら如來。

〽浮世は戀の儘ならぬ。
トお梅、前へでる。
〽わしは君ゆゑ、身を摘草の、嫁菜に蒲公英。
〽土筆、芹薺、これ摘草の種とかや、摘ましやんせ、あろかいな、なんぼかあるぢやないかいな。
トこれより三人、叩き鉦を持ち、前へ出る。
〽衆生手管の歌念佛、釋迦牟尼佛の床急ぎ、抱いてねはんの長枕、睦言替りのお經文、なまいだ南無あみだ佛、なむあみだ、なんまいだ〳〵、なぜに屈かぬ我が思ひ、ほんにさ
〽戀に國歯のしどもなく、奥殿さしてぞ走り行く。
トお梅、お花、奥へ入る。向うより、白雲、所化の拵らへにて出で來り
〽三尺を、去つて師の恩、親の影、宗旨は代々替へ紋の、鼠は緣に當り歲。
ト黑雲、赤雲、青雲、黃雲、所化にて、長柄の傘を持ち、出で來り
〽出合ひ頭も、ちんまる〳〵と、坊主持ちから、そりや來た立て傘、爪折りの、よい中同士の五人連れ、謳ふも舞ふも法の聲、打連れてこそ來りにけり。

ト皆々、舞臺へ來り

白雲　申し〳〵お師匠様、宇治の庵を今朝から出て、どこへお出でなされたかと、捜しましたが知れぬも道理、こんな所へ來てござるもの。

黑雲　これはてつきり、小町御前の色香に迷ひ、どら如來とはなりにけり。

青雲　そこを思うて參りましてござりまする。

黃雲　異僧どもを出し拔いて、ても腹惡なお師匠さん。

赤雲　蛇の道は蛇、我れ等が鑑定、どんなものでござります。

白雲　あなたのお迎ひに

五人　參りましてござりまする。

喜撰　イヤ、何を申すか、たわけた奴ではある。さうして雨も降らぬに、その傘は。

青雲　サア、この傘は、あなたへ御意見。

法師　漏るゝをいとふと云ふ心か。

黃雲　マア、そんなものでござりまする。

法師　何を云ひ居る。かゝるめでたい御代に住吉の

四人　松は常磐の一踊り。

ト法師、傘を開き、住吉踊りになる。

〽浪花江の、片葉の蘆の結ぼれかゝり、よいやさ、これわいさ、解けてほぐれて逢ふ事も、松に甲斐ある、やんれ夏の雨、やアとこせ、よいやな、ありやりや、これわいな、このなんでもせえ。

〽住吉の岸邊の茶屋に、腰打掛けて、よいやさ、これわいさ、松で釣ろやれ蛤を、逢うて嬉しさ、やんれ夏の風、やアとこせ、よんやなありやりや、これわいな、このなんでもせ。

ト五人よろしくあつて、喜撰、前へ出る。

〽姐さんおんじよかえ、島田金谷は川の合ひ、旅籠は錢でお定まり。

〽お泊りならば泊らんせ、お風呂もどんどと沸いてある、障子もこの頃貼りかへて、お寐間のお伽も負けにして

〽草鞋の紐に仇とけの、結んだ縁の一夜妻。

五人　あんまり憎うもあるまいが。

五人　でも、さうだよ〳〵。

〽さうである。

ト此うち、喜撰は奧へ入る。皆々、これを知らず

〽脊戸の入口どうしたこんだよ、雨が漏る、鍋もて早うせんかいやい、それ擂鉢おこさんかいやい、味噌擂り坊

主のどうろく坊主、そさまによう似た子を産んで、これも佛のお富がい。

ト皆々、よろしくあつて

〽あのやお所化さんは、よいと〳〵念佛嫌ひ、丸い天窓に附け髷して、傘さいた、よいと〳〵よいと〳〵よいとまか、よいとなア。

〽住吉樣の、岸の姫松めでたさよ、勇めの御祈禱、淸めの御祈禱、天下泰平、國土安穩、めでたさよ。

ト皆々、踊り疲れて舞臺へへたり、喜撰がゐぬゆゑ恟りして、これより馬の鳴り物になり、橋掛りへ入ると、鳴り物、打ちあげ、知らせに付き、この前へ一面の幔幕を冠せると、大拍子になり、仕丁四人、出て囃き合うて入る。

〽言の葉に和らぐ國と神代より、名に大伴の黑主と、小町櫻の色映えて、めでたき御代の歌合せ、詠じて君を仰がん。

ト幔幕を切つて落す。

造り物、奥庭の遠見、上の方、出囃子、下の方出語り臺、眞中、高二重の築山、この上に黑主、束帶、笏を持ち、立ち身。下手に小町、十二單衣脱ぎかけ緋の袴にて、黑塗りの角盥を前に置き、詠草を洗ひ居る見得にて道具納まる。

〽蒔なくに、何を種とて浮草の、なみ〳〵ならぬ我が戀の、思ひをがなと萬葉に、ありと疑ひ掛け卷くも。

小町　八百萬の御神を誓ひにかけ、眞僞を糺すは、幸ひ、さうぢや。

〽小町は流石、名も惜しく、和歌の浦葉の藻汐草、水に向うて心に念じ、既に草紙を取りければ。

黑主　イヤ、その草紙洗ふに及ばぬ。人は知らじと思ふは淺墓、正しく古歌に相違ない。

小町　それぢやに依つて。

ト また盥にかゝるを留めて

黑主　ホヽ、その疑ひも兼ねてより、心を通はす虎が戀。叶はすならば、汝が歌と、奏聞なさ〳〵。

小町　ヤア、穢はしい。人もあらうに叛逆人、棟梁に、なんと枕が交される。

黑主　ヤア、奇怪なり。叛逆人とは、何を證據に。

小町　鏡山、いざ立寄つての詠み歌は、調伏の歌なりと、訴人あつて疾に奏聞、なんとこれでもあらがふか。

黒主　サ、アそれは。

小町　なんと相違は、あるまいがな。

黒主　ムウ。

ト花四天の捕り手八人、左右より取巻き

皆々　叛逆人、そこ動くな。

黒主　何を小癪な。

〽一首讃詞も、嵐と共に、ちんりちり／＼花吹雪。

〽晴れて是非に詠めさへ。

〽姿を六つの歌合せ。

〽感せぬ者こそなかりけり／＼。

ト櫻の枝にて打つてかゝる。よろしく立廻りあつて、キツととまり、見得よろしく、打出し。

幕

六歌仙容彩（終り）

八撥の俳優は
一陽齋が東錦
成駒の俤

今様望月――望月

萬歳の一節も
然も三河屋に
景色整ふ

劇色恵裏梅――拳酒

安政三年十月森田座の中幕に出した上下つゞきの淨瑠璃である。「今様望月」は能のそれを歌舞伎化したのだが、形式は矢張り能舞臺にとつてある。これは四世歌右衛門が血達摩の狂言の中へ入れて演じたのが最初である。また「酒は拳酒」は本名題を「笑門俄七福」といつて、矢張り四世歌右衛門が踊つた各種の拳淨瑠璃の一種で、特に有名なものであつた。この歌右衛門の二つの當り所作を、遺子の福助に踊らせたものなのである。文中にもその事を云つてゐる。作詞は兩方とも三世櫻田治助、常磐津は豊後大掾に小文字太夫、岸澤古式部、振附は花柳壽助である。役割は、望月、三藏（六世市川團藏）司、おきく（尾上菊次郎）かをる、おいち（吾妻市之丞）花若、おあい（片岡愛之助）太郎冠者、瀧藏（市川男女藏）次郎冠者、友藏（大谷友松）友房、黒助（中村福助）であつた。

今様望月（望月）
劇色恵裏梅（拳酒）

能舞臺の場
拳遊びの場

役名——望月左衛門秋長。白拍子、司實ハ庄司妻、庄司一子、花若。白拍子、かをる。太郎冠者。次郎冠者　小澤刑部友房。大盡舞ひ、三藏、幇者、お菊。箱廻し、瀧藏。仲居、お市。田舎娘、お愛。いさみ、友藏、大盡舞ひ、黒助、

常磐津連中

本舞臺、正面、三間の中足白木造り能舞臺、破風四本柱、上下、折り廻し欄干付きの縁先、いづれも白木造り、上の方、襷欄間の羽目、見切り、正面より上へ折り廻し、下、庭口。向う、見付け松の大樹書割り。橋がゝり、下手に緞子の布交ぜの幕揚げ下ろし、これを眞紅太打ちの紐にて吊り上あげ、橋がゝりの柱へ括り下げ、大總付きの道具、見事に飾りつけ、この前へ一面の筋塀の幕を下ろし、太皷入りの調にて幕明く

ト爰に頭取、社杯にて、口上淨瑠璃名題太夫連名役人觸れあつて、上の方へ入る。知らせに付き幕切つて落す。と爰に小皷、大皷、笛、太皷の銘々、素袍、烏帽子にて五人居並び、座付き、銘々皷大皷を扣へる。とこれにて正面の松の襖引明ける。爰に常磐津連中居並び、直ぐに前彈きあつて

〽いづくとも、定めぬ旅を信濃路や、月を友寢の夢結ぶ、名殘を忍ぶ故郷の、淺間の煙立ち迷ふ、姿は目にも月稚を、頼うだ人に近江なる、守山の宿に着きにけり。

トこれを大小入り、セリ出しの鳴り物になり、上の方に、司、そぎ袖の振り袖、紋づくしの中廣帶、前にて結び、土佐畫風の拵らへ、好みの簪、下に坐り、花若、同じ拵らへにて、そぎ袖の廣振り扱帶、眞中に、友房、小大口、半肘、素袍、小さ刀、扇を持ち扣へ居る、見得、能舞臺、眞中へセリ上げる。

花若　古への、野中の清水ぬるけれど
司　元の心を知る人ぞ、汲むと通らねし言の葉は
兩人　昔を忘れぬ懐舊の歌
友房　我れも庄司友治公の、舊恩を蒙むる某こそは、小
澤何某……今はこの守山に、旅人をとゞめ、世を渡れど、
心は變せぬ武士の魂ひ。
司　夫を討つたる望月左衞門、今宵この宿へ止宿あるは、
日頃信する佛神の
花若　應護の力に秋長を……今にぞ思ひ
ト思ひ入れ。
友房　ア、コレ、たゞ何事も心を靜め、申し合せし計略に
て、念なう敵をば討ち候へ。
司　心得て候ふ。
ト三人よろしく振りの模様あつて、座定まる。
〽せめて閨洩る月だにも、暫し枕と喞ちせし、遊び女に
身をやつし、待つ間程なく秋長は。
ト橋がゝりより、秋長、素袍、半大口、大名の拵らへ、矢張
小さ刀、この先にかゝる、花若に類せし拵らへ、矢張
り遊女に出立ちし心にて、秋長を伴ひ出る心、この次
に太郎冠者、括り袴、黒繻子、脚絆、肩衣、小さ刀、
秋長の大刀を持ち、次に次郎冠者、同じく拵らへ、檜
の木笠を持ち出で來り、秋長よき所へ立ちとまり、皆
皆よろしく
〽歸る嬉しき故郷に、たゞ憂き旅と思ふらん。
ト秋長よろしくこなしありて
秋長　これは信濃の國、望月の秋長にて候ふ……さても安
田の庄司友治と口論し、念なう友治を討つて候ふ……又
この度上洛仕り、よき縁を以て申し開き、本領悉く
安堵の御教書、申し受けて候ふ、
かゝそのお喜びの旅枕、宿の主の勸めに依り、不束な身
をお出迎ひ。
秋長　旅中の疲れを忘れしは、一段の事……如何に冠者、
止宿申し付けてよからう。
太郎　心得て候ふ。
ト、シテ柱の際へ來り
なう、甲屋の主あるかやい。
友房　ハア、お前に候ふ。
太郎　先達て殿のお泊りの樣子、申し入れたるが、心得て
候ふか。
友房　ハア、、、。

トかなるへ、こなしあつて
それゆゑに、これなる遊女をお迎ひに立てゝ候ふ。
かな　これぞ望月左衛門秋長公を、お供申して候ふ。
次郎　ア、イヤ、暫らく。その御名をば、申さぬ事にて
候ふぞ。
トかなる、友房へ思ひ入れ。
友房　委細畏まりて候ふ。
友次　イザ、御通り候へ。
〽心豊かに打通る。
トこれにて秋長を先にかなる、次へ廻り、太郎冠者、
次郎冠者両人、友房案内して、司、花若、出迎ひの
心にて、座を立つて、秋長、上の方、大臣柱の際へ立
ち、太郎冠者、次郎冠者は後見座へ扣へる。司、かな
る、花若と、下の方へ、皆々こなしありて扣へ、友房、
下手前へ出で扣へる事。この間、すべて本行の格にて
略々厳重に鞘の備へ、心得あるべき事。友房、こなし
あつて
次郎　ハツ、兼ね／＼の仰せに任せ、當宿の遊女ども、外
に両人、召寄せ置きましてござりまする。
秋長　オ、、一段と心に叶うた。……この上は、面白う趣
向いたして、舞ひ唄ひ、酒宴の興を添へてよからう。
司　私しどもは御意次第。
花か　勤めばやと存じ候ふ。
ト司、桂桶の蓋をとり、秋長へ持ち行く。花若、扇に
て酌をする事。
次郎　ナウ／＼、主、君の御酒宴の折なれば
太郎　とく進んで、一奏し舞ひ候へ。
司　如何にも、殿のお泊りを
花か　祝して参らす謡ひもの。
友房　御所望とあれば不束ながら……譲り受けたる一差し
を。
ト思ひ入れ
〽かゝる例しは遠江、名に橋本の長の宿、みさごの鮨を
打ち落し、水に放てば魚増して、浮きつ沈みつ遊ぶ鯉、
また引上げて丁と打つ、君に進むる打身の魚、いざきこ
し召せと戯むるゝ。
ト友房扇を持ち立ち上がり、振りよろしくあつて納ま
る。
秋長　ホ、オ、面白い。出かした／＼。
次郎　サア、これからは遊女達が。

ト女形三人に思ひ入れ。
司　イエ、私しどもより、あなた方。
花か　先づ何なりと、つい、そこへ。
　ト両人、太郎冠者、次郎冠者を連れ出す。
太次　アノ、我れ〳〵に。
友房　殿を慰め。
秋長　所望〳〵。
　ト太郎冠者こなしあつて立つ。
太郎　ハア、。
　へ其まゝ立つて、おゝそれよ、兼ねて旦那の云ひつけに。
　トこなしあつて狂言、詞の調子に心意気ありて
　粟田口と云ふ物を求めて参れと
　ト扇を開き見て
　この通り書付けまで賜はりしが、どのやうな物でをりやるか。一遍と尋ねて見よう。粟田口々々……粟田口を求めたい〳〵。
　ト思ひ入れ。と次郎冠者これを聞いて、こなしあつて、立ち上がり、友房をちよつと招きて、橋がゝりの方へ行き
次郎　粟田口々々〳〵と、あの者が申すが、何事でをりやるうな。
友房　あれは粟田口と申す、名作の太刀を求めたいと、申すのでござりませう。
次郎　その粟田口と申す銘作の太刀を、所持して居らば、大金を儲けるであらうに、……賣つて遣はす刀がないワ。
友房　それは斯様となります。
　ト次郎冠者へ囁く。
次郎　オ、、さて〳〵、和御寮は智恵者ぢや……ムウ、心得た〳〵。
太郎　粟田口を求めたい〳〵。
　トこなし。次郎冠者、近づきて
次郎　ハ、ア、和御寮は、粟田口を求めさしまするか。
太郎　如何にも。
次郎　さても〳〵、好い首尾かな。
　ト思ひ入れ。
太郎　御身が粟田口を所持して居るか。
　ト此うち友房立つて
友房　されば、これが粟田口でござりまする。
　ト次郎冠者を太郎冠者の側へ寄せる。

太郎　ハヽア、粟田口と申すは人間の事か……ドレ〳〵、書付けに引合せて。
次郎　されば、私しが粟田口でござりまする。
ト此うち女房、次郎冠者へこなし。
太郎　して、粟田口何と申すぞ。
次郎　藤三郎と申します。
ト太郎冠者、扇を見て
太郎　オヽ、藤三郎か。ナニサマ、書付けの圖と合ひ申した。
次郎　して、粟田口の私しを、如何程に買はせまするぞ。
太郎　旦那の位は、萬疋位で求めて參れと云ひつけられた。
次郎　イヤ〳〵、なか〳〵この粟田口は、其やうな安賣りは出來ませぬ。
太郎　して、いくらぢや。
次郎　サア、その價は猿若の。
ト思ひ入れ。
〽しかも山王樣の木に、お猿が三萬三千三百三十、ぶらぶら〳〵ぶら下がりの掛け値はござらぬ三萬疋、微塵も如才に奈良刀。
ト此うち次郎冠者よろしく振り。太郎冠者も浮かれし心に振り絡んで、これにて次郎冠者よろしく振り事。
太郎　何がさて、賴うだお人は有徳人、如何にもそれで求められうが、粟田口には如何程、奇特がある。
ト次郎冠者、ちよつと詰まる。女房立つて
女房　サア、この粟田口を、お求めなさるれば。
〽國に災ひ荒夷の、東夷南蠻唐辛子、ひりゝとさせて、西の海。
ト女房ちよつと振りありて、太郎冠者へ思ひ入れ。これより太郎冠者立つて
〽鬼はそつぱう惡魔を祓ひ、たら福は内如意々々寶珠、黄金は山から、ざく〳〵豐年の、穗に穗の酒盛りさざんざ、昔はさゞんさ、御代豐。
ト兩人よろしく、太郎冠者思ひ入れあつて
太郎　左樣な奇特がある時は、さて〳〵三萬疋では安いもの。
ト扇を開き
併し、書付けに、刃は至つて強しとあるが、左樣か。
ト次郎冠者出て
次郎　ハヽ、如何にも齒は至つて強うござります。先づ玉

川の砂利の砂糖入りが制茶請け。石臼も嚙み砕き、鐵砲玉の座禪豆が、茶漬の菜でござりまする。
太郎　さても〳〵強い齒かな。
ト扇を見て
また身は古しとあるが、どうぢや。
次郎　元より私しは、生れてから湯風呂は嫌ひでをりやるゆゑ、烏の行水も仕らねば、至つて身は古うをりやる。
太郎　成る程、これは身は古いわえ
ト扇を見て
まだこれに……銘が二つとあるが。
次郎　サア、姪は上京に、下京に。
ト次郎冠者振りになる。
〽脊はひんなり二九からぬ、ずんと悠目か色とり者よ、一人はでんかでゝ福の、三平こまに頰赤く、ちんが、ちが〳〵縮み髮、手足鮫肌拵尻で、泣く際鶴に似たりけり。
ト太郎冠者兩人にくよろしくあつて
姪に二人で候ふなり
ト此うち太郎冠者、書付けの扇を見て
太郎　して、はゞき元黑しとあるが。

次郎　それこそは御覽の通り、孺子の絆絆穿き詰めなればはゞき元は黑うござります。
ト足へ思ひ入れ。
太郎　成る程、はゞきもの黑うをりやる……。註文通りの栗田口。
トこれにて女房、素袍の上を掛け、大名になる。
〽殿に代りて求めんと、心いそ〳〵立ち上がり。
ト太郎冠者は本業の大名心、差したる刀を拔き、次郎冠者へ渡す。次郎冠者これを持つて供に立つ。此うち太郎冠者、思ひ入れあつて
太郎　栗田口は居るか。
次郎　ハア、お前に。
ト兩人よろしく太夫狂言、詞かゝり。
〽藤三郎は居るか〽ハア、お前に〽栗田口〽ハア、〽藤三郎〽お前に〽栗田口藤三郎〽ハア、ハハアハヽ、機嫌とりどり口拍子、取られていつか太刀奪ひ、
ト右の拍子にて、太郎冠者の供をしながら、次郎冠者、太刀を持つて逃げ退く。太郎冠者、心付く。次郎冠者、うろたへ又付添ふ。爰へ女房、次郎冠者の太刀をちよつと引ッたくり、好き所へ眞節に斜に構へ居る。これ

に付き、次郎冠者、太刀を取返す。三人この仕組み、なかし味の振りあつて納まる。

〽閑狂言も時の興。

太郎　サア、これからは遊び達が

次郎　色めく廓の詞しをば。

秋長　さらば、これにて、見物を致さうずるにて候ふ。

ト これより司、立ちにかゝり

〽世の中の憂さ集める川竹の、流れの身にも春来れば。

ト よろしく振りあつて、これよりかなる、花若と三人

〽遊び君ずの手の〽一手に、二手、禿り船り連れて、客を運びの粧はひ、いづれ、あやめと引く袖に。

ト 三人よろしく、これより秋長女房も立つて、ともども五人になり

〽この廓彼の面の仲の町〽戀の掛け端唄さの、簾を洩れて、心から、客へ揚屋の箱梯子、互ひに登り大一座。

ト よろしくあつて秋長、こなしあつて一人になり

〽覗いて三保の気も浮見。

ト 秋長一人になり

〽よう、あれにありやるは、摑に張り合ふ月大盡、ハ、ア、謡ふ唄、歌は某への當て詞、殊に、そもじの間夫と聞く、えゝ、和御寮はなう。

ト これより司、秋長へ口説き模様。

〽初見参の床の内、人に洩らさぬ睦言は、天に登らば比翼鳥、地に又あらば、エ、、連理木〽君に誠の戀あらば、實と嘘とを勤めわけ、心筑紫の果までも、疑ひはれ益體も、なんぞとお気を浮かさうよ。

ト 秋長一人となり

〽今度長崎へ、変つた小唄を習うた、後先は覚えたんだが、中の唱歌を忘れた、さこそあるべいと、書いてもらうたが、それさへ出口で落した、コレ、面目ない、首尾も所謂もこの通り、〽沖の島山安南國、沖に鮫や鯨が流れ寄る〽沖の白山くおらが沖よ、鮫や鯨が流れ寄る、サ、サ、さつと捌けた大一座。

ト よろしく振りあつて

秋長　ハ、、、、

次郎　感心仕つてござりまする。

秋長　これよりは宿の主、面白からん、一奏を。

司　殿の御所望。

女三　サア、爰で。

友房　すりや、私しに。
秋長　サヽ、早う〳〵。
友房　ハア、。
　ト友房、扇を持ち、立ち上がる。
〽それ建久四年の皐月闇、念なう父の仇敵、歩みの板まで刺し通す、御陣は雨の徒然に、英氣を養ひ盛る酒に、オットちりから、ちつたつぽ、舞ひ謡ふ〽表は閃く太刀、薙刀、そりやこそ、御狩が始まつた、急ぐな者ども、怪我すな遊女、悋氣太平さそくの兜、獲物は三味線、どんちやんの、音に驚ろき裾野の猿が、三番踏み〳〵逃ぐるやら、暴れ散らしたる十番切、名を萬大の物語り。
　ト友房よろしく振り納まる。
秋長　ア、コレ〳〵、主の俳優、面白けれど……敵討とは心がゝり。
　ト思ひ入れ。
かな　そんなら今の一奏が
司花　お心に叶ひませぬか。
　ト友房思ひ入れ。
太郎　夜討曾我の今様振り。
次郎　御心に叶はぬとあるからは
　ト両人、思ひ入れ。
友房　不調法なる私しが、悪魔を拂ふ獅子の曲、然らばこれにて奏で申さん。
秋長　獅子の曲とは面白い。
太郎　日本一の事にてをりやる。
　トかなゑ、こなしあつて
かな　左様ならば私しが、連れて参つて、何かの用意を。
友房　暫らく待たせ給へや。
〽跡に心を奥の間の、樂屋を差して入りにける。
　ト友房こなしあつて、かなゑ附添ひ、橋がゝり幕の内へ入る。秋長、司、花若、太郎冠者、次郎冠者殘る。
　司こなしあつて
司　主が支度のその間に、殿に付添ふお方々。
花若　なんぞ面白い、御趣向がござりませう。
太郎　どう致して、不調法なる、我れ〳〵ども。なんの趣向がござらうぞ。
次郎　もう〳〵平に、御容赦々々々。
秋長　ナニサマ、遊女どもが申す通り、太郎冠者、次郎冠者、一奏仕れ。
太郎　御前の御意でござれども

次郎　この儀ばかりは。
司　ハテ、御辭退をなされずと
花若　早うお勤めなされませいなア。
　ト次郎冠者こなしあつて
次郎　何事も殿樣を慰め申す爲なれば……君を祝し奉り、
めで度い儀をばツイちよつと。
　ト次郎冠者立つて振りになる。
〽さてもめでたや打出の小槌、瑠璃や珊瑚珠、金銀、黄
金を、さつくら、ざつと振り出す、さゝんざ、唄へや、
世は豐、米もどん〳〵積み込め、どんかち、とゝんが奇
妙でせ……おめでたや、
　ト合ひ方にて次郎冠者、太郎冠者を連れ出で
〽オッと、心得、太郎冠者、鱸庖丁の口合ひに、相合
ひ袴、蝶腰を、どつこいどこんぞ、太刀奪ひ、柿山伏の
法螺吹いて、さんげ三人聟入りは、鞨鼓ほうろく、わり
口說き、末廣がりの杯を、酒に浮かして釣り狐。
　ト兩人よろしく振りあつて、太郎冠者、立ちかける。
次郎冠者引戻す。兩人よろしく
〽いでや外へはやるまいぞ〳〵とて追うて行く。
　ト兩人よろしく橋がゝりへ入る。後に秋長、司、花君、

残り
秋長　さてこの上は、男たいせし者とては、我れら一人と
相成りて、一しほに心解け、面白うなつて參つたわえ……
コリヤ、二人の遊女、面白き儀を舞ひ唄ひ、酒宴の興を
添へ候へ。
司　サア、主の支度のその間、鼓の用意も候へば、これな
る、乙女と共々に、八撥を今爰で。
　ト花若へ思ひ入れ。
花若　なんでマア、不束な私しのその曲が、殿のお慰みに
なりませう。
司　その不束がお慰み。そんならわたしも、共々に。
秋長　サヽ、早う勤めよ。所望々々。
〽又も鞨鼓と望まれて。
　トこれにて、合ひ方、出囃子の笛、太鼓あしらひ。司、
花若、ともに對の肌脱ぎ、畫面の拵らへ、誂らへの鞨
鞁を前へ附け、銀箔置きの撥を持ち、立つて出でる。
秋長、大臣柱の方へ住ふ。支度のうち、鳴り物のあし
らひよろしくあつて
〽吉野初瀬の花紅葉、更科越路の月雪。
　トこれより、鞨鞁の合ひ方、大小太鼓のあしらひよろ

しく、銘々振りあつて

〽いづれ眺めは三石潟、海女の焚く火に海松布の藻を、小ゆるぎの橋、田子の浦、連れて出羽の　潟に、つれなき人を松島や、涙は袖に、天の橋立、物思ひ山、重岡の、松の操をみかの原、面白や。

ト鞨鞁の拍子よろしくあつて、これより大小、太鼓の打込みになり、友房、扇の獅子、紅の覆面、しやぐまをかけて大口、見事なる段織の壺折りを端折り上げ、能舞臺の橋がゝりより、ツカ〳〵と出て、キツと見得。これを囃子へ取り、大小太鼓、太夫座の合ひ方。本行やつしの振りよろしく、舞臺へ來るうちに、しやぐまを振る事。獅子の狂ひ、よろしくある。此うち秋長、これに見惚れて中啓を額に當て、餘念なき體。

〽此方は曲の面白さに、猶もめぐらす酒の醉。

ト秋長、眠るこなし。合ひ方、鼓、太鼓のあしらひ。友房、獅子の振り、狂ひよろしく

〽獅子虎でんの舞樂のみきん。

ト友房、石橋のうちに、司、花若へこなし、此うち花若、蠻好みの通りになる事。かゝる出て、箱置きの太刀を取出し、司と花若へ渡す事。各々秋長へ狙ひ寄る心の振り、合ひ方、鳴り物の出囃子のあしらひよろしく。

〽今ぞ打てや八ツ撥、雨村雲や奏すらん、とく打てや鞨鼓打てと。

ト友房、獅子の狂ひのうちに、司、花若、秋長へ切りかける。秋長も抜き合せ、兩人へ切りかける事、友房、しやぐま振りながら隔てる事よろしく。本行の鳴り物あしらひ、太夫座の合ひ方にて、立廻り。此うちへ又、友房、獅子の曲、しやぐまを振る事あつて、トゞ太鼓のあしらひよろしく見得に納まる。太鼓テン〳〵と打ち上げる。

秋長　こは何者なれば、この狼藉。

司　御身に討たれし友治が妻の司。

花若　付添ふ我れは嫡子花若。

かを　手引きの妾も恩顧の者。

秋長　さて又亭主と見えたるは。

友房　郎黨、小澤友房なり。

秋長　ヤ、、なんと。

友房　サア、立ち上がつて

四人　勝負あれ。

本曲所演當時の番附

秋長　なにを。

〽念なう敵を討ち取つて、やがて故郷へ立歸り、弓矢の誉を殘しける。

ト大ドロ〳〵のかゝり、下座にて、誂らへのカンカラ入り、賑はしき鳴り物。秋長、司、友房、花若、見得よく居並び、これへ誂らへの段幕を振り下ろし、四人の姿を消す。右の鳴り物と、共に大ドロ〳〵。

本舞臺、破風虹梁を引上げ、煽り返し、一面の霞、大臣柱にて、柱を左右へ開き、同じく引上げ、同じく紅白梅の早咲の吊り枝に替る。上下の道具、庭内の板塀。上の方は室町御所の庭内へ島原の廓を移せし江戸街と見たる入り口。下手に手桶を積みし天水桶など好みの通り、一面見事に居所にて替り、能舞臺を其まゝに繰り下ろし、常の二重程の高さとして誂らへの通り、右鳴り物にて道具納まる。

ト件の段幕切つて落し、秋長は三藏、友房は黒助の兩人、烏帽子、素袍、鼓、扇を持ち、万歳太夫才藏の拵らへに引抜き、花道へ走り出る。

〽謡ひ囃せと、夕しでの、その神楽月、魁の、梅はほのめく深山は錦、菊の四季咲折々の、眺め移した色廓、船よ、四海よ、早めて〳〵、拍子取る間も、四つイ菱、結び柏を待ち受けて、出立ちも揃ふ花の顔、大盡舞を見さいな。

ト三藏、黒助の兩人振りある。此うちに司は藝者のお菊の形、早咲きの梅の枝へ、火繩を結びし提げ、太郎冠者はばつち、尻端折り、町人の拵らへ、紅葉の枝へ烏帽子籠の土産物を提げたるを擔げし瀧藏、かなるも引抜き赤前垂れ着、仲居お市の形。絹張りの、螢籠と見たる小筒入りし割籠を手拭にて提げ、夏の趣向。花若、引抜き、褄、端折り、桃色の湯具、好みの鬘、半振り友禪入りの着附け、秋の取入れ、貢ぎ物を、小さき鍬に結びつけしを擔げ、在所娘お愛の體。秋の趣向。次郎冠者引抜き、浴衣の上へ廣袖、褞袍、股引、紺足袋、麻裏草履、勇みの友藏、酉の市詣り、熊手を擔げ、右五人支度出來次第、上手より出て、賑やかなる鳴り物入り、銘々文句のうち、振りよろし〳〵、三藏、黒助、振り納まつて双方行き合ひ

三藏　ヨウ、時にどなたもお早かつたね。

女三　サア、わし等よりはお二人さん。

友蔵　よく早く支度が出來ました。

ト　お菊あたりへこなしあつて

きく　なんとマア、見なさんせ、室町御所のお庭ゆゑ

いち　廓の景色を拵らへて

あい　鎮守の宮の神いさめ。

瀧蔵　假宅、新宅打込んで

友蔵　色黒の趣向とは。

瀧蔵　わしまでがツイ、うか／＼踊りました。これと云ふも、日頃御用を達す室町御所のお庭ゆゑ。

いち　たらはぬ、わたし等もとも／＼に、こんな姿の拵らへ。

あい　廓で云へば俄の格、併しマア、このお庭ゆゑ。

きく　どうも云へぬぢやござんせぬかいなア。

瀧蔵　それは、さうと肝心の

友蔵　請負ひ人の三藏どのが。

女三　ほんにまだ見えぬぞえ。

ト　三藏、大きな聲て

三藏　爰へござつた。

ト　怒鳴る

女三　エヽ、恟りするわいな。

ト　三藏、前へ出て

三藏　時に、どなたもお早かつたね。

きく　どうも云へぬぢやないかいなア。

三藏　噂を聞けば、御殿の内では、おめでたい事があつて今様の催ふしがあつたとの事だの。

瀧蔵　番組多き其うちでも、望月の狂言は、取分けての趣向とやら。

友蔵　そこで銘々この通り、番組を鬮にして、冬の趣向を西の町。

ト　持ち物の熊手を見せる。

瀧蔵　わたしは好みの四つ紅葉を、取りも直さす紅葉狩。

ト　紅葉の枝を見せる。

あい　秋の田の貢ぎ物、在所出立ちの不束な……これでも趣向にならうかいな。

ト　持ち物の拵らへに思ひ入れ。

いち　わたしは夏の川涼み、仲居姿で宇治川へ、割籠を見立ての螢籠。

きく　お客を共に、船行の、恵方詣りを共まゝに、

三藏　成る程、こりやア、打つてつけだ……時に、春の趣向の惣浚ひとしようぢやアねえか。

菊市　それがようごんせうわいなア。
きく　モシ、お前の相方のお人わえ。
ト三藏へ思ひ入れ、瀧藏友藏も見て
瀧藏　オヽ、この人は新見世の魁香亭へ
友藏　手傳ひに來て居る男衆たの。
ト思ひ入れ。
きく　お前、其やうな人を相手に、どうしようと思ひなさんす。
三藏　なにサ、才藏とは、あんな、頓馬な者がよからうと思つてよ。
ト黑助こなしあつて
黑助　コレ〳〵、先刻から聞いて居れば、頓馬とは、なんだ〳〵。アイ、わしは頓馬だから、もう止しにして歸りませう
ト花道の方へ、立ちかけるゆゑ
三藏　アヽ、コレサ〳〵、いま歸られては困るわな。こりやア大きに誤まつた。料簡さつせえ〳〵。
黑助　イヤ〳〵歸ります〳〵。
きく　アヽ、モシ〳〵、今のはわたしが云ひやうが惡うござんした程に、堪忍して下さんせ。

黑助　それだと云うて、人を賴んで、こんな形をさせて、連れて來て置いて、頓馬だの氣が利かぬと、あんまりな人さん達だ。
三藏　ハテサ、マア、早う料簡さつせえ。時に、春の趣向からちよつと藝子を。
黑助　そんなら、機嫌直しにやりませうか。
三藏　その事サ。エヘン〳〵。
ト思ひ入れ。
〽さらばお喜び申さうと、鼓おつ取り聲繕ろひ。
ト三藏、黑助、兩人舞臺前へ出て、三藏は扇を持ち、黑助は鼓を持ち並んで。
〽やんりや、めでたやなア、鶴は千年の名鳥なり、龜は萬年の御壽命保つ、今日このお家をば長者のしんを。
兩人　遊所に譬へて、柱だて
〽一本の柱は、伊勢の古市、よったの踊り、〽よい〳〵よい〳〵、よいやさ〽二本の柱に〽端手を駿河の二丁町よ、三本の柱は堺の乳守〽四本の柱がしんもの關、〽五本の柱は、ごんとの針箱、六本の柱は、〽むつくりむつくりむつくりむつくり室の湊へ入り船。〽七本の柱は奈良の都に近ひ木辻の居續け。〽八本の柱は〽花のお江戸

の五丁町〽九本の柱は九條の君達、裲襠捌きの裾も、さらり／＼〽オヤ、さらりさらり／＼さつと才藏ひいらいた、ハ、、〽ひいらい、とりはだけエたり〽ホ、、ヤレ、十本の柱に寶を盡しの柳町〽品よく靡くや、こち東風に、此方へ向いて萬歳〽おや、萬歳、萬歳、々々、萬歳、々々、へゝ萬歳樂でおめでたい、めでたく榮ふ櫓幕。

ト三藏、太夫の見得。黒助、才藏、万歳の模樣振り事よろしく納まる。

皆々　ヤンヤ／＼。

女皆　こりや、きついもの。面白い事ぢやわいな。

黒助　サア、これからは、お前方もやらつしやりませ。わしは見物仕りませうぞ。

三藏　冬の趣向は瀧野屋の。サア／＼、そこへ。

ト相手にして

瀧藏　どうしてわたしが、この後では。

きく　ハテ、マアそこで

女皆　やらしやんせいなア。

ト瀧藏、こなしあつて立ち出る。

〽お勧めだけに、ちよつぴりと、其まゝ顔へ紅葉狩、粹な仕事も白丁の、彼の林間に温めた

トよろしく振りあつて、おいちを引出し、兩人になり

〽笹の一夜を寢笹の霰、とめどないので轉び合ふ、降ると、濡れるの譯二つ。

トよろしくあつて、おいち一人になり

〽そこが苦界に身を焦す、手練手管に紛らせて。

ト友藏、おあいへこなしあつて、おいち、兩人を引出し

〽實りの秋の姐さん、ちよとこちらへ、苅穂の色に友は、あら氣な、野暮なしに、引く手をちよつと酉の町。

ト、ト右の文句にて、瀧藏、おいち、おあい、友藏と、四人に振りを絡んで、よろしく納まる。黒助、こなしあつて

黒助　ヨウ／＼／＼、面白いわえ／＼。

友藏　これサ、混ぜつ返してはいけねえ。

ト黒助へ思ひ入れして

時に、この人が、今の才藏の鹽梅しきは、なか／＼恐れ入つたものだの。

三藏　その筈サ。この前おれが萬歳の太夫を勤めた時は、この人の父さんが、四イ湯の番頭をして居た男だが、そ

の人を才藏に頼んで、御贔屓を受けた事がありやした。その息子だものを……才藏には生れついた男だ。

黑助　これは、ハヤ、御挨拶だな。

瀧藏　その手際では、なんぞ外に藝があるだらうね。

黑助　イヤモウ、藝がある段か、藝はいろ／＼ある。ちよつとした所が、マア拳だね。

友藏　そいつは面白い、どんな事をやる。見たいものだ。

黑助　さてこの拳も、わしの親仁が、いろ／＼の拳を流行らせた事があるさうだが、わしも又、いろ／＼と工風を巡らして、親仁の拳も少しやらかしたが、この度は久し振りのお目見得だから、矢ッ張り、親仁の仕置いた事がよからうと、御贔屓のお方も仰しやるゆゑ、古めかしい所をやらかします。

三藏　なんでも、親の老舗を開くのが第一だ。サア、古くとも

女三　見たいわいなア。

黑助　さらば、お目にかけませう。必らず古いと云はつしやんな。……ヨイ／＼／＼。

〽酒は拳酒、色品は、蛙、一ひよこ、三ひよこ／＼、蛇ぬら／＼なめくで參りやしよ、じやん、シヤカ／＼／＼、邪慳な婆樣に和藤内が叱られた、虎がはら／＼、とてつるてん狐で、サア、來なせ。

ト黑助よろしく拳の振りあつて

先づ、こんなものだ。

友藏　ヤ、成る程、こいつは面白いわえ。

三藏　それでおれも思ひ出した。

瀧藏　マア、もう一度やつて見せなせえ。

三藏　おれが皮切りに相手にならう。時に、負けた者は、頭を毆りッこはどうだ。

黑助　ズッと好し／＼。その時腹を立てる事はならぬぞ。

友藏　おれがちよつとやつて見よう……そんなら三人一緒に、ヨイ／＼／＼。

〽酒は拳酒、色品は、蛙一とひよこ、三ひよこ／＼、蛇ぬら／＼なめくで參りやしよ、ソレ、じやん、シヤカシヤカ／＼、邪慳な婆樣に和藤内が叱られた、虎がはらはら、とてつるてん狐で、サア、來なせ。

ト三藏、友藏、兩人負けるゆゑ、黑助思ひ入れあつて、髭を撫で

黑助　なんとどんなものだ。恐らくおれに續くめえがの。

友藏　ナニ、今度は負けるものか。

三藏　サア〳〵、敵にお前も出なせえ。
瀧藏　やりませう〳〵。
　ト よろしく、拳ぜりふあつて
皆々　コイ〳〵〳〵。
〽酒は拳酒、色品は、蛙、一ひよこ、三ひよこ〳〵、蛇ぬら〳〵なめくぢ參りやしよ、ソレ、じやん、シヤカシヤカ〳〵、邪慳な婆樣に和藤内が叱られた、虎がはらはらとてつるてん狐で、サア來なせ。
ト此うちに、黑助へかゝり、銘々それ〴〵に負け勝ちある。段々拍子早る事。皆々間誤つく、負けても勝つても黑助を喰はせる事よろしく、トゞごつちやになり
黑助　ア、、コレ〳〵〳〵〳〵、待たんせ〳〵。お前方はわしが負けても勝つても、無性に頭を喰はせるぢやアねえか。モウ〳〵拳は否だ〳〵。歸ります〳〵
　ト思ひ入れ。お菊立つて
きく　ア、コレ待たしやんせ。
　ト思ひ入れ。
〽そりや無體ぞえ、何ぢやいな、お前の世話で主さんを、連れて來つれて、假宅の、しかも初會は、さわりの夜、初名代は合點して、上からしやんした心意氣、〽隣座敷の爪彈きも、さわり文句を辻占に、逢ふ夜、重ねて、眞實が、屆いて年季入れ黑子、野暮らしいでは、ないかいな。
　ト よろしく、黑助、お菊を連れ出で口說き模樣、三藏と絡み、をかしみの振りあつて納まる。
三藏　時に、銘々がやつて居ると、後の番組が遲くなる。
黑助　これから、わッさり。
皆々　惣踊り〳〵。
　ト銘々肌脫ぎになり
〽これのお庭は、ても、さても、粹な、裏梅、飛び梅の、色に市紅と神かけて、吾が妻ぞ、友松が枝と、心に極めて銀杏鶴、いつか、女夫になる瀧野、汀にそつこで、龜遊ぶ、萬世直し、豐年で、謳ふさつてもおめでたや。
　ト散らしになり
〽色も常磐の松柏、繁る森田の實入りより、幾春穐をや、迎ふらん〳〵。
　ト銘々引ッ張りの見得、片シヤギリにて、めでたく

幕

今様望月・劇色悪裏梅（終り）

袖振雪吉野拾遺　――女夫狐

河内の塚本狐
和泉の千枝狐

天明六年十一月、中村座所演の顏見世淨瑠璃で、「雲井花吉野壯士」の大切に出たもの。初世櫻田治助の作で、今から見るとなか／＼面白いが、その頃としては顏見世淨瑠璃には必らず狐とか樹木の精とかゞ出るのは慣習であつたから珍らしくもないのだが、數ある中でこれは今日まで不思議に傳存してゐる。殊に京坂で流行したのはこの淨瑠璃の特徴である。尤も初演の主演者が大坂の俳優であつた所爲もあらうが、今日でも京坂の方が上演度數が多い。尤も今日の京坂では女夫狐でなく、又五郎一人の踊になつてゐる。今日は富本のは廢曲となり、常磐津のが傳はつてゐるが、淸元のも傳はつてゐて、これもどこやらの古老が知つてゐるさうである。初演の役割は、正行（三世澤村宗十郎）又五郎（三世嵐三五郎）內侍、千枝狐（嵐村次郎）杉本佐兵衛（初世尾上松助）で、この時は又五郎が葛の根之助、佐兵衛の本名は宇都宮公綱であつた。本集へ加へたのは、天保十四年十一月市村座所演のものである。別名題として「御攝花吉野拾遺」「吉野山雪の故事」「花降吉野鐫」なぞがある。

袖振雪吉野拾遺（女夫狐）

吉野山正行閑居の場

役名――楠正行。辨の内侍。辨の内侍實ハ和泉の千枝狐。杉本佐兵衛。實ハ淨辨法師。衛士、又五郎實ハ河内の塚本狐。

常磐津連中

本舞臺、下手、大樹の櫻、日覆より同じく吊り枝、正面、通し高二重、瓦燈口、櫻丸の欄間、上手に障子屋體、この障子、仕掛けあり、よき所に太夫座、爰に常磐津連中居並び、櫻の幹に非理法權天と書いてあり。この道具、雪景色よろしく、雪颪しにて幕明く。

ト直ぐに前彈きになる。

〽臥龍の昔忍ぶ垣、松の柴垣竹の簀戸、楠帶刀正行が、雲井櫻の返り咲、よしや芳野の都とて、館を守護の侘び住居。

ト二重の御簾上がる。正行、壺織り衣裳、文臺に倚り短册を書いてゐる。

正行　爰にても、雲井の櫻咲きにけり、たゞ假初めの宿と思へど、と御製ありける雲井の櫻、一陽來復の返り花は、聖運の花咲く都へ再び返り花。折柄の雪花吹雪、實に白妙の詠めぢやなア……それはさうと、上市の酒屋、吉野屋が置いて去んだ一銚子、寒さ凌ぎに、ドリヤ、燗を暖めようか。

ト火鉢へ銚子を掛け、鼻紙にて煽ぎ居る。雪颪し、合ひ方になり、向うより杉本坊、寒念佛の拵らへ、ばつてう笠、提灯を持ち出で來る。

杉本　ハヽア、降つたる雪かな。ソレ、雪は打綿に似て、飛んで散亂し、人は鶴氅ではない衣を着て、この雪の中に立つて徘徊するも、正行どのゝ假の住居、度々音なへども、兎角に對面下されぬは、おれが心を疑うてか。今日は是非々々こぢ付いて、詫びの種なる瓢酒。アヽ、飲みたいなア〳〵。イヤ、嗜みませう〳〵

ト立ち寄り、鉦を叩いて、念佛唱へる。内より

正行　ホヽウ、寒念佛さうな。アヽ、何をがな……幸ひ
幸ひこの熱燗。ドリヤ、一つ報謝進ぜ申さん。
〽いで參らせんと、立出で給ひ、顔見合せて。
其ノならば、罷り成らぬ。通りや〳〵。
杉本　アヽ、お情ない。この林下の離れ家、雪道分けて參
りましたこの修行者、先君の勝ち軍に、泣いて手柄の杉
本坊、この佐兵衛入道を、何ゆゑあつて御勘當、
　ト此うち正行、見臺の本を見て居て
正行　ハヽヽヽ、泣いた事を云ひ立てに、勤行を取らば、
鶯雲雀は千石取り。とつとと爰を去るまいか。
杉本　すりやどうあつても。
正行　對面叶はぬ。立歸れ。
杉本　ホヽホイ、
〽なんと詮方傍なる、小柴の下に佇みぬ。
　ト杉本坊、木蔭へ入る。
〽逢ひ見んと、思ふ心の一筋に、踏みも習はぬ道もせの、
雪を拂うてやう〳〵と、庵間近く來たりける。
　ト此うち、ドロ〳〵、三芳野、小内着、振り袖、塗り
下駄にて、傘をさし、スツポンより出る。雪チラ〳〵
降る。本舞臺へ來り

三芳　三芳野の、山の鶯事問はゞ、いづくにありて、花
は咲くらん。
正行　ハテ、心得ぬ今の吟聲。この三芳野へ、君御歸館の
砌り、清水法印へ賜はらせける御製。しかも女性の聲た
りしが。
三芳　さういふお聲は、正行さま。
正行　其方は慥か辨の內侍。
三芳　イヽエ、わたしは三芳野といふ、白拍子でござんす
わいなア。
正行　その白拍子と姿を替へ、御前を拔け出で、忍びのお
出でか。
三芳　エヽ……イヤ、大君の勅諚。
正行　なんと。
三芳　正行の宿の妻に、この辨の內侍を、三芳野と名を改
め、下し賜はるこの一首。
　ト短册を出す。正行取つて
正行　かゝる世も、よしや芳野の山櫻、宿の物とてかざし
にもせよ……是非に及ばぬ。勅諚に從ひ
三芳　女夫になつて下さんすか。
正行　ハテ、どうなりと。

三芳　オヽ、嬉し。
ト　この前より、杉本坊、そろ〳〵内へ入り、聞いて、泣いて居て
杉本　ハア、。
ト大泣きに泣く。兩人、悔りして
正行　佐兵衛坊主め、いつの間に。
三芳　いま泣いたのはお前かえ。
杉本　アイヤ、愚僧ぢやござらぬ。お前様、いま殿様と睦言に、いとし間の一時雨、我れも昔は。
〽戀衣、黒き羽織に小脇差、醫者の眞似して剃刀に、無常の風へ媚てられ、遣ひ果して寂滅の、責め念佛の六字詰め、掛け盤双盤經机、破れ傘一本で、泣く〳〵寺をくれんぼう、はつち〳〵か願人が、懺悔に罪も南無阿彌陀、
杉本　謠代りの念佛は、この仲人が頭役。お前は先へ小座敷で、閨暖めて、ナア、申し。
三芳　それでも、どうやら。
杉本　ハテ、思ひ合うた新枕、契りは千秋萬々歳。
〽千箱の閨の玉の床、打連れてこそ入りにけり。
ト三芳野を無理に、小座敷へ突きやり、障子をさし

サア、旦那様も、早うあそこへ。
正行　ヤイ〳〵佐兵衛、おのれは爰へ誰れが許して。
杉本　ハイ、お許しはござりませぬが、内から出かけに引ツかけた、どびろく酒が過ぎまして、それで思はず……ハイ、御免なされて下さりませ。
正行　ハテナア。
〽疑ふ心、散らす雪。
杉本　旦那様、あの櫻に、非理法權天と記せしは。
正行　兒島三郎高徳が、昔を今に返り花。父正成が殘せし五言。なんと面白いの。
杉本　恐れながら、感心仕りましてござりまする。
〽見遣る外面に怪しの烏。
ト差し金の烏、雪土手へ出る。
杉本　山烏、頭も白くなりにけり。
正行　我れ歸るべき時や來ぬらん……雪を戴く烏の有様、
杉本　羽には雪を持ちながら、フム、さては寶の御鏡が。
正行　何がなんと。
〽と云ふ間あらせず、早速の手裏劍。
ト杉本坊、火箸を手裏劍に打ち、烏に當る。
ヤア、科なき烏を

杉本　雪を防ぎの寒烏
正行　濁り酒の肴とは
杉本　出家の業には不遠慮ながら
正行　鳴かぬ烏に
杉本　泣く坊主。
正行　天晴れ手の内。
杉本　後程、お目にかゝりませう。
〽互ひに胸の内と外、引別れてぞ入りにける。
ト杉本坊、烏を持ち、下手へ入る。
〽正行、後を見送りて。
正行　顏見知らぬを幸ひに、佐兵衛と僞はり近づく曲者。今の烏の振舞ひに、寶の鏡の秘めある事、悟りし樣子は、ハテ、心得ぬ。
〽暫し思案に暮れの鐘。
ト辨の内侍、振り袖、抱へ帶、駒下駄、肩袋、杖を突き出て來り
〽野路も山路も白妙に、跡降り隱す初深雪、憂きを菅笠市女笠。
ト辨の内侍、振りある。又五郎、仕丁の拵らへにて後より出で來り

〽遙か下がつて白丁の、白きも雪に埋もれて、吹雪に凌ぐさむしろや、我れも憂身の妻乞ひかねて、あの山見さい、この山見さい、梢も雪に見え分かで、思ふ人同士、草隱れ、なれも諫めつ諫められ。
ト振りあつて、本舞臺へ來る。
又五　イヤ、モウ、この雪風で、惱ましう思し召しませう。あの庵が戀人樣の御在所。サア〳〵、お出でなされませ。
内侍　姿をやつし、館を脱け出で、途中にて難儀の折柄、其方の介抱、禮に詞に盡されぬわいなう。
又五　なんのお禮に及びませう。ちつとも早う、あの庵へ。
内侍　伴うてたもいなう。
〽いそ〳〵庵に立寄りて。
又五　お頼み申しませう。
正行　この大雪に案内とは……して、いづれより。
又五　ヘイ、御所からのお使ひでござりまする。
〽詞に驚ろき立出でゝ。
ト正行、手燭を灯し、枝折り戸を開き出る。此うち、辨の内侍、又五郎に囁く事あつて、内へ入る。

正行　そちや誰れおや。

又五　エ、……ヘイ、私しめは、オ、、ソレ、衞士にござりまする。

正行　して、名は何と申すぞ。

又五　サア、慥か衞士の又五郎とか申しまして、今日、内侍さまの御難儀を、救ひました者でござりまする。

正行　ナニ、内侍とは。

又五　ハテ、辨の内侍さまが、お前樣を焦れ慕うて、駈け込みた房でも、美しきそのかんばせ。サア〳〵お逢ひ御此方へ〳〵。

〽此方へ〳〵と手を取りて、伴ひ内へ入りにける、それと内侍は、取縋り。

内侍　正行さま、お懐かしうござりましたわいなア。

正行　ハテ、合點のゆかぬ。辨の内侍は最前これへ。

又五　すりや、内侍さまと姿をやつして。

正行　アイヤ、たとへ幾人參るとも、誠の辨の内侍にせよ、慥かな證據見た上で。

内侍　その疑ひは聞えませぬ。あなたの御自筆で、送り給ひしこの短册。

正行　ドレ。

ト短册を見て

如何にも、某が手跡といひ、包む袱紗は、楠家に傳はる菊蔓錦。して又、舍人の又五郎は、内侍の見知り一者なるや。

辨の　なんのいなア。吉野の御殿には、見馴れぬ舍人。

又五　成る程、お見知りないは御尤も。上樣が花山の御所にまします折柄、假の節會や、お庭の塵芥を淸めの役。この吉野へ移らせ給ふその時より、女房の行くへが知れませぬゆゑ、方々と尋ね廻り、折よく今日、内侍さまの御難儀を、お救ひ上げたも、盡きせぬ御緣でがなござりませう。

正行　して、その女房は。

又五　今に、行く〳〵が知れませぬ。

正行　イヤ〳〵、一向會得せぬ、内侍どのも合點がゆかぬ……誠の内侍、仕丁なら、御所に於ての年中行事、知らぬとは申されまい。

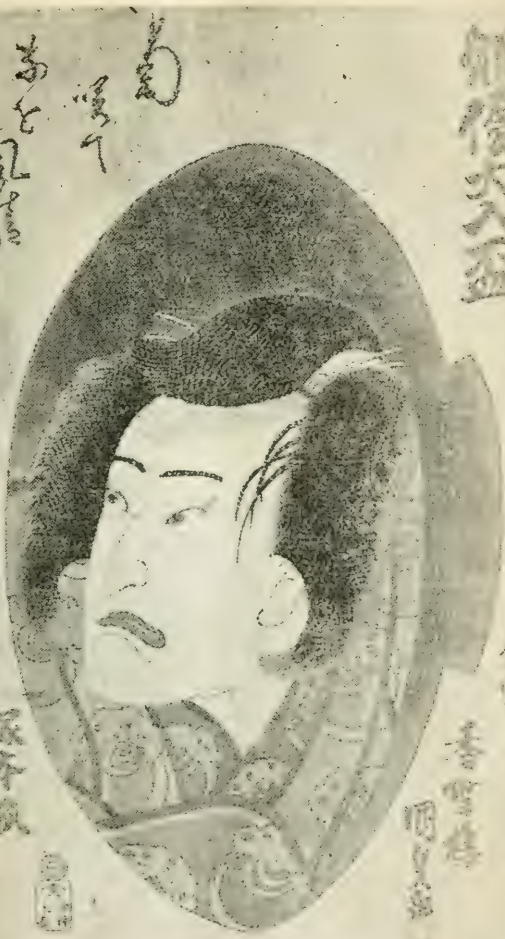
内侍　それを知らいでならうかいなア。

又五　サ、、問はつしやりませ。

正行　然らば、節會儀式の謂れは。

内侍　その荒ましを

両人　申すべし。
〽掛けまくも、畏こき御代の昔より、王法佛法相應じて、年月毎に行ひ事、參賀節會の式ありて、四海を治め給ふなり。
正行　先づ正月の元旦は。
ト太夫、下座双方のギッチャウになり
又五　天地乾坤、四方拜、屠蘇栢散の參賀あり。
内侍　はらかの御贄、氷の例しは、八百萬の御神へ。
又五　年の始めの禮拜あり。
正行　祇園神事の削りかけ。
又五　裏白、橙、ほんだはら。
正行　子の日の遊び下り立つて
〽靜けき春の、小松に蝶の翅をしめて、扇の要、つま紅ゐの。
上の申の日、春日祭り。
又五　上の卯の日は、大原の神事。
内侍　着連れて連れて如月や。
正行　稻荷祭りの
又五　土産物、
〽すゞやつぼ〳〵風車、彌生になれば、鷄合せ、とりどりに、桃花の節會曲水や。
正行　桃の杯びいどろを、逆さに釣つた雛の容、
又五　二八餘りは温なしく、穗に現はれて櫻々
内侍　女夫ごととして貝合せ。嬉しうなうて
〽なんとせう。これ見やしやんせ蛤の、千尋の濱に育ちても、外の貝には合はぬと云へば、女子の操殿達も、同じ心ぢやあるまいか、櫻は散らで紙鳶を、風が取持ち、轉び寢や。
又五　卯月にお扇子奉り、手づから開かせ、やゝ暫し
内侍　葵車や、みあれ山。
又五　てつぺいかけて時鳥。
内侍　端午の節句は菖蒲葺く。
正行　轡兜や
又五　競べ馬。
正行　はや水無月の祇園會に
内侍　七夕樣へ短册の
又五　さゝら太鼓や
内侍　盆踊り。
〽初秋や、名も文月の戀の謎、銀河祭りの戯むれや、よい〳〵〳〵〳〵よいやさア。

卜辨の内侍、振りある。此うち、又五郎、茶碗にて酒
を呑み、醉うたるこなしにて
又五　月見る月の放生會。
内侍　重陽の宴、菊の酒。
正行　彼の南山の菊酒に、齡を延ぶる不老不死。
内侍　恩を忘れず慕ひ來て
正行　ヤ　なんと。
又五　共に逢ふぞ嬉しき、この友に……エ、イ。
正行　コリヤ、又五郎、たんと醉うたな。
又五　醉うたとも〳〵。今の杯
正行　助けてくれいか。
又五　よもすけじ、萬の神は出雲路へ。
〽集まり給ふ御神の、その託宣は、御代豐、熱田の惠み
穗に穗が咲いて、湊山里の賑ひに、誘うて連れに鹿島立
ち、遲れて路を大社、最早北野の客人達が、神子が取持
ち、神主が、奏す神樂の音の面白や、浮かれいづもの七
人一座、そりや來た、お銚子持つて來や、唐子、飲めや
謠へや、たらふくの、神も形も美しき、辨天どんな惚れ
過ぎつ、毘沙門さんがじやらつきを、横に小槌のもつれ
て大黒、腹を立て〳〵、灰吹きかち〳〵、取持つ壽老大
盡が、野暮とめかすがをかしくて、布袋られない色酒
に、惠比須いたならこれしきの、口說き、辯說福祿が、
頭役とて、まん丸な。
卜又五郎、右の所作あつて
正行　鳰の正月、冬至に當り
又五　豐の明りの五節の舞。
内侍　袖も幾重や、十二月。
正行　追儺の節會、鬼やらひ。
又五　めでたく御代の
三人　まつり事。
〽口に任せて口拍子、詞に鼻の先智慧は、許させ給へと
興じける。
又五　なんと、これでお疑ひは
正行　晴れたとも〳〵。
内侍　そんならめでたう　杯事。
又五　幸ひ爰に銚子土器。
正行　先づ其方から、
内侍　イヤ、あなたから。
〽取り合ふはずみに、砕ける杯。
卜正行、わざと取落して

天保十二年十一月市村座所演

正行　これはしたり、土器が二つになつたは、なんとやら氣がゝりぢやなア。

内侍　アイヤ、杯も割れてぞ出づる雲の上。

正行　又五郎、下の句を。

又五　サア…星の位の光り添へばや。

正行　イヤ、天晴れ秀吟、面白い。その杯、外へ捨てい。

〽ハッと心得、はずみを打つて、砕けし土器、投げ捨つれば、

正行　アヽ、待て〳〵。杯を月に准へし上の句、星の位の歌の心に、取りは捨てられぬ。土器を取つて参れ。

〽畏まつたと草鞋を穿かんとすれば。

ハテ、穿かずと其まゝ、取つて來い。

〽ハッと走りて雪の中、件の土器持ち歸り。

又五　ヘイ、取つて参りましてござりまする。

ト正行、此うち、枝折り戸より手燭を上げ、花道を見る。

〽差出す衛士に目もやらず、正行庭をきつと見て。

正行　フム、雪に殘せし、又五郎が足跡。

ト雷序になり

又五　エヽ。

ト思ひ入れ。辨の内侍、悧りこなし。正行、附け廻しになり

正行　狐狸五百年に滿ちて、よく姿を變ず。汝はさる頃、花山の御所にて、この正行に變身せし、野狐なりとは、疾より睨んだ我が眼力。

〽いで正體をと秘め置きし、寶の御鏡さし付くれば、衛士の姿は忽ちに、掻き消す如く、失せにけり。

ト正行、懐より、袋入りの鏡を出し、さしつける。又五郎、最前の矢立を啣へ、障子屋體へ消える。正行、驅け寄るを

内侍　お待ち遊ばせ正行さま。あなたへ仇なす野狐ならば、妾が難儀は救ふまじ。信僞を糺して、オヽ、さうぢや。

〽入らんとし給ふ、隔ての障子に、顯はす文字。

ト障子屋體を明けると、仕掛けにて歌現はる。

正行　ナニ〳〵、和泉なる信田の森の楠の千枝に別れて物思ふとは……フム、さては最前、來りし内侍は。

内侍　ア、モシ、只この上は、ナア。

ト囁く。

正行　オヽ、サ、片時も早う。

内侍　アイ。

〽あいと內侍に甲斐性氣に、暫し木蔭に忍ばるゝ、正行奥へさし向ひ

正行　閨に內侍に用がある。ちよつと爰へ……フム、返事なせねば、こりや聞えた。今日からは、正行が宿の妻、名も三芳野と改めたものを……三芳野々々々。

〽呼べど答も中垣の、隔ての襖さし覗けば、衣打ちかつぐ寢姿を、見るに不思議と立ち戻り。

矢ツ張り閨によう寢ておや。ドレ、身共もそこへ……イヤ〳〵、最前の酒で、きつう醉うたれば、この雪風で、醉を醒まして。

〽云ひつゝ心、奥の間の、樣子窺ふ空炷きの、香を隱して肱枕、閨の襖にあらねども、明けて云はれぬ身の辛さ、溜める花の色おうて、匂ひ殘れるその風情。

ト三芳野、出で來り

三芳　申し、殿樣、雪風をお受けなされませう。お寢間へお入り遊ばしませ。

ト寢ころびし正行を見て、思ひ入れあつて

我れは元より人間ならず、楠家代々の御領分、和泉の國に年を經る、信田の森の楠の

〽狐ぞや、夫は河內の塚本狐、樣子あつて過ぎし頃、花山院の御殿にて、宇賀の御魂の名玉を、正行公に奪ひ取られ、命婦の神の咎めを受けるその折柄、我が夫狐の行くへも知れず。

〽尋ね暮らせど和泉なる、信田に幾年獨り寢の、恨みくづおれ、泣き明かし、又は戀しき夫狐、千枝に別れて物思ふ。障子に殘すうたかたの、哀れと思ひ給はらば。何卒、名玉申し受け、夫に與へん願ひにて、內侍さまの姿と變じ、お側へ近附くこの身の望み。

〽聞き分けてたべ、推してと、しやくり上げたる溜め淚、思はずわつと泣く聲に。

正行　オヽ、その物語りを聞く上は、何しに玉を惜しむべき。

三芳　ハヽヽ、有り難や、御大將の御仁心。聞かしやんしたか、こちの人。

〽妻が呼ぶ音に誘はれて、姿あり〳〵又五郎。

ト大ドロ〳〵、又五郎、狐の拵らへにて現はれる。

〽戀しい床しい懷かしと、人目も恥ぢず集ひ寄り、交す詞は洩れねども、淚々のつま思ひ、人間よりも睦じゝ。

正行　さてこそ、いつぞや、この正行と化して、名玉を殘せし仔細は如何に。

又五　ハヽ、勿體なくも、正行公と姿を變じ、上の御難儀救ひなば、昔に返る女夫狐、官上がりと喜ぶところ、思ひ掛けなき寶の玉の、威德に恐れ、命婦の神より預かりし、名玉を取落し。

〽恨之介が身の誤まり、その名玉を取り得ねば、盡未來、畜生界は、ア、出でやらず。

　又もや內侍さまの御難儀を、お救ひ申せしも、その玉を申し請けん下心。

〽憐れみ給へと、座をすさり、敬ひ詫ぶるその有樣、女夫狐の諸袖に、雪も雨にや散りぬらん。

正行　オヽ、いしくも汝計らうたり。切なる心に名玉に、返し與ふる。持つて行け。

〽ハツ／＼、有り難や、忝なや、夫婦は三拜九拜の、隙を窺ひ後より、玉奪ひ取る杉本坊。

ト正行、名玉を又五郎に渡す。後より杉本坊出で、これを引き取る。

コリヤ、何をする。

杉本　ヤア、大切なる名玉を、野狐めらに渡さうか。早く爰を立歸れ〳〵

又五　オヽ、歸る道も吉野川。

杉本　中々流して

又五　妹山

三芳　脊山

正行　妹脊狐が

杉本　小唄節にて立歸れ〳〵

又三　合點ぢや。

〽さても揃うたえ、よう似た／＼、さつてもよう似た、よい子の／＼その風俗で、二世の男と共に來て、嬉しい言の葉、男狐と、誰が夕暮れに雪降る吹雪、降る／＼、嬲男。

ト振りのうち、件の玉を杉本坊、落す。又五郎取つて、三芳野に渡し

又五　君の御身に取つた、名玉持つて、早急げ。

三芳　こちの人、我が君さま。

正行　行け。

〽去なうやれ、我が故郷へ歸ろやれ。

ト杉本坊、支へるを振り切り、三芳野、玉を持ち、花道すつぽんへ消える〳〵

杉本　ヤア、野狐が肩を持つ正行。この上は汝が所持の寶の御鏡、此方へ渡せ。

正行　黑かや杉本坊、佐兵衛とは僞はり、誠は淨辨律師であらうがな。

又五　サア、實名を明かすまいか。

杉本　斯くなる上は何をか包まん。推量の通り、淨辨律師とは、おれが事だワ。

兩人　さてこそなア。

杉本　おれが出世の種にする。寶の名鏡、此方へ渡せ。

〽いで奪ひ取らんと立ちかゝる、内侍は一間を出で給ひ

内侍　その名鏡は、内侍が守護なし、即ちこれに

ト辨の内侍、名鏡を持ち出で來る。

正行　この上は、願ひ叶ひし根之助、早く古巣へ立歸れ。

又五　ハヽ、有りがたき。元の官位に戻りしも、正行公の御情。今より夫婦心を合せ、芳野の守護なし奉らん。

杉本　サア、名鏡をキリ〳〵渡せ。

正行　何、小癪な。

〽我が敵は[illegible]、[illegible]河内の塚本や、和泉の千枝、楠の、實名[illegible]常[illegible]津[illegible]、代々に傳へて遺しける。

ト[illegible]にて、眞中に杉本坊、皆々よろしく、[illegible]得にて

皆々　どつこい。

先づ今日はこれぎり。

幕

袖振雪吉野拾遺（終り）

戀角觝顔競──新角力
鴛鴦襖閨睦──新鴛鴦

弘化四年正月、中村座上演の淨瑠璃である。角力、鴛鴦ともにこの時の發案ではない。安永四年十一月中村座で「四十八手戀所譯」といふ富本淨瑠璃が出た、これがその濫觴で、仲藏の股野、三五郎が河津と鴛鴦、菊之丞が誰ケ袖と鴛鴦であつた。この時は顔見世の四建目で、前にいろ〳〵の狂言があつて、鬼王なぞも出てズッと長かつた。これをアレンヂしたのが文政十一年正月中村座上演のもので、角力は「四十八手戀所譯」で富本、鴛鴦は「鴛鴦容姿の正夢」で常磐津、これは兩方とも今日に傳はつてゐる。更にこれを訂正したのが、この新角力に新鴛鴦で、角力の方は殆んど文政十一年の時と同じで、鴛鴦の方は稍文句が變つてゐる。これも兩曲とも現存してゐる筈である。この時の訂正者は藤本吉兵衞らしく、富本は豐前太夫と鳥羽屋里長、振附は藤間勘右衞門である。この兩曲を夢にして時致の閑居を附けたのは吉兵衞の新案である。役割は、祐安、時致（八世市川團十郎）喜瀨川（岩井粂三郎）鴛鴦（尾上多見藏、尾上菊次郎）景久（坂東彦三郎）彈正（中村鶴藏）であつた。

戀角觝顔競（新角力）
鴛鴦襖閨睦（新鴛鴦）

相撲の場
鴛鴦の場
閨居の場

富本連中

役‖河津三郎祐安。股野五郎景久。遊女、喜瀬川　雌鴛鴦の精。雄鴛鴦の精。劒澤彈正左衛門。曾我五郎時宗

本舞臺　一面の山幕、上の方、藪疊。この際に誂らへの石の塔婆、日覆より松の吊り枝。すべて相州箱根山、麓の模樣、爰に愛甲三郎、尻端折りにて、こんな太神樂と雲助の兩人、留めて居る。山颪し、馬士唄にて幕明く。

三郎　わりやア、いつぞや江の島で、ちよつと見かけた太神樂、なんでおれを留めるのだ。
太神　なんでとは白々しい。昨日曾我の十內どのが、持つてござつた矢の根をば
雲助　祐兼さまが取り得んと、そのドサクサに素早くも
太神　浚つて逃げた厄拂ひ。金になりさうな代物ゆゑ
雲助　おいら二人が
兩人　貰ふのだワ。
三郎　エヽ、何を吐かしやアがる。

　ト三郎こなしあつて

なんの矢の根はその時に、箱に入つた其まゝで、川へほかしてしまつたものを。それをおれが知るものか。そんな無駄は正月の、二つある時の事にしろ。キリ／＼そこを除けて通せ。
太神　矢の根がなけりやアまだ外に、てめえが大事に懐へ
雲助　隱して持つた、その書き物。

　トかゝるを、よろしく突き廻し、三郎こなしあつて

三郎　エヽ、此奴らア、十內が持つて居た矢の根を欲しがるのみならず、おれが懐に隱し持つた、この墨付を欲しが

ゐからは、併し見たところ、名ある太神樂ども見えねえが、おれも今こそ[illegible]、世にある時は鎌倉で人に知られた、愛甲三郎。歸參の種にする書き物。うぬ等に渡してつまるものか。

太神　さう吐かすからは。

雲助　是非ともおいらは。

三郎　何をうぬらに。

ト立廻り。此うち三郎、書き物を落す。太神樂、それをトかゝる、よろしく立廻り。雲助太神樂、下に、三郎と引合ひ見て

三郎　淨瑠璃名題……富本豐前太夫ワキ。

ト立廻つて

太神　相勤めまする役人、坂東彥三郎・岩井粂三郎、尾上多見藏、尾上菊次郎、市川團十郎。

雲助　右の役人殘らず、罷り出で、相勤めまする。……第一番目、四建目、淨瑠璃。

ト三郎、無禮と引ッたくり

三郎　その爲、口上。

三人　左やう。

太神　ムウ、そんなら誠の墨付と思はせて、おいらを釣りやアがつたな。

三郎　なんであらうとその書付け。

兩人　イヤ、うぬには。

トよろしく早めし鳴り物になり、三人立廻りながら、上の方に入る。ト大ドロ〳〵になり、金ばりの、心と云ふ字、山幕より日覆へ引いて取る。大ドロ〳〵、これと共に上手の石卒塔婆、仕掛けにて、紅白の梅の立ち木になる。藪疊を引いて取り、松の吊り枝折り返し一面櫻の吊り枝、山幕を切つて落す。

本舞臺、上の方へ寄せて九尺の障子屋體、銀襖り、花丸の欄間。これに續き、正面へ折り廻して塗り骨障子屋體の前づら。この前に、柴垣、網代の見切り紅白梅の振り好き臺幹。下の方、富本連中の淨瑠璃臺、網代の折り返しにて、これに居並ぶ、上の方に誂らへ柵付きの浪板、福壽草その外春草。日覆より梅の吊り枝。誂らへの道具に納まる。

ト直ぐに前彈きにかゝる。

〽俳優に寄す彩畫の今の世に、語り傳へし河津がけ、譽はしるき坂東の、手だれ名に負ふ市川と、引く手爭ふか

なよ花、股野取組み、喜瀬川が、岩井諺く睦月。

ト置き浄瑠璃あつて、角力太鼓・セリの鳴り物になり上の方に、祐安、莫大なる羽織衣裳大小にて・下に景久、同じく拵らへにて、双方刀を突き見得。中に、喜瀬川、襠裲かいどり衣裳、軍配を持ち立ち身。右の鳴り物にてセリ上がる。道具納まりて、直ぐに

〽抑々角力の濫觴を、語るも聞くも、遠つ國、天竺にては常在世、唐土にては昔の御代、さて日の本にて始まりしは、

トぎつちよになり。これより合ひ方、下座へ取る

喜瀬　しかも人皇十一代、推仁帝は粋な君。抱き付かせたり、手わしざせ、叡覧あるがお好きにて。

祐安　お戯れに誠となり、諸國の力者に命せられ、相撲の勝負ぞ。

〽始まりける。

景久　大和に當麻の蹶速とて、毛だらけ男の毛濁山、毛深い長野の禰宜にて、肩臂張つてぞ。

〽扣へたる、その骨柄こそ勇々しけれ。

祐安　相手に撰り出雲の國、野見の宿禰と申せども、酒は少しも奈良の京。

喜瀬　九重匂ふ花角力。

〽大内山の春の色、その立合ひも百敷や、桃に櫻に手折り柳。

色香爭ふ

祐安　その風情。

景久　前代未聞の

三人　晴れ業は。

〽花々しくぞ見えにける。

景久　蹶速は人俵ほさつなり、色あさ黒くさし肩にて

喜瀬　意地の悪そなお顔つき。

景久　エ、・おきやアがれ。

祐安　宿禰は人俵力士なり、頭小さく、裾ふくら。

喜瀬　しかも色白、よい男、心立てなら、器量なら、ほんに女子の宿禰さん、戀の手取りおや

〽あるまいか、いつかお前と取組んで、玉章砕いて末かけて、深く大關縁あらば、嬉しからうぢやないかいな。

〽此詞に寄せし言の葉は、土俵の形関かにして、即ち天を顯はしたり。

祐安　柱に四方のその形、地になぞらへし地大體。

景久　幕は北より引き始め、北へ廻して引き終る。

祐安　元より北は陰にして

景久　水に戻つて陰陽の

喜瀬　妹脊の仲にも末かけて

祐安　結ぶと云ふも

三人　角力の名。

〽戀の取持ち取組みに、忍び大關逢ふ夜を便り、人目關脇いとうても、二人の中に小結の、約束堅き岩出帶、早かぞ色の前頭、顯はれ月の恥かしや。

ト右の文句にて、祐安、景久、喜瀬川三人、よろしく拍子舞より手踊り模様あつて、よろしく納まる事。この振りのうちに、景久、懷中より件の矢の根・錦の袋入りの院宣を落す。手早く取り懷中して、よろしく三人納まる事。キッと見得。三人よろしく、淨瑠璃の合ひ方にて、祐安、景久とちよつとこなし、喜瀬川、思ひ入れあつて、これを分ける。心急ぎ双方よろしく氣味合ひ、始終右の合ひ方にて、上手の屋體より誂らへの柱を喜瀬川持ち出る事。これを枷に兩方を留める。景久の懷へ祐安、心をかける思ひ入れ。これを支へながら柱を運ぶ。この仕組みよろしく、柱の數五つあり。よろしく鳴り物あしらひ、柱を置き並べる事。トヾ祐安、景久にちよつとかゝる。喜瀬川これを留め

喜瀬　ア・コレ。

ト兩方、ムッと、意氣込む。

お角力始まり。

ト思ひ入れ。双方分かれる事。四股を踏む、

東の方やは、股野さん。西の方やは、河津さん、源平勝負の

景久　花角力。

喜瀬　イザ、立合うて。

祐安　イザ。

景久　イザ

兩人　イザ〳〵〳〵。

トこれを大小入り淨瑠璃の合ひ方。これより景久、祐安、双方土俵入りの四股踏み、振りよろしく、本行の通りあつて、双方肌脱ぎとなり、兩人出る。膝すて、負け投げ、腕ずり。

兩人　アリヤ〳〵〳〵。

〽よいやサ。〽矢柄四つかい、膝櫓、コ　ヤノ〳〵〳〵〳〵。

〽ヤットセ。〽捻りつまどり、太鼓おとし。アリヤ〳〵〳〵。

アリヤ。〽ヨイヤサ。〽鴨の入れ首・腰車、コリヤ〳〵

コリヤ〳〵、〽ヤットセ〽鴫の羽返し向うづけ、アリヤ〳〵〳〵コイヤサ、〽隠れば外し、追へば除す、桃花の節會の取合せ、勇む心は春駒の立ち上がらぬが風情にて、四十八手も尚足らで、百手を砕いて取つたりける。萬夫不當と呼ばれたる、股野河津が取組みは、目覺ましかりける次第なり。

ト右の文句にて、景久祐安よろしく角力の所作ダテあつて、チラシになり、喜瀬川、三人、トゞ立廻りにて景久を祐安よろしく投げる仕組み好みの通り。景久、ムッとして氣を替へる事。喜瀬川こなし。祐安よろしく思ひ入れ。

祐安 勝負は時のはずみにて

喜瀬 今のは見事河津さん。

景久 ま、勝つたからには源氏の味方。殊に約束通り喜瀬川も、こなたに靡る。心の儘に抱いて寐やれ。

祐安 そりや、これまで執心あられし女を

喜瀬 ほんまに今日から河津さんへ。

トこなし。

景久 どうでも色事にかけちやア、恐らくおぬしに立合ふ角力は世間にねえ。所でおれも、今日から通り者になつて、この喜瀬川は……ソレ、早く二人で。

ト突きやる。

喜瀬 エヽ、なんにも云はぬ。嬉しうござんす。

祐安 併し今さら景久どのに、どうもそれでは、

ト云ひながら、よろしく立寄る。

景久 オット、斟酌せずと、早く〳〵。

〽せり立てられて祐安が、打連れ一間へ入りにける。

トこれにて祐安喜瀬川、手を引き合ひ、景久こなしあつて押やる。兩人、上の方の障子屋體へ入る。時の鐘、景久あと見送り、こなしあつて、淨瑠璃臺、太夫座を消す。

三箇の莊の事よりして、表には顯はさねど、遺恨を含むあの祐安、彼奴が世にあるその時は、大望の妨げゆゑ、何卒彼れを亡き者になさんと、思ふ折から、喜瀬川めが祐安にうッ惚れたを幸ひ、事に寄せ彼れが心を蕩かす魂膽……ムウ、これでよし。

トきッと思ひ入れ。風の音、好みの合ひ方になり、片手の流れへ、差し金の鴛鴦顯はれる。キッと、見やり

凄き合ひ方になり

流れに番ふあの鴛鴦……傳へ聞く鴛鴦は、雌雄の執着深

本曲上演當時の繪番附

俯向く。ドロ〳〵。このドロ〳〵をかりて、舞臺よき所へ、雄鳥の鴛鴦の精、本行好みの拵らへ、背付け、薄色の水衣、浪の模様付きたる薄物の袴、好みの鬘うしろ茶筌にてセリ出す事。双方こなし。これにて、雌鳥も氣を替へ、人間の心の振りになるべし。

〽窓の梅ヶ香ほんのりと、殘んの雪に水際の、氷る劔を餘所目を忍び、閨の空焚き、小夜風に、消える灯火水洩らさじと、契り川瀬の柵ぞ。

トこの文句にて雌雄の鴛鴦、双方心々の振りよろしく、舞臺を見通りてあるべし。此うち雌鳥も舞臺へ來り、雄鳥と入れ替る事、などよろしく、心は互ひに我が夫か妻かと見合す心、文句に合せてよろしく、この仕組みの振り、文句のうち、正面遠見の屋體、灯入りの障子のうち灯火消える事、兩人これを恨み侘びる心の振りあるべし。兩人、見合ひ、我が形を見るこなしあつて

〽地に返りし妄執に、五つを假の人形や。

ト兩人振りあるべし。我が形を見て假に人の形になり來りしと云ふ心の振りあるべし。この文句切れて、雌雄の鳥の精、見てこなし。

〽御身は夫か鳥々に。

ト見合す振り、雄鳥も妻鳥かと云ふ振り。

〽尾上を分けて、こと鳥の、おろの鏡や幻の、姿見交しつま鳥へ、

トこの文句のうち、双方袖を翳し、振向き合ひ見合す振り、山鳥のおろの鏡をいふ故事を思ひつきし好みの振り誂らへあつて、兩人手を取り交し、双方いよ〳〵女房か夫かと云ふこなしあるべし。此うち、すべて鳥になる事、また人間で居る事、双方よろしく、振りの好みあるべし。

〽交す言の葉睦まじく、ありし添ひ寐の妹背川、浮世を渡る花筏、離れ〴〵になるとても、深き契りの思ひ羽に、焦れ涙の濡れ翼。

ト兩人よろしく振りあつて、この文句のうちよろしく兩人振り、段々本性を顯はす仕組み。これにて、ドロドロ。兩人、引抜き、鴛鴦の形になる。ドロ〳〵浮瑠璃、合ひ方にて、兩人、鴛鴦の狂ひよろしくあつて、納まる。

雄鳥　身は浮草のそれならで、千代もと誓ふ神添の、今は芦間の水筋も。

雌鳥　誰が通ひ路となりしぞや。

ト此うち振りは兩人になり、振りあつて、これより雌鳥一人になり

〽それも淵瀬の乾く間に、眞菰隱れの獨り寐の〽逢いたや、見たや戀しやと、思ひ亂るゝ自らを。

トこの文句のうち雄鳥へ恨み託つこなしよろしく、この仕組みの振り。これより兩人になり

〽焦るゝ胸は我れとても、積る恨みは仇人よ。〽憎や、悲しや、恨めしや。

トよろしく鴛鴦のこなし、此うち橋がゝりを拔ける。舞臺の橋の見得、飛び上がる事、岩組みへ上がる事、いろ〳〵合ひ方にて狂ひ面白き振りあるべし。大小のあしらひ、浪の音、掠めて、いろ〳〵あつて

〽百千返り鳴く水鳥の、鳴くにもまさる哀れなり。

トよろしく兩人振りあつて、トど、ホロリと泣き落す。思ひ入れ。此うち景久、以前の形、よき時分より窺ひ居て、この時ツカ〳〵と出る。

景久　ヤア、怪しい變化がこの振舞ひ。河津が心を蕩かさんと、命を取りし鴛鴦でありしよな。

トドロ〳〵、あしらひ。鴛鴦こなしあつて

雌鳥　我が夫鳥を刃にかけられ、積る恨みは景久どの。

雄鳥　世に殘したる妻鳥の、輪廻に引かれ、まつたこの身の生血を、祐安どのに服されて、人間の五體に入りしゆゑ

雌鳥　雄鳥の絆に引かされて

雄鳥　假初めながら、人體の、形顯はし其方へ。

兩人　恨みを述べんと來りしぞや。

景久　さてこそなア。

ト立ちかゝる。兩人よろしく、ヂリ〳〵と附け廻し、よろしく立廻つて、兩人より附け廻し、ヂツと見得。ドロ〳〵、景久、刀を拔き、雄鳥の方へ差しつけるこれに恐れる。雌鳥、此うちツ、ミ唄〽なう恨め、の仇人や、我が夫鳥を邪慳なる、刃にかけしその恨み。

ト雌鳥こなし。雄鳥も出て

〽妻を慕うて假初めに、契り短かき芦間の水は、浮寐の夢のさゝめ事、假の逢瀬の今も猶、妨げられし憂き別れ。

ト兩人よろしく振りあつて

雄鳥　アヽ、思へば果敢なき

兩人　緣ぢやなア。

ト好き程に景久切りかける。これを兩人、身を交しながら所作ダテ模様になる振り。

〽雲井にかける心にも、浮世の闇に離れ得ぬ、非情の草木にあらなくに、臺に輝やく鏡もなし、煩惱菩提は法の道連れ、あゝら樂しの契りながらも、これまでなりや花は根に、鳥は古巢へ歸れども、歸らぬこの身夫鳥の。

トよろしく此うち大小のあしらひよろしく所作ダテ模様になつて、これより、ドロ／＼のあしらひ。早めし振り。

〽恨みの劍羽、比翼の思ひ、翼を隔つる罪障を、思ひ知らさん思ひ知れと、研ぎ立て／＼鴛鴦の、劍羽打つて立ちかゝる、猛勇烈士の景久が、劍に恐れ、たぢ／＼／＼。

トよろしく修羅の立廻り、鳴り物入り、賑やかに、此うち雄鳥、雌鳥、好みに依り、梅の枝の鐵杖を持つなどよろしく、工風の立廻り。

〽刃に散るや玉霰、闇路の鳥の血の涙、目も紅に染め渡る。〽紅葉ゝ橋や鵲の、見えつ隱れつ飛びかゝれど。〽遁がれ刃の電光石火、刃煌き立つ浪の〽とう／＼とつと打寄する、鍔音刃音物凄く、あたり眩ゆき風情なり。

トよろしく、大ドロ／＼、修羅の模様、チラシになり、景久、上の方にて、次に雄鳥、雌鳥、三人の體、セリの上へ乘りよろしく見得になり、これにて文句一杯、大ドロ／＼、この前へ銀張りの一面の畫心の霞を雨落ちの所へ出し、仕掛けにて、これを大きなる、心と云ふ字に變へる誂らへ、これと共に三人をセリ返す。この心と云ふ字を上へ引いて、大ドロ／＼、舞臺一面、居所替り。

本舞臺、眞中の反り橋を仕掛けにて三方打返し、誂らへの茅葺き屋根、これをセリ上げ、誂らへの丸木柱、茶壁の欄間、穂附きの伊豫簾下ろせし、中足、本緣九尺好みの屋體になる、淨瑠璃臺の煽り、杉叢の並木になり、左右の後、銀張りの流れ春の澤邊を見渡したる道具、遠見の書割り、上の方、好みの柴垣高く、これにて見切り。下手よき所に、鴫立澤と記したる榜示杭、柵附き、澤邊の流れ板。これに四季咲きの杜若、日覆より紅白の吊り枝。よき所に梅の臺幹。すべて、道具綺麗に、時宗閑居の體。大ドロ／＼にて道具納まる。

トこのドロ／＼をかりて、日覆より銀張りのいつもの

心と云ふ字を屋體の内へ引いて取る。大ドロ〳〵打上げると、知らせに附き、伊豫簾上かると、爰に時宗、好みの鬘、着附け袴にて寢に、好みの脇息にかゝり、その側へ短檠に灯火照らしある。側に軍學の書物など置き並べ、右ドロ〳〵にて夢覺めたる體。

時宗 さては今のは、夢であつたか。

ト思ひ入れ。本釣り鐘、好みの合ひ方、琴のあしらひ。

共に天の戴かずと、父の無念を束の間も、忘れぬ父が俤に、股野の五郎景久と、赤澤山の晴れ角力。……遺恨含んで鴛鴦の、血汐の淵に我が父の、心を亂さん股野が企み、ありありと見たるも諺の、夢幻であつたよなア。

ト思ひ入れ。寢鳥、薄ドロ〳〵になり、前なる流れへ、矢の根、箱に入れしまゝ流れて來る。この見得、心火燃える。時宗見やつて、キッと見得、好みの合ひ方になり

ハテ、怪しやなア。

トどろ〳〵、早めしやうなる合ひ方になり

これなる澤邊へ自ら、流れ寄つたる一品は、父に恨みを結びたる、股野が隱し所持なす矢の根、夢の覺めても心には、覺えの箱へ焔々と、心火きらめき立ち昇る、……まつた、雌雄の鴛鴦が、景久へ恨み返せしには、傳へ聞いたる、唐の世に、男女の魂魄鴛鴦と化し、翼の内より刃を出し、君に仇せし古事に……思ひは同じ鴛鴦兄弟、日頃の仇を討ち負ふせ、名を萬天に上ぐる事、神の冥護の正夢に、告げさせ給ふのみならず、父の魂魄付添うて、尋ねる矢の根を授くるものか。何にもせよ、奇異なるこの場の有樣ぢやなア。

トどろ〳〵止む。箱は流れへ段々寄つて、心火消える。

流れ寄つたる一箱こそ、仔細ぞあらん。オヽ、さうだ。

ト風音になり、立寄り開き見る。中より袱紗に包みし澤瀉の矢の根出る。此うち鶏笛。

ヤヽ、これぞ我が父祐安が、無念殘りし澤瀉の、この矢の根。箱根へ登山の道なるゆゑ、祐安どのが、某へ讓り給はぬその品が、計らず爰へ流れ寄るは、父が魂魄添ひきて、證據の矢の根を授くるものか。アラ有り難や、忝なや。

ト思ひ入れ、此うち、後へ前幕の彈正出かゝり居て、この時

彈正 矢の根は身共が。

ト手をかけるを、時宗其まゝに手を拂ふ。これにて、

彈正、タヂ〳〵と下の方へよろめき、ちよつと留まつて、恐れし思ひ入れ、ベツタリ坐る。これにて鷄笛、所々にて、時宗、彈正を見て

時宗　野心の聞えの劍澤。

彈正　エヽ。

ト立ち上がつて、刀を拔き

時宗、觀念。

ト切りかゝる。此うち、時宗、矢の根を懷中する。差しつけたる燒酎火、友切丸へ立つ。此うち、向う正面へ誂らへの日の出出る。時宗、白刃を見て

時宗　いよ〳〵父が亡き魂の、我れに危急を告げ給ふか。

彈正　なにを。

時宗　燒刃金色、紛れなき、これぞ正しく友切丸。

ト手を放す。

彈正　それ知られたら

ト突いてかゝるをあしらひ、刀をもぎ取りよろしく當てる。彈正、アツと苦しむ。時宗、昇る日輪を見やつて

父より授かる矢の根に加へ、又も手に入るこの劍、身の疑ひも晴れ渡る。……ハテ、心地よの

ト取つたる刀にて彈正を見事に反す。時宗、足を踏ま木の頭。切り返しにて、彈正の切り首出る、

曙おやなア。

トよろしくキザミにて、　　ひやうし幕

戀角觝顔競　鴛鴦襖閧睦（終り）

松色連春駒——春駒と新關の扉

文化七年十一月、中村座所演の顔見世淨瑠璃である。上は春駒、下は關の扉になつてゐるが、詞章の上に上下とも、常磐津の「關の扉」の影響がある事は御覽の通りである。松風村雨を汐汲に使つたのは、作者松井幸三の趣向であらう。春駒は、所作事の系統の一つになつてゐて、種々な音曲に種々な形で現れてゐる。これは只その形を借りたもの。下の卷を小町櫻の精だけにせず、更に磯馴れ松の精を增したのは、俳優の都合から來たのであらう。下の卷で二人が奧州者と常陸者になつて田舍節で踊る所は、後の「茶筌賣り」に應用され、辨天參りの唄なぞ其のまゝ用ひられてゐるのは注意すべきである。富本は豐前太夫と名見崎德治、振附は市山七十郎、役割は、行平（澤村源之助）松風（四世瀨川路考）成平、磯馴松の精（二世尾上松助）村雨、小町櫻の精（二世澤村田之助）關兵衛（三世中村歌右衛門）で、歌右衛門の關兵衛は仲藏通りといふ觸込みであつたが、江戸ッ子は場違ひだと云つてけなしたさうだ。

松色連春駒（春駒と新關の扉）

都行平館の場

役名‖在原の行平。海女、松風ᴗ同。村雨。孔雀三郎成平。鹿島の書觸れ、豐作實ハ磯馴松の精。女馬士、おなべ實ハ小町櫻の精ᴗ松賣り、關兵衞實ハ紀大臣名虎ᴗ

本舞臺三間の間、上の方九尺の御簾屋體、竹の節欄間、これに正月の注連飾り、梅の立ち木、一面につ吊り枝。眞中、太夫座、これに富本豐前太夫連中居並び、早き舞にて幕明く。

ト頭取出で、淨瑠璃の口上觸れありて入る。前彈き。

〽憎からぬ、風の聞ゆる松飾りと、古へ人の筆の綾、歌舞伎の文に綴りたる、戀の手取りの俤や。

ト誂らへの三味線入り大太鼓、狂言鞨鼓のやうなる鳴り物に、通り神樂を打込み、眞中に行平、剃立て、羽織衣裳にて、蔓柏の紋の附いたる素袍と、萬歳烏帽子中啓を持ちて立ち身。下の方に三郎、小鼓を持ち、才若の見得。上の方に關兵衞、柿の頭巾やつし、袖なし羽織にて、飾り松を束ねたる荷を前に置き、斧を杖に凭せ、この見得にて、一面にセリ上げる。鳴り物打ちきる。

〽戀には積る行平が、萬歳にやす風流に、折を烏帽子の着衣初め、孔雀三郎成平も、役にさゝれて才若に、なればなるとて鼓の調べ、力まかせに注連飾り、門松ひさぐ賤の男が、鬚まきがりをつゝ杖に、なれて三人が江戸の花、心の駒も勇むらん。

ト春駒の合ひ方になり、向うより松風、村雨、一對振り袖、手綱の衣裳、手綱の頬冠りにて、春駒を持ち出で來て、花道にて

〽めでたや〳〵、春の始めの春駒なんぞは、夢に見てさへよいとや申す〳〵、よいとや申す、とり形も若紫の隱し褄、また解け馴れぬ帶なれば、男に譯を立て結び、しやんときりゝと今樣に、姿も對の二人連れ。〽大寄せ小寄せの廓の名取り、八千山雛鶴九重唐土、丁山七里若

〽松漣山、一座につらりとお直りなされて、大寄せ吉原よい仲の町、色も菖蒲の小紫、見ぬ日はせめて花紫の、誰が袖香る花扇、果敢な白露紅の、君が姿の都路よりも、文持卷の返り事、絶えぬ瀬川に總角なれば、首尾吉原の昔江川、縁常磐井の語らひに、枕春日野通ふ神。それぞれさうぢやいの、それ程可愛いものかいの。〽見れば晝さへ戀闇、人目の關の明暮れに、通ふまじきは、やつくん廓の雪大侘ひ、誰が世の中はこの中と、連れて來連れて春駒の、拍子とり〳〵歩み來る。

トこの淨瑠璃にて松風、村雨、春駒の振りあつて、本舞臺へ來る。

三郎　ヤヤ〳〵、一人ならず、いたづら者とお轉婆が、連れ立つて來たワ〳〵。我が君様、あれを御覽なされましたか。

ト行平思ひ入れあつて

行平　イカサマ、月と云はうか、花と云はうか、揃ひに揃ひし二人の春駒。これへ呼んで、この行平に逢はせてくれいやい。

四兵　わしも須磨の關兵衞と云つて、飾り松を切り出して、賣りに來る丹波越えの在郷者、都は格別、あの美しい二人の春駒、旦那どのが見惚れさつしやるも無理でもないかい。

三郎　イヤ、我が君様には、お嗜なみなさいませう。御正印の紛失に依つて、三年が間、須磨の配所の御住ひ。御歸洛あつて間もないに、もう女詮索。あの二人の春駒、お側へ寄せる事はならない、なりませぬぞ。

行平　何を愚痴を云ふぞいやい。この行平も、三年の配所住居より、歸洛の後は藏官となつて、苗字も改め下河邊の行平。それゆゑソレ、正月の新玉の壽。されば女狂ひに胤を殘すが系圖の大事。見れば僅かに配所にて、知る人ぞ知る松風村雨。ハテ、麗かな二人の春駒、サアサア、これへ〳〵。

〽はや招かれて飛び立つ思ひ、心いたけの春駒を、唄ふや姿の二人連れ、めでたや〳〵、春の野飼ひにこの鈴つけて、見てもなりそな心であろと、云はねど思ひ染め手綱、夢に見てさへよい殿御振り、情らしうてしやんとして、ぼつとりとして愛らしし、誰れも女子は惚れまいものか、せめて一夜は靡かんせ、寄るを見兼ねて押隔て、

ト松風、村雨、振りあつて、行平の方へ行かうとする。三郎留めて

三郎　ドッコイ〳〵、女を見ると温なしくなつて、柔ら〳〵になつて、ハレ、益體もないおらが旦那。云ふ事があるなら、お取次ぎを頼め。旦那へ直に云ふと頭を春駒だぞ。

松風　そんなら、お側へ寄る事はならぬかいなア。

村雨　そのお取次ぎを頼まうにも

　ト關兵衞、思ひ入れあつて

關兵　聞えた。お側の孔雀三郎さまが怖いから、お取次ぎが頼まれぬに依つて

松風　どうぞお前を

關兵　頼みたいとあれば、わしも飾り松賣りの事なれば、松助になつて取次ぎをしてやらうか。

　ト松風、村雨を見て

マア、第一合點がゆかぬ。

松風　そりやマア何がえ。

關兵　サア、それは。

〽一體其樣の風俗は、花と月との色競べ、桂の眉墨靑うして、又とあるまい命取り、お公卿さん方お屋敷さん、多くの中で仇と仇、それを其まゝ捨て置くはへ生野暮薄鈍情なし手なしの癖として、惡洒落云うたり大通仕打もあるまいが、どう云ふ理窟か氣が知れぬ、氣が知れぬ。

〽そつこで我れ等がお取持ち。

　トこの文句にて、關兵衞、振りある。三郎、キッとなつて

三郎　イヽヤ、そんな事はならないぞ。

關兵　ハテ、野暮な奴なア。

〽野暮な所に居ようより、御勝手取りの酒の燗、狙ひの的に當てに行く。

　トこれにて、關兵衞、下座へ入る。

松風　モシ、村雨さん、今日はる〳〵と行平さんを尋ねて、正月の御祝儀を幸ひに、姿を變へて來たものを、あのやうにつれなうさしやんしては、お前と云ひ、この松風、どうしたらよからうぞいなア。

村雨　行平さんは困らしやんしたお顏付き。また孔雀三郎さんは、怖い顏して睨みつけてぢやから、是非がござんせぬ。わたしを假の行平さんにして、心の丈を。

松風　そんならお前を殿御と思うて。

村雨　サア、何なりと云はしやんせいなア。

松風　オヽ、恥かし。

〽顏も得上げず袖打還ひ、及ばぬ戀の淡路島、通ふ千鳥

の物思ひ、お目にかゝらず物云はず、とんと心の須磨の浦、お立烏帽子の形見こそ、今は仇なれこれなくば、忘りよ/\と思うて見ても、汐汲む袖に打つ波の、愛しと思ひ初め込みし、氣もほの/\と朝霧の、人丸さんに隔れ下ひもあろが、わたしばかりはこの戀を、思ひ切らせて下さんせと、逆様事も難波なる、人目を耻ぢてみをつくし、せめて一言不便との、仰せもあらば後の世までも、嬉しさ包む振り袖に、假名のの字を書くばかり、文より戀や勝るらん。

トこの文句にて、松風、村雨を捉へ、クドキの振りあつて、行平に寄り添ふを振り切る。これを三郎、よろしく留めて、行平を押しやり、才若の振りになる。

〽旦那様の馬が、豆がすぎて粥がすぎて、父様や母様の譲りもの、譜代者のきんきらきんの金助なんぞを、ひんとこいてけたれば、どうばどうも斯うも中々に中々に馬屋の隅ぢやきりゝ、爰の隅ぢやきりゝ、きりゝ/\きりゝ/\/\ときりゝとちよんと廻つて、そりや色がよいとや/\、囃せや/\。

行平　囃してよいワ。村雨と孔雀三郎は、色ぢやぞ/\。

ト手を叩いて囃す。三郎、ムッとして

三郎　これはしたり、我が君様には滅相界な、孔雀三郎は、色事は大嫌ひでござりまする。

行平　其方は嫌ひであらうけれど、この行平を配所へ迎ひに参つた折柄、あの村雨が、孔雀三郎に思ひ込みやう。ナア松風。

松風　それに違ひはござんせぬわいなア。

三郎　それでも身共は。

行平　それ。

皆々　それ/\、そつこでせい。

〽とても早さは拍子取り。

トこれより松風、村雨、三郎、手踊り、行平は床几にかゝり

行平　こりや、面白い囃子事ぢやわいやい。

〽千代の始めの年男、戀にははずむ手鞠唄、盡きぬ眞砂や破魔弓も、引けば子の日の姫小松、おしやればそれもさうぢやいな、おしやればそれもさうぢやえ。〽心かけ綱懸想文、封じ目切れて藏開き、祝ふ鏡の立春は、思ひ思ひの散らし書、おしやればそれもさうぢやいな、おしやればそれもさうぢやえ〽同じ思ひの春駒は、くらべこしなる振分け髪、君は松風村雨の、思ひも玉の孔雀の尾

初演の給番附

美しくもまた恥かしゝ。
　ト行平、松風。三郎、村雨を抱きつかせるを三郎、突
　きやつて
三郎　エヽ、嫌らしい、何をするのだ。
村雨　アレ、あのやうにしてぢやわいなア。
行平　コリヤ〳〵、孔雀三郎、主人を見習ふ家來の其方。
　行平、松風と抱きつき居れば、そちや村雨と抱かれて寢
　え。
三郎　アイヤ、その儀は。
行平　ならぬとあれば、勘當おやぞ。
三郎　サア、それは
兩人　サア〳〵〳〵。
行平　隣り町から色の顏、松助村雨と離れぬ仲ではないか
　いやい。
三郎　委細承知仕つてござりまする。
村雨　エヽ、嬉しうござんす。
　ト三郎に抱きつく。
松風　やう〳〵と松の値段が極まつた。
〽磯馴れ松の汐風に、揉まれ揉まれて閨の床。
　ト兩人を屋體の内へ入れる。チョンと御簾下りる。

〽折しも西の雲間より、短册くはへて舞ふ千鳥、行平さ
つと目を附けて。
　トこれにて薄ドロ〳〵、トヒョにて、日覆より短册を
　啣へし千鳥、舞うて來る。行平、見て
行平　ハテ、合點のゆかぬ。都に稀れなあの千鳥、短册啣
　へて立ち舞ふは。
松風　どう云ふ事でござんせうなア。
　トこの時、千鳥は短册を落し、飛び下りる。行平、取
　つて見て
行平　秋風の吹くにつけてもあなめ〳〵。
　ト松風、短册を取つて
松風　小野とは云はじ薄なりけり……この手跡は、わた
　しが母さん、血汐を以て書かしやんしたは
行平　察するところ、文字に筆勢なきと云ひ、血汐で書き
　しは最期と見えたり。
松風　すりや、母さんはお果てなされたかいなア。お心立
　てのさかしきゆゑ、父さんとはお別れなされ、常ならぬ
　御最期でござんしたか。親子の縁を自然と慕うて、故郷
　の須磨の、千鳥の知らせであつたかいなア。
　トまた薄ドロ〳〵にて、右の千鳥、この短册を啣へ、

元へ上がる。

使りない身のこの上は。

行平　ハテ、行平が見捨てうかいやい。

松風　必らず共に二世かけて

行平　盡きぬ未來も變らぬ女夫。

松風　エヽ、嬉しうござんす。

ト行平に抱きつく。

〽變らぬ契りぞ樂しけれ。

トこの三重にて、行平、松風の手を取り、下座へ入る。誂らへの鳴り物になり、太夫とも引割り。

本舞臺、三間の間、見付け淺黄幕、上の方、大樹の枝垂れ櫻、吊り枝見事に、この前に小町櫻と云ふ高札立てあり、下の方、松の大樹、磯馴松と云ふ高札立てあり、眞中に頃よき岩臺、この上に關兵衛、腰かけ、側に誂らへの吸ひ筒と大杯を置き、眠り居る、また太夫座を突き出す

〽[illegible]ならぬ關兵衛は、櫻が下に酒宴なる。

關兵　この[illegible]の關兵衛は、毎年々々飾り松を切り出し、斧もろともに引ッ擔いで來た在鄕者だが、行平さまが婚禮のやうな事のおめでたに依つて、御褒美にこの吸筒を下されたが、大杯でやらかした所爲か、大分醉うて來たわい。

〽吸筒振つてひよろ〳〵〳〵。

世の中に、酒ほどの樂しみはない。

〽エヽイもう一組の婚禮はどこへ行つた、ハアヽ、こいつも床急ぎだな、エヽ急ぐ奴さ。

それ〳〵、早く寢るがいゝ。

〽寢ぬのは損だ、ばさらんだ。アレワサノエイ、コレワサノエイ、やつと戀の淵、もしもはまる[illegible]で抱きついてこハヽヽ、うまい奴じや。もう紙の入る時分だが、紙が入るか。

〽神も末社も打連れて、めでた〳〵の若松樣よ、枝も榮えて葉も茂る、おめでたや、千代の子おめでたや、千秋萬歳、萬歳々々々々萬々歳。

ト關兵衛、いろ〳〵振りあつて、また酒を杯へついで飲み

さぞ今頃は。

〽茂れ松山、エヽイ、えい氣味だぞ、こりや命を掻きむしるわえ、どれもう一杯、酒に映らふ星の影。

トこの時、日覆へ七星顯はれ、杯へ映る。關兵衛、キッと見る。誂らへの管絃になり

ハテ、訝かしや。この杯の中に鎮星の、きらめく影は、正に寅の一天なり。今月今宵、數百年に餘る櫻木と、松の老木を護摩木となし、斑足太子の塚の神を祀る時は、大願成就心の儘。即ちこの度へ行平歸洛のその後、須磨にて愛せし磯馴松を、取寄せしこそ、これ幸ひ。この斧を以て、立ち所に、ドレ。

トこれより大小入り。

へ彼所の石に斧の刃を、押しあて〳〵研ぎ立つる、音はさう〳〵どう〳〵と、闇を照らせる金色は、玉散るばかり物凄し。

トこの淨瑠璃にて、關兵衛、斧を研ぐ振りあつて

この斧の刃を試むるは、幸ひなる行平が愛せし、磯馴松と小町櫻の高札。

へ突立ち上がつて斧振り上げ、切つたる折節雲井の翅、刃音に驚ろき落せし短册、手に取上ぐれば懷中に、深く秘め置く御正印、おのれと飛び去り、鳴動せしこそ不思議なり。

ト關兵衛、二枚の高札を切ると、ドロ〳〵、トヒヨにて、以前の千鳥舞ひ下り、短册を落す。關兵衛、取上げると、大ドロ〳〵にて懷より御正印、櫻の幹に飛び去る。

ハテ、心得ぬこの短册、血汐を以て認めしゆゑ、穢れに依つて御正印、櫻の梢へ飛び去りしか。いよいよ怪しきこれたる松櫻。何にもせよ、ソレ。

へ切らんとすれば目もくらみ、覺えず後へたぢ〳〵〳〵と、霽し心も消え〳〵に、斧に縋りて茫然たり。

ト關兵衛、松櫻を切らうとして、大ドロ〳〵にて、茫然とする。

へ實に朝には雲となり、巫山の昔幻に、深雪と紛ふ櫻蔭。

トこの淨瑠璃、大ドロ〳〵にて、松櫻の許に煙硝燃え、パッと立つと、花道の板引き落しにて、墨作、ぼつとせ、粕烏帽子、白丁の下ばかりにて、襟へ烏万度を差し、〆太鼓を持ち、馬に乘り、おなべ、陸奥の女馬士、田舍染めの形、褄をからげ、手甲、絆半、鉢卷にて、竹の鞭を持ち、早セリにて、ズイとセリ上げ。

へ累とは、八重撫子の名なるべし、陸奥道の女馬士コリヤへ此方へ何年振りで、おちやり申すと神の告げ。

トおなべ、豐作を馬より下ろして
〽馬を追ふとて芋の蔓で辷つた、つる〳〵〳〵と辷つた、ひよつ〳〵りひよつと、しよんがえ、鹿島浦にはなナアナエ、〽コレハイナ、鹿島浦には寶木船がつん着いたえ、〽おやもさ〳〵コレワイナ〽これは奥にて隱れなき、手綱かいくり、しつしどう〳〵、どんどどつこい、どゝんとどん、馬に御縁の〆太鼓ドツコイサ、朝の出がけにや小室節、一聲二節に識さい、二人ツン〳〵連れ立ち行くべい〳〵、常陸陸奥東同士、誘うてこそは來りけり。
トこの淨瑠璃にて豐作、おなべ振りあつて、本舞臺へ來る。此うち關兵衞、心附き、思ひ入れあつて
關兵　ハテ、合點のゆかぬ。田舍女に鹿島の事觸れ、どこから來たのだ。
豐作　わしやア推量召す事觸れだア。
關兵　して又、女は。
なべ　陸奥サアの女馬士でござるよ。
關兵　ハテ、遠い所から何しに來た。
なべ　だゝアやがまアを置いて、こなたアに逢ひたくてサ。
關兵　ナニ、おれに。そりや又なせ。
なべ　色サアになつてくれ召せ。
關兵　嫌な奴サ。それに又、鹿島の事觸れと一緒に來たは。
豐作　こなさんサア達の相性を見べいと、一緒に來ましたでおぢやりや申す。
ト關兵衞、思ひ入れあつて
關兵　そいつは有り難いと云ひたいが、どうも合點がゆかぬ。
なべ　ハテ、赤腹は埀れ申さぬ。古歌とやらにも云ひめす逆り
關兵　櫻咲く櫻の山の櫻花、咲く櫻あり、散る櫻あり、心心と云ふ事か。
なべ　奥サアに、千賀に名高き鹽釜櫻。
豐作　常陸の國には筑波の櫻、笠間の松。
なべ　九十九株の芍藥あり
關兵　都は花の名所にて、神社佛閣、古蹟で目を突く、目がかすむ。
トこれより拍子舞になり
祇園清水東山、加茂の兩社に比叡山。
豐作　鹿島香取の大明神。

尾上松助の鹿島の事觸れ錦繪

なべ　靈の碑、瑞巖寺。
〽忍ぶ文字摺り離れゆゑに、迷うて來たも白川と、下紐の關駒急な。
　ト　おなべ、關兵衞へこなしの振りあつて、また拍子舞。
關兵　此方の思ひは武隈の
　濟碑たら松島な。
〽さつとも知らぬつれなさや。
　ト　關兵衞、おなべへ振りあり、また拍子舞。
豐作　性氣に少し角隔に、咲いて枝垂れてその花の。
〽逢ふに惚かれて寢て別れ、阿波大杉の踊を見よなら〽長崎の通宿で、いちごが亭主は黑しぶで、それでも神樂の
笛吹いて、アリヤトコナ、ヨンヤサ。
　ト　大太鼓入りにて、豐作、振りあり
關兵　名所話しの色仕掛けは。
　ト　また拍子舞になり
抱かれて寢たが要石、そこを騙すが鯰の髭。
なべ　ハテ、疑ひの深草や、惚れた心の眞如堂。
豐作　なんの違ひは勿來の關。
關兵　そんなら緒絶えの橋でなく

なべ　戀で積りし蜷川や
豐作　どうやら味な貴船川。
關兵　腹が高館衣川……おきやアがれ。これではおれが陸奧になつて
なべ　わしサアは常陸とやら。
豐作　おれが都でおおやり申した。
關兵　大間違ひだ。サア／＼、酒にせう／＼。
豐作　よかんべい／＼。
　ト　豐作、杯を取上げる。おなべつぐな。關兵衞、留めて
關兵　コレ／＼、その少ない酒をつがれて堪るものか。
豐作　それでもサア、飲みたうおんぢやる。
關兵　そんない斯らせう二人ながら手拭で目隱しをして、吸筒を取り、當つた者に酒を飲ませう。
兩人　よくござる／＼。
　ト　おなべ、めんない千鳥をする。豐作は淺黃手拭を頭からスッポリと目隱しにする。關兵衞、吸筒を隱す所に困り、脊中へ隱す。
豐作　サア、吸筒を尋ねべい／＼。
　ト　無性に探り、關兵衞を探り當て

こなたサアの脊中は。
關兵　おれは急に佝僂になつて、一寸法師。
ト脊を低くする。
なべ　わしサアとても、
豐作　眼が見え申さないから、關東座頭に
なべ　陸奧瞽女の
三人　三人片輪。
關兵　おれに佝僂で、ちよこのちよこ平。
〽小ちよつこりなる小色事、小世帶小屋の小棟上げ。
ト大小入りになり
〽四本柱の押つ立て大工のちよこ平が、これのお竹に惚れました、さつきりやしやつきりきりしやつきりきり〳〵、ちよこ平のこさてのう親見や。〽あの子産んだら親見たや。
トこの文句にて、關兵衞、一寸法師の振りあり、豐作おなべ、そこにある竹切れを杖にして
〽自體我れらは關東べいの座頭、瞽女は奧州で金華山のほとり。
豐作　ドレ、辨天樣へ行くべいか。
ト行かうとする。おなべ留めて
〽これ別るゝとは胴慾な、見られぬ箕田の辨天へ、籠る地びたのつちのとの、巳待の晩の嬉しさを、忘れてかいなと胸倉を、見えねば脊筋と取違へ、云ひたい事も痰の灸、七九の竹の心なら、割つて見せても見えぬゆゑ、戀でなうてもいつも闇、つい抱きつくも脊中同士、灸を摺りむくばかりなり。
トおなべ、瞽女にて、豐作の座頭をクドキの振り。すまたに行く事などよろしくあつて
豐作　サア、これからア、わしサアが三味。
關兵　覺えて置いた仙臺節。
なべ　そんならおらアが。
ト豐作、斧を取つて、三味線にする。關兵衞、鹿爪らしく
關兵　とのサ〳〵。
〽とのサどつから來やつた、仙臺の田甫道はあしよだもうさ。
なべ　サア〳〵、その氣で張り込め〳〵。
トおなべ、仙臺踊の振りあつて
關兵　さて藝づくし、都には
兩人　ソレ、いつぞやの御位爭ひ。

ト向雛子になり、おなべ豊作、おいかけの冠と装束の上を引つかけ

抑々相撲の物語

〽過ぎし仁壽の始めの年、御位定めの晴れ相撲、伴の善雄に紀の名虎と、名乘りかけたる時鳥、彼の横綱の卯の花と、四手切りかけて結びの關、名虎は既に負け相撲。

トこの物語の淨瑠璃にて、兩人相撲の振りあり、此うち關兵衞、無念のこなしあつて

關兵　エヽ、口惜しやなア。

トおなべ、以前の御正印を出し

なべ　我が業通にて最前手に入る、太政官の御正印はこれにあり。

豐作　それを所持なす汝こそ、樣子があらう。

兩人　本名明かせ。

關兵　斯くなる上は何をか隱さん。先年惟喬惟仁の、御位爭ひの相撲に、不運を取りし某。未だ行平昇殿の折柄、名虎に出家を遂げさせよと、墨染の小町櫻に准へて、染衣を勸めし行平ゆゑ、預かりの御正印を奪ひ取つて、須磨へ配流の身となせしに、非常の大赦に歸洛の行平、寵愛ありし磯馴松を引移せしゆゑ、松もろともに討つて捨て、その上にては四海の掌握、いま入込んだる我れこそは、紀の大臣、名虎とはおれが事だわえ。

ト頭巾を取つて、見事なる肌脱ぎになる。

兩人　さてこそなア。

關兵　して汝は何者だ。名乘らぬに於ては、この斧を以て。

ト兩人へ打つてかゝる。立廻りにて、おなべちよつと當て、豐作へ打つて行く。ドロ〳〵にて、豐作、誂らへ松の精の形になる。

これは。

豐作　行平卿の寵愛に依つて、都へ召されし須磨の浦の、磯馴松の精靈なり。君に仇なす邪慳の斧、我れを打ち切るその恨み、爰に姿を顯はせしぞ。

〽非情の松も今爰に、須磨を移せし磯馴松、霞隱れに失せにけり。

トこの淨瑠璃大ドロ〳〵、關兵衞、打つて行く。立廻りにて、豐作、仕掛けにて松の幹へ田樂に消える。松葉パラ〳〵と散る。

關兵　さてこそ女め、正體顯はせ。

トまたおなべへ打つて行く。大ドロ〳〵にて櫻の花す

さまじく散る。おなべ、引抜きにて櫻の精の形になり、
關兵衛キッと見る。鼓唄。

〽なう我れ〳〵が身の上こそ、そも人間の業更けて、見えし姿もこの黒染・小町櫻の精魂たり。

トおなべは櫻の枝を取つて振りあり

關兵　さてこそなア。

〽我が本性の櫻木を、邪慳の斧にかけしぞや、報いの程を思ひ知れと、有り合ふ枝を呵責の笞、斧取り直し打ちかくれば、凡人ならぬ精靈の、業通自在に身も輕く、ひらり〳〵と飛びかふ姿は吹雪の櫻、霞隱れや朧夜の見えみ見えずみまた顯はれ、この櫻木の花と花、小町櫻の寫し繪と、戀と色との言の葉草、實に富本の一節を、梓にこそは殘しけれ。

トこの淨瑠璃にて、關兵衛、おなべ、よろしく振りあつて、トゞおなべ、關兵衛へ御正印を差しつける。この見得、段切にてよろしく

幕

松色連春駒（終り）

祐經時致が
初會の對面
於虎少將が
引附の杯觴

姿替霞假宅
――對面といやみ金調

安政の大地震で三芝居は全燒したが、翌年新築落成した、これはその時の市村座の中幕淨瑠璃で、安政三年三月の市村座上演。篠田瑳助の作である。對面はいつもの型だが、鹿島明神を勸請するといふ筋は、即ち地震後の當込みで、また對面に十郎が現はれないのは、大地震で河原崎座が興行權を失つたので、河原崎の若太夫權十郎卽ち後の九世團十郎が、初めて他檐の市村座に出る事になつた　それに五郎を勤めさせるについて、兄八代目の口上を云はせる必要から、わざと祐成を省いたのである。カタリに「初會の對面」とあるのは、四代目尾上菊五郎が女形であるのに初役で工藤をしたからである。下の卷に假宅を使つたのは地震後の假宅の賑ひを當込んだので、いやみ金調といふ菓子賣りの藝人は、當時市井を歩いた有名なものを芝居に寫したのである。常磐津は豐後大掾に岸澤古式部、振附は花柳勝次郎である。役割は、祐經、小藤（四世尾上菊五郎）五郎、十（河原崎權十郎）梶原（坂東龜藏）少將（中村歌女之丞）金調（三世關三十郎）金子（十三世市村羽左衛門）みどり（市村竹松）お國（尾上歌柳）傳三（關花助）であつた。

姿替霞假宅（對面と、いやみ金調）

工藤祐經館の場
化粧坂假宅の場

役名――工藤左衛門祐經。曾我五郎時宗。梶原源太景季。化粧坂少將。いやみ金調。いやみ金子。近江屋女郎、小藤。禿、みどり。茶屋女、お國。舞鶴屋傳三。鳶の者、海老雜魚の十。

常磐津連中

本舞臺三間、網代塀の幕、梅の立ち木、日覆より吊り枝、爰に四人、何れも菖蒲皮足輕の形へ粕烏帽子白丁を引ッかけ立ちかゝりゐる。大拍子にて幕明く

足一　なんと何れも、當皐月下旬、忝なくも右幕下賴朝公、富士の裾野に於て夏狩のお催ふし。

足二　さるに依つて、この鎌倉の大小名方、爰を先途の晴れ勝負。御主人祐經さまは、狩場惣奉行のお役目。

足三　狩場の地割り安全の爲、日頃信心なさしめらるゝ、常陸の國鹿島大神宮を、當下館へ勸請あつて

足四　即ち今日祭禮のお催ふし。非常の役目の我れ〳〵も仕丁出立ちの烏帽子白丁。

足一　祭りの練り物番組を、記したるこの書き物、なんと讀んで見ようではあるまいか。

ト懷より淨瑠璃の觸れ書を出す。

三人　それがよからう。東西〳〵。

ト皆に下に居て、書き物を開き

足一　淨瑠璃名題、

足二　淨瑠璃太夫、

足三　相勤めまする役人。

足一　右役人殘らず罷り出で相勤めまする。いよ〳〵この所、淨瑠璃始まり、左樣に御覽下さりませう。

足二　サア、これから銘々の詰め所〳〵へ。

足三　そんなら何れも。

足四　サ、來やれ〳〵。

ト右鳴り物にて、四人、上手へ入る、知らせにつき、道具幕切つて落す。

本舞臺、三間の平舞臺、折り廻し、庵に木爪の金襖。襷欄間、御簾一ぱいに下りてあり、下の方、いつもの淨瑠璃臺、これにも襷欄間、半御簾を掛け、爰に常磐津連中居並び、すべて祐經館大廣間の體。誂らへの通り、道具納まる。

ト直ぐに淨瑠璃になる。

〽東岸の柳、南枝の梅、開き時めく鎌倉の、大小名と夕だすき、鹿島の神へかけまくも、爰に寫して三笠山、引くや霞の常陸帶。

ト誂らへの鳴り物になり、知らせにつき、三方の御簾を靜かに卷き揚げる。眞中に祐經、澁手かつら、羽織衣裳へ白地の裝束、石の帶、鉾の先へ鳥兜を結びつけたるを突き、足駄にて、景季、出島髱、鼠に黄紺の裏の附きたる褞袍、三尺の形を馬にして、これへ腰をかけ、少將、蝶千鳥の模樣の振り袖、土佐繪風の傾城、烏帽子の簪、紅梅練りの白丁を引ッかけ、景季の髭を手綱のやうに持ち、この見得よき程に鳴り物打上げる。

〽館の主祐經は、今日祭禮の庭神樂、御輿の先へ立つから、猿太彦を乘初めに、月毛の駒の景季は、去年を今年と居候ふ、ぬらくら鯰のお見立は、情も歌女のいたづらに、少將が髭手綱、尾上の松の初子の日、雪の素顏の白丁に、姿も春の神馬曳き。

トよろしく振りあつて納まる。

祐經　年の内に、春は來にけり一歳の、去年を今年と待ち侘びし、御蟲貝が谷の新館、斯く有り難きお目見得に、心願あつて祐經が、勸請なしたる鹿島の宮、今日祭禮の猿太彦。

少將　お伽に召されしわたし等も、一座につらなる嬉しさは、男形して練り物の、烏帽子、白丁着衣初め、女子だてらに、恥かしい、子の日の小松それならで、梶原さんの髭手綱、春の駒曳き神馬曳き。

景季　川柳點にある通り、おふくび形の餅を喰ふ、居候ふの景季が、如何に假宅が近いとて、馬とはひょんな役廻り、首尾よく祭りも濟んだれば、ナウ少將。

少將　さうでござんす。その裝束も取り措いて、設けの席へ、祐經さん。

祐經　其方の勸めに任せ、未熟ながらも一臈職、役目の儀なれば何れも樣、上座御免下されませう。

〽流石一臈別當と、云はで庵に木爪の、威勢は四方に芳

ばしき。

ト祐經・裝束を取り、眞中の二疊臺へ住ふ。

少將　モン、祐經さん、今日御祭禮の常陸帶・神のお告げの事觸れさん、先刻にから待つてなれば、このお席へ呼びまして、逢うて上げて下さんせぬかえ。

祐經　少將の勸めと云ひ、神事の役人とあれば苦しからず。

景季　ちつとも早くこの席へ、呼び出さつせえ〳〵。

少將　アイ〳〵。

〽あいと返事もなまめきて、呼び出す初音しをらしき、鶯衣かさね褄。

ト兩人こなしあつて、小鼓の合ひ方、花道の方へ來てお次の間に、扣へてござんす事觸れさん、坂東一の祐經さんが、逢うて上げうとおしやんす程に、怯めず臆せずおとなしう、急いで爰へ。

景季　のたくりつん出ろ、エヽ。

ト向う揚げ幕にて

五郎　參りますべえ〳〵。

ト三味線入りの岩戸になり、向うより五郎、前髪鬘、粕烏帽子、蝶の模樣の厚綿衣裳、白丁を引ッかけ、鈴と大きなる烏万度を擔ぎ出て、花道へ留まる。

〽御代はめでたのさん篠若の、隣り町から着衣初め、今年や世がようて御贔屓の、やんがて穗に穗が魁の、花に宿から日玉蝶、羽搔も鈍き事觸れが、鈴振り立てゝ歩み來る。

ト五郎、振りあつて、舞臺へ來る。

少將　今日の神事の事觸れさん、先刻にから、大抵待兼ねて居たわいなア。

五郎　それは千萬忝ないが、如何に新米の事觸れでも、もう呼び出すか呼び出すかと、どつきどきつく時宗の、不器用未熟は云はずとも、何れも樣がよく御存じ。初見參の祐經どのへ、引合せな、頼む〳〵。

少將　そりや、わたしが呑み込んで居るわいな。

ト景季、思ひ入れ。

景季　待て〳〵〳〵。爰の姐えが呼び出した奴は、疊障りも荒若衆。どうやら形もそが〳〵と、貧乏神の事觸れかも知れねえから、破れ團扇で追ひ出してしまへ〳〵。

少將　其やうな意地の惡い事は、云はぬものぢやぞえ。

景季　何を此奴が。

ト睨みつける。

少將　オヽ怖。

〽あれ又そんな悄て口、烏萬度で口の端、とんと水鷄に叩かせて、赤い炎を景季が、岡燒きつゝき燒き餅の、野暮な雜義の鶯鳴、鳶とろゝで腹直し、松の內外の目を盜め鳥、手練手管の嘘鳥は、やる瀨ないではないかいな、

ト景季、五郎へ立ちかゝるを、少將留めて、三人よろしく振りある。祐經、此うち五郎へ目を附け思ひ入れ。

祐經　最前から見るところ、虎少將が推擧の若者。ハテ、誰れやらに、似たワノヽ。

五郎　似たとは誰れに

少將　似ましたえ。

祐經　思ひ出すも淚なる、一家の端の河津の祐安、忘れ形見の兄弟二人、兄にて候ふ祐成は、盛り短かき朝顏の、垣に果敢なく枯れ果てゝ、殘る一本の若紅葉、しかも由緣の兒模樣、親はなけれど子は育つ。ハテ、健やかな若者ぢやなア。

ト思ひ入れ。

五郎　斯くまで深き情の詞。敵と名乘つて勝負召され。

祐經　イヽヤ、名乘りくれたきものなれど、今は叶はぬ、時節を待て。

五郎　すりや、敵とは名乘れぬか。エヽ、寶の山へ入りながら

祐經　手を空しくは歸すまじ。幸ひ神事の烏兜。これへ持て。

〽傍に有り合ふ玉鉾の、劍をとくノヽ烏兜。

ト少將、以前の烏兜を取つて、祐經へ渡す。

事觸れの頂やい。

五郎　なんだ。

祐經　今日の神事の杯代り、土產くれん、近う參れ。

五郎　頂きますべえノヽ。

少將　モシ、必らず麁相のないやうに。

五郎　合點だ。

ト三保神樂になり、五郎、思ひ入れ。

今日は如何なる吉日にて、日頃逢ひたい見たいと、神佛をせがんだ甲斐あつて、今逢ふは優曇華の、花待ち得たる今日の對面、三箇の莊の福は內、鬼も十八年來の、いま吹き返す天津風。土產頂戴いたしてござる。

ト五郎、ヂリノヽと詰め寄り、祐經の持つたる烏兜へ手を掛け、無念の思ひ入れにて、キッと顏を見る。

〽握り詰めたる金拳、引裂け破れ冠り物。

ト五郎、思はず烏兜を二つに引裂く。中より繪圖面出る。五郎、取上げ

景季　ヤ、こりやコレ慥かに狩場の繪圖面

祐經　南無三、それを。

ト寄るを、祐經、突き廻して、景季を當てる。

祐經　その品與へる上からは、皐月下旬に富士ヶ根の

五郎　裾野御狩の惣奉行。

少將　一臈別當左衛門さん。

祐經　五郎宗。

五郎　祐經どの。

祐經　ハテ珍らしい。

兩人　對面ぢやなア。

〽坂東市村優曇華に、浮木の龜の對面と、感せぬ者こそなかりける。

ト吉例の見得。景季、心附き、以前の鉾を取つて、五郎へ打つて行く。五郎、立廻つて、鉾を取つてキッと押へ、皆々よろしく引張りの見得、大太鼓入りの鳴り物になり、知らせにつき、前の大欄間變つて、格子先の道具になり、この人數を隱し、よろしく道具替る。

本舞臺、三間、格子の二階、この下に青簾の格子、駒寄せ、注連を張り、上の方一間、近江屋と云ふ柿の暖簾、左右松飾り、廂の上に大磯近江八幡假宅と書いたる木札、下手、淨瑠璃臺の欄間變つて、茶屋の二階になり、すべてこの道具、本物誂らへの通りに納まる。

ト下の方へ市川製羅出糖、いやみ屋金調と云ふ看板附けたる菓子賣りの荷を押し出し、鳴り物打上げ、淨瑠璃になる、

〽海上遙かに見渡せば、七福神が乘合ひの、寶船漕ぐ初買ひ、仕舞ひの札に春の風、輕き格子の假宅は、いつ百千鳥人來鳥。

ト辻打ちになり、向うより金調、着流し、匂ひ袋の五つ所紋の着附け、派手なる帶、手拭を肩に掛け、扇を持ち、大きなる船底の下駄、好みの拵らへ。金子、奴鬘、派手なる着付け、同じ綿入れ羽織、股引、下駄を穿き、菓子の袋を持ち出て、兩人花道へ留まる。

〽これはこの頃江戸町樣で、呼ばれ招かれ評判の、形もいやみな羅出糖、菓子の愛想愛敬奴、花橘に三つ重ね松、匂ひ袋の五つ所、紋が看板、親子連れ、長閑な日和

下駄がけで、流して歩く格子先。

ト兩人振りあつて、舞臺へ來り、下の方の荷を見て

金調　コレ、金子、見や。荷持ちの間抜け野郎め、お得意の近江屋さまの前へ荷を置いて、どこへ行つて居るか。誠に困り者ぢやアねえか。

金子　さうさね。大方花川戸の切見世へ、鐵砲でも放しに行つたらうよ。

金調　助平な奴だなア。

金子　お父さんによく似て居るね。

金調　べら坊め、子供がそんな事を云ふものぢやアねえぞ。

ト金調、格子の側へ來て

へイ、今日は、結構なお天氣でござります。お馴染みのいやみ屋金調でござります。

金子　蒸出籠、お菓子の御用は、ござりませんか／＼。

トこの時、暖簾の中より、みどり、前髮ばかり、坊主鬘仕着せ形の禿にて、顏を出し

みどり　モシ、花魁、いやみ屋さんが來んしたにえ

へもし花魁と今日逢、暖簾を潜る駒下駄の、高き香りの伽羅と梅、手取り客取り褄取り添へて。

ト暖簾口より小藤、女郎の拵らへ、後よりみどり、羽子板を持ち附き出る。

小藤　オヤ、金調さん、金子さんも、よく來さしつたね。

金調　これは花魁、今日はおめでたうござります。

小藤　いつものやうに、面白い事をしてお見せなんし。

みどり　金子さん、早く踊りを踊つて見せなましよ。

金子　ハイ／＼、なんでもお好み次第、何をやらかしませうね。

ト金調、向うを見て

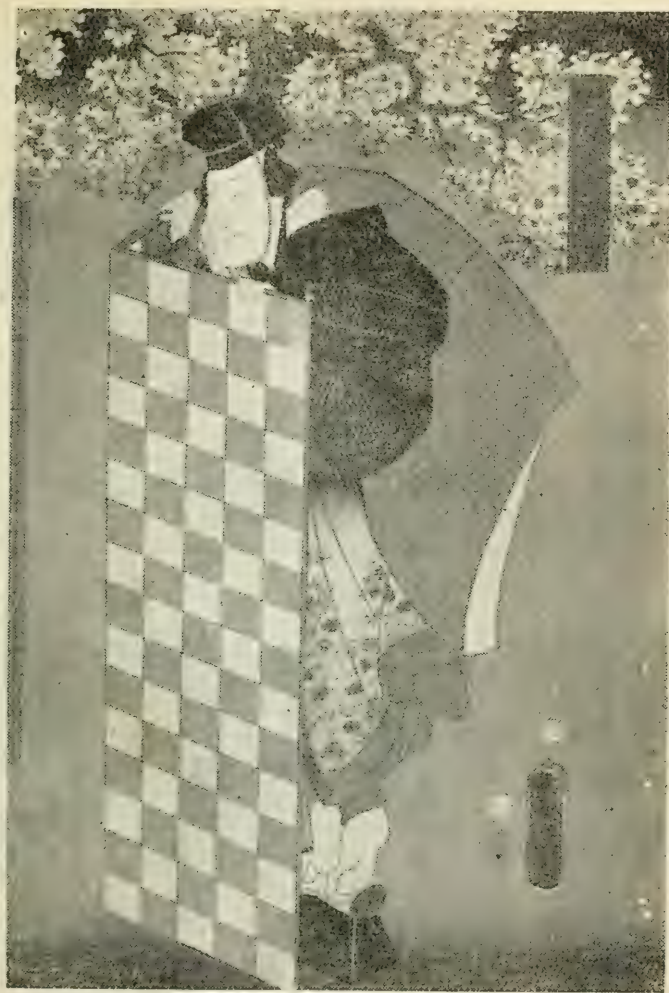
金調　コレ／＼、待て／＼、向うへお客樣がお出でなさるワ。

ト小藤、向うを見て

小藤　ほんに、舞鶴屋の傳さんに十公さん。

みどり　早く爰へ呼び申してくんなまし。

金調　ハイ／＼、畏まりました……モシ、旦那々々、花魁方が待兼ね山。オヽイ／＼。

ト太神樂の鳴り物、向うよりお國、茶屋娘の形、繭玉を持ち、傳三、揃立て、黑の附着け、麻裃、一本差し、十、抱への形、黄羽織にて、挾み箱を擔ぎ、少し醉ひたる體にて、出て來り、花道へとまる。

三世関三十郎のいやみ余調

坂東彦三郎のいやみ金五郎

（この役は斯うして錦繪にまで出來ました
が何かの都合で舞臺へは出ませんでした）

〽先づ明けまして結構な、春の花助淨瑠璃へ、男形して
お目見得に、供の抱への海老藏魚も、また若魚の魚交り、
屠蘇の機嫌で大藏の、茶屋へ土產の繭玉を、貫結びの糸
柳、引く手數多の御贔屓を、願ひ揚げ幕花道を、ひよろ
ひよろもので浮かれ來る。

ト三人花道にて、振りあつて、舞臺へ來る

小藤　舞鶴屋の傳さん、よくお出でなんしたよ。オヤ、十
さん、大分いゝ色でありますねえ。

十　ハイ、今日は若旦那のお供で、御馳走になりまして、
醉つたは藥師の御緣日サ。

傳三　イヤ、正月だけあつて、重い口から洒落が出たた
う。

金調　舞鶴屋の若旦那、よく入らつしやいました。

傳三　誰れかと思つたら金調さん、假宅が繁昌だから、忙
しからうね。

くに　モシ花魁、若旦那が私しどもの前を、素通りにしよ
うとなさいましたを、お連れ申しましたから、ひどい目
に合はせておあげなさいませ。

小藤　さうざますかえ。その代り明日は、お歸し申しませ
んよ。サア、十さんも、早く二階へお出でなんし。

十　それでも折角、金調さんが來て居なさるから、なん
ぞ藝當を見て行きやせう。

金調　そりや私しも御存じのいやみ金調、何でも致します
が、先づ淨瑠璃の吉例だから、皆樣の紋盡しから拜見い
たしませう。

金子　そんなら十さん、お前さんから先へ、お始めなさい
お始めなさい。

十　どうして／＼、わたしやア兄貴と同じ事、踊りはい
けねえ。それよりは若旦那、元服の御祝儀に、なんぞお
やんなさいませ。

くに　この間私しどもで、おやんなさつた、一本目にはの
紋盡しがようござります。

小藤　サア／＼、傳さん、おやんなまし／＼。

傳三　これは迷惑、仕方がねえ。先づ口明けにやつてくり
よ。

〽見渡せば、景色とゝのふ梅柳、小枝を傳ふ鶯の、ほう
ほけきやう言紋盡し、一本目にはいたら貝、二本目には
二つ瓶子や三つ鱗、四本目には四ツ目結ひ、五つ庵に木
瓜の、六つ紫、むらがふ劍花菱七重八重、九つ子骨の數
數は、開き扇の末廣き、遠山川の水車、くるり／＼／、

くる／＼手馴れ草。
ト傳三、よろしく振りある。金調、みどりを前へ連れ出て、みどり、振りになる。
〽禿々で花魁達の、文の使ひに幾度か、通ふ神風よい正月の、門に立ちたる竹松が、にこ羽子の子や手鞠つく。
トまた金調、女形に羽子板を持たせ、振りになる。
〽一夜に二夜身上がりに、四ッ宵から間夫狂ひ、いつも裏茶屋睦まじく、なん／＼情の約束に、九のお家で十々浮き名立つ。
ト金調、丸盆を持ち、追ひ羽根の振りあつて、金調、鞠を取つて、お國へ投げてやる。これよりお國振りになる
〽わしがお姉さん三人ござる、中に一人が色取り者で、可愛い男とつん連れ立つて、對の小袖の染め模樣、片裾に褄の折り枝、見事に／＼、中は五條の反り橋かけて、渡る思ひの恥かしや
トよろしくあつて納まる
金調　イヤモ、どなたも大出來々々々々、面白い事でござりました。
十　サア／＼、金調さん、お前の番だ／＼。

金調　致しますとも／＼。先づその前方に、皆樣へお年玉。
ト荷の上の箱の中より、卷き物の附いたる簪を出して
この中に都々逸端唄、いろ／＼書いてござります。その振り事をお目にかけます。
ト簪を女形へ渡し眞中へ出て、當振りになる。
モシ、音羽屋のお嬢さん、お前が内で彈きなさる
〽宵は待ち、そして恨みて曉の。
ドレ、歸らう／＼。
〽別れの。
ずるいなら。
〽鳥と皆人の、憎まれ口な、アレ
ハア
ト泣く。
〽啼くわいな。
コレサ、話しがあるよ。
〽聞かせともなき耳に鳴る鐘、目なし鳥。
トこれより盲目の振りになる。
〽袖萩は垣の外、杖突き乃の字で雪の庭。
この垣一重が黒鐵の
〽門より高い評判の。

四世尾上菊五郎の小藤　河原崎權十郎の十

トこれより瞽女の節になる。
〽所青山百人町で、鈴木主水と云ふ二本差し、侍ひさんやら、知れぬ形振りすつきりと、水はお江戸の生粋と、看板打てば打たるゝ櫓太鼓の曲彈きは。
トよろしくあつて、金子を抱き、兩人振りになる。
〽そりや聞えませぬ才三さん、お前とわたしがその仲は、誠々を盡した上は、時節待つても添うて見しよ、よしこのノ\、何だべこちやらく、おちやくのちやつきりちやんとやらしやませ。
トよろしくあつて、金子、早き振りになる。
〽蟹がさ、蟹の横這ひおいどぶりノ\振り立てゝ、男戀しやおいどがかゆい、最早年頃ごんぼう燒いて押つ付けろ、譯もなや
トよろしくあつて納まる。
十　サア、若旦那、二階へ參りませう。
小藤　モシ、傳さん待ちなまし。おまはん、一丁目かどこへか行かつしやるさうだね。
傳三　どうしてノ\、二丁目より外へ上がつた事は、ナウ、十公。
十　左樣サ、私しものこ間、二丁目から此方へ來たばかりサ。
小藤　十さん、江戸町に三丁目がありんすかえ。
十　サア、そりやア。
女皆　何を云ひなますえ。
ト十へ思ひ入れ。
〽僞はりは、よしや苦界の憂き勤め、見世で菘の音信も、嘘と白化けに抱いて涅槃の佛の座、二度寢の床の袖屏風、直ぐ白川の枕元、せり立てられて身仕舞ひに、鼠麹の松の山形を、放れて野暮な田平子は、嬉しからうぢやないかいな。
トこの中へ傳三、金調も入り、五人よろしくあつて
金調　サアノ\、これからめでたく、七福神の、見立てぢやノ\。
トこれより手踊り模樣、銘々見立ての振りになる。
〽長煙管の、遠の眠りの初夢に、一に俵の大黒と、離れぬ中の若蛭子、長い頭の福祿と、笑ひ布袋の子供好き、辨財天が琵琶の手も、てんつるノ\の壽老神、百足小判の毘沙門は、足澤山の縁起物。
トこの文句に傳三、挾み箱より茶ほうじを出し、二ツ合せて小槌にする。金子、繭玉の鯛の附いたる枝を

持ち、小藤、以前の簪の卷き物を廣げる。金調手拭を頭へ乘せ、みどりを唐子にする。お國、羽子板を琵琶のやうに持ち、十、挾み箱より木綿の頭巾を出して持ち、七福神の見得。

〽めでたく揃ふ七福神、揚屋の内へ入り海は、浪乘り船の音のよきかな。

トみどり、金子が持つたる鯛の杖を引ツたくる。金子、それと寄るを、金調、みどりの手を持つてポンと投げる思ひ入れ、金子、不器用に返る。みどり、鯛を擔ぎ見得。十、扇箱を二つ持ち、ツケの木に打つ。皆々よろしく、段切り、曲撥にて賑やかに。

幕

姿替霞假宅（終り）

たちよりて
見ばや見せばや
峯の花

戀衣緣初櫻――女鳴神

市川家の藝たる「鳴神」を女に直した狂言は、元祿九年中村座に「子子子子子」といふ名題で荻野澤之丞が當りを取つて以來、代々の名女形はいづれも女鳴神を演じ、それがその度に脚本が變るので、女鳴神の脚本だけでも澤山ある譯である。その中でも初世瀬川菊之丞なぞ、殊に名譽の評を取つてゐる。爰に收録したのは、寶暦四年の春、河原崎座で小佐川常世が上演したもので、古きに流れず新らしきに失せずといふ所でこれを採つたのである。これでは鳴神尼を墮落せる若衆が幽魂だといふ所が普通の女鳴神とは變つてゐる。さうして後に菊池次郎といふ惡形が現はれるのは、全體が「けいせい金秤目」といふ伊達騒動の通し狂言の一部になつてゐるからである。作詞は櫻山金八、常磐津は文字太夫と岸澤式佐、振附は西川扇藏。役割は、鳴神尼（二世小佐川常世）采女之助亡魂、眞弓（四世岩井半四郎）菊池次郎（三世大谷廣次）松ケ枝（姉川きく八）梅ケ枝（市川光藏）白雲坊（小佐川竹次郎）黒雲坊（大谷廣五郎）等であつた。

戀衣緣初櫻（女鳴神）

北岩倉鳴神庵室の場

役名 ── 鳴神比丘尼。黑雲坊。白雲坊。奥女中、松ヶ枝。同、梅ヶ枝。斯波采女之助義久の靈。細川勝元妻、高弓。菊池次郎武國。

常磐津連中

本舞臺、眞中に境上、藁葺屋根、栗丸太の柱、欄間に半簾、三方折り廻しの高欄、上がり段附き、境上の正面には不動の畫像掛けあり、高さ見合はせ、上下の見付け柱、櫻の大樹。北の方、高欄に岩組みの瀧壺、これに注連を張る。下より櫻の幹を傳ひ、瀧壺へ登る仕掛け、一面に櫻の枝、花咲き亂れし景色。上の見付け柱の櫻の枝に、姿繪の掛け地、懸かつてある。下の方に常磐津連中、居並び、トヒヨにて幕明く。

ト頭取出で、淨瑠璃の役觸れ濟むと、前彈きにかゝる。

〽霞かは、花鶯にとぢられて、春の興ある山深み、賴みし方の音信に、侍女打連れて分け登る、麓の道は多けれど、同じ高根の月ならで、雪と見紛ふ花の山、菩提の山に法の道、打つ松蟲の音も冴えて。

ト花道より白雲坊、黑雲坊、淺黃衣裳、丸括け前帶に角頭巾にて、手に松蟲の鉦を持ち、打ちながら出る。後より梅ヶ枝、松ヶ枝、着流し、後帶にて、櫻の花を入れし手桶を持ち、さし荷ひに擔ぎ、この見得にて、四人出て來る

〽彌陀賴む、法の教へも有り難や、なまうだなまうだ南無阿彌陀、迷ひの雲も空晴れて、眞如の月の明らけく、なまうだ〳〵、南無阿彌陀、跡に二人の手弱女が、さし荷ひたる花桶に、手向けの花や阿伽の水、これや佛に仕ふなる、ちぐの緣ぞと競ひ連れ、閑居の庵へ來りける。

トこの文句にて四人、よろしく振りあつて、本舞臺へ來る。

梅枝　なんと松ヶ枝さん、見やしやんせ、いつもの事とは

云ひながら、此お山の櫻ほど、見事に咲く花もござんすまいわいなア。
松枝　ソレイナア、峯から谷まで一面に、咲きも殘らず、散りも始めず、揃つた景色ではないわいなア。
白雲　此やうに花が見事に咲くによつて、お師匠の鳴神さまも、毎日々々この壇上で、お勤めなさるゝゆゑに
黒雲　わし等は先へ來て、壇上の掃除もして置かねば、お師匠様に叱られるわいなう。
梅枝　それ／＼、隨分と溜なしうせにや、お師匠様に叱らるゝぞや。この頃は續いての旱魃ゆゑ、池にも川にも水が涸るゝゆゑ、鳴神さまも阿伽の水にお困りなさるゝと思うたゆゑ、誰か汲んで來たわいなア。
松枝　山の櫻も一しほながら、麓の八重櫻も折々お慰みと、阿伽の水に差しては來たれど、この花がお氣に入ればよいが。時に、見やしやんせ、この瀧壺には、水がたんとあるえ。
梅枝　さうぢやわいなア、この山の近所には、どこにも水はなけれど、この瀧壺にばかり、絶えず流れてゐるわいなア。ほんに、瀧の景色と云ひ、花の咲き亂れた景色と云ひ

松枝　どうも云へたものではないわいなう。
ト此うち白雲坊、上の櫻の花にかゝつたる姿繪の掛け地を見付け
白雲　コレ／＼、黒雲坊、見や。この櫻の枝に、何か面白さうな物がかゝつてあるぞや。
黒雲　ほんに白雲坊が云ふ通り、ありや、錦繪ぢやないか取つて欲しい。取つて欲しいわいなう。
松枝　ドレ／＼。見れば美しい若衆の姿繪の掛け地。どうしてマア、この櫻の枝にかゝつてある事ぢやぞ。
梅枝　大方こりや、麓の繪草紙見世か、但しは經師屋からでも、吹き飛んで來たのかいなア。
白雲　早う取つておくれいなア。
梅枝　オヽせわし。高い枝にある物が、つい取らるゝものかいの。待ちや／＼。
ト云ひながら、花桶を荷うて來た竹にて、この掛け地取り下ろす
白雲　わしに下さんせ／＼。
松枝　オヽ、待ちやいなう。でもマア、可愛らしい若衆さんの姿繪。とんと生きて居るやうぢやわいなア。
梅枝　ほんにマア、それは大方、名人の繪師の描いたので

ござんせう。目許なら、口許なら、春章でも春英でも
敵ふものぢやないわいなア、

黑雲　サア／＼、その繪を、わしにおくれいなア。

白雲　イヤ／＼、先へ見付けたは、この白雲ぢやによつて、
わしが貰ふのぢや。

黑雲　イヤ／＼、わしが貰ふ

兩人　イヤ／＼、わしが／＼

ト白雲坊、黑雲坊、爭ふ。向うにて鈴の音する。

松枝　これはしたり、其やうに爭うて、何ぢやいの。

梅枝　アレ／＼、いつもの鈴の音がするぞや。

松枝　ソリヤ、お師匠様のお出でぢやぞ。

白雲　ヤア、、

梅ケ　二人ともに、靜かにしや。

兩人　アイ、、。

〽嬉しさ餘る春風が、花の香そよと吹き送り、留め木も
薫る紅の袈裟、鳴神比丘と名にしをふ、尊き尼君おはし
ます。

ト此の文句にて鳴神比丘、淺黃帽子、緋の衣、五條の
袈裟にて、水晶の珠數、香爐を持ち、駒下駄にて出て
來る。

〽悟道の門に入りながら、姿に殘る色も香も、色でまろ
めてぽつとりと、素顏美くし柳腰、花恥かしき粧ひも、
樹下石上の敎へぞと、山また山を踏みしたき、御法の床
へとたどらるゝ。

ト此の文句にてよろしくあり、本舞臺へ來る。壇上へ
上がり

鳴神　花の色、露の光を尋ねても、元より淸き月ぞ宿れる
と、詠ぜしもむべなるかな。誠に、心眼開けざれば、無
明の長夜明けがたく、苦患の憂ひ、悲しみをば離るゝ事
なし、その迷妄を悟り得んと、淸淨國の床に登つて、
今きく水音、風聲も、御法の聲と聞きしを、勤行納受な
さしめ給へ。南無大日大聖不動明王々々々々。

梅枝　上人さま、只今

松枝　登山

四人　なされましたか。

鳴神　これは／＼、古への好みを思ひ、毎日々々この鳴神
に、阿伽の水の供養めさる、梅ケ枝、松ケ枝の二人の女
中。白雲、黑雲も、早う登山なしたなア。

梅枝　ほんにあなた樣は、お生れ立ちと云ひ、其やうな美
しいお姿を、お持ちなされながら、尼君におなりなされ

安政元年五月　河原崎座上演

坂東しうかの鳴神尼

たその御樣子。

松枝　いつぞはお聞き申したいと存じて居りましたが、お年も行かぬお身を以て

梅枝　なぜに御出家なされましたえ。

鳴神　問ふも憂し、問はぬも辛し武藏鐙、かゝる折にや人は死ぬらんと、恥かしながら自らが、尼となりしも戀の道。御室の花見に見初めた殿御、命の内に今一度、逢ひ見んものと便を求め、樣子を聞けば其お方は、七星の鏡とやらを失ひ、その越度にて、お腹を召したと聞くと早、身も世もあられず、心も亂れ、振り亂したる黑髮も、戀慕の思ひに髮逆立ち、また或る時は鳴動して、髮の鳴りしがうたてさに、輪廻のきづなを斷ち切らんと、尼法師となりし身の上、髮の鳴りしを其まゝに、鳴神比丘と法名付け、この山籠りも後世の爲、味氣ない身の上を、よきに推量してたもいなう。

梅枝　さては、あなたの御出家も

松枝　戀ゆゑでござりまするかいなア。

鳴神　エヽ、よしない事で、思ひ出すも穢らはしい。コリヤ〳〵白雲、黑雲、いつもの通り、讀經にかゝらぬか。白雲、黑雲、これはしたり、二人とも、あのマア、濟まぬ顏わいなう。

梅枝　左樣でござりませう、二人のお弟子達は、ちつと濟まぬ事がござりまするわいなア。

鳴神　そりや、なぜに。

松枝　サア、お聞きなされませい。山颪しの風が、吹き競うて參りましたか、櫻の枝に、美しい姿繪の掛け地が、かゝつてござりましたを、二人の衆が爭うて、それゆゑの不機嫌と見えまするわいなア。

鳴神　それはマア、興な事ぢやなう。深山の櫻に、姿繪の掛け地がかゝつてゐると云ふは、それも不思議の一つならんか。そりやマア、どのやうな姿繪が、かゝつてあつたぞいなう。

梅枝　御覽じませい。此やうな可愛らしい姿繪が、かゝつてござりましたわいなア、

ト下より掛け地を壇上へ上げる。鳴神比丘、この掛け地を取つて見て、ヂッと思ひ入れ。

鳴神　ヤア〳〵、生けるが如きこの姿繪、こりやコレ自らが、御室の花見で、見初めた殿御。目許なら、口許なら、似たとこそ云へ〳〵、此やうにも又似た姿繪が、どうして爰へは、風が持つて來てかゝりしぞ。おなつか

しい／＼、お懐かしいわいなア。

ト掛け地を抱きしめて、思ひ入れして、心付き

こりやコレ、誠に繪空事。此やうなものを目に觸れしも悟道を妨けんとする魔性の業か。見るもなか／＼、菩提の迷ひのきづなを切らんには、それ／＼

ト最前の大香爐を引寄せ、この中へ右の掛け地を打込むと、大ドロ／＼にて煙硝火、立ち昇る。これにて鳴神はじめ下の四人も、目くるめいて、ウンと倒れ、悶絶する。右の香爐より魂ひ現はれて、舞ひ上がり、仕掛けにて花道の中ほど、切り穴へこの魂ひ落ちると、ドロ／＼を打ち上げる。

〽往事渺茫として夢に似たり、舊遊なかば泉に歸す、斯波采女之助義久が、在りし昔の俤姿。

ト大ドロ／＼にて煙硝火、立ち昇ると、この切り穴より采女之助義久、若衆形、羽織衣裳にて、駒下駄を履き、横笛を吹いてゐる。この見得にてセリ上がる。

〽貴にや落梅曲ふりて、峯を吹くなる笛の音は、餘韻淸淸として、或ひは亂るゝ青柳の、嘆くが如く慕ふが如く、且妙なる音聲に、いとゞ心耳を澄ましける。

ト鳴神比丘、心付きたるこなし。

峯吹く風の音につれ、思はずも心、忙然となりたる折から、人跡稀れなるこの深山、はるか瀧壺の元にて、妙なる笛の音の聞ゆるは、ハテ、怪しや……白雲、黒雲、雨僧

ト これにて梅ヶ枝・松ヶ枝・心付き・白雲坊、黒雲坊に氣を付ける。

雨僧、未熟な、なぜ眠るのぢや。

白雲　イエ／＼、わたしは眠りは致しませぬ。この黒雲が眠りましてござりまする。

黒雲　アレ、又あんな嘘を云うたものぢや。おれは目を皿のやうにして居ますわいの。

白雲　イヽヤ、眠つたは、其方ぢや。

黒雲　イヽヤ、こなたぢや。

ト 兩人、爭ふ。

梅枝　これはしたり、お師匠樣の前で、其やうに爭はぬものぢやわいの。

松枝　なんぢやあらうと、アイ／＼云うて居たが、よいわいなア。

白雲　そんなら、なんであらうと、アイでござりまする。

鳴神　雨僧、今のを聞きやつたか。

白雲　なんでござりまするぞえ。
鳴神　はるか瀧壺のほとりにて、氣高き笛の妙音を聞いてか。
白雲　エ、。
鳴神　ハテ、心得ぬ。妖怪の類ひか。兩僧、瀧壺のほとりへ行て、見屆けておぢや。
白雲　エ、。
ト悃りする。
梅枝　こりや尤もぢや。悃りながら、鳴神さまへ申し上げまする。二人ながら小さいお弟子、其やうな事は、怖がつてゞござりませうわいな。
松枝　お勤めのお邪魔にもなりませすば、差措かれたが、よかりさうなものゝやうに存じまするわいなア。
鳴神　幼少の弟子どもゆゑ、その挨拶は尤もながら、怪しみを見て、怪しまざれば、却つてその身を破るとやら。大儀ながらこなた衆、行て、見屆けて來てたも。
松梅　エ、。
鳴神　ハテ、毎日の阿伽の水も、佛に機緣を結びたいと云ふ心ではないか。悟道すれば、なんの恐るゝ事はない。
梅枝　そんなら、どうでも見屆けて參らねばなりませぬかえ。
鳴神　早う、行きやいなう。
梅枝　これは又、ひよんな事になつて來たぞ。コレ、松ケ枝さんもござんせ。
松枝　アノ、わたしにもかえ。
梅枝　知れた事いなア。誰れが一人で行くもので。云やうな又、氣味の惡い事があるものかいなア。
松枝　それぢやと云うて、鳴神さまの仰せなれば。
梅枝　とは云ふものゝ、
鳴神　どうぢやぞいなう
松梅　參りまするわいなア。
ト　おつ〳〵兩人、瀧壺の元へ來り、義久の幽魂を見て、悃りして、こなたへ來て
梅枝　でも美しいお若衆さん。
松枝　美しいとも〳〵、あのやうな若衆さんが、どう世界にあつた事ぢやぞいなう。ありやマア、なんぢやあらうぞ。
梅枝　知れた事、若衆ぢやによつて、男ぢやあらうわいなア
松枝　男は男であらうが、只の人ぢやないぞえ。

菊枝　サア、わしも、さう思ふわいなア。
松枝　まづ、何ぢやと思はしやんすぞ。
梅枝　サア、あれは、わしが三寸爼板、見拔いて置いた。
松枝　見拔いたとはえ。
梅枝　慥かに文珠菩薩か、普賢菩薩ぢや。
松枝　そりや、どちらも女に化けさんす、佛さんぢやないかえ。
梅枝　そんなら、瀧の元へ來たによつて、瀧見の觀音でもあらうか。
松枝　觀音さんも、若衆になるものかいなア。
梅枝　なんぢやか知らぬが、滅多無性に美しい殿御振り。
松枝　とんと合點がゆかぬわいなア。
菊枝　合點がゆかぬとは心得ぬ。ドレ〳〵わしが。
　　トこなたを見て、采女之助をキッと見て
　　コレ〳〵。
采女　エヽ。
鳴神　エヽ。
白雲　エヽ。
鳴神　これはしたり……空飛ぶ鳥さへ、自由に通ひ難きこの山路へ、さもやごとなきお若衆の、嚴しき瀧の前に、笛の調べは訝かしい。先づ、こなたは何者ぢや。
采女　わしかえ。
鳴神　わしかえ。
松梅　わしかえ。
鳴神　これはしたり。
松梅　ハイ。
鳴神　成る程、こなさんの事ぢや……とは云ふものゝ、見ればやごとなき殿振りに、芙蓉の艷あるお若衆の、もしやと思ふも迷ひの種。それゆゑにこそ最前も、山颪しの吹き送りし、優美に優しき姿繪をも、火中なせしは、菩提の障りと思ふから。さはさりながら、思ひがけないこなさんは、マア、何人ぢやぞ。
采女　某は、遙かこの山奧の、麓の者でござりまするが、幼少より笛に心をゆだねまして、何卒妙音を吹き覺えんと、洛中洛外を調べ歩きまするうちに、或る人の物語りに、笛は瀧、吟ずる聲あり、妙なる音聲を出ださんと思はゞ、深き淵、深き池、又は名高き瀧の元にて調べるなら、自然と妙音を吹き覺えんとの敎へに從ひ、そこ爰と歩行いたしましても、如何なる事にや、百日あまり旱魃して、雨降らねば、淵川に水なく、承はれば、此お山の

瀧津瀨は、かゝる旱りにも水絶えず、清く流るゝは、誠に龍神の住居ならんか。藝道修行のその爲に、はるばるこれまで參りました。お免しなされて下されませい。

鳴神　笛の妙音を得んと、藝道修行のその爲に、この深山路の瀧を尋ねて分け登つたとは、誠に感じて餘りあり。さりながら、藝道修行の其うちには、さまざまな憂き艱難もあつたであらうの。

采女　サア、憂きが中にも面白い事、優美な事もござりましたて。

鳴神　色即是空、空即是色と聞くからは、殿御に對し、詞を交すは、戒めの恐れはあれど、一つは法の方便ともならんか。その優美な話が、聞きたいものぢやなア。

采女　お話し申すも、藝道を修行の爲。なんぞお話し致しませうか。

鳴神　そりや、よからうわいなア。サア、話して聞かせて。

采女　サア、お話し致しませうが、そこと爰とは遙かに隔り、低うお話し致しましては、お耳へも入るまいし、高う申したら、山彥にこたへて、凄まじうござりませうし、どうぞお側へ參つて、近うお話し申したいものでござりますが、お側へは參られず。

鳴神　ちつともだんないわいなア。そこで話しては、瀧の音に紛れて、なかなか耳へ入らぬ程に、爰へ來て

采女　アノ、參つても、大事ござりませぬか。

鳴神　だんないとも、爰へ爰へ。

采女　左樣なら、お側へ參りましても。

　ト壇上の側へ來ようとする。白雲、黑雲留めて

白雲　コリヤコリヤ、ならぬぞならぬぞ。

采女　でも、お師匠のお許しでござれば。

白雲　なんのお許し。師の仰せ渡された男禁制

黑雲　禁制東方白體びやくらい。

白雲　誓文くつされ、ならぬならぬ。穢らはしい、七里けつぱいぱい。

黑雲　七ちんが一ちん、六ちんが三ちん。

白雲　二一天作の言語道斷の若衆、飛び退いて居やうぞ。

梅枝　さうぢやさうぢや。この壇上へ男を入れては、コレイナア、行法の算盤が合はぬわいなア。

松枝　ならぬ事ぢや程に、諦めて、南無ぱちぱち、さんようそわか。

白黑　チエヽ

采女　アレ、あのやうに云うてござりまする。

鳴神　よい〳〵。あのやうに云ふ筈ぢやわいな。壇上近く男は寄せ付けぬが、この山の掟、それぢやに依つて、皆が膝下近く寄つて、話したがよいわいなう。

采女　左樣なら、爰でお話し申しませう。皆樣も聞いて下さりませい。

白雲　ア丶、寄るまい〳〵。

松梅　なんぢやあらうと、側へはならぬぞえ。

白雲　イヤ、しやつとでも云うて見や。

采女　でもマア、仰山な。

黒雲　サア、一老。

白雲　ソレ、師匠の

白黒　云ひ付けぢや。

采女　さらば、お話し申しませうか。

鳴神　さらば、聞かうかいなア。

采女　聞きが中にも又、樂しみのありとやら。都は春の錦と云ふ、淸水、音羽の花盛り、爰や彼所に幔幕打たせ、內裏上﨟お公卿樣、武家の姫君、若殿方、傾城、藝子に寄太鼓、打混じたる花見の群集、あるが中にも、お聞きなされませ、私しがやうな、數なりませぬ者の、心を引いて見ようとする、いたづらな者があつて、幕の內より古歌を書いて下さりました。

梅枝　ヤア〳〵、その歌は。

采女　見ずもあらず、見もせぬ人の戀しきは。

梅枝　見ずもあらず

松枝　見もせぬ人の戀しきは。

采女　ア丶、なんとやら云ふ、下の句でござりましたが。

梅枝　板にでも書き付けて、帶へ括り付けて居たが、よいわいなア。

松枝　マア〳〵、ま一度、吟じて見やしやんせ。

采女　見ずもあらず、見もせぬ人の戀しきは。

鳴神　あやなく今日や眺め暮らさん、と云ふ下の句ではなかつたかえ。

采女　ほんに、さうでござりました。

鳴神　して〳〵、どうぢやえ。

采女　樣子を聞けば、曲輪の花、それからとんと面白うなつて。

松梅　その筈〳〵。

采女　君を思へば徒步跣足、雪の日も、雨の夜も、通ふ程に行く程に、廓に幾日も居續けに。

ト これより淨瑠璃の振りにかゝる。

〽面白の花の都は、筆に書くとも及ぶまじ、東には、祇園石垣、四條繩手を、よくや菓子の色揃へ、西は島原、出口の柳しげり合ひ、揚屋々々のさゞめ言、深い仲居がつい取持つて、中戸小座敷廻らば廻れ、火車の罠と知つても粹が身を食ふ根曳、身請けは金がはゞする、所謂口舌は太鼓受け込む、年増の女郎は紋日に追はるゝ、禿は遣り手を怖がる、實に誠、忘れたりとよ、難波の西も新町の、彼の松山に昇り詰めたる椀久が、今は心も亂れ候、末の松山、思ひの種よ、さりとは〱忍ぼかの、さうもせい、あのや椀久は鼓の調べ、締めてゆるめて、ゆるめて締めて、森よげに見ゆる若草や、紫匂ふ十德も、ゆかりの色と浮氣を越して、皆ゆゐしんの理りに。

ト よろしくあるべし。

鳴神 讃佛乘も、法の緣。

松梅 幸ひ、これに鞨鼓もあれば

梅ケ とてもの事に、鞨鼓を打つて

兩人 お見せ候へ。

ト 鞨鼓を取つて、釆女之助へ渡す。

釆女 よし、それとても佛の誓ひ、月の爲には浮き雲の、種と心やなりぬらん。

黑白 鉦鼓の音も

釆女 鼓の音も、花にたくへて、面白や。

ト 釆女之助、鞨鼓を掛けて、眞中に立つ。白雲坊、黑雲坊、松蟲の鉦を持つて、左右へ立ち並ぶ。

〽春なれや、經よみ鳥の一聲は、菩提の花に鳴き初めて、なまいだ、佛の誓ひたゞ頼め、到れや到れ彼の岸へ、なまいだ、歌舞の菩薩の御法と聞けば、簫笛琴箜の音も冴えて、虛空に花ふる村雨の、雲のまにまに面白や、浮なめぐらす曲なれや。

ト 三人、よろしく振りあつて、納まる。

梅枝 やんや〱イヤモ、きついものでござんすわいな、鶴の難波に名の高い、松山椀久の派手くらべ。

松枝 同じ廓に全盛の太夫職、扇屋の夕霧に通ひ詰めて、粹の本地と名を取つた、藤屋の伊左衞門とやら云ふ、派手な浮名があるぢやござんせんかいなア。

釆女 成る程〱、今も廓に云ひはやす、傾城の眞實に、扇屋夕霧に止めたと噂をするも、彼の藤屋の伊左衞門に實を明かした戀草も、秋の末よりぶら〱と、派手な素顏も面瘦せて、藥も日數ふる雪に。

安政元年五月　河原崎座上演
坂東竹三郎の雲野當麻之助

鳴神　して〳〵どうぢや。

ト采女之助、梅ヶ枝、よろしく振りにかゝる。

〽なぜに櫻は仇名草、浮名立つとも何かいとはじ、物や思ふと人問はゞ、枕より外知る人も、馴染みも深き吉田屋へ、足もと輕き道中は、雨に惱める海棠の、露重げなる姿なり。

梅枝　モシ〳〵、太夫さま、そこはいかう冷えまする。マアマア、座敷へお出でなさんせい。日頃お前の戀しいと思し召した伊左衞門さんも、アレ、あの小座敷に。

采女　そりや、ほんにかえ。

松梅　アイナア。

ト采女之助、よろしく女の振りあるべし。

〽無慘やな夕霧は、流れの昔なつかしく、飛び立つ心おくの間の、首尾は朽ちせぬ緣と緣、今日まで命長らへたは、神佛の扣へ綱、コレなつかしうはないかいの、顏が見たうはないかいのと、搖り起し〳〵、抱き起せば、取つて投げ。

トこれより男の振りよろしくあるべし。

采女　エヽ、こりや何するのぢや。狸女郎のすつぱの皮、其方へ退いてもらひませうぞ。

〽夕霧涙もろともに、恨みられたり託つのは、色の習ひと云ひながら、それは浮氣な水淺黃、逢ひ初めたその日から、こんな緣が唐にもあろか、派手な浮名が嬉しうて、人の譏りも世の義理も、白紙に書く文の傳、返事取る手も心急き、口舌の床のよしあしも、嬉しいに付け悲しいに、付けて忘れた事はない、それにお前の惡性を、わしが案じは移り氣の、外にもしやと云ひかゝり、しまひ附かねば小夜更けて、脊中合せて寢て見ても、ついそれなりに張り弱く、仲直りすりや明けの鐘、憎うてならぬ鳥の聲、なんの烏が意地わるで、鳴くぢやなけれど後朝の、去なせともない心から、放ちはやらじと取縋り、嘆く涙は春雨の、降り亂したる風情なり。

コレ〳〵、おいてくれ〳〵。其やうな有りふれたせりふで、泣きかけても、この伊左衞門、たべぬでえす。それよりは田舍大盡の襟許に付いて、身請けの相談がましまし。なんぼお隱しなされても、ソレ、その顏に現はれた。

〽德若に御萬歳と、君は全盛ましんます、愛嬌ありける嘘つき女郎、五葉の松野や綠を呼んで、否な客をば讓り葉の、口にてれんのあやなしに、我れらがやうな才藏な

んぞは、吊つ掛けられて押つ摑められて、襟許がお好きだ、まんざらこやまんざらこ、誠にめでたう候ひける、侍ひも蹴れば町人も、この伊左衛門も蹴る〳〵、さらばお暇いたさうと、行かんとするを引留むる、いゝや去ぬると振り切る袖、拂へばまとふ蔦かづら、別れも惜しの妹脊仲、離れともなきその風情、色めく話しに壇上より、思はずおぼとをちこちの、立つ甲斐もなき有樣に、皆々立ち寄り、呼び生けつ、藥よ水よと立ち騒ぎ、介抱等閑なかりける。

トこの句にて鳴神比丘、壇上より落ち、氣を失ふ。

皆々、驚ろく。

松梅　鳴神さまイなう〳〵。

白黑　お師匠樣〳〵。

ト呼び生ける。釆女之助、瀧壺の水を汲んで來たり、口移しに飮ませて

釆女　鳴神さまイなう〳〵。

白黑　お師匠樣〳〵。

ト皆々呼び生ける。鳴神比丘、心付きたるこなしにて、目を開いて思ひ入れ。

釆女　お心が付きましたか。

鳴神　淺ましや、佛の教へを守る身の、名利を離れて居ながらも、艶なる話しに聞き惚れて、この壇上より……エヽ、恥かしい。いま氣を失うたと思ふうち、冷水口に入ると等しく、心が付いて、氣がハッキリなつたるは。

釆女　そりや私しが、勿體ない事ながら、お心の付かぬゆゑ、口移しに水を上げましたのでござりまする。

鳴神　アノこなさんが。

ト釆女之助が手を取つて、ヂッと思ひ入れ。

皆々　お心が慥かになりましたかえ。

ト鳴神比丘、癪の發りし思ひ入れ。

どうなされました〳〵。

鳴神　いま壇上より落ちしゆゑ、ハッと思うて持病の痛へが。アイタヽヽ、アイタ〳〵。

梅枝　そりや、困つたものでござりまするわいなア。

鳴神　コレ、白雲、黑雲、いつもの假家に用意の藥、着替への小袖、いから寒うなつた。早う持つておぢや。

白黑　畏まりました。

鳴神　イヤ〳〵、藥の事は、子供任せにして置いては。

松梅　お藥は、私しどもが取りに參じませう。

鳴神　それでは、却つて慮外なわいなう。

梅枝　なんの、其やうに仰しやる事がござりませう。二人のお弟子を連れ立つて

松枝　お小袖もお藥も、たつた今、取つて參りませうわいなア。

白雲　わしらがお藥やお小袖を、取りに行つたその跡は、あの美しいお若衆さんと、お師匠樣とたつた二人。

鳴神　なんとしたえ。

黑雲　れんぼれれつのれんこのぼう、ぼやほう。

白黑　ほうやほう。

梅枝　これはしたり、其やうな事を。

鳴神　早う行かぬか。

白雲　アイ、、、、。

松梅　サア、ござんせ。

〽あれ〳〵〳〵、お二人ともに流し目の、詞しがらむ心を書いて、戀と慥かに見て取つた、ホウヤレホヤレと見て取つた、妾らはずつと氣を通し、サアござんせと打連れて、假家へこそは急ぎ行く。

ト合ひ方になり、梅ケ枝、松ケ枝、白雲、黑雲を連れて、下座の方へ入る。釆女之助、後を見送り

釆女　コレ〳〵、女中達、某も一緒に行て。お藥やお小袖を。

ト行きにかゝる。鳴神とめて

鳴神　エヽコレ、捨てゝ置かしやんせいなア。

釆女　それでもアノ。

鳴神　エヽモウ、つんと、コレイナア、去年の春、御室で見初めた戀しい殿御、便求めて幾度か、千束に餘る玉章に、ついに一度の御返事ないは、あんまりつれない、むごらしいと、思ひ焦れて居るうちに、釆女さまは死なしやんしたと聞いた悲しさ。せめては後世のお爲にと、切つて捨てたるわたしが黑髮。それにマア今爰で、思ひがけなうお目にかゝると云ふは、そんならお前は、生きてござんすのか。マアこりや聞えた。あんまりわたしがお慕ひ申したに依つて、うるさいと思うて死んでしまうたと云はしやんしたのか。そりや聞えぬ〳〵、聞えぬわいなア。わたしや、ほんまに死なしやんしたと思うてな、最前も其お顏に似た姿繪さへ、焼香の煙りとなし、思ひ切つて、此やうな坊さんになつて、恥かしいわいな、恥かしいわいな。此やうな事を露ほども知つたなら、なんの坊さんにならうぞいなア。

釆女　ハテサテ、思ひがけなきその一言。數ならぬ某に、

それ程までの執心とは、忘れはおかぬ、忝ない。左樣の事と存じもよらず、この北岩倉に勤行の、尼君ありと聞きしゆゑ、頼みたき仔細あつて、はる〴〵來たるこの身の上。

鳴神　そんならお前は、アノわたしに。

采女　頼みがあつて來ましたわいなう。

鳴神　わたしはお前を、日頃から、戀しい〳〵と焦れ慕うたも、お前さんは御存じもござんすまいが、その可愛らしい殿振りを、見初めた頃は。

采女　その頃は。

采神　サア、それはな

〽思ひ初めしは去年の春、名にし御室の花盛り、花見群集の入りつどひ、我れは忍びの編笠も、深き緣のなり合はせ、鬢の飾りも派手衣裳、對の女子が取卷きし、伊達な模樣の乘り物で、内ぞ懷しき笠の紐、解いてお顏が見まほしく、お姿ばかりにあこがれし、乘り物の內、笠の內、折しも粹な春の風、さつと烈しく乘り物の、御簾吹き上げるとそれその顏、笠吹き散つて其お顏、その可愛らしい殿御振り、ふつと見たのが初櫻、目許照耀楊貴妃の、いとし盛りの絲櫻、情盛りや戀盛り、花には仇な春風が、戀風となる物思ひ、焦れ〳〵に忘るゝ隙は、一日片時もないわいな、あなたは不慮に御最期と、聞いて身も世もあられねば、共に死なんも止められ、そぎ尼の身となりの葉の、露とも消えん今の身に、かゝる逢瀬は現か夢か、夢なら覺めな我が夫なう、戀しいゆかしいなつかしと、寄らんとすれば恐ろしや、峯の嵐のはやち風、天地俄かに鳴動し、梢木の葉もさら〳〵〳〵、花も砂も吹きしきる。

トドロ〳〵に、采女之助、氣色を正し、スックと立つ鳴神、驚ろき、取り付いて

ヤア〳〵〳〵、お顏ばかりかお姿まで、氣色を正し給ふのは。

トかすめたるドロ〳〵になり、寐鳥、采女之助、思ひ入れあつて

采女　我れこそ斯波主計頭が弟、同苗采女之助義久、七星の鏡を不慮に奪ひ取られ、その越度ゆゑ生害なし、冥土黄泉へ赴むけども、心にかゝるはその名鏡、我が業通にて察し見るに、其方の兄、菊池次郎武國が取り隱し、あの瀧壺へ四韋駄外道の法を以て、龍神と共に封じ込めて秘め置けども、娑婆になき身の穢れゆゑ、取り得る事も

叶はぬ無念さ。我れに未來の知遇もあらば、夫の爲、天下の爲と、兄が隱せし鏡を取り得、足利どのへ差上げて、修羅の苦患を助けてたべ、後の筐はこの笛竹、この水龍の笛を渡さん。受取り給へ。

ト渡す。

鳴神　さてはこの世にましまさぬ。斯波釆女之助さまでござんしたか。お氣遣ひなさんすな。例へ兄の菊池次郎と兄妹の緣は切るとも、未來の契りを捨て給はぬ、夫の爲、天下の爲、あの瀧壺に隱しある、その七星の鏡を取り得足利どのへ差上げませう。未來成佛なさしめ給ひ、半座を分けて待つてたべ。

釆女　嬉しき人の詞よなう。未來佛に至らんとは思へども、親兄に先だつ不孝、冥途の苦患、目のあたり。

トきつと思ひ入れ。

〽凡そ輪廻は小車の、六道四生を出でやらぬ、人間不定芭蕉葉の、哀れ敢なき身の上の、婆娑と冥途を隔つる妄執の、修羅の太鼓の音すなる、八大地獄目のあたり、けんじゆ地獄の苦しみは、親同胞に先立つ罪科、劍の山、麓は紅蓮大紅蓮、氷の地獄は煩惱業苦、戀はせかるゝ衆生地獄、等活地獄は生死の海、散る花怨む猛火となつて、呵責の炎えん／＼と、焦れ焦るゝ大焦熱、阿鼻叫喚や黄泉の、巷に叫ぶ苦しみに、山風谷風さつさつさ、名鏡取り得て給はれと、云ふ聲ばかり殘るは谺、松の嵐のちりぢりぱつと、姿は消えて失せにけり。

ト釆女之助、よろしくあつて、花道、中程の切り穴へ消える。煙硝火立つ。鳴神比丘、あちこちと尋ね廻り

鳴神　釆女さまいなう／＼。最早、この世でお目にかゝる事も叶はぬかいなう。後の筐と下さんしたこの笛竹、筐こそ、今は仇なれこれなくば、忘るゝ事もあらましきものを、怨めしきは兄の菊池次郎どの、及ばぬ大義の企てに、妹の思ふ人まで殺害させ、何か栄華の種にならうぞ。夫の未來を助ける名鏡、龍神を封じたる、彼の七星の鏡は、あの瀧壺の岩間にこそ。

ト鳴神比丘、瀧壺を見て、キッと思ひ入れ。

〽彼の名鏡はあれなれと、小褄引き上げ甲斐々々しく、見廻すこなたの櫻木こそ、これ幸ひと攀ぢ登る、裾もほら／＼、脛もあらはに白妙の、梢の花もちら／＼／＼、雪の吹雪と怪しむばかり、危ふかりける。

ト三重になり、鳴神比丘、いろ／＼こなしあつて、藤かづらを傳ひ、だん／＼と瀧壺へ上がる。

〽女の一念するどなる、巖石岩角踏みしめ踏みしめ、南無諸大善神と、秘封の注連縄打ち切つて、難なく名鏡取り出せば、俄かに黒雲渦巻き下がり、震動雷電はたたがみ、なう恐ろしやと女氣に、稍を傳ふも夢うつゝ、名鏡大事と肌に附け、夫の疑ひを晴らさんと、ひらりと飛ぶより一散に、瀧をさして駈りゆく。

ト段切れ、打上がる。此うち大ドロ／＼、雷、雨の音。鳴神、瀧壺より下り來る、鏡を持ち、思ひ入れにて、一散に揚げ幕へ入る。この途端に常磐津連中を山幕にて隱す。右の大ドロ／＼、ツツカケにて、この境上ぶん廻す。

本舞臺一面の岩窟岩組み、この眞中に菊池次郎武國、散らし髪、荒行の形にて、梵天を持ち、立ち身。左右に捕り手六人、いづれも對の形にて、てん手に十手を持ち、弓張り提灯を持ち、菊池次郎を取卷き、キッと見得。

捕手　菊池次郎、動くな。

武國　アヽラ心得ぬ。我れ、叛逆の初めより、四葉駄外道の法を以て、七星の鏡に龍神龍女を封じ込め、あの瀧壺へ秘め置きしに、かゝる雷鳴はたゝ神、大雨篠を亂せる有様。さては妹めが瀧壺へよぢ登り、鏡を取つて逃げ去りしか、我が大望の邪魔なす女、イデ追ひ駈けて討取らんか。ソレ。

ト思ひ入れ。

六人　動くな。

ト思ひ入れ。

武國　なんと。

捕一　斯波義政が爲に、西國にて亡びし

捕二　菊池・嫡男、次郎武國。

捕三　父の仇を報はんと

捕四　足利どのへ弓引く曲者。

捕五　我れ／＼が搦め捕る。

捕六　尋常に腕

皆々　廻せ、

トきつと思ひ入れ。

武國　ハヽヽヽ、この菊池を搦めんとは、事をかしや。天運、時到らば、四海の主になる某。妨げひろぐと片ッ端、この瀧壺へぶち込むが、うぬらはそこを失くなるまいか。

捕手　いらざる廣言、ソリヤ。

皆々　捕つた、どつこい。

トこれより大太鼓入りの鳴り物をかりて、武國、六人を相手に花々しくタテあつて、トヾ花道へかゝる。キツカケにて、向うより眞弓、女形、着流し、後帶、足駄がけ、肩に蓑を引ッかけ、長刀を搔い込み、出て來り、武國を本舞臺へ押し戻し、兩人、しやんと見得。

捕六　どつこい。

菊池　今この菊池次郎が驅け出す向う面へ、さもじよなめいた立ち姿。なぜ邪魔をする。わりやマア、なんと云ふべんな子だ。

眞弓　自らこそ、細川勝元が妻の眞弓、こなたの妹鳴神比丘、七星の鏡を持參なし、兄武國を賴みの一言。夫は大內守護の名代、心を改め、降參あれ。

武國　ヤア、降參とは穢らはしい。女、そこ退け。

眞弓　この場の面迫。

武國　何がなんと。

捕手　動くな。

ト皆々、見得よろしく並ぶ。武國、眞弓、眞中によろしく見得。

皆々　どつこい。

先づ今日はこれぎり。

幕

戀衣緣初櫻（終り）

有則戀重荷

——三津五郎山姥

「山姥」は日本舞踊史上・立派に一系統をなして枝葉をいろ〳〵と茂らせてゐる。　即ち坂田金時の母が足柄山で我が子を育てたといふ傳說を扱つたもので、根本は謠曲であるが、近松の「嫗山姥」を始め義太夫にも大分入り、江戶の淨瑠璃としては、寶曆十二年の「織殿軒渦月」といふ富本を嚆矢として山姥の所作は流行を來し、十郵同樣、前太平記を世界とする顏見世狂言には大抵出る習慣になつたので常磐津にも富本にも淸元にも長唄にも、いづれにも山姥が殘つてゐる。　趣向は何れも大同小異であるが、今日では「市川山姥」といふ一番新らしいのが常磐津にあつて、これが最も流行してゐる。　爰へ收錄したのは、文化七年市村座の顏見世狂言「四天王楓江戶粧」の大切に出した山姥で、古からず新らしからず、文句も市川山姥と大して違はず、安永あたりの古い氣分も殘してゐるので採つたのである。　その前に賴光の色模樣があるが、山姥の方は割に淋しいので、いつも上の卷としてはあゝした色つぽい場面を附ける習慣があつたのだ。　詞章の訂正者は二世櫻田治助、常磐津は小文字太夫と岸澤古式部、振附は藤間勘十郎。　役割は、賴光、山姥（三世坂東三津五郎）貞光（山下八百藏）季武（七世市川團十郎）怪童、樵花女（五世岩井半四郎）斧藏（五世松本幸四郎）であつた。

有則戀重荷（三津五郎山姥）

三島明神の場
足柄山の場

役名——源の頼光公。足柄山の山姥。女馬士、小芳 實ハ頼忠息女、粧姫。奴、風平 實ハト部六郎季武。茨木太郎鬼門。猪熊入道雷雲。足柄山の怪童丸 後ニ坂田公時。頼忠息女、粧姫 實ハ養由基娘栟花女。山樵、斧藏 實ハ碓氷の貞光。

常磐津連中

本舞臺、三間の間、向う小高き土手、この上に紅白の梅の立ち樹、石燈籠、上の方に注連を張り、神木の榎、下の方草土手の上に常磐津太夫連中居並び、日覆より梅の吊り枝、すべて東海道三島明神の體。よき所に源頼光膳所といふ開札建てあり、宮神樂にて幕明く。

ト鳴り物打上げ、直ぐに前彈きにかゝる。

〽東の任も頼光公、都のぼりに初下り、仕合せよしの女馬士、供の奴も重年に、變らず願ふ花の顔見世。

ト面白き鳴り物になり、頼光、羽織衣裳、つゞら馬に乗り、長き煙管を持ち。小芳、振り袖、抱へ帯、紫の頬かむりにて、手綱を持ち、火繩を附けし竹を持ち、季武、誂らへの奴にて、五升樽に腰をかけ、三人よろしき見得にて、舞臺眞中へセリ上げる。ト鳴り物打ちあげる。

〽文武の外に色事も、ならぶ方なき御大將、又めづらかな振り袖に、うつり心の御有樣。

〽ぞつとするほど身にこたへ、關の御地藏は親よりもましや、祈るしるしも有り難や、お目見得叶ふ冥加さは、ほんに船にも車にも〽つめぬお江戸の御贔屓に、引上げられた奴風、親の御免とふざけたら、それこそ旦那に叱られべい、べい／＼詞がやんべいなら、輕くも三升五升樽、お箱の代りに引ッかつぎ、長途の憂を慰めに、しやんと召させて口取つて、戀の關札三島なる、本陣さして歩みよる。

ト よろしくあつて

季武　モシ、旦那え、當宿がお晝の御膳所。まだお早くもござりませうが、この明神の鳥居先にて、海道を御覽ながら、一つ召上がつてはどうでござりまする。

頼光　イカサマ、それもよからう。そんならそこへ。

季武　サア〳〵、これへ。

ト よき所へ、椽と一緒に擔ぎし毛氈を敷き、頼光、下へ下りる。小芳、手を取る。

頼光　誠に、七道のその中に、東海道の賑ひは、引きも切らざる旅客の往來。驛路の鈴の聲は、晝夜の分ちなう……驛路といへば、コリヤ〳〵、女、其方は東の者か。

小芳　イエ〳〵、私しは都の者、今度都より、東へ下りましたも、日頃から思ひ思うた……サア、思ひもよらずあなた樣が、お馬に召され此やうに、嬉しい事はござりませぬわいなア。

頼光　なんぢや、この頼光を馬に乘せたが嬉しいとか。こりや、話せるわい〳〵。サア〳〵免す。近う〳〵。

小芳　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。

ト 頼光が側へ來る。

早速ながら少とあなたに

季武　願ひといふは、お引合せか。

小芳　サア、どうぞそれを、いづれも樣へ。

頼光　コレ〳〵、そりや改めて申し上げいでも、最前から山下々々と、有り難いお聲。すりや、八尾藏といふ事も、未熟な事も、不調法も、あなた方がようお察しなさるワ。これからどうぞ御贔屓、お取立てにあづかつて、いつまでも御當地を離れませぬやうに、いづれも樣、隅から隅までヅイと……朝夕神を拜むがよいぞや。

小芳　イエモウ、そりやあなた方を、拜む段ではござんせぬわいなア。

ト 方々へ辭儀する。

季武　イヤ〳〵、拜むばかりぢやア濟まない。マアお目見得に、なんぞ一つ。幸ひ旦那も御酒のお肴に、竹雀か馬士唄が相應。サア爰で、踊れ〳〵。

小芳　これはしたり、どうしてわたしが

季武　それがならすば何なりと。

小芳　サア、それ程までに仰しやる事。そんなら振りも不束な。

頼光　その不束も一興。サア〳〵早う

季武　見たい〳〵。

〽名にしおふ、浪速、浦の芦の葉を、いざ刈りて參らせん〽蜑小船、片葉の芦に棹さして、水勢はやき八幡山、ならで逢うたる山崎の、わたしや戀には人目さへ、長柄堤お廻り氣の、淀の川瀨にかはしたる、その言の葉も水車、なりやせまいかと案じられ、腹を辰巳の里ぢやと笑ふ、千鳥の聲の憎てらし〽難波女の〳〵、かつぐ袖笠、ちらと鵲の、はしにも霜の月笠、衣笠捨てゝ乙女子の、形も美く　花笠や。

季武　やんや〳〵。

賴光　女子の馬子には珍らしい今の振り事。やんや〳〵の聲であつたわえ。

　ト この時、花大分降る。

季武　モシ〳〵、旦那、珍らしいといへば、アレ〳〵、珍らしい雪が降つて參りました。

小芳　なんのいなア、こりや風が誘ふ花吹雪ぢやわいなア。

賴光　誠に、梅花を折つて冠に差せば、二月の雪衣に落つると、唐詩の心を其まゝ、この早咲きの梅の花、ハテ、景色ある眺めぢやなア。

季武　サア〳〵、これを肴に、もう一つ上がりまし。

賴光　こりや飲まずばなるまいわえ

　ト 矢張り花頻りに降る。

〽雪ならば、幾度袖を拂はまし、その櫻にはあらねども、梅も吹雪と振り袖に。

　ト 合ひ方にかぶせ、音樂になり、粧姬、一振り袖、裲襠衣裳の上へ肩蓑を着て、銀張りの杖を突き、市女笠をかざして、振りよき梅の木の下に立ち、この見得にて花道へかゝり上がる。

〽つもる思ひの解けやらで、粧姬はあこがれし、君が歸りを人づてに、聞いてあるにもあられない、藤の衣のそれならで、よそ目を覆ふ菅笠に、杖つきの名は乃の字より、外には知らぬ旅の空、心ばかりが急がれて、やうやうたどり來りける。

季武　待て〳〵。御上洛について賴光公、當社の御膳所間近く、控へぬか〳〵。

　ト 粧姬、舞臺へ來る。季武見て

粧姬　ナニ、あの賴光さまには、もう爰へお出でぢやと云やるかいなう。

季武　オ、疾くにこれへお出で遊ばし、アレ、あそこにお出でだワ。

粧姫　ヤア、ほんにあそこに。
　ト頼光の方へ行かうとする。季武とめて
季武　どつこい〳〵。我が君樣はあれにと聞いて、無性矢鱈にツカ〳〵と。ハヽア、聞えた。わりや女の拔け參り、お荷物を擔いでなりと、伊勢まで連れて行つてくれろといふのか。それなればこの奴に頼め。取次いでやらう。馬鹿な奴ではないか……ハツ、我が君樣へ申し上げます。御上洛を見込んで、女の伊勢參りめが、お供を願ひまする。幸ひと、この兩掛けでも擔がせて、召連れませうか、如何仕りませうな。
頼光　女子の身にて參宮とは、奇特な奴ぢや。どうなとして遣はせ〳〵。
季武　畏まりました……サア〳〵、女、喜べ。我が君樣が、連れてやるとの御意が出た。この兩掛けを擔いで、一緒に來い〳〵。
　ト兩掛けを粧姫へ突きつける。粧姫思ひ入れ。
粧姫　どうしてわたしが其やうな。
季武　ハテ、何も重い物ではない。こりやア手箱とお鼻紙臺。われには相應なお荷物だ。長持ち唄で、やらかせやらかせ。
粧姫　それぢやというて、お供にそれを
季武　否だと云へばお供は叶はぬ。伊勢參りに御報謝と、柄杓を振つてうしやアがれ。
粧姫　そんならアノそれを持つて、道々聞いた、鄙びた唄を謳はねば
季武　召連れる事にはならない。擔いだ事がなくば、おれが敎へてやるべいほどに、この手拭で鉢卷でもして、ここでマアやつて見ろ。
粧姫　すりや、どうでもこれを。
季武　キリ〳〵と、やらかせ〳〵。
　ト季武、粧姫に鉢卷なしてやる。
〽竹になりたやナア箱根の竹にナア、樣が文書くナアエ筆の軸にヨナアエ。
なんの性だア。
〽アヽままならぬ戀の重荷ぞいとほしき、姿恥かし、つがもなや。
　ト季武この文句のうち、側より指圖する事あり、トいふ粧姫、荷を捨てて、肩の痛き思ひ入れ。この時懷中より三延目の袱紗を落す。
エヽ、お道具が堪るものかえ。

ト云ひながら袱紗を取上げ
ヤ、この袱紗は、我が君様の
ト粧姫思ひ入れ。

頼光　何と申す。
ト季武より取つて
こりやコレ某が所持の袱紗。あの女が、如何いたして。

粧姫　成る程、お見知りないは御尤も。いつぞや心の願事に、神へ祈りの櫟の森、月さへまだな宵闇に、

頼光　ムウ。すりやアノ任のうちながら、都の様子氣遣はしく、忍び登りし都の空、隠れ近江の石山にて

小芳　そんならあなたは、あの女中を

季武　御存じでござりまするか。

頼光　サア、知つたでもなし、知らぬでもなし

粧姫　泣いて焦れし頼光さま、袱紗にそれと云ひ號けの

頼光　すりやアノそもじは頼忠公の

季武　箱入り娘と聞き及びし

粧姫　粧姫でござりまする。お懐かしうござりましたわいなう。

小芳　ア、モシ、そりや、アノお前、何を仰しやる。ついしたこれまでお目見得せねど、云ひ號けの頼忠が娘、粧姫は自らが事。モシ、頼光さま。お懐かしうござりまするわいなう。
ト取りすがる。頼光、季武、思ひ入れ。

頼光　ヤ、なんと。

季武　とんだ茶釜が薬罐と化け、お姫様が二人とは、けうけれつな事だわえ。

粧姫　イヤ／＼、なんぼあなたが、あのやうに仰しやつても、自らこそお目もじして、直々一緒に願うたを

頼光　東國の任にある頼光、旅館へ女子を同道せば、他聞の聞え如何ぞと、其まゝ別れし粧姫。それに其方も粧ひと、名乗るその身に似げもなく、賤の姿は合點がゆかぬ。

小芳　サア、アノ、これはナ。
〽問はれてなんといつしかに、垣間見えねどあこがれて、慕うて來ても東に、寄るべなければせめてその、云ひ寄る端となりふりも、戀にはやつす賤の業、女子の念が屆いてや、身近うよるのお伽にも、どうぞとばかり打ちつけて〽自らとても云へばえに、云はねばこゝろ須磨の巻、源氏の君と名のみにて、お顔見てよりいやましに、伊勢をの蜑にあらねども、猶袖濡らす思ひ草、結ぶ

縁を待ちわびて、これまで参り候ふと、縋りかこてば〽いや／＼自らこそはと御側へ、より光公の手を取るにぞ〽いや／＼さうはと押しわけて、色香爭ふ花と花〽見かねて奴がこりやどうだ、引張り凧の戀ならば、我れらでこそはあらうのに、只常一人を二人して、初松魚ではあるまいし、小田原町と新場では、名前で賣れるこの奴、せめて一人は色事に、成田の親分頼んでも、とは思へども生得が、手のたき生れ奴凧、絲目はなれてわしや便りなや、ヤレコレ、こりや又なんとせう。

季武　ハヽヽヽヽ。

頼光　二人が一人頼光を、慕ふ心は切なれど、これとさしたる證據あれば、其方が許の粧姫。

小芳　すりや、これといふ證據のしるし無き時は

頼光　粧姫は只一人。

小芳　ハア、

ト泣き落す。

粧姫　そんならこれより自らを、ともぐ〵都へ。

頼光　イヤ叶はぬ。心を無下にするにはあらねど、この[illegible]身はいやしくも〽[illegible]の家に生れ出で、[illegible]の道も尋ねしかば、代々の武将と事かはり、ちつとつまみし類もなく、また引かけし得手もなし、胸ぐら取つてこれ申し、そりやマアなんの事かいなアと、云はるゝ身にはあらねども、父母許さざれば娶らずと、恨みておはせ給ひそと、誠しやかの御嘘は、軍慮の外と見えにける。

粧姫　すりや、それゆゑに御一緒には

頼光　知れし御事／＼。

粧姫　コレ、凧平とやら、わしや其方が羨やましいわいなう。

季武　ナニお姫様がこの奴を、羨やましいと仰しやるは。

粧姫　サア、賤しい業をしてなりと、直ぐにあたたと御一緒に。

季武　そりやナニ造作もない事ながら、ちつとは稽古なさらにやア

粧姫　サヽ、そんならどうぞ稽古してたも。頼むわいの頼むわいの。

季武　ようござります。そんならマア私しがする通りに、一緒にやつて御覧じませ。

粧姫　そんなら其方がしやる通りに

季武　左様々々。ドレ、さらば稽古にかゝるべいか。

へそも〳〵奴の奉公は、雪の朝も日の照る中も、槍振る手を振るおいど振る、雨の降るときや傘でも行くが、樣がふる夜は行かれうものか、いつそ一杯引つかけて、腰の胴亂抱いて寢よへ眞似ても流石粧姫、にぶきほど猶心根を、不便と思へど賴光公。

賴光　暫しの猶豫も一時の遁れ。帝へ猶も恐れあり。

へ凧平來れと立ちたまふ、裾に取りつく、こなたの粧ひ、振り切る賴光ただ〳〵、あなたにとゞむる粧姫、忽ち靈女の有樣は、不思議にも又いぶかしき。

ト賴光行くを、ドロ〳〵になり、粧姫、連理引きのやうにこれを留め、引拔きにて唐女の形になり、弓矢を掻いこむ。皆々見て

ヤア、今まで誠の粧姫と

季武　思ひし姫君忽然と、稀有なる姿を現はせしは

小芳　如何なる方にて

三人　ましますぞや。

粧姫　よきかな賴光、我れは楚の養由基が娘、粧花女といふ者なり。いま唐土に父が弓矢を、請けつぐべき良將なし。御身日の本に走せゆきて、賴光色に溺るゝや、否やを試し見し上にて、この冥弦の弓もろとも、水破兵破の鏑矢を、讓り得させよと詞につき、粧姫の姿となり、心を引きしに流石に武士、色を愛でざる健氣さに、いま讓り與ふこの二品。イザ立寄つて受取られよ。

ト賴光、ツカ〳〵と寄つて弓矢を取る。

賴光　ハヽア、有り難や忝なや。數ならぬ賴光に、この弓矢を授け與へん爲、粧姫と姿をやつし、我が行跡を試されしとや。

粧姫　まだそれのみか御身の危難、救はん爲にこの所へ。

季武　ナニ我が君の危ふき御難

賴光　救はん爲に

兩人　來りしとは。

粧姫　おことを覘ふ怪しき者、この所に徘徊なせば、心をつけて危難を遁がれよ。又それなる粧姫、おことを慕ふの便なければ、はや云ひ號けの上からは、誰れに憚かる事もあらん。急ぎ妹脊の結びをなし、共に召連れ得さすべし。

賴光　ハヽア、何がさて靈女のしめし、否み申さんやうはなし。然らばこれよりこの粧姫、同道なして上洛せん。

小芳　アノ自らを……エヽ、有り難い。

ト伏し拜む、

粧姫　我れはこれより故郷の、唐土へ急ぎ立歸らん。

賴光　すりや此まゝに。

粧姫　皆々、さらば。

〽さらばと微妙の御聲は、跡に殘りしその姿、風に乘じて。

トどろ／＼にて、榊花女の姿、上の石碑の田樂にて消える。

賴光　さてこそ疑ひもなき靈女の樣。かゝる奇瑞を見る上は。

小芳　すりやアノ、お聞濟み遊ばして

賴光　共に都へ同道せん。

季武　然らは御夫婦固めの杯、この明神の神主方にて。

賴光　イカサマ、我れは粧姫の、これまで慕ふ心ざし、せめての事に慰めん。汝はこれにてしめされし、怪しき者に心を附けよ。

季武　畏まつてござりまする。お二方には氣遣ひなく、まづ／＼あれにてしつぽりと。

〽濡れさせ給へ賴光公、弓矢携へ、姫君の、御手を直ぐに鳥居のうち、神もいまさば忽ちに、御心あしくなりぬらん。

ト賴光は小芳の手を引き、下座へ入る。季武殘つて思ひ入れ。

季武　こりやマアどうであらう。誠と思つた粧姫は、唐人の娘、思ひもよらぬ馬士の女が、賴忠公の御息女とは、へちやアない。狂言のやうな事だわえ。

ト思ひ入れ。この時、明神の神木の後より、小鳥大分羽音して飛び立つ。季武思ひ入れ。土拍子入り、眞の神樂になり、洞の中より茨木太郎鬼門、凛々しき形にて出で來り、思ひ入れあつて

鬼門　正盛どのに賴まれて、この神木に身をひそめ、樣子窺ふ折に幸ひ、あの神主が小座敷で、三々九度のうまい最中。此方も幸ひ賴光めを、殺らしてしまへばこの身の出世。それよ。

ト思ひ入れあつて頷き、下座の方へ行かうとする。季武、ツカ／＼と出て、これを支へ、兩人キッと思ひ入れ。

こりやア奴め、何とするのだ。

季武　何とするとは野太い奴の。靈女の教へに幸ひと、奴出たちに氣をゆるさせ、窺ふ我れを誰れとか思ふ。賴光

が四天王のその一人、卜部の六郎季武だワ。お二方の御座ある方へ、ウソ〳〵うせる厄病神。成田の子分が居るからは、覺悟極めて繩にかゝれ。

鬼門　ハヽヽヽ、吐かしたり腹の皮。賴光めをぶッ放し、いま桝花女より授かつた、弓矢もろとも粧姫、盗んで歸る茨木太郎だ。邪魔をひろぎやア眞二つ。キリ〳〵爰を退くまいか。

季武　イヽヤならねえ、茨木ならばさしづめ綱、といふ所をば季武が、出合ひも新板新入りの、馳走にうぬが腕の風呂吹。覺悟きはめて賞翫しろ。

鬼門　ヤア、無益な癡事。その舌の根を

季武　何を小癪な。

ト鬼門抜きかける。季武、神木の高札を取つて立廻り下座の謠になる。

〽物すさまじき雨の音〳〵、俄に吹きくる風の音に、駒も進まず高いなゝき、身ぶるひしてぞ立つたりけれ。

トこれにてよろしくあつて、兩人「ドッコイ」と見得。

〽その時綱にあらねども、茨木太郎を季武が、手取りにせんと高札にて、あしらふさそく、こなたもしれ者、だんびら物の拜み討、ところを開いて附入れば、其まゝかはして叉切りこみ、鋭き刃金冴え渡る、月の都の羅生門爰は三島の神垣に、梅も武術も早咲きの、花を散らしてはやり男の、勇ましかりける。

トこれにてチョンと黒幕にて太夫連中を消す。あとタテの鳴り物になり、兩人いろ〳〵面白きタテあつて、トヾ廻りの上へ兩人「ドッコイ」と見得。これにて片シャギリ。この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面の岩組み、所々に松紅葉の立ち樹、梅の吊り枝、松紅葉の葉落ちてあり。この道具納まる、

ト鳴り物打上げる。黒幕切つて落す。太夫連中居並び大薩摩がゝりの淨瑠璃になる。

〽玄冬素雪の剛敵も、恐れぬ松の大丈夫、これ萬木に勝れたる、英雄とこそ云ふならん。

ト大小入り、人寄せに山颪しを冠せたる鳴り物になり、斧藏、柿の頭巾、廣袖、やつし袖なし羽織にて、側に束ねし柴を置き、斧を突き、眠りゐる見得にて、舞臺眞中へセリ上げる。鳴り物打上げる。

〽君命うけて山樵も、形も氣まゝの肱まくら、結びし夢

の中空に、
トどろ／＼になり、日覆より赤色の雲氣下りる。斧藏目の覺めし思ひ入れあつて、この雲氣を見上げ、キツと見得。鈴のやうなる大小の合ひ方。

斧藏　ハテ、怪しや。すべて雲に種々あつて、その色により善惡を分つ。或ひは五色の色備へて、しかも雨降らざるは、必ず聖人の隱れ家あり。されば漢の高祖が妻は、その雲を尋ねて、芒碭の山中に、再度高祖に逢ひしといふ。それ慶雲、これは正しく赤色。さすれば一定人傑の、この山中にありといふ、天の知らせか、何にもせよ奇異なる事を見るものぢやなア。
ト思ひ入れ。ドロ／＼打上げる。雲氣を引いて取る。
ハア、これで讀めた。先年主君の下向の折節、この足柄に、大將隱れし事ありと聞せあつて、この頃急に思ひ出したやうに、この貞光に嚴命あり、此やうに姿を變へ、似せ山樵となつて心を附くれど、此奴と思ふ者とては、女の連れるいつもの小僧。もしや彼奴が今の雲氣の……よし／＼、眠氣ざましに、一服のんで待ち合せて、二人の身の上……オヽ、それがよい／＼。
ト擂り火を打つて煙草を吸ひつける。

〽遠近の、たつきも知らぬ山中に、我れもや友と呼子鳥
ト本行の次第になり、花道より山姥、いろ／＼の手遊びを附けたる柴を擔ぎ、誂らへの杖を突いて出で來り花道にとまる。
〽よし足曳の深山木に、咲くてふものや霧の花、穗風亂せば自ら、白髮と人の夕月に、軒の瓦の鬼ならで、山姥たまの黑髮を、結び捨てたる蔦かつら、錦もいつかそれなりに、拂はぬ袖に置く霜は、夜寒の床に濡れてゐる、昔の浮氣しのばじと、獨りごちしてたどりくる。
トよろしくあつて舞臺へ來る。斧藏立ちかゝつて

斧藏　オヽ、怪童が阿母、今日はまだ逢ひませぬな

山姥　ほんに斧藏どのかいな。

斧藏　今日は小僧が見えませぬが、どうしましたな。

山姥　サア、今まで連れ立つて來ましたが、また後へ下がつて、猪猿を相手に、角力をとつてゐると見えますわいなう。

斧藏　そりやア危ない／＼。マア早く、呼ばつしやい／＼

山姥　アヽ、おとましい事ではある……コレ／＼怪童……怪童丸やアい。
ト向う揚げ幕にて

天明五年十一月桐座上演の山姥
三世瀬川菊之丞山姥　五世市川團十郎の山樵
二世市川門之助の怪童丸

寛政十一年十一月河原崎座上演の山姥

尾上松助の山姥　岩井粂三郎の怪童丸

怪童　オヽイ。
ト大太鼓の鳴り物になり、怪童丸、金太郎の拵らへ、枇杷の花の枝を擔ぎ、走り出て來り、花道にて
〽神樂月とて片山里も、笛や太鼓で面白や、足冷たさに草履買うてたもれ、子を取ろ／＼、どの子が目つき、跡の子が目つき、籠目々々、籠の中の鳥は、いつ／＼出やる、夜明けの晩に、つる／＼つッぱひつた、木の根萱原くゞり／＼くゞつて、ひよいと來たみどり子、母を慕うて山道を、尋ね生咲きの梅の色、わやく盛りは愛らしき。
斧藏　オヽ、怪童、歸つたか／＼。
山姥　サア／＼、ちやつとお辭儀しや／＼。
ト山姥、怪童の頭を捕へて辭儀をさせる。
斧藏　ヤレ／＼、よくお辭儀が出來たな。
山姥　なんの、山家育ちでとんとモウ。育つといへば斧藏どの、いつやらから爰へござつてなが、こなさんの生れは、マアどこぢやえ。
斧藏　わしかえ、わしやア炭賣りのづう國で、信濃者サ。なにか輕井澤のおじやれにくらひこんで、所に居られず、この山家。成る程、川立ちは川とは、よく云つたものサ。
山姥　そんならなんと慰みに、その輕井澤の話しを爰で

斧藏　おれにしろか。話さう／＼。そんならマア、こなたは、そのお女郎に。
山姥　なんのマア、わつけもない。
斧藏　ハテ、わつけがあらうがあるまいが、獨り話しがなるものか。コレ、聞かつしやいよ。
〽村の日待のなぐれ足、お稻荷どのにつまゝれて、氣もうか／＼と輕井澤、手織り木綿の手拭も、取替へながら緣となり、上へ掛けたる蒲團さへ、ふは／＼玉子で飲みかけて、醉うた醉うた昨夜の酒に、越後同者の頰がまち、毆つたもにしから起つたこと。
ト斧藏、山姥の胸ぐらを取り、手を振り上げる。これにて怪童丸、ツカ／＼と斧藏を突きのけ、くらはせる
アイタヽヽヽ。
ト山姥驚ろき、怪童丸をこちらへ退ける。
山姥　これはしたり。
斧藏　こいつはよい。今のを本だと思つたか。ハヽヽヽ。
山姥　ありや伯父さんが冗談ぢや。堪忍しや／＼。
怪童　そんなら母様、何ぞ下され。
山姥　オヽ、遣らうとも／＼。其方に遣りたさ着せたさに夜々毎にこの母が、五百機立てる窓の內。

〽枝の鶯糸繰り綿繰り、織りて着せたる母のはんぞ子、里へ下れば里の土産に、でん／＼太鼓にふり鼓、打つや空蟬から衣、千聲萬聲の砧に合はす、鼓の拍子面白や。

斧藏　ウム。温なしく遊ぶな。コレ、お爺が好い物を貸してやらう。

ト鉞の柄へ三尺帶を結びつけ

コレ／＼、これを馬にして、どうだ／＼。

山姥　こりやよからう。サア／＼怪童、お馬が參る。

怪童　ハイ／＼／＼。

〽月毛にあらぬ斧の駒、取るや手綱の凜々しげに。

先退け／＼、先退けろ。

〽お月様は、くつ、十三七つ、まだ年や若いな、お供のお爺が振り出す大太刀大鳥毛、袴の肩もりん／＼からがら、りんがら／＼、母の胎内蹴破つて、產所も產屋も山なれば、取上げお婆がないゆゑに、產湯の代りに瀧水を、洗はせられたかどこもかも、眞赤くなつてきた嵯峨の、踊り口說きは何と云うた、おらが在所は奥山の、爺打のてんぐり／＼、栗の木の根を枕にござれ、抱いてまろび寢、こゝに女郎が戀する山家の品もので、帶解いてござれ、抱いてまろび寢。

怪童　母様、乳呑まう。

ト取りつく。

山姥　この子わいの。又しても乳々と、そんな事云やると抓め／＼しますぞ。

トこれにて怪童泣き出す。

斧藏　オヽ、泣くな／＼……可哀さうに、そんな事せずと騙さつしやいよ／＼。

山姥　ほんにモウ、わやくでどうも……コレ／＼、母さんがいつものやうに、山めぐりして遊ばせうほどに、サアサア、機嫌を直しや／＼。

斧藏　山めぐりとは面白い。おれも一緒に。

山姥　アヽコレ。

ト手にて、嘘だといふ思ひ入れ。

斧藏　そんなら何ぞ、話しなりと。

山姥　ほんにマア、滅多な口も。

斧藏　ハテ、さう云はずと、話さつしやい／＼。ドレ、吸ひつけて聞くべいか。

〽浮世語りも恥かしや、愛に引かれて山遊び、春は梢に色香もまして、柳は緑、花はくれなゐ三重八重七重、霞の眉を引きはへて、谺うつなるふり鼓、梅ケ枝謡ふ佐保

姫の、早蕨に手を持ちそへて、暮るゝを惜しむ親子草、浮れて笑ふ山めぐり〽秋はさやけき二度の月〽待つ宵は三味線弾いてしんき節、泣いて別れのきぬ〴〵に、袖よ袂よ恨みわび〽末はどうなる事ぢややら、よいやさ〳〵此方もさはりはない操、只一筋に絲巻きの、しめくゝりせし今の手を、弾いて夜すがら山めぐり〽冬は取分け祝ひ月、いとし我が子を肩車に乗せて、連れて行くのゝさまへ、禰宜が鈴ふる千早ふる、巫女も昔は十七娘、今は婆様、どんつくどんな色事も、歯に合ひませぬというて断わり云はれた〽我れは子ゆゑに老を忘れて〽雪をさそうて山めぐり、又ある時は花の影、休む重荷に肩を貸し里まで送る折々は、親とや人の見るやらん。

斧藏　成る程、親の丹精は有り難いもの。併し話しの其うちに、人を助ける善行をなすは、察するところ先帝の北面、坂田の藏人時行は、柔弱非力の身を悔み、無念の最期をとげたるゆゑ、その妻これを深く嘆き、何卒勇士を生まんものと、懐姙の身にてこの伊豆の深山に籠り、山神に誓ひを立てしと聞きつるが、もしや二人は時行の、妻子の衆ではござらぬか。

山姥　成る程、察しの上からは、何をか包まん。人を助くる行をなし、坂田の家を起さんと、山神に祈願をかけ、産み落せしはこの怪童。

斧藏　さてこそ〳〵。然らば主君頼光公へ、この貞光が推擧なさんが、怪童を差上ぐる、心はなきや、如何に〳〵。

山姥　初めて聞きし、斧藏どのゝ御本名。何がさて、怪童丸を頼光公へ、お宮仕へは母の喜び。この上よしなに。

斧藏　得心あつて先づは重疊。何はさて置き某が、相手となつて怪童の、力の程を試しくれん。

山姥　コレ〳〵、怪童。大事の所ぢや。負けまいぞ。

怪童　おもちれえ〳〵。

斧藏　サア來い怪童。

怪童　合點だ。

〽神變不思議の怪童丸、こなたはあしらふ勇力士、怪童いらつて傍へなる、松の根こそぎに引き抜いて、につこと笑うて立つたるは、人も恐るゝばかりなり。

斧藏　松の根こぎは面白い。サア、ぶつかけて來い。

怪童　合點だ。

〽勝負々々と打ちかゝるを、すかさぬ強氣の力瘤、幹より腕の節くれて、しつかと摑めば、めり〳〵〳〵。

ト流しになり、斧藏怪童松の樹を引拔き、これを持つ

て花道へ行き、引き臺の上へ上がり、吉例の通り、よろしくあって、兩人キッと見得。これにて舞臺へ引いてくる。鳴り物打ちあげる。

〽えいや〳〵と捻ぢ切って、左右へ別れて立ちたりしは目覺ましかりけるその姿、又いさぎよく見えにけり。

斧藏　オヽ、力の程に見えた〳〵。名將の眼力違はぬ。勇士にめぐり逢ひし時、公に仕へる時ぞ得し心を以て、坂田の公時、と名乘られよ怪童丸。

山姥　エヽ、嬉しや、忝や、幸ひありあふ手遊びの、コレ。

ト柴に附けたる大小を出して、怪童丸にやり

今日からしては、公時といふ侍ひぢやほどに、溫なしうしませうぞ。

怪童　そんならおれは、今から侍ひになるのかや。嬉しい嬉しい。

ト怪童丸、手を叩いて喜ぶ。山姥、思ひ入れ。

山姥　オヽ、嬉しい筈〳〵。併し、いま別るゝ上からは、もう母には逢はれぬぞよ……コレ、怪童丸、爰へ來や。

〽其の形見と見るにつけ、其方の大事さ大切さ、今日別るれば今宵より、母獨り寢の閨のうち、さぞ俤のなつかしからう、賴光公へ御奉公、勤むる隙の明暮れに、武術を勵み奉公せよ、必ず〳〵人樣に、山姥の子と笑はれな、今別るゝともこの母が、其方の影身に附添うて、武運長久守るべし、とはいふものゝこれがマア、名殘惜しやいとほしやと、抱きあげ抱きつき、思はずわつと一聲は、梢に響きいぢらしき。

斯くては果てじ、怪童丸を、お賴み申すは貞光さま。

名殘は盡きじ、早おさらば。

〽暇申して歸る山、尋ねし花の春過ぎて、姿は夏の雪の峰、山又山に山めぐりして、行くへも知れず失せにける。

ト上の方へ礒の霞にて山姥消える。

怪童　母樣イなう〳〵。

ト慕ふ。

斧藏　コリヤ〳〵怪童、幼なけれども勇士の胤。泣きをとどめてお目見得の用意。早く〳〵。

トこの時向うにて

雷雲　ヤレ來いやい。

トどん〳〵になり、花道より雷雲、鯰坊主、裸身へ鎧を附け、鐵の棒を搔いこみ、跡より軍兵十五人附き添ひ、出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

ヤア、正盛どのゝ上意をうけ、怪童丸を召捕りに、猪熊

入道雷雲が向つた。異議に及べば者どもに云ひつけ、ぶッちめるが、怪童、返事は。

斧藏　ヤア、小ざかしいづく入め。怪童丸は頼光公へ、貞光が推擧した。手柄はじめに正盛が、くらひ潰しを怪童丸、合點か。

怪童　合點だ。

斧藏　刃物いらずに、獸めらを。

ト傍の松を拔いて怪童丸に渡す。

怪童　一疋づゝは面倒だ。みんな一緒に、來い／＼／＼。

雷雲　ソレ、者ども。

軍兵　やらぬワ。

トこれより誂らへ太鼓入りの鳴り物になり、雷雲かゝるを斧藏引附け、上の方の岩組みに腰をかけて見物してゐる。怪童、皆々を相手に花々しきタテあつて、トド皆々「ドッコイ」ととまる、岩組みの内にて

山姥　やみなん／＼。

ト大ドロ／＼になり、岩組みを左右に開く。向う一面に遠見の山。霞の上に大いなる絹張りの月。爰に山姥白髪の形にて、岩臺に立ち身。この見得にて、よき所へ押し出す。皆々見て

皆々　これは。

〽今はありつる山姥の、鬼女の姿を現はせしは、これ人界を離れししるし、榮ふる源氏と我が子の武運、行く末長く守るべし、努々疑ふ事なかれ。

斧藏　エヽ、有り難い。

雷雲　山姥ぐるめに打つて取れ。

軍兵　やらぬワ。

怪童　なにを。

〽豺色見する公時が、貢さきかける冬至梅、今ぞ盛りの源氏の御代、ゆるがぬ芝居ぞめでたけれ。

ト此うち斧藏、雷雲と立廻つて、上の方にキッと見得怪童丸、皆々を積み重ね、その上に跨がり、金の字を書いたる小さき扇を使ひ、よろしく見得。

皆々　どつこい。

斧藏　まづ今日はこれぎり。

めでたく　打出し

有則戀重荷（終り）

とき吉原の
出來秋づき

當稻俄姿畫

市原野
奴道成寺

文久三年八月、守田座所演、三段返しの所作事で、上が市原野、中が女戻り駕、下が奴道成寺になつてゐる。此うち女戻り駕は別なものが本卷に入るので、それだけは省いて上下を收錄したのである。市原野のだんまりは顏見世狂言なぞには折々現はれたのであるが、斯うして淨瑠璃を使つて舞踊風にしたのはこの時が初めで、以來流行にして今日に殘つてゐる。この頃では賴光は保昌となり、胡蝶の前は鬼童丸でもやるし、俳優の都合でいろ〳〵に變化する

奴道成寺は四世歌右衞門が文政十二年に勤めた「忠文道成寺」といふのが初めで、これは忠文と清姫の双面になつてゐるが、この時はづつと端折つて短かくしたのである　今日では大蛇退治や清姫の物語はやらず、大抵長唄の娘道成寺で通してしまひ「戀の手習ひ」で三つ面を使ふ事になつてゐる。この詞章の作者は三世櫻田治助、岸澤は古式部と式佐、富本は豐前太夫と名見崎德治、長唄は芳村伊十郎と杵屋彌吉、振附は花柳壽輔　役割は、賴光、升六(中村芝翫)保輔(市川市藏)胡蝶の前(岩井粂三郎)成駒坊(中村福助)鳳心坊(中村翫太郎)中鶴坊(中村鶴助)桃扇坊(中村桃三)であつた。

當稻俄姿畫（市原野）（奴道成寺）

市原野の場
道成寺の場

役名――源朝臣頼光。正盛御臺胡蝶の前。盗賊、袴垂れの保輔。所化、成駒坊。同、猊心坊。同、中鶴坊。同、桃扇坊。白拍子花子實ハ狂言師升六。

岸澤連中
富本連中
長唄囃子連中

本舞臺、一面、二段に秋草の花盛り、舞臺前雨落ちへ通し、秋草の土手板をセリ上げ、花道雨側とも秋草、揚げ幕前に二間餘りの薄、秋草生ひ重なりし茂み、押し分けて出る事あり。向う志蓮寺森、廣野の遠見、灯入りの滿月、上手へ引き出し、下手に市原野と記したる傍示杭、好みの通り、鳴り物、一セイ、風の音にて幕明く。

ト頭取出で、所作名題、太夫連名、役人觸れあつて入る。知らせにつき、下手の霞幕を切つて落す。爰に岸澤連中居並び居る。直ぐに前彈きにかゝる。

〽水もその濁ればぞ澄む世の中の、治亂を胸に頼光公、智仁六藝他に勝れ、今宵は笛に餘念なく、蟲の野もせを幾十筋、運ぶ歩みも計策の、一助と誰れか白眞弓。

ト向うより頼光、棒茶筅、狩衣、塗り下駄にて、能管を吹きながら、靜かに出る。よき程に上手より日覆へ雁大分舞ひ上がる。トヒヨ、風の音になり、頼光、雁へキッと目を附ける。

〽野を狩る人のなきものを、連れ騒ぎ立つ雁金に。月は隈なく冴え渡る、今宵も最早五更の天。ハテ、

頼光　面白の景色ぢやなア。

〽人の心は淺茅生の、淺くも露を置き兼ねて、風の尾花の背くか呼ぶか、月夜は物を思はする、かこち顔なる草の原、又も調べの聲床し。

トまた笛を構へ、舞臺へ來る。この時、畫面の袴垂れの形の保輔、秋草掻き分けて、頼光の方をキッと見込

む。本釣り鐘打ち込む。

〽今宵ぞ心保輔が、後を窺ひ忍び足、合ひ圖に鳴るや兼ねて待つ、不敵の八ッや爰こそと、疊みかけたる袴扯れ。

ト此うち賴光は吹きながら舞臺へ來る。保輔、薄原より出で、賴光の後をつけ、切りかけること二三度。

〽只一打ちと拔きかけるを、さしつたりと笛竹の、一イニッミッの早業に、あしらひ兼ねて立ちどなく、茂みに暫し草隱れ。

トとゞ一腰を拔き、切りかける。賴光、心得て、笛にてあしらひ、大小入り、手早く立廻り、ちよつとあつて、保輔、あしらひ兼ね、下の草叢へ飛び込む。賴光、ニツクリこなし、

〽御大將は見向きもやらず、幾野にあらぬ市原の、道を遮る野飼の牛の、裾にまつはるその風情。

ト賴光、何心なく上手へ行きかける。この以前より突き出しにて、上の高き草より、縫ひぐるみの牛を突き出す。この時、頭を賴光に摺りつける。

〽さては曲れござんなれ、いで物見せんと引き留むれば。

ト縫ひぐるみを取り退ける。これを胡蝶の前、花櫛、振り袖衣裳、扱帶形、恥かしきこなしにて、ちよつと顏を見上げ、袖を覆ふ。

賴光　さてこそ曲者。

〽烈しき夜半の山風に、もつれ合うたる萩芒、今まで冴えし月影も、秋の習ひに雲とぢて、暫し闇にぞ。

胡蝶　ア、モシ、思ひ初めても叶はぬ戀。せめてもの思ひ出に、あなたのお手に、かゝりたく。

〽憂しと浮世に秋風の、露の命の捨て所、君蟋蟀と松蟲の、果敢ない戀の身の果を、思ひやつてと伏し沈む。〽誠か噓か不知火の、心筑紫にせき留められて、磯に漂ふ海女小船、寄る邊渚の汐煙り、月もすいしてかげるらん。

ト兩人クドキ模樣あつて、月、雲隱れする。

〽岩木ならねば引寄せて、夜寒をいとふ肌の旗。

トよろしくあつて、胡蝶の前の懷中へ手を入れ、錦の旗を引き出し、兩人爭ふ。この時、後より、ドンと本鐵砲の音。これにて旗は眞中へ取り落す。上下へ別れる。賴光は壺折形になる。胡蝶の前はさら毛の四天、扱帶の形引拔き、この時、正面の萩を押し分け、保輔、四天、丸ぐけ異形の形。大筒を抱へ、前へ出る。兩人は探り、件の錦の旗を枷に、面白きだんまりの立廻り

岩井粂三郎の胡蝶の前

市川藤の袴垂保輔

あつて、トヾ胡蝶の前、落ちてある笛に踏みかける、
これにて笛のひしぎ。三人惘り。胡蝶の前、拾ひ取り、
ツカ／＼と下手へ印を結ぶ。榜示杭開けて此うちへ胡
蝶の前を消す事。チヨンと月出る。これより鳴り物に
なり、烈しき立廻り。兩人は二重へ上がり、旗を半よ
り引き切り、保輔は上、賴光は下、件の旗を透かし見
る。この見得よろしく、風の音、カケりにて拍子

幕

ト大拍子になり、知らせにつき、中の舞になり、日覆
へ緞子卷きの釣り鐘を引下ろし、下手の大柱へ櫻の幹
を振り出し、紅白の綱をくり出し、鱗段を押し出す
下の淨瑠璃臺、また元へ廻し返し。爰に富本連中居並
び、直ぐに淨瑠璃になり
〽作りし罪も消えぬべし、鐘の供養に參らん。月は程な
く入り汐の、煙みちくる小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ、
日高の寺に着きにけり。
ト謡らへの鳴り物になり、眞中に升六、金立て烏帽子、
鹿の子、道成寺の拵らへにて、中啓を持ち立ち身。上
に成駒坊、䟽心坊、下に中鶴坊、桃扇坊、一對、腰衣
の坊主にて、何れも中啓を持ち、坐り居る。見得よろ
しく、舞臺眞中へセリ上げる。
〽既に拍子を進めけり。
トこれにて四人立別れ、後へ住ふ。
〽花の外には松ばかり、暮れ初めて鐘や響くらん、始め
て伽藍橘の、道成興行の寺なればとて、道成寺とは名
けたりや、山寺のや、春の夕暮れ來て見れば、入相の鐘
に花ぞ散りける。
謠〽花ぞ散りける
トこれより舞になり、よろしくあつて、鼓を打上げ、
知らせにつき、上の段幕を切つて落す。長唄連中居並
び、直ぐに地へ取り
唄〽鐘に恨みは數々ござる、初夜の鐘をつく時は、諸行
無常とひゞくなり、後夜の鐘をつく時は、是生滅法と響
くなり、晨鐘の響きは、生滅滅爲入相の、寂滅爲樂と響
くなり、聞いて驚ろく人もなし、我れも後生の雲晴れて、
眞如の月を眺め明かさん。
ト烏帽子を投げようとして、鬘も共に取れる。この途
端に衣裳スッポリ脱げ、薄鬘の後茶筌狂言紋の小袴、
好みの肩衣、上帶、狂言師の拵らへになり
升六　ヤア、これはしたり

凱心　ドッコイ、逃がしてよいものか。
桃扇　こりや、白拍子と思ひの外
成駒　奴頭の稀有な形。
中鶴　イヤ、途方もない曲者ぢや。
升六　イエ／＼、私しは決して惡い氣で、女子になつて參つたのではござりませぬ。皆いろ／＼な思ひ附きをして、供養を拜みに參ると聞いたゆゑ
凱心　ハヽア、それで白拍子の拵らへで、愚僧等を迷はせたのぢやな。
桃扇　イヤモ、最前から高砂の、爺イ婆アヤ、親孝行の拵らへもので、參詣に來たはあれど
成駒　白拍子とは新らしい。さうして貴樣は、いづくの者、何と云ふ名ぢや。
中鶴　當時名高いは鷺大藏和泉、その弟子でもあるまいし、ずヽ、思ひ出した。四ツ井升六と云ふはこなたぢやの。
升六　面目次第もござりませぬ。
凱心　それなれば、聞き及ぶ能師ぢや。サア、その形でよいから
成駒　今の後を

四人　やつたり／＼。
升六　ハア、こりや又、ひよんなものでござりますなア。
　ト合ひ方あつて
富〽云はず語らぬ我が心、亂れし髮の亂るゝも、つれないは只移り氣な、どうでも男は惡性者
唄〽櫻々と謳はれて、云うて袂の譯二つ、勤めさへ只うか／＼と、どうでも女子は惡性者
富〽吾妻育ちは蓮葉なものぢやえ
唄〽戀の分け里、武士も道具を伏せ編笠で、張りと意氣地の吉原。
富〽花の都は、唄で和らぐ敷島原に、勤めする身は、誰れと伏見の墨染。
唄〽煩惱菩提の撞木町より、難波四筋に、通ひ木辻に、禿立ちから、室の早咲き、それがほんに色ぢや、一イ二ウ三イ四ウ。
富〽夜露雪の日、下の關路も、共にこの身を、馴染み重ねて。
唄〽中は丸山。
富〽たゞ丸かれと。
唄〽思ひ初めたが緣ぢやえ。

皆々　ヤンヤ〳〵。
瓶心　併し、この男ばかりに、とッかけ〳〵は氣の毒ぢや。成駒坊も桃扇坊も、息つぎに隱し藝を出しやいの。
成駒　なんのよい口な。隱し藝とは貴僧達。今日はお許しぢや。やつたり〳〵。
桃扇　イヤ、爰に奉納の花笠が澤山ある。四人一緒に、やらうではないか。
中鶴　否と云つたら、付合ひがないと云ふであらう。
成駒　そんなら一緒に。
瓶心　てんぽの皮、やつてのけうかい。
升六　こりや、見物事でござりませう。
　ト四人、花笠を冠り、兩手に持ち
唄〽梅とさん〳〵櫻は、いづれ兄やら弟やら、分きて云はれぬ花の色え。
〽あやめ杜若は、いづれ姉やら妹やら、分きて云はれぬな花の色え〽西も東もみんな見に來た花の山、サヨエ、見れば戀ぞ増すえ、サヨエ、可愛ゆらしさの。
オット待つたり、花娘ではござりませぬぞ。
　富〽花坊主。
ト文句のとまりに、四人一度に笠を取つて、見物の方へ頭を並べる。
瓶心　ヤレ〳〵、恐ろしい。臍の緒切つて始めて、こんな目に遭つた。
成駒　サア、升六。これからが藝づくし。併し、供養の臺へ何ぞよい物を。
桃扇　オヽ、爰に笹の葉に面が附いて居る。これはどうであろ。
升六　成る程、いつもとは違ふやうでござります。
中鶴　待つたり〳〵……兜巾をあてゝ居るからは、こりや修驗者、これは娘。
瓶心　鉢卷して居るは和藤内かな。
成駒　イヤ〳〵、憎々しい、こりや船頭とでも云ふ事か。
中鶴　ハヽア、解つた。この寺の昔話しを、面に作つて、奉納したのぢやな。
桃扇　これを掛けて、何なり思ひ附きの新藝が
四人　見たいな〳〵。
升六　これは又、迷惑な。
　富〽去る程にこれは又、夢か白羽の矢の棟に、たつた一人の娘ぢやと、外に詞も泣くばかり。
唄〽外面に來り立ちつゝつ、こりや何ぢやい、匂ひ嗅ぎ

つけ芝居かと思うたら、めんなご取巻き、なんで泣くの
おやゝ。
富〽ヤア、こな様は音に聞えた素盞嗚の。
唄〽おゝ日本色事師の開山とは、おれが事、どれちよつ
とお嬢の御面相。ヤア／＼、てんと器量よし、おら
が嬶におくりやるなら、生贄を取る八つ頭でも、磨の背
でも、直ぐに首を西の町としてくれうかい。
富〽それはほんまか嬉しいと、手の舞手名椎、〽足名椎、
踏み度忘れて喜びぬ。
唄〽いゝえ親はさうでも相惚奇縁、お嬢はどうおやい。
富〽えゝ何云はしやんす、素盞嗚さまへ見ずに焦れて命
まで、ささまゆゑならどうでもよいわいなア。
唄〽そんな濡衆と伊奘諾の、昔はやつた二上りと。
富〽云ふ間に山海鳴動するは、ござつた知らせかもう娘
は。
唄〽稲田なるまい何事も、悪いやうにはせぬ程に、稲田
と云はずと暫しはいただ、ひめ／＼嘆ふ事なかれと、こ
おつけてこそ走り行く。
ト主吊小姫かく、覗き合ひ方。
富〽大蛇は八ツのもだへにうつる、影を透見に、〽ヤア

ヤア、生贄の姫が振へも乗らず、歩跣足で来るとは有ら
しい、フム、後から付いて来るなも年増盛り、丁度喰ひ
頃、うまい／＼。〽又も手酌でがぶ／＼／＼、柄杓捕へ
て。
唄〽も一花聟の大蛇さんえ
富〽こさまは何おやい。
唄〽わつちや仲人この山の、主のおつれは八ツござんす、
蛇ないかいなア一人娘に都八人。
富〽さればいやい、闇雲に乗つて云ふおやないが、八人
前でいとしがるおや、所で嫁も仕合せ、おらも仕合せ、
〆めて八ツおや蛇／＼〽あるまいか。
唄〽これは何よりさりながら、わしや嬉しいやら怖いや
ら、〽恥かしいのは當り前、謡を唄に取りなして、〽誰
れに見しよとて紅鐵漿つきよぞ、みんな主への心中立て、
おゝ嬉し／＼、〽末に斯うおやいな、斯うなるまでも、
とんと云はず済ませぞえ、〽と誓紙さへ偽りか。〽嘘か
誠か、どうもならぬ程逢ひに来た。
富〽ふつつり悋気せまいぞと、嗜なんで見ても情なや。
唄〽女子には何がなる、生部の／＼気が知れぬ／＼、〽
悪蛇な／＼、気が知れぬと、云へどオ蛇は有頂天、見惚

れる隙に寶劔奪ひ、これを取らうばつかりと。
富〽云はれてばつくり呆氣に取られ、そんならお前はそさ公か、劔を取られちやもう叶はぬ、かにしておくれ、おうくれ〳〵。
唄〽風は元よりさま〳〵の、流行り病の神めらが、一々退治證文に、手形押させし三體の、神のあらましお謂れなり、こまごまと喋べりける、多くの中でこなさんを、〽あゝこれ寄るまい〳〵、熊野三所へ參らぬうちは、者は喰つても女子は喰はぬ、免さんせ。
富〽そりや無理ぢや、そりやならぬと三味線構へて、〽安珍さん、三が切れても二世の縁。
唄〽いゝや此方はチンともツンとも知らぬ事、年も餘ツぽどテンツル〳〵テンツルテン、あかべこちやんと荷を引摺り、逃足出して。
富〽おゝい、其方の法印、逃げたとて石高日高の川ツ端、去なしてよいものか。
唄〽あれ來る桑原、萬歳、船頭衆。
富〽おつと合點おれ樣も、女に惚れられ幾度も難儀した、乘らしやませ、〽滅多にさうは虎の皮、ふどし捉へて引き戻せば。

唄〽オ、いた〳〵、それぢや大事の。
富〽たまげた女郎と突きこかし、エッサッサ〳〵漕ぎ出せば。
唄〽嬉しやこれで安珍ぢやと、口合ひたら〳〵見返る所に。
富〽姫は逆まく荒波に〽浮いたり、〽沈んだり、つるつる〳〵、角が生えたらホツホ炎がピラピラ。〽ワア鬼になつた蛇になつた。〽クワツ〳〵取つて喰はう。
唄〽それ〳〵そこへ。
富〽逃げさんせ。
唄〽追ひかくる。〽走り追ひつき突き鐘の。
富〽沸え湯になつて解けてんけり。

ト面を取つて

〽なんぼう恐ろしき物語にて候ふ。

ト納まる

四人　ヤア、御苦勞々々々。
桃扇　サ、、白湯ぢや〳〵。
成駒　これに懲りよ疝心坊。人事ではないぞよ。
疝心　イヤモ、愚僧なぞは、分けてこの頃女がうるさく。
中鶴　それにはよい兇ひがある。手の平へ疝太郎と書いて

〽舐めるがよい。
升六 エ、何を吐かし居る。
桃房 ヤア〳〵、何やら大勢、この寺目がけて來る樣子。
成駒 鐘供養の參詣であらう。
四人 オ、イ〳〵。
トこれにてドン〳〵になり、向うより捕り手八人、一對腰の四天にて、出て來り、直ぐに舞臺へ來り、升六を取卷き
八人 動くな。
升六 こりや私しを、何となされまする。
捕一 何とするとは横道者。白拍子に姿をやつし
捕二 この境内へ入込みしは、四海の障化を退散させんと
捕三 夜光の御鏡突き鐘の、龍頭へ結び置かれしに
捕四 心をかくる面魂ひ。
捕五 まこと能師とあるからは
捕六 我れ〳〵相手に今樣を
捕七 今一さし舞ふ心か。
捕八 さなくば縣の御前にて、面縛なさうや。
捕一 性根を据ゑて返答ぶて。
八人 どうだエ、。

トこれにて升六、引拔き、派手なる脱ぎかけになる
唄〽面白の四季の眺めや、三國一の富士の山、雪かと見れば花の吹雪か吉野山。
富〽散り來る〳〵嵐山。
唄〽朝日山々を見渡せば、歌の中山石山の、末の松山いつか大江山生野の。
富〽道の遠ければ、戀路に迷ふ淺間山。
唄〽一夜の情有馬山、いなせの言の葉、あすか木曾山
富〽待乳山。
唄〽我が三上山、祈り北山、稲荷山、緣の結びし妹脊山。
富〽二人が仲の黄金山、花咲く榮枯の、
唄〽榮枯の〳〵姨捨山、峯の松風音羽山。
富〽入相の鐘を筑波山。
唄〽東叡山の月の顏ばせ三笠山。
ト皆々を投げ退け
富〽思へばこの鐘恨めしやとて。
唄〽龍頭に手をかけ、飛ぶよと見えしが、引かついでぞ。
トどん〳〵、大ドロ〳〵になり、釣り鐘下りる。升六、龍頭の御鏡を取つて

升六　まんまと首尾よく。エヽ忝ない。

八人　どつこい。

升六　先づ今日はこれぎり。

トめでたく打出し。

幕

當稻俄姿畫（終り）

操常磐若島臺——重盛雨舎り

誘梅松清元——茶筌賣り

年經りしその名所な
來て見ればこれは
お江戸の根生にて
今日なでは戸ざゝ
ぬものよ雪の庭

文政三年十一月河原崎座上演「伊勢平氏額附櫓」といふ顔見世狂言の四建目浄瑠璃、立作者は南北だが、この幕の詞章は松井由輔の作である。型の如き顔見世式の舞踊であるが、大分趣向は持つて廻つてゐる。踊の前に素浄瑠璃の「老松」を語らせるのが珍らしい。これはこの時四世小文字太夫が初舞臺だつたからで、菊五郎が口上を述べた。また清元の方もこの時、三味線の清澤萬吉が初代齋兵衛と改めた。双方とも因縁があるので、名題も縁儀を讀み込んだのであらう。重盛が秦の始皇の姿をしてゐるのは、前に「老松」を語つてゐるからである。常磐津の方は廃れたが、清元の茶筌賣りは現時猶傳存し、舞踊としても出る事がある。この方が有名になつたのであるが、これは別項の新關の扉を改作したものである事は、お讀み比べになれば解る。常磐津は小文字太夫と岸澤右和左、清元は延壽太夫と齋兵衛、振附は藤間勘兵衛。役割は、重盛、茶筌賣り（三世關三十郎）小雪（三世市川門之助）源内（尾上多見藏）枝六、小原女（三世尾上菊五郎）であつた。

操常磐島臺（重盛雨舎り）
詠梅松清元（茶筌賣り）

北野天満宮の場
逢坂山新關の場

役名――小松内府重盛、茶筌賣り、彈了實ハ崇徳院愛樹松の精。關原藤太家次。重盛の侍女、芳野。同、初瀬。同、七野。同、小倉。新院の女官、白峰の内侍。郎黨、五郎助。同、九郎藏。郎黨、源内。小野の賤の女、小雪實ハ惡源太義平妻雲井の前。北野の賤の男、千本の枝六。小原女、手綱のお糸、實ハ崇徳院の愛樹梅の精。

常磐津連中
清元連中

本舞臺、殘らず平舞臺、若松を描いたる襖。眞中、二人乘りの常足の淨瑠璃臺。爰に小文字太夫三味線連中。よき所に若松の島臺、麻上下の頭取居並び、祝儀の小唄にて幕明く。

ト頭取、小文字太夫名跡の披露目、淨瑠璃の役振れあつて、直ぐに前彈きになり「老松」の淨瑠璃、めでたく納まる。ト件の島臺を打返し、紫にふせん蝶の幕を引出し、右連中を隱す。片シヤギリになり、雨落ちより大松の雨を染めたる幕を段々に引上げる。留めの柝に付いて、片シヤギリ打上げる。風の音トヒヨになり、日覆より鷹一片、雁金を追つて舞ひ下がる。いづくともなく矢一筋飛び來て件の雁金に立つ。鳥は幕の内へ落ちる。これをキツカケに雷の音、早舞ひにてツナギ。右の幕を切つて落す。

本舞臺、三間の間、紫にふせん蝶の幕張り。爰に出入りあり、よき所に梅松の大樹。同じく吊り枝、この下に歌を彫り付けたる石の碑銘、上の方、常磐津連中。爰に重盛、長の下を穿き、唐裝束、同じく冠を着て、軍配を持ち、秦の始皇の拵へ。小倉、芳野、初瀬、七野、赤き衣裳の上へ白張の上を引ッか

け、粕烏帽子にて半弓、鷹を据ゑ、よき所に銚子杯を入れたる野風呂を置き、皆々並びよく居並ぶ。鳴り物打ちあげる。直ぐに淨瑠璃。

へ仇なりと、名にこそいへり櫻木も、いつより今はうら枯れて、松にはつゞく花もなき、雨に色增す振り袖の、男出立ちも恥かしく、顏に照り葉の女子同士、供奉の人にはあま日と、見えぬ山路の一時雨、御大將もこの程は、濡れても見たき風情にて、袂の露もいとひなく、猶踏み分けし道もせに、晴れ行く雲を松ヶ枝の、下に暫しや彳みぬ。

ト振りよろしく、皆々空を見て、雨の晴れたるこなし。

重盛　かん庭の松は、千尺の雨に動き、庭前の竹は、一そうの秋にゆるゝと、唐獄の秀逸、宜なるかな。今日某、當社北野の御神へ、心願あつて歸るさに、長閑けき空を幸ひ、女子ばかりを召し具し、遊獵と號し、逆徒の僉詮議の爲、廣野に出でゝ狩倉の催ふし。思はぬ時雨に松の宿り、人は情の下に住むと申せば、久し振りでの歸り新參、不調法なる秦の始皇、其方達も、いづれも樣へ、お願ひ申せ。

初瀨　有り難いその御諚、私しも共々に

七野　我が君さまへ申し上げます。今日のお狩倉も、申さば軍慮の駈引きにて

小倉　合ひ圖を定め、狩り出す諸鳥。

芳野　空行く翼は落矢に射落し、弓馬に賢き御勳し。

初瀨　さほど貴き我が君さま。

七野　見馴れぬ冠、御裝束。

小倉　どうも合點が

四人　參りませぬ。

重盛　さほどに思ふは尤も。父淸盛公には、日夜にいや增す惡逆不道、天の憎み空恐ろしく、我れらが諫言用ひ給はず、子として父に背くには似たれども、同じ日の本にて、共に天を拜す時は、君への不忠、それゆゑに、秦の始皇が學び、仁を以て天下を治む我が好意。これ見よ、草木心無しといへど、不時の時雨に暫しの宿り、人ならば賞を施し、禮を謝すべきに、その代り、今よりこの松を、我が愛樹と定め、一枝の粗忽あらば、曲事たるべき事。

ト狂言詞にて

あたりに住む民家の者を呼び出し、キッと申し付け候へ。

四人　畏まつて候ふ。

初瀬　なう／＼、里人。頼うだる人の申しつけある程に

芳野　急ぎ歩みを運び候へ。

四人　運び候へ。

ト出端のあしらひ。

〽高砂　松の春風吹きくれて、尾上の鐘の響くなり〽誰れをかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、霜の一夜の起居にも、心を友と菅席、思ひをのぶる二人連れ。

ト誂らへの鳴り物になり、向うより小雪、振り袖衣裳上へ千早と見える袖無し羽織を着、綿の様なる頭巾、高砂の姥の見得。落葉の入つたる籠を脊負ひ、竹箒を持ち出て來り、花道にて

〽云ひつれば、松に事問ふそよ風に、山路も今は錦して中に一際色添へて、うつり心の四つ紅葉。

トよき時分向うより枝六、やつし衣裳の上へ、水衣と見えし、袖無し右の頭巾、熊手を持ち、高砂の尉の拵らへにて出て來り

〽これも吾妻へ歸り花、森にはあらぬ一際の、御贔負かざす霜除けに、まだ咲き殘る菊あれば、こりや有り難いぢやないかいな〽二人連れ立ちや餘所目ながら、どうした事と指さされ〽惚れて惚れられて、相惚れとやら、とどの仕舞ひは、どうなさるなぞと云ふのは、それそれ岡焼もちではないかいな〽人の噂も數へて見れば、七十五六、八十が、その年知れぬ尉と姥、似たる姿の落葉掻き打ちつれ立ちてぞ來りける。

ト舞臺へ來る。皆々見て

四人　最前より、我が君様のお待ち兼ね。よう來て下さんした。

初瀬　お前方は、女夫連れと見えるが、この近邊の

七野　お方でござんせうな。

枝六　成る程、私しは此あたりに住む、百姓でござりまする。耕作の間には、落葉を掻きに出ます、千本の枝六と申す者でござります。又この女中は、私しが女房と申したいが、矢張り何でもござりませぬ。

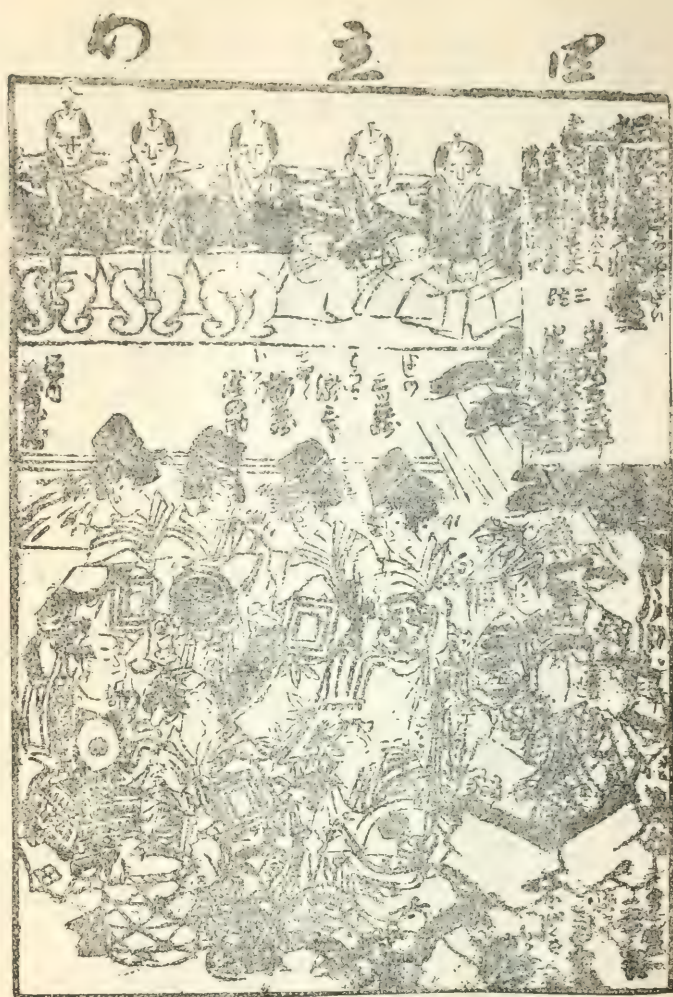
小雪　只今、このお方の申されまする通り、私しは同じ村に居ります、賤の小雪と申します。お見上げますればいとしい高位のお方。して、あなた様は。

芳野　恐れ多くも、小松の三位重盛公。

小雪　その重盛さまが、卑しい私しどもを

枝六　これへお呼び出しなされましたは

兩人　何の御用でござりまする。

初演の繪番附

重盛　其方達を、召し出したは、餘の儀でない。今日、某がこの所に於て、狩倉の折柄、一矢を以て翼を射落す、その血汐、これなる松の木にかゝると等しく、雷鳴發して、俄の動搖。
枝六　ハテ、それは不思議な事。鳥の血汐が松へかゝると
小雪　俄の雷、篠突く雨。そんなら劍の
重盛　ヤ。
ト思ひ入れ。
小雪　イヤ、連れのお方も、さぞお困りでござりませう。
重盛　それゆゑにこそ、暫しの雨宿り。今よりこの松に粗忽なき樣に、きつと守りを致してよからう。
小雪　ほんに優しい、いとしい殿樣。
枝六　イヤァ、そんなら小雪はお殿樣。
小雪　一目見るより戀風の
枝六　むすぼれかゝる出來心か。
小雪　アイ、恥かしながら。
枝六　イヤア、こいつはおつりきになつたわえ。
芳野　女子は誰れしも同じ事。
初瀬　我が君さまにも、御狩の獲物。
重盛　コリヤ〳〵、其方達、何を申す。どう致して、猥らがましい、左樣な事が。
四人　さつても堅い、あなたの御氣性。
枝六　オツト、待つたり。何も云ふまい。その堅い所の節くれも、萬事は此方が呑み込み山。
〽杵柄取つた昔より、變らぬものは、世の中の、戀と情の二柱〽天の鈿女の神達も、つい見ぬ振りの常闇と、四人は目引き袖引いて、木の間も遠き谷の戸の、流れよるべも粋なれや。
ト枝六、女形とよろしくあつて、女形、下座へ入る。
枝六、こなしあつて
サア、これからが大事の一段、遠慮なしにズツと側へ。
ト小雪を突きやる。
重盛　コレ、滅多な事を。男女七歳にして、同席を許さずとあれば。
枝六　ハテ、それは昔のちんぷんかん、堅氣を云はずと、ズツとお側へ。
小雪　それぢやというて今更に、打つけがましう、どうしてこれが。
枝六　ハテ、困つたものだ。そんならおれを殿樣に准らへ心の丈を存分に。

小雪　でも、わたしは。
枝六　恥かしいと云ふのか。
小雪　サア、それはな。
〽押し付けられて、それぞとも、云はれぬ事の面羞げ、わたしやあたりの賤の女なれど、惚れたに嘘はないものを、痴話も悋氣の獨り寢の、心に殘る思ひ草、思ひ返して見し夢も、覺めて枕に一つ夜着、いつかは君をまつの緣、又逢ふまでは待ちかへし、せめて一度のお情と、袂に縋る枯れ尾花、恨みかこつぞ道理なり。
枝六　なんとお殿樣、斯ういふ心意氣では、捨て置かれますまいがな。
重盛　小雪とやらんが、切なる心は滿足なれど、未だ天下穩かならず、軍國に暇あらざるうち、女子に溺れ政ごと、疎しからずと世の人口。
〽去れば往古も例しあり、齊の君ある時帝を諫めて曰く、數多の美女を撰まれて、日夜飲酒に耽るといへど、あれ見よ四方に國の亂れ、西にゑひしん八萬餘騎、東に匈奴十萬餘騎、三手に分れて智仁勇、備へを堅く守るといへど、齊王義女が諫めに依り、遂に國家を保つとかや。
枝六　どうあつても、お殿樣は、堅氣ぢわえ。その何とやらいふ女も、互ひに心打解けて、それから毎晩夜這星。
小雪　忍ぶゞばしま、長廊下、几帳一重の御寢所に
枝六　帝も戀に身を窶す。
重盛　それは唐土。
枝六　これは又
小雪　我が日の本といふうちにも
重盛　また下々は格別な
枝六　その實相は、オヽそれよ。
〽いつの夜に來たいとて、契る約束も、心が咎めて、素面ではどうか知らばくれ、ちよつと横丁の湯豆腐で、晩二合半が四ツあげの、兼ねてぞ通ふしん猫か、闇には白き頰冠り、行きつ戻りつ軒下の、露にぞ濡れる日和下駄〽炭俵とて見捨てはされぬ、昔や野山の花すゝき、〽なぞと合ひ圖を吹き込めば〽彼奴もましくら坂の上、直す二つの枕紙、見られて辛き文よりも、嬉しき戀の雀形、行燈へ被せてほの暗く、忍ぶ廊下や遣り手が目顏、寢卷の儘の肌寒も、ハツクサメ、風の浮名も散らすらん。
ト客と女郎の振り納まる。
重盛　鄙に珍らしき戀話し。予も殆んど感心いたした。
枝六　サア、それぢやに依つてお殿樣。

小雪　どうぞ、わたしがこの戀を
枝六　叶へてやつて下さりませ。
重盛　サ、それは。
枝六　ハテ、あなたはお武家氣質、後を見せては御卑怯。
幕の內にて二人の組打ち。
重盛　どうして其やうな事が。
枝六　ハテ、斯樣な事も貴人の御座興。幸ひ爰に銚子杯、
時に取つての三々九度。
ト野風呂の內より、銚子杯を出す。
重盛　ヤ。
小雪　そんなら、お前は。
枝六　仲人は宵の程。我れはお次でお肴の
〽用意いたすも、とつかはと。踏み出す足も枝六が、麓
を指して急ぎ行く。
ト枝六、この文句にて向うへ入る。兩人、跡見送り
重盛　ハテ、氣散じな賤の男、我れは當所へ神拜なさん。
ト行きにかゝるを引留める。
小雪　流石は高位のつれないお詞、お否であらうが、お情
に、可愛い女子と只一言。
重盛　云はぬは云ふにいや增すと

小雪　譬へにあれど女氣は
重盛　疑ふ胸も我が胸も
小雪　明けて云はれぬ
重盛　その身の俗姓。
小雪　エ。
重盛　サア、その身の願ひ、叶へてくれう。
小雪　そんなら、あなたは。
重盛　僞はりならぬ武士の一言。
小雪　堅き固めの重盛公。
重盛　賤の女。
小雪　ヤ。
ト思ひ入れ。
重盛　床あたゝめて、待つて居るぞよ。
ト唄になり、重盛、こなしあつて、奥へ入る。合ひ方
彈き流し、小雪、嬉しき思ひ入れにて
小雪　嬉しいあなたのお詞、お情厚きお心は、女子のわた
しが身の果報。これと云ふも、この社のお引合せ。ちつ
とも早うお寢間の內へ……。イヤ〳〵、馴れ〳〵しい女
子と、おさげすみも恥かしい。此やうな時には、酒など
一獻。

ト件の盃子杯にて一つ飲み、思ひ入れあつて、また飲まうとする　ドロ／＼になり、左右の梅松の元より雲気立ち昇る。小雪これを見て、キッと思ひ入れ。誂らへの鳴り物。

小雪　ハテ、心得ぬこの場の有様。左右に生いし二木が元に、崇徳院御在世の砌り、この御社へ遊覧の折柄、枝葉茂りし芳しさに、御賞翫あつて、梅は諸木の兄と呼び、松には太夫の號を賜はり、詠歌を残し置き給ふ。その地中より、怪しき雲気立ち昇るは、栄ふる平家を討ち亡ぼし、源氏は雲井に名を上げよと、知らせ給ふか、アラアラ、有り難やな。

ト、ドロ／＼にて雲気は上へ引いて取る。小雪、思ひ入れあつて

それにつけても我が夫、平家調伏のため、この松ケ根に埋め置かれし一腰にて、雨を乞ひ、雷鳴發すも、雷丸の威徳、元より敵き重盛公、この場にあるを察し、平家方の手に入る時は、夫の恥辱、片時も早う、この所を。
さうぢや

ト盃子の柄にて松の下を掘り、袋入りの短刀を出し

この短刀のあるこそ幸ひ、酔に事寄せ、傍へ近寄り。ソレ。

ト行かうとする。この前より四人の女形、出かゝりゐて

四人　女中さん、待たしやんせ。
小雪　ヤ、お前方は、いつの間に。
初瀬　爰へ来たのはお前の身元。
七野　怪しい女と我が君さまの
小倉　疑ひかゝりし上からは
芳野　サア、尋常に
四人　その俗姓を、名乗るまいか。
小雪　これは又、譯もない。私しは小雪と申す賤しい女、お疑ひ遊ばすやうな者ではござりませぬ。
芳野　その又怪しくない者が
初瀬　隠し持つたる
四人　短刀は。
小雪　サ、それは。
初瀬　そんならお前の
四人　身元を云うて。
小雪　サ、それは。
皆々　サア／＼／＼。

七野　怪しい女中。

ト小雪にかゝり、ちよつと立廻り、五人、しやんと思ひ入れ。

〽戀の情は義理ある者よ、引くに引かれぬこの三味線の、色に添ふとは二世までかけて、逢へば嬉しき顔見るなれど、別れ思へば逢はぬが增しよ〽戀の慾。

ト太鼓の入つたる所作。この文句二度返す。よき時分より遠寄せ頭の打込み、小雪、心得ぬ思ひ入れにて、向うへ行かうとする。四人、これを支へる思ひ入れ。尤も皆振りの内にあるべし。淨瑠璃切れると、ドンチヤン烈しく打つ。皆々思ひ入れ。

小雪　ヤ、不時に聞ゆるあの貝鉦。

ト行かうとするを、四人、小雪を支へてゐる。ドンチヤン烈しく、向うより源内、雜兵の拵らへにて陣笠を持ち、走り出て來り

源内　御主人これに在するや。火急の早打ち、言上仕らん。

小雪　我が夫始め、一門の安否心元なし。軍の勝負、なんと〳〵。

源内　さん候ふ。待賢門、不時の軍と申せども、用心堅固の、その有樣。

〽内より門をさし固め、ひそめく所へ清盛公、三千餘騎にて押寄すれば、その手の大將信頼どの、うろたへ廻り、悔り仰天、臑當て片足、小手片手、長刀取つて腰に差し、はだせの馬には乘りたれども、攻めつる太鼓はどん〳〵からり、馬はひん〳〵嘶く聲、信頼どのはころりと落馬、鼻血は三石三斗三升三合、升目にあらぬ計り事、義朝公は大敗軍、御用意召され御主人さま、我れらはこれより拾ひ首、高名するはこの時と、戰場さして急ぎ行く。

ト源内、振りあつて向うへ入る。小雪、これを聞いて無念の思ひ入れにて

小雪　云ひ甲斐なき源家の敗軍。都の内に立つ足も、なき運命の夫勇、落ちさせ給ふか、ホ、ホイ。

ト向うを見て思ひ入れ。

四人　さてこそ怪しき女中の身元。

トかゝる。

小雪　何を小癪な。

ト件の懷劍を拔く。大雷になり、皆々立ちかゝる時、ドンと雷落ちる音。煙硝火パッと立つ。四人「ハア」とひれ伏す。小雪、心付く。

劍の威徳に又もや動搖、この擧に乗つて重盛どの、討ち亡ぼさんと思へども、夫の安否心元ない。片時も早う、待賢門へ。

〽女の操、夫思ふ、わしの羽衣、甲斐々々しく、裾はせおつて行く所へ。

トこの文句にて花道よき所までゆく。簾の内にて

重盛　女待て、

トこれにて小雪、ヂッと思ひ入れ。まだ行かうとする。

重盛　イヤサ、惡源太義平が妻、雲井の前、マア〳〵待て。

小雪　なんと

トつゝかけになり、簾を絞らせ、重盛、以前の裝束脱ぎかけ、大臣烏帽子、付け太刀、金の采を持ち、出て來る。此うち小雪、ツカ〳〵と舞臺へ戻る。四人の女形、皆々心付き、こなしある。

合點の參らぬ重盛公のお詞、自ら事は賤の小雪、雲井の前とは何ゆゑあつて。

重盛　その證據は、それなる雷丸。土中に埋め、平家調伏なすといへど、最前鳥の血汐、この松ヶ枝にかゝると其まゝ俄の動搖、義平が妻は酉の年度揃ひしゆゑ、その一腰を手に觸るれば、又もや雷、この有様、なんと相違はあるまいが。

小雪　サ、それは、

重盛　女の身として、姿を窶し、夫の恥辱を雪がんと、我れに刃向ふ天晴れ操。その功に免じ、この場は此まゝ見遁がし遣はす。夫や舅に廻り逢ひ、貞女を守り、期しての再會。

小雪　その仁心はさる事ながら、情は情、仇は仇、源家の敵、重盛公、

ト詰め寄せる。

重盛　何を小癪な。

四人　どつこい。

ト思ひ入れ。

〽刃するどき電光石光、吹雪にあらぬ太刀風に、散るや木の葉のさら〳〵〳〵、孝と操は末の世に、鏡とこそは

三重〽なりにけり。

トこの文句にて、散らしの模樣。眞中に小雪、上手に重盛、四人の女形、梅の枝を持ち、前へ取卷き、この見得にて淨瑠璃納まる。太夫連中は打返しにて隱し、道具廻る

本舞臺、三間の間、向う張り物、柵矢來の書割り。
上の方、紅葉の立ち木、同じく照り葉の吊り枝、下
座の口、柵矢來、新關の冠木門。出入りあり、爰に
五郎助、九郎藏、雜兵の形にて、牢輿を舁き据ゑ、
藤太、藥々しき拵らへにて、立ちかゝり居る。すべ
て逢坂山新關の體。時の太鼓にて道具とまる。

五郎　清和公、仰せに依つて、新院の胤を懷姙せし

九郎　白峰の内侍、諸所方々詮議いたし、牢輿へ打込み、
これまで引据ゑてござりまする。

藤太　郎等、内侍が首討つ役は、この藤太。御兩所には大切
な囚人、急ぎ關所の内へ。

兩人　心得ました。

ト件の牢輿を舁き上げ、關の内へ入る。藤太殘り、こ
なしあつて

藤太　この程、源家新院の殘黨、詮議いたさんその爲に、
この逢坂山に新關を構へ、事嚴密に訊す折柄、首尾よく
手に入る白峰の内侍。女ながらも新院の胤を懷姙いたせ
ば、敵の末は根を絶てよと、この所に於て首討つ役はこ
の關原。最早刻限。イデ、内侍が首を。

ト關の内へ入る。大ドロ〳〵になり、最前の雲氣、日
覆より出て、セリ出しの穴へ引いて取る。正面の張り
物を打返す。爰に清元連中居並び、直ぐに前彈きにか
ゝる。

在郷めいたる唄〽ひとり思ひを枕に語り、せめて頼みの夢さへも、
麻の衣に置く霜の〽彼の唐土の劉伶が、愛せし名ある黒
牡丹、黒木下ろして返り道、報謝に乘せて茶筌賣り、そ
の引く綱も糸による、佛の御手も他生にて、緣は田舍の
畦づたひ。

ト謠らへの鳴り物になり、爰においと、小原女に拵ら
へ、頭へ柴を載せ、禪了、鉢叩きの形にて、茶筌をか
たげ、野牛に横乘り、おいと、綱を取つてある見得。
右の鳴り物にて、見事にセリ上げる。

〽釋迦の涅槃も目を醒ます、水の出花の茶の香り、はた
ちの人の喜撰まで、しやが父に似た時鳥、待つ身になれ
ば曉までも、めぐり〳〵て拝嘯か、墓もいにしへその
古き、瓢箪見せよ鉢叩き〽エ、なんぢやいな措かしやん
せ、今はその身でありながら、嗜ましやんせ坊さんと、
戀にひそらぬ二ツ文字、重ね扇に三つ重ね、衣紋にそよ
と凪や、關のこなたに訪づれし。

いと　爰は名におふ逢坂山、新たに立てしこのお關所、女

子のわたしは行く事ならぬ。これからお前は歩行道拾うて下さんせ。

禅了　これは尤もな事。愚僧は行雲流水の身の上。これからは吾妻へ赴き、また歸つて逢ひませう。

いと　不思議な縁のこの道連れ。

禅了　珍しい娘と別れるか。

いと　辛い旅路も

禅了　一夜の情も

いと　別れは同じ

禅了　戀の道。

いと　そんなら、お前は。

禅了　何もない凡夫たり。

ト旅の草履を出す。

〽そも我れは、色にすねたる世捨て人、月の濁り昔顔、これも浮世に振ふくべ、なまうだなまうだ南無阿彌陀〽浮はなけれども雲雀の、見るにつけても、凡夫心。思ふ緒に結んでは、御師の涅槃の提灯、なまうだ／＼南無阿彌陀、これが別れの辻占と、行かんとするを押し隔て、

これ別るゝとは氣にかゝる、七夕さんの雨の夜は、身につまされて、おいとしうござる、戀と云ふ字に移り香乗せて、牛の背にまで憂きやつれ、逢ふ夜短かし逢はぬ夜長し、来ぬゝ焦じて小田卷を、手ぐりくる／＼車の輪、仲好い同士と云はるゝ、それがわたしが願ひぞや。

禅了　こりやア、難波下りの小原女どの、藝子女形の仕込まれたか。飛んだ手練の手管が上手だの。そりやア、此方から願ふ事だ。シタガ、上方土産に、なんぞ面白い話しがありさうなもの。

いと　なんの、わしがやうな不器用者が。

禅了　これは御挨拶。アノ大坂で稀辛が振らへて、今專ら藝子が彈いて流行る唄があると聞いたが、その唄を知つてなら、どうぞ聞かしてくれぬか。

いと　その唄、事ない、慥か斯うであつたわいなア。

〽そなた思へば照る日も曇る、米櫃茶釜茶碗まで、そなたの顔に見ゆるとは、どうした因果なわしぢや、なア。

〽それさにうツ隠れ申して、夜も寝ず待つ手に聞かぬ、野良で見初めて背戸口で、口説くにそれ程憎いのか、さりとはつれない男つら、エヽ、面憎や。

いと　こんな事であつたわいなア。

禅了　こいつは面白いわえ。

トこの時、五郎助、九郎藏、四天の形にて出て来り

両人　怪しい両人、動きやアがるな。
糸禪　こりやア、わし等を、なんとさつしやる。
五郎　なんとするとは、白化けな。いま關所の彼方で内侍の首、關原が立寄つて
九郎　ぶち落さんとさつしやれば、五體竦んで討ち兼ねる。仔細ぞあらんとためらふところ
五郎　さてこそ怪しい二人の者。
九郎　わいらは爰へ何しに來た。
禪了　私しは空也寺より、鉢とりに歩く、茶筌賣りでござります。
いと　わたしは、このあたりに居りまする小原女、この御出家に賴まれて、牛を引いて參つた者。
両人　どうぞ、この關を通して下さりませ。
五郎　ウム、茶筌賣りの坊主とあれば、それに相違もあるまいが
九郎　諸國遍歴する出家、國々の名所古跡は知つて居やうな。
禪了　そりやハヤ、雲水の身の一德、日本中はわしが寢所。
両人　それを話して聞かせたら、この關所は通してやるべい。

禪了　そりや、關さへ通して下さらば、何より易い事。ちよつと爰で關東の話し。
いと　わたしは又、越後瞽女になつて相方に。
五郎　こりやアよからう、やらかせ／＼。
　ト両人よろしくあつて、禪了、扇を杖にして
〽自體我れらは關東べいの座頭、瞽女は越後で新潟あたり。
禪了　ドレ、辨天樣へと參らうか。
　ト行かうとするを、お糸、探り寄つて袖を留める。
〽一人行くとは胴慾な、見られぬものを辨天樣へ、籠る地びたのつちのとの、巳待ちの頭の嬉しさを、忘れてかいなと胸倉を、見えねば脊筋と取り違へ、云ひたい事も痰の炎、七九の竹の心から、割つて見せても見えぬゆゑ、戀でなうてもいつも闇、ツイ抱きつくも脊中同士、炎を擦りむくばかりなり。
五郎　こりやア、面白い。とてもの事にもう一ツ
九郎　聞きたいな。
禪了　遣り次手だ。もう一つ話すべい。
〽隣りの藪から、にょき／＼出たは去年の竹の子、のこのこ眞竹、こちのひたけに見て置いた、しよんがいな、

初演の絵番附

ヤレ見て置いた、こちのひたけに見て置いた、しよんが・いな、おどろとまゝよ、きつとまゝよ、愛しい殿ごと、こちや寝たがよいわいなア〽おなべ女中がへちのせなあとな、ちよらくりそめて、いつかでつかく、ずんすはらんで、うちの畑で菜を摘むふり、おばさま見なさろ、あんたるざまだ、しつかい蛙の立泳ぎ、おや〳〵をかしうおんおぢやる、よこ〳〵おんぢやるよう。

兩人　ヤンヤ〳〵

ト兩人、よろしく振りあつて

禪了　これから又、高島踊りを見せますべい。

五郎　ナニ、高島踊りだ。こいつは珍らしい。

兩人　とてもの事に、やつて見せろ〳〵。

トこれより兩人、よろしく支度して、太鼓を持ち、振りにかゝる。

〽高島のおじやらく娘が、じよなめくえ〳〵、また〳〵また〳〵かいなア〽高島の道樂息子があじよやアる、來た〳〵〳〵來たわいな〽鄙の世界は別なれや。

トよろしく納まる。

五郎　ヤア、最前からのしなし振り。

九郎　どうでも怪しい二人の者。

兩人　イデ、我れ〳〵が引立てゝ。

ト兩人、双方へかゝり立廻りのうち

〽かゝる所へ關原が、内侍を捕へて走り出で。

ト藤太、凜々しき好みの形にて、内侍を引立て出て來り

藤太　ヤア、手緩い〳〵。二人の奴等は二人して、搦め捕つて差出せ。この關原は新院の、亂を宿せしこの内侍を。

内侍　どうあつても。

藤太　今さら未練な、觀念なせ。

兩人　二人の奴等は。

〽刀振り上げ立向ひ、既に斬うよと見る所に、五體すくんでタヂ〳〵〳〵。

ト五郎助はお糸、九郎藏は禪了。藤太は内侍が首刎ねようとする。ドロ〳〵になり、三人立ち竦みになる。

三人　こりや、どうだ。

〽ためらふ暇にいづくかは、怪しの忍び現はれ出で、支ゆる隙間跳ね退け、突き退け、何か樣子は白峰の、内侍を小脇にひんだかへ、いち足出して駈けて行く。

トこの文句の内、下の方より盛久、どてら布子、山賤の形、淳くそ頭巾にて顏を隱し出て來り、物云はずに

内侍を引ッ抱へ、支へる藤太を蹴倒し、向うへ走り入る。三人見て

三人　あれをやつては。

ト五郎助、九郎蔵、お糸、禪了をふり捨て、行かうとするを、ドロ〳〵にて、タヂ〳〵と跡戻りして、キッとなる。

藤太　ヤア、妨げなすこの二人。何れもぬかるな。

兩人　合點だ。

ト兩人左右へかゝる。大ドロ〳〵になり、兩人、左右へ別れ、見事に宙返りする。このキッカケにお糸、禪了、梅松の精靈の捺らへになる。三人、この體を見て

藤太　さてこそ二人がこの有樣。そも先づうぬは

兩人　何奴だエ、

〽なう我れ〳〵が身の上こそ、そも〳〵人間の業受けて、見えし姿の二人の者、崇徳院の御寵樹にて、配梅古松の精靈なり。

三人　さてこそなア。

禪了　驕る平家のその爲に、新院は讃岐へ遠流。

いと　今は世捨ての二木ながら、御懷胎の内侍さまが、藤身に付いて守るなり。

藤太　何を小癪な。

〽淫怪の相国清盛が、新院のお胤を失はんとする、報いの程を思ひ知れと、有り合ふ枝を呵責の笞、打つてかゝりし變化自在、凡人ならぬ精靈の、ひらり〳〵飛びかふ姿、北風しの吹ッ送る、八百八町御贔屓町、木毎に花の顔見世と、深き恵みぞ有り難き〳〵。

トちらしの仕組みよろしく、禪了は上手松の木、お糸は下手梅の木へ立ち寄ると、よろしき所まで引上げる。藤太、眞中にてよろしく見得。大ドロ〳〵にカケリにて

幕

操常磐島臺・詠梅松清元（終り）

道行浮寝鴎

おそめ
久松

お染

文政八年十一月、中村座の顔見世狂言「鬼若根元臺」の二番目序幕淨瑠璃である。今日も大流行であるが、あれが顔見世淨瑠璃かと思ふと全く意外である。この場だけだと何でもないが、次の幕になると南北式の奇抜さを發揮する。即ちお染久松は心中をしそこねて非人へ下げ渡される。小屋頭は鬼門の喜兵衛で、實は江田の源三廣綱である。しかもお染久松は實の兄妹とわかつて二人は自殺する。その血汐が平家の若君のお役に立つと云つたやうな顔見世式の複雜な筋があるのだが、あの道行からはこんな後の筋は想像だにもつかない。只の世話物として清元に舞踊に今日でも大流行である。この時の立作者は南北だが、作詞は勝井源八であらう。清元は榮壽太夫と齋兵衛、振附は、藤間大助、役割は、おそめ（岩井紫若）久松（岩井粂三郎）桃太、喜兵衛（七世市川團十郎）久作（惣領甚六）おみつ（岩井春次）等であつた。

道行浮塒鷗（お染）

三圍土手の場

役名――油屋娘、お染。同丁稚、久松。同番頭、善六。庵崎の百姓、久作、手代、庄八。飯炊き、ます〳〵横兵衞。久松云ひ號け、お光。猿廻し、山谷の桃太。紙屑拾ひ、鬼門の喜兵衞。

清元連中

知らせにつき、向う揚げ幕の内にて、迷ひ子の鉦太鼓聞え、直ぐに雨車、佃節になり、揚げ幕より庄八、町人・股引・油屋と書いたる弓張りを持ち、町人二人、鉦太鼓を叩き、棒を持つて出てくる。中の口より軍兵三人、陣太鼓を打つて出て來り

軍兵　迷子の〳〵のお大將樣ア。

庄八　お染さま、久松やアい。

ト双方呼びながら出で來り

庄八　モシ〳〵、あなた方は、爰へお出でなさる道で、娘と若衆の二人連れを、見掛けはなさりませぬか。

軍一　イヤ〳〵、其やうな者は見掛けぬぞ。此方でも貴樣達に尋ねたいは、爰へ來る道で、立派な大將樣に逢ひはせぬか。

庄八　イヤ〳〵、其やうなお方に見かけませぬか。

軍二　イヤ〳〵、別の儀ではないか、此方ともは北條時政の幕下。この度賴朝さま、石橋山にて御旗揚げありしところ、勝利なく、安房上總へ渡り味方を集め、この武藏の隅田川邊へござつたとの事。

軍三　そこで此方どもゝ、毎日此やうに、迷子の賴朝さまとも呼ばれず、お大將樣と云うて尋ねるのぢや。

庄八　ハテ、それは珍らしい迷子でござります。私しどもが尋ねに出ましたのは、内の娘御と、久松といふ丁稚が二人連れでの駈落ち。

町一　それといふのも、番頭の善六どのを聟になされたゆゑ、此やうな事が出來たといふものぢや。

軍一　それ〳〵、兎角世間には、いろ〳〵樣々な事もあるものだ。夜の明けぬうち此方も

軍二　手分けをなして土手傳ひ、千住の方へ尋ねよう。

庄八　此方もこれから四ツ木の方へ……お染さま、久松やアイ〳〵。

軍兵　迷子の〳〵お大將樣ア。

ト双方呼びながら、軍兵は花道、若い者は東の口へ入る。矢張り佃節になり、幕明く。

本舞臺、三間の間、高足の草土手、正面に鳥居の笠木ばかり見せたる三圍裏手のかゝり。日覆より松、紅葉打交せたる吊り枝を下ろし、上手の方に稻村、松の立ち樹、この前に出茶屋の床几積み重ね、葭簀立てかけあり、すべて向島、夜の景色、この道具に納まる。

ト直ぐに雨車、佃節になり、向うより善六、麻上下の形にて、油屋と書いたる番傘をさし、棒を突いて出てくる。これに權兵衞、若い者、股引・紙合羽、菅笠にて、油屋と書いたる弓張りを持ち、出て來り、兩人花道にて

善六　コレ〳〵、われは大分足が遲いが、夜の明けぬうち少つとも早く、お染が行くへを尋ねにやならぬ。急げ急げ〳〵。

權兵　ハイ〳〵、畏まりました。これは〳〵、ます〳〵手も足も寒い事だワ。

ト云ひながら兩人とも本舞臺へ來り

時に番頭樣え。内を出るから此やうに歩きづめ、ますます寒くなつては來ましたが、直ぐにこれから千住に行くと仰しやるゆゑ、此やうに紙合羽で、支度をして來ましたが、ます〳〵酒も飮まずに、どうして素面では

善六　オヽヨ、それはおれも承知だが、肝腎のお染さへ捕へれば、褒美はその時しつかり遣るワ。

權兵　そんならアノ、お染さまを尋ねた上でなければ、御酒下さりませぬか。ヤレ〳〵、情ない。よくぞ出かけに自腹できめて來たばつかりに、茲までは來ましたが、もう〳〵一足も歩かれませぬ、歩かれませぬ。

善六　コレ〳〵、そんな事を云はずとも、おれはこの川端を尋ねるから、われは元の道へ歸り、淺草の方か、又は千住板橋、出口々々を尋ねるがよからう。

權兵　モシ〳〵、それでは滅法界もない道でござります。ます〳〵飮まずには行かれませぬ。その上、餘ほど路銀がいりませうぞえ。

善六　成る程、それでは小遣ひもいるだらう。ドレ〳〵、そんなら貸してやらう。

ト紙入れの中を尋ね、富の札を出して

コレ〳〵、權兵衞、爰に持合せの金は無いが、富の札が一枚ある。今にも當れば百兩になるワ。その時は、しつかりと遣るゾ。

ト出して見せる

權兵　こいつは少つと詰まらねえ話しだ。もしその札が一に出ぬと、私しは骨折り損でござります。道理でお染さまが、お前に嫌つて駈落ちをなさる筈だ。

トこれにて善六、ムッとしたる思ひ入れにて

善六　コレ〳〵、權兵衞、われは番頭の善六を安くするな。

權兵　また高くもない男だ。其やうな人に使はれる、ますますではないぞ。

ト力味まはる思ひ入れ。善六も思ひ入れあつて

善六　能い奴か〳〵、番頭に向つて口答へをする。われがやうな奴は

ト權兵衞の首筋を捕へる。この時、懐より以前の富の札を落す。

うぬ、憎い奴だ。宿を呼びにやつて、早く引渡さねばならぬ。サア〳〵、出て行け〳〵。

權兵　ア、コレ〳〵、そんなに手荒くせずと、氣に入らざア入らねえやうに、どうともさつしやるがよい。

善六　うぬ、飯炊きの分として。サア、たつた今、宿へ行け〳〵。

ト追ひやる。これにて權兵衞、口小言を云ひながら花道へ行き

權兵　ア、、わしも國ぢやア庄屋株の家だ、江戸へ出て奉公もしたが、こんな番頭に使はれるは、此方がます〳〵いま〳〵しい。ソレ、紙合羽も笠も返しますぞ。

トそこへ出して、花道の附け際へ置き

サア、今からわしは國へ行きます。さて〳〵人使ひの惡い番頭めだ。

ト佃節になり、權兵衞、呟き〳〵向うへ入る。

善六　うぬ、憎い奴だ。おれが獨りでお染を尋ねるワ。勝手にしをれ。

ト茶屋の床几に腰をかけて、摺火打ちを出し、莨をのんでゐる。時の鐘、向うバタ〳〵になり、お光、在郷娘の拵らへにて、走り出てくる。跡より久作、老けたる百姓にて、赤子を抱へ、小提灯をさげ、出て來り、

花道にて

久作　コレ〳〵、お光、聞分けのない。マア〳〵、わしと一緒に

ト引戻さうとするのを

みつ　イエ〳〵、なんぼ父さんの云はしやんす事でも、こればつかりは

ト振り放して舞臺へ來る。久作、跡逐うて來てお光を捕へ

久作　ヤイ〳〵、如何におのれは年端もゆかぬ者ぢやとて、短氣も事による。大事の〳〵其方を殺して、この久作は何とせう。われが死んだとて二人の衆が、歸るといふのでもなし。マア〳〵、とつくりと親が云ふ事、聞き分けてくれ。

トお光を捕へて思ひ入れ。

みつ　そりや父さんの云はしやんす事ぢやが、久松さまに嫌はれたは、わたしが因果その上に、お二人さんは死ぬるというて、書置まで殘してお出でなされたと聞いては、猶々わたしも共に死なねばならぬ身の上。いつそ此まゝ

ト思ひ入れあつて、また行きかゝるを

久作　ハテマア、わしが云ふ事、とつくりと聞いた上

トお光を無理やりに下に置く。この時善六、この體を見て

善六　最前から聞いたが、夜更けさ更けに女の聲。そんならこの娘御は

ト獨り言云ふを、久作この聲に思ひ入れあつて

久作　ヤ、あなたのお聲は、どうやら聞いたやうな。

トよく〳〵見て

ほんに、善六さま。いま時分あなたは

善六　イヤ、わしよりは貴様達、どうして爰へ。

久作　サア、お聞きなされて下さりませ。私があなたのお見世へ、御奉公に遣はしました、あの久松めが、この頃の惡い噂、聞くと娘めも久松とは、小さい時分から云ひ號けの事なれば、生きてはゐられぬと云うて内を駈け出し、憎くい奴は久松。大事の〳〵お娘御のお染さまと二人連れにて、家出をしたとの噂。それゆゑお光めも、お二人ながらもしもの事があつた時、娘も死にますと云うて爰へ來たのを、追ひかけて參りましたが、どうぞあなたもお光めに、得心の行くやうに云ひ聞かせてやつて下さりませ。

トほろ〳〵泣いて思ひ入れ

善六　オヽ、尤も〳〵。久松と云ひ號けの娘ならその筈。おれもお染と祝言の夜に、駈落ちされた、この善六が心の内も、推量して見やれ。

ト泣き出す。久作、いろ〳〵思ひ入れあつて

久作　アヽ、御尤も〳〵、あなたもさぞや久松めを、憎い奴ぢやと思し召して下さりませうが、コレ〳〵、私しが抱いてゐるこの幼な子は、お染さまと久松が仲に出來たお子を、私しと乳母と内々にてお育て申す、その始末を娘が聞いて、身も世もあられず今の體裁。

みつ　サア、そのお二人のその仲に、お子の出來たを、どう見てわたしが……それゆゑこの身も、いつそ死んでなりと今の思ひを

トまた行かうとする、久作とめて

久松　コリヤ〳〵、お光、わが身は悪い料簡。おぬしが死ぬる〳〵と云へば、跡に殘つた親のわしも、どうそれを見て生きてゐられう。その時はこの久作も

ト有りあふ縄を見附けて

オヽ、あるぞ〳〵。コレ〳〵、此やうに縄を吊して、首をしめて死なにやならぬ。

ト柳の枝へ縄を縛りつけて見せる。

みつ　イエ〳〵、なんの勿體ない。わたしこそ生きてゐては、後々のお邪魔。それゆゑ淵川へなと身を沈めて死にまする。父さん、免して下さんせ。

トまた行かうとするを、久作とめる立廻り。お光は振り切つて、逸散に下座へ入る。

久作　コリヤ〳〵、娘、聞分けない。お光やアい〳〵。

ト跡逐うて下座へ入る。善六殘り、跡見送つて

善六　ヤレ〳〵、可哀や。お光は久松ゆゑ、この善六はお染ゆゑ、娘が死なうと云へば親仁まで……彼奴ら二人が親子の心中も、大笑ひだ。ドリヤ、お染が行くへを

ト行きかゝる時、足に何やら觸るを取上げ

こりやア爰に何か落ちてあるワ。

ト書き物を開き見て

アヽなんだ、淨瑠璃名題

ト口上觸れを讀んで

その爲口上、左やうに……こりやア淨瑠璃の觸れ書とやらだ。お江戸の勝手の知れぬは、いづれも樣、眞平御免なさいませ。

ト佃節になり、善六、思ひ入れあつて下座へ入る。向うパタ〳〵にて、お染、袖頭巾にて走り出て來て、花

道にてちよつと爪づく。久松、跡より駈けて來り、お染を介抱して、兩人互ひに顏見合せ

久松　ヤ、あなたはお染さま。

そめ　久松か。

久松　ア、モシ

ト思ひ入れ、ゴンと時の鐘。途端に上の方、打返しにて、草土手の上に淸元連中居並び、前彈きなしに直ぐに淨瑠璃になる。

〽今も昔は瓦町、名代娘のたゞ一人、おくれ道なる久松も、まだ咲きかゝる室の梅、蕾の花の振り袖も、内で忍びてやう／＼と、爰に互ひの約束は、心もほんに隅田川、曇りある身は胸の闇、我が足音も都鳥、ぱつと立つ名の嬉しうて、もしや追手も何如ぞと、人目つゝみの川岸を、客まだ戀き屋あかり、西へ行く身の向島、落葉を分けてやう／＼と、たどり／＼て來りける。

トこの文句にて兩人よろしくあつて、本舞臺へ來る。

久松　イヤ申し、お染さま、あなたのお志しで、お跡から爰までは參りましたが、如何に深い御縁とはいひながら、お主の娘御を連れまして、死なうなぞとは勿體ない道知らず、いはゞ現在主殺しも同然。

そめ　コレイナア、久松、またお主と云やるかいの。互ひに死なうと覺悟して、内を出たのはそれも何ゆゑ、みんなアノ善六づらが、わしを捕へてさま／＼な事云やるゆゑ、此やうに二人一緒に遠慮なう居れば、こんな嬉しい事はないわいの。

久松　イエ／＼、今になつて、この身をいとふのではござりませぬか、あなたとは子までなしたる仲なれど、私しと一緒にお果てなされては、内の子飼と娘御が、心中したと口の端にかゝつては、第一お家へ疵の附く事、どうぞあなたは、これより直ぐに

そめ　そんならわしに、歸れと云やるか。

久松　今も申しまする通り、どうぞあなたは長らへて

そめ　それぢやというて、互ひの約束。

久松　夜の明けぬ間に内方へ、お歸りなされて下さりませ。

トこなし。これより淨瑠璃

〽我が手枕に梅ヶ香の、まだ床馴れぬ鶯も、子故のうちから御恩を受け、大事の／＼お主樣、月日の詠めにも、思ひは同じいつとても、餘所へ見る目を遠慮して、側へ寄るさへどうせうと、二世の固めのその先に、勿體

初演當時の繪番附

ないが家來の身、〽お染はチッと顏を見て、あれ又あんな無理云うて、そんなそのよな云ひ譯を、それよりわしが否ならば、二人未來へ行つて見や、男心はさうしたものか、〽小さい時から生中に、手習ひまでも一つ所、あの云ひ號けのお光さん、何やら双紙へ書いたのを、其方に見せて問うたれば、戀といふ字と云うたのを、初めて知つたいたづら事、さはる手と手も机の上、お師匠樣はなけれども、ついした事から悪縁の、結び始めの殿御ぢやと、思うてゐるに其やうな、樣と云やるが憎らしい、晴れてお染と呼ばれたさ、恨みつらみも何からと、袖に縋りて涙ぐむ、娘心ぞ可愛らし〽久松今さら返答も、濡れてもつるゝ枯れ柳、詮方なくも置く霜の、消ゆる二人が身の上と、思ひ暮らして明暮れの、願ひも叶ふ妹背鳥、おつと締めたる懐の、内ぞゆかしき戀草は、枯野の中の宵闇に、せめて名殘と抱き合ひ、互ひに胸の下紐も、分けて命となりぬらん。

　トこの文句よろしくあつて、兩人抱きつく。この時長命寺の勤ろの半鐘、チヤン／＼と打つ。これにて兩人、愕り飛びのき

そめ　エヽ、ありや何ぢやぞいなア。

久松　慥か、長命寺の勤めの鐘。

そめ　二人が命も

久松　最期を急ぐ

兩人　死出の旅

　トこの時、向うにて人音する。

久松　アレ／＼、向うに慥か人影。

その　見咎められぬ其うちに

〽いざと二人はあたりなる、木蔭に暫し立ち忍ぶ。

　ト兩人こなしあつて稲村の蔭へ忍ぶ。

〽潮湖が筆を寫し繪に、眞似て三升の彩色も、三筋は足らぬ猿曳きが。

　ト箕笛入り、誂らへの合ひ方になり、向うより桃太、縞の軽衫、布子、山岡頭巾、風呂敷包みに小猿を脊負ひ、猿廻しの道具を持ち、出て來り、花道にとまる。

　淨瑠璃になる。

〽得意廻りの口祝ひ、宿のお庇にや囃衆とさしで、ぐつと熱燗引ッかけた、顏は太夫と花紅葉、まさるめでたやまつかいな、赤かんべい／＼、ごまぢやなけれども、くるりくる／＼野良廻り、くるりと廻つて菜種の蝶よ、色の利き肩よいとまりどこ〽夜さの泊りはどこが泊りぞ。

なばか杓子が行きあたり、流れ渡りの隅田堤、機嫌上戸の氣も輕く、浮れ拍子に來りける。

トよろしく振りあつて、舞臺へ來る。この時、稲村の藪より久松、お染の手を引き、拔き足にて出てくる。桃太、見て

桃太　ヤア、じよなめくな／＼。見れば男と女の二人。ハア、聞えた。こりやアてつきり、この三囲のれこさが、おれを化かしに出たな。よし／＼、お狐ならば、太夫が爪で正體を

ト猿を下ろさうとするを

久松　ア、コレ、滅相な。

そめ　其やうなものぢやないわいな。

桃太　そんなら、こなさん達は人間か。それにしては、どれも／＼、ハテ美しいな。して又なんで、夜深にこの邊へ。

久松　ア、これはナ……オヽ、それ／＼、この三囲の稲荷樣へ、年參りに來ましたわいな。

桃太　それは御奇特。成る程、明日は大晦日だな。

久松　待たぬ月日の經つは、早いものぢやといひまする。

桃太　早い筈サ、この狂言も一番目から二番目の間は、幕の内に十年經つてしまつたのサ。ハヽヽヽ。

そめ　コレ久松、もうやがて夜明け。

久松　ドレ、そろ／＼と參りませうか。

桃太　オツト待つたり。二人の身の上よりは、肝腎の頼まれた身の上を、いづれも樣へお引合せを、東西、東西。

ト爰にて清元榮壽太夫引合せの口上あつて

ア、そんならお前方の身の上も、前髮といひ、このお娘がいま、久松と云つたからは、いよ／＼この頃噂のある

兩人　エ。

桃太　コレ、醉興らしいがこなさん達へ、わしがちよつと、云つて聞かせる事がある。

兩人　そりや、どのやうな

桃太　ハテ、なんであらうと、マア、聞かつしやりませ。

トこれより四つ竹の合ひ方になり、桃太、こなしあつて

〽爰に東の町の名も、開いて鬼門の門屋敷、瓦町とや油屋の、一人娘にお染とて、年も二八の細眉に、内の子飼ひの久松と、忍び／＼の寐油を、親たちや夢にも白絞り、絞りかねたる振りの袖、梅花の露の玉の緒の、やがて消

えゆく有切も、心の燈心添へたなら、末は二人が吉丁子、
　これは我れらが御祈念と、意見まじりに興じける。
　ト桃太、四つ竹を打つ事あつて、兩人思ひ入れ。
久松　すりや、世間では其やうに
そめ　お染久松とやらが身の上を
桃太　門附け又は唄祭文、浮名の立つをうたてく思ひ、ひよんな心にならつしやらぬやうに
兩人　エ。
桃太　春を取越すお猿萬歳、御壽命長久、芝居繁昌、祝うて爰に
　ト風呂敷より包みを取出し
囃しませうか。
〽猿若に御萬歳とは、櫓も榮えてましんます、青陽新玉の年立ちかへる間の春、愛嬌ありけるぼつとり者、西王母が桃の花、口に咬へて當年の、惠方から舞ひこむなんどゝ、まさるめでたう候ひける〽二八十六諸人の引張る色娘、お染と云つたら立つたりしと〽よいとよい／＼石したるものは何々、綾が千疋、錦が千反、緋紗綾緋緞子緋鹿子の、大振り袖を着飾つて、榮えて參る／＼、これ又參る〽山王の櫻の木を見てあれば、太夫が三萬三千三百三十三疋づらりやづツとましらこに、ましらこ／＼さりとはさんな又からろかいな、お若衆どのもお嫁御も、揃ひも揃うて好い女夫ぢやまいなう、斯樣申す才藏なんぞは、むつくり／＼、むくむく／＼、むつくりくるりと張りて立つたりな、あろうかいさんな又あろか、な、お猿はめでたやな〽百萬年の壽と、舞ひ祝うて奥さは、望ある方へと走り行く。
　ト桃太、よろしくあつて、下座へ入る。兩人、思ひ入れあつて
久松　モシ、お染さま、見ず知らずの人も、今のやうに深切に云うてくれるもの、浮名の立つた二人が仲。
そめ　それぢやによつて、わたしも覺悟を
久松　すりやどうあつても
そめ　二人一緒に。
　トこの時、善六、窺ひ出て
善六　ドッコイ見附けた。久松めは死んでしまふが此方の勝手。お染さまは、殺さぬ／＼。
　トお染を捕へる。
そめ　エ、、アタ嫌らしい。なんの其方と
善六　否でも應でも、この善六が女房とも。これからお染

善六といふ道行ぢや。モシ、榮壽さん、頼みます。サア、キツ〳〵わしと、ござらつしやい。

ト引ッ張るを久松、引放して

久松　イヤ、お染さまは、この久松が遣る事ならぬ。

善六　何をこの素丁稚め、おれが爲には戀の敵。エヽ、けたいの悪い。うぬ、どうするか、見をれ。

〽かよわき二人を善六が、襟髪摑んで引寄せるを、どつこいさせぬと久松が、引戻してもいつかないな、浪に揉まるゝ浮寐鳥、立つ足もなくよろ〳〵〳〵、こけつまろびつ。

トこの場にて三人立廻り。善六、脇差を拔かうとするを、お染、拔かせまいと爭ふ事。トヾ善六床几の上へ上がり、お染を引附ける。久松、これを除けんと、臺を向うの方へ突きやる。此はずみに久作が掛けし繩へ思はず首を引ッかけ、ハア、と苦しみ、首を縊る。兩人この體を見て「アッ」と飛びのき、お染は久松に縋り、慄へてゐる。

久松　ヤ、善六どのが思はぬ最期。

そめ　こりやマア久松、どうせうぞいなア。

久松　怪我とはいへど久松が、善六どのを殺した同然。

そめ　これにつけても、所詮生きては居られぬ身の上。

久松　この久松は、オヽさうぢや。

ト善六が捨てし脇差にて死なうとするを、お染とめて

そめ　コレ久松、其方より先この染を、殺して死んでたもいなう。わしやなんぼでも、其方を先へは、殺しやせぬ。

久松　ぢやと云うて、養父久作が大恩ある主人の娘御。どうマアわたしが

そめ　アレ又あのやうな水くさい。二世と交した女房のわたしを

久松　是非に及ばぬ。そんなら二人、手に手を取つて

そめ　淵川へなと身を沈め

久松　せめては死恥かゝぬやう

そめ　そんなら爰で

久松　未來の晴れ着。

そめ　二人が支度。

〽脱ぎ捨つる、上着に物を思へとや、帶から先へ解けかかる、心は解けぬ厚氷、肌寒風も身に浸みて、この世の縁も淺草の

ト時の鐘。此うち兩人、袖を脱ぎかける思ひ入れ。下

座バタ〳〵にて、人音するゆゑ

久松　又も人音、夜の明けぬ間に。

そめ　そんなら久松。

久松　お染さま。

〽顏見合はせて月は涙、今は二人も束の間に、彌陀の御國に隅田川、蓮の臺の辭世禪、いざ事とはん都鳥、足と橋場の明け近き、はや長命寺の鐘の聲、爰に浮名や流すらん。

ト打返しにて淸元連中を隱す。兩人、思ひ入れあつて、下の方へ行く。掠めたる禪のツトメになり、向うより喜兵衞、紙屑拾ひにて、籠と箸を持ち、出てくる。跡より、犬附いて出るを、追ひのけ〳〵舞臺へ來るうち、久松はお染が手を引き、兩人、袖をかざし、摺れちがうて花道の方へ行く。この時喜兵衞、善六が落せし富の札を、何心なく籠の中へ挾みこむ事あつて、善六が首縊りを見附けて

喜兵　ハ、ア、縊つたな〳〵。

トこの時、ドンと水音する。

兩人　ヤ。

ヤ、身投げがあるわえ……そんならこいつも

喜兵　心中かも知れねえ。

トこれにて兩人、花道に捨てある紙合羽を取りあげる、犬「ワン」と喜兵衞へ喰ひつく。

エ、畜生め。

ト竹箸にて犬を打つ。兩人、紙合羽を着る。双方、思ひ入れ。木の頭。

イヨ、大和屋。

ト兩人、菅笠をかざす。これをキザミ、よろしく、ひやうし　　幕

幕の外、雨車、時の鐘にて、兩人向うへ入る。知らせにつき、シヤギリ。

道行浮塒鷗（終り）

猿若瓢軍配——小倉山

この曲には別に淨瑠璃名題といつたものが見當らぬので、狂言の本名題を附けて置いたが、俗稱「小倉山」で通つてゐる。文政三年十一月、中村座の顔見世狂言の四建目淨瑠璃である。本來なら豐後を使ふのであるが、どういふ譯か唄淨瑠璃で間に合せてある。顔見世式の不得要領な一幕だが、あの後にはまだ狂言があつて、森姫も園菊も傾城姿になつてゐる。園菊は小田春永の娘お通姫で、これが敵の柴田の子と契つたといふので自害をする場などもある。どこまでも顔見世らしい大まかなもので理窟を云ふべきではあるまい。光興といふのは德三郎といふ俳優がこの時下つて來たから設けたお目見得の役で、又しまひのだんまりは小倉山とは關係はないが、次の「山鳥」と關係があるから出して置いた。こんな特殊なものでも「小倉山」といつて、今でも舞踊の浚ひには折々出るので、特に收錄したのである。この時の長唄は芳村伊十郎に杵屋六三郎、振附は市山七十郎。役割は、勝久（中村源之助）森姫、山鳥（五世瀨川菊之丞）園菊、山鳥（岩井粂三郎）正清（市川鰕十郎）光興（嵐德三郎）五郎藏（七世市川團十郎）であつた。

猿若瓢軍配（小倉山）

小倉山の場
仇し野の場
無勒寺谷の場

役名——柴田權六郎勝久。武智姫。森姫。女奴、園菊實ハお通の方。齋藤光興。佐藤虎之助正清。乳人、小侍從。鬼山角兵衞。山賊五郎藏實ハ武智左馬之助。お菊實ハ山鳥の精。お粂實ハ山鳥の精。

長唄連中

本舞臺、三間の間、少し上へ寄せて、藁葺き丸柱の二間の亭屋體、障子をたて切り、竹縁附き雲手に手水鉢。門口、竹簀戸。所々に紅葉の立ち木、同じく吊り枝。すべて小倉山時雨の亭の飾りつけ、この道具納まる。

トごんと時の鐘を打ち込み、唄淨瑠璃になる、

〽時知るや誰が誠より時雨そめ、色づく紅葉に妻乞ふる、その鹿ならで、なれも身を。

トまた、時の鐘、誂らへの合ひ方になり、向うより森姫、黑の振り袖、紫の帶、袖頭巾にて、黑塗り蒔繪の丸き提げ重を龕燈のやうに持つて出て來り、後より森姫が袂へ糸を附けし心にて、園菊、釘貫の紋附き、奴の形にて、苧環を持ち、窺ひながら出て來り

〽戀に窶すと白波の、姿あやしと道もせを、慕ひくる〳〵苧環の、いとし盛りと夕間暮れ。

ト兩人よろしく花道に柱を隔てゝ立ちとまり

森姫　風吹かば沖津白浪龍田山、爰は都の小倉山、木々の梢も紅葉して

園菊　錦織りなす中々に、それかあられぬ形振りは、誰か女子と緣の林。

トこれにて、森姫、園菊を透かし見る。この時、紅葉パラ〳〵と散る。

森姫　その物腰もいたづらな、戀の奴の出立ちに

園菊　戀の曲者大膽な、誰れに靑葉の色づいて

森姫　濡るゝ心で

園菊　北時雨か。
兩人　ハテナア。
ト思ひ入れ、森姬、行かうとする。園菊、苧環を投げる。此うちに
〽降りみ降らずみ振り袖を、引くは蕀か風の手か、憎や辛氣も胸と胸、ともに染めなす顔紅葉。
トこの文句よい程に、森姬、袖の糸に心附き喰ひ切つて舞臺へ來る、園菊、これにて思ひ入れあ縛て、苧環を捨て、共に舞臺へ、ツカ／＼と來り、互ひに顔見合せこなし。
森姬　見れば、可愛らしい女中さんの、顔に似合はぬ、蓮葉な形で、爰へは何しに、お出でぢやえ。
園菊　サア、わたしは、わたしぢや。さう云はしやんすお前こそ、變つた形で、爰へはマア、なんの用でござんしたえ。
森姬　サア、あのわたしやナ。
ト思ひ入れ。この時、屋體の内にて
〽時雨を急ぐ紅葉狩／＼、深き山路を尋ねん。
トこれにて、森姬、思ひ入れ。
それ／＼、紅葉見に來た者ぢやわいな。

園菊　わたしも、この小倉山へ、紅葉を見に來た者ぢやわいな。
森姬　ムウ、そんならお前も
園菊　アノお前も、
ト森姬、内へ入らうとするを、園菊、入れ替つて入らうとする。互ひに立廻りながら内へ入る。思ひ入れあつて
兩人　エヽ、なんぢやいな。
ト顔を背けて下に居る。この時屋體内、勝久謠。
勝久　人は知らじと打解けて、獨り詠める紅葉ばの、色見えけるが如何にせん。
ト障子一面に引抜くと、勝久、羽織衣裳、一腰差し、鼓を打つて居る。傍に短檠を灯し、刀掛けに刀掛けてあり、勝久、鼓の手を止め、兩人を見て思ひ入れ。合ひ方になる。
勝久　柴田權六郎勝久が、大内守護の暇には、爰に浮世を樂しむ折柄、見れば目馴れぬ二人の女、これは何しに立寄りしぞ。
トこれにて、兩人心附き
園菊　ハイ、わたしは思はず、この時雨を

森姫　サア、晴れ間を暫しと、ツイそれで。

勝久　すりや、濡れをいとうて、アノ妾、……頼む木蔭に雨洩ると、妾も名におふ時雨の亭、欲の心に引替へて、偽はりがちな二人の詞。

兩人　エ、。

ト思ひ入れ。

勝久　姿にそれと、サア、合點がゆかぬ。

ト思ひ入れ。

森姫　サア、さう云はれては、せう事も、何を隱さうわたしやアノ、戀の盜みに來やんした、奴でネイ、ござんすわいな。

園菊　わたしは戀のお使ひに、やつし參らせ候かしく。

勝久　ムウ。して、そりや、どこのいづ方へ。

森姫　目指すは、矢ッ張りこの庵。

園菊　勝久さまへ押しつけに。

勝久　ヤ、なんと。

ト鼓の合ひ方になり、勝久、舞臺へ下り立ち

まだ初々しきこの勝久、未熟不調法、云はん方なきやつがれへ、花と雪との二人の手弱女。エ、こりや默つて見ようと云ひ合せて。

森姫　イ、エ、眞實。

勝久　アノ、ついに逢ひ見ぬ某へ。

森姫　サア、そこが即ち戀の盜人、いつの間に目を附けたやら、油斷のならぬでござんせうがな。

勝久　イカサマ。さうして、此方のお使ひは、マア、いづくの誰れから我が方へ。

園菊　サア、誰れとは、矢ッ張りわたしから、わたしが戀のお使ひに。

勝久　ヤ。

ト思ひ入れ。森姫も思ひ入れ。

園菊　モシ、勝久さま。

トまた、唄淨瑠璃になる。

〽人傳ならで打ちつけに、戀の使ひに淸水で、櫻もよそに形振りは、お公卿さんやら、侍ひさんやら、〽知らず知られず見初めて惚れて、花の香尋ね寄る邊さへ、啼いて胡蝶のやう／＼と、憬れし身を推してと、寄るを隔ての中垣に、菊の下露、結びの神へ、煙草絶つのも、わたしやお前に、どうぞと思ひ指しに來る、夜の戀路は暮れの闇、待つて忍びし心根を、可愛とくんでくれん／＼も、どうぞとばかり寄り添ふを、いえ／＼さうはと突き退け

て、纏る手と手の蔦かつら、離れがたなく見えにける。

ト兩人、勝久を提へ、よろしくあつて

勝久　武士の女に似す紅葉とは、と云ふ秀句あれど、二人の女子に、さう云はれては、有り難いやら、勿體ないやら、とんと挨拶の仕様もない仕合せ。悪い返事をしたならば、いづれも様に、お叱りを、受けさうな事ぢやに依つて、勝久承知致つたぢや。

ト兩人思ひ入れ。

兩人　そりや、マアどちらへ。

勝久　サア、いづれをいづれ、兩の手に、うま過ぎた事ながら、一度に賞翫仕るぢや。

春姫　そんならわたしも。

園菊　アノ、わたしも。

勝久　此方から願うてなりと、お附合ひにあづかりたいが、折ふし酒の用意もなし。近日ゆるりと。今日今宵は。

ト立ち上がる。

園菊　アヽ、モシ、幸ひ、酒はこの吸ひ筒。

ト腰に附けて來たる瓢箪を出す。

春姫　さもしけれども、お肴は、わたしが爰に。

ト提げ重を出す。

勝久　したり、思ひ揃うて銘々が、お持たせの酒肴。併し思ふ仔細もあれば、先づ／＼妹脊の杯は。

兩人　そんなら、お否でござんすかえ。

勝久　なんの、どうして。

兩人　モシイナア、

ト兩方より袂を提へて思ひ入れ。また唄になる。

〽一河の流れ汲む酒を、いかでか見捨て給ふやと、袂に縋り止むれば、流石、岩木にあらざれば、心弱くも引き留められて、所は山路と菊の酒、千代の縁の始めなるらん。

ト此うち、勝久を引きとめ、三人よろしくあつて

勝久　イヤ、モウ、縁と云ふものは、をかしなもので、わしがやうな者が、二人の楽の相手になつて、杯をするといふは、此やうな嬉しい事があらうかいの。ハヽヽ。サ、そんならこの杯は、また汲んで其方の方へ。ハハヽヽ。

ト園菊へ杯をさして笑ふ。園菊、此うち、しく／＼泣き出し

園菊　なんの、あなたの方で御存じもない所へ、厚かまし

く無理やりに、押しつけ業なお願ひを、憎い奴とも叱らずに、杯して下さんすは、有り難うて／＼、わたしや、いつそ、涙がこぼれて、有り難いゆゑ、この杯は頂かうかいな。

ト泣きながら盃を取り上げる。勝久注ぐ。森姫腹立てゝ

森姫　エヽモウ、それに泣く事があらうかいな。不思議にあなたと杯事。これも他生の縁ぢやと思つて、飲ましやんして、キリ／＼と、わたしが方へ下さんせ。わたしが飲んで又あなたの方へ、も一ツあげにやならぬわいな。

ト腹立てゝ云ふ。

園菊　サア、さう云はしやんすりや、そんなものぢやけれど、これが泣かずに居られうかいな。

ト泣いて飲む。勝久笑ひ

勝久　ハヽヽ。其やうに有り難がられては、とんと、此方、詞がないぢや。ドレ／＼、そんならその杯は、わしが一つ飲んで、其方へ。ハヽヽ。イヤ、こりやどうも云へぬ／＼。ハヽヽ。

ト杯を取上げる。

森姫　なんぢやえ。その杯をお前あがつて、アノわたしに、そりや嬉しいわいな／＼。こんな又嬉しい事が、どこの國にあらうかいな。

ト腹立てる。

勝久　さう嬉しくば献しもせい。ハヽヽ。

ト森姫へ杯を献す。

森姫　サア、嬉しい事の重なるやうに、こりや押へでござんす。

ト杯を戻す。

園菊　モシ、わたしがお合ひをしようかいな。

ト泣きながら云ふ。

森姫　なんの、合ひには及ばぬわいな……サア、お前上がつて。

ト銚子を取上げる。

勝久　飲まいでならうか。ハヽヽ。

園菊　どうぞお合ひを。

ト杯へ手をかけて泣く。

森姫　頼まぬといな。

勝久　ハヽヽ。

ト三人爭ひ、あちこちと杯をせり合ふ。トこの時、

ドンチヤン烈しく、向うより丹平、誂らへの形にて走り出て來り、花道にて

丹平　ハツ、御注進々々々。

ト これにて、勝久しやんとなつて

勝久　板取丹平、慌だしい、注進とは。

丹平　ハツ。

ト 辭儀しても、ノリ地の三味線なきゆゑ、顔を上げ見廻し思ひ入れ。

勝久　イヤサ、なんと〳〵。

ト これにて是非なく

丹平　ハツ、、、チン〳〵チ、チン〳〵〳〵ツンツンツンツンツテン〳〵、、、。

ト これより口三味線を彈きながら、ノリ地を語り、程よく下座にて、三味線をつける。矢張りドンチヤンの音。

されば御父、勝家公、かねて期したる一軍、先手は田熊玄蕃どの、敵の籠りし比良ケ嶽、尾崎の砦を押取り卷き、ドツとあげたるときの聲。チンチチチン〳〵テンツツルツトン〳〵。山も崩れ、湖もひつくり返りて、鰕、鯰鮒鯉の子も目を廻し、氣付けよ、針よと、ひらめく程に、おめき叫んで責め寄せる。ツトンツトン〳〵〳〵チンチ、チンツルテンツトン〳〵。敵もさるもの打つて出す、ツポン〳〵と鐵砲を、火傷するなと味方の勢、ムラ〳〵パツと逃げ出す。トン〳〵〳〵〳〵。その時、田熊玄蕃どの、むくりを沸やして大音聲、織なし續けと左に立ち、すつてん童子ぢやあるまいし、チ、チツツンテンツンツン、鐵の棒振りて戰ふうち、下知を受けたる岸部が勢、後へ廻つて一同に、鬨をつくつてエイ〳〵オウ、前後に挾んで合戰は、忽ち味方の勝ち軍、御注進とぞ云ひ捨てて、飛ぶが如くに駈けり行く。

ト 語りながら引返して向うへ入る。此うち三人、思ひ入れあつて

勝久　すりや、玄蕃には比良ケ嶽へ押寄せて、勝利を得しとは重疊ながら。

ト 案じるこなし。森姫、園菊、注進のうち、心附き思ひ入れ。

園菊　どう云ふ事で負けてぢややら。ついしか軍に。

ト 勝久と顔見合せ、思ひ入れ。

森姫　何は兎もあれ、眞柴の方が、負けたと聞かば嬉しうて。

園菊　エヽ。
　ト森姫、思ひ入れ。勝久、兩人を見て
勝久　ハテ……不思議や、今までありつる女。
　ト鼓を取つて一口諷ふと下座へ取り
　〽忽ち化性の姿を現はし或ひは巖に火焔を放ち。
　喜ぶ一人に愁ふる一人。イヤ、肝心の事聞かう。して、
　其方衆の、マア身元は。
兩人　サア、アノ、わたしは……これでござんす。
　ト合ひ方、森姫は香包み。園菊は有り合ふ吸ひ筒を出
　す。勝久、取つて
勝久　こりや、瓢箪に皐月の名香。
　ト開き見て、思ひ入れ。
森姫　モシ。
　トちやつと取つて懐中する。園菊、思ひ入れ。
園菊　それでも矢ッ張りわたしらが
森姫　戀の願ひを、
勝久　ハテ、一旦得心した上は、二言は云はぬ。
兩人　嬉しうござんす。
森姫　そのお詞が誠なら、認め置いたこの起證へ。
　ト起證を出す。園菊も起證を出して

園菊　わたしも茲に書いてある、この起證へ、勝久さま。
兩人　血判なされて下さりませ。
　ト兩方より出す。
勝久　ムウ、色に准へて某へ
　ト取つて兩方讀み下し
　和平の結びと父の仇、この勝久に力を盡して。
兩人　サア、心得たとある血判を。
勝久　イヤ、今はアッとは。
兩人　なんとえ。
勝久　返事は、それ／＼。
　ト鼓の調べを解き、胴と皮を別々に分け、起證を添へ
　て出し
　これが卽ち
兩人　返事とはえ。
　ト受取る。勝久、園菊に向ひ
勝久　鼓になぞらふ願ひの返事は、なるか、ならぬか。
　ト森姫へ向ひ
　打たすか、打つか。胸の調べを、とつくりと。
森姫　かけて三ッ地の、すりやその上。
園菊　結ぶか流すか、お返事を。

勝久　意地と急がず二人とも
森姫　晴れ間
園菊　待つ間の
勝久　マア、それまでは。
兩人　夜の紅葉を
　ト互ひにちよつと立ちかゝるを、勝久隔たる。
　詠めうかいな。
　ト唄になり、兩人思ひ入れあつて、森姫は上、園菊は下と別れて屋體の後へ入る。あと合ひ方。勝久殘り、思ひ入れ。
勝久　合點ゆかずと思ふに違はず、瓢を以て身の上を、それと知らせし作り瓢簞、佐柴が妹といふ事は、起證に書かせし和睦の結び。まつた、此方は春永公、皐月と名付けし蘭奢待、御秘藏ありしかど、本能寺にて御最期ありし砌りより、武智が重器となりける名香。それを所持なすあの女、起證の表は久吉を、力を合せ討たせことは、正しく逆臣光秀が……ハテ、優にやさしき心ぢやなア。
　ト思ひ入れ、この時後より丹藏、逸藏、市藏、坂藏、四天の形、銘々鎗を持ち、勝久を取卷き
四人　動くな。

勝久　こりや、某を何ゆゑに。
丹藏　ヤア、何ゆゑとは知れた事、武智が娘を引摺り込み
逸藏　久吉さまをぶッちめんと、事を計るも日頃から
市藏　佐柴と仲のよからぬ柴田。
坂藏　その勝家が忰の權六。
丹藏　武智が娘と、諸ともに
四人　討つて取るのだ。觀念なせ。
勝久　しや、事をかしき雜人ばら。武門の意味は兎も角も、我れに向つて尾籠の振舞ひ。キリ〳〵この場を立去るまいか。
四人　さう云ぢやア、斯うして
　ト突いてかゝる。
勝久　小癪な事を。
　トちよつと立廻つて
皆々　どつこい。
　トこれより誂らへの鳴り物になり、勝久、四人を相手によろしく立廻りあつて、トゞ屋體へ上がり、四人は下より鎗を構へて、ドッコイと見得。置き鼓になり、此まゝ道具ぶん廻す。吊り枝引き上げる。

本舞臺、三間の間、眞中に誂らへの地藏堂。左右、高藪、うしろ一面の黒幕。すべて、嵯峨北野の體、この道具に納まる。

ト烈しき双盤の鳴り物、バタ〳〵にて、向うより角兵衞、抱子を抱へ走り出る。後より小侍從、これを追うて出て來り、花道にて、ちよつと立廻り、舞臺へ來り、角兵衞を引きとめて

小侍　コリヤ、大切なる若君樣、何れへ伴ひ申すのぢや。

角兵　どこと云つたら、そんぢよそこ〻鷲が摑んだこの子悴、妨げせずと、そこ放せ。

小侍　イヽヤ、掛替へもなき、國のお世繼、滅多に渡してよいものか。サア、尋常に此方へ戻しや、

角兵　べら坊め。返す程なら連れちやア來ない。ならない事だ。キリ〳〵そこを。

ト振り切る。

小侍　イヤ、どこまでも。

ト支へる。また双盤になり、兩人少し立廻つて、はずみに角兵衞、小侍從を當て〻、さうだト下座へ走り入る。小侍從、心附き、それト同じく下座へ追うて入る。

トヒヨになり、日覆より以前の鷲、一卷を持つた儘舞つて出る。ト誂らへの鳴り物になり、光興、誂らへの形にて、軍藏を踏まへ、この鳥に目を附け、軍藏、黒四天、捕り手の形にて十手を持ち、光興に踏み敷かれ、この見得よろしく、舞臺眞中へセリ上げる。鳴り物打上げる。矢張り鳥は舞うて居る。トヒヨ、大小の合ひ方。軍藏、跳ね退け、うぬト打つてかゝるを、ちよつと立廻つて

光興　ハテ、訝かしい。時は三更、諸鳥樹木に雨を休め、塒に宿る折に望んで

ト軍藏、振り解いて又かゝるをよろしく

空に一羽の異なる鳥、聲を發して怪しの羽影、かけ交ふ體は聞き傳ふ、胡國の蘇武が雁にもあらず……思へば御主君、光秀公、御運の末か小栗栖にて、落命ありしその砌り、無念に凝りし一念の、黄鳥となり飛び去り給ふ。爰に飛行のあの鳥も、形は定かならねども、もしやはあの鳥、某に、示す一條あつての事か。何は兎もあれこの場の風情。不思議な事を見るものぢやなア。

ト此せりふのうち好き程に、軍藏かゝるを、立廻りながらよろしくあつて、せりふの止りに、軍藏をづつと

踏み殺して、キッと見得。この時、黄鳥、一卷を落して飛び去る。ゴンと時の鐘。この途端、上の方の藪疊より、森姫、以前の形の上へ簑笠にて藪より出る。光興、其まゝ一卷を取上げ見て、ムウと思ひ入れあつて、懷へ入れ、袖を拂つて行きかゝる。此うち森姫窺ひ居て、光興が行く所を、忍び寄つて後より鐺返しにする。光興、思ひがけず、向うへタヂ／＼として、しやんとなる。鐺を拂ふ。森姫、直ぐに又、これを引きとめ、兩人見得。この時、また時の鐘にて、園菊、以前の形の上簑、竹の笠にて藪疊を押しわけ出て、これを窺ふ。光興、森姫とちよつと立廻つて行かうとするを、園菊、ヅカ／＼出て向うを支へる。光興、思ひ入れ。兩人左右より光興が懷へ手をかける。光興、兩人を突き廻し、ギックリ思ひ入れ。兩人こなしゝこれより誂らへの凄き鳴り物になり、三人面白き立廻りになり、トゞ今の一卷を出し、兩人、サラ／＼と開き左右に別れる。

南無三と、その眞中を引ッ摑み、白刃を振り上げ、三人よろしき見得。この途端　拍子　幕

直ぐに前のツトメのツナギにて、この幕引返す

本舞臺、三間の間、木立、木の間々々、山の書割り。吊り枝よろしく、舞臺先に低き岩組み。この間より松杉の梢を見せ、すべて、比叡山半腹の體。爰に角兵衛、以前の形、幼な子を抱き、小侍從、これを引きとめて見得。禪のツトメ厳しく幕明く。ト兩人ちよつと立廻つて

角兵　エヽ、小意地の張つた。べんなごめ、爰まで追つてうしやアがつたな。

小侍　愚な事を。奈落の底へも後追うて、大切なるその若樣、取返さいで置くべきか。サア、速かに此方へ渡しや。

角兵　おきやアがれ。春忠どのゝ夜食の固まり、この三法師は、ちつと入用。うぬらに返してなるものか。邪魔をせずとも退きやアがれ。

小侍　イヽヤ、女の念力、是非とも此方へ。

ト取らうとする。

角兵　さうはならない。

ト振りほどいて行かうとする。小侍從支へる。幼な子泣き出す。この立廻りに取り外し、幼な子を前の谷間

へ取落し、兩人驚ろき

兩人　オ、、、、。

小侍　大事の〳〵若君樣。この谷底へ。オ、さうぢや。

ト身繕ひして飛び込まうとする。角兵衞、引きとめ

角兵　ドッコイ。うぬよりおれが先駈け。

ト飛ばうとする。

小侍　イヤ〳〵わしが。

ト支へる。

角兵　エ、、面倒な。

ト振り拂つて、直ぐに拔いて切りかゝる。小侍從も拔き合せ、これよりタテの鳴り物になり、兩人よろしく立廻りに双方手負ひ、トヾ互ひに、タヂ〳〵と後じさりして心附き、白刄を構へて兩人見得。これにて、チヨンと、此まゝ山幕を下ろし、前の梢を下へ引く。好き所へ無勒寺谷といふ榜示杭を出し、直ぐに大薩摩、淨瑠璃になり

〽傘谷花に醉へるの地、花また爰に古への、二木を移す返り咲き、紫銀杏と今も猶。

ト此の文句の切れに、ドロ〳〵になり、日覆より雲氣出る、と、引立つたる鳴り物に、山颪しになり、上の方に、五郎藏、仰山なる百日鬘、縞の大褞袍、丸絎け帶、手甲、股引にて、炮烙頭巾をのけぞりに被り、山刀を差し、鉞を引ッ擔ぎ、立ち身。こなたに、正淸、赤面、柿の上下、萠黃の着附け、市川流、吉例の形にて、今の幼な子を抱いて、岩組みに腰をかけ、この後に大銀杏の立ち木、誂らへの洞。この見得にて兩人を舞臺の眞中へセリ上げる。上より銀杏の吊り枝下りる。鳴り物打ち上げる。また大薩摩淨瑠璃。

〽賑はふ江戸繪ぞこれやらん。

ト淨瑠璃納まる。兩人キッと思ひ入れ。谺の合ひ方、矢張りドロ〳〵。

五郎　靑苔、衣に似て巖の肩にかゝり

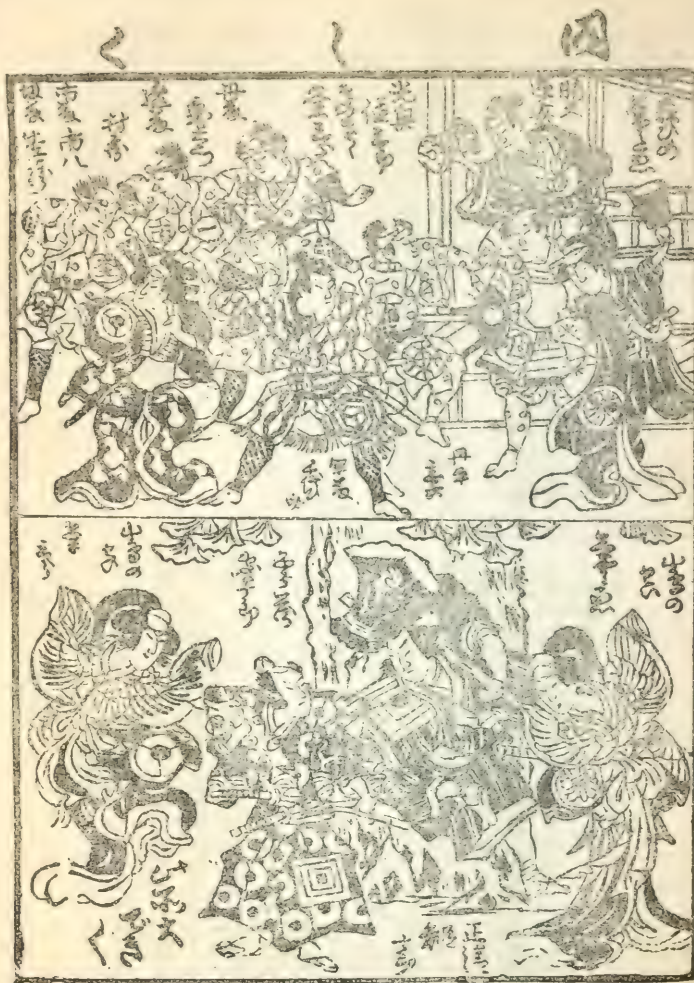
正淸　白雲、帶に似て、山の腰をめぐるとは、彼の樂天が詩なり。

五郎　その詩も時に合ふ、今一陽來復の始めに當つて、吹く風四方に雲を起す。

正淸　すべて、高貴の人の上には、常に紫雲靉靆なし、また赤色の雲の下には、英雄ありと兵書の敎へ。

五郎　すりや、雲を知るべに尋ね來た、さてはおことも。

正淸　何がなんと。

初演當時の繪番附

五郎　ハテ、云はば、そりやア毛唐人の寐言。取るに足らず。さは云へ、不思議はこの場の動搖。
正清　時に取つての善なるか。
五郎　但しは凶なるか。
正清　なんにもせよ
五郎　奇異なる
正清　雲の
兩人　振舞ひぢやなア。
　トどろ〳〵打上げ、雲は日覆へ引上げる。
五郎　何は兎もあれ、先祖よりして、この榮銀杏に住む事久し。我れ二年他國にありしなれども、今また歸つて爰に住ふ。それを尋ねて來る者は、猿猴、狐のその外には、人間の通ふべき所でないに、赤いお爺、こなさまは、どこから來た。
正清　どこと云つたら難波津から、この春當地へ歸り新參。主君は天を父となし、地を母となす獨歩の大將。眞柴久吉が忠臣たる、佐藤虎之助正清。して、おぬしが名は、なんと云ふ。
五郎　わしやア山賤。愛宕、岩倉、比良ヶ嶽、山々を經めぐつて、兎狸は云ふに及ばず、いつぞやも山鳥の番ひをば。
正清　ナニ山鳥の、
　ト思ひ入れ。五郎藏、こなしあつて
五郎　イエサ、山鯨でも狼でも、見附けるが最後、叩き殺して賣つてやるのが、わしが商賣。獵人もしますのサ。
　ト此うち、正清、目を附け居て
正清　ハテ、そりや小氣味の好い商賣な。定めし兩親もあらうな。そして、お身が名は、マア、なんと云ふぞ。
五郎　イエ、父親は行くへが知れず、母親の顏は覺えて居りますが、先づ年は七十位に見え、髮はおどろ、長さは丈に等しく、白金の針の如くの白髮、木の葉を以て衣とし、山また山を驅けめぐれば、わしが友達は熊や猪猿ばつかり。阿母も揚句の果には、雲に乘つてどこへやら行きましたゆゑ、この銀杏の木の洞が、わしが住家。または岩を掘り拔いて住むゆゑ、巖窟の五郎藏と云ひます。
正清　ハテナ、そんならわれが少さい時の名は、金太郎とは云はなんだか。
五郎　おかつしやいな。
　ト此うち、幼な子泣き出す。正清が懷を濡らせし思ひ入れ。

正清　こりや堪らぬ。膝を臺なしにしをつた。

ト赤子に、シイをやらこなし。五郎藏見て

五郎　ほんに、この侍ひ樣は、男のお乳母をさつしやりますな。

正清　イヤ〳〵、こりや今爰へ來る道、崖から何やら落ち來るゆゑ、岩かと思つて手に受ければ、コレこの幼な子。捨て置いては不便な事と、そこで斯うして。

五郎　イヤ、子供の守りも小面倒なもの。シタガ、こなさまは下地があるかして、大分巧者だ。

正清　なんの〳〵、ひよんな所へ通り合せ、子供抱いたは今日が始めて。

五郎　イエ〳〵、さうでもござんすまい。現在主人の久吉どのも、今でこそ、えらい者だが、丁稚の時分は守り奉公。その家來なら子を抱く術は、知らつしやらないで、どうするものか。

正清　ナ、なんと云ふ。

ト思ひ入れ。

五郎　さればサ。その守り奉公の昔を忘れて、取立てられた小田の天下を盜まうとする、横着者、久吉は道知らずだ。

正清　イ、ヤ、道知らとずは武智光秀。糧に盡きたる以前を忘れ、大恩ある春永公を、討ち奉つた主殺し。天罰遁がれず山崎にて、久吉の爲に滅亡。すりや、武智こそ道知らずだ。

五郎　イ、ヤ、光秀どのゝ主を討つたは、武士の上で止む事なさ。弔ひ軍と名をくつつけ、好い子の顏で天下を盜む、久吉は道知らずだ。

正清　イ、ヤ、武智が道知らずだ。

五郎　イ、ヤ、久吉が道知らずだ。

ト互ひに爭ひ

兩人　なにを。

ト双方立ちかゝる。思ひ入れあつて

五郎　フ、

正清　へ、。

兩人　ハ、、、。

五郎　なんの役にも立たない事を。

兩人　いかい、白痴な。

トこの時、また幼な子泣き出す。

正清　オ、、誰がよ〳〵。

トいぶりつけても矢張り泣くゆゑ

コレ〱、好い物見せうぞ。泣くな〱。
ト云ひながら懐より、團十郎、鰕十郎の錦繪を出し
ソリヤ〱、團十々々。
トふらつかせて見せる。これにて幼な子泣き止む。此うち、五郎藏、摺火打ちを打つて煙草をのみ、これを見て
五郎　そりや、なんでごんすな。
正清　こりやア土産にと求めて來た、堺町の顔見世狂言、團十郎と鰕十郎が、似顔の錦繪ぢやて。
五郎　ヘエ、わしや、こんな山中に引ッ込んで居て、久しく芝居の噂も聞きませぬが、そんなら團十郎は、堺町へ來ましたかな。
正清　サア、今年は歸り花ぢやと云うて、イヤモ、町ではきつい評判。
五郎　エ、ナニ、あの野郎め、人樣のおつもりも知らず、うぬ一人面白がつて、無性矢鱈に出かけやアがる。盲目蛇とは彼奴が事だ。ちつと誰れぞ意見をしてやりやアようごんすな。
正清　イヤ〱、又さうばかり云つたものでもないて。
五郎　そんなら大方、鰕十郎も來ましたらうな。
正清　さればサ、なんの來居らいでもよい事を。團十郎と一緒にうせたげな。
五郎　それぢやア見に行く氣があるわえ。
トこなし。
正清　イヤモウ、思へば役者といふ者も、丁度同じ事。戰國に討ち立てられて、主君の仇を報はんなぞと、爰やかしこに逃げ隱れて、さま〲に形を替へ、折を窺ふ素浪人。
五郎　どうしたと、
ト思ひ入れ。
正清　と、サア、同なじやうな役者の身の上。或ひは木樵山賤と、姿をやつし人の目を。
五郎　誰れが。
正清　イヤサ、この役者の團十郎が。
ト今の錦繪を持つて思ひ入れ。五郎藏もこなし。
その又團十郎に好く似たる、武智左馬之助と云ふ奴、山鳥の雌雄の血を取つて、燒刃に流し、その劍を帶する時は、人、必らず、山鳥の仇心に引かれ、馴れ親み、一味同心なすを以て、謀叛を起し、久吉公を狙ふとやらいふ沙汰もあれど、へ、、いらざる事を。なんとして。止め

ろ、止まれ。叶はぬ事だ。

ト此うち、五郎藏、思ひ入れあつて

五郎　イヽヤ、止めない、止まらない。一旦思ひ立つたる大望。屍は馬蹄に穢すとも、大丈夫、なんぞ志しを止めんや。久吉が首を討つて見せうワ。

正清　どうして／＼、猿猴が月、及ばぬ事だ。

五郎　及ばぬ所を、取つて見せう。

正清　そりやア、見事。

五郎　なんでもない事。

正清　そりや又どうして。

五郎　おれが斯うして。

ト山刀を抜きかける。ドロ／＼になり、上下の切り穴よりお菊、お粂、山鳥の形にてセリ上がる。正清支へる。立廻り、お菊、お粂、五郎藏が側へ來る。この時五郎藏、振り切つてヒラリと抜く。正清、思ひ入れ。兩人、左右へパッと飛び退く。この途端、チョンと木の頭。五郎藏。白刃を構へ、正清、肘を押へ、兩人キッと見得。お菊・お粂は羽ばたきをする。この模様薄ドロ／＼にて、拍子

幕

猿若瓢軍配（終り）

花の咲く日は
浮かれこそすれ

一樹蔭雪錵――山鳥

前の「小倉山」と同じく、「猿若瓢軍配」の浄瑠璃で、大切に出したものである。前の無勒寺谷でちよつと山鳥を見せたのは、この浄瑠璃の伏線なので、左馬之助が味方を集める爲に山鳥の番ひを殺してその血を刃へ塗つた、その山鳥の子鳥が左馬之助に仇をするといふ、顔見世にはよくある筋である。この浄瑠璃の前に「大坂難波福島屋の場」があつて、左馬之助が修行者雲瀧と假名して宿泊する。福島屋清兵衛實は片桐助作といろ／＼探り合ひの筋がある。その跡で歌舞伎十八番を象つた「鎌髭」があるのである。しまひにこの浄瑠璃になる。詞章の作者は三世櫻田治助、常磐津は造酒太夫と岸澤古式部、振附は市山七十郎。役割は、左馬之助（七世市川團十郎）お粂（岩井粂三郎）お菊（五世瀨川菊之丞）直盛（市川鰕十郎）行長（嵐徳三郎）であつた。

一樹陰雪隺（山鳥）

難波福島屋庭先の場

役名——修行者、實ハ武智左馬之助光俊。仲居、お菊實ハ山鳥の精。仲居、お粂實ハ山鳥の精。片桐助作直盛。小西彌十郎行長。

常磐津連中

本舞臺、三間の間、一面の柴垣。上の方に振り好き早咲きの紅梅枝、梁一ぱいに見事に茂らせ、下の方、庭木の松二三本、この松が枝より梅の枝へ紙帳を吊り、側に笈佛、福島屋といふ掛け行燈。こなたの土火鉢に燗鍋かけてあり、舞臺先、雪板。樹木へもどつさり雪を積らせ、すべて、福島屋庭の體。この柴垣の上に常磐津連中居並び、誂らへの前彈きにて道具納まる。

ト此うち、ドロ〳〵にて、直ぐに淨瑠璃になる。

〽常磐津の松にも花ぞ咲きにけり、雪の顏見世寒からで、爰に一個の大丈夫、武智左馬之助光俊は、豫讓が昔思ひ寐の、うたゝ枕の中空に。

トこの淨瑠璃の切れに、紙帳の正面を破り、左馬之助顏を出し魂ひを見上げて、キッと見得。管弦やうなる鳴り物になる。始終ドロ〳〵。

左馬　アヽラ、怪しや。我れ亡き君の仇を散ぜんと、姿を窶し、國々經廻り、爰にまろ寐を物音に、目覺めて見れば、アレ〳〵〳〵。一ツの心火、飄然と、たゆとふ風情心得ぬ。察するところ、此うちに、忍び在する森姫君、父光秀が欝憤と、思ふ存念いたづらに、さては空しき玉の緒なるか。ハテ、忌はしや、忌々しやなア。

ト魂ひを見て思ひ入れ。これにて、日覆へ引いて取る。ドロ〳〵打上げる。鳴り物消す。左馬之助、思ひ入れあつて。

よし〳〵。某あれば姫君の、御憤りもとも〳〵に、晴らさせ申さん。南無阿彌陀佛々々々々々。

ト此せりふ云ひながら舞臺へ出る。本調子の合ひ方。

ア、大分寒くなつて來た。幸ひ〳〵、この土火鉢へ乘

せて置いた。
ト ちよつと燗鍋へ手を翳し見て
丁度燗も雪見酒、……ドレ、こいつを引ツかけ、もう一寢入り。
ト有り合ふ杯にて手酌に呑む。トこの時、飛び石の上へ山鳥、二羽、飛び來る。左馬之助、これを見て。
ハテ、合點のゆかない。爰は繁華な色里の庭。鳶、烏でもある事か、山鳥來つて人も恐れず。ムウ、……何しろ燒鳥にして酒の肴。ドレ、ぶツちめて
ト錫杖を取つて立ちかゝる。ドロ／＼。山鳥飛び廻る。これにて左馬之助、放心して錫杖を持つたまゝ、タヂ／＼となり、ドン／＼と飛び石へ尻居になる。山鳥は飛んで上下の切り穴へ入る。ドロ／＼止む。淨瑠璃。
〽鏡影まさに、あり／＼と、姿派手なる友鳥の。
ト淸搔のやうなる合ひ方になり、今の切り穴よりお菊、お粂、對の仲居の形、赤前垂れ、駒下駄にて肩へ手拭をかけ、お菊は濱村屋といふ浚り提灯、お粂は大和屋といふ同じく提灯を持ち、立ち身にてセリ上げる。淨瑠璃。

〽お菊、お粂と名に呼ばれ、お客さん方女郎衆の、もつれた譯や杯の、仲居が、爰で取捌き、ぐつと江戸づけ合の手に〽鳥籠を一つに里の迎ひ駕籠、別れは愚痴の始まりか、何が粹やら不粹やら〽いつもめれんに形振りも、ほら／＼ものぞ艶めかし。
トこの文句にて兩人、花道へ行き、よろしく振りあつて舞臺へ戻る。ト掠めて、ドロ／＼。左馬之助心付き、兩人を見て
左馬　見りやア、宵からこの内に、見かけぬ二人。どこから來た。
きく　オヽ怖。アノわたし等は
くめ　お前の迎ひに。
兩人　中から來やんしたわいな
左馬　ナニ、おれを迎ひに、新町からこの堀江へ。
兩人　お敵が待つてござんすわいな。
左馬　なんだ、敵が待つて居る。
兩人　サア、その先がけに。
左馬　どうしたと。
ト淨瑠璃になる。
〽既に手だれの御大將、器量も至極天王山、待ち設けた

る太夫職、瓢箪町の馬印、備へを堅めし仲居より、手柄は仕掛ちと先がけに、酒の兵者、前垂れの、緋縮ならぬ緋縮緬、しつかと引きしめ駿足の、駒下駄ひらりと打乗つて、爰へ通ひの色上戸、來て見よかしの女武者。

ト これより伊勢音頭になる。

〽五三の桐と唐紙の、引き手離れぬ約束の、起證の筆も替らじと、よい〳〵〳〵〳〵よんやさ、破らぬ心見てとつて今日は互ひの交杯、儀な世帶を樂しみに、よい〳〵よい〳〵よんやさ、〽サア、お出いなと手を取れば。

ト 左右より左馬之助の手を取る。左馬之助、振り放して

左馬 イヽヤ、行くまい。マア、合點がゆかない。成る程、その古へは新町へ行つた事もあつたが、今ぢやア世を捨てた、六十六部。

きく その六部さんぢやに依つて、志しの逮夜ゆゑ、身揚がりをして太夫さんが

くめ 御供養が申したいと、それでアノお迎ひに。

四人 なんであらうと、ござんせいな。

左馬 さう云ふ事なら行きもせうが、今ぢやア大方新町も。

きく イエモウ、廓の中へ、揚弓見世が出來るやら

くめ また去年の春からは、江戸吉原同然に、九軒へ櫻を。

左馬 ナニ、九軒町へ櫻を植ゑた……花の咲く日は浮かれこそすれ、そりやアさぞ賑やかであつたらうな。

きく 賑やかどころか、それは〳〵、日頃に増さる人の山。

くめ 太夫、天神、とり〴〵に、色香爭ふ道中に

左馬 群れ來る客のその中には

きく 寛濶羽織、伊達小袖。

くめ よしや男と夕日榮え。

左馬 大小さすが風流に。

ト 此せりふのうち、左馬之助、段々乘りて錫杖と梅の枝を持つて大小に差す。これより津島になり、左馬之助、六法を振り、少し花道の方へ行かうとして心附き。

氣が違つたさうな。

ト 思ひ入れ。清搔になり、お菊、小褄を取り、お粂、錫杖に六部の笠をつけ、これを、お菊にさしかけて花道へ行き、しやんと見得。

〽梅の難波に櫻を植ゑて、柳が歩む風俗は、誰れに靡かん戀風に。

ト よろしく舞臺へ來る。

初演の繪番附

初演の錦番附

〽揚屋は花の大一座、鸚鵡顛才鶯の、次兵衛が機嫌とりどりに。

ト お菊、振りになる。

〽櫻見よとて名を附けて、先づ朝櫻、夕櫻、よい夜櫻は間夫の晝ぢやといな、エヽどうなと首尾して逢はしやんせ、何時ぢや、引け過ぎぢや、たそや行燈、ちらり／＼と鐵棒引。

ト お粂、振りになる。

〽ちよいと來なさい〽瞽女が三味彈き出ざ、耳を引き、袖を引き、えんやらうんと車引き、大根引き、二度の勤めは眉毛引き、月見にや臼引き鼠引き、ちり／＼ちんばも引くかいな〽隣り座敷は大口舌、そりやマアなんの。

ト お菊、お粂の胸倉を取り、クドキになる。

〽事おやいな、何腹立てゝ今頃に、ほどいた帶を〆め直し、歸る心か憎らしい、これ一見のその夜から、馴染みの客が嫌になり、きつしりさまのけなかいの、置き錢ぢやのと嬲られて、云うてもおくれな、小夜嵐、辛い顏して嬉しさは、他所に知られぬ床の內、こんな縁が唐にもあろかいな〽えゝ、そんな古手は蘭八で、夕霧時代の掛け詞、その手はくはぬと突き退けて、行かんとするを引きとめる、爭ひ聞きつけ、花車仲居。

ト 左馬之助、この中へ入り、双方取りさへる。この時向うにて、ドンと遠寄せになる。左馬之助、ギックリして

左馬　あの遠寄せは

ト 思ひ入れ。この時、お菊、お粂、左右よりムッと立ちかゝるを、突き退けて

何をするのだ。

ト 兩人、思ひ入れあつて

菊粂　サア、これは。

ト 早踊りになる。

〽色と立つ名にた、誠があらば、眞實それを樂しみに、辛い勤めも何苦界とは、知らず思はで年明けの春、末に女夫の縁結び、ほんになア。

ト 三人よろしく、此うち矢張り、ドン／＼。左馬之助、思ひ入れあつて

左馬　合點のゆかない二人の女。うぬ等は只の仲居ぢやアあるまいがな。

きく　イヤ、我れ／＼が身の上より

くめ　其方の本名

兩人　速かに
左馬　名乘れと吐かさば何恐れ、包み隱さん、我れこそは、惟任どのゝ股肱と呼ばれし、武智左馬之助光俊なるワ。
ト頭巾を脫つて、キツと見得。
兩人　さてこそな。
左馬　サア、我が本名を名乘りし上は、うぬ等が俗性明かすまいか。
トどろ〳〵になり、兩人引拔き、山鳥の形になる。左馬之助、杖を取つて思ひ入れ。鼓唄になる。
〽それ貪着の深き事、人間よりも鳥類の、悲しさ積り山鳥の、おのが親鳥無慘にも、刃にかけしその恨み、報はん爲に來りたり。
なんと。
〽雌雄にあらねど姉妹、おろの鏡と互ひの姿、見せつ、見やりつ啼き明かし、尾上隔てゝ焦れて寄つて、父鳥床し、母鳥と、木々の木の間やしだり尾の、長き夜すがも根笹原、嫉ね葉へどその甲斐も、あら情なやと怒り毛を、振り亂してぞ立ちまどふ。
ト兩人いろ〳〵あつて、左馬之助に立寄る。
さてこそ二人は大望の、便りにせんと血汐を取り、燒刃にわたせし山鳥の、子鳥どもめが形を變じ、我れに恨みをなさんとや。しや、鳥類の分際で、ナニ小ざかしい。早立ち去れ。飛ばにやア二羽とも、喰つてしまふぞ。
菊糸　イヤ、恨まいで置くべきか。
左馬　小癪な事を。
ト淨瑠璃。始終ドロ〳〵。
〽はつたと睨む勢ひに、恐れて飛び去り又、むら〳〵、光俊ひらりと切りかゝれば、翅を立てゝ虛空をかけ、拂へば飛び交ふ羽風につれ、雪風どう〳〵さら〳〵〳〵、追へど拂へど去りやらぬ、念慮の程こそ。
ト此うち、兩人、梅の枝を持ち、立ちかゝる。左馬之助、仕込みを拔いて切り拂ふ。よろしく立廻りに花道まで押して行き、また舞臺へ立戻つて、しやんと、見得。この時、下座にて
直盛　ヤア〳〵、武智左馬之助へ、片岡直盛、見參々々。
左馬　何がなんと。
ト思ひ入れ。鼓の合ひ方。下座より、直盛、行長、脫ぎかけ、大小の形にて出て來る。左馬之助見て
ムウ、思ふに違はず眞柴が家來の、直盛めであつたよな。すりや最前からの遠寄せは。

初演當時發行の錦繪

七世市川團十郎の左馬之助　五世瀬川菊之丞の山鳥の精

直盛　オヽ、某爰にありながら、さまで及ばぬ事なれども、汝を取卷く一味の手配り。

左馬　して又、こちらの素町人、大小手挾み、そんなら、うぬも。

行長　ホウ。小西與十郎の名を其まゝ、行長と姓名下され、今よりしては眞柴の昵懇、手柄始めに其力を。

直盛　ヤレ、待たれよ。この場で搦め捕らんずなれど、忠義に愛でゝ一旦は、見遁がしやるも武士の情。

行長　イカサマ、例左馬之助、どれ程に逸るとも、討取らんな、いと易し。

直盛　光俊、疾くへ

直行　退参おしやれ。

左馬　ヤア、口强情な弱蟲めら、眞柴の軍勢、何程にて、取圍むとも恐れんや。某一人が百萬騎と、久吉に云ひ傳へろ。

直行　廣言吐かずと、キリ〳〵この場を。

きく　たとへ、見遁がしあるとても

くめ　我れ〳〵此まゝ

兩人　置くべきや。

左馬　小癪な奴の。

〽惠みに榮ふ千代八千代、萬々歲とぞ祝しける。

ト皆々、ちよつと立廻りあつて、三段の上に、お菊、お粂。下に、左馬之助。左右より直盛、行長、詰め寄せ、下座よりバラ〳〵と軍兵大勢出て、棹に並び、皆皆どつこいト見得。段切れ打ち上げる。

先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し。

一樹蔭雪僊（終り）

獅子頭牡丹蝶衛――曾我祭

曾我祭といふのは江戸芝居年中行事の一で、毎年正月には曾我兄弟の狂言を演じる習慣から、五月二十八日の討入の當日には曾我兄弟の靈を芝居で祀り、もし大入の時は、別に舞臺へも曾我祭の舞踊を出すのであつた。曾我祭の所作は種々な形式で殘つてゐるが、「一勢獅子」もその一つである。別項の「姿花鳥居の色彩」なぞも御參照願ひたい。この所作は、元治元年四月の中村座に出來たもので、曾我の夜討に續く趣向で、最初は「捕素顏練子の戯」といふ題が附いてゐたが、看板は本名題のやうに上がつた。さうして、まだ舞臺へ現はれぬうちに芝居が燒けてしまつたので、遂に上演を見ずに終つた淨瑠璃である。作者は三世櫻田治助、常磐津は文中、振附は藤間勘右衛門。役者は、吾作が坂東彦三郎、權次が河原崎權十郎、おやまが岩井粂若、鶴吉が中村鶴藏で、準備は整うたが闇へ葬むられてしまつた。

「一勢獅子」を稍原拵したやうな淨瑠璃で、所謂る「曾我祭」の所作である。

獅子頭牡丹蝶鳥（曾我祭）

曾我祭の場

役名――手古舞ひ、音作。同、權次。同、おむら
世話人、鶴吉。

常磐津連中

神輿太鼓になり、道具幕外、商人の仕出し出て、口上觸れあつて入る。切つて落す。

本舞臺、ズッと奥へ入れて、高足高欄付きの御假家四方に青竹の注連を張り、正面に鍍金金物、本塗りの神輿二體据ゑ、供物、燈明、軒提灯をかけ、好き所へ金獅子の頭一對、飾り立て、舞臺前、日覆より、曾我中村御祭禮と記せし大提灯七つ、四季の花をタツプリ打つたる枠を吊り下ろし、上の方、軒幕、毛氈、手摺り付きの祭り棧敷。下の方、同じく、向う金屏風と見ゆる張り物、軒幕、毛氈、爰に常磐津連中居並び、直ぐに前彈きになり、道具納まる。

〽宮柱、太しく建てる御代の名も、久しき君が四つの歳、皐月はたちと八つの日を、祝ひ壽ぐ俳優の、曾我中村座神いさめ。

ト誂らへの鳴り物になり、おむら、若衆手古舞ひ、好みの拵らへ、鐵棒を突き、立ち身、下に音松、着流し袴、祭り世話人の拵らへ、床几にかゝり柝を持ち居る見得よろしく、舞臺眞中へセり上げる。

〽男なりけり女とも、また三つ扇世話役に、目差しの鶴と引出され、よい拍子木の音高く。

トちよつとあつて、向うの方へ思ひ入れあつて、拍子木を打つ。これにて揚げ幕より、左右へ肩獅子を結びし底抜け屋臺、内に袴着流しの囃子連中、渡り拍子を打ち、定役の紺看板、牡丹笠、柿の脚絆にて、屋臺を持ち出て來る。少し後より鶴吉、祭り受負ひの拵らへ裁付けにて、足早に出て、後を延び上がり見い／＼、囃子を急き立て、舞臺へ來る。直ぐに底抜けは上手へ横に直し打上げる。鶴吉、ウロ／＼して又向うへ行か

うとする。

晋作　すイ〳〵、舞鶴屋、どこへ行くのだ。

むら　最前から待ち焦れて居たわいな。

鶴吉　イエ、大きに遅うなりました。辨當がどこへ間違つたか、行き渡りませんで、あちらの世話燒き衆には叱られ、子供のお母アには劍突を喰ひ、モウ〳〵、祭りの受負ひは懲り〳〵致しました。

晋作　巧く云ひ廻すぜえ。間に合はねえ筈だ。四百人前の辨當を、二百人前、お前が呑んだと云ふ噂だぜ。

鶴吉　なんぼわたしだとて、さう呑めるものか。

むら　それで、あんまりづるやと云ふ家名かえ。

鶴吉　お前まで苛めなくてもよい。何しろ踊り屋臺を。

晋作　なんのかのと云つて、小路隱れかするのだらう。そりやアならねえ。先刻から御見物がお待兼ねだ。直ぐに踊らつせえ。

鶴吉　畏りました。直に屋臺を。

晋作　ドッコイならねえ。

鶴吉　それでも、わたしが迎ひに行かにやア。

晋作　イヤ〳〵、子供は又後でいゝから、お前、爰で踊んねえ

鶴吉　そりやア御無理だ。

晋作　なぜ〳〵。一式請負つて、振りもお前が付けたぢやアねえか。

むら　ほんに、こりやア好い思ひ付きでござんす。わたしや子供より、お師匠さんのが見たいわいな。

鶴吉　お前まで、そんな無理な事を。

晋作　サア〳〵、所望だ〳〵。

ト拍子木を打つ。これにて片シヤギリちよつとあつて打ち上げる。鶴吉、餘儀なき思ひ入れ。

〽雪やこん〳〵霰はこん〳〵、足の冷たに草履買うてたもれ、大寒小寒、猿のべゞ買つて着しよ、爰までござれつて、手車に乘せて、爰へ〳〵と招く手に、根笹萱原くゞり潜つて、松の木影で隱れんぼ。

トまた片シヤギリになり、後かすめて渡り拍子。

鶴吉　とんだ災難に合ふもんだ。

晋作　愚痴をこぼすめえ。その穴埋めに、神酒を開いて、大和屋と酒盛りをさせるワ。

むら　直ぐにそれが祝言の杯。必らず見捨てゝおくれでないよ。

鶴吉　なんの見捨てよいものかいなう。

「勢獅子」の錦繪　坂東彦三郎の鳶の者

この錦繪は狂言は違ひますが全然同系同種の舞踊ですから見本に入れました

尾上菊次郎の藝者　　市川小團次の鳶の者

トこなしにて云ひ
オイ〳〵、冗談とは云はせねえよ。
音作　ハテマア、杯をした上の事だらうぢやアねえか。
ト此うち　おむら、側の酒肴を床几へ出し、酒盛りになる。向う揚げ幕にて
權次　うしやアがれ〳〵。
〽番附を、賣るも祭りの俠ひ肌、ツッけんどんな譯道を竪に行く先横筋交ひに、出合ひ頭の胸づくし、取つたか見たかそつぽうを、寄せては返し二つ三つ、浪のうつゝの千鳥足。
トこの淨瑠璃のうち、向うより、權次、着流し、肌脱ぎかけ、好みの拵らへにて、酒に醉ひたる思ひ入れ。番附賣りの胸倉を取り出て、淨瑠璃一杯に立廻つて、トゞ投げ返す。
番附　うぬ、見やアがれ。
權次　どうしたと。
番附　アヽ、ムウ、山崎屋ア。
ト一散に逃げて引返し入る。あと見送り
〽逃げる奴は構ふな、よんやさ〽つい醉ひまして遲なはり、やう〳〵只今三升と、口合ひ交り來りける。

音作　どこへ穴ツ入りをして居た。待ち切つて居らア。
鶴吉　ついぞ色をしたと云ふ噂も聞かねえ。よく〳〵御緣遠いと見えます。
むら　お前のやうに御緣近いのも困るねえホヽヽ。
權次　さう云へば今し方、新道で逢つたが、いつ見ても美しいなア。
音作　美しくつてもお庭の櫻だ。イヤ、櫻と云へば花盡しの、端唄が出來たぢやアねえか。おむらさん、ちよつぴりやつて聞かせねえ。
むら　アレ、わたしより權さんが、よく覺えてお出でだものを。
鶴吉　これサ、お前は商賣ぢやアねえか。
權次　サア〳〵、やつたり〳〵。
〽今日は今日の、風に任せる柳橋、上手へ船の約束の、日柄を無理に八重櫻、藤にかゝつた口とはいへど、なんと云譯夏木立、たんとお茂り嬉しさは、葉隱れ櫻と當て事は、粹に利かせて花茨、しみ〳〵辛いぢやないかいな、實に苦界ぢやないかいな。
トおむら、立ち上がり、よき程に、權次も共に入つて納まる。音作、扇を構へ前へ出て

〽その苦界も川竹の、根ごして誘ふ水あらば、いなおふせ鳥百千鳥、思惑留めて裏茶屋へ、通ふ禿が呼子鳥、これぞ眞和賀三箇の秘事。〽笑うてつらく腹立て〻、可愛さばかりいやそつて、そして、泣いて嬉しい首尾もあり、心盡して書き送る、文も披かず其ま〻に、捨てらる〻とは知りながら、諦められぬ身の因果と、膝に縋りて忍び泣く。〽襖洩聞く耳立ちつ居つ、さては間に立ち登る、煙りを餘所に吹きそらし、煙管に當りはつたばた、屏風蹴立て〻駆け出すを。〽あれ聞分けのない、どうぞいな、この入り譯を昨夜から、よう合點してゐなんして、主に似合はぬひぞり言。

〽さらにお邪魔は此方と、行かんとするを〽これ待つた〽いや、愛を〽なんの放さう去なしやせぬ、勤めの憂さを打越して、心明かして二世までと、誓ひを立てたは只一人、可愛いと思うてくれ〳〵も、約束したを今更に、疑ひ立て〻別れたりや、初手の誠も嘘になり、初めのうはの空言も、眞が通らば添ひ遂ぐると、云ひ並べたる間夫と客、いづれ落着のなき詰め開き。

ト此うち、鶴吉、淺黄手拭を頭巾のやうに被り、側の拍子木を木魚のやうに叩き、煙管片手に立ちかゝり

〽おんあぼきやア、べえろしやなア、こりや無駄な女郎衆の述懐、越後の國から六つでお出やり、七つ泣く泣く禿に賣られて、酌をしながらぼく〳〵居睡り、どんぶりこぼして煙管で叩かれ、遣り手に抓られ辛抱ない餘りに、早く女郎になりたく思つて、見世へは出たれど辛苦の悲しさ、小粋なお客はけもないか〻らず、親仁に責められ盲目にいびられ、莨の火がない熱い湯を汲んで來い、夜の目も合はずにやう〳〵空き部屋、受取りやその跡襖の張り替へ、襖の替へ時仕着せの遣り繰り、しみ〳〵辛さを山々文にて、眞實見せたらお客は呑み込み、紋日に請け込み移り替への苦勞なく、小遣ひ氣を付け云ふなり次第に、なんでも臆さ夜更けにござつて、夜中に戻つて好いた男なら、買つてもゐやれと金もしこたま、明くる日早々やおあを呼び寄せ、幾日も居續け下では咎めず、遣り手も見ぬ顔夢なら覺めるな、こいつは又妙ではあるまいか〽後は木遣りに浮れ立ち。

トよろしく納まる。權次、音作、祭り扇をかざし、前へ出る。

〽えゝ、よい〳〵よい聲かけやれ〽小栗判官兼氏どのは

〽よい〳〵お馬乘りが名人で、乗つて駈けるとて腰の骨

をにやした、にやしたこやしたごんゑむしよ、さアなれど仕合せは大坂天満の喜三郎膏薬は、一貝が六文で、半貝は買つて付けたれば、癒りや癒つたがかんきんすんきん、炭取り瓢のかけでもねえが、づべ〳〵とつつ禿げた、禿げた頭へ蠅が三疋とまつた、とまりやとまつたが、中の蠅めは田舎育ちか、不調法な蠅めでな、飛んで逃げるとてすてんぺんをにやした、にやしたこやしたこんゑむしよ、なれど仕合せは三益坊が駈け付けて、捕つて押へてけんぴき元から灸するゑた、さア蠅にけんぴきなア、蚊の脛に三里とは、これより以て始まつた、よい〳〵よんいやな〽よい仲々の蝶番ひ、

ト兩人、よろしくあつて納まる。直ぐにおむら、金地扇二つ持つて前へ出て

〽夕べ朝の粧ひも、覺むれば姿水の月。

ト合ひ方、よき程に、權次も對の扇を持ち、前へ出て

〽手にも取られず、蝶の吹雪の、ひらりひら〳〵〳〵、長閑けき空にしづ心なの〽花に對して入相を。

〽暫らく待たせ給へや。

ト此うち、音作、鶴吉、獅子の支度あつて、前へ出る

〽時を感じて牡丹の花の、咲きや亂れて風にちり〳〵散りかゝる、花の露そひ〽獅子の頭を項垂れ〽女夫の蝶の、ともに狂ふや、谷を隔てゝ彼方へひらり、こなたへひらり〽舞ひ遊ぶ〽實に上もなき獅子王の勢ひ、大日本の一丁目、譽我とぞ祝しける、譽を代々に殘しけり。

ト狂ひ十分にあつて

音作　先づ今日はこれぎり。

トめでたく打出し。

幕

獅子頭牡丹蝶衙（終り）

色世夕告鳥

にはとり

享和二年十一月、市村座の顔見世狂言「當奥州壺碑」の四建目淨瑠璃で、初世、並木五瓶の作である。吉例の通り、殿様とお姫様の色もやう、それへ物賣りが搦み、後に謀叛人の見出し、また物の精が惡人に仇なする。この行き方は、顔見世淨瑠璃の型であつて、平凡ではあるが、その型の中に又一種、五瓶らしい機智のひらめきも見える。鷄の狂ひなぞ目新らしくて當時は受けたものである。「義家奥州攻」を世界に取つただけに、錦木賣りを出したり、常陸帶賣りを出したところが面白い。この時の富本は豐前太夫に三保崎兵助、振附は市山七十郎、役割は、義家と雄鷄の精が澤村源之助、名月姫が瀬川路之助、錦木賣り實は鹿島義連が三世市川八百藏、荒川太郎が岩井喜代太郎、帶賣り實は左枝と、雌鷄の精が岩井粂三郎であつた。

色世夕告鳥（にはとり）

義家假御殿の場

宮本連中

役名――八幡太郎義家、匡房娘、名月姫。荒川太郎武貞。錦木賣り、市兵衛實ハ鄭島三郎義連。常陸帶賣り、おこと實ハ久清妹左枝。忍び、鬼夜叉。同、瀧夜叉。沼太郎久清亡魂實ハ雄鶏の精。久清妻松波亡魂實ハ雌鶏の精。

本舞臺、三間の間、高足、これに富本連中居並び・上の方、結構なる高足の御殿、高欄、鍍金鐵物、欄間、蹴込み彩色、本御簾をかけ、下の柱、櫻の大樹日覆よりも返り咲きの櫻、爛熳と咲き亂れたる吊り枝、誂らへの通り飾り付け、下がり葉にて、幕明く。ト淨瑠璃口上あつて、前彈きにかゝる。

〽色の世と、夕告げ鳥の美しさ、外に內侍と御仲も、義家公と荒川が、戀と情の鶏合せ。

ト賑やかなる鳴り物になり、上に義家、羽織衣裳の上へ白丁を引ッかけ、粕烏帽子を肩へ掛け、赤い鶏を抱へ居る。下に荒川太郎武貞、赤ッ面、荒流し、丸絎け大小にて、粕烏帽子、白丁を引ッ掛け、白い鶏を抱へ居る。眞中に、名月姫、廣振り袖の形にて、結構なる軍配を持ち、立ち身。この見得、三人をセリ上げる。

〽淸明の日の[illegible]なれ、爰に岩井の映し繪は、男なりして初舞臺〽初々しさとあどなさは・花の雪とも振り袖に、假名のの字を杜若、澤紫をこき交ぜて、濱村時雨さらさらさつと、濡れて嬉しき櫻狩り。

名月　三千歲に、濡れて嬉しき櫻狩り。

義家　花咲く春になりにけるかな。

太郎　それには彌生の鶏合せ。

名月　これは戀路の妻定め。

太郎　取持つ役や元服の

名月　今日お目見得も

太郎　返り咲き。

義家　實に面白き
三人　眺めぢやなア。
太郎　時に旦那、今日の鶏合せは、はる〴〵都から後を慕うてござつた、あの名月姫さまの思ひ付き。
義家　それ〳〵、阿部の頼時亡びてより、この奥州に止まる義家。志しは嬉しいけれど、都へも聞えあれば、仇名をいとふ互ひ。
名月　サア、そのお心遣ひにホッとして、この鶏はあなたの七つ目、御兩愛逢にするを幸ひに
太郎　我が君とお姫様に擬へ、鶏合せの勝負で、戀を叶へる思ひ付き。一つの賭事より、いつそ手短かに恨みの丈を、云はつせえ〳〵。
名月　ぢやと云うても。
太郎　ハテ、うぢ〳〵せずと、ソレ。
ト義家が側へ突きやる。ちよつと行かうとするを、名月姫、袖を扣へて
名月　ア、申し、コレ。
〽そのお姿の、陸奥の、逢瀬の川が嬉しうて、來る事は來ても、解け兼ねる、下紐の關ゆるさねば、夢ばかりなる手枕に、かひなく立ちし仇名草、戀しうて〳〵、可愛可愛の村烏、啼かぬ日とてはなきものを、かこち顔なるおん涙へ席を正して義家は、父の勘氣のふりかゝる、木の葉の雨の衣川、敵の備へし縦びし、その勳功もさかしらに、糸の亂れの苦しさは、結ばぬ緣と云ひ捨てゝ、行くを野暮でも荒川か、えゝ氣の弱い、こりやどうぢや、ちよつくりちよつとこれを取持つて、色に白張ほどでごんす、靡き給へと押しやれば、空吹く風に凧滯らぬ、色には丁度呼び出だす、面も折を書暦の。
ト揃い鉦入りの合ひ方になり、花道より、色の市兵衛、やつし袖なし羽織、淺黄頭巾、錦木の荷を脊負ひ出る後より、戀のおこと、やつし、袖なし羽織、頰かむりにて、常陸帶の荷を擔ぎ出る。兩人、花道にとまる。
〽謎は何々それならば、文や色とゝ錦木や、召せや召せ召せ常陸帶、結ぶ三味線のなん〳〵仲は、戀の大和屋三重の帶、又は二重の廻り氣も、解けて候べく候かしく、ごんすやんすに槍梅は、さつても粋な世渡りや、それで浮名が橘の、花の顔見世花道を、浮きに浮かれて來りける。
トこの文句にて、兩人、本舞臺へ來る。
太郎　ヤア、取持ちの中へ出かけて來た二人を見りやア、

この奥州で文の代りに、やると聞いた錦木に、一人は常陸の國で、縁結びを祈る常陸帶、二人ながら持つて來たその心は。

市兵　サア、わしも返り新參の出づら、取持ちを縁に、この錦木お姫樣に賣り付けて、戀を叶へて上げうと思つてことわたしも色で丸めたお館へ、離れぬ縁の常陸帶、鹿島の宮に祈願を籠めて、持つて參りましたは、お姫さまの御縁も、爰で結んで上げうと思つて。

太郎　イヤ〳〵、錦木は立ちながらこそ朽ちにけり、かごとは假の常陸帶。そんな事ぢやア、いかない〳〵。御夫婦仲も同然の、このいさくさは、おれが爰で直して見せる。

ト手拭を法師のやうにかむる。

市兵　モシ、そりやマア、なんの眞似でござりますえ。

太郎　サア、この白丁は直ぐに千早、神子になつて、竈の神を諫めうか。

ト肩の鈴を振る。

〽やんら面白や、荒神のお前を見れば流し目に、戀の願ひを叶へてならば、ト二世も三世もその先も、末繁昌の千代の約束。

市兵　ア、、これはしたり、そんな事ぢや心元ない。そんなら、おいらも、ナウ女中、コレ

ト囁く。おこと、呑み込み、義家、白丁をかむる。市兵衞は太郎が白丁をかむる。

太郎　二人ながら、何をするのだ。

市兵　サア、この形は鹿島の事觸れ、モシ〳〵殿樣、あのやうな据ゑ膳を食はぬとは、そりやアなんで、

〽おんぢやり申す神の告げ〽色も充分出來秋の、今年や世がよいなアなんよい仲同士の、それに氣強い御託宣、これわいな〽堅い心の金性も、つい水性のしつぽりと、あれわいな〽おゝさて鹿島の願事も、自體我れらは田舍の野暮助、色と酒とに廻らば廻れ、水車の川柳は水に揉まるゝ、枝垂れ柳は風に揉まるゝ、實にもさうよの〽と靡く心も仲人役〽あのお心を桑三なら、早くお側へ喜代太郎、口說くが色の路之助、御機嫌さんも直るなら、八百や萬の神かけて、嬉しからうぢやないかいな。

義家　イヤ〳〵、どのやうに云やつても、某が軍學の師だゝる匡房公の娘の、名月どのなれば。

太郎　ハテサテ、匡房公の御息女ぢやと思し召すから、御遠慮にもある。あなたゆゑなら、どんな身にもなると云

うてござる名月さま。
市兵　それ／＼、君傾城にもなると云うてござる。身を沈め、女郎になつたら、叶へて逢はされまするか。
義家　どうして名月どのを、賤しい勤め。その上かゝる吾妻の端、其やうな色賣る里かいの。
市兵　無いとは不粋な。いづくの浦、如何なる國々も、戀には變らぬ色里で
こと　御存じなくば、お話し申しませうか。
義家　こりや、一興々々。そんならそこで
市兵　仕方話しの
こと　相手になつて
市兵　先づ全盛の江戸の張り、腰差羽織、掴み差し。来いゝ。
こと　ネイ。
〽これも六法ふる雪の、色にや夜も日も大鳥毛、戀の奴と[illegible]り来な、みな切り見世へぶんぬきの〽折助さんはなぜ遅い、草鞋が切れたか借してく〽外に悪性を島田さへ、いつ丸髷に結ひ鹿の子、絞りばなしも艶抜けて、伸びた女子と人さんに、思はれたさの茶碗酒、嘘も月夜の里に又、四間長屋も吉原の〽所替れば信濃路の、今度の町も戀なれば〽駕籠さへ色に相肩の、谷の桁をなア雲手に絡む、なア、散らぬ花踏む、さア木曾の棧橋なアなんの性だ〽悪性構はず寝まるべいとて、寝て肌見ればかんきやすり鮫肌〽こちのせなおよは麥搗く隙にも、晩の夜なべを、やれこれさ、今しやるしんぐい／＼、おゝさ／＼しんぐい／＼。〽眞の闇にも、かつくりそつくり丸太船〽押して越路の色酒に、酔うた／＼五勺の酒に、一合呑んだらとまなしよてあろ、やとせい／＼。
こと　その新潟の出雲崎。
市兵　岡崎女郎衆の三味線も
こと　聲播磨潟室の里。
市兵　また鷄野のちゝつくわい。
こと　姥が宿とは
市兵　乳守の里。
こと　好かぬお客は
市兵　古市か。
〽戀はさま／＼島原を、都の色がとまりぢや。
こと　いつそ惣がゝりで行くべい。それ。
義家　それとは。
皆々　それ／＼／＼、そつこでせい。

〽将棊盤なら大手飛車、寄せて金銀ちよこまにちよいと
な〽面白や。
ト踊りの切れに、義家、名月姫、両方より、抱き付かせる。この時、おこと、懐より、二つの袖を落す。ト義家、名月、この袖を一つづゝ取上げ
義家　住むとても頼みなき世を捨て果てゝ
名月　雲隠れぬる有明の月。
両人　ヤ、この袖は。
こと　ア、申し、それは。
義家　待て。怪しい袖を所持する女、先づ其方は。
こと　お尋ねなくとも、申し上げうと参りましたる私しは、御恩を請けし沼太郎久清が妹、左枝と申しまする者。兄久清事はあなたよりお預かりの連城の御鏡、何者にか奪ひ取られ、申し譯なく切腹。妻の松波も一緒に、自害いたしてござりまする。
義家　御鏡を失ひし云ひ譯に
市兵　自害したのか。その筈〳〵。
こと　その筈とは、もしや其方が。
市兵　なんと。
こと　今の詞の……もしや。
市兵　サア、預かりの寶を奪はれて、兄夫婦が死んだとあれば、妹の身では、その筈だと云ふ事よ。
義家　ハテナア。この義家に云ひ譯の自滅とは、不便の者ども。草を分けても詮議仕出し、都への申し譯は、よきに立つる。かゝる珍事の到来なせば、姫の戀路も聞き屆けは屆けたけれど、今日は歸つて時節を待たれよ。
名月　すりや、お聞き屆けなされて下さりますか。
太郎　お願ひさへ叶へば、枕交すは折を見合せ、お知らせ申す。今日は一先づ御旅館へ。
義家　送りは幸ひ、久清が妹左枝、兄の菩提も懇ろに。
ト市兵衛、両袖を預かる。
こと　すりや、お腹立ちもなう。エヽ、有り難うござりまする。私しも共々に、心を付けて御寶の詮議。
義家　それにとても油斷なく。
名月　そんなら我が君樣。
義家　名月どの。
左枝　サ、お出で遊ばしませい。
〽いざさせ給へと賤の女が、伴ふ姫に義家公、又の縁と夕日榮え、別れてこそは。
ト三重になり、名月を左枝連れ、向うへ入る。義家、

太郎と二重舞臺へ上がる。御簾チョンと下りる。ト市兵衞、あたりを見廻し、呼子を吹く。岩戸神樂になり上下より、瀧夜叉、鬼夜叉、四天の形にて、窺ひ出て

瀧夜　鹿島三郎

鬼夜　義連どの

義家　コリヤ……先達て阿部の賴時、叛逆の砌り、討手を承りし禮度とあつて、賴義が讒言、所領を沒收せられしその恨み、彼れが重寶の連城の鏡、奪ひ取りしゆゑ、沼太郎夫婦は自殺。又その上に義家も、殺害なさんと入込ませ置きたる、瀧夜叉鬼夜叉。

瀧夜　ハツ、仰せに任せ、忍び込んで居りましたが、何を云ふにも荒川太郎め、付添ひ居るゆゑ、

鬼夜　近寄る事も叶はず、猶豫いたして窺ひ居りました。

市兵　面體知らぬを幸ひに、某が入込むからは、折を窺ひ日頃の遺恨。其方どもは矢張り忍んで、もし手に餘らばともどもに。

兩人　心得ました。

ト市兵衞に一腰を渡す。市兵衞、取つて

市兵　兩人ともに、忍べ。

瀧夜　ハツ。

ト瀧夜叉、鬼夜叉、元の所へ忍ぶ。

市兵　この上は、義家が寢所へ。

ト御殿へかゝらうとする。薄ドロ〳〵になり、以前の鷄、市兵衞を支へて飛びかゝる。市兵衞、これをキッと見て、思ひ入れ。管絃になる。

ハテ心得ぬ、二つの鷄、道を支へて邪魔する有樣。義家が秘藏ゆゑ、鳥類でさへ恩を知り、妨げなすか。ハテナア。誠に感心、外傳にも、五經を備ふ靈禽ぢやよなア。何にもせよ奇怪の鷄、沼太郎夫婦が片袖も。ムウ。

ト袖に鷄を持ち添へ、二つながら刺し殺し、上下へ拋る。煙硝の火パッと立つ。市兵衞、悶絶する。大ドロドロ打ち上げる。

〽春日野の若紫を染め上げし、由縁の色の水上を、爰に寫せし水鏡。

ト鳴り物になり、眞中へ誂らへの井筒を差出す。上下の切り穴より、雌鷄の精、雄鷄の精、誂らへの切り禿にてセリ上がる。

〽筒井筒、井筒にかけしまろがたけ、おひにけらしな妹と背の、まだうない子の二人連れ、幼な遊びに殿さんかみさん、神々さん、結ばしやんしたうしろ紐、解いて寢

ねして睦言云うて、大人のやうに嬰兒產んで、ねゝさん事の樂みは、嬉しからうぢやないかいな、結ぶ緣のしをらしや、振分け髮の手を引き連れて、お月樣幾つ、十三七つ、雲がかゝらば吹き拂ふ、松風車の手遊びも、やよやゝんちやく、しんくこふさを小からまいた、サア廻る車に花車、雪をめぐらす面白や。

〽綾織るや〳〵、待乳山陰みたの手業を見さんせ。吳服綾機のなア、綾取る筬の、糸引き張つて織るや織る、織る葉錦のいろ〳〵、上野飛鳥の花の吹雪か、散るは〳〵散り來るは、紅ゐ照り添ふ花の袖、袖を連ねて押せ押せ、よい〳〵綾姬の、綾取る業ぞ珍らしき。

〽雄獅子雌獅子の、鈴の音色も勇むや出遣ひは、花に戲むれ、小蝶を目がけ、岩間々々に寄り添ひて、頭を振りてしなだれかゝる、飛びかゝりてはひらりと下り、ひらりひらり、花の小影に起きては轉び、狂ふや獅子の草造び、實にりこふしんの一曲は、小蝶の舞ひか迦綾頻、優しかりける次第なり。

ト淨瑠璃切れゝ。市兵衞、心付いて、切つてかゝる。ドロ〳〵にて、雌雄の鷄の精、消える。市兵衞、屋體へかゝる。此うち、瀧夜叉、鬼夜叉、出て、太郎も出て、これを支へる。

太郎 待て。我が君へ刃向ふ曲者、察するところ先達て、所領に離れたる、鹿島三郎義連であらうがな。

市兵 如何にも汝が推量の通り、鹿島三郎義連だワ。義家父子に恨みあるゆゑ、御鏡も奪ひ取り、沼太郎夫婦にも自滅させたるこの上は、義家もぶッ放す。道明けて通せ。

太郎 小癪な汝、速やかに御鏡を渡せ。

義連 エヽ面倒な。ソリヤ。

ト瀧夜叉、鬼夜叉

兩人 觀念。

ト切つてかゝる。これより、支度の間、太郎、瀧夜叉鬼夜叉を相手にして、見事にメテあり、支度出來次第に、大ドロ〳〵にて、瀧夜叉、鬼夜叉、倒れる、上下の田樂より、雌鷄、雄鷄、誂らへの形にて、出る。

市兵 ヤア、これは。

雌鷄 ナウ恨めしや鹿島三郎、汝ゆゑに刃に伏したる　久清夫婦が亡き魂の

雌鷄 其方が殺せし鷄を、假りの姿も

兩人 恨めしや。

〽この世は去れども靈禽の、御大將を守護せんと、爰に

顯はれくだかけの、あこめを磨ぎ、毛を立てゝ飛びかゝればこなたも鋭き太刀風羽風、花の吹雪の色添へて、桃花の節會も斯くやらん。

市兵　さては久濟夫婦が亡き魂ひに、鷄も合體なし、この義連に恨みを云ふか。

雄鷄　御鏡紛失に、浮かみもやらぬ修羅の苦しみ。

雌鷄　奪ひ取つた御鏡渡しや。

市兵　小癪な事を。

雌鷄　思ひ知らせん、思ひ知れ。

太郎　どつこい。

〽長啼き鳥の聲々も、日の出にたとふ御鏡や、されば歌にも鳥が啼く、吾妻と讀むも末の世の、枕詞に殘りける／＼。

ト此うち、大ドロ／＼にて、市兵衛が懷中の御鏡、差し金にて太郎が手に入る。連理引きさま／＼あつて、トゞ雌鷄、雄鷄、上段に乘り、市兵衛、太郎、後に瀧夜叉、鬼夜叉、詰め寄り、日覆より花降り、賑やかなる鳴り物にて、よろしく

幕

色世夕告鳥（終り）

三國志
上野花見
廓釣狐
紅葉狩

廿三回筐畫双紙

未熟ながらも父の追福を
いとなめよとお進めにしたがひ
一座を頼みに在りし姿を
七變化に收めて

カタリにある通り、中村芝翫が父四世歌右衛門二十三回忌の追善所作事で、明治八年三月守田座の上演である。此うち「三國志」はこの時の新作、「上野の花見」は在來の、とてつる拳を明治初年の風俗に直したもの「廓釣針」も在來のものを訂正、「紅葉狩」も歌右衛門が上坂お名殘に演じたものを訂正したので、作者は三世櫻田治助、いづれも治助が歌右衛門の爲に執筆したものなのであつた。この外に鷺娘と布刈と、船頭とがあつて七變化になつてゐたのだが、臺本に無かつたので省いた。上野の花見なぞは如何にも官員樣が巾をきかした明治初年が目に見えるやうで面白い。この中で芝翫は關羽、駒木翫吾、白藏主、鬼女を勤め、玄德と竹藏が坂東彥三郎、張飛と晉助が尾上菊五郎、維茂が市川左團次、高八が市川子團次、おいろが尾上いろは、等の役割であつた。地方の連名は不明。

廿三回筐畫双紙

（三國志）（上野花見）（廓釣狐）（紅葉狩）

深朝桃園の場
上野花見の場
吉原釣狐の場
戸隱山の場

役名――劉備字玄德。關羽字雲長。張飛字翼德。白馬丁、吾助。高木屋、竹藏。官員、駒木鐵吾。白藏主實ハ太鼓持ち、成八。太鼓持ち、高八。仲居、おいろ。平維茂。戸隱山の鬼女。

竹本連中
長唄連中
常磐津連中
富本連中
岸澤連中

本舞臺、向う一面、結構なる緞帳を下ろしたる唐屋體、上手に竹本連中、下手に長唄連中扣へ、唐樂にて幕明く。

ト直ぐに大薩摩になる

〽それ治極まれば亂その門に入るとかや、治國既に年經れば、奸黨出づる世の譬へ、そも〳〵漢の涿縣に、三人の英雄現はれて、實に桃園の仙境も、斯くやとばかり凛然と、凛々しくも又勇々しけれ。

ト鳴り物になり、緞帳を卷き上げる。眞中に誂らへの卓、正面に玄德、上手に關羽、下手に張飛、いづれも畫面の拵らへにて扣へゐる。

竹〽白馬を切つて天を祀り、烏牛を屠つて地を祀り、世に三傑が結義の譬れ。

玄德　花咲き滿つる桃園に、天地を祀り同盟の、いま義を結ぶ異姓の兄弟。

關羽　賊を誅して恩を報い、下萬民を救ひ申さん。

張飛　生れは年月を同じうせざれど、死するは同じ時を期すべし。天この心を照覽あつて

玄德　もし義に背き

關羽　恩を忘れ
張飛　不義の行ひある時は
玄德　天の誅罰
三人　受け申さん。
竹〽互ひに立つて一揖し。
唄〽くゆらす香も一筋に、心を籠めて立ちのぼる。
竹〽煙りも屆く大空に。
唄〽天を拜し地を拜す。
卜三人、香を焚き、天地を拜す事。
竹〽關羽は劉備に打向ひ。
關羽　劉備どのには年長なれば、今日より兄と稱すべし。
張飛　如何にも貴所の云はるゝ通り、兄と唱へ、弟と呼ばれて。
關羽　イザ、酒酌んで廻されよ。
竹〽心も淸き水晶の、杯とつて差出せば、劉備は會釋し。
玄德　我が年齡は、各々よりは長たれども、元より異姓の兄弟なれば、智勇を以て兄とや云はん。
張飛　イヤ〳〵、貴所は漢の皇叔、中山靖王の後胤なれば、兄と敬ひ、主君と崇めん。

關羽　イザ、疾く〳〵。
玄德　兩士の詞、もだし難ければ、身不肖なれども兄と呼ばれん。イザ、杯を酌み申さん。
唄〽千代を壽く竹の葉は、さゝと和らげ酌み交す。
竹〽ほんのり色の桃の花。
唄〽その香の籠る園の內、玄德團扇取上げて。
彼の賊、更に恐るゝに足らねども
竹〽その首領たる張角は、天公將軍と自稱なし、雨を降らし風を起す幻術あつて。
恩を施し、愚民を說き
唄〽漢運既に盡きんとして、大聖人の世に出でたり、汝等天に順へと。
關羽　云へば愚民の百姓ども。
竹〽その佞辯に惑はされ、我れも〳〵と走せ集まり、黃なる絹にて頭を包み。
世の人これを、黃巾の賊と云ふ。
唄〽既にその勢四五十萬、弟張梁張寶は地公將軍、また人公將軍と自ら唱へ。
張飛　オヽ、四五十萬は愚かな事
唄〽例へ百萬の勢にもせよ。

竹〽邪は正に勝つ事能はず。彼れに妖術ある時は、我れ又孫呉の奇術を用ひ、長蛇鶴翼魚鱗に備へ、千變萬化出沒自在。

唄〽薙ぎ立て蹴り立て剩さず洩らさず、國家の害を除くべし。

ト兩人、鐵棒を使ふ事あつて

玄徳　おゝ、潔し〳〵。イザこの上は、幽州へ赴いて、太守劉焉に助太刀せん。

關羽　如何にも、これより馬物の具を取調べ

張飛　集まる所の兵を指揮なし

玄徳　さらばこの地を、打立たん。

竹〽勇み勇める彩用は、實に三國に名を揚げし、猛將とこそ見えにける。

唄〽道も[illegible]くさ盛りの櫻、花々しくも。

ト玄徳共に關羽張飛、キッとなつて花道へかゝる。

竹〽幽州さして。

ト勢ひ三重になり、三人、悠々と向うへ振つて入る。宮拳打あげ、道具替る。

本舞臺、上の方、上野山王山の張り物。山内の櫻折り取るべからずの制札。下の方、駒寄せ、樹木の張り物。向う漏斗に、東照宮の華表、花盛りの山を見せたる書割り。上手に葭簀張りに出茶屋。摺込み暖簾、紋散らしの團子提灯、茶道具を飾り、毛布をかけし長床几、いつもの通り、下手に淨瑠璃臺、紅白の段幕をかけ、日覆より、櫻の吊り枝を二重に下ろし、すべて上野山内の模樣、大拍子にて、道具納まる。

トこれと一時に下手の段幕を切つて落し、爰に常磐津連中居並び、前彈きなしに早き〳〵りの淨瑠璃になる。

〽吹けよ〳〵上野の風に、八重に一重に群れ來る人も、さん〳〵櫻に小筒を開いて、日元ちら〳〵散り來る花は、昔忍ぶの茶碗の井の端、どつこい危ない酒の醉ひ。

トかすめて風の音、日覆より櫻の花チラ〳〵散る。下手より、おふく、茶屋女の拵らへ、派手な模樣の前垂、東下駄にて、手桶を提げて出て來り、花の散るのを見て、草箒であたりを掃くこなしよろしくあつて

ふく　今日は朝からお天氣がいゝのに、お師匠さんのお花見が、幾組か通るので、いくら掃除をしても、砂埃で堪らない。それに又、彼岸が散るので、かゝつて箒を持

ち通しだ……それはさうと、一六ゆゑ、今日は九段の駒
木さまが、お出でなさるお約束だが、もうお見えなさり
さうなものだ。
ト向うを見て、思ひ入れあつて
オヽ、向うへ見えるは、別當の音さんぢやアないかしら
ん。
ト大拍子、バタ〳〵になり、向うより、音助、好みの
鬘、印付き、紺の法被、盲縞の腹掛け、股引、足袋跣足、
厩馬丁の拵らへにて、一散に駈けて出て來り、花道へ
とまり、後を振り返り見て、息をつき、手拭で汗を拭
く。これをキツカケに
〽彌生鄕に魁て、走り自慢の馬丁は、音に聞えし箔屋
町、その親方の光りにて、巷をかけて氣散じは、流るゝ
汗をふきぬきの、法被一重に二重帶、見得は晒しの手拭
と、日毎に足袋のかけ流し、今日も旦那のお供にて、先
へ駈け拔け來りける。
ト花道にて、音助、よろしく振りあつて、又バタ〳〵
になり、駈けて舞臺へ來り、以前の手桶の水を柄杓に
て呑む事あつて
音助　アヽ、いゝ心持ちだ。醉覺めと駈けて來た時は、水
ぐれえうめえ物はねえ。
ふく　コレサ、音さん、櫻のお湯を上げるから、そんな水
をおあがりでないよ。
音助　なぜ、呑んぢやア惡いかえ。
ふく　惡い事はないけれど、水腫れになるといけないか
らサ。
音助　水腫れになつて堪るものか。お前の頭ぢやアあるめ
えし。
ふく　モシ、後生だから頭の事は、どうぞ云つておくれで
ない。出る度毎に云はれるので、體が小さくなるやうだ
よ。
音助　それで小さくならないから、よく〳〵大きな頭だ
な。
ふく　エヽ、モウ、大槪におしと云ふに。
ト音助の背中を叩く。
それはさうとお前の旦那、駒木さまは入らつしやいまし
たか。
音助　出がけにお客があつたので、松源まで駈け通し、す
つかり今日は草臥れた。
ふく　それぢやア松源にいらつしやいますか。

晉助　數寄屋町の藝者を相手に、まだ〱吞んで居らつしやるから、一足先へ出かけて來たのも、お前の顏が見てえからだ。

ふく　オヤマア、嘘にも嬉しいねえ。

　ト晉助、おふくの頭を見て

晉助　成る程、滅法大きいな。

ふく　又わたしの頭かえ。

晉助　ナニ、お前ぢやアねえ、大佛樣よ。

ふく　たんとわたしをお苛めよ。今に旦那に云ひ付けて上げるから。

　ト晉助、向うへ思ひ入れあつて

晉助　こいつアお前に云ひ付けられるか。向うへ旦那がいらつしやつた。

ふく　オヤマア、竹さんが一緒に……嬉しいねえ。

　トこれを大拍子に取り向うより、駒木、長き羽織に帽子を被り、表付きの駒下駄、着流しにて、西洋杖を突き、出て來り後より竹藏、紺の印袢纏、紺の腹掛け股引、麻裏草履、腰へ花鋏をはさみ、植木屋の拵らへ、笹折をくご縄にて結び提げ、出て來り、花道へとまり

〽花の盛りに一六の、休暇を當に松源で、僕を設けの四疊半、その數寄屋町約束の、藝妓の酌に肱枕〽誰れと根岸の植木屋が、好い折詰と御無沙汰の、お詫に提げる忠義者、どうで今宵は忍ばずか、穴の稻荷と浮かされて、茶見世目當に辿り來る。

　ト此うち、花道で、駒木、竹藏、よろしく振りあつて、舞臺へ來る。おふく、出て

ふく　これは旦那、入らつしやいまし、大分遲うございました。

駒木　松源までは八時に來たが、藝妓どもが放さぬので、これへ參るが因循いたした。

ふく　それぢやア定めてしつぽりと、御愉快な事がございましたらう。

駒木　イヤ〱、この節は、左樣な事はとんとない。

晉助　オヽ、誰れかと思つたら植木屋さんか。どうしてお供をして來たのだ。

竹藏　今日は松源へ仕事に來て、計らず旦那樣にお目にかかり、これへお供をして來たのだ。

ふく　オヤ〱、それぢやア竹さんは、旦那樣の所のお出入りかえ。

竹藏　親仁の代から三十年來、久しい間のお出入りサ。

駒木　ト駒木、櫻を見て、思ひ入れあつて
　時に竹蔵、誠に今が満開ぢやな。
竹蔵　この二三日が、眞ッ盛りでござりまする。
音助　とんだ隅の屋淨瑠璃だが、この花を肴にして、一杯やりたうござりますな。
駒木　爰で一杯催ほす積りで、肴はこれへ持つて參つた。
ふく　御酒は例の西洋酒を、取寄せて置きました。
　ト壜を出す。
駒木　僕が日本酒を飲まぬのを、おふくは早くも心得居るな。
竹蔵　凡そ上野廣しといへど、この子に續く者はない。
音助　そりやア頭かえ。
ふく　又そんな事をお云ひか。
駒木　サア〳〵、早く始めろ〳〵。
　トこれより捨ぜりふにて、廣蓋の上へ笹折を並べ、酒道具取揃へ、床几の上へ出し、酒を飲む事。
　コレ〳〵音助、なんぞ肴に一つやりやれ。
音助　こりやア私しより植木屋の方が。
竹蔵　ハテ、そんな事を云はねえで、廓の惚氣でもやんなせえ。

音助　それぢやア奴が心意氣を、煽てに乘つてやりませうか。
　ト手拭を持つて前へ出る。
都々逸〽厩馬丁のお前の爲に、今は轡の愛さ勤め〽そんなじや〳〵馬の悪婆に惚れて、人に跳ねたと笑はれる。
　ト音助、よろしく振りあつて
駒木　ヨウ〳〵、うまい事〳〵。
竹蔵　斯んな事は主に限るよ。
ふく　此方も負けずに、モシ、竹さん、わちきの心意氣を、聞いておくんなさいよ。
　トおふく、竹蔵の手を取り、前へ出て　悪身のクドキになり
〽ほんに忘れぬ去年の秋、權現樣のお宮前、夕日眩き紅葉ばに、顔を染井や根岸から、多くござんすその中で、主に思ひをかけ床几、ちよつと出す茶も水臭く、薄いと云ふは氣にかゝり、煮立つ茶釜の音羽屋に、熱くなつたる鬼娘、これも山茶ぢやないかいな。
　トおふく、竹蔵を捕へ、悪身のクドキの振り。これへ駒木、音助、絡まり、四人にて、なかしみよろしくあつて納まる。

竹藏　サア〳〵、今度は旦那樣だ。

晋助　いつもあなたがなされます、拳はどうでござります。

ふく　拳は旦那のお家の物、なんぞ新らしい狐拳を。

駒木　イヤ〳〵、僕が拳は親讓り、みんな古い拳だ。

竹藏　イヤ、昔へ返る世の中に

晋助　古い拳がお慰み。

駒木　さらば遣つて見せようか。

ト羽織を脱ぎ、思ひ入れあつて

ヤ、ヨイ〳〵〳〵。

〽酒は拳酒色品は、蛙一ひよこ三ひよこ〳〵、蛇ぬらぬらなめくか參りやしよ、それしやんしやが〳〵しやんらけんな樣樣に和藤内が叱られて、虎がはう〳〵とてつるてん、狐でサア來なせ。

ト駒木、よろしく振りあつて

先づこんなものぢや。

竹藏　成る程、これはその以前、誰れも彼れも遣つた筈だ。こんな面白い拳はない……晋さん、お前は覺えたかわたしはどうか行けさうだ。

晋助　わつちやア旦那のなされるのを、時折お側で見て居るから、大概やれるのサ。

ふく　それぢやアみんなでおやんなさいな。

竹藏　併し、只やるのも張合ひがないが、負けた者の頭を毆りツこはどうだらう。

晋助　そいつア張合ひがあつていゝが、まさか旦那が負けたとて、馬丁が毆られもしめえ。

駒木　そこは當今四民同權、苦しうない〳〵。

竹藏　それぢやア爰で稽古ながら

晋助　三人一緒にやりませう。

ふく　こりや面白うござりませう。

駒木　併し、ぶたれたとて腹を立つなよ。

兩人　決して腹は立ちませぬ。

駒木　さらば一緒に

三人　ヤ、ヨイ〳〵〳〵。

〽酒は拳酒色品は。

ト淨瑠璃くり返し、駒木、勝つて兩人の頭を打つ事。

〽酒は拳酒色品は。

ト又くり返し、段々早めてやり、駒木、負ける。

三人　四民同權。

ト兩人、駒木を打つ事。

〽酒は拳酒色品は。
ト負け勝ちに構はず、駒木を打つ。
駒木　ア、コレ、待つてくれ〳〵。拳の規則は負けたら打つのだ。斯う負けても勝ても打つと云ふ、そんな法はない。モウ〳〵、拳は止めだ〳〵。
ト腹を立つ。
ふく　全體お前方が、旦那様を打つと云ふが悪いわね。
晋助　そこが旦那の仰しやつた、四民同權だ。
ふく　そんなお醫者様が、どこにかあつたね。
竹藏　何にしろ御機嫌直しに、虎の代りに獅子はどうだ。
晋助　ナニ、獅子と云ふのは。
竹藏　この春淺草の奥山へ出た
駒木　オヽ、獅子の舞の事か。
晋助　あれならわつちやア知つて居ます。
ふく　それぢやそれを御機嫌直しに
竹藏　サア〳〵、獅子の
皆々　始まり〳〵。
〽これはこの春淺草で、山なす入りの獅子の曲、岩間に咲ける牡丹花の、露吸ふ蝶に餘念なく、漲り落つる谷川を、かなたへひらり、こなたへひらり〽お獅子はどこだどこだ、太鼓三味線笛鼓、お獅子はどこだ〳〵、とんつくぽんぽこぺんぺこちやん。しやんと揃うた花一座。
ト四人にて、よろしく振りあつて納まる。早笛、バタバタになり、向うより、西洋鞍を付けし馬暴れて出て來る。
〽浮かれ浮かるゝその所へ、手綱放れし荒駒に、人も櫻もばら〳〵と、風に散りてぞ。
ト此うち、三人は上手へ逃げて入る。おふく、馬に追はれるをかしみあつて、トヾ下手へ逃げて入る。知らせにつき、これまでの道具、居所にて後の道具に替る。
本舞臺、向う赤壁の欄間、これへ一面に色ざしの長暖簾、上下、書心に障子立て切り、いつもの所に枝折戸、上手に常磐津の浄瑠璃臺、下手に富本連中の浄瑠璃臺、いづれも霞幕を吊込みある事。道具納まる。
ト流行り唄の合ひ方になり、橋がゝりより、太鼓持ち四人いづれも羽織着流しにて、出て來り、枝折戸の外にて

太一　コレサ鶴八、いま相談した通り、お互ひにちつと宛は、とことんはやつたものゝ

太二　シタガ、極まつた所へ行つてやらかすには、商買柄萬さらた事も出來ねえから

太三　銭の内の親方は、茶番狂言は大好きで、振り事なんぞに凝つて居なさるから

太四　それゆゑ賄うして四人が、連れ立つて趣向を相談に來たものゝ

太一　なんだか改まると、[illegible]しさが悪いぢやアねえか。

太二　ヘン、初心がつて居る事よ。

太三　サア〳〵、おめず臆せず恥らはず

太四　のたくりつんでなさんせいなア。

ト女振りの思ひ入れで云ふ事。

太一　オヤ、なんぼ春でも、とんだ雛鶴さんだぜ。

太二　無駄を云はずと、サア〳〵、お入り〳〵。

太三　そんなら陣とやらかさう。

ト枝折り戸口を明け、内へ入る。狂言の思ひ入れにて

物もう〳〵……この家の主は、お宅におはし候うか。

太四　案内申して、御相談の致いたい事の候うて

太一　このあたりに住ひ致す、御存知の洒落者。

太二　疾く〳〵、お逢ひ下され候へ。お逢ひ下され候へ〳〵。

ト頻りに云ふゆゑ、奥にて、おいろ。

いろ　ハイ〳〵、どなたやらお出でなされたさうな……ハイ〳〵、只今參りますわいなア。

ト合ひ方、キッパリなり、おいろ、仲居好みの拵らへにて、出て來り、皆々を見て

いろ　オヤマア、どなたかと思つたら、五丁さんを始め、お揃ひで……大方何かお弘めのやうな事で、お出でなすつたのでございますかえ。

太一　イヤ、さう改まつておいろさんに云はれると、グウもスウも出ねえやうだ。

太二　なんの事はねえ、斯う揃つて來た所は、まるで子供が初午に、稲荷講と云ふ[illegible]しさね。

太三　外の事でもないが、ちつと親方に、お目にかゝりたい事があつて來ましたのサ。

いろ　そんなら丁度、いま拜みを上げておしまひの所。ちよつとわたしが、さう申して來ませうわいなア。

トこの時、奥にて

高八　オヽ、聞いた〳〵……今そこへ行て、對面せん。

ト狂言の思ひ入れにて云ふゆゑ、皆々も思ひ入れあつ

て
四人　ハヽア。
ト四人平伏する。これを〆め太鼓の頭に取り、合ひ方になり、高八、好みの拵らへにて、手に釣瓶形の莨盆を提げ、出て來る。おいろ、思ひ入れあつて
いろ　オヤマア、まるで芝居へ行つたやうでござんすわいな。
太一　元よりその氣でやらかすのだものを。
太二　なんと、粹人であらうね。
太三　併し、それも親方が、狂言氣取りで出て來なさるゆゑ、ツイ釣込まれてしまつたのサ。
太四　それと云ふも、平常芝居心があるからの事さねえ。
高八　そりやア、狂言の言の字を拔くと、狂と云ふ字だから、狂人の寄り集まりだ。
四人　ハヽヽヽ。
高八　そりやさうとお前方は、今日はどうした事で、揃つて來なすつたのだ。
太一　サア、四人斯う揃つて來たのは、外の事でもござりませんが、さるお客先に、おめでたがあつて、この四人がお役に當つたと云ふ譯。
太二　立茶番とのお好みゆゑ、萬更な事も出來ませんから三人寄れば文珠の智惠、四人だから千手觀音の智惠も出さうだが
太三　さつぱり好い智惠も出ませんが、どうか斯うか趣向はこぢ付けたが、どうも立廻りが付きませんから
太四　親方にお願ひ申して、是非立廻りを付けておもらひ申したくつて、乞食の大連れ。
四人　ヘイ／＼、お願ひ申しに上がりましてござります。
ト狂言の思ひ入れにて云ふ。
高八　こりやア思ひも付かねえ事だ。併し、わたしは振付さんぢやアなし、そんな事は出來はしないが、ツイ好きの道だから、やつて見たいが病だから、出來るだけはやつて見もしようが……さうして、狂言の趣向は、どんなだね。
太一　どうの斯うのと云つたところが、お話し申すやうな趣向でもありませんから、どうか御相談が致したいと、申すのでござります。
高八　それぢやア斯うしませう。今日はわたしも用がない所から、出かけてドンタクをしようと思つたが、みんな

が揃つて来なすつた事だから、奥で一杯始めて話しながら相談をして、極まつたら立廻りを、ちよつと稽古をして見ようぢやないか。

太二 それは誠に有り難い。

太三 斯んな間拍子のいゝ事はない。

高八 それぢやアおいろ、奥を片付けて、一杯始めさせてくれねえか。

いろ ハイ〳〵、もう奥も片付いて居りますから、皆さん、奥へお出でなさんせいなア。

太四 それぢやア御遠慮なし。

太一 諸卿どのゝお杯、戴きますべい〳〵。

太二 ア、今日は如何なる吉日ぞや。

太三 逢ひてい〳〵と思ふ親方に逢ひ

高八 ア、コレ、無駄を云はずと

いろ 早うござんせいなア。

ト合ひ方になり、高八、おいろ、先に四人付いて奥へ入る。枝折り戸の外へ誂らへの垂れ駕籠を押出し、鳴り物打上げ、下手の霞幕切つて落す。爰に常磐津連中居並び、直ぐにかゝり。

常〽我れは化けたと思へども、人は何とか佛の、變らぬ業を魁の、哀れ竹の一節を、狂言綺語の道直ぐに、堅業常磐に寫し繪や。

ト雷序を打ち込んだる媚めいたる合ひ方になり成八、白藏主の拵らへにて、駕籠の内より出て来る。上手の霞幕切つて落す。爰に富本連中居並び

富〽往さ来るさの通ひ路に。〽これは此あたりに住む、粋のこつちやうにて候ふ……あの白藏主の甥が、狐や容を釣ると云ふ事を聞いたゆゑ、たうとうこれまで化けおふせたが、この面をかぶつて白藏主になつて、甥や仲居のおいろを始め、意見の致さうと存ずる。

ト駕籠の中より、狐の面を取出し、被つて見て

富〽なんと白藏主によう似たか、水鏡なと見たいものぢや。

常〽姿は嘘の皮衣、狐の守護の面白や。

富〽人はものかは我れさへも、迷ふ心の駒の綱。

常〽引けばからころ鳴子の音に。

富〽なまじ化けたでぞつとした、犬の聲にも耳たけし。

常〽程なく揚屋へ辿り来る、それと見るより亭主は立出で。

トこれにて奥より、以前の高八、袴羽織の形、扇を持

ち出て來り

高八　ヤア、これは〳〵伯父御樣、ようこそお出でなされましたぞや。……コレ、おいろや〳〵、伯父御どのが見えられたぞや。

いろ　ハイ〳〵。

ト云ひながら、おいろ、口紅の文と、切り髮を入れたる文箱と鳴子の掛け罠とを持ち出て來り

オヽ、これは伯父御樣、ようお出でなされました。

富〽されば〳〵、この頃は久しく便りもせぬゆゑに、懷かしさに尋ねて參つた。

ほんに、ようお尋ねなされて下さりましたなア。

高八　マア〳〵、此方へお通りなされて、お茶なとお上がりなされませ。

いろ　サア〳〵、此方へお出でなされませいなア……ドレ、お手を取りませう。

富〽おゝどつこい、ムウ、いや〳〵、伯父は其方に意見のしたい事がおりやるが、聞入れておくりやるか。

高八　イヤモウ、親にも伯父にも、たつた一人のお前樣の仰しやる事、聞入れいで、なんと致しませう。

富〽如何に其方は客を騙し、毎日々々釣りつけると云ふ事を聞いたが、誠でおりやるか。

成る程、伯父御の御意見、仰しやる通り、モウ〳〵この後は、フッツリ思ひとまりませう。

富〽おゝ嬉しうおりやる、併し、その客を釣るものをちよつと見たい。

ホヽ、お易い事。それ、御覽じませ。

ト件の文、黒髮、釣り罠を、成八の鼻の先へ出す。

富〽アイヤ、こな人は出家沙門の鼻の先へ、穢い物を突きつけやる、その中はなんぞ。

イエ、別段に替つた物でもござりませぬ。有り來りの思ひ參らせ候かしくの文。

いろ　また切り髮は客人へ、僞はりでないと云ふ、誓詞の僞。

富〽その文箱捨てゝほしい。

でも、この切り髮は。

高八　イヤ〳〵、なんであらうと伯父御の云ひ付け、捨てたり捨てたり。

いろ　アイ〳〵。

富〽捨てる髮の毛あり振れた、手管の罠を奥の間の、客の呼ぶ聲しほにして、暇乞ひさへそこ〳〵に、二人は立

つて行く雲の。

ト此うち、好き時分、奥にて、手を烈しく打つ事。これにて、兩人、目配せして奥へ入る。後に成八、思ひ入れあつて

富〽たうとう旨くやつてのけた、斯う云ふうちに見咎められてはならぬ、歸りませう〳〵。

常〽心は友に殘らねど、二階座敷の連弾きに。

富〽何も思ひに焦れて燃ゆる、野邊の篝火に小夜更けて。

〽アヽこれまで度々釣り付けられた腹癒せに、この杖で一打ち打つてくれう。

ト件の罠を杖で打つ事あつて

常〽起請誓紙もかくとだに、牛王の烏音をぞなく。

富〽イヤ〳〵、斯う云ふうち、化け顯はされてはならぬ誰そ居ぬか、アヽ、誰そこんくわい〳〵。

常〽おかげやおかん此まゝに人惑はせる　双方打合ひ〽亂菊の。

ト此うち、奥より、以前の高八、おいろ出て來り

兩人　オツト、見付けた〳〵。

成八　南無三。

常〽化けて上がつて思惑の、浮氣させうの狐客。

トちよつとある。

成八　えらいもの〳〵。

高八　いつも伯父御の煽てに乘つて

成八　とてもの事に二人して、なんぞやつてくれぬか。

いろ　オヤ、また伯父御様のあんな事を。

成八　あんな事でも、どんな事でも、やつたり〳〵。

いろ　伯父御様の仰しやる事、聞かぬもどうやら。

高八　てんぽの皮とやつたがよい。

富〽色の所謂は廓の祕事よ、戀は曲者、晴らすは間夫ぢやいな、間夫がありやこそ辛い勤めも、大事にするではないかいな。

常〽ほんに苦界は、實まアさうぢやあるまいか、辛氣辛苦は世の習ひ。

トよろしくあつて納まる。

成八　サア〳〵、これからに伯父御の番ぢや。是非ともなんぞ。

いろ　わたしとても伯父御様の煽てに乘つてツイうか〳〵と。

成八　それでは、おれをも煽てゝやらせる心か。

いろ　それは當り前でござんす程に。

高八　サア〳〵、早くおやりなされませ。

成八 ア、、是非がない。

ト外の駕籠の内より、誂らへの面を取出し

それではこれで、なんぞやつて見やうか。

常〽出來秋も、村の束ねも人任せ、ちよつと保養の庄屋どの。

富〽おつと見付けたお庄屋さん、この獵人を供に連れるとおしやまして、御沙汰なしとはお恨みな、さてはおてかの隠れ家へ。

常〽ヤア、こりや玉八の素鐵砲。とんと圖星に當てられた、併し廓の奴めが事は。

富〽云うたら大事か道成寺、ハちてつとんオイ、鐘に恨みはハ、、、、、直ぐに清姫、オ、、こはや。

常〽アイ、わたしや清姫、蛇より蛇よりエ、、口惜しい。

富〽こいつア堪らぬと逃げ出す獵人。

常〽ならぬぞえ、大事の男を唆のかし、これ濟むかえ、庄屋なんぢやいな。

富〽眞實心の二世三世、約束させて他所外に。

常〽それで濟むかと胸つくし〽一體おのれは平常から、男見る目が氣にくはぬ。

富〽そりや何ゆゑに爰サア放せ、放し居ろ、腹が立つならサアおぶち、エ、〱放さにや斯うだと振り上げる。

常〽これはお二人どうでんす、まア〱静かにしなさんせ。

富〽兩方喧嘩は野暮な事〽面白や。

ト よろしくあつて納まる。

常〽去なうやれ、我が故郷へ歸ろやれ、心名殘りは伯父藏主、思ひ切つてぞ。

ト成八、よろしくあつて、上手へ入る。おいろ、後を追ひ駈けて入る。

〽入りにける。

ト後に高八、殘る。爰へ以前の太鼓持ち四人、着流し、尻端折り、扇を持ち出て來り、これより高八、四人を相手に所作ダテになる。

太一 モシ、親方、爰にお出でなすつたか。先刻から吞み續けて、わちきの顔は赤澤山。

太二 椎の實三本片手に受け、ひよろつく足の蝶千鳥。

太三 下戸は上戸に嫌はれる、肴荒しで腹は滿江。

太四 たらふく食つても身錢では、なんにも河津の三郎祐安。茶番のタテを忘れた四人。

太一 タテの仕直し。

四人　してもらはうかえ。
高八　ホヽオ、忘るゝ事は珍らしからず。四人は同體、然らば、この場で、タテの稽古を致してくれう。
富〽鵲の渡せる橋へおきつきの、笹の一夜の大杯と。
常〽聞いて悔り丸かされ、波に兎の和田酒盛に。
富〽吉野が蓋の杯は。
常〽横から合ひを。
富〽ちよつと押へて。
常〽いよお見事。
富〽サアホヽ。
常〽大盡舞を見さいな。
富〽その次の大盡。
常〽後を慕うて。
ト皆々にて、よろしくあつて、トヾ高八、先に向うへ入る。皆々も續いて入る。知らせに付き、道具幕落す。
本舞臺、向う一面、紅葉の樹を書き割つたる道具幕。ふすめたる風の音にて、道具納まる。
ト向うより捕り手、八人、誂らへの花四天の形、銘々紅葉の枝を持ち、出て來り、直ぐに本舞臺へ居並び

捕一　なんと何れも。この戸隠の山奥に、怪しき變化の顯はれ出て、また往還へも折々出で、種々様々に姿を變じ
捕二　多くの人を惱ますとの訴へ。さるに依つて先つ頃より、我れ〳〵どもへ嚴命下り、早く探索なせとの御沙汰。
捕三　それゆゑ斯くも手分けをなし、晝夜を分たず怠りなく、
捕四　路ある所は云ふに及ばず、木樵獵師も通はざる路なき場所には、樹木の枝を切り透かし、木の間を潛り、茨や萱を刈り取つて、橋なき流れある時は
捕五　大樹を伐つてかけ渡し、山へ登り谷へ下り、隈なくあせり探せども、今以て妖怪らしきものに出會はず。
捕六　只見るものは猪狼や兎猿、明けても暮れても空しく山路を巡り、勞して功なき我れ〳〵ども。
捕七　云はるゝ通り、無益に數日を過すと雖も、最早あらかた深山幽谷、殘る方なく巡見なせど、今を盛りと紅葉なす
捕八　まだ踏みも見ぬこの山林、今日初めて分け入つて、縱横四面を馳せ巡り、是非とも妖怪狩り取らねば、上への恐れ。
捕一　せめて變化の有無を糺し、言上せねば我れ〳〵どもが臆せしと、人の嘲りあらんも知れず。

五世尾上菊五郎の音助

中村芝翫の鬼女　市川左團次の維茂

捕二　この山林へ樹木を伐つて、小屋を作り、宿泊なして
　實否を糺さん。
捕三　如何にも面々心を合せ、例へ數日を送るとも
捕三　變化の在所を
皆々　見屆け申さん、
　トきつと云ふ事あつて、皆々梢の紅葉を見やる思ひ入
　れあつて
捕一　その儀は左樣と致して置いて
捕二　あれ御覽ぜよあの如く
捕三　枝を交へし梢の紅葉。
捕四　春の花にも勝れる眺め。
捕五　如何にも見事な樹々の紅葉。
捕六　酒の瓢のあるならば、丁度欲しさの腹加減。
捕七　紅葉を集めて焚火となし
捕八　溫め酒とやつたなら
捕一　彼の唐歌にある通り
捕二　林間に酒を暖め、紅葉を焚くと
捕三　支那も倭も、人の心は變らぬもの。
捕四　ア、、なんの事はない、咽喉の乾いたその時に
捕五　魏の曹操が才智を以て

捕六　多くの兵が唾を出して、咽喉の乾きを
捕七　止めたと云ふ、梅林の話しと、落ちる所は同じ事。
捕八　ア、、もう呑みたくなつて、咽喉がひッつくやう
　だ。
捕一　コレサ〳〵、今に兵粮方が、酒を持つて來る筈だ。
捕二　さう力を落さずとも、ちつとの辛抱。
捕三　ナニサマ、未練を云はずと、辛抱いたさう。
捕四　然らばこれより、この山林へ
皆々　踏分け入らん。
捕一　いづれもござれ。
　ト山颪しになり、皆々よろしく上手へ入る。知らせに
付き、道具幕を切つて落す。
　本舞臺、正面、長唄囃子連中の雛段、下手に岸澤連
中の淨瑠璃。上下の見切り、照り紅葉の林、よき所
に立ち木をあしらひ、日覆より、同じく吊り枝をた
つぷり下ろし、上手雛段と大臣柱の間へ段幕を張り、
舞臺よき所に、誂らへの岩臺を置き、山颪しにて道
具納まる。
　ト直ぐに唄になり

唄〽美しき、人呼び出だす初時雨、濡れて色増す戸隠の
妻乞ふ鹿の聲澄みて。
ト 合ひ方になり、向うより、維茂、狩衣裳、好みの
拵らへ、紅葉の枝に火繩を絡め、出て來り、花道よき
所にとまり、四方を眺め、よろしく思ひ入れあつて
維茂 見渡せば、いづれの山も紅ゐの、色に染めなす梢の
錦、實に唐土人が詠せしに、車を停めてそゞろに愛す楓
林の暮れ、霜葉は二月の花より紅しと……ても風情ある
眺めぢやよなア。
唄〽物思ふ、立舞ふべくもあらぬ身の、袖打ち振りし心
まで。
ト これをキツカケ、下手の段幕を切つて落す。爰に岸
澤連中居並び
岸〽面白や、頃は長月初めつ方、四方の梢も。
唄〽いろ／＼に、錦彩る山々に。
岸〽分けつゝ行くや猛夫が。
唄〽矢竹心の梓弓。
岸〽時雨を急ぐ紅葉狩。
ト よろしくある。此うち、上手幕の蔭より、官女二人
出て來り

官一 アヽイヤ、暫らく
官二 お待ち遊ばされませう。
維茂 これは／＼、高位のお方の御座所とも存ぜず、紅葉
に見惚れ、ツイ浮か／＼
ト 行かうとするを、兩人こなしあつて
兩人 アヽ申し。
岸〽過ぎ行き給ふ御袖を、扣ゆる附き／＼幕張りの。
唄〽内や床しと立出で給ふ。
ト 此うち、鬼女、襠補、姫の拵らへにて、仕丁に手を
引かれ、幕の内より出て、袖を扣へる。
岸〽數ならぬ、身を文字摺り誰れゆゑに、見捨て給ふ
かつれなやと、袂に縋り止むれば。
唄〽流石岩木にあらざれば、心弱くも引留められて、所
は山路の菊の酒。
岸〽汲むや流れの憂き身にも。
唄〽そもや誠が露程あらば、二世も三世も神かけて。
岸〽忘るゝ暇は
唄〽な
岸〽いわい
唄〽な。

岸〽深い縁しも月に雲、伴うてこそ入り給ふ。

ト鬼女、維茂の手を取り、仕丁付いて幕張りの内へ入る。

官一 ア、、嬉しや〳〵。お姫様の日頃戀しい床しいと、思ひ思うたお方に。

官二 計らずも爰でお逢ひ遊ばすも、これも偏へに神々様の、お引合せで

兩人 ござりませう。

唄〽折しも吹き來る松風や。

岸〽秋のよすがを乙女子が、手元もゆらに打つ砧。

唄〽折しもならふ蟲の聲々。

岸〽面白や。

ト官女、兩人にて、よろしくあつて

岸〽あわやと見返る中空に、俄かに輝く電光稻妻、斯くては果てじと彼所なる、車舍りへ。

ト兩人よろしくこなしあつて、上手へ入る。この時、以前の八人、出て、奥を見込む。

唄〽あゝら不思議や恐ろしや、今まで爰に色ある女、とりどり化生の姿を顯はし、そのたけ丈餘の鬼神の形相、面を向くべきやうぞなき。

ト大ドロ〳〵になり、鬼女、衣をかつぎたる拵らへにて、幕張りより出る。これと一時に維茂、太刀を拔き出て、キツと見得。

維茂 ハテ、怪しやなア。戀に事寄せ維茂が、紅葉照り添ふこの庭の、眺めをなさんずその所へ、怪しの汝は何者なるか。この場を妨げなす時は、いま目前に刃の塵。キリキリ正體、顯はせろエ、。

岸〽なう淺ましや我が姿。

唄〽類ひなみなき罪科を、憂き身一つと信濃なる、岩戸隱れの物凄く。

岸〽維茂少しも騷がずして、南無八幡大菩薩と、心に念じ立向へば。

唄〽微塵になさんと髻取り、鬼一口に飛びかゝる。

岸〽しや爰こそござんなれと、恐れぬ怪異、ひるまぬ勇士。

トこれにて鬼女、よろしく岩臺に乘り、髪を振る事あつて、捕り手と立廻り。

唄〽紅葉の梢も火焔となつて、古木木の葉もさら〳〵さら、業通自在の變化の働らき。

岸〽暫しためらひ居たりしが。

唄〽神國王地の惠みを頼み、いづくに鬼神の住むべきかと。

岸〽切り伏せ／＼追ひかくれば、神の應護に戸隱の、鬼神は忽ち亡び失せ、千代萬歳の末までも。

唄〽語り傳へていちじるく。

岸〽めでたかりける。

唄〽次第なり。

トよろしく納まり、引張りの見得、捕り手、棒に並ぶ。カケリにてよろしく。

幕

廿三回恪盡双紙（終り）

淡海の琵琶を
ひくや袖の浦

新曲神奈川八景

――神奈川八景

普通、清元で神奈川八景といふと「神の田の助に雇はれ」といふ文句のものであるが、あれは實は神奈川八景ではなく、花鳥風月の所作なので、この方が本當の神奈川八景である。安政六年七月守田座に上演したもので、花鳥風月の方は一ケ月おくれた八月に上演したものだから、それで間違つたものと思ふ。この頃のは横濱が開港ときまり、そろ〳〵賑やかになつて、江戸の人も大分出かけるので、それを當込んだ淨瑠璃である。作者は三世櫻田治助で、斯ういふ當込みは素早い人であつたから、その趣向は大受けだつたが、夏芝居の無人な一座で入は無かつた。この時の清元は延壽太夫に德兵衛、振附は花柳壽輔、役割は、吉藏が嵐雛助、おたまが坂東玉三郎、與吉が坂東三津五郎、九藏は市川九藏であつた。

新曲神奈川八景（神奈川八景）

神奈川臺の場

役名――旦那、吉藏。藝者、おたま。伊勢參り、與吉。鳶頭、九藏。

清元連中

本舞臺、向う一面淺黄幕、日覆より紅葉の吊り枝。鍍金の月を釣り下ろし、よろしく馬士唄にて幕明く。

ト頭取出て、淨瑠璃名題太夫連名役人觸れあつて、知らせにつき、淺黄幕切つて落す。

正面向う野毛本牧の遠見。前側浪手摺り。上の方神奈川臺の掛け茶屋、腰床几を並べ、下の方淨瑠璃臺、爰に清元連中居並び、直ぐに前彈きになり、道具納まる。

〽皇の御代榮えんと東なる、道のほとりに諸國の、數の景色も四十七、七ついろはの神奈川へ、寫して月にみをつくし。

ト直ぐに伊勢音頭のかゝりになり

〽お伊勢參りと只一口に、よい〱、柄杓振るのは、やんれ輕けれど、

〽大名方のお下りの、お供をすけてお鎗振る、こいつは又重いおやあるまいか、泊りは知れたこの驛と、高をくつた藁苞の、お拂ひ樣が力瘤、和藤内より怖くない、夜も道草喰ひ次第、ませた火打ちに忘れ草。

トこの淨瑠璃のうち、向うより與吉、夏衣裳伊勢參りの拵らへ、藁苞を脊負ひ、柄杓を腰に差し、毛鎗をかたげ出で、よろしくあつて、花道よき所へ坐り、摺り火打を出し、煙草をのみにかゝる。

〽煙草輪を吹く煙さへも、〽直ぐな海道横濱の、見世へ見舞ひをかこつけに、思惑連れて道行の、供は差詰め鳶頭。

トこの淨瑠璃のうち、向うより吉藏、夏合羽帷子、着流し、一本差し、有徳なる町人の拵らへ。おたま、藝者の拵らへにて、連れ立ち出て、ちよつとあつて、後より九藏、鳶の者の拵らへにて、麥藁の唐人笠をかた

げ、酔うたろこなし、鉢卷にて、揚幕の方を振り返り
振り返り
九藏　ヤイ、人に突當つて置いて、挨拶もしやアがらねえ。
啞か聾か、物を吐かしやアがれ。ナニ、どうしたと。
〽えゝ笑はかしやがるな江戸つ子の、膽を見せてと立ち
かゝるを、宥めすかして。
吉藏　コレ／＼九藏、おぬしが行き當つたと云ふのは。
たま　アノ、向うに立つて居るのかいなア。
九藏　素敵に痛え身體で突ツかゝりやアがつて、あやまり
もしやアがらねえ。
與吉　あやまらねえ筈だ。ありやア石の地藏樣だわね。
九藏　道理で默つて居ると思つた。地藏馬鹿にした。
吉藏　さうぢやアあるめえ。九藏馬鹿にしたのだ。
たま　ホヽヽ。オヽ、お前火を打ちなさんしたな。旦那、
つけて上げませう。
〽これも他生の延び張り、男煙管のつけざしを、見るは
目の毒お氣の毒、ちと氣が惡いぢやないかいな、旅は道
連れ夜は猶、臺から見はらし雪の間と、打連れてこそ。
トよろしくあつて、四人舞臺へ來る。
九藏　成る程、話しに聞いたより、素敵に立派に出來たな
ア。
與吉　お伊勢樣から上方を、見物に行く時には、こんなぢ
やアなかつたが
たま　あの左に見える二階造りが、遊女町でござんすか
え。
九藏　どこもかしこも、いゝ景色だなア。
吉藏　その筈でもあらうかい。日本中の名所を集めて、爰
へ移したのぢや。
九藏　旦那、また出鱈目な事を云つちやアいけやせん。
たま　さうして、あの橋は、どこの寫しでござりますえ。
吉藏　あれは、アノエヽ……岩國の錦帶橋。
九藏　池の端の錦丹圓の親類かね。
吉藏　馬鹿を云ふなよ。近江八景の寫しだ。
九藏　そんなら、その八景で話しをなせえやし。
吉藏　なんのつまらねえ。そんな事をおれがどうして。
九藏　何も氣散じ。マアお二人で
たま　そんならどうでもわたしらに。
九藏　サア／＼、おやんなせえ／＼。
〽見え渡る、五つの橋は長くとも、瀬田け身請けの金積
んで、關所見物湯廻りの、願ひ金澤しつぼりと〽或る夜

密かに忍び逢ひ、先から先へ氣を廻し、口舌もつきて云ひじらけ、身を知る雨のおやみには、顏に照る手のえぶし松。〽僞はりならぬ本牧の、話しも聞かで憎らしい、今日も粟津の靑嵐と、初雁金の玉章に、こまぐ\書いて待ち飛脚。

ト二人、クドキの振り

〽片便りなる風鈴の、返事を三井の兼言は、月に誓つて石山の、浦島寺の玉手箱、心矢走に封切つて、明けて口惜しき富士が根の、半は暮れて友白髮、嬉しい仲ぢやないかいな、〽睦まじや。

ト口說き模樣よろしくあつて、九藏、前へ出て

九藏　こいつは堪えられねえ。おれも何ぞ八景の外に、……オ、ある　彼の長崎の丸山を、寫して爰に、オ、それよ。

ト唐樂になり、九藏、半天の袖を卷き込み、麥藁細工の唐人笠をかぶり、唐人の形になり、前へ出る。

〽見ぬ唐土の阿房宮、軒を連らねし靑樓は、銀臺にもいや勝る、見世淸掻の賑はしや、〽漢蘭のなア、金たくまんぷく、唐通人がうつゝいめんなごに見ん惚れて、うつからうか／\うつ惚れて、よかりまパア／\よかたいよかたい、こうきういんらくしんぜうくわん。

ト九藏、よろしく

〽浮かれ立つ、折も入り船旗の手に。

ト五色の絹の旗を持ち出し、拍子になり、よろしくあつて

〽滅多矢鱈に程拍子、譯もなや。

トよろしくあつて納まる、與吉、鎗を持ち前へ出て

〽それも神田の御祭禮、三河町から雇はれて、さアさよやまかせ、これわいさのさ、降つた霙か、やれ花の雨、女郎が客振る袖を振る、娘初心に首を振る、對の手拍子足拍子。

トちよつと小短く拍子あつて

〽毛鎗素槍も投げ鎗に。

トこれより九藏、入れ替つて

〽初の一座の連れのうち、面白さうな口合ひに、〽蝦夷松前のお方でも、心に二つはないわいな、その時彼奴が口癖に。

ト吉藏、入れ替つて

〽諦らめて、見れば譯なきありや只の人、凡夫の我れ我れなりやこそ、滅法界に迷ひます、〽お手が鳴るから銚

子の代り目と、上がつて見たれば、お客が三人・庄屋ぽん〳〵狐拳・とぼけた色ではないかいな。
ト此うちおたま・鉢卷、祭扇をかざし・前へ出て
〽よい〳〵よいやさ、よい〳〵よいやな、やれよい聲かけや、〽ャア引けや引け〳〵引くものに取つては、花に霞か子の日の小松、初會杯馴染みの蒖盆、おしやらく娘の袖袂・座頭の褌、菖蒲に大根、御神木の注連繩、まだも引くものいろ〳〵ござる、湯元細工のけん玉ぶり〳〵、そさまゆゑなら心の丈を、しめし參らせ候べくは、なんとのゑいぢやあるまいか。
トよろしくあつてチラシになり
〽浮かれ話しに更け渡る、月みんなみに清元の、いつき五世の末廣く、三つ大三升叶ひます、神の守田の有り難き、榮ふる家こそめでたけれ。
ト皆々、引張りの見得あつて、よろしく

幕

新曲神奈川八景（終り）

命懸色の二番目——雷のお鶴

將其時の振袖は
杜若娘の女伊達
その返報に來り
寄宇の男契情

享和三年十一月中村座の顔見世狂言「埋花御利生鉢木」の大切淨瑠璃で、初世櫻田治助の作になる、極めて古風な妙な淨瑠璃であるが、初演に當つて以來、岩井家特有の舞踊となつて、維新前まで度々上演されたものである。治助は舞踊劇の臺本を書くのは實に巧かつた人で、この人の書いたものは、いつも評判がよく、隨つて世にも殘るところから、太夫連はこの人にばかり書いてもらひたがつてゐたが、この時、一番目淨瑠璃の「よしや男袍箭細」は富本で、松島半二が書き、この「命懸」の方を治助が書いたので、富本齋宮太夫は治助を捕へて、なぜ自分の方を書いてくれぬと恨んだといふ。この時の常磐津は伊勢太夫に岸澤古式部、振附は藤間勘十郎、役割は、雷のお鶴と乙姬が岩井粂三郎、五郎八が嵐三八、馬右衛門が嵐音八、太郎作が三世坂東三津五郎であつた。

命懸色の二番目（雷のお鶴）

太郎作内の場
稲毛城内の場

役名――漁師、浦島太郎作。鮫洲の五郎八 實ハ城の九郎資家。家主、門兵衛。伊釋軍藤國門。原田六郎。子分、三太郎。同、源六。雜兵、馬右衛門。太郎作女房、雷のおつる 實ハ岩金姫。おつる 實ハ龍宮の乙姫、

常磐津連中

本舞臺、三間の間、誂らへの世話場道具立て。下の方、門口。幕の内より門兵衛、家主の形にて、三太郎、源六、酒樽をさし擔ひ、奥へ行かうとしてゐる。屋體囃子にて幕明く。

源三　退かッせえ〳〵。

門兵　これはしたり、その樽を、どこまで持つて行くのでござる。

三太　この酒は、爰の内へ家見舞ひに持つて來たのでごんす。

源六　宿六の太郎作に、渡さにやアならない。

兩人　退かッせえ〳〵。

門兵　それはさうであらうが、この家主が爰に居て、滅多に奥へやられるものか。待たつせい〳〵。

兩人　イヤ〳〵、退かつせい〳〵。

門兵　待たつせえ〳〵。

ト門兵衛、三太郎、源六、これを爭つて居る合ひ方になり、奥よりおつる、着流し、前垂れがけの形、肩へ手拭をかけ、煙草盆、煙管を持ち出で來り

つる　やかましい事ぢやな。こなさん方は、どこからござんした。

三太　オヤ〳〵、太郎作どのゝお内儀は、こなさんか。

つる　アイ。

三太　サア〳〵、源六、樽を下ろせ〳〵。

源六　合點だ〳〵。

ト樽をおつるが前へ下ろす。

門兵　コレ〳〵、お內儀、滅多な挨拶して、喧嘩にならぬやうにして下さい。

つる　ようござんす。大家樣に御苦勞をかける事ぢやござんせん。

門兵　そんなら、ようござる〳〵。

三太　コレ、源六、見やれ、太郎作どのゝお內儀は、また振り袖だ。あまツ子を見るやうぢやアねえか。

源六　こんな內の身上は、振り袖でなければ廻されまい。

門兵　コレ〳〵、振り袖は花嫁の當り前。惡く云つたら、ほんにとんだ目に合はうと思つて。

三太　そのとんだ目に合ひに來たのだ。サア、宿六の太郎作に、逢ふてい〳〵。

源六　サア、お內儀、太郎作が內になら、爰へ出しやれ出しやれ。

つる　こちの人に逢ひたいとは、何の用ぢやえ。云ふ事があるなら、わしに云ふたがよいわいの。

三太　云へならば云ふてい。コレ、こなたが爰の內へ、昨夜祝言して來たばつかりに、濱川から川崎鮫洲は亂騷ぎだ。こなたは知るまいが、おいらが仲間の頭分五郎八どのゝ、世話をやく女房は持たないで、面當がましく、昨夜祝言が濟んだと云ふ事を聞いたに依つて、祝つて酒を持つて來たのでごんす。

源六　この三太郎や源六が、世話をしかゝつた女房は持こないで、これ見てくれろと云はぬばかりに、この神奈川へ引ツ越して、こんたのやうな美しい女房を持たれては、五郎八どのゝ子分子方は立たぬに依つて、太郎作に逢つて、こなさんにも近付きになる心で、酒を持つて來たのだ。もし酒の上で刃物三昧でもする事もごんせう程に、そこは不承してもらひますべい。

門兵　コレ〳〵お內儀、どうぞ喧嘩でも出來ぬやうに、賴みますぞや。

つる　ハテ、ようござんすわいなア……煙草でものまんせいなア。

三太　コレ〳〵源六、振り袖の際に、落ちついたものぢやねえか。

源六　なんの、いけねえ年も、いかない態をして、落ちつくな落ちつくな。

兩人　太郎作を出しやれ〳〵。

つる　アタやかましい、何ぢやいなア。こりや聞えたわいなア。こなさん達は、わしを知らしやんせんか。

兩人　知らねえがどうした。

つる　わしが口からいゝかと思うて、名乘る事はござんせぬが、五郎八どのとやらにさう云うて下さんせ。太郎作が女房は、雷のおつるぢやと云うたがよいわいの。

三太　そんなら噂に聞いた、雷のおつると云ふは、おぬしの事か。

源六　こいつは面白い。力があるとて高が振り袖、女を相手にはしないから、太郎作に逢ふべい。三太郎、合點か。

三太　そんなら奥へ踏み込んで。

ト三太郎、源六、奥へ踏み込まうと立ちかゝる。おつる、兩人が襟髮を引ツ摑み、引寄せる。

こりやアどうする〳〵。

源六　アイタヽヽ、どうするのだ〳〵。

つる　どうするものぢやぞいなア。こなさん達を迎ひにやる程に、その五郎八どのとやらに、早うござんせと云うてもらひたいわいなア。

トおつる、グイと兩人を引立て、門口へ連れて來て、花道へ兩人を抛り出す。直ぐに三太郎、源六、起き上がり思ひ入れ。おつるにかゝらうとする。おつる、酒樽を取つて抛りつける。これに兩人膽を潰す。

ドレ、髮でも撫でつけようか。大家さん、ござんせ。

ト唄になり、門口をシャンと締めて、奥へ入る。門兵衞も附いて入る。

三太　なんと源六や、あの振り袖めえ、剛勢な力ぢやないか。

源六　なか〳〵おいらが手ごさへにゆくのぢやアねえ。

三太　たうとう二人ながら、あはゝの三太郎になつた。この上はコレ

ト源六に囁く。

源六　合點だ。

ト兩人、橋がゝりへ小隱れする。ト唄になり、向うより五郎八、一腰差して出て來り、直ぐに舞臺へ來て

五郎　太郎作が内は爰か。五郎八がちよつと逢ひたい。

太郎　オイ〳〵。

ト合ひ方になり、奥より太郎作、着流しの形にて出で、直ぐに門口を明け

これは五郎八どのかえ。

五郎　太郎作、よう内に居やつたの。

太郎　サア〳〵、入らつしやい〳〵。

ト五郎八、内へ入り、上の方へ直る。太郎作莨盆を持

つて側へ行き

わしもマア、どうやら斯うやら、昨日引ッ越し女房も内へ入れました程に、喜んで下さい〳〵。

五郎　滅多なこつちやア、この五郎八は喜ぶまいわい。

太郎　なぜに。

五郎　なぜと云ふ事があるものか。コレ太郎作、それで世間が濟むと思ふか。この五郎八が世話やいた女房は持たず、三太郎や源六が、仲人せうと云うた女房は持たいで、聞けば、雷のおつるを女房に持つたと云ふ事ぢやが、なぜ引ッ越すなら引ッ越すと、挨拶はせぬ。それ程にこの五郎八が怖いかえ。

太郎　わしも昨日までは、薄のろけた男でごんしたが、雷のおつると云ふ女房を持つて見れば、もう賽の河原へ行くもごんすまいに依つて、こんな瘠せ腕でも男は男、誰れが怖くつて、この神奈川へ引ッ越して來るもんでごんす。そんな野暮な事を云はずと、鮟鱇の肝あひで、一杯飲ましやらぬか。

五郎　酒飲みたくない。そんならこの五郎八が、怖くないか。

太郎　こなたが鮫洲の五郎八どんでも、一つ長家の嵐三八でも……怖くないと云つちやア、ちつと憎みだが、相手にする氣なら、マア、そんなものぢやごんしないか。

五郎　よいワ。われがさう云へば、おれも男ぢや。例へ下地に百人貳百人女房があらうが、この五郎八が世話燒きかゝつた女房、持つてもらはにやいつまでも、このやかばねにお神輿をぶッ据ゑて、勝負せにやならぬぞよ。

太郎　エヽ、惡い酒だよ……併し、こなさんも鮫洲の五郎八どの、此まゝにも歸られねえかえ。そして又、わしがこなさんの世話燒かしやる女房を持つまいと云つたら、どうする氣だ。

五郎　ハテ、どうと云つたら。

ト一腰に手をかけ

これぢや。一旦男の云ひ出した事、反古にされては顏が立たぬ。ぢやに依つて、命にかけて。

ト思ひ入れあるべし

と云うて、顏見世早々、これもあんまり古いかえ。

太郎　イカサマ、今年始めてと云ふ顏でもなし、こなさんとわしが、何も角突き合はする事もごんすまい。

五郎　さうサ。また一生持つ女房を、オイソレと返事もならぬ筈ぢや、太郎作、物は相談づく、この五郎八の顏も

立つやう、とつくりと料簡して返事をしやれ。

太郎　成る程、五郎八どのゝそれ程に、事を分けて云はしやる事……挨拶しませう。

五郎　すりや挨拶を。

太郎　後方までに。

五郎　面白い。その挨拶で善し悪しの、一腰を誓ひにかけ角菱立てるか但し又、丸う無難に納めるか。

太郎　料簡つけて、いづれ返事を

五郎　マア、それまで酒でも飲んで。

太郎　太郎作、奥で待つて居るぞよ。

ト唄になり、五郎八、奥へ入る。あと太郎作、殘りこなしあつて

太郎　あの漁師の五郎八め、一筋縄でゆかぬ奴。もしや彼れこそ御詮議ある、城の九郎資家ではあるまいか。それにつけても、心ならぬは世の取沙汰。浦島の家の重寶玉手箱を、宗尊親王、由井ケ濱にて水底へ沈め給ひしとの事。何卒玉手箱を手に入れ、提婆品の在所も尋ね出し、水口の家を繼ぐべき願ひ。成就させたいものぢやなア。

ト太郎作、思案して居る。奥より門兵衛、出で

門兵　太郎作どの、爰にござつたか。この繪姿は、お尋ね者の人相書でござる。

ト懐中より繪姿を出し、太郎作に渡す。

太郎　大家樣、これがお尋ね者でござりまするか。

門兵　なんと、可愛らしい者ぢやござらぬか。その繪姿に似寄りの者でも、大事ない程に、縛つて出せば、コレ、得手物になる程に、太郎作どのも隨分氣を附けて、詮議さつしやるがよいぞや。

太郎　ハイ／＼、畏まりましてござりまする。

門兵　わしは、そのお尋ね者の事で、鶴見の陣屋まで行かねばなりませぬ。其うちに、もしも怪しい者がござつたら油斷さつしやるな。

太郎　ハイ／＼、畏まりました。

門兵　コレ／＼、云はぬ事は悪い。褒美は野暮ではござるまい。

太郎　ハイ／＼、畏まりました。

門兵　そんなら、わしは役所へ行きますぞや。

太郎　ようお出でなさりました。

ト門兵衛、門口へ出て

門兵　顔見世の二番目に、珍らしく夫婦喧嘩がないと思へば、お尋ね者の詮議で歩かねばならぬが、ヤレ／＼、芝居

居の大家様と云ふものは忙しいものだ。
ト合ひ方になり、門兵衛、花道へ急いで入る。太郎作、
あたりを見廻し
太郎　この繪姿は、城の九郎が妹、岩金姫の人相書。この
手筋から、城の九郎が、身の上も知るゝならば、この系
圖の一卷と、提婆の一卷を取返し、再び我が手に入るゝ
が、よい料簡がありさうなものぢや……この繪圖をよく
よく見れば、おしも……ハテナア。
ト太郎作、繪圖持ち、思案して居る。合ひ方になり、
奥よりおつる、何氣なく出て來り、太郎作が持つて居
る繪圖を見て、後より覗く。太郎作、おつるによう似
たと云ふ心にて、繪圖を持ちながら、後の方を見る。
この時思はず兩人顔見合せ
つる　こちの人。
太郎　おつるか
ト思ひ入れあつて、ちやつと繪圖を懐中する。おつる
はムツとした思ひ入れにて
つる　モシ、今お前の持つて居やしやんしたのは、何ぢや
え。
太郎　サ、あれは。

つる　何でござんす。
太郎　サ、あれは何ぢややら。オ、何よ、ありや豐國が書
いた粂三が錦繪サ。
つる　成る程、錦繪でござんせう。わたしにも、ちつと見
せて下さんせ。
太郎　なにサ、おぬしが見ずともの事だ。
つる　イエ〳〵、見にやならぬわいなア。
太郎　なぜ〳〵。
つる　何ぢややら、美しい振り袖さんの今の錦繪。
太郎　ヤ。
ト太郎作が胸づくしを、おつる取つて
つる　モシ、聞えぬわいな〳〵。
ト片手にて振り廻す。
太郎　コレサ、どうする〳〵。
つる　どうするとは太郎作どの、こなさん、昨夜、何と云
はしやんした。其方のやうな可愛い者はないの何のと云
うて、わしが身體の痛い程抱きしめて、もう一生たつて
も、外の女と寢はせぬと云はしやんしたぢやないかえ。
それに今のは何でござんす。大方深う云ひ交した女中さ
んと、例へ隔てゝ住むとても、一緒に居る心ぢやと、肌

身に添へて居やしやんす、色のお方の繪姿でがなござんせう。エヽ、ほんに腹が立つわいな〳〵。

太郎　コレサ、とんだ事を云やれ。そんな物ぢやない〳〵。

つる　サヽ、さうでなくば、尋常にわたしに出して見せさんせ。

太郎　サア、それは。

つる　ならぬかえ……ならずばわたしが。

ト無理に太郎作が懷中へ手を入れ、姿繪を引き出し

この繪姿は。

ト悧りする。太郎作、ちやつと取つて懷中する。

太郎　今のをとつくり。

ハテ、見ずともの事、儘にしやいの。

つる　心にかゝる今の繪姿。とつくりとわたしに。

ト無理に懷中へ手を差込み、取り違へて、袱紗包みの一卷を引出し、手早く開き

こりや繪姿と思ひの外。

太郎　高金の王より連綿たる系圖の一卷。

トおつる、とつくり見て

つる　ほんに、こりやア家の系圖。

太郎　覺えがあらば、お觸れある人相書の岩金姬。

つる　エ……して又、系圖を所持なさんす、お前のお身の上は。

太郎　云ふにや及ぶ。越後守光時が嫡子、城の九郞、其方が兄の資家ぢやワ。

つる　ナニ、お前が城の九郞、……資家さまと云はしやんすれば、そんならわたしはお前の妹。

太郎　幼なき時に別れたる、岩金姬であつたよなア。

つる　すりや、その系圖が兄弟の

太郎　疑ひもなき其方の兄。

つる　その一方のわたしは妹。

太郎　今日思はずも

つる　計らずも

太郎　不思議に名乘る

つる　兄さん。

太郎　妹。

ト兩人顏見合せ

つる　兄妹なれば

太郎　其方へ去り狀。

ト今の繪姿をおつるに投げてやる。

つる　なんとえ。

太郎　互ひに包む身の上も、名乘れば現在我が妹、二世を結ばゞ畜生道、それゆゑ其方と縁切つた。暇の狀はその繪姿。

つる　そんなら何と云はしやんす。兄妹ゆゑに夫婦の縁、切つた印の去り狀に、岩金姬のわたしが繪姿、城の九郎の……お前の妹、その兄妹の、因みを捨てるは今爰で。

　ト繪姿を火鉢にくべる。

サア、消えたる岩金姬、わたしは矢ツ張り雷のおつるでござんす。どうぞ變らずお前と女夫に。

太郎　イ、ヤなるまい。たとへこの場の兄妹が、樣子は人の知らずとも、現在爰に資家が、先祖の見給ふ所もあれば。

　ト系圖の一卷まく。

つる　すりやアノ、お前はどうあつても。

太郎　其方が爲には實の兄、城の九郎資家ぢやワ。

　ト奧へ思ひ入れ。此うち花道より門兵衛、先に立ち、後より國門、野袴羽織、大小にて、黑羽織、黑股引の捕り手四人連れ出て、門口に窺ひ、この時

國門　ソリヤ。

　トこれにて捕り手四人踏ん込み、太郎作を取卷く。

皆々　動くな。

太郎　こりや、何となされまする。

太郎　コレ〱、太郎作どのや、わしはなんとも知りませぬが、このお役人樣方が、太郎作が所へ案內しろと云はしやるゆゑ、お祭りの猿田彥の見るやうに、先に立つて來ましたわいの。

太郎　御詮議とは。

國門　ヤア、イケまぢ〱と不敵の奴等。この程稻毛に城廓を構へ、一揆を企て、鎌倉を脅かさんと謀る、叛逆の張本人、城の九郎資家。先刻より門口にて、委細窺ひ聞きたる上は、最早陳ずる詞はあるまい、尋常に

皆々　腕廻せ。エ、、

太郎　すりや、某が身の上を

つる　城の九郎資家と

國門　殘らず表で立ち聞いた。ソリヤ。

皆々　ハツ……動くな。

　ト皆々兩人へかゝる。太郎作、おつる、これを投げ退ける。この時奧にて

五郎　お役人待つた。その叛逆人城の九郎は爰にあり。必らず〱粗忽さつしやるな。

ト鼓の合ひ方になり、奥より五郎八、出て來る。

太郎　城の九郎資家と
つる　名乘つて出さんす五郎八さん。
兩人　して、その仔細は、
五郎　我れ年來、北條一家に恨みあつて、何卒仇を報はんと、思へど叶はぬ世の浮沈。いま時頼は海内の、執權の威を振へは、なか／＼陰謀を發する時にあらず。時節を窺ひこの如く、漁師五郎八となつて潛む折柄、宗尊親王執權の武威を嫉み、鎌倉表騷動なす。これぞ年來の望が本懷を遂ぐる時節と、即ち當國荏原郡稻毛郷に居城を構へ、事を謀りし某が、この場にあるに曇りなき、この太郎作を資家と、粗忽の繩目にかけさせんな、大丈夫の本意ならずと、我れと我が身を縛しめの、恥にかゝらん爲、名乘つて出でたる城の九郎。サア、この資家を引立てくれい。
つる　すりやアノお前が、城の九郎……資家さまぢやと、太郎作どのが今の話しも、幼ない時にお別れ申せし兄さんゆゑ、お顏は知らねど、噂に聞いた形格好、違うたゆゑ、どうかと心疑ひしが、お家の系圖があるからは、資家さまと思うたる、太郎作どのが爰にぢやに、いよいよお前が、城の九郎資家さまでござんすか。
五郎　如何にも。
太郎　さてこそ。
國門　ヤア、我れと我れでの物語りに、資家と吐かした太郎作、それに汝が資家とは、何ぞ慥かな
皆々　證據があるか。
五郎　慥かな證據は、系圖の一卷。

ト懷中より一卷を出す。

つる　ナニ、それが系圖の一卷とな。

ト受取つて開き見る。

太郎　ヤ、、、こりやコレ尋ぬる提婆品……すりや、先つ頃鎌倉にて
五郎　まだほの暗き星月夜、窺ふ者のあるぞとも
つる　オ、、そんならその時お二人は、一つ所に顏と顏。
太郎　しや曲者と止むる拍子
五郎　振り切るはずみに取落せし
つる　すりや、あの系圖と提婆品。
太郎　互ひに知らず
五郎　取り違へ
つる　今まで持つてござんしたか。

兩人　如何にも。

つる　そんなら、お前が誠の兄上。

五郎　城の九郎貧家なるワ。

　ト竹笛になり

サア、太郎作、貴殿の難儀を見るに忍びず、我が不運を顧て、縄目を望むも何卒して、これを手柄に水口の家へ再び起させ申さん爲、別れる事も浮世の義理。餘人にかけず縄打つて、引立てくれよ。

つる　マアノ\待つて下さんせ。如何にお前が御拔群を、思ひ立つたる罪ぢやとて、お命捨てるを妹の身で、どうして餘所に見られませう。わたしも同じお尋ね者、岩金姉と名乗り出で、お前に代る命乞ひ。サア、こちの人わたしに縄をかけて下さんせ。

太郎　イヤノ\、是非はともあれ目前に、人を罪して身の爲を、さうノ\願ふ某ならねば、二人の切なる志しは忝なけれど、この事ばかりは。

國門　ヤア、いらざる身内のその義理立て。城の九郎と事極まりし漁師の五郎八。ソレ、者ども。

皆々　ハッ。捕つた。

　ト五郎八へかゝる。見事に取つて投げ退け

五郎　ヤア、我れと覺悟の貧家へ、慮外の振舞ひ。例へ二十重に圍めばとて、切り拔けんは易けれど、開かぬ運と諦らめて、せめてこれなる太郎作へ、水口の家を立てさせんと、縄目を望む城の九郎、腕ぶしさしたら撫で切りだぞ。

國門　すりや、これなる太郎作は、水口の大順が子孫となしさすれば我が君時頼公、貴殿の家に傳はる所の、提婆品を拜あらんと、即ち佐野源左衛門仰せを受け、貴殿の在所由縁もあればと、この所浦島寺にて尋ねん爲、幸ひ今日止宿あれば、これなる城の九郎に縄をかけ、提婆品もろともに、それを一つの功になし、水口の家名を起されよ。

太郎　さすれば佐野源左衛門どの、某の在所尋ねんと、浦島寺に止宿とな。

五郎　それこそ水口五代の家、引起さんず時節到來。繋がる縁に猶豫して、この貧家が志し、無足にするか。但し又、名もなき者の手にかけさせ、耻辱を取らする心なるか。

太郎　サ、それは。

つる　モシ、勿體ない、どうしてマア、お前に耻辱をかか

さんとて、辭退ぢやなけれどお前こそ、御運の末と諦らめても、命を捨てる心ぢやとて、現在妹の此わしに、緣を結んだ太郎作どの、餘所の嘆きを思ひやり、水口のお家を立つるのに替へての深切、嬉しうござんす。お前代つてどこまでも、お尋ね者の岩金姬。……サア、わたしに繩をかけさんせ。

五郎　イヤ、命を捨つるはこの資家。

つる　イエ〳〵、この岩金が。

　ト互ひに引き退け爭ふ。太郎作、思ひ入れ。

國門　イヽヤ、某が向うたは、城の九郎を搦めん爲。岩金姬に搆ひはない。太郎作が繩打たずば、ソレ、召捕れ。

皆々　腕廻せ。

　トかゝるを、おつる、支へ退ける。

五郎　コリヤ〳〵、其方が手向ひすると、太郎作までが身の難儀。兄が詞を用ひずば、兄妹の緣切るぞよ。

つる　それぢやと云うて、これがマア。

五郎　聞入れなくば、緣切らうか。

つる　そんなら手出しもならぬかいなア。エヽ、ぢれつたい事ぢやなア。

　ト側に居る門兵衛を毆り倒す思ひ入れ。皆々ギヨツとする。門兵衛、頭を掻き、はふ〳〵起き上がり

門兵　とんだ目に合ふものだ……コレ、太郎作どの、どうとも斯うとも片をつけて下さい。この家主の門兵衛は、頭の欠けを燒繼ぎへでもやりたうござる。

國門　白痴者めが。

五郎　サア、太郎作、取逆へたる提婆品、貴殿へ渡す上からは、少しも早う資家もろとも。

太郎　その身を捨てし某が、家名を立てさせ下さる御芳志、否むに聞入れなき上は、お詞に任せ申さん。この上は系圖の一卷、我が手にあつて益なき事、資家どのへ。

五郎　謀叛の罪に命を捨つる、この資家が所持して無益の系圖の一卷。さりながら、城の九郎と疑ひなき、證據の爲の一品なれば、イザ經文と

太郎　系圖の一卷。

五郎　サア、この上は。

　ト後へ手を廻す。

太郎　否むに及ばず

つる　義理に絡まる

國門　縛り繩……ソレ。

　ト捕り繩を太郎作へ渡す。

太郎　貧家、捕つた。

ト五郎八へ繩をかける。

つる　ハア、。

ト泣き伏す。

園門　出かし召された。イザ、とく／＼と貧家に、その提婆品添へられて、浦島寺へ罷り越し、經世に對面いたされてよからう。

太郎　心に濟まぬ出世の門出、本意にあらぬ事ながら、如何にも同道いたすでござらう。

五郎　それでこそ我が寸志も立つ。この返禮に妹と、行く末長く……頼みまする。

太郎　盡未來かけ。

五郎　忝ないなア。

園門　然らば同道。

太郎　お役目御苦勞。

園門　繩付、引ッ立てろ。

ト皆々五郎八を引ッ立てる。おつる、額を上げ

つる　これがこの世の。

ト驅け寄る。

五郎　不便な事を。

ト三重になり、五郎八、先に太郎作、附添ひ、この一件殘らず向うへ入る。後おつる、見送り思ひ入れ。

つる　ほんに世界の憂さ思ひ、今日一日にわしが身に、かかりや繫がる兄さんの、及ばぬ願ひ洩れ聞え、お詞交すも情ない、あのお姿も水口の、家立てさせん爲に捨つるお命、側で見る目のこの身より、是非なう夫が縛り繩、かけての思ひかゝる事、あるとも知らず昨日今日、結びし緣も斯うならう、定まり事であつたかいなう。

ト思ひ入れ。バタ／＼にて、向うより門兵衛驅けて出て來て

門兵　サア／＼、とんだ事だ／＼。

つる　モシ、とんだ事とは兄さんの、お命が助かりましたかえ。

門兵　助かつた段ぢやアない、開かつしやれ。この棒鼻を越ゆると其まゝ、あの大勢で向つて、太郎作どのを押取り卷き

つる　エ、。

ト驚ろく。

門兵　捕り手と見えしも貧家が、一つ穴の狐ども、寄つて集つて太郎作どのを、網乘り物に叩き込み、稻毛の城へ

天保三年八月

附番繪演所座崎原河

一目散。わしやア此方へ一目散、逃げて歸つて知らせに來たわい。

つる　フム、そんなら兄様資家さま、矢ッ張り謀叛の思ひ立ちか。

門兵　オヽサ、皆あの人數も、あの人の云ひつけで、捕り手に來たのでござらうわいの。

つる　すりや、情らしう見せかけても、拵らへ事であつたよなう。

門兵　サア／＼、迎ひをやらしやれ。わしやアマア、この事を早く、庄屋どのへ知らせて來ませう。

ト云ひ捨て、向うへ入る。おつる、向うをキッと見て

つる　例へ兄でもそれ程まで、惡に凝つたる資家さま、殊に大事の太郎作どの、稻毛の城へ虜となれば、もしもの事がないうちに、わしが向つてお命を、救ひ出さで置くべきか。斯う云ふうちも心が急かれて。イデ追ひかけて、オヽ、さうぢや。

ト其まゝ行かうとする。この時後より三太郎、源六、前へ出て、おつるを隔てる。

三太　ヤア、資家さまの企みの邪魔。

源六　岩金姫でも雷でも

兩人　稻毛の城へもやらぬワ。

つる　しや留めだてとは事をかしや。夫ゆゑに石よりも、岩金姫が念力を、やはか通さで置くべきか。邪魔せずとそこ退きや。

兩人　イヽヤならぬ。

ト立廻り手早くありて、おつる、兩人を投げ、キッと見得になり、時の鐘にてこの道具ぶん廻す。

本舞臺、正面松の立ち木、うしろ淺黄幕。下の方に龍燈の松と書いたる高札立て、橋がゝり城廓の張り物。舞臺先、浪板。爰に上の方に國門、以前の形にて立ち身、捕り手四人、種ケ島を扣へ、太郎作、この筒先を提婆品を開き防いで居る。下の方に馬右衛門、雜兵の形にて、連判狀と矢立を持ち扣へ居る。この見得よろしく、ドン／＼、鬨の聲にて道具納まる。

ト矢張りドン／＼かすめて居る。

太郎　こりや、某を何と召さるゝ。

國門　成る程、その驚ろきは尤も。討手と見せて僞つて、この所へ囮き寄せしは、皆これ資家公の深き計略。兼ね

て大義の思し立ち、丹波丹後兩國の内に居城を構へ、水口の浦島の一族を、味方になさんとの思し召し。

馬右　然るに妹御、岩金姫に縁ある其許、生國の事なれば山陰道の地理は詳しき筈。城地になるべき所あらば、繪圖面に認めさせ、その上に一味させよとの仰せつけられ。

國門　違背に及ばゝ、たつた一擊ち、火蓋を切らうか、返答は

兩人　サア〳〵〳〵、どうだ。

太郎　すりや、太郎作が生國ゆゑ、丹波丹後の地理の繪圖面を書き認させ、その上一味に加へん爲、まツこの如く虜にされしか。

國門　如何にも。ならぬと云へば、是非に及ばな

　ト火蓋を切らうとする。馬右衛門、留めて

馬右　イヤ、斯くなる上は籠の鳥、拙者が勸めて是非とも一味の血判いたさせん。先づ〳〵早まり召さるゝな……コレサ、太郎作、とても叶はぬこの場の仕儀、なんであらうと承知おしやれサ。

　ト思ひ入れ、太郎作、思ひ詰めたるこなしにて

太郎　成る程、遁がれ難なき今の身の上……兩樣ともに、承知いたしました。

國門　承知とあれば、資家公にもさぞ滿足、某はこの事言上なさん。貴殿はこれにて右の繪圖面、認めさせしその後は、血判捺ゑさせ繪圖面もろとも、資家公へ差上げ召されい。

馬右　心得てござる。

國門　味方とあれば、岩金姫に緣を組まれし浦島太郎作、資家公とも御連枝なれば、席を下つて對面いたさん。兩樣濟まぬ其うちは、虜の太郎作、必らずとも油斷召さるな。

太郎　何がさて、氣遣ひおしやるな。この上は、繪圖認め差上げん。

國門　ドレ、承知の趣きを、少しも早く言上なさん……キツと申し渡したぞ。

　ト時の太鼓になり、國門、捕り手皆々入る。

馬右　ヤレ〳〵、よくいろ〳〵な事を云ふ男だ。時に、こなたは、さぞ驚ろいたであらう。

太郎　イヤモウ、驚ろくまい事か、聞いて下され、あの女房のおつるが爲に、資家どのは實の兄で、眞實らしう見せかけて、我れと名乘つて繩かゝり、わしが家を立てさせると、騙して爰へ連れて來ました。

馬右　そんな事でごんせう。併しマア、なんであらうと味方をするがようごんす。わしもあの城の九郎さまへ一味して、追ッつけ西の國で百萬石と、二人扶持取る大名になりますて。

太郎　それはさうと、あのおつる、斯う云ふ事を聞いて、定めて狂人のやうになつて居るであらう。

馬右　其やうに氣が揉めては、丹波丹後の繪圖面も引かれまい。マア〳〵、ちつと心を休めたがようごんす。

太郎　成る程、危ふい所を遁がれたも、この提婆品の功力であらう。エヽ、有り難い〳〵。

ト袱紗包みを懷中して

そんなら心を落ちつけて。

馬右　ゆつくり話すがようごんす。サア〳〵、わしも寢轉ぶから、こなたも寢轉ばつしやい。

太郎　イカサマ、ちつと手枕を致さうか。

馬右　それがよい〳〵。ドレ、わしもそべるべいか。

ト兩人手枕をして寢轉ぶ、ト時の鐘になりて、橋がゝりの打返しを返すと、此うち常磐津連中居並び、淨瑠璃になる。

〽實にや記列に預かりし、御法の文に調達が、五逆の罪も自から消えなんものを白雪の、これも素顔ッ立ち姿。

トどろ〳〵になり、花道の中へおつる、腰簑海女の拵らへにて、笘置きの籠へ貝を入れて提げた形にてセリ上がる。

〽つま木こる　蜑の笘屋の佗びしさに、まかせ、そよそよ吹き送る、汐風寒き渚傳ひ、とあるこなたへ佇めり。

トこの淨瑠璃にて、おつる、舞臺へ來る。太郎作、フッとおつるを見て、思ひ入れ

太郎　ヤア、其方はおつるではないか。見れば變つた形で、ようおぢやつたの。

つる　アイ、わたしや人目に立たぬやうにと、海女の形で來たわいなア。

太郎　よう來てたもつた。サア〳〵、爰へおぢや〳〵。

つる　アイ〳〵、わたしやお前に、云ひたい事があつて來たわいなア。

太郎　その筈〳〵。サア〳〵、何なりと、早う云や〳〵。

つる　なんと、見せては下さんせぬか。

太郎　そりや何を。

つる　お前の持つて居しやんす提婆品を、どうぞ見せては下さんせぬか。

太郎　サ、それは。
つる　ならぬかえ。
太郎　これぱつかりは。
つる　あの顔わいの。
〽男の癖に何ぢややら、二人ねる夜の露ばかり、いつの間にやらほどけて解けて、堅い心の結び目は、誰れに解くことて糸芒、霜にやつれし亂れ髮、ほんに昨夜のかごとにも、枕こちよれこちよれ枕、離れぬ仲ぢやないものを。
太郎　コレ〳〵、其やうに引ける事はあるまいぞや。
馬右　オヤ〳〵、誰れだと思つたら、お内儀のおつるどのか。腰簔の姿では、どこへ出しても太郎作どの、噂ア左衞門と見える。御亭主の太郎作どのが、資家公のお味方になられたれば、喜ばつしやい。追ツつけこなさんもナ、奧様になる時は、ゆもじに縫をするがよい。
太郎　その時にこそ其方も、丹後の國へ連れて行かにやならぬぞや。
つる　イヤ〳〵、なんのわたしが、丹後の國へ行くもので。
太郎　そりやなぜに。
つる　お前の心が知れぬに依つて。
太郎　それで讀めた。其方の見たいと云ふは、提婆品を見せぬに依つて、氣まづい者ぢやと思はうが、さう云ふ事ではない。丹波丹後の繪圖面を引いて、其方の兄資家どのへ渡さねば、安心せぬ程に、其方もこの提婆品が見たくば、覺えた事もあらば、名所古蹟のはし〴〵を、なんと云うてはたもらぬか。
つる　そりやモウ、提婆品さへ見せて下さんすなら、思ひ出して見ようわいなア。
馬右　サア〳〵、この馬右衞門も、名所古蹟の分は書きつくる程に、早くやらかしたり〳〵。
つる　わたしが覺えしあらましに
太郎　生野の道の便りぞと
つる　天の橋立文見つるや。
馬右　仕方話しで、聞きたい〳〵。
太郎　思ひ出せば
兩人　オ、それよ。
〽丹後のや、きれとの文珠伏し拜み、天の橋立眺むれば、海へ洲崎は一里半、松の木の間に釣する小舟、網引きの聲のえいさつさ、さつと筏に帆かけて越えて、なんよえ、とんと打つては引く波も、龍の都へ入り聟の、仲人は宵の明星や、濡れて寢よとの浪枕、逢ふ瀬嬉しき床の浦、

嫁は三五の玉手箱、夜は葛城の神ならで、つれなく明けし睦言の、昔思へば浦島が、明けて悔しき屛風山、七世の夫に逢ふ時は、いつか姿は衰へて、身は百歳の老木の柳、松さへ枝を九十九髮、おらが若い時や、若い時おらも、伊勢の濱荻小濡れに濡れた、今は難波の枯れ芦、さりとはさりとは濡れた君樣がなつかしや、春邊のむらやとこよの濱、こま歸りたる女夫事、ひそりし仲も昨日今日、水ことなりの仲直り辛氣よしきは寢て待つ人、の、今宵ことよとて音づれも、泣いて淡路の寢覺めがち、心でまねき迎ひ文。

馬右　ヤンヤ／＼、きついものだ。モシ、時に資家公の仰せつけられたる一味血判、サア、浦島太郎作と書いて、ちつと痛からう、早く見たい／＼。

太郎　サ、それは。

馬右　ならんと云へば、申し上げうか。

太郎　サ、それは。

馬右　ならぬのか。

太郎　是非に及ばぬ、身の願ひには替へられぬ。

ト一卷へ名を記し、馬右衞門が差して居る差添を拔き、太郎作、指を引く。この血汐にて大ドロ／＼になり、龍燈下りる。馬右衞門、悶絶する。おつる、飛び退き袖をかざし、ワナ／＼顫ふ。太郎作、キッと思ひ入れあつて

女房おつるがこの體は。

つる　エ、、情ない、その血汐。

〽折柄空に龍燈の、光りに恐れわな／＼／＼、顫ひ悶ゆる身の業苦、なう恐ろしやと立ち去れば、血汐の穢れに我れと我が、消したる姿を顯はせり。

ト大ドロ／＼。

太郎　さてこそ怪しきおつるが身の上、何者なるぞ。本性を速かに明かすまじきや。

つる　問はれて云ふも恥かしけれど、元より我れは人間ならず、龍宮城の宮中にて、八大龍王大海神、あらゆる數多の魚くずに、かしづかれたる乙姫でござんすわいな。

太郎　さてこそな。

つる　人界へ來りしも、水口の家に傳はりし、三國傳來の提婆品、我が手に入れて歸れよと、父龍王の命を受け御身の妻の姿と化し、この所まで來りしが、血汐の穢れに我れと我が、姿を隱すと思へども、アレ／＼、あの龍燈の光りに恐れ、思はず姿を現せしか。エ、、淺ましい

身の上ぢやなア。
太郎　さてはこの浦島が家の重寶、提婆品の一卷に、心をかけて來りしとや。
つる　八歳龍女も、無垢の世界へ生ぜしとの、御法文の有り難く、父龍王の仰せを受け、取り得ん事もあらんかと、この土に來り候ふぞや。
太郎　元より浦島、龍の都へ由緣なきにしもあらず。乙姫その孝心を感じ、イザ一卷を參らせん。
つる　ナニ、提婆品を得させんとや。
太郎　さりながら、一旦手に入りし玉手箱、海底へ沈めしと聞く、何卒御身神通を以て、我れに與へてたびてんや。
つる　氣遣ひあるな、浦島どの、かゝる惠みに謝し申さん。
太郎　イザ一卷。
　ト一卷をおつるへ渡す。
つる　エヽ、忝ない。望みたんぬる上は、はや龍宮へ歸り申さん。
太郎　イザさせ給へ、早う〳〵。
つる　さうぢや。
　へ今より御身を守らんと、龍女が立ち舞ふ波瀾の袖、昔に返る浪頭、どう〳〵〳〵と打寄する、浪間を分けて入るぞと見えしが、忽ち姿に汐煙り、浦島寺に龍燈の、松は印し殘りけり。
　ト大ドロ〳〵にて、おつる、上の方の切り穴へ消える。太郎作、後見送り、馬右衞門、やう〳〵と氣の附いたるこなしに起き上がり
馬右　合點のゆかぬ今の女、一味連印の妨げなしたか。ドレ、血判を改めて見よう。
　ト馬右衞門、一卷開き、悄りして
ヤ、ヽ、ヽ、この卷に記したる姓名さへ、血判の血汐も消えたるは、ハレ面妖な。
太郎　さては血判なしては後難あらんと、乙姫の神通にてかゝる不思議を見せけるは、ハテ、奇體な事もあるものぢやなア。
馬右　さては資家公へ組みせぬ太郎作、ふん縛つて御前へ引く。サア、尋常に縄かゝれ。
太郎　そこ退いて通せ。
馬右　縄かゝれ。
兩人　どつこい。
　トこれより誂らへの鳴り物にて、兩人立廻りになり、ドッコイと留まる。この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、稻毛の城のかゝり。正面表門、爰に國門、白鉢卷、陣羽織、腹卷、小手脛當の形、太刀にて、松明を持つて立ち居る。下の方、六郎、同じ形にて、松明を持つて立つて居る。この見得よろしく、ドン／＼にて道具納まる。

六郎 時頼公の命受けて、馳せ向ひたる原田六郎、城の九郎、見參々々。

國門 ヤア小癪なり原田六郎、鐵壁に等しき稻毛の城、斯く持ち口を固めしは、伊澤重藤國門、サア、味方に付けばその通り。違背に及ばゝ命がないぞ。

六郎 イヤ推參な。

國門 動くな。

トどん／＼になり、バタ／＼にて花道より團平、誂らへの四天の形にて、橋がゝりへ來り

團平 御注進々々。

國門 何事ぢや。

團平 我れ／＼大將資家公の仰せに從ひ、太郎作をこの城内に虜となせしところ、音に聞えし岩金姬、太郎作を奪ひ返さんと、この所へ參る由、直ぐに注進の仕らうか。

國門 早う／＼。

ト又ドン／＼になり、團平、下座へ入る。花道より傳平、これも誂への四天の形にて、走り出て

傳平 御注進々々。

國門 何事ぢや。

傳平 大力無双の岩金姬、アレ／＼、あれへ參りまする。

國門 その由早く申し上げえ。

ト傳平、ハッと下座へ入る。矢張りドン／＼にて、花道より竹平、倉平、同じ四天の形にて駈けて來り

竹平 御注進々々。

國門 何事ぢや。

傳平 アレ／＼、太郎作を奪ひ返さんと、岩金姬が只今爰へ。

竹平 モシ／＼、我れ／＼が手に及びませぬ。命が物種、アレ／＼／＼、參ります／＼／＼。

國門 打捨て置かれぬ岩金姬、人數を以て搦め捕れ。

兩人 アレ／＼、今この所へ參りまする。

トうろたへ、兩人、下座へ入る。

國門 サア、原田六郎、降參なすか、腕廻すか。

六郎 小癪な事を。

關門 觀念し

ト關門、六郎へ切つてかゝる。兩人立廻りよろしくあつて、ト、兩人切り結び、下座へ入る。ト淨瑠璃、三重を彈きあげる。

〽色めく、四方の梢は花紅葉、岩金姫は向うより、

ト大小入りの人寄せになり、おつる、鉢卷き、衣裳着長し、脫ぎかけの形にて、襷をかけ、長刀を持ち出て來る、花道にとまる。

〽六具を固め出立ちし、花の姿の女武者、烏帽子にあらぬ鉢卷を、しめて寢し夜の香をとめて、好む所の長刀を、伊達に掻い込み勇々しくも、巧手に見ればつま鳥は、稻毛の城を岩とは、添ひ寢せし夜も昨夜の仲で、結ぶの神もしらにきて、三萬四千の軍神を、心に念じ誰れ一人、あたりを拂つて來りしは、實に板額が節筋なり。

トこの淨瑠璃にて、おつる、よろしく舞臺へ來る。此うちに軍兵六人出で、岩金姫を取卷く。

軍六 岩金姫。

皆々 動くな。

つる しほらしい事を云うてぢやなア。

軍一 斯く取卷きし我れ〳〵は、稻毛の城の警固の武士。

軍二 資家公の仰せを受け、もし城中に捕へたる

軍三 浦島太郎作を味方につくるを妨げたし

軍四 奪ひ取らんと來りたる、岩金姫をふん縛る。

軍五 相手は六人、べんなごめ。

軍六 サア、尋常に腕廻せ。

つる 如何にも妾がこの所に來りしは、夫を奪ひ返さんと馳せ向つたる岩金姫、妨げなせば命がないぞ。

軍六 今ふん縛る。

皆々 腕廻せ。

〽岩金につこと打笑ひ、我れを誰れとか思ふらん、板額御前が力をつぎ、身は磐石の岩金姫、敵何萬騎あるとても、秋の梢の木の葉武者、皆ちり〳〵と散亂して、玉の命は草の露、いたしかもしもあるであろ、ねんねこせこせ、ぼんが父はどこへ行た、妻子を後に死出の旅。

ト立廻りあつて、これより太鼓地になる。

〽隈どらぬ顏に紅葉を散らさで起る、夜半の嵐に板家の霰、とめてとまらぬ人つぶて、しやほんにさうぢやえ、すつくと立つたる有樣は、勇々しくも又可愛らし。

軍一 ヤア、云はれざる女の腕立て。

軍二 資家公の味方につかねば

軍三　簀巻きにしてぶち込めと
軍四　その用意眞最中。
軍五　その太郎作を奪はんとは
軍六　及ばぬ事だ、觀念して
軍一　キリ／＼繩に
皆々　かゝれエ、。
つる　ヤア、さう聞いては猶の事、猶豫ならざる夫の大事、
この門一つ、破らずに置かうか。
軍一　ソレ、やるな。
皆々　やらぬワ。
つる　イデ、この門を。さうぢや。
〽例へこの門鐵石で固めたりとも、夫思ひの我が念力、やはか通さで置くべきかと、扉に手をかけ、こりや／＼こりやと息巻きし、一世一度の晴れ業と、色香を含む門破り、ゆすり立つたる欅門、柱を抱へえい／＼聲、瓦はばら／＼ゆさ／＼／＼、和田合戰の板額が、手並も斯くや力業、目ざましかりける。
ト淨瑠璃にて、おつる、正面の門を押し破り、門を持つて皆々を追ひ廻し、キッと見得になる。ト奥より太郎作、五郎八、切り結びながら、出て來り、皆々見得よく居並び、ドッコイとゝまろ。頭取出て
頭取　先づ今日はこれきり
ト打出し。

幕

命懸色の二番目（終り）

再迴廓色凧——奴凧鳶凧

文久二年正月に守田座で上演したもので、作詞は三世櫻田治助である。奴凧は市川市藏が安政度に踊つた事があるが、これは鳶凧を加へた再演である。夢想兵衛と鳶凧を演じた鶴助は、この時初めて江戸へ下つて來たので、そのお目見得といふ意味が大分含まれてゐる。凧の所作は大坂が初めらしい。二人とも大坂出の人である。最初に業平東下りを見せ、それから瀧の川道に變るのは、別に意味は無い。單に春らしい趣きを見せただけであらう。この時の岸澤は、古式部と式佐、振附は花柳壽輔、役割は、業平と駒吉が中村福助、遍照と卯吉が嵐雛助、康秀と狐猿が市川九藏、八ッ橋とおきつが吾妻市之丞、若松とおやまが坂東三津五郎、喜撰太が中村鶴藏、多司馬と奴凧が市川市藏、夢想兵衛と鳶凧が中村鶴助であつた。

再廻廓色凧（奴凧鳶凧）

隅田川の場

岸澤連中

役名　在原業平。僧正遍照。文屋康秀。女仕丁八ツ橋。同、若松。鳶、駒吉。土産賣り、卯吉。茶屋女房、おきつ。茶屋娘、おやま。通人、狐猿。神職、多司馬。國侍ひ、喜源太。旅人、夢想兵衞奴凧。鳶凧、

本舞臺、三間の間、正面、常足の二重、段幕を張り下の方、三間のいつもの淨瑠璃臺七人乘り、これを段幕にて隱しある。上下とも紅白の梅林、日覆より同じく吊り枝。爰に頭取出て居る、鳴り物一セイ、浪の音にて幕明く。

ト頭取、淨瑠璃名題太夫連名役人觸れあつて、知らせにつき、下の段幕を切つて落す。これに岸澤連中居竝び、直ぐに前彈きになる。

〽雲霞、あと遠山に夕越えて、津々浦々の道すがら、羨やましくも返る波、猶行き〲て武藏なる、隅田川原に着きにけり。

トこれにて正面の段幕切つて、落す。爰に囃子連中居竝び、直ぐに誂らへの鳴り物になる。眞中に業平、業平菱の狩衣、烏帽子、刺貫にて、中啓を持ち、上手に遍照、老けたる拵らへに襟立て衣、雪洞、扇を持ち、康秀、烏帽子着流し、袖無し羽織、狂言袴を穿き、腰簑卷き、水棹をさし、立ち身にて、古代拵らへの渡し船に居竝ぶ。差し金の都鳥に目を附け、眺め居る。これと一時に花道中程へ、若松、八ツ橋、烏帽子、煉りの白丁を引ッかけ、振り袖娘、袋入りの長柄傘、梅の枝に短册の附きしを持ち、双方見得よくセリ上がる。

〽宇津の山邊の現にも、過ぎ越し方の戀しきに、ふりさけ見れば時知らぬ、山は富士の根いつとても、鹿の子まだらに雪の肌、女とも見えまた男とも、道草分けてまた戀草は、白張烏帽子つがもない、供奉に遲れて招かれて、船場へこそは寄りつどふ。

ト舞臺よろしく、花道の兩人程よくあつて、舞臺へ來り、會釋する。此うち業平、遍照に鳥の事を問ふ。遍照、心得て、三人は船を放れて

遍照　ナウ／＼船人・かしこに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥。

八橋　ほんにマア、嘴と足の美しさ。

若松　水に浮みて睦まじう、魚をついばむ可愛らしさ。

業平　あれをば何と申し候ふぞ。

康秀　あれこそ、この隅田川に群れ居る都鳥と申し候ふ。

業平　ナニ、都とはなつかしや。

〽我れも都に思ひ妻、いざ事問はんよすがさへ、身の徒らに業平が、過ぎし契りを河内なる、名に高安の通ひ路は、誰れか白濱龍田山、また或る時は辛うじて、脊におふ瀨の芥川

ト若松出て

〽いと暗き夜を白玉か、何ぞと人の問ひし時、露と答へて人知れず、大内山を忍び出で。

トこれより八ッ橋出て

〽解けぬ賞も淺間なる、胸の煙りははした女の、此方が身までその夜半は、幾瀨の思ひ物案じ。

トこれより遍照出て

〽實に懺悔には五逆罪、奇緣佛の御誓願、好色菩提おのづから、聞くも語るも唄ふも舞ふも、衆生を諭す法の道。

ト納まる。これより康秀出て

〽聞いて船長小ざかしく、宮戸川邊の棹の歌、幾世重ねてならえゝ來たれども、碁盤面で目かしげくなら、柴の納戸も押せど鳴る、霰霙がはらはらと降ればなら、音に紛れて忍び逢ふ日なう、えん／＼さんやれ〽鄙びた唄も時の興。

ト康秀、よろしく納まる。若松、業平、口說き模樣。

〽鄙も都も變りなく、人目忍ぶの兄弟が、みゝへ染めたる春日野の、若紫の水莖に、嬉しの限りうつ／＼と、寢もせで夜半を明石瀉〽すまぬ涙に染殿の、情の義理に隔てられ、添や昔の春ならで、焦れ過ぎ行く浮き雲の、晴れて隈なき胸の月〽我れも思ひは陸奥の、信夫文字摺り誰れゆゑに、亂れ染めにし戀衣、はや明けなんとほのめくは、野守りの篝ならずして、我れを追ひ來るますら男の、鬼一口と書き綴る、伊勢物語り優しかりける。

ト三重になり、流し、五人一時引拔 。上に駒吉、鳶の者、惠方參りの拵らへ、餅花柳の枝をかつぎ、おや

ま、茶屋娘、振り袖の拵らへ、火繩竹の先へ附けしを持ち、おきつ、茶屋の女房の拵らへ、莨入れ、煙管など野がけの模樣。花道に卯吉、王子土産の辨慶をかたげ、世話商人の形。狐猿は俳諧師、被布の羽織、通人の拵らへ、扇を持ち、いづれも他所行きの形。舞臺は王子權現の對の長提灯、上手へ瀧の川道の石の榜示杭を出す。この仕組みよろしくあつて

〽折をお江戸の惠方當る、ほんに亥子の王子道、右手瀧の川落ち合うて、今日も飛鳥の日暮に、遠くに海を三河島〽譯もなや。

ト通り神樂にて、いづれも舞臺へ立ち住ふ。

きつ　オヽ、先生さん、さつぱりお見限りでございますねえ。

やま　その筈であります。おかみさんをお持ちなすつてから、內にばかり

狐猿　さにあらず、諸家方へ召されて、寸暇を得ぬゆゑ、マヽ、お互ひに一夜明けてより、若々としてげえす。

卯吉　ハヽア、そんなら丸屋のおかみさんは、あなたにお近付きでござりますか。

きつ　アイ、あのお方は、狐猿先生と云ふ、俳諧をなさるお方サ。

卯吉　それぢやア、狐のお上手と見えまするな。

駒吉　そりや、なぜ〳〵。

卯吉　くわい〳〵の先生だと云ふではないか。

狐猿　ハヽ、こりやア秀逸だ。口が重い癖に、輕い地口とは有り難い。その代り、王子土産は古風なれど、惣仕舞ひと致しやせう。

卯吉　それは有り難うござります。

やま　駒さん、お前も地口を云つて、先生に褒美をお貰ひな。

狐猿　いけやせん。そこが京談の駒吉でげえす。一體、鳶の者の京談と云ふやつは、利かねえ山葵の類ひで受けられやせん。

きつ　京談から駒吉さんが出ても、色は出來ますまいかな。

駒吉　京談を仰しやりますな。

狐猿　オヤ、また地ぐつた。

やま　先生さん、サア、早くお前さんも、なんぞ地口を仰しやりませ。

狐猿　それはいと易い事だ。

駒吉　横濱へ持つてお出でなされればよい。

狐猿　コレサ、俗物と同じ句柄も吐かれやせん。ドレ、ちよつと一服して。

駒吉　ほんに、爰に火繩がござりました。

ト上手の床几へかける。直ぐに名古屋帶になり、向うより喜源太、國侍ひの拵らへ、大小、置き手拭。多司馬、神主、烏帽子、狩衣、刺貫、襟に幣束を差し、嚴しく醉うて、右に瓢箪を持ち、左を喜源太の肩へかけ、喜源太、持ち添へ、介抱しながら、ソロ／＼と出て來る。

〽宮の熱田の明神様へ、こりやせ遠ざかれとは、こりやせ斷りやせぬ。

多司　おもしれえ／＼。

喜源　イヤ、呆れたものだ……身共、今日お番を差繰つて惠方參りに出張つたところ、途中で日頃知り合ひの、お身樣に出合ひ申して、同伴いたしたが、身共、嗜なんで參つた瓢箪を、いつの間にか、みな飲み居つてよたんぼう。たじよにもかじよにも仕るべきやうないちやア。

〽腰の瓢箪御身に呑まれ、身共眞面目で守りをする。

多司　瓢箪々々。

喜源　呆れたものだ。今日は身共、遊山の事ゆゑ、心面白う花道で、ちよつと踊らうと思ふに、お身を肩にかけて踊れるもんで。

多司　わしに遠慮なしに何なりと。ところで、どうも唄ふ事が出來ないから、身が祝詞でも上げて進ぜう。

喜源　イヤサ、何をやらかすにも、片手業で、どうなるものか。

〽片手ふさがり弓手は空きよ、丁度舞臺が惠方に當る、とこ／＼／＼／＼やつとこせのお庇で肩が春の興。

ト花道にて生醉ひの振りあつて

危ねえ／＼。

多司　大丈夫。

喜源　とんだ目にあふものだ。

〽たどり來る。

ト大拍子、多司馬を湯襷にて喜源太、脊負ひ、舞臺へ來る。

マア／＼、この所で肩を休めねばならぬ。

多司　神主で下され、がつかりした。

狐猿　ヨウ、神職には大分酩酊と相見えます。

喜源　アヽ、嗜なんで來た酒には皆呑まれ、揚句の果は身共介抱して歸らねばならず、それに引きかへ、うつらかな

者と同道召さるは貴公達……ア、、有爲轉變の世の中ぢやなア。

トこの時、風の音烈しく、日覆より大きなる四谷鳶の凧に、拵らへ物の人乘りしまひ、舞臺眞中へ落ちて、吹き變つて下り、夢想兵衞、合羽、脚絆、手甲、畫面の形にて出て、悶絶する。皆々見て

駒吉　ヤア、鳶凧に人が乘つて下つて來た。

やま　どうかしなさんした樣子でござんす。

きつ　藥はないかいなア。

ト喜源太、狐猿に思ひ入れあつて

喜源　コレ〳〵、お醫者〳〵、持ち合せた氣付けがござらう。

狐猿　イヤ〳〵、此方、醫者ではござらぬ。

駒吉　マア〳〵、爰に水があるから、これを飲ませて、名を呼ぶがよい。

駒吉　何と云ふ名だか知らぬ。たゞ旅人と呼ぶがよい。

駒狐　旅人やアい〳〵〳〵。

ト皆々介抱する。夢想兵衞、やう〳〵心附く。

喜源　心が付き申したか。どうか〳〵。

夢想　ア、、どえらい目に合せ居つた。凧の糸目が切れくさつたばかりに、道からとんと落されたわいなア。

きつ　ホ、、、人にさんざ氣を揉ませて置いて　もう洒落なさんすのかいなア。

狐猿　何でもこりや上方者でげす。

ト生醉ひの多司馬、ヒヨロ〳〵して、夢想兵衞を見て思ひ入れ

多司　オ、、どうかこの男は見たやうな。

夢想　ヤア〳〵、神職の多司馬さんでないか。

多司　オ、、鶴だ〳〵。

ト鶴藏の事を心得てこなし

喜源　イヤ〳〵、身共は、これに居る〳〵。

多司　イヤ〳〵、鶴に違ひない〳〵。

ト此うち駒吉、鳶凧を持ち出し

駒吉　それでもこれは、鳶凧ぢや〳〵。

多司　やかましい。退いて居めされ。

夢想　ヨウ〳〵、えらい江戸ッ子になられたな。聞いて下され。わしも夢想兵衞と替へ名して、この鳶凧に乘つて唐天竺、女護の島、方々見物して飛んで歩き、やうやう願ひが叶つて御當地へ、吹き飛んで下つたわいの。

多司　ア、、よく來てくれたな。

やま　そんなら、近付さのお方かえ。
喜源　コレ〳〵旅人、それなれば、彼れが親どもからも、言傳てがあつたであらうな。
夢想　ムウ、ござりましたとも〳〵。親仁さんがな、えらい案じで、こちの忰は知つての通りの女子好き、婆でも瞽女でも子守でも、女子さへ見りや、有頂天になる性分ぢやゆゑ
多司　エヽ、そんな事を云ふには及ばぬ。話しは後でゆるりと出來る。それよりは、不思議なのはおのしだ。よく鳶凧へ乘つて、方々歩かれたものだ。
夢想　そりや南天竺の、しやぼんてんの守を持つて居るお庇。ソレ、御富地でも子供衆が吹く、しやぼんの家元ぢやわいの。
多司　どうか、おれにそれを分けてくれぬか。
夢想　アヽ、易い事〳〵。薬屋へ行て百も買へば、世界中飛んで歩かれる。サヽ、半分やりませう。
ト紙包みを渡す
多司　有り難い〳〵。ムウ、それにつけても大阪にない王子土産、コレ〳〵商人さん、その云ひ立てを。
卯吉　イヤモ、買つてくれさへすれば、商賣物のあらましを。
喜源　サア〳〵、待ち兼て居た。所望ぢや〳〵。
ト卯吉、賣り物を持ち、前へ出て
〽歸りまうでの姫達が、誰れに扇屋奥座敷、海老屋が庭の水なぶり、ほんにほうやれ美しい、土産ならば買はしやんせ、極彩色の面冠り、恥かしさうに松茸を、背負つたお多福、氣がついた、取上げお婆を呼んで來い、ハッハッオイタヽ、そりやこそ産れた、價も産むも案じるより、ほんに安いぢやないかいな。
やま　面白い事でござんしたわいなア。
多司　サア、これからは爰へ落ち合つた仲間入りに、貴公も何ぞ始めなせえ。
夢想　アノ、西も東も知れないわしにかえ。
狐猿　當り前でげすの……貴公の振り事、一つ見してえな。
喜源　こりやア一興であらう。そこな勇み、ちよつと相手になつたがいゝ。
駒吉　それでもわつちがやつたら、出來もしねえ癖にと皆さんが、お笑ひなさるであらう。
卯吉　イヤ〳〵、をかしい所がお慰み。サア〳〵。
皆々　やつたり〳〵。

夢想　それもさうかえ……笑ふ門に福々。

　トこれより駒吉、夢想兵衞、誂らへの大坂土産の振り事一くさりあつて納まる。

皆々　ヤンヤ〳〵。

喜源　時に、天から降つた若い男、そさまは守を持つて飛んで歩き、糸目が切れて下界へ下つても、また上がる事が出來るかの。

夢想　イヤ、それには奇術を得たるわしには……イヤ、わしではない、鳶々、舞うて上がるは苦もない事。

多司　成る程、この神職もその守を貰つたから、試して見たいが、貴公から手始め〳〵。

皆々　それが見たいな〳〵。

夢想　さらば奇術は立ち所〳〵。諸仁見來興多經、歸り來れよ〳〵。

　〽あゝら不思議や夢想兵衞、姿かげろふ糸遊の、風に乘じて忽ちに、虛空はるかに。

　トどろ〳〵、風の音になり、立つたまゝ日覆へ引き上げ、中乘りにて向うへ入る。皆々驚ろく。夢想兵衞、飛行して向う正面へ入る。皆々、空見上げて

皆々　ヤア〳〵〳〵。

狐猿　イヤ成る程、奇々妙々でげす。

きつ　あのまゝ上方へ歸りはしまいかいなア。

喜源　イカサマ、女心に案じるは尤もながら、決して彼奴に限り、左樣な不實意の者でおりない。

駒吉　それでも上方者は、油斷がなりません。

卯吉　どうか、いゝ思ひ附きはござりますまいか。

多司　ムウ、ある〳〵。既に天照太神宮、天の岩戸に隱れましませし時、八百萬の神寄りつどひ、神樂を奏して鈿女に舞はす。爰が彼の、唄で和らぐ和國の風土。

狐猿　其術は雨さへ降らせたれば、凧の一つや二つ降らせるに、手間隙がいるべきや。

駒吉　ほんに、こりやお前の持ち前だ。

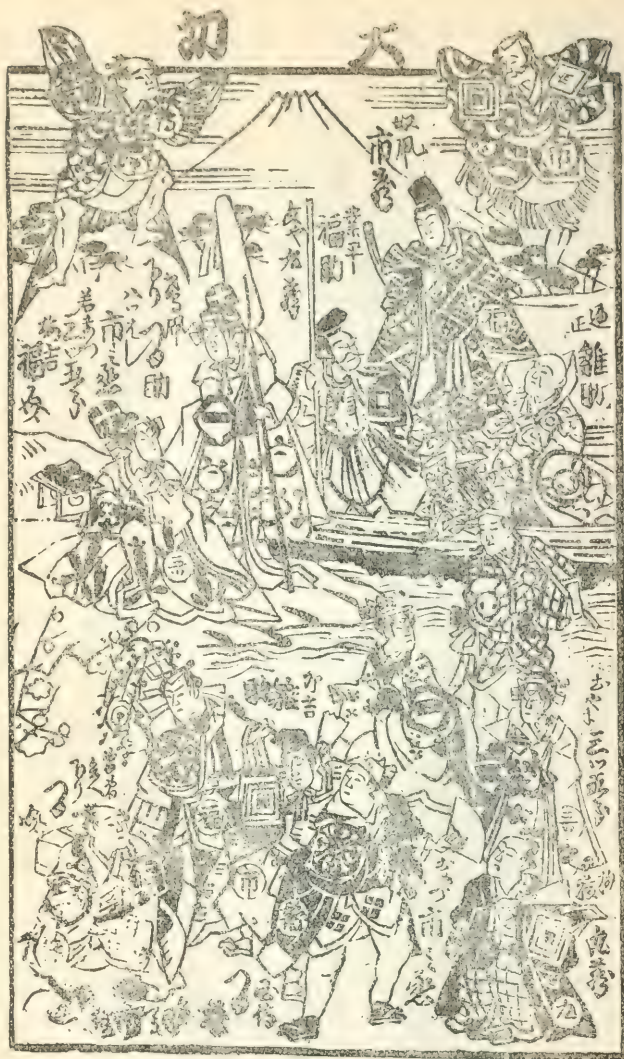
きつ　早う呼び戻して下さんせ。

狐猿　コレ〳〵、急き給ふまい。諸事風雅の業道と云へば凝つては思案に能はずと申せば、斯うとな……エ、エエ、フムウ、春風や、エ、春風や。

　〽黑い羽織に小脇差して、ゆらり〳〵と船場へ下りらるゝ。

　甚だ酩酊、恐るべだの。

　〽後を慕うてなまめく聲々。

初演當時の繪番附

ヨウ、うつらか〳〵。
〽さア、やりやと、舞場へしつかと召された、空には歸る雁の聲
　希くは些柒、急く〳〵しだね。
〽こゝも急ぐ送り船、ゆたのたゆたの皆目覺め、程なく着船、とにどうでげす、ホヽヽヽ。
　ト小猿、よろしくあつて
きつ　面白い事でござんした。併し、御家來様を呼び戻すには
やま　ほんに、あなたが何ぞなさらいでは。
駒吉　成程、その方が、いつち利きがようござりませう。
卯吉　サア〳〵、こりや理詰めだ〳〵。
喜源　ア、、武士には何がなる。しよ事がない。國元の仕形瑠璃。
きつ　こりや聞き事で
女兩　ござんすわいなア。
　ト喜源太、辨慶を三味線のやうに持ち添へ
〽心得たりと囃つくろひ。
　ト仙臺淨瑠璃になる。
〽それはさて置き、爰に哀れを止めしは、すべて源氏の息子株、奢る平家をぶち亡ぼし、九郎苦患の義經どんを、妬みだアがな意趣だアがな、むや〳〵云つたか頼朝どんが、ずねえ頭でむくりをにやし、ぼちくり捜して討手が、ありや〳〵近づき申す、そこで鷲の尾伊勢龜井、軍に得手物あんでもねえと、松のてえ木ひん抜いて、人を蝶々が蜻蛉のやうに、はちき廻ると思し召せ、所へ辨慶ねつと出て、七つ道具を引つちよつて、寄せては抓んで投げるやら、馬ア取つちやア抛るやら、あつちやへごろ〳〵、こつちやへごろ〳〵、ばんや半日手玉に草臥れ申したがな、衣川に踏んばたがつて、薙刀一つ突き立て往生は、勇ましくも又きんどくと、申すばかりはなかりける。
　ト喜源太、よろしく
卯吉　ヤア、まだ形も見えぬ。
駒吉　こりやア神様を祈るより仕方はない。
喜源　サア、神おろしには、女子が先に立たねばならぬ。
きつ　マア、其やうな事仰しやらずと
やま　早う祈つて下さんせいなア。
卯吉　サア、聲を揃へて
喜源　謹請再拜々々々々。すゝめら……かみろみ〳〵の。
〽神子は鈴振る腰を振る、こちや袖を振る、浮かれ北野

の神様へ、今日も明日も、通ひ貴船の約束しめて、果は晴續け駿河の富士に、心中立山、ちん／＼鴨の、お前口舌を岩清水〽神いさめ。
ト此うち多司馬は眞中に立ち見、祈り居る。上下の六人は肌脱ぎ、手踊りよろしくあつて、風の音烈しく打込む
喜源　ヤア／＼、こりやはげしい風ぢや。鎌鼬に切らるゝぞ。
卯吉　どこぞの内へ駈け込むがよい。
駒吉　アヽ、これでは向うへ上がつた夢想兵衛とやらも、さぞ困る事であらう。
きつ　待さん、早うござんせ。
やま　怖い事いなア。
喜源　こりやく、目も口も明かれぬ／＼。
ト此うち五人は上手へ逃げて入る。後に多司馬殘り居て、ドロ／＼にて引抜き、奴凧、好みの拵らへになり日覆へ上がり、よき所にてとまる
〽吹き荒るゝ風に追はれて皆々は、後をも見ずして走り行く〽吹き上げし、風の便りにそよ／＼と、登り詰めたる奴凧、下界はるかに見下ろして〽車々々、車待て、〽女はいゝぞ畜生め〽あゝいゝ女だなア〽オヤ／＼／＼

どうする／＼／＼／＼。
ト奴凧、中乘り、此うち向うへたぐられ行き、また舞臺へ來り
〽めんくふぞ。たぐれ／＼。
ト奴凧、風に吹かれ、向うへ行き、また舞臺へ戻る。
〽ぶきな奴。〽斯うしておれ一人遠いた所が面白くねえ、誰れか來ればいゝ
トよろしくあつて、向うを見やり
奴凧　オヽ、丁度いゝ。向うへ鳶が來た。オヽイ／＼。
ト招きてこなし、
〽別れても、また大坂の國者に、江戸の案内遠慮ない、氣兼ね雲なく。
ト此うち神樂になり、向う正面より鳶凧、好みの着付け、中乘りにて出て來り、本舞臺へ來り、兩人顔見合せ
奴凧　ヤア、誰れぢやと思つたら鶴ぢやねえか。
鳶凧　オヽ、お前は市さんぢやないか。
奴凧　さうして貴樣は、どこへ行くのぢや。
鳶凧　どこと云つて、お江戸へ來たう思つて、やう／＼來は來たが、さつぱり勝手が知れぬゆゑ、よしみ甲斐に教

へて下され。
奴凧　成る程、おれも來立てには、お馴染も勝手も知れず、困つたゆゑ、相身互ひぢや、教へてやらう。よく覺えろよ。
〽これ〳〵、此方に見えるが吉原の色町〽向うに見ゆる櫓が、三丁目の芝居ぢや。
ト兩人、中乘りにていろ〳〵あつて
〽八千餘町のその間は、錐を立てたる隙もなし〽なんと繁華であらうがな〽イヤモ、三千世界に此やうな所があらうぞい、殊にこなたに出合ふとは〽とんび思へば深い緣〽あれ〳〵、右手に見えるが柳橋、茶屋の山衆が面白さうに踊り居る〽なんとこちらも踊ろぢやないか。
ト此うち兩人、凧の振りあつて
奴凧　オヽ、それがいゝ。貴樣も上方のお土産に、なんぞやつたり〳〵。
鳶凧　そんなら御免を蒙むつて。
〽戀の重荷のなア島の內。
奴凧　ナニ、島の內とは氣が惡い。
〽送り迎ひに舁く駕籠の、誰れであらうと、してこいな。
奴凧　オツと、靜かに賴みやす。

〽棒鼻に、括りつけたる提灯の、日柄の約束して來たな。
鳶凧　エヽ、畜生め。サア、これから二人で踊りやせう。
〽とんび鳥にわしやなろならば、飛んで行きたや主の側。
ト此うち鳶凧、中乘りよろしく廻つて、舞臺へ來り、奴凧と振りあつて
ア、待て〳〵、さう無闇にたぐるな。いけねえ〳〵。
ト本釣り鐘を打込む。
〽はや入相を告げ渡る、鐘は上野に吹き來る風に、たぐりかけ出す糸に連れ、雲井はるかに。
トこれにて早渡りにて、奴凧、よろしく向う揚げ幕へ入る。後に鳶凧殘り
〽あゝ、これ〳〵待ちなよ、おれ一人置いて行くとは情ねえ、あれ〳〵〳〵と夕まぐれ、澤だつ雲に風荒く、糸目は切れて。
ト此うち鳶凧、中乘りにて所々を廻り、トヾ本舞臺へ落ちる。ト紅絹の襦袢、梅の持ち枝を持ちし地廻り四人、左右よりかゝり、引立てるはずみに、四谷鳶引拔くと、下に白地の浴衣、縮緬の扱帶になり、取卷きし見得。
〽浮き立つや、梅に鶯まだ馴れやらで、竹に心の殘る

雪、それも無理ではないわいな、面白や〳〵實に七里の閏年、一の守田の初芝居、めでたかりける次第なり。

トよろしく立廻つて、どつこいトとまる。めでたく打出し。

幕

再廻廓色爪（終り）

榮華の夢全盛遊——榮華の夢

文政十年十一月、市村座上演の顔見世狂言「重年花源氏顔鏡」の四建目淨瑠璃で、福原の都へ出來た新廓といふ、よく顔見世にある趣向、勿論吉原の當込みである。文使ひや藝者や住吉踊は淨瑠璃だけであるが、景清や阿古屋は後の筋にも關聯してゐる。文使ひ狀助が上方から下つて實盛に化けてゐる趣向は、三津五郎の悴簑助が、この時大坂から歸つて來たお目見得だからで、父が當り役たる實盛に化けたのである。斯うした洒落や、俳優と看客が普通よりも接觸してゐる點は、顔見世淨瑠璃の特徴である。住吉踊が使つてあるのは、當時流行した事を物語つてゐる。流行り物を取込むのは、化政度の顔見世のこれ又特徴である。この作者は二世治助改め松島てう子、常磐津は小文字太夫、岸澤式佐、振附は西川扇藏、役割は、住吉踊清次が三世坂東三津五郎、狀助が坂東簑助、名尾吉が坂東三八、阿古屋が岩井紫若、衣笠が岩井粂三郎、鉦八が市村羽左衛門、お磯が坂東玉三郎、景清が七世市川團十郎であつた。

榮華の夢全盛遊（榮華の夢）

新福原廓の場

役名――上總七郎景淸。傾城、阿古屋。奥女中、衣笠。齋藤實盛 實ハ文使ひ狀助。法印、龜八。藝者、お磯。住吉踊り、淸次。同、名尾吉。

常磐津連中

本舞臺、一面の高足、高欄付き竹の節の通し屋體、向う金襖、浮絲、蝶の散らし、この屋體、上の方、九尺に仕切り、御簾を卷き上げ、中の屋體、御簾、上下突出し、柱に榮花屋と云ふ掛け行燈、紅葉櫻の立ち木、下の方に釋を入れし四角なる木桶、これに手桶を積み重ね、行燈に新福原仲の町と記し、金盛遊と書きたる高張りを左右よき所に取付け、日覆よりも櫻紅葉を打交ぜし吊り枝。すべて御所を吉原に仕立て、飾り付け、正面の屋體に常磐津連中居並び、淸搔にて幕明く。

ト頭取出て、淨瑠璃の觸れあつて、直ぐに前彈きになる。

〽然るに平家世を取つて、花も紅葉も自ら、皆紅ゐに時めくや、榮華の御所を色里に、寫して見ぞと揚屋入り。

ト管絃に淸搔を交ぜたる誂らへの鳴り物になり、阿古屋、振り袖衣裳、襠補、傾城の形にて、駒下駄を履き小褄を取つて立ち身、上の方に景淸、立て髮、羽織衣裳、大小にて手傘を阿古屋へさしかけ、下の方に衣笠、矢の字結び、館模様の形にて、肩へ手を掛け、阿古屋が替へ紋の大箱の提灯を持ち、三人この見得にて、舞臺眞中へセリ上がると、鳴り物打上げ、投げ節のかゝりにて淨瑠璃。

〽馴れし曲輪に引替へて、新福原の夕景色、光り眩ゆき仲の町。〽昨日に今日は色增して、召されて阿古屋が振り出す、雪の素足の八文字。

〽さて提灯に氣を奥女中、野暮なやの字は猶さらに、解かして見たい衣笠は、男の癖ではないかいな。

〽後に手傘を差かけに、七兵衞と云ふ若い者、あゝつが

もなまけた女には、強者とこそ聞えたる、また景清の若緑、春と秋との隔てなき、廿餘年の寛濶な、全盛遊びこれとかや。

トよろしく納まる。

景清　一桓氏が五雜俎のそれならで、おほけなきこの福原へお招ぎは、ほんにしみ〴〵嬉しうて、身のほど返り水入らず、喜見城なる顔見世に。

衣笠　又も變らぬ不束者、首尾して今年も重年は、誠に〳〵有り難い、御贔屓受けていつまでも

景清　一座と云ふは里詞。

阿古　廓を爰に。

衣笠　御所望々〳〵々々。

景清　見れば見る程、イヨ美しいの。

ト扇を翳して思ひ入れ。

兩人　アレ又あんな。

景清　これも偏へに清盛公、保元平治の軍功に、福原の御所を揚屋となし、君臣色で和らぐの思し召し、なんと有り難い御上意ではないか。

衣笠　サイナア、粋な清盛さま。

阿古　元よりあなたも女子の道。

景清　勿論〳〵、お好きなりやこそ誰れあらう。

〽その御器量も義朝の、後家と見るより逋がさじと、待賢門にあらねども、色の夜軍せんものと、お敵を旣に引寄せて、帶を常磐と組打ちに、勝鬨の聲勇ましく。

〽いえそりやまだしも美しや。

トこれより衣笠は清盛、阿古屋は辨天の思ひ入れ。

〽そのお姿を通夜の折、現に見え惚れてから、是非に一夜と滅相な、御願を無理にかけまくも、神さんぢやとて惚れまいものか、まさかお腹も立たぬやら、あした逢瀬と託宣を、待つに甲斐ある汐干潟。

ト兩人、杯を目籠に見立て、振りになる。

〽わしは姫貝振り袖貝の、まだな心で恥かしらしい、殿御思うていつ忘れ貝、筆取る貝に文のつく、その月日貝指折つて、まち赤螺の床ぶしに、うたゝ枕のかたし貝、ほんに辛氣な蛛脊貝、中に辨財天がうな、契りを籠めてそれよりも、平家を守護の有り難き。

トよろしくある。

〽おゝその有り難いでそれ〳〵と、行かんとするを〽コレどこへ〽なにさちよつとゝ振り切つて、揚げ幕さして

ト景清、ツイと向うへ入る。

〽後に二人は悪性か、道理と案じ居るうちに。

ト俄の鳴り物になる。兩人は床几に腰をかけ、煙草のみながら、案じるこなし。淨瑠璃。

〽今ぞ俄と錦着て、故郷へ飾る花道を、

ト矢張り俄の鳴り物にて、向うより景清、鐵棒の先を持ち、實盛、上下衣裳にて、鉢卷、新福原といふ提灯を持ち、この鐵棒を持ち、腰をかゞめて出て來る。

〽坂東武者の實盛が、親の光りは七光り、臺提灯と鐵棒で、淨瑠璃へとは鐘助の、身のほど思ひ佇みし、所を景清伴うて、いつも未熟の申し譯、そこは我れらに打任せ、久し振りにて皆樣をと、云はれて勇む茶屋廻り、只御贔屓ぞ願はしき。

トこの淨瑠璃にて、景清、無理に實盛を連れ、舞臺へ來る。

衣笠　オヽ、清さん。

阿古　よう戻つてござんしたな。

景清　イヤ、身共が戻つたよりは、久し振りで戻つた齋藤市郎、先づいづれも樣へ、ちよつとこれにて。

ト東西をかけ、爰にて景清、口上あつて、實盛景清に辭儀をして

實盛　誠に景清さまのお執成し、有り難う存じまする、……ヤレ／＼、これで少し落ちつきました。

阿古　ほんに實盛さん、お久しうござんすな。

實盛　これは／＼、お二人とも、隨分よろしう頼み上げます。

景清　時に實盛どのには、あちらへござつて、なんぞ變つたお話しでも。

實盛　イヤモウ、お話しと申せば、いろ／＼さま／＼。

衣笠　ちとその話しが、聞きたいわいな。

景清　してマアそれは、どのやうなお物語り。

實盛　サア、その實盛がお物語りは。

ト思ひ入れあつて

それ／＼、何でござる。定めし聞きも及び給はん。一歳某、竹生島參詣の下向、瀨田唐崎の方へ漕ぎ出す所に、矢瀨の方より、二十餘りの女、拔き手を切つてさつ／＼と、浮いつ沈んづ泳ぎ來る。あれ助けよ、殺すなと、船端叩いて、あせれども。

ト淨瑠璃。

〽折から比叡の山颪し、柴船の助けもなく、水に溺るゝ無慘さに。

衣笠　ア、コレイナ〳〵、そのお話しは、この頃まで。

ト衣笠、阿古屋、氣の毒な思ひ入れ

阿古　しかも主は猶御存じ。

ト實盛、思ひ入れ。

景清　それをも知らいで、胡亂者めが。

トきつと云ふ。

實盛　エヽ。

ト顔へ出す。

景清　サア、何ゆゑあつて英雄たる、實盛どのゝ名を僞はり、この福原へ入り込んだは、仔細があらう、眞直ぐに

ト立ちかゝる。實盛、恟りして

實盛　ア、御免なされませ〳〵。

阿古　モシ〳〵、マア〳〵、待たしやんせ。

ト實盛を圍ひ、景清を留めて

成る程、このお人は、實盛さんぢやござんせぬ。こりや五條坂の文使ひ、初雁の狀助と云ふ人でござんすわいな。

衣笠　この阿古屋さんが頼みしやんして、例へ知れても危なげのないやうに、あの永木の實盛さんになつてもらうたのぢやわいな。

景清　そりや又、なぜ〳〵。

ト此うち狀助、衣裳、鬘を脱ぎ、木綿やつしの形になる。

狀助　ハイ〳〵、その譯は、私しが申しませう。

ト前へ出て

モシ、こりや何でござりまする。この阿古屋さんが仰しやるには、今度斯う〳〵で福原へ、大勢傾城が行く程に、ひよつとまた景清さまが、外に色事でもなされませぬか。こなた、どうぞ實盛さまになつて行つて、もしそんな事があるならば、知らせてくれいと云ふ事で。

阿古　アイ、それでわたしが、頼んだのでござんす。

衣笠　どうぞ、もう堪忍して。

景清　ムウ、そんなら眞面目な某が、外に何ぞと氣を廻して。

阿古　イエ、云はしやんすな、知つて居るぞえ。

景清　知つて居るとは。

阿古　コレ。

ト景清が側へ行きかゝるを、狀助、これはと隔てる。阿古屋、矢庭に狀助が胸倉を取る。景清は構はず上の屋體へ上がり、貫盆を扣へる。此方は口說になる。

〽まだな勤めの始めから、味な御見を江戸町に、どうぞと二十五日の夜、世辭を誠と嬉しさに、いつそ命を揚屋町、なんの起證や誓文より、爰へ景清女房と、お前が書いて角町を、入れ黒子せし仲の町、それにこの頃どこへやら、お盛んな事京町も、聞けば恨みぢやないかいな、わたしばかりが情立てゝ、憎い男と振り廻す。

ト狀助を捕へ、いろ／＼ある。狀助、始終ウロウロと思ひ入れ。景清、煙草のみながら

〽見兼ねて景清詞をかけ、いやそりやみんな人の口、上總木綿でない事は。

ト煙管にてこなし。

〽そんなら隠れてなぜ餘所へ、それでわたしが。

ト景清へ思ひ入れ、衣笠、中へ入つて

〽これはしたり、こりやあの口舌の手廻しか。〽寢ての口舌は枕が笑ふ、なぜえゝえゝ野暮らしい、明けりや烏が啼くであろ、知れた半鐘も撞く、それ仲直りする間がないぢやあるまいか、御尤も。〽これまアお前もちと口を、いやもう今の仕合せを、御覽の通りとんだのに、併し親方太夫さん、譯もない事お互ひに、どうしたものと申すのも、憚りながら櫻かな、さつと散らして浮き立つて。

ト流行り唄になる。

〽嫁にやるとて洗濯まで覺え、臍が出臍で嫌はれた、しよことがない／＼、と云ふ顔鏡で見れば、我が身ながらもぞつとする、しよことがない／＼。

ト兩方を見て

〽これでもむづか柏餅〽何ともつれたこの中を、法印さんに一祈り。〽おつと合點田町まで、どれ一走りと行きかゝる。

ト狀助、花道の角まで行き、直ぐに淨瑠璃。

〽折から丁度御法印。

ト向うより緫八、きめ頭巾やつし、着流し、輪袈裟をかけ、錫杖を持ち、下駄がけにて、後よりお磯、金立烏帽子、振り袖の上へ腰蓑、狩衣を引ツかけ、箔臺の汐汲み桶を擔ぎ、兩人、俄の形にて、足を引摺りながら出て來る。これにて狀助は扣へる。淨瑠璃

〽ちがら／＼と足引の、山ぢやなけれど俄の中へ、交せつ返しな生醉に、どう汐汲もちり／＼に、押し分けられぬ人込みを、裾もほら／＼法印に、姿そぐはぬ松風も、やつと打連れ來りけり。

ト兩人よろしく、足の痛き思ひ入れにて、舞臺へ來る。
いそ　龜八さん、もう生酔は來はせまいかいな。
龜八　どうして爰まで。併し、逃げるはずみに足を痛めた。
お前も足を痛めたか。
いそ　アイナア。
狀助　モシ〳〵、法印さん、お前のお出でを。
衣笠　コレイナア、ありや俄の藝者衆ぢやわいな。
狀助　さうかえ。
龜八　イエ〳〵、俄でも、斯うして出れば法印樣、なんぞ御用の筋ならば。
狀助　サア、外でもないがあのお二人、互ひに口舌のツンツンもの。ところをどうぞ御祈禱で。
龜八　モシ、それなれば。
ト祭文になり、龜八、振りになる。
〽受け給ふ、色には有頂天王なり、伊勢に天照大神の、吉野に藏持ち引き連れて、折足柄を承知して、わざと北野の天神と、袖に駿河の富士淺間、それで惡洒落石淸水、八幡きかぬ疳積に、どつと太皷の大社、これぞいつもの神おろし、敬つて申すと念じける。
狀助　ヤンヤ〳〵。
衣笠　とてもの事にお磯さん、爰でお前の俄をも。
いそ　そんならわたしに。
狀助　サア〳〵、やんなさい〳〵。
ト　お磯、振りになる。
〽あはれ古への常磐の松の五丁町、變らぬ眺め狩衣に、振りの袂の可愛らし〽いざ〳〵汐を汲まうよ〽汲まばや須磨の恨みには、歸り來んとて行平さんの、今によすがも浪の上、えゝ憎てらし〽焦れ焦るゝこちや蜑小船、夜半も浮き寢にちらりちらり、ちら〳〵ちらり、千鳥も啼いて明石潟、お顏都と明け暮れに、懷かしいではあるまいか。
ト振りあつて
いそ　おめでたうござります。
ト辭儀する。
龜八　イヨ大和屋。
景淸　龜八、お磯、御苦勞々々々。後に座敷へ　ドリヤ、身共は其うち
ト立ち上がる。阿古屋、思ひ入れ。
ドリヤ、暫し枕と樂しまうか。
ト淨瑠璃

ヘ煙管片手に悠々と、障子の内へぞ。
ト景清、障子の内へ入る。
衣笠　サア〳〵、お前もよい加減に堪忍して、サアあそこへ。
阿古　イエ〳〵、構うて下さんすな、
狀助　所、笑うてにつこりと。
龜八　御機嫌直しに。
皆々　サア〳〵〳〵。
ト淨瑠璃。
ヘ勸めをしほに青簾、解けてぞ御簾の内床し。
ト阿古屋、わざと嫌がるを、皆々無理に屋體の内へ入れる。御簾チョンと下りる。皆々思ひ入れ。
衣笠　ヤレ〳〵、やう〳〵納まつた、ほんに、わたしは若い者やら、茶屋のお内儀さんおややら。ドレマア、ちよつと部屋へ行つて。
ト花道の方へ行かうとする。
狀助　ア、モシ〳〵、お前が行つては花が散る、さうして後が
三人　どうならうえ。
衣笠　なんの、わたしがゐたとても。

狀助　イヤ、仰しやつたり腹の皮。
ヘ雷様ぢやあるまいし、いまに鳴り響くお噂に、及びやなけれど歸つたならば、一座願うて折もあらば、お付合ひにもお情を、受けて見たいとあちらでも、金比羅様や不動様、日親様へは鍋燒を、食べますまいと願かけた、わつちが心を粂三さん、これもしどうぞと取りつける、ヘえゝなんの、聞けばあつちにや此やうな、不器な女子はそれこそほんに、雪か霰か雨よりも、降る程あろによう噓を、月夜烏のそれともに、ヘ可愛いか眞實天道様かけて、ヘそんなら女房に、ヘおかたじけ、そして仲よう共稼ぎ。
トこれより有り合ふ大箱の提灯を臼にして、傘を杵に見立て、大和團子になる。
ヘ今の世の中に立入らぬ、しつ竹はつ竹繼ぎ煙管、やれもさうやゝれやれさてな、刻み煙草がやれ仲人する、うやゝれやれさてやれさてな、親の廣めし大和團子え。
ト龜八、お磯、振りになる。
ヘおつとこちらも色世界ヘ互ひにめでたい顏見世にヘ初に女夫と奈良晒、ヘさても見事なよいこの晒、曬け布ひけとんと突きやれ晒、濡れた同士は肘で突くさ、いない

なさうぢやいな、面白や、それを手にして一踊り。
ト兩人手踊りになる。太鼓地。
〽色どるや、二葉の紅葉いつの間に、薄紅葉より心で染めて、なんと岩垣紅葉に、逢へば互ひにはじ紅葉、これが戀路の花紅葉、面白や。
ト納まる。
〽さア〳〵無性にめでたいは、其方も此方も祝言の、先づ杯と立ち騒ぐ。
トそこら見廻し、銚子、杯を持つて來る。
〽でもまア儀式の熨斗昆布、わたしがちよつと木綿襷、住吉の太鼓樂か、どれと見るうち衣笠は、ついと奥へぞ。
トこれにて皆々、向うを見るうち、衣笠、笑ひを隱して奥へ入る。
ト誂らへの神樂になり、向うより名尾吉、先に白木綿の着付け、丸括け帶、桃色の前垂れをかけ、頭へ手拭を卷き、反古團扇を持ち、清次、同じ形、傘の万度を持ち、これを叩きながら、兩人住吉踊にて出て來る。皆々は衣笠が居ぬゆゑ、これはと思ひ入れ。淨瑠璃。
〽高いなア山から谷底見れば。
清次　ヤトセイ〳〵。

〽瓜や茄子の、やんれ花盛り。
ヤアトコセ、ヨンヤナ、アリヤリヤ、コレワイナ、このなんでもせ。
〽信濃なア信濃の新蕎麥よりも。
ヨイ〳〵。
〽わたしやお前の、やんれ側がよい
ヤアトコセ、ヨンヤナ、アリヤリヤ、コレワイナ、このなんでもせ。
〽二人坊主は丸儲け、御繁昌御祈禱と、面白さうに浮れ來る。
トよろしく兩人、舞臺へ來る。
龜八　サア〳〵、清次さん、先刻から皆樣のお待兼ね。
狀助　なんなと少し私しも。
三人　所望ぢや〳〵。
清次　サア〳〵、名尾吉、しつかりしようぜ。
名尾　合點だ〳〵。
ト兩人身繕ひして
清次　コレ、奴さん。
〽お前はどこへ行かしやんす、わたしは丹波の笹山へ、
〽わたしも連れて行かしやんせ、〽いやや女の道連れ邪魔

になる、〽えゝ胴慾な奴づら、〽これ下に居やしやんせ、わたしや負から可愛うて、忘るゝ隙はないものを、憎まれ口なそんな事、直ぐに婆アに云ひつけて、灸据ゑようか、抓り餅、お前それでもよいかいな、さアあやまつたら指つ切り、氣も住吉の神諫め。

ト清次、振りになり。

〽植ゑて標たものは瀬戸なる南瓜、元の一本なりや庄屋殿へやるべいか、てかのノヽて、かわさでの、てかのノヽ〽兎角南瓜の蔓と、男䲊がくねこして、隣り屋敷へ這ひたがる、〽當り前。

ト納まる。

狀助　御苦勞でござりまする。

ト辭儀する。

龜八　清次さん、幸ひ爰に酒もあり。

いそ　一つお前、上がらんかいな。

清次　面白いね。

狀助　わたしもお相を致しませうか。

龜八　サア〳〵。

ト銚子、杯を前へ出す

清次　ドレ、そんなら一杯引ッかけようか。

ト皆々下に住ひ、酒を始める。

ト琴唄の朧月、獨吟がゝりの淨瑠璃になる。

〽翠帳紅閨に枕並べし床の内。

トこの淨瑠璃の内、上の御簾、ジリ〳〵と卷き上がる。

ト内に阿古屋、下着の形、扱帯にて延べ鏡を持ち、髮の髷を直して居る。この脇に屛風立て廻し、景清の帶と阿古屋の帶かけてあり、此うち舞臺はよろしく酒事。合ひ方になり、清次、フト阿古屋を見て

清次　ホウ、花魁かえ。

阿古　エ。

ト振り向く。清次、思ひ入れ。

清次　ヘエ、そんなら屛風の。

三人　ハテ、云はずとも。

ト阿古屋、恥かしきこなしにて、鼻紙を持ち、又ツイと屛風の内へ入る。清次、思はず

清次　エ、畜生め。

〽結びし夢ぞ有り難き、有り難かりける次第なり。

ト龜八、お礒を引寄せ、抱きつく。狀助、提灯を抱く。清次、名尾吉に抱きつく。三重に片シヤギリなか

むせ。

よろしく幕

榮華の夢全盛遊（終り）

廓の俄の俤を
とりての女文字

菊競艶相肩 ―― 女戻り駕

「戻駕色相肩」の所作が當つて以來、これを女に直した「女戻り駕」が出來て、盛んに流行つたものである。その嚆矢は文化二年の「姿花鳥居の色彩」で、今日猶傳はつてゐるが、本家の戻り駕はいつも變らないが、女の方は上演の度毎に臺本が變つてゐる。爰へ出したのは安政三年九月に市村座でやつたもので、立女形に菊次郎がゐる所へ、大阪から女形の菊五郎が下つて來た。そこでこの二人を女戻り駕に使つたのである。中から出る人物は、本家では禿であるが、女戻り駕では禿の事もあるし、奴の場合もあるし、姫の事もあるし女﨟の事もある。その度毎に變つてゐる。この臺本では島田十三郎といふ二枚目の武士にしてある。これはこの時に先代萩が出た緣を引いたのであらう。しかも別に又世話人が出てゐるなぞ變つてゐる。この補訂者は三世瀨川如皐、常磐津は豐後大掾に岸澤古式部、振附は花柳勝次郎、役割は、およしが尾上菊次郎、おうめが四世尾上菊五郎、十三郎が中村福助、秀作が中村鶴藏であつた。

菊競艶相肩（女戻り駕）

吉原田圃の場

役名——藝者、およし。藝者、おうめ。世話人、秀作。島田十三郎。

常磐津連中

本舞臺、正面、吉原仲の町假の夕景色。灯入りの遠見、誂らへの書割り。舞臺よき所へ毛氈かけし床几、銀張りの莨盆。下の方、黒塀の内より中二階見越しの張り物、後にあふり返し、太夫座になる。櫻の立ち木、同じく吊り枝、遠見の前へ淺黄幕下ろし、通り神樂、清搔にて、賑やかに幕明く。

ト直ぐに頭取、口上觸れあつて、知らせにつき淺黄幕切つて落し、遠見になる。打返し太夫座になり、常磐津連中居並び居て、直ぐに前彈きにかゝる。

〽春秋の櫻紅葉を双見潟、盡きぬ眞砂の御贔屓に、連れて廓の伊達模樣。

ト右の合ひ方、賑やかなる鳴り物入り、揚げ幕より、およし、おうめ、派手なる着付けの上へ、薄柿へ菊の模樣、袖無し羽織、やの字結びの帶、扱帶にて結びつけ、手拭にて鉢卷、すべて女戻り駕籠の誂らへ、市松の障子の日除けの上へ、菊の花を見事に飾り、菊角力の團扇を飾りし拳角力の土俵を四つ手駕籠にして、四本柱、紅白のだんだら、中へ三色の段幕を垂れるやうに引廻し、駕籠の中を隱し、蒲團くゝり枕を並べし體など誂らへの通り、これを兩人息杖を突き、舁き出て、花道にて直ぐに振りあつて

〽やつすや色の四つ手駕籠、おつと投げ杖、やれこれ小杖、おれ込みぢや、合點ぢや、かた山ぢや、合點ぢや、見返り柳なびくとは、嬉しい風のほんのりと、酒に照葉の夕映や。〽これわいな、浮かれ拍子に來りける。

ト兩人花道にて、一くさりあつて舞臺へ來る。かすめし通り神樂あしらひ、およし、こなしあつて

よし　なんとマア、おうめさん、皆さんのお勸めで、假の趣向と此やうに、姿も對の派手模樣。

うめ　サイナア、丁度時候も菊月の、その菊角力拳酒の、土俵を見立ての四つ手駕籠。

よし　擔うて爰まで來たものゝ、先づこれからは差詰めに。

うめ　島原ならば全盛な、小車太夫の禿さんが、駕籠の内から出る所。

よし　その趣向さへまだつかぬ。なんぞよい思ひつきはござんせぬかえ。

うめ　どうしてサア、不器用なこのわたし、なんの思ひつきがあらうぞいな。

兩人　ハテ、何としたものであらうなア。

ト此の時、駕籠の内にて

十三　秋も經て、蝶もなめるや菊の露。

よし　ヤ、あの聲は十三さん。

うめ　すりや、二人をば出し拔いて

よし　いつの間にやら。

兩人　こゝ、駕籠へ。

ト駕籠の内の段幕を落し、爰に十三、着流し、濡れ事の拵らへ、小さ刀にて駕籠より出る。

〽ふりさけ見れば軒毎に、飾るや花の色廓、俄の姿雁の文、とりどりに思惑の、人呼ぶ花の四つ手駕籠、梅のかむろを新らしく、通ふ神なる主ならば、初會に惚れて裏梅に、成駒さく重ね扇も對の形、振りもよい仲四つイ愛、薫る杏葉と梅花むめ、よい相肩の戻り駕籠。

ト十三の手を取り、駕籠より出す事あつて、この文句のうち、木行戻り駕籠振りあつて、十三を絡みよろしくあつて

よし　主が爰へござんして、お庇で趣向が附いたわいなア。

十三　して、世話番の秀作は。

うめ　アイ、秀作さんは……アレ〳〵、向うへ。

ト向うへこなし

三人　オーイ〳〵。

〽呼び招かれて秀作が。

ト右の合ひ方、鳴り物のあしらひ。向うより秀作、世話番の茶屋廻りの拵らへ、裁附けにて扇を持ち出て來り

〽氣轉氣輕くおいそれ、そこでもこちらでも、請け込む門も軒並び、いよこれはお馴染御贔屓の、旦那が流石お杯、頂戴山と夕月も、實は不粹な萩の花、そこをこぼさぬ愛嬌に、ちよつと一拳友狐、浮かれ浮かされ浮かれ來る。

ト秀作、花道によろしく振りあつて、舞臺へ來る。十三、こなしあつて

秀作　イヤ、時に旦那、私しを鶴屋の見世へ待たせて置いて、いつの間にやらこの駕籠へ、拔け駈けの功名とは、大當りでござります。併し、これも今までは御浪々のお身の上も、東山義政さまより、御勘氣がゆりたゆゑ

十三　昔に返るこの十三、廓の名殘りに今日の趣向。

よし　馴染重ねた、おうめさんなりわたしなり、十三さんのお身の上を

うめ　喜び祝うた俄の學び。これからの思ひ附きは

兩人　秀作さん、頼むぞえ。

秀作　どうしてわたしに、その指圖が出來ませう。

十三　これはしたり、おぬしは世話人の事なれば、斟酌せずと、早く〳〵。

秀作　左樣ならば、お指圖と申しては不躾なれど

ト およし、おうめへこなしあつて

先づ美しい揃ひのお二人が、斯う並んだ所をば、當時の役者で云はうなら、差詰め菊五郎に菊次郎、立女形が揃ふと云ふも珍らしい。

トおよしを連れて出て

そこでマア、お前さんの役者を、江戸に見立てゝ吾妻のおよし。

ト又おうめへこなしあつて

又おうめさんの名を其まゝに、難波の梅と役名を附けて、これから江戸と大坂の、意氣地競べや、土地自慢、その問答が戻り駕籠の、紋切り形でござりますよ。

うめ　ア、モシ、秀作さん、その問答のつゞまりは、傳法院の鶴と云うたら、江戸のやうなお屋敷は、大坂にはあるまいと、およしさんに云はれたら、せりふに詰まる事は知れた事。殊に姉さんとも思ふ主へ向つて、云ひ爭ひをしたならば、第一御見物樣にお叱りを受けるわいなア。

よし　わたしも又、このおうめさんとは、やう〳〵の思ひで此やうに、一つ廓の嬉しい出合ひ。爭ふ者は中村の、その由縁あるお前の事。

ト秀作へこなしあつて

傳法院の鶴の代りに、秀作さん、お前がそこへ何なりと

十三　ナニサマ、鶴の代りに鶴藏が藝事とは、こりや一段と出來たわえ。

秀作　ア、モシ〳〵、あなたまでがそんな事を……傳法

初演當時の繪番附

院の鶴よりは、今時は觀音様の鴻の鳥の方が、皆様が御存じでござります。

十三　なんの鴻の鳥ぢや。コレ、あゝの鴻のと申さずと、夜鳥で俄の戯れ事、百舌鳥つかずとも、隼に致さぬか。

秀作　イヨウ、旦那が重い口から、大分お洒落が出ましたね……これは下には置けませぬ。

トおよし、おうめへ思ひ入れあつて

アレ、あの通り、氣も鶺鴒でお出でなさる。熊鷹かれこれ云はうより、時鳥が云ふ事を聞いてくんなせえ。

よし　それも矢ツ張り、鳥盡しの口合せかえ。

秀作　アイ、鳥の内のお祖師様、妙見様を誓ひにかけてもこれは納めてもらひたいね。

うめ　して、どうすればよいのぢやえ。

秀作　ハテ、江戸大坂も打ち交せて、丹前姿の揚屋入りをおよしさんとおうめさんへ、是非お好みでござりまする。

よし　すりや、どうあつても二人で。

うめ　併し、その揚屋入りには、差詰め禿衆がなければならぬが、禿さんの代りに秀作さん、お前立つて下さんすかえ。

秀作　なんだとえ。禿の名代に、このわたしが立つのかえ。こりやアをかしうござりませう。

兩人　ハテ、なんであらうと、頼むわいな。

秀作　仕方がねえ。どうかそこをこぢつけませう。

ト此うちに、駕籠の上に差したる、菊の枝を取る心あつて

サア／＼、これを大小の代りにして、まだ／＼、太夫様へ屆けるこの羽織を着て、丹前姿が

十三　サア／＼、所望ぢや／＼。

ト秀作、おうめ、手傳ひ、およし、拵らへあつて

秀作　幸ひ時も菊月の。

よし　花の大小、握みざし。

〽よしや姿の風俗は、その古へに立返る、振つて振り出す花吹雪、女丹前寛濶色の、様に焦れて柴船の、薫り床しき男山。

トよろしあつて

來いよ。

秀作　ネイ……サ、お前だ／＼。

うめ　イ、エ、わたしは。

秀作　イヤ／＼、お前の番だ／＼。

トお梅を突き出す。
〽これは〳〵来使はれ者よ、今度この度召された機轉、梅の魁香に包ふ、小褄揃へて一つ前。
ト お梅、よろしく振りあつて
うめ 艶の花に比べては
よし 闇の詰めは一人に。
〽あれ〳〵鳥、それ櫻咲く、花にか筆すさみ、浪に浮寐の白き羽は、沖の鷗と汐に、船長さすが棹鹿の、八つの耳ふる巫子の鈴、しやんど、ころ〳〵、りん〳〵、花の振袖に。
トおよし、十三、よろしく振りあつて、これより秀作をあしらふ事、振り模様工風あつて
〽醉うどれ男がこれ、姐え、目元の露の愛嬌は、花にも勝る化つきに〽乗り合、おろりとお侍ひ、コヤ〳〵〳〵、おんどもが容は美麗と目に鏡波、彼の両心をかけまくも、蛙せんずなためになれ〽これ待たしやんせと袖の手を、止むるどよめく濱の樺に、背女は眼を明く、鼓にすつくと立足に
〽烏帽子落しは禰宜どのか、これは險吞還興元、乾飛び退く袖袂、捧ひ給へと似た山の、たまげた田町の法印さん、お守りあれば怪我もなう、ちやらり取り持つ錫杖に、よく相性も氣の知れた、般若腹立つは野暮な事、えゝこれ何事ぞ。
ト十三よろしくあつて
〽花見る人の長刀。
トよろしく納まる。
秀作 ヤンヤ〳〵、所でこれからこの旦那の、過ぎ去る戀の惚氣話しを。
十三 ナニ、我れらが過ぎしわざくれの
よし 思ひのたけを、云うたり聞いたり。
十三 それぢやと云うて。
うめ ハテマア、爰へ
兩人 ござんせいなア。
〽この鄙の、縁も結ぶの神事か、初の御見の杯に、顔に紅葉の紅ゐを、初めて嬉しき仇な女子心は誰れとても、包む思ひの穗に出でて、ほんに浮名も龍田川。
トおよし、よろしく十三へかけて口說き模樣。おうめ、秀作を連れ出て、此うち取持ちを頼む心意氣、およしへ邪魔に入る心意氣。なかしみ心の振りになる
〽戀は仕勝ちの仇惚れは、てにはを酒に紛らせて、吸ひ

つけ煙草のひぞり事、流石心の引け過ぎに、忍ぶ櫺子も廻り部屋、〽ええ浮氣なと駒づくし、取る手も醉なしこなしに、馴されて咲く室の梅、樂しい戀路ぢやないかいな。

トおよし、おうめ、十三、よろしく納まろ。地廻り四人、バラ／＼と出て

四人　やらぬワ。

〽咲き揃ふ、色の盛りの菊合せ、花の錦と三つ蒲團、並ぶ比翼の枕獅子、積る戀ぶけ、やれこれしつぽり締めろやれ、抱いて寢〆めのこれはとな、よい／＼、よい仲と菊角力、黄菊紅菊引きしめて、おつと四つかいお手元を、猩々菊の杯は、受けて目に立つ金目貫、そこらでしつかと寄金菊。

ト誂らへの鳴り物にて、獅子頭を枷に、よろしく立廻り、トゞ獅子を罷く事。所作ダテ模様ありて、チラシになり

〽今を盛りの冬牡丹、ならぶる色の大巾利巾、實にも上なき勢ひの、獅子とらでんも斯くやらん、萬歳千秋市村の、榮ふる櫓ぞめでたけれ。

ト四人よろしく地廻りを引きつけ、見得よく並んで

頭取　先づ今日はこれぎりめでたく打出し

幕

菊競艶相肩（終り）

三幅對戲場彩色

時代は鳥居
世話は歌川

鞘當
善玉惡玉
をし鳥

安政二年五月市村座の上演である。いづれも再演もので、「鞘當」は南北の「浮世柄比翼稻妻」を所作化したもの。善玉惡玉は、天保三年三月中村座の「彌生の花淺草祭」の下の卷を、清元から常磐津に改調しただけ、をし鳥は、文政十一年に富本から常磐津へ改めたものを、更に訂正して長唄と掛合ひにしたもの。在來の物を組み合せた舞踊の例として收錄したのである。「をし鳥」は別項の富本のものとツク嫌ひがわるが、趣向も地も全然違つてゐるので、同じ材料をいろ〲な音曲に變へて演じた例として觀るには適當であらう。

この時の常磐津は豐竹大椽と岸澤古式部、長唄は松永鐵五郎、杵屋勝三郎、望月太左衛門等、振附は花柳勝次郎で、役割は、名古屋、善玉、雌鴛鴦の精が坂東竹三郎。不破、惡玉、雄鴛鴦の精が中村福助、義隆が坂東彦三郎であつた。

三幅對戲場彩色　（納富、善玉惡玉、をし鳥）

仲の町の場
三社祭の場
八ツ橋の場

役名――不破伴左衛門。名古屋山三。禿・たより。
善玉。惡玉。岩見太郎左衛門義隆。雌鴛鴦の精。
雄鴛鴦の精。

長唄連中
常磐津連中

本舞臺、一面、仲の町の體。左右、夫夫座、出囃子雛段、誂らへ通りよろしく、飾り付け、この前へ、吉原夜櫻の景色の道具幕。爰に頭取口上觸れあつて通り神樂・淸搔にて、幕明く。

ト知らせに付き、道具幕、振り落す。仲の町かゝり、出囃子、長唄、居並び・本釣り鐘の頭を打込む。これにて長唄にかゝる。

〽咲くやこの・花の色里見返りの、柳の巷開き染め、いつも月夜の全盛を、歌舞伎の昔いま爰に。

トこれにてセリ出し、鳴り物にかゝる、伴左衛門、山三、兩人ともいつもの拵らへ、この中に、たより、昔風の禿、文箱を持ち、これへ花あやめ差してある。右三人とも見得よく居並び、よろしく納まる。

〽わけ夜櫻の賑ひに、よしや男の吉原へ、振つて振り出すその風俗は、それさこれさ、雪の化粧の富士の峯・江戸紫・筑波嶺と、花の若木の不破名古屋

ト豐後下がり葉にて、三人よろしく振りあつて

伴左　通ひ廓の夜櫻も、除けて通さぬ六法に、寬濶出立の稻妻組。

山三　模樣はそれに引替へて、今宵もしつぽり濡れ燕、待つ侘びつらん彼の君と。

たよ　その花魁の玉章も、お客と間夫の雙葉草、引く手劣らぬ花あやめ。

伴左　日每夜每の全盛は、名に負ふ廓の上林

山三　明くる侘びしき葛城と
たよ　色香も對の遠山は
伴左　思ひくらべん。
兩人　伊達小袖。

〽白紫浮袴白柄を、伊達に扇の鼻平太、色にいかめし銀鐺、人目關立取り措いて、野暮は垣根の外構へ、來ると はお客の廊中、名に立て髭の中夫と客、遠からん紋日 狩屋に、近くば寄つて四つイ變・首尾して色に成駒と、手管手管に花魁を、目眞似に戀のいろは文字、花橘の 禿立ち、なにか辛氣の種ぢややら。〽その雀奥竹に、駒の勇むや土手節も。

ト右の文句のうち、兩人よろしく、この中へ、たより、 掛んで、トヾ口説き模樣になり。また禿と手踊模様。

〽船に召せ〳〵蕁ある里へ、浪の夜な〳〵誰れ待乳山、戀の早瀨の淺草川の、あだし仇浪はまゝと儘よ、引きは 返さに二挺立ち、古りし昔にこりずも通ふ、土手の朝風 身に沁む思ひ、時雨吹傘の相傘に、片身代りに濡るゝは 覺悟、しんぞいとはぬ君ゆゑに、こゝしんぞいとやせ ぬ。

ト たより、團扇持ち、よろしく振りあつて、伴左衞門

山三へ囁く事あつて、これにて、三人の振りになる。

〽嬉しき逢瀨首尾の松、太夫の元へ行く空の。

ト清搔、鳴り物になり、たより、上手へ走り入る。風 の音あしらひ、櫻散る。時の鐘、早渡りやうの鳴り物 になり、伴左衞門、行くなやらじと山三留めて、トヾ 兩人爭ふ チラシになる。

〽雲に稻妻濡れ燕、爭ふ色の鞘當や、當る嵐に散る櫻、 風情ありける次第なり。

ト双方、立廻り、肌脫ぎかけ、とまる。兩人よろしく 大ドロ〳〵にて、この兩人の體へ浪の張り物あふり返 し、この上へ誂らへの網船を出し、艪櫂打ち網なぞよ ろし　置き並べ、兩人の姿を消し、うしろ一面の幕 を延せ、雛段を隱す。大ドロ〳〵にて、兩人とも引拔 き漁師、柿の筒袖、四天、腰蓑、艪櫂打ち網を持つて、 船の内へ立ち上がる。これにて、常磐津連中居並び、 屋體囃子あしらふ。

〽漏れぬ誓ひや網の目に、今日の得物も信心の、お庇お 禮に朝詣り、淺草寺の觀世音、網の光りは夕鰺や、晝網 ば網に風もよく、乘込み河岸の相場にしけは、生貝生飯 生鰯、生臭ばんだばさらんだ、侘びた世界ぢやないかい

中村福助の伴左衛門

坂東竹三郎の山三

な。

ト此うち、船の内にて、鯵を取る事、網打つ振りあつて、船より出て

〽其方思へば七里が灘を、命や捨かい來た者なしかい戻らうよ、すてかい來たもの命や命やすてかい來たものなしかえ戻らうよ、サアサなんとせうかどしよかいな〽撞いてくりやんな八幡鐘よ、可愛いお人の目を覺す、お人の人の人の、可愛いお人の〳〵目を覺ます、サアなんとしよかどしよかいな〽歸りましよ、待たしやんせ、憎や烏が啼くわいな。

ト兩人、よろしく振りあつて、浪の音のやうにドロドロあしらふ。兩人、タヂ〳〵として

〽かゝる折から虛空より、風生臭く身に沁むる、呆れて暫し兩人は、大空きつと見上ぐれば。

ト大ドロ〳〵になり、日覆より、銀張りの大きなる善玉惡玉二つ顯はれる。兩人、艪櫂を持ち、東西の花道へ行く。これをキッと見上げ

漁師　蒟蒻玉か金玉か。

同　なんでも怪しい二つの玉。

兩人　こいつァ稀有だわえ。

〽あゝら不思議やな、夜這星なら長者にも、並んで出たる荷ひ星。

トどろ〳〵にて、兩人、タヂ〳〵と舞臺へ來る。

〽顯はれ出でたる二つ玉、思ひがけなく落ちる風、ぞつと身に沁みうろたへて、悶絶するこそ。

ト大ドロ〳〵にて、漁師兩人の上へ件の善玉惡玉落ちる。兩人の體を隱す。大ドロ〳〵、ト右の二ツの玉、雲に打返し、引上げる。兩人、件の形へ惡玉善玉の面を被り、すつくと立ち上がり、直ぐに、振りにかかる。

〽惡に取つては事も愚や、惡七別當覺禪師、保元平治に惡源太、梶原源太は梅ケ枝を、蛭の地獄へ落した例しもあるとかや、これは昔の物語り。

ト兩人よろしく。

〽それが嫌さに氣の毒さに、おいらが宗旨は有り難い、弘法大師のいろはにほへと、替る心はからくり的、北山時雨ぢやないけれど。〽振られて歸る晩もあり、それでお宿の首尾もよく、兎角浮世は儘にならぬ、善に強きはこれ善の綱、牛に引かれて善惡は、浮かれ拍子の一踊り。

〽早い手玉や下玉の、品よく結ぶ玉襷、かけて思ひの玉

櫂笥、明けて口惜しき、玉手箱〽通ふ玉鉾玉松風の、本はざゝんざで唄へや唄へ、浮かれ烏の烏羽玉やうや、やれ／＼／＼さうだぞ／＼聲々に、しどもなや。

ト兩人、よろしく振りあつて

〽唄ふも舞ふも法の奇特に善玉は、消えて跡なく失せにけり。

ト大どろ／＼になり、善玉、こなしあつて、上手へ消える。惡玉、殘り

〽惡玉一人うつかりと、踊り草臥れぐにやぐ／＼と、蒟蒻玉の如くにて、閻魔に轉げた炭團玉、ちやつと來なさい、來た／＼と、浮かれ／＼て。

ト三重になり、惡玉、よろしく踊りながら上手へ入る、あと大ドロ／＼にて、太夫座を隱す。

本舞臺、一面、八ツ橋、所々に花菖蒲の花盛り、向う川囃子、太夫座打拔き、庭の遠見、誂らへの通り一セイ、浪の音にて、道具納まる。

トこれにて、正面の宮戸川の道具幕、切つて落す。長唄、居並び直ぐに

大ざつま〽既に夕陽西に移り、山嶽の蔭凄ましく、幽淵たる水の面、月も朧に隱れ家の、いときや心なるらん。

トこれに大小のあしらひ、黄鐘の鳴り物打ち合せ、雲上になる。向うより、義隆、律家の鼠衣もうすを冠り、大口、衣の露を取り、片手に金剛杖と見せたる仕込の戒刀を突き出て、花道よき所にて

義隆　我れ弓箭の家に生れし、ど、嵩山律師と姿をやつし、禪法歸依ある足利將軍、義政近付きしも、我が大望の味方を集むる、妨げとなる冠者義弘、義政ぐるみ調伏の、祈願を起す今月今宵。

〽纏ふ禪衣清風も、心は焔の黑白邪正、流れに番ふ妹背鳥。

ト此うち、舞臺前の流へ差し金の鴛鴦飛び來り、水に浮寢の模樣よろしく、義隆、これへ目を付け

湖水に浮寢のあの鴛鴦……傳へ聞く鴛鴦は、雌雄の執着深くして、その雄を殺す時には、忽ち雌鳥戀ひ慕ひ、思ひ死ぬると例しに聞く……幸ひなるかな義政義弘、彼奴ら親子が自滅を招く、最屈強の祈りの生贄……ムウ、あの雄鳥の生血を、酒に浸して服させなば、色に溺れて心を亂す、その虚に乘つて討取る計略……ムウ。

トきつと思ひ入れ。

坂東竹三郎の雌鷺の精

坂東彦三郎の義隆

〽冴え行く眞如の影ならで。
ト此うち、携へし戒刀より小柄引拔き
エイ。
ト鴛鴦へ手裏劍を打つ。
〽きらめく光り誤またず。
トこれにて、雄鳥、羽叩きして其まゝ落ちる。雌鳥、水の中へ潜り、形を隱す。浪の花立ち、浪の音烈しく右の鳥を義隆、金剛杖にて掻き寄せ、取上げ、思ひ入れ。
この生血を酒に浸し、先づ差當る義弘へ、片時も早く。
ムウ、それよ。
ト此うち、腰より異形なる酒の器を出し、これへ鴛鴦の血を搾り込み、こなしあつて
〽悟るも憂しや捨てし身の、分け行く道ぞ遙かなれ、分け行く道ぞ遙かなれ。
ト此せりふへ鼓あしらひ、よろしく、浪の音、時の鐘にて義隆、悠々と上の方八ッ橋を渡り入る。知らせに付き、下手太夫座、あふりを返すと、爰に常磐津連中居並び、直ぐにかゝる。
常〽鏡影水波月の雲、我れに業界の念慮あり。〽實にや拙なき浮世ぞと、思ひ知れども捨てやらぬ、妄執縁こそ恥かしけれ。
ト大ドロ／＼、花道のスッポンより、水音立ち、雌の鴛鴦、髮振り亂し、かけ煙硝パッと立ち昇り、姿を顯はす。
常〽獨り臥す、芦の假寢の物憂さを、誰れかは問はん哀れ知る。
唄〽鴛鴦の衾の徒らに、あれにし夜や散るなみだ、露と答へて諸共に、消えぬこの身が恨みなる。
トよろしく雌鳥、鴛鴦の振りあつて
雌鳥　黄昏時を知る、鴛鴦獨り寢ねず。情なや夫鳥を、邪慳の刃にかけられて、剩へその血汐、生を保つる義弘どのを、迷はさんと岩見が企み。告げ知らせたく二つには、我が夫鳥の血汐の酒、五體に受けし義弘さまこそ慕はしく、思ひを述べんと夫鳥を、焦れて爰に迷ふわいなア。
常〽水鳥の、果敢なき後に年を得て、通ふばかりの江にこそありけれ。
唄〽その言の葉も身に白雪の、積り／＼し愛執輪廻。
常〽眞孤隱れの獨り寢ぞ、憂き身ながらに夫鳥の、これ

中村福助の燕子花の精

まで來りさむらふぞや。
ト雌鳥、八ツ橋にて、よろしく振りあつて
逢ひたい見たい、懐かしい、お懐かしうござんすわいな
ア。
唄〽眞菰苅る堀江に浮いてゐる鴛鴦の、霜の劔にあらね
ども、邪怪の刃に貫かれ、遂にこの世を果敢なくも。
義唄〽ありし契りの忘られず、血汐にかもして義弘の。
常〽五體を假の諸羽がい。
ト大ドロ／＼になり、向うより、雄鳥、撥出てよろし
く
唄〽交す言の葉睦じく、ありし添ひ寢の妹脊川、浮世を
渡ハ花筏〽離れ／＼になるとても、深き契りの思ひ羽は、
いかでか妻と鵲の、橋の置く霜更くる夜毎の獨り寢も、
ト好き程より、雌鳥、兩人寄添ひよろしく
常〽逢ひたや見たや戀しやと、思ひ亂るゝ身すがらを、
何疑うてつれなやと〽恨み返すも恨むるも、泣く音はな
くて哀れなり、この身元より草木にあらねば、臺に輝や
く鏡もなし、煩惱菩提は法の道連れ、あゝら樂しの契り
ながらも、これまでなりや花は根に。
唄〽鳥は古巣へ歸れども、歸らぬこの身、この世を去り
し瞋恚の炎、焦れ行く胸は我れとても。
常〽その仇人を恨みの劔は、比翼の思ひ羽、中を隔つる
罪障の、雲霧起りて庭の面、冥々朦々朧々たる。
トこれまでのうち大小、寐鳥、ドロ／＼あしらひ、兩
人、鴛鴦の所作事よろしく、大ドロ／＼、兩人よろし
く思ひ入れ。此うち、義隆、上手より窺ひ出て
常〽夙より木影に窺ふ律師、それと見るより突立ち上が
り。
ト義隆、好みの四天やうの拵らへ、百日にて出て、ツ
カ／＼と兩人へ立ちかゝり、キッと見得。兩人思ひ入
れ。
義隆　さてこそ怪しき女が振舞ひ。また義弘があの姿。血
汐に五體へ精魂移り、雌鳥と契り交すよな。
ト仕込みの戒刀取上げ
斯く云ふ律師が劔の引導、化鳥諸とも渡してくれん。
常〽ひらりと拔いて切りかくれば。
ト長唄、淨瑠璃の合ひ方。と三人立廻り。鴛鴦、八ツ
橋の上、上り下り振りよろしく狂ひあり。
唄〽拔けつ潜りつ義弘が、五體苦しめ惱亂し、がつぱと
ばかり伏し轉ぶ。

ト合ひ方あしらひ、三人よろしく立廻り存分あつて、トヾ雌鳥、いろ〳〵と苦しみ狂ひ、大ドロ〳〵にて、菖蒲の茂みへ悶絶する。義隆、キッとなり

我れに恨みをなさんずとする、しふしつこい化鳥の精、キリ〳〵姿を立去るまいか。

雌鳥　愚かなり汝が、業、本名明かしや。

義隆　オヽ、その俗性を聞きたくば、名乗つて聞かせる、よつく聞け……我れこそは先年足利の鋒先に亡びたる、播磨に聞く赤松氏、満祐が身内にて、鬼神ありと呼ばれたる、岩見太郎左衛門義隆とは、おれが事だワ。

雌鳥　さてこそなア。

義隆　義政諸とも調伏の、その生贄に汝も共に。

雌鳥　なにを。

ト大ドロ〳〵。雌鳥、ホッと我れに返り、雌鳥諸とも立ちかゝる。三人、所作模様、大小、謎らへよろしく常へ目も紅に染めつたる、紅葉の錦か鵲か、翼も上げ得ぬ鴛鴦の、かけ羽叩き飛び上がり、芦邊をさして飛廻り、見えず見えずみ飛びかゝるを、遁がれ刀の電光石火、刃ひらめく漣や、どう〳〵どつと打寄する、鍔音刃音鳴り響く、すさましかりける。

ト義隆、刀閃めかし、兩人へかゝる。雄鳥、雌鳥、よろしく飛び上がり飛び越え、八ッ橋の上を狂ひ廻る事面白き立廻り、チラシ好き程に、花四天の捕り手六人出て、立廻りにかゝる。ちよつとあつて、トヾ義隆、眞中に、上手雄鳥、下手雌鳥を詰め寄せて、花四天、皆々並よく引張りの見得。めでたく打出し。

幕

三幅對戯場彩色（終り）

去年見し雪に
あられども

再夕暮雨の鉢木

——雨の鉢の木

文政二年六月中村座で初めて上演したもので、普通の鉢の木の雪を夏だけに雨に直したものである。作詞は二世櫻田治助であるが、本卷へ收錄したのは、文久三年七月中村座に再演の分で、三世櫻田治助の補訂である。原作では常磐津であるが、これは富本と竹本の掛合ひに直し、原作の弟を妹に改め、更に弟を中途から出す事にしただけである。弟を中途から出したのは、この時市川新之助が大阪から歸つての初日見得もので、それを弟に扮め、兄たる河原崎權十郎に久々に對面といふ趣向にしたので、權十郎も新之助も共に海老藏の實子であつた。この時の富本は豐前太夫に名見崎德治、竹本は吾妻太夫に矢澤富七、振附は藤間勘十郎、役割は、源左衛門が河原崎權十郎・常俊が市川新之助、玉笹が河原崎國太郎、松下禪尼が市川新車であつた。

再夕暮雨の鉢木（雨の鉢の木）

經世閑居の場

役名──佐野源左衞門經世。佐野源次經俊。同妹玉笹。松下禪尼。

富本連中
竹本連中

本舞臺、一面の淺黄幕、上の方、下野の國佐野の渡りと記せし榜示杭、椎の立ち木、日覆より同じく吊り枝。ズッと上の方、竹本の出語り臺、霞幕を張り下の方、富本の太夫座、打返しの植込み。張り物にて隠し、爰に、左忠太五郎藏、輕衫、草鞋、山刀、斧を持ち、杣の拵らへにて、立ちかゝり居る。山颪しにて幕明く。

五郎　左忠太どの。

左忠　コレ。

　ト思ひ入れ、山颪しにて

佐野源藤太經景さまの仰せを請けて鎌倉より、この下野の佐野へ來り、杣山樵と姿をやつし

五郎　經景さまを敵と狙ふ、佐野源左衞門經世兄弟、見えがくれに討つて捨て、御褒美にあづからんと、この程より窺ふところ

左忠　佐野の渡りの一軒家、田舍に稀れなる鎧櫃、薙刀なんどがあるからは、正しく尋ぬる源左衞門、經世めに違ひない。

五郎　猶も目を付け實否を糺し、手筈を合せ、バッサリと、仕舞ひを付ける上からは。

左忠　源藤太經景さまの、心障りも晴るゝと云ふもの。幸ひこれに鎌倉より、差越されたるこの御狀。

　ト懷より、手紙と見えたる淨瑠璃觸れを出す。

五郎　人目にかゝらぬ其うちに、密かにこれにて。

兩人　讀んで見ようか。

　ト觸れ書を披き

左忠　淨瑠璃名題、去年見し雪にあらねども、罌花雨の鉢の木、淨瑠璃太夫豐本豐前太夫ワキ富本。

五郎 ドレ。
ト受取り見て
相勤めまする役人、市川新車、河原崎十太郎、市川新之助、河原崎權十郎……ヤ、こりや源藤太さまからの密書にあらで、淨瑠璃觸れ。
左忠 古い趣向と云ひながら、此まゝ只も引ッ込まれまい……いよ／＼この所淨瑠璃始まり。
五郎 その爲口上。
兩人 サア、行かうかい。
ト山颪しにて、兩人橋がゝりへ入る。知らせに付き榜示杭、椎の立ち木、引いて取り、よき程に淺黄幕切つて落す
本舞臺、三間の間、中足の二重、丸太の柱、藁葺き屋根、本緣、竹簀、誂らへの通り、丸木の緣、根株の二段。向う間に合ひ鼠壁。上の方、佛檀、下けんどんの襖、これに續き床の間、古筆墨蹟の軸を掛け、眞中より下へ納戸口、更紗暖簾かけ、下の方、ちよつとしたる棚の上へ手箱など置き並べ、この前へ自在を釣り、鑵子をかけ、上の方に竹簀の植木棚、これへ本物の鉢植、梅櫻の青葉、同じく松ともに正花、上下の平舞臺へ槙、山茶花、松の類の根を活け込みし正花の植込み、四ッ目垣へ朝顏からみ、その外、生花の秋の草いろ／＼、上の方へ緣の上より小座敷へ入り口の障子、明けたて。下の方に馬部屋、これへ飼馬繫ぎし體。この前に椎の立ち木、日覆より同じ吊り枝。すべて、源左衞門、侘び住居の體。山颪しにて、道具納まる。
ト本雨一降りふつて、下手樹木の張り物打返す。爰に富本連中居並び、諷がゝりにて
富〽行くへ定めぬ道なれば、越し方いづくならまじ〽浮世の樣を見まほしく、操に代へし墨染の、姿ぞ憂しや浮世なる。
ト向うより、松下の禪尼、誂らへの墨染め衣、脚絆、筆硯袋を頭陀の如く掛け、誂らへの紗の帽子にて、そぎ尼の鬘を隱し、藜の杖、金剛草履を穿き、檜木笠をかざし、出て來る。富本文句へとまりに竹本の太夫座の霞幕切つて落し、爰に竹本連中居並び
竹〽力にはあらで漏る雨を、凌ぎ兼ねたる旅衣。
トこれが富本の太夫座へ取り

淨瑠璃〽花も雪も、拂へば清き袂かな、ありし昔の爪音に。

ト右の合ひ方、雨車かすめて、禪尼、花道にこなしあつて

禪尼　これは一所不住の沙門にて候ふ。我れこの程は信濃の國に候ひしが、先づ一度鎌倉に上り、秋になり候はば又々修行に出でばやと思ひ候ふ。

富〽香りもがなと夕立の、空まだ暗き小家の軒。

ト此うちに奧より、玉笹、切總き振り袖衣裳、妹の拵らへにて、誂らへし古びし緣高、水こぼしなど持ち出て、西端りへ置くこなしよろしく

竹〽尼御前に佇みて。

ト禪尼、門口へ來り、玉笹へこなしあつて

ナウ〳〵お女中、夏の習ひと夕立の、後へも先へも參り難し、簀の端にも只一夜、

竹〽御芳志あれとのたまへば、

玉笹　オヽ、それはお易い事ながら、主の留主に私しが、お泊め申すも如何なり。外をお賴みなされませ。

富〽お優しさまやと愛嬌ある。

禪尼　主の留主とあらば、さてはこなたは身内衆か。

玉笹　イエ〳〵、主と申すは私しの、兄上でござります。

禪尼　そんならこなたも主同然、石の上にも旅寢をすればと、讀みかけてはそれは手弱女。これは又、輪廻離れし尼法師。

竹〽色事の用心なら、氣遣ひあるなとのたまへば。

玉笹　サア、その氣遣ひはござりますまいが、留主にお泊め申しては、兄上へ濟みませねば、暮れぬうちに少しも早う。

富〽外をお賴みあれかしと、納戸の内へ入りにける。

ト玉笹、こなしあつて、奧へ入る。

竹〽天下の賢者を持たし身も、その返答に行き暮れて。

富〽佇み給ふぞ殊勝なる。

ト禪尼、向うを見やり、こなしあつて、下の方、椎の木の元へ雨宿り、こなしにて、椎楠にかけ息らふこなし。

竹〽世の中を、何に經世が侘び住居、營む業も夏の雨。

ト本雨一降りあつて、向うより、經世、着付け袴、大小、肩衣、山下駄を穿き、小さ刀、路次笠をかざし、片手に撫子の花を持ち、出て來る。

富〽禊となして願事も、神は直ぐなる道もせに。

竹〽小川なすてふにはたずみ。

ト經世、花道へとまる。コイヤイ

經世　さても嚴しう降つた雨かな……夫遶檐點滴如琴筑支枕幽齋聽始奇……されば今降る雨の音も。

富〽元きく雨に替らねど、今はかきなす琴の音を、聞けば氣心なか／＼に。

竹〽解分け衣も差詰まる、刀も鈍き浪人の。

富〽あら面白からずの雨の日やな。

ト經世、よろしくこなしあつて、舞臺へ來る。

竹〽禪尼は木影を立出でゝ。

ト禪尼、下手より出て

禪尼　なう／＼、それへ見えられしは、主の御方にて候ふか、待ち設けたるお歸り、前後を忘ずるこの吵降り、今宵ばかりの御惠みを。

經世　それはお易き事ながら、御覽の通りのこの埴生、何とてお宿申すべき。

禪尼　いやとよ。草の莚も我が爲には、玉の臺と、有り難し。

竹〽是非に一夜の御報志を。

經世　ハテ、左樣に仰せござるとも、斯く云ふ我れら兄弟さへ、住ひ兼ねたる體なれば、泊め申さんやうもなし。これより十八丁彼方に、山本の里と申して、よき泊りの候へば、暮れぬ間に一足も、急がせ給へ、旅の御僧。

竹〽急がせ給へと云ひ捨てゝ、庵の內へぞ入りにける。

ト經世、簀戸を明け、入らうとするを、禪尼、袖を控へる。經世、振り拂ひ、內へ入り、簀戸を締める。禪尼、不意なき思ひ入れにて

禪尼　ア、如何にせん曲もなや。由なき人を待つるよなう。

富〽浮世の人の情なきも、民に惠みの屆かぬと。

竹〽思ひ惱みて降りしきる、雨をいとひて。

ト雨車、三重にて、笠をかざし、花道へかゝる。これにて、知らせなしに、この道具廻る、右三重にて、雨を凌ぎ／＼、向う揚げ幕へ入る。

本舞臺、中足九尺の屋體、横手の心、伊豫簀を下ろしあり、下手、馬部屋、垣、植込みの生花など誂らへの通り、よろしくとまる。

富〽行く空の、更に晴れ間も夏の日の、黃昏近く鳴る鐘の、音も仄かなる軒の妻。

ト雨車、合ひ方にて、伊豫簾を巻き上げる。内に、經世、玉笹、居て

玉笹　兄上には、只今お歸りなされましたか。

經世　オ、雨中ゆゑに遲うなつた。

玉笹　最前これへ尼御前が、一夜の宿を貸してくれと、餘儀ない頼みでござんしたが、お前の留主ゆゑ斷わつて、外をお頼みなされと云うたが、此やうに落ちぶれしも、前の世の皆因果。佛へ仕ふその人を、泊めて上げたら報いにて、また好い事もござんせうわいなア。

經世　オヽ、優しい事をよう云やつた。その尼御にはわしも逢うて、宿の無心を云はれたが、泊めて進ぜたく思へども、待遇すべき物もあらねば。

玉笹　イエ〳〵、お泊め申してさへ上げたらば、外にはなんの御馳走にも。

經世　イカサマ、それもそんなもの……吹降りと云ひ、ぬかる道、遠くはよもや行かれまい。少しも早く、呼び返して

兩人　今宵のお宿參らせん。

竹〽二人は軒端へ立出でゝ。

ト誂らへの合ひ方、小鼓コイヤイ。また本雨烈しく降り出す。經世、誂らへの古びし傘をさし、以前の下駄を穿き、門口へ立ち出る。玉笹も後より、以前の路次笠をかざし、立ち出る仕組み、後の文句にて、よろしくあるべし。經世、向うを見やりて

經世　ナウ〳〵、旅人、お宿參らせう……あたりの吹降りに、申す事も聞えぬよなう。

竹〽勞はしの有様や、雨をつれたる風の手に、佇み給ふその景色。

古歌の心に似たるぞや……苦しくも降り來る雨の三輪が崎、佐野の渡りに家もあらなくに……斯樣に讀みしは萬葉に。

竹〽彼の大和路の佐野の渡り。

富〽これは東の、佐野の渡りの雨の暮れに、笠を取られじ轉けまじと、惱み疲れ給はんより。

見苦しくは候へども、一夜は泊り給へや。

玉笹　旅の御僧樣いなう。

經世　オ、イノ〳〵。

竹〽旅の御僧と招かれて。

ト竹本の合ひ方よろしく、雨車にて、禪尼、以前の檜笠を被り、杖を突き、揚げ幕より、戻り來る。此うち

舞臺は道具元へ戻る。これにて、矢張り竹本の合ひ方にて、禪尼、花道にて、舞臺を見やり、經世は此うち舞臺へ戻り、双方見合せて、竹本の合ひ方にて

禪尼　最前我が身が頼みつる、一夜の宿りを聞濟みあつてか。

經世　如何にもお宿參らせん。

禪尼　それは嬉しき志し、假の浮世に假の宿。

經世　假初なれど知遇の緣。

玉笹　一樹の蔭の宿りにも

禪尼　この世ならざる契りあり。

經世　それは江口の雨の木影。

禪尼　これも雨の軒ふりて

玉笹　洩る月影を灯火に

禪尼　浮寢ながらの夢枕。

經世　サア〳〵、これへ。

竹へ杖を力に辿り來る。

ト右の文句にて門口へ來る。經世、立寄り、玉笹も共に笠を取らせ、足を洗はせる事などあつて、此うち、竹本のメリヤス、掠めて雨車。經世、二重へ誂らへの莚を敷き、經世、思ひ入れあつて、先づ〳〵と思ひ入れ。

富へこれへとこそは招じける。

トこれより、草箒のあしらひ

コレ妹、折角お宿を申しても、何參らせん物もなし。

玉笹　イエ〳〵、兄樣、ありますわいなア。

經世　ナニ、あるとは。

玉笹　好い物がござります。さもしい物ではござりまするが、この粟飯を上げましては。

ト好みの飯櫃を出す。經世、恥らふ思ひ入れあつて

經世　アヽ、コレ〳〵、なんと申すぞ。暑氣拂ひに泡盛があるとか。

玉笹　イエ〳〵、この粟飯を。

トまた出すを、經世、出すなと云ふ思ひ入れ。

經世　アヽ、何か、葛湯か……左樣な物も上げられまい。アヽ、コレ、御酒あれども、御僧へ參らすべき肴がなし………アヽ、お菓子はないか。

玉笹　エ。

トこなし。

富へお菓子はないかと云ふに、霜の、置かぬ棚をや探すらん。

ト此うち、經世、傍の棚を教へる。玉笹、心得ぬこな

附番の折の演再

しにて、棚より古き重箱を持ち出る。經世、面目なきこなしにて眺む。玉笹、悧り、こなしあつて、下手へ持ち行く。

竹〽心遣ひをそれと見て。

ト禪尼、思ひ入れあつて

禪尼　イヤ、ナウ、お二人、承れば、その粟湯とやらは、暑熱を冷す功ある物。それぞ日本一の醍醐味、御馳走にあづかりたし。

經世　すりやアノ、粟湯をきこし召されんとか。それは祝着……ナニ玉笹、それなる粟湯を。

玉笹　ナニ粟湯とは。

經世　ソレ、合點が參つたか。

富〽目交ぜを心得粟飯を、鑵子の白湯へ掻き廻し、茶碗へ移し差出す。

竹〽切なる心尼君も、賞翫あれば源左衛門。

ト此うち、玉笹心得、粟飯を茶碗へ入れ、鑵子の湯を注ぎ、かき立て出すを、禪尼、思ひ入れ。經世、面目なきこなしにて、草笛止む。

恥かしや旅の御僧、我れら世にありし時、この粟と申す物、歌に詠み、詩に作りたるをこそ承はれ、今はやうやうこの粟を以て、身命をつなぎ候ふも、前世の滅業拙きゆゑ。實にや蘆生が見し榮華、その邯鄲の假枕。

富〽一睡の夢の覺めたりしも、粟飯かしぐ程ぞかし。

竹〽哀れや實に我れ〳〵も、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに。

富〽なう御覽候へ、住み馴れたる故郷の、松風の音罷すみて。

竹〽寢らねばこそ夢も見ず。

なに思ひ出のあるべきぞ。

富〽そゞろ涙に暮れければ。

竹〽旅僧も哀れ催ふされ、しめり勝ちなる雨の宿。

ト經世、よろしく愁ひの思ひ入れ。玉笹も共々よろしくあつて、氣を取り直し、旅僧に向ひ

都と違ひ邊鄙ゆゑ、お宿なしても稀れ人へ、なんの馳走もござらぬが……オヽ、妹、よい事がある。この頃里の童が謳ふ、あのざれ唄をお聞きに入れい。

玉笹　兄樣のお詞ながら、餘り拙き唱歌ゆゑ。

禪尼　その鄙びしが又一入、如何なる手振りか、聞かまほし。

玉笹　それぢやと申して。

經世　ハテ、臆せずに

禪尼　早う唱歌を。

玉笹　さらばお聞きに入れませう。

竹〽團扇を取つて手拍子に。

　ト玉笹、團扇を取つて前へ出る。

竹〽逢りて戻る夜は色香も増る、朧月夜の花の影。

富〽逢はで戻らば紅葉の色か、戀の闇路に見え分かぬ。

富〽佐野の船橋思ひをかけて、とても濡れたる袖ぢやもの。

竹〽やれ、浮名いとへば、ちんちぎりが淺いよえ。

富〽深き戀ゝにしみ参らせう。

　ト玉笹、團扇を持つて、よろしく振りあつて、納まる。

禪尼　これは一段と面白い事ぢや。

玉笹　お恥かしう存じますわいなア。

經世　イヤ、尼御前には長の旅、さぞかし疲れ給はんが、蚊帳の設けも候はねば、蚊遣りを焚いて參らせん。幸ひかな、我れら世にありし時、鉢の木を數多持つて候ふが、斯樣の體に衰へては、云はれぬ貧の花好み。みな人に參らせて、今はやう／＼あれなる梅松櫻を、秘藏に隱し候ふが、これを今宵の待遇に、蚊遣りとなして參らせん。

　ト上手にある梅松櫻の鉢植へ思ひ入れあつて

竹〽立たんとするを押とゞめ。

禪尼　ア、イヤ／＼、これは何よりお志しは有り難けれど、重ねて世に出で給ひてのお慰み、御無用になし給はれかし。

經世　イ、ヤ。

竹〽いや／＼／＼、とてもこの身は埋れ木の、いつの盛りにいつの花。

　ト經世、鉢植を好き所へ出し

竹〽いつの時を待つべきぞ。

富〽只徒らなる鉢の木を、御身の爲に焚くならば。

これぞ採花汲水の。

竹〽彼の仙人に仕へし雪山の薪、斯くこそあらめ我れも身を、捨て人の爲この鉢の木。

富〽切るともよしや惜しからじ、面白や如何にせん、梅を伐りや初むべき、見しと云ふ人こそ憂きけれ、山里の折かけがきの梅をだに、情なしと惜しみしに、今更薪となすべしと思ひきや。

　ト經世、梅の鉢へ向ひ、よろしく思ひ入れあつて

竹〽櫻を見れば春毎に、花少し遅ければ、この木や侘ぶ

ると心盡し育てしに。
富〽今は我れのみ侘びて住む家櫻、
トよろしくこなしあつて、經世、謠ひにて
伐り焼べて火櫻になすぞ悲しき……さて松はさしもげ
に、枝をため葉を透かしてかゝりあれど、植ゑ置きしそ
の甲斐今は嵐吹く、
竹〽松は元より常磐にて、
富〽焚く木となすは梅櫻。
トよろしく鉢の木を伐るこなしあつて、誂らへの蚊遣
り火鉢へ入れるこなしよろしく
竹〽伐り焼べて。
ト思ひ入れ。
とく寄りて。
竹〽防ぎ給へともてなせば。
ト禪尼、よろしく思ひ入れあつて
禪尼　これは一入御深切、等閑ならぬ梅櫻、蚊遣りに春の
心地して、蚊の憂ひをば忘れしぞや。さても如何なる人
の末にて、御名はなんと候ふぞ。
竹〽問ひ給へば源左衞門。
經世　ア、人がましや。古へを名乘るも面伏せなれど、

これこそ佐野の源左衞門經世。
玉笹　私しは妹、玉笹と申しまする。
經世　以前は由ある者の果。
兩人　哀れと御覧候へや。
ト禪尼、思ひ入れあつて
禪尼　さては佐野氏の兄弟よな。さこそあらんと初めより
見しに違はぬ武具の嗜み。して、如何なるゆゑあつて、
斯くは成り行き給ひしぞ。
經世　如何にも某、斯程まで、零落なせしその仔細、お物
語り仕らん。
竹〽物語らんと座をしめて。
ト扇を取り直し、思ひ入れあつて
さても過ぎにし嘉禎元年、禁廷守護に大小名、在京なせ
しその折から、攝政道家權威を振ひ、朝廷の政務疎かに
既に宸襟安からず、武夫の身の青丹よし。
竹〽奈良の都の八重九重、徒黨を結び惡僧ばら、若草山
に砦を構へ、君へ怨怒の弓矢を引く。
ト經世、扇を持つて、物語りの振りあつて、玉笹、出
て
玉笹　ほんに、聞き傳へしその時に。

富〽木々の紅葉の色めきし、謀叛の聞え六波羅より、兄上討手を蒙むりて。

ト玉笹、よろしく振りあつて、經世、二重より下りて

竹〽またその時は爽かに。

經世　如何にもその日の出立ちは、家重代の大鎧。

ト こなしあつて、ノリになり

緘し立つたる金こざね、ざつくと着なし太刀を佩き。

竹〽薙刀小脇に搔い込んで、眞先かけて立向へば。

我れを討んと、拔きつれ〳〵。

ト經世、立つて扇を持ち、物語りの振りよろしくあつて

富〽野分に風の烈しくも、亂れ白刃の篠すゝき。

ト竹本の合ひ方へ取り、よろしく振りあつて

竹〽しやこざかしと蹄にかけ。

などか馬蹄につくすべき。

竹〽目に物見せんと縱橫無盡、一時に逆徒を討ち平らげ

富〽秋の錦を都へ飾り。

竹〽勝鬨擧げて凱陣せり。

ト經世、よろしくあつて

折に鎌倉表より、父たる佐野の兵衞正常、闇討に討たれしと、聞くと空しく下向の折から、一族の讒に依り、君の御勘氣蒙むりて、所領殘らず類葉たる、源藤太に押領せられ、甲斐もなき武夫の。

竹〽身の上哀れと思されよと。

富〽同胞嘆きに伏し沈み、泪にくれてぞ物語る。

ト兩人、思ひ入れ。禪尼もこなしあつて

禪尼　具に聞きし御身の素性。かゝる忠孝全き人も、身の薄命は是非もなし。

竹〽僧も至極の理りに、共に袖をぞ絞りける、源左衞門涙を拂ひ。

ト禪尼、愁ひの思ひ入れ、時の鐘。

經世　由なきこの身の述懷に、いたく夜も更けたる樣子、御僧にはさぞ迷惑。一間へござつて、お休みあれ。

禪尼　ナニサマ、晝の疲れもあれば、そのお詞に從ひて。

玉笹　夜の設けはなけれども

經世　蚊遣りを伽にゆつくりと

禪尼　ドレ、御芳志にあづかりませう

富〽妹が案内に尼御前は、心殘して入り給ふ。

ト時の鐘にて、禪尼、先に玉笹、蚊遣り火鉢を提げ、奥へ入る。經世、殘り、思ひ入れあつて

經世　今日は亡父の忌日ながら、思ひ設けぬ稀れ人で、まだ回向さへ致さなんだ。
富〽いざや回向と立ち上がり、忘れねばこそ思ひ出る、聲さへ更に亡き人を、在すが如く魂祭る、その盂蘭盆の時にとる、父の位牌へ燻らする、香花供養に稱名の、數は念珠の露の玉、拜禮なして入りにける。
ト經世、此うち、佛壇を開き、法名の位牌を出し、けんどんの內へ入れし鐙櫃を引出しかけ、以前の生花の秋草、栗山桶へ入れしを花活へさし、水を入れて、これを佛檀へ手向ける事、回向のこなしよろしくあつて、奥へ入る、矢張り富本の合ひ方、文句は續く。
富〽袖の雫も閼伽桶は、なけれど心澄む水は、無常の法の手向け草。
ト此うち玉篠、燈明を持ち來り、香をひねりなどしてまた奥へ入る。
竹〽かゝる折しも外の方に、年まだ若き武夫の、後を付け來る二人の杣。
ト向うより、源次經俊、裁付け、大小、きり草鞋、武者修行體の拵らへ、笠をかざし、風呂敷を斜に脊負ひ出て來る。竹本の合ひ方、風の音、本釣り鐘。花道にて、後先見廻し、キッと思ひ入れ。後より、幕開きの左忠太、五郎藏、忍び／＼窺ひ出る。
富〽物をも云はで組付くを。
竹〽小手を拂つて振り解き
富〽また立ちかゝるを身をかはし、右と左へづでんどう。
竹〽筋斗打たせ若者は、庵の內へ駈け入つて、一息ホッとつきにけり。
ト兩人うぬと組み付くを拂ひ退け、ちよつと立廻り兩人を投げ退け、ツカ／＼と枝折の內へ入り、簀を締め、ホッと思ひ入れ。杣兩人はおき上がり、領き合ひ下手へ忍ぶ。
〽思ひがけなき物音に、主は納戸を立ち出でゝ。
ト經世、奥より出て
經世　何やら怪しからぬ物音は。
ト透かし見て
ムウ、誰れやら人影。案內もなく庵の內へ、何ゆゑあつて踏み込みしぞ。
經俊　ハッ、狼藉者に出合ひ、近頃難儀いたす者。無禮は御免下されい。
竹〽云ふは確かに覺えの聲音。

經世　ナニ、狼藉者に出合ひしとな。何は兎もあれ、玉笹、燈火を早う／＼。

玉笹　ハイ／＼。

ト一間の内より持ち出づる、燈臺の火を傍なる、麁朶へ手早く移し取り。

トこの時、玉笹、燈臺へあかりを灯せしを持ち出る。經世、有り合ふ麁朶へ手早く移し取りて

〽互ひに見合す顏と顏。

經世　ヤ、誠に汝は佐野兵衛正常が悴、源次經俊ならずや。

經俊　我が名を源次經俊と、御存にありしあなた樣は。

經世　オヽ、其方が兄の、源左衛門經世なるワ。

經俊　すりや、兄ィ人でござりましたか。

經世　オヽ弟、其方も堅固で。

經俊　あなたも御無事で

玉笹　兄上樣か。

經世　思ひがけない。

三人　これはしたり。

富〽草鞋の紐を解く／＼と、兄が手づから洗足の、盥の水に濡り合ふ。

竹〽二つ巴や三つ巴。

ト三人、よろしく思ひ入れあつて

經世　昨日今日のやうなりしが、數へて見れば早十歳、

經俊　海山越えて里數さへ、百里餘りを隔たれど

玉笹　隔てぬ中の兄弟に

經世　雨の夜雪の降る日にも、如何なせしと身の上を

經俊　案じる心は變りなき

玉笹　血筋の縁の兄弟中。

經世　互ひに無事の對面は

經俊　盡きぬ縁で

三人　ありしよなア。

竹〽互ひに無事を打喜び。

ト三人、思ひ入れあつて

經世　さて、何から話さうやら、別れし時にまだ幼年、これまで長の年月を、いづれ何國で過せしぞ。

竹〽問はれて弟は泪を拂ひ。

經俊　〽話せば長い事ながら。

ト床の合ひ方へ笙をかむせ、經俊、思ひ入れあつて

父上兵衛正常さま、不慮の御最期遂げられて、家は沒收と聞きしゆゑ、是非なく都に足を止め、せめて武術の修

行なし、人の數にも入つてより、歸らんものと心を定め、修行なせども情なや、父の光も消え失せて、力と頼む人もなく。

竹〽木から落ちたる猿の子の、拾ふ深山の木の實より。この身一つの活計に迫り。

富〽よしあししげき浪花津の浪に漂ふ捨小舟、どこへ取付く島とても。

竹〽泣いて明石や須磨の浦、憂きを宮島讃岐潟。

富〽四國九國の端までも、流れ渡りに世を送りし。親のなき身の艱難辛苦。

竹〽推量あれや兄上と、云ふにこなたも泪を拭ひ。

ト經俊、よろしくこなし。經世も思ひ入れあつて

經俊　すりや其方はさほどまで、艱難辛苦いたせしか……さるにても此やうに、思ひがけなき對面は、月は替れど命日の、亡き父上の導きなるか。

ト飾りある位牌へ思ひ入れ。經俊も思ひ入れあつて

經俊　親なき後、兄は親、力と頼む面影も、目先に忘れぬ父上に、生寫しなる兄者人。

經世　某ばかりか其方も、讓り受けたる面ざし恰好。

玉笹　血筋と云うて此やうに、お聲まで似るものか。

經俊　誠に別れ程經たる

經世　父に再び逢ふ心。

經俊　兄上。

經世　弟。

經俊　お懐かしうございまする。

富〽兄弟手に手を取り交し、見交す顏は松山の。

竹〽鏡にあらで親の面、戀し床しと打見やり、離れ難たき風情なり。

ト經世、經俊、手を取り交し、よろしく思ひ入れあつて

〽經俊は氣を取り直し。して父上には何者に、果敢なく討たれ給ひしぞ。

經世　誰れとも知れぬ闇討ながら、心よからぬ源藤太、正しく彼れが仕業なり。

經俊　すりや、敵と云ふは源藤太よな。

竹〽血相替へて駈け出すを。

ト經俊、思ひ入れあつて、刀を取り、ツカ〳〵と行きかける。

經世　ヤレ待て弟、血相替へて何れへ行く。

經俊　これより直ぐに敵の在所

經世　ヤア弟、若年とて早まりしか。兄の經世に委細も語らず、偽りと云へば卒爾なり。
經俊　でも、見す／＼敵を。
經世　ハテマア、これへ戻れと申すに。
　トこれにて、經俊、舞臺へ來り
して、源藤太、在所、汝いづくと存じ居るか。
經俊　されば、今日これへ參る道、山本の宿に關札立ち、今宵の源藤太、泊り居るこそ天の與へ。
經世　すりや、源藤太、山本の宿に泊り居ると申すか。これぞ幸ひ、日頃の本望。
經俊　然らば兄が諸ともに
玉笹　そんならこれより。
兩人　片時も早く。
　竹へ勇み立つたる折からに。
　ト兩人、キッとなる。この時、奧にて
禪尼　ヤレ待たれよ兩人、門出を祝して餞別せん。
　竹へ云ひつゝ出づる一間の内、以前に替る尼君の、姿に兩人ためらへば。
　ト小鼓の合ひ方にて、奧より、松下の禪尼、白綸子の着付け、紫緞子の直綴、白茶錦の袈裟、そぎ尼の鬘にて、靜々出て
やよ經世、今宵蚊遣りに伐り燻せし、その鉢の木の返禮に、其方に遣はすこの一書。
經世　ハツ。
　竹へ不審ながらに受取つて、御書押披き。
加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松が枝、子々孫々に至るまで、下し給はる御教書に、時賴がと記されし
兩人　して、尼君は何人なるぞ。
玉笹　ホヽオヽ、今は何をか包み申さん。妾は時賴道崇が母松下の禪尼ぢやわいの。
經世　すりや、時賴公の御母堂たる
經俊　尼君にて渡らせ給ふか。
玉笹　思ひがけなき。
三人　御對面。
　竹へ遙か下がりて禮をなす。
　ト經世、御教書を卷き納め、扇を開き、その上へ載せ
　三人、後へ下がり平伏なす。
禪尼　時都座禪に籠れる間、我れ鎌倉へ歸りなば、本領安堵の沙汰なさん。
經世　こは有り難き仰せ。經俊玉笹兩人は、尼君の御供な

し、暫しが間我が菩提所へ入れ奉り、後より直さま山本へ……我れはこれより馳せ参じ、敵を逃がさぬ用心なさん。

經俊　ヤレ待たれよ兄者人、敵は手練の源藤太。

玉笹　幸ひあれなる打ち物にて。

ト長押より、薙刀を取り渡す。

經世　ホヽ、いしくも心付いたりな。これにて父の仇敵……錆びたりともこの薙刀。

トきつとなる。この時、以前の柚二人、窺ひ出て

兩人　經世觀念。

ト切つてかゝる。ちよと立廻り左右へ投げ退ける。

玉笹　今宵を過さず本望を、達せし上にて鎌倉に。

經世　いで御大事と聞くならば。

トのりになり

竹〽ちぎれたれども重代の、黑革縅の鎧を着し、瘦せたりとも馬に鞍置き、綺羅を飾りし諸軍勢、笑はゞ笑へ鎌倉へ、眞先かけて馳せ登らん。

ト經世、左忠太、五郎藏がかゝるを相手に、よろしくあつて

經俊　オヽ、その時は我れも又。

富〽佐野月毛の口を取り、いで合戰始まらば、敵何萬騎あるとても、物の數かは數ならず。

ト經俊、兩人を相手に立廻つて、これより、經世、經俊、柚を相手に

竹〽兄弟心を一致になし、手に立つ軍卒。

富〽切り立て

竹〽薙ぎ立て

富〽忠義一圖に御馬前にて

竹〽比類なき高名手柄なし、三箇の莊を安堵して。

富〽開く武運の家櫻。

ト此うち、經世、經俊。左忠太五郎藏兩人を相手によろしくあつて、兩人を投げ退け、キツとなる。これにて、宮本連中を消す。

經世　幸先よしや父の仇。

經俊　念なう本望。

玉笹　兄上樣。

禪尼　いそふれ經世。

經世　ハツ。

竹〽勇み進んで。

ト經世、薙刀にて、柚一人を切り倒し、ツカ／＼と花

道へ行く。經俊は一人を踏まへ、御教書を捧げ、禪尼二重に感心の見得。玉章、これに引添ひ、引張りよろしく、バッタリにて、幕。

ト幕外、經世、薙刀を構へ、キッと見得。誂らへの三味線、中の舞をあしらひ、向うへ入る。知らせに付きあとシャギリ。

再夕暮雨の鉢木（終り）

爰廓色友達

角兵衛獅子

文政六年十一月、中村座の顔見世狂言「還木曾菊族」の四建目淨瑠璃で、吉例の顔見世式を辿つてゐる。角兵衛獅子を挿入したのは、江戸で無暗と流行つたからである。例に依つて殿様と傾城の色模様や、顔見世特有の總坊主の活動や、理窟抜きの呑気な形式を採つた、愉快な踊である。これだけでは筋の上に、どういふ影響があるのか解らないが、玉蟲太夫實は近江のお兼は五建目に至つて活躍し、入江の冠者は二番目の世話場へ行つて發揮し、その他いづれも次の幕へ行くと、それ〲筋があつて動いてゐる。顔見世の四建目淨瑠璃と、だんまりとは、全く事件の發端になつてゐるのである。この作詞は松井幸三、富本は綱太夫と宮崎忠五郎、振附は松本五郎市、役割は、入江の冠者が三世尾上菊五郎、新宮次郎が三桝源之助、お時が五世瀬川菊之丞、心才入道が二世關三十郎、越後獅子十六兵衛が五世松本幸四郎、同三吉が市川高麗藏、玉蟲太夫實はお兼が岩井粂三郎であつた。高麗藏は幸四郎の伜なので、子供ながら頗る儲かるやうに書いてある

㚑廓色友達（角兵衛獅子）

新宮次郎館の場

役名――越後獅子、十六兵衛。同、三吉。新宮次郎義信。へぼけん入道心才。仲居、引四つのお時。傾城、玉蟲太夫實ハ近江のお兼。入江冠者義親。

富本連中

本舞臺、正面の屋體欄間柱とも黑塗り、向う金襖、上手に五蹬目、柿の暖簾に朝日屋と染めたるを掛け、上手、御簾卷き上げ、下の方の御簾靑簾の樣に突き出し、好き所に、誰哉行燈、日覆より紅白の梅の吊り枝見事に、すべて、結構なる御殿を仲の町に見立てたる飾り付けよろしく、下の方に富本連中居並び、片シヤギリにて幕明く。

ト直ぐに前彈きにかゝる。

〽誰が昔、物云ふ花を植ゑ初めて、浮かれ廓を移すなる、派手な物好き下館、御簾の追風靑簾、たそや行燈も自ら、里の名に負ふ不夜城や〽洒落と風雅の仲の町。

ト淸搔に角兵衛獅子の鳴り物になり、花道より子役三人、同じ拵らへにて誂らへの獅子頭をかむり、裁附け、手甲、草鞋がけ、腰に太鼓を附けたる角兵衛獅子の拵らへ。十六兵衛、着流し、股引、三尺帶、手拭を頭に卷き、竹笛を腰に差し、〆太鼓を打ちながら出る。後よりお時、赤前垂れ、駒下駄、雇はれ仲居の形にて、町廻りの臺提灯を提げ、鐵棒を突き出て來る。

〽打てや囃せや町々小路、巡りくる〳〵大通いつぱい、精いつぱい、朝の六から日の暮れるまで、稼ぎ連れたる越後獅子、曲も手事もお初穗は、十二銅から呼びかけて、花の衢の町廻り、鐵棒きめたとり形も、如才仲居と三つ銀杏、濡れも菊蝶、この顏見世を、松本瀨川に御贔屓と身勝手ばかりおゝ笑止、笑ひも江戸の花道を、ともに浮かれてたどり來る。

ト花道にて振りよろしく、矢張り淸搔、獅子の合ひ方にて、皆々本舞臺へ來り

十六　ハア、咲いたは梅の顏見世、幸先よし。悪魔拂ひに

女中さん、十二銅、水を絞つてやりやせう。
とき　ソレイナア、わたしもさう思うて、お前方の後追うて來た、返り新參身の喜び。
十六　さうサ、今夜はわつさりと、若手揃ひに浮かされて出張つて獅子の十六兵衛、夜の神樂もこの里ばかり、いつも月夜で賑やかな上に、結構な、爰は、マア、何と云ふ廓でござります。
きと　ほんにさうでござんせう。知らしやんせぬ筈ぢや。今日爰へ廓を移す物好きは、新宮の次郎行朝さまの御殿ぢやわいな。
十六　ハア、、さうかえ。〽めたぞ〳〵。それぢやア慥か物になるぞ。サア〳〵、精出してやらかせ〳〵。
トこれより三味線入り獅子の合ひ方にて、子役三人、角兵衛獅子の曲よろしく、十六兵衛、始終太鼓を打ちながら、好き程に前へ出て
〽獅子と申すは彼の天竺に、文珠の淨土、淨樂我淨の悟りも開く、牡丹の花房、女獅子男獅子の狂ひ戯むれ、あつちかな、こつちかな、すじり、もじり、とつちかな、も一つ返してどちんかどつこい、してこいまかしよの、よいとな〳〵、隣の嫁御の木綿振り袖、三尺留めておかた氣取りで、しやな〳〵しやんとした、婆さん小桶で茶を呑む、越後角兵衛が獅子は、お家の御祈禱々々々。〽わだ三尺の劍を持つて、惡魔を拂ふ角兵衛獅子。〽向ひ小山の七九の竹よ、枝節揃へて切れや細かに〳〵。〽ゑんどう豆三升喰つて、おできがとつさ〳〵。〽壁の横這ひ、横もじり、獅子の洞入り洞かへり、體はこなたへ。〽すつてん、てれつく、晉六さん、なんばん喰つても辛くない、瀨田の唐橋、櫓がひ。〽御武運長久と祝しける。
ト矢張り角兵衛獅子の鳴り物あしらひ、よろしくあつて、トど左右の子供、眞中の子供へ立ちかゝる。この子役、獅子頭を脫ぎ捨て、引拔きにて淺黃頭巾、やつしの形になる。卽ち、三吉にて、二人を左右へ取つて投げる。二人の子供、中返りよろしく、直ぐに下座へ逃げて入る。
十六　エ、、又ごたつく。久しいものだ。堪忍しろ〳〵。
三吉　否だ〳〵。弱蟲めら、もう彼奴等とは、一緒にやらぬ。誰れだと思ふ、つがもない。
ト四股踏んでキッと睨む
とき　イヨ、高麗屋の若旦那。

初演の絵番附

十六　困り者だぞ、じぶくるなえ。モシ、女中さん、わたしはちよつと、今の二人を見て來たうございます。其うちどうぞお世話ながら。
とき　サア、合點ぢや。わたしが機嫌を直す程に。
十六　そりやア有り難い。コレ、おぬしも駄々ばかり云はずとおとなしう、おれに世話を燒かせるなえ。
〽どれちよつと行て、高麗屋、叱るは表、裏道を、機嫌にこにこ走り行く。
ト十六兵衛、よろしく下座へ入る。お時、三吉、殘つて
三吉　よく叱るぜえ。彼奴等にナニ負けて居るものか。
とき　さうぢや。どうやら發明な、末頼もしい好い氣前。見れば大方、今のはお前の父さんぢやな。
三吉　マア、そんなものサ。
とき　そんなものとは餘所々々しい。さうして、マア、お前方を角兵衛獅子とは、なぜ云ふぞ。
三吉　それを知らずか。
とき　そんなら何ぞ、由來があるかえ。
三吉　さらば摘んで話しやせうか。
〽昔々あつた土佐畫の神樂獅子、その始まりは出來秋や、五穀成就の喜びを、田の畦にして舞ひしゆゑ、田の樂しむを田樂と、名付け初めたる曲なれば、樂舞獅子とも呼ふべきを、角兵衛獅子とは横なまり、問はれて恥を角兵衛獅子、頭角兵衛に、引つ角兵衛、物知り顏の變屈を、四角兵衛とも申すなり、〽さつても出來た、こりや出來た、さりとは利口な理窟兵衛、そんなら問ふぞや、〽問はしやれ〳〵、なんでも問はしやれ〽鳥は〽鳳凰〽孔雀は〽しほり〽色は鳥がね、無理いふべからず、じらすせりふは何ぢやいな、野暮やら愚痴やらひぞりやら、それが浮世の花ぢや〳〵〽御見待乳の山程焦れ、じらし文句は何ぢやいな、實やら、嘘やら誠やら、それがいつちの花ぢや〳〵、月の通ひ路おゝ嬉し、浮かれ鳥も色の友鳥。
ト踊り地をあげて、花道より義信、廣袖、羽織衣裳、小さ刀の形、肩へ手拭を掛け、大提灯を提げて出る。玉蟲太夫、駒下駄、廣振りの裲襠、姫の形を傾城に仕立てたる前帯に小褄取り、後より義親、上下の衣裳、大小の形、これも手拭を肩に掛け、長柄の傘をさしかけて出る。後より心才、誂らへの鯰坊主、羽織衣裳、大小、頭へ紅染めの手拭を巻き、大盡の拵らへ、扇を翳し、文句一杯舞臺の踊り切れるまでに、皆々よろし

く花道へ居並び

義信　仲の町へ日暮れぬ耳に滿てるものは、太皷藝者の高調子。

義親　待合の辻に醉覺めぬ、眼に遮る物は新造禿の笑ひ聲。

心才　さて艶なるかな、美なるかな、今年は作者が氣紛れで、おれが鯰の大盡とは、振られ勝手な役廻り。

玉蟲　振るも振らぬも譯知らぬ、里の慣ひの八文字、然の位は、愚かな事、酒の相手もよう出來ぬ、ほんに辛氣な不器用者。

義信　それが趣向の亭主振り、義親どのには先づあれへ。

義親　御意は背かぬさしかけ傘、玉蟲太夫の名に引かれ、廓へ上下大小とは、流行武骨な若い者。

心才　なにサ、そこらが大通だ。花魁、お前もソレそこで……エヽ、不機轉な、禿、來やア

トこなしにて呼ぶ。此うちお時、三吉に囁く。三吉、頷いて、此うち。

三吉　アイ、

ト長く返事する。

〽浦に明かさぬ夜半とても、なれて乾かぬ沖の石、浮き思ひの丈くらべ。

ト矢張り鳴り物入りの騷ぎ模樣にて、皆々本舞臺へ來て、長床几に居並ぶ。お時は三吉を連れ、下の方へ出て

とき　どなたも、きつい、お待たせ振り。どうでもお供のさしかけ傘、相合傘のしつぽりと、お手間が取れたと見えまする。

義親　これは迷惑、かつ以て、鯰大盡を踏み付けた、無禮は致さぬ御亭主の、お指圖ゆゑに道の伽。

義信　イヤ〳〵、當時御威勢強き、木曾どのゝ御舍弟、入江の冠者義親どのを、饗應いたす拙者も、實は源氏に繫がる身の譽れ。今は舍兄の不興を受け、日蔭の其許、どうかなして御鬱散にもならうかと、思ふに幸ひこのお敵。

玉蟲　恥かしながら自らの、イヤ、わたしが焦れし身の願ひ、叶ふ嬉しさ、うか〳〵と、あられぬ形のこの風俗。

心才　そりやこそな。申さぬ事か大盡の、鯰に變じて太皷持ち。

ト云ひ〳〵前へ出て

此奴どうやら下地から、なんでも樣子のありさうな。

〽初會馴染の大座敷、若い者やら、遣り手やら、禿が先

〽煙草盆・茶屋の嬶衆に囁いて、しこなし振りの床柱、〽可愛々々は久しいものではないかいな、浮氣で根ツからさつぱり解らない、それが誠であろかいな、あろかいな、花は吉原〳〵。

ト心才、生醉のこなしにて、お時三吉を相手によろしく、義信と義親と玉蟲も、前へ連れて出て、初會座敷の模樣、義親、玉蟲は不器用なる取廻し、義信、氣の毒なる思ひ入れ、心才もこなしあつて

心才　さて先づこれで、どうやら斯うやら、ざつと座敷は極まつたが、四角四面に上下で、しやき張られては、あやまるの。

とき　サア、そりやわたしが仕樣がある。

ト小腰を屈め、揉み手して、若い者の思ひ入れ。

〽憚りながら、心ながら、廓の內は長刀、お腰の物と大門の、內は許さぬ色の關、所慣ひか知らねども、邪推さんな手な觸れそ、里に手管の術あれば、弓矢に武備の冥加あり、それは堅地の木枕も、ならひ情のあればこそ、木曾に巴の女武者、兄御に習へ弟草、菊の丞文付さすよりも、云はで粂三の眞實は世界の色の菊御覽じ、お茶の愛嬌あやかりものよ、酒の業くれ仲人も、醉の紛れの仇心

ト四人よろしく、玉蟲は義親、義信はお時へ抱きつかうとする。後より三吉、鐵棒を突き割つて出で

三吉　火の用心さつしやりませう

義信　エヽ、恂りした。そちや誰れぢや。

三吉　誰れでもないサ、時廻り。

〽廊下とんびや仇つきの、用心さつしやい町廻り、二階廻りに氣をつける、鐵棒めつぽうてゝつぽう、おいらは、ちやんやに叱られぬ、用心しよと斐らしく、走りくらの有頂天、足元輕く急ぎ行く。

ト三吉よろしく下座へ入る。義信、これを見送り

義信　時廻りと云へば、聞き及んだ廓の晝夜は別世界。とても事に、どうぞコレ義親どのを、大通に仕立てる仕樣は、何をがな。

心才　何をがなでも、上下で、あの堅藏を柔らげる、手法は花魁、お前の手際。

玉蟲　それぢやと云うて。

心才　ハテ、うぢつかずと、ソレそこで。

ト義親が側へ玉蟲を突きやる。

玉蟲　サア、それはな。

〽それ見やんせ、餘所にさへ、そぐはぬ中も憎からぬ、縁は出雲の神さんの、浮いた渡りぢやあるまいに、焦れ死ぬ程惚れさせて、たまの逢瀬に物云はぬ、ほんに男の氣強さは、矢ッ張りわたしが癪の種、えゝ措いてくれ。氣の知れぬ、怖い手のあるお姫さん、初心娘と思ひの外に、男殺しの革羽織〽あれ又そんな憎て口、女子の愚痴は餘所外に、色香す花のありもやせんと、恨み嫉みもいとしさの、飾り初會のしこなし振り、女房約束せぬ先に三下り半かと腹立ち上戸〽此方も負けぬ賣り詞、買うて悋氣の長煙管。

ト口説き模様よろしくあつて

玉蟲　モシ／＼、わたしや窮屈なお姫さんの傾城事。

義信　サア／＼、よいよ、もそつとぢや。

玉蟲　それでも、わたしや近江のお兼。こんなうるさ、へオ、しんど、

ト上着を脱いで、やつしの形になる。

〽在所姿のなほ可愛ゆらし、かいげ片手に洗濯盥、近江は野路の玉川に、腥もあらはの洗ひ髪、藁でたばねてもわしや女子、お姫／＼とこちや嫌ひ、振りになまりはなかりけり。

ト玉蟲よろしく義信、前へ出る。

〽さつても我折れ、こりやならぬ、手練魂膽南無三方、愚者に智惠の智略も仇に、情の君が化けの皮。

トよろしく心才、前へ浮かれ出る。

〽むしり次手に、瓢箪で、押へられたか鯰髭、取つたか見たかに野暮けん入道、拔け殻は茶道の心才、こりやまかしよ、すつぽり裸の代參り。

ト心才、耳の付け髭をスッポリ拔いて、襦袢一つになり、手を提げて前へ出る。

〽たう／＼來たりたう來り、御門淸めか八ッ下がり、道中のお邪魔に南無妙見、蓮華經でもお十夜でも、諸宗兼學田樂酒に、きほひ裸の判じ物、花で遊ぼか手拭貰ほか、爰が思案の色の辻占、大道廣き神祇尺、敎へこもりて無上靈法新町川岸。

こいつは面白い。下卑次手にひやかし數の子だ。モシ、あなたも地廻り仲間に入江の冠者、わたしがやうに手拭を、斯う先へおやりなさい。

義親　これは御傳授、忝ない。そんならいつそ江戸ッ子の、地金を出したせうがにやア。

トきほひの思ひ入れにて、手拭を被る。

〽地廻り節に囃絞る、つい手拭の頬被り、間の唐紙稲妻形よ、内の嬶アが雷聲で、ほんに涙の雨が降る。

〽カウ／＼、侍ひさん、寄つて行きなか後から、羅生門川岸強者の、肩も袴も揉み苦茶に、悪い洒落ではないかいな。

ト義親、玉蟲よろしく、玉蟲、義親が肩衣を脱がせる。

義親　エヽ、おきやアがれ。なんのこつたえ。いつその腐れ、屋體囃子でやつつけよう。

〽鎌倉見たか、江戸見たか、江戸は見たれど鎌倉名所はまだ見ない、〽あいがなア、遠けりやしみ／＼苦勞、今は嬉しや軒並び、ほんにえヽ、〽戀の重荷をせたら負うてえヽ。

サア、これからは後を頼むぞ。近江の姐え。

〽あの山から近江が見ゆる、笠買うてたもれや、これなう近江菅笠、近江菅笠は仲がようて器用で、しめを長うてや、なんぼでござるやこれなう、なんぼでござるやこれなう、さつても行物貨はしやんせ。

とき　さても奇妙な。わたしもいつぞや田舎で覺えて來た、これも在所の名物踊り。

〽あれを見さいな、あい／＼山のてつぺいから星の親仁かずばぬけた、〽いばらほつこらほいて、寝そべるべいのほんね／＼〽ゆぜんおとしたらこみぞさ、潜つておつ走れ　〽こいつもどんぐらじよんけいな、〽かけさ、ほえたら、空の窓開く、すいせ／＼、〽かんかゝりきかきますか、〽かきしよかの、サア〽ちげえねえの／＼眞中ぢや。

義信　イヤモウ、どれをどれとも云はれぬ、目を驚ろかす時の興。

とき　打つたり、舞うたり、此やうに、心盡すも彼のお方に。

義信　されば候ふ、めでたくコレ、どうやら斯うやら、爰までは。

心才　彼の堅藏も手に入つたり。

義信　これからは又猶更に、今宵の趣向どうなりとも、心才、智惠はあるまいか。

心才　あるとも／＼。そこらはぬからぬ。法仲間の捏どりで、餅は餅屋サ、サア來なさい。

ト ちり／＼の合ひ方にて、心才、よき所へ立ち、臼を直し、鐵棒の先へ花活けの瓢を杵のやうに拵らへたるを持ち來る。お時、捏ね取り。心才、鉢卷して餅搗き

の模様、拍子ものにて
〽君はめでたの若松さまよ、枝も茂りて葉も茂る、〽千代の山々おめでたや、中見て底つけぞくしんしげもく、てんざいどつこい、やんれそんたがそんれはえ、やれそたノ＼、あたてこいやう、どうやれ、それどつこい、搗き出せ＼／＼餅になつたぞ、寶になつたぞ、金の生る木も植竪は濃い、濃き男にくりか房、千種儲けてめでたいな、これもたわれの花女夫、好い仲々の渓やまし。

心才　なんと、どうでござります。これからは、この子が臘ひ。

義信　冠者どのにも打解けて。

とき　そんなら、あなたが入江の冠者義親さま。

義親　我が名を聞いて、驚ろく其方は。

とき　ハイ、イエ、今宵のお仲人。

心才　ほんに旦那は、ちとあちらへ。

〽夢も榮華の三つ蒲團、三國一とぞ許しける。

ト心才、煽て振りにて、玉鎖、義親を床の方へやる。

義親　そんなら、たうとう御意に任せ。

トちつと、寄り添ふ。

玉鎖　叶ふ願ひの、オ、嬉し。

ト抱き付く。

三人　エヽ、おめでたうござります、

トごん。

心才　エヽ、畜類め。こいつは堪らない。

ト寄らうとする。お時、そこにある拍子木を心才が耳の元にて、チョンと打つ。心才、擲り飛び退く。義信、御簾を下ろしながら

義信　いま鳴る鐘は。

とき　ハイ、引けましてござります。

トにツこり笑ひながら、拍木をきざむこなし、よろしく。

ひやうし幕

廓色友達（終り）

物思葱の彩
——滑稽葱賣り

文久元年十月、守田座に上演された滑稽物、斯うした事には得意の三世櫻田治助の作で、一番目が石川五右衛門の陰慘な釜入りの跡を受けて、氣分をガラリと變へたものである。蜘蛛の糸を劇中劇に使ひ、葱賣りも法界坊を出さず、役者を劇場の人物に使つて種々な當込みを見せ、淺倉村の百姓米作といふのが一人で引つ掻き廻す趣向がひどく面白い。淺倉村の百姓を出したのは、その前の興行が二度目の淺倉當吾（佐倉宗吾）で、大當りを占めたからの縁で出したのである。この時の淸元は延壽太夫に德兵衞、振附は藤間勘十郎、役割は、米作が市川小團次、秀吉が市川市藏、元助が中村鶴藏、お光が尾上菊次郎、小蝶の前とお花が坂東三津五郎、貞光と半七が中村福助、季武と軍助が嵐雛助であつた。米作の小栗の踊が、別項「風曲五色の花籠」の曲馬の唄と同じであるのは、當時の流行を物語つてゐる。

物思草の彩（滑稽草賣り）

守田座樂屋裏の場
多田の御所の場
隅田川の場

役名━━淺倉村の百姓、米作。遣り、元助。同、秀吉。茶屋女房、川島屋お光。國侍ひ、幸作。頭取、小の藏。口上、春五郎。床山、冠次。茶屋男、番作。傾城、小蝶の前、實ハ蛙蝴の精。臼井貞光。卜部季武。渡し守、軍助。刀屋手代、半七。刀屋娘、お花。

清元連中

本舞臺、一面、守田座芝居樂屋窓下の通し張り物。下手、裏木戸の入り口。日覆より梅の吊り枝。よき所に二段、浪板などを見せ、長床几を立てかけあり、

鳴り物、シャギリにて納まる。

ト橋がゝりと上手樂屋口より、仕出し出で、行き違ひ入る。この中へ鬘り、幸作、國侍ひの形、丸腰にて扇を使ひながら出る。番作、茶屋男の拵らへ、割籠、貰盆を持ち、付いて出て來る。春五郎、上下、口上の形にて、懐へ縄れを入れ出て來り

春五　誠に御成人なされたゆゑ、途中なぞでお目にかゝれば、親仁には分りませぬ。アヽ、お羨ましい儀でござります る。

米作　頭、そんならお前も、元はお侍ひかえ。

春五　イヤ、面目次第もねえ。

幸作　イヤ〳〵。併し、上下を着し、口上を申すは、使者の役目を勤めるも同樣。斯く成り行くも、昔を忘れぬ身の行ひ。賴もしい〳〵。

ト この時、樂屋口より、花四天の冠次、床山の坂太郎、キョロ〳〵して出て來り

坂太　上下を着て、どこへも行く氣づけえはねえ。

ト 春五郎を見附けて

冠五　オヽ、爰に居なすつた。モシ頭、三階から酒肴かどつさり來ました。そのお客も連れ申して、一つ上がつち

やアどうでござります。

幸作　それは千萬忝ない。して、貴公の懐中にある、書き物は。

春五　エヽ、これは淨瑠璃の觸れでござります。

幸作　ハテ、珍らしい。ちよつと内見は叶ふまいかな。

春五　大切な物だが、お目にかけませう。

ト觸れ書を渡す。

幸作　ナニ〳〵、淨瑠璃名題。上の卷は、來べき宵なり笹蟹の歌占に、下の卷は、物や思ふ蕊の彩、淨瑠璃太夫。

ト連名役人觸れ讀み終つて

成る程、始めて見たが、奇體な書き物……イヤ、奇體と云へば喜ばつしやれ。おてまへ、本地へ歸參が叶ひましたぞ。

春五　ナニ、元主人へ詫びが叶ひましたとな。

坂太　ヤア〳〵、頭は元の侍ひになんなさるのかえ。

冠次　アヽ、羨ましいなア。おれもどうか一合でも取つて眞人間になつてえもんだなア。

米作　とても町人と云ふうちにも、こんな道樂商賣して居ては。

坂太　イヤ〳〵、眞人間になられたい望みなら、幸ひ此方の主人、人間なら何人でもお抱へなさる。お扶持も十分に下さるが、何を云ふにも火急の事ゆゑ。

坂太　イエ、いくら急でも構ひは致しませぬか、この態でごりざますから。

幸作　少しもいとはぬ。素ツ裸でよいのだ。

坂太　水練の御用でも、勤める事でござりますか。

幸作　イヤ〳〵、左樣でない。この度、異國より虎が渡つたを、主人がお飼ひつけなさるのだが、犬や鷄ではどうも虎に勢ひが薄いから、毎日人間を一人づゝ、餌食にしようと思ふが、さて生きながら虎に喰はれる人物も、餘りないものゆゑ、以前暇の出たる者を、歸參させるとの御仁情。春五郎どのなぞは、惜しくもない年輩なれど、おてまへ達までがなりたいと申すは、コレ、幸ひの事。

春五　そんならわたし等も、アノ虎の餌食に。

三人　なされるのかえ。

幸作　ハテ、生きて居ても香ばしい事もあるまい。虎のおまんまになつた方が、兩爲と申すもの。

春五　こんなこつたらうと思つた。

三人　すつぱり擔がれる奴よ。ハヽヽ。

トこの時、樂屋口にて

皆々　叩き擲れ〳〵。
米作　サア、ぶつならぶつて見さらう。
元助　エヽ、云ひ草云はずと、出て行け〳〵。
米作　イヤ行かぬ。料簡ならぬ〳〵。
皆々　引摺り出せ〳〵。
ト鳥追ひ、通り神樂になり、米作、羽織、着流し、當なはちき爭ふを、元助の留め場、胸倉を取つて外へ引出す。後より秀吉の留め場、羽織、これを取支へながら出る。小の藏、上下の形。見物茶屋の仕出し附いて捨ぜりふ云ひながら出る。
小の　これはしたり、御見物ではねえか。手荒くするめえするめえ。
元助　それでも、この人一人で、大勢の御見物の邪魔になりませう。
米作　何を邪魔をした。畢竟大勢の見物どのも、遠慮して云ひ兼ねてござるから、おれえ見兼て問答しに上がつたのだわい。
秀吉　マア、お前さんの方にも、御尤もな事がありませうが、舞臺が留まりますから。
米作　アニ、この寒いに舞臺へ泊まる奴があるもんで。
元助　打ツちやつて置け〳〵。たわれて居るのだ。
米作　アニ、太次右衛門だ。そんねえな名題はねえぞ。この蒟蒻玉野郎め。
元助　ナニ、蒟蒻玉と吐かしやアがつたな。
秀吉　待て〳〵。もしやお前は、役者に遺恨でもあんなさるか、闇雲に舞臺へ上がんなさるのかえ。
米作　そりや又、こんな解らぬ奴が出居つた。
秀吉　何が解らねえのだ。
小の　これはしたり、在郷の衆だらうぢやねえか。さうワヤワヤ云つたとて果てしはねえ。お茶屋を聞いて見さつせえ。
幸作　コレ〳〵、貴公を入れた茶屋は。
皆々　何屋と云ふのだえ。
米作　イヤハヤ、揃ひも揃つたうんつくどもだ。おれが事を、ぜえごもんだ〳〵とほざくが、おのいら、式作法禮儀と云ふことを知つてけつかるか。先づ茶屋の名前を尋ねる前方に、お國元はどこ、馬喰町はいづれに逗留してと聞いた後で、茶屋の姓名聞くのが順當だ。もし自然、これからわいらと厄に合ひでもしたらあんとする。なんだ仰山な着る物着て、小相應な男どもだが、おらが方へ

連れて行つたら、案山子の役にも立つ奴等ぢやアねえ。
元助　あんな事を吐かしやアがる。叩きしめて。
秀吉　待て。こんな郷在が相手になるものか。
皆々　マア〳〵、料簡しねえ〳〵。
小の　怪我をさせてはならぬ〳〵。
トこの時お光、茶屋女房の拵らへにて、前掛け、土間莨蓙、莨盆を提げ、足早に出て、この體を見て
みつ　オヽ、わたしの内のお客様をお前方どうしなさんすのだ。
小の　おかみさん、お前の所のお客かえ。
秀吉　なにサ、舞臺へ上がつて、何か役者衆と問答をすると云ひなさるゆゑ
元助　やう〳〵わたし等が、爰へお連れ申したのでごぜえます。
米作　お連れ申したも凄まじい。胸倉を取つて、こづき廻して。
小の　イエ〳〵、わたしどもゝ付いて居ります。そんな不法なことを。
みつ　イエ〳〵、モシ、頭取さん、お前、さう仰しやるが、この髷は、どうしたのでござんすえ。

米作　ヤア、男の髷はぢけた。もう料簡ならぬぞ〳〵。
秀吉　コレサ、そりやア今、お前が飾つて居る道具へ引ツかけてはぢいたのだ。
米作　ナニ、道具立てへ……オヽ、覺えがある。併し、この場席で髷が切れては、此まゝでは濟まされぬわえ。
小の　モシ〳〵、何しろわたしにお預けなすつて、お髪をお揃へなさいませ。
幸作　おれえ錢を出して結ふのを、こんた衆の指圖受けうか。
小の　イエナニ、さう云ふ譯ではござりません。爰に居るこの男は。送りでござりますが、髪をよく結ひますから……カウ元公、貴公、ちよつと結つて上げねえか。
元助　エヽ、ナニ、ようござります。わつちが結つて上げやせう。
小の　斯やうに混雜の中でござりますから、御機嫌をお直しなすつて
みつ　頭取さんもあのやうに云つてゞござんすから。
米作　貴公、頭取が云ふ通りとあらば、わしは理非の解つた男だんべい。
元助　サアモシ、旦那、丁度爰に二段があつた。これへお

掛けなせえ。ちよつと束ねませう。幸ひ二段を苅豆屋と
しやせう。
ト鳴り物、管絃になる。
ト床几へ米作をかけさせ、元助は二段へ上がる。
米作　コレ〱、髪結ひどん、おれえ國では太え元結で、
キリ〱巻いて結ふゆゑ、はぢけるのなんのと云ふ事は
ねえに、今朝淺草見付で、二十八文出したに、矢ツ張り
細い元結で結ひ居つたゆゑ切れた。太いのがあらば、錢
はいくらでも出す。切れぬやうに縛つて下せえ。
トこの時、稲荷町の部屋の窓より坂太郎の床山、顔を
出して
坂太　モシ、それは妙だ。髪を結ふ斯う云ふ太い長い元結
があるから、いくらでも巻きつけて上げなさえ。
ト櫛箱の内より太元結を出して渡す。
元助　こりや妙だ。サア〱、これで結つて上げませう。
みつ　コレイナア、見つともない。いつものやうに巻いて
上げて下さんせ。
元助　なにサ、ようござえやす。わつちが承知してゐやア
さアね。
ト結ひにかゝる事。

米作　ちよつと留めさらう……ナニ、頭取どの、それへ出
張らつせえ。
小の　ヘエ、出て居ります。
ト米作の側へ來り、中腰になる。
米作　ヘエ、見る〱から太さうな面がまだ……マア、何
にしろ、貴公には始めてだ。おれ下總の國印旛郡岩橋在
の者で、先づハア村では上席を勤める家柄ゆゑ、……コ
レ、髪結ひ、かゝらねえか。
元助　ハヽア、上席を勤める家柄ゆゑ、髪を結ふと見え
る。
秀吉　下の方へ坐る奴は、散らし髪と見える。
米作　エヽ、默つて聞き召さろ……所で、先々月も爰に、
宗吾さまの狂言があると云ふから、おれ先立ちになつて
村中の老若男女すぐつて、見物にお來やり申したところ
が、ハア、この目へ角に輪をかけて、悲しい事と云ふは
昔を思ひ出し、涙が留め度なく出たもんで、村中のもん
が、まなこ玉を腫らかして、國さアへ歸つた。それだも
んで聞かつせえ。おらが隣りの長九婆樣、歸る其まゝ日
が霞み、燒き餅燒くとて手を燒いた。
秀吉　その手でお釋迦の團子こねた。

米作　お釋迦知らずにちよいと舐めた。

元助　この位でようござりますか。

米作　オヽ、よい〳〵……ところで、今度は美しい派手なこんだらうと來て見たら、なにか、五右衞門を釜の中にぶち入れて、餓鬼子まで油揚げにすると云ふ、又しても同じやうに狂言を見せる、不手際な事があるものだんべえか。おれ一人なら蟲を堪えもせうが、多勢のお人の心持ちが、皆斯うだんべえと推量なうしたゆゑ、この意見を加へてやるべえと、舞臺さアへ上がつたが僻事か。お身様、頭取なら返答ぶたつせえ。サア、あんとでも云つて見さらう。

みつ　ほんに、さう仰しやつて見れば、御尤もでござります。みんな芝居の爲を思つて下さるゆゑ、仰しやるのでござんす。

小の　畢竟、この芝居を御贔屓になすつて下さるゆゑ、氣を附けて下さるのだ。貴様達も惡く聞かねえがいゝ。

秀吉　成る程、さう譯を仰しやつて下さると、何もこんな間違ひになりはしませんものを。

元助　わたしどもがさつゆゑ、お腹をお立たせ申しました。モシ、その代り、次の幕は、上の巻が蜘蛛の糸、下の巻が荵賣りだ。こりやアお前さんのお口に合ひやせう。

米作　在郷者だつて、蜘蛛の巣や荵を喰ふ奴があるもんで。

みつ　あのマアお口の惡い事。ホヽヽ。お前方も、いつでもわたしの所からお入れ申すお客様だ。知つてお出でだらうに。

元助　さう申せば櫻の時、土間へ大勢様で。

秀吉　眞平御免なされませ。つい日暮れ紛れゆゑ。

米作　あアに、男は當つて碎けろだ。これから心安く頼みます。

ト云ひながら、紙入れより額を一つ出し、紙に拈つて出し

コレ、かみさん、これ、せなア達にちくとんべえだが。

ト お光、これを取つて

みつ　オヤマア、それでは却つてお氣の毒でござります。

元助　これは有り難うござります。

秀吉　打出しましたら馬喰町まで

元助　ほんにお送り申しませう。

小の　急に胡麻をする奴よ。

米作　あんだと。

みつ　イヽエ、ナニ胡麻……ごま犬の事でござりまする。

米作　コロリか……ヤレ、可哀さうに。
　ト手を合はす。この途端、樂屋にて木の頭。

南無まいだぶ〳〵。
　トきざみになる。

元助　ヤア、幕だ、斯うしちやア居られねえ。
　トうろたへ、樹笛を持ち、幣元結のはじを引き摺つて樂屋口へ入る。米作、幣の縛りしまゝ引くゆゑ

米作　アイタヽヽヽヽ、どうする〳〵。

みつ　アレ、元結を切つてお上げよ〳〵。

皆々　ナヽイ〳〵。
　ト早舞ひになり、この一件殘らず米作の後へ附き、樂屋口へ入る。知らせにつき、樂屋口打返し。

　本舞臺、銀張り附き花の丸の大欄間を吊り下ろし、一面通しの御簾、下手、淨瑠璃臺。爰に清元連中居並び、眞中に大衝立を据ゑ、日覆より櫻の吊り枝。すべて賴光館の體よろしく、道具納まる。
　ト居所變り道具納まると、直ぐに淸元淨瑠璃にかゝる。

〽人知れぬ、心は重き小夜衣の、常の宿直に引きかへて、御簾洩る風の音づれも、實に只ならぬ多田の御所、君を守護なす雨勇士。
　ト本釣り鐘の頭を打込み、薄ドロ〳〵をかぶせ、誂への鳴り物になる。上手に貞光、下に季武、かけ烏帽子、大紋、四天王の拵らへ、碁盤を扣へて碁を打つて居る。眞中に小蝶の前、下げ髮、傾城の拵らへ、駒下駄を穿き、蜘蛛の圍に見立てたる、絹張りの傘をかたげ、片手は懐手にて、三人見得よく舞臺眞中へセリ上げ、よろしく納まる。

〽石音高く黑白の、圍碁に心も現なく。〽身は幻の憂き勤め、今日は東の客に馴れ、明日は筑紫の人を待つ、引く辻占は笹蟹の、蜘蛛の振舞ひ兼ねてより、千筋に濡れて花の雨。
　ト薄ドロ〳〵にて、小蝶の前、振りの模樣よろしくあつて、下へ來る。兩人はこれにて、小蝶の前に心附くこなし

貞光　なんだ。いつの間にやら、稀有な者が出現したわえ。

初演の繪番附

初演の繪番附

季武　見りやア傾城姿、さうしてお身は
兩人　いづくの誰れだ。
小蝶　アイ、わたしや九條の葛城屋、小蝶の前と云ひやんす。
貞光　そのまた女が
季武　何ゆゑこけえ。
小蝶　サア、賴光さんの御病氣を。
季武　見舞ひに來たか。ヤレ深切な……ソレ、お見やれ。我が君も武藝ばかりか、女の方も如才はねえわえ。
貞光　定めて夫婦約束でも、したと云ふやうな事か。畜生め。さうして、その馴染めはいつの頃。
季武　コレ、內證で話して聞かせろ。
兩人　どうだ〳〵。
小蝶　サア、それは。
〽目見得始めは去年の春、茶屋の山衆に呼びかけられて、ちよつと床几へより光さんと、知らずかけたるくらべごし、君ならずして誰れにかと、願ひ叶うて初深雪、一座の衆に騒られて、嬉し涙の床の內、察してやいのと寄り添へば〽貞光季武目くばせなし、刀拔く間もあら不思議や、爰に顯はれかしこに隱れ、業通自在のその振舞ひ、正しく變化ござんなれと、突き留めんにも居もためず、形は消えて。
トどろ〳〵にて、小蝶の前、振りあつて、トゞ貞光、季武、思ひ入れあつて、太刀を拔いてかゝるを、小蝶の前、蜘蛛の巢の傘にて、三人立廻りあつて、誂らへの衝立を楯に立て、又この上へ上がりなどする事。トド傘にて身を隱し、よろしくあつて、三人一時に引拔き、貞光、廣袖、渡し守軍助の形。季武、葱賣り半七の着付け、茶筅髮、小蝶の前、びらり帽子、同じく葱賣りお花の衣裳に引拔き、兩人、葱籠を持ち、貞光、手拭鉢卷して、焚き火鉢を煽ぎ立て、この見得、知らせにつき道具變る。
本舞臺、向う打拔き、隅田川の遠見。上手、渡し船、舞臺前に一面菜の花、土手板、居所變りよろしく納まる。
〽葱めせ〳〵聲陸奧の、葱の里の初郭公、吾妻目馴れぬこの風俗は、誰れに習ひて都の手振り、八瀨や小原の俤を、其まゝ寫し都鳥。
ト三人よろしく振りあつて見得。よき時分、三側目の

土間より、以前の米作、高坏の菓子を持ち、おづ〳〵と舞臺へ來かゝる。此うち舞臺番の兩人、秀吉、元助、吹替り居て、この時駈け出て、これを留めて

秀吉　モシ〳〵、どうなさる。

元助　また上がつて來た。此方へ來なせえ〳〵。

米作　エヽ、おぬし達の知つた事ぢやアねえ。あの姐えめ、旨くじよなめくから、褒美にこの菓子をやるべえと思つて。

米作　モシ〳〵、それおぢやア狂言の邪魔になります。

元助　マア、打出すまで、あそこへ入つてお出でなせえ。

米作　イヤ、さうでねえもんだ。誰れも誉められて、腹の立つ者はあんめえ。アレ、しうか丈の子だなア。オ、オオ、よく似てゐらア。

兩人　マア〳〵、いゝからあそこへ。

米作　否だ。先刻も云ふ通り、あんなに泣く狂言を見せたで、眼がしぼんで見悪いから、爰で見物する。

元助　始末にいけねえ。モシ〳〵、そんならわたし等の居る所へお出でなせえ。

米作　碌な所ぢやあんめえ。

秀吉　マア、悪い事は云はねえ。此方へお出でなせえ。

ト捨ぜりふにて、舞臺番兩人の間へ坐らす。道具方より東西かける。

軍助　ヤレ〳〵、マア、今日は遲いお歸りゆゑ、お案じ申しました。

米作　ナニ、芝居を見て居ました。

元助　コレサ、默つて見物しなせえ。

秀吉　東西〳〵。

半七　サア、道々にも野分姫の執着に身を惱まし、お花どのゝ介抱にて、やう〳〵戻りましたわいなう。

はな　人手にかゝり、敢へない御最期なされたとの事。

軍助　お死骸の側に落ち散る、その袱紗。

トこれにて半七、懷中より袱紗を出し

半七　語るにつけても涙の種……又とだに思はぬ仲の別れ路を、詞殘りて名をや恨みん。

はな　この世の御縁に薄くとも、御本妻は野分姫さま。

軍助　せめて妄執晴るゝやうに、煙りとなして。

半七　卽身成佛いたしてくりやれ。

ト焚き火鉢へ袱紗を入れる。かけ煙硝立つ。

三人　南無阿彌陀佛々々々々々々。

トこれにて大ドロ〳〵、三人アッと苦しむ。悶絶して

後を向く。

〽白浪の雲かあらぬか妄執の、姿を爰にあり〱と、同じ荵の染め模様。

トどろ〱になり、花道スッポン際へかけ煙硝立つ。これにて後見、差出しを持つて、駈け行く。この時、揚幕や所々にて

大勢　舞鶴屋々々々……。

ト聲をかける。矢張りドロ〱打ちゐる。

舞鶴屋ア。

トこれにて元助、氣を揉み、ウロ〱して堪り兼ね、花道へ走り行き、後見を掻き退け、端折りを下ろし、手拭を折つて、帽子の心にて、頭へ乘せ、件の荵籠を捧げ

〽浮いた姿の娘ぶり、華奢な風俗かいしよげに、小褄はら〱取る形も、振りの袂に風ふくむ、荵の亂れ限りなき、恨みの刃に情なや、浮みもやらでその人の、連れ添ふ事の嫉ましく、うつら〱と迷ひ來て、小船間近く立ちよれば。

ト元助、惡身にて舞臺へ來る。舞臺の秀吉、米作、怪訝の思ひ入れ。米作、卿へ煙管、莨持ち、堪り兼ね駈け出す。秀吉、留めるを拂ひ退け

米作　コレ〱、おれ昔から荵賣りを見たが、野郎の双面を始めて見た。

元助　それでも、穴が明いたから飛び出した。

米作　イヤ、穴が明からうが、天上せうが、おらア在所で地芝居しても、そんな法式はねえこんだ。一體、わり樣達は、何役を勤めるもんだよ。

元助　わつちやア舞鶴屋の送りでござります。

米作　ナニ送りだ。狼か……ムウ、さう云へば、似た所もある。

秀吉　モシ、そんな事を云ひなすつても、この節は色事で方々逃げて歩きます。

米作　何でも一せりふしにやアならねえ……モシ、役者衆、免し召さらう……さうして、おぬしは何だ。

秀吉　わたしも送りでござります。

米作　ハテ、よく似た事もあるもんだ。おれも小栗だ。

元助　どこの役者の。

米作　エヽ、役者ではねえ、小栗判官兼氏の末孫だ。

元助　ナニ御冗談ばかり。アハヽヽヽ。

秀吉　それぢや馬は名人だらうね。

米作　毎年小金ッ原の馬揃ひの時など、どんねえな荒れ馬でも乗りこなすゆゑ、地狂言に出張つても、いつでも小栗の物語りを作つて踊るだ。

軍助　モシ〳〵、なんとその振り事を、わたしどもゝ後學の爲。

花半　拜見いたしたうござりまする。

米作　さう云はれるとはにかむが、やつて見せたえか。

元助　却つて御見物のお慰みになるだらう。

秀吉　サア〳〵、小栗さん、頼み申します。

〽お馬乘りがお上手で、乘つて駈けるとて腰の骨をにやした、にやしたこやしたこんゑむしよ、サアなれど仕合せは大坂天滿の喜三郎が膏藥は一貝が六文だ、半貝買つてつけたれば、癒りや癒つたが、かんきんすんきん炭取り、孤のかけでもねえが、づべ〳〵とつッ禿けた、禿げた所へ蠅が三疋とまつた、とまりやとまつたが中の蠅めは田舍の育ち、不調法な蠅めでな、飛んで逃げるとて、すこんへんをにやしたなれど、仕合せは三益坊が駈けつけて、蠅を押へてけんびき元から灸すゑた、蠅にけんびき蠅の屍に、三里と申す古事は、鎌氏どのより始まりける。

ト米作、よろしくあつて、辭儀をして、上の三人に向ひ

米作　大きにお邪魔を致しました。

　トこの時お光も出て

秀吉　オヽ、お前さん、また舞臺へ上がりなさつた。

米作　イヤ〳〵、案じまい〳〵。手が足りないから助けに頼まれた。

軍助　なか〳〵商賣人のわたしどもは、及ばぬ事でござります。

秀吉　サア〳〵、お早くお頼み申します。

はな　モシ、これからどの件でござんしたやら。

半七　口說きへ飛ぶがようござる。

はな　ア、コレイナア。

〽思ひ初めしは過ぎし年、しかも彌生の雛遊び、妹脊事する節句とて、桃に柳の色ふかみ、内裡びいなの睦まじさ、羨ましさに手を取れば、其方もぢつと締め返し、人目の關を忍ぶ山、それ覺えてかその夜半に、抱いて寢ねして新枕、その睦言の忘られず、二世も三世も變るまい必らずやいのと抱きしめて、云ひ交せしを忘れてはと、恨みつ泣きつ身をもだへ、あなたへ引けばこなたへ引き、

沖に漂ふ海士小舟、波にもまるゝ風情なり。
ト口說きのうち、元助を相手に吉例の模樣。米作、浮かれて、この中へ邪魔になる振り、お光、氣を揉み、秀吉に連れて來てくれいと思ひ入れ。秀吉、引き出すまた拔けてこの中へ入る。仕組みあつて

はな　ホヽヽ、あのお方が邪魔をなさんすゆゑ。

米作　ナニ、邪魔するもんで、踊りを助けて居るのだ。

秀吉　さうでもありませうが、田舍の踊りとは振合ひが違ひます。

米作　おれ、地芝居では、所作事ばかりやる男だ。

半七　そんなら斯う致しませう。有りふれた葱賣りの手踊りゆゑ

軍助　お前も並んで、一緒にやつて見なせえ。

半七　惣踊りなら、爰へ立つた者は、遁がれにやござりませぬぞえ、

秀吉　わたしは、しん拔けだ〳〵。

米作　イヤ〳〵、そんなら、なぜ爰へ立ちはだかつた。

秀吉　イヤ、とんだ災難に逢ふものだ。

みつ　アノわたしもかえ。

半花　ソレ。

軍光　ソレ。

半七　ソレ。

米作　さうだんべ。
〽花形の、渡しに色の綾瀨川、姿三の輪と浮き名を請地、人が五百崎心の醫屋、天神さんのお世話なら、片葉の芦ぢやないかいな、それ〳〵誓文さうかいな。〽離れぬ仲の縁ぢやもの。
ト上手に軍助、お花、半七。下手に秀吉、お光、元助、踊る、眞中に米作、左右を見て、踊らうとして、出來ぬこなし幾度もあつて、トゞぢれて

米作　エヽ、口惜しいわい〳〵。明日習つて來て踊るから待つて居ろ。
東西々々、先づ今日はこれぎりめでたく打出し。

幕

物思葱の彩（終り）

所作事と申すも
恐れありのまゝ
姿ばかりを取集めて

風曲五色の花籠

乙姫浦島
船頭曲馬
三人仕丁

文久三年三月、守田座上演、中村芝翫の五變化で、すべて父歌右衛門が踊つたものを、あれこれと集めて組み立てたのである。乙姫と浦島の早替り、船頭の三人生醉、當時の流行を當込んだらしい曲馬師、いづれも在來の型で、たゞ地が幾分違つてゐるばかりである。曲馬師の踊の文句が、別項一寇賣り」の百姓の踊と同じなのは注目すべきである。三人仕丁は、普通なら三人生醉でゆくのが順序であるが、前に船頭でやつてしまつてゐるので、この件は殆んど追出しの賑やかしに附けたものになつてゐる。猿廻しと稽古娘の踊は、拵らへのツナギにこの時入れたものであらう。補筆は歌右衛門と關係の深い三世櫻田治助で、淸元は延壽太夫と德兵衛、岸澤は古式部と式佐、長唄は芳村伊十郎、杵屋彌吉、望月太左吉、振附は花柳壽輔、役割は、乙姫、浦島、船頭、曲馬師、太郎又が中村芝翫、稽古娘おみつと勝見が坂東三津五郎、猿廻し佐四郎が中村兒雀、次郎又が中村福助、等であつた。

風曲五色の花籠

（乙姫浦島、船頭曲馬、三人仕丁）

龍宮の場
水江の里の場
品川の場
飛鳥山の場
大内庭先の場

役名――龍宮の乙姫。浦島太郎。船頭、駒吉。曲馬師、魁藏。稽古娘、お光。猿廻し、佐四郎。仕丁、太郎又實ハ斯波左衞門義照。仕丁、次郎又、實ハ今川伊豫之助仲秋。女仕丁、勝見實ハ仲秋妻柏木。

清元連中
岸澤連中
長唄連中

本舞臺、三間の間、見事なる龍門の張り物、上下瑠璃臺。銀張り波の張り物にて隱し、冂覆より、同じく銀張り浪の張り物を下ろし、舞臺先、上下、浪板、眞中に九尺の縮緬、三方折り廻し、銀箔にて浪を描き吊しある、好みの通り飾り付け、鳴り物一セイ、浪の音にて、幕明く。

ト頭取出て、所作事名題、太夫連名、長唄囃子連中、役人觸れあつて入る。ト知らせに付き、下手、浪の張り物打返し、爰に清元連中居並び、前彈きにかゝる。

〽和田海の、底にも生ふる戀草に、浮名も龍の都なる、玉の臺に乙姫が、かざす袂の美しく、實に水際の立姿。

ト波の音ドロ〳〵、唐樂入りし謠らへの鳴り物になり、乙姫、好みの拵らへ、唐團扇を持ち、童女二人、魚の付きし鬘、好みの形、長柄の團扇をさしかけ、この見得、知らせにて、縮緬の浪幕、切つて落す。爰に三人立ち身にて佇ふ。

〽綠なす、八重の汐路に打つ浪は、寄せて返れど浦々も、緣結びし浦島は、夢に水江の故鄕へ、歸りて又の逢瀨さへ、いつ荒浪の覺束な。〽丹後とやらはいづくぞと、見

返る空に雁金の、越路へ歸る女夫連れ〽あゝ浦山し只一人、捨てられし身の何を花、何を便りに告げやらん、心一つに沖の石、乾く間もなき袖の露、契り替らぬしるしには、別れに送る玉手箱、再び爰へ歸るまで、必らず明けてたもるなと、恨み佗びにし鳥籠に、放れともなき床の海。〽男心は昔仇浪に、餘所に増す花あるならば、あゝなんとせう、よもや惡性はあるまいと、思うて見ても女氣に、迷ふは愚痴よ恥かしや。

ト此うち、乙姫、よろしく振りあつて

〽悟れば龍女成佛に、いざさせ給へと夕風に、さし來る汐のどう〳〵〳〵、玉殿深く。

ト浪の音になり、蜑女二人、會釋して下手へ入る。知らせに付き、下手太夫座を浪の張り物にて消し、上手も浪の張り物に替り、日覆は霞になり、正面の龍門、後へあふる。霞の書割り。これにて、長唄囃子連中居並び、此うち、乙姫引拔き、浦島になり、玉手箱、釣竿持ち、花道へ行き、しやんと極まる。長唄にかゝる

〽和田の原、浪路遙かと夕風に、龍の都を出で汐の、寄するも八十の浦島が〽後に引かるゝ戀衣、濡るゝも夢とかぞ色に、乘り路の海の船唄や〽沖の洲崎に海女の小船が誰が戀風に、一人焦れてよんやさ、ゆたのたゆたのしよんがいな、磯邊離れて木曾路山、寐覺め心に辿り來る。

ト花道にて、振りあつて、舞臺へ來り

〽袖に梢の移り香散りて、花や戀しき面影の、さつと吹き來る春風に、霞がうめる初櫻、花の色香につい移り氣な、菜種は蝶の露の床。

トこれより、鈴蟲の合ひ方、扇の振りになる。

〽忘れ兼ねたる比翼の蝶の、情くらべん仇櫻〽雲か雲かと峯の花、せめて薫りの便りもがなと〽思ひ比べて結すてふ〽空定めなき花曇り。

ト此うち振りあり、玉手箱の蓋を明ける。仕掛けにて白き烟りパッと立ち、これにて、鬘白髪になる。

〽うつゝ白浪幾夜か戀に、馴れし情も今では辛や、獨り寐の、ほんに思へば、さりとは〳〵昔戀しき浪枕うたてさよ。

トよろしく振りあつて

〽實にや七世の浪路を越えて、蓬が浦、浦島が、盡きぬ契りを語る家土產。

ト鳴り物になり、浦島、釣竿を杖に突き、向うへ入る。直ぐに知らせに付き、長唄連中のこの前へ佃の遠見の

〽張り物を下ろし、舞臺に浪板と船を出し、上手張り物打返し、爰に清元連中、下手張り物打返し、爰に岸澤連中居並び、打合せの前彈き。此うち、下手より簾の下りし屋根船を眞中へ引出す。

〽佃々と急いで押せば、汐がそこりで艪が立たぬ、サアサア。

トよき程に船より、駒吉、浴衣三尺の形、棹を持ち出て

駒吉　當る〳〵。

岸　〽もやひ綱。

淸　〽お靜かに、お上りなさる月魄の、眞水を分けて高輪を。

岸　〽横に乘つ切る水馴れ棹、一本貸して付合ひに。

淸　〽品川沖の鷗鳥、女浪男浪の中のよさ

岸　〽吉ヤイ。

駒吉　オイ。

岸　〽アノナ、橋向うでナ、ゐて吉が待つて居るぜ。

淸　〽エヽ、おかたじけ、この中も、女めを嫌てゝ氣休めに洒落を結城の紫微塵。

岸　〽ひどい目に袷の立引は、恐れの筋ぢやあるまいか。

岸　〽さらばこれから酒の段。

淸　〽ちよつと浮かれの當振りに〽女郎が一人にお客が五人、五本小指は誰れにやんろ、よいとよいとしよ。

ト駒吉、振りあつて、三人生際になる。

岸　〽狂ふ調子を蹴上ぐるはずみ。

淸　〽アイタヽヽ、オヽ、痛やの、ヤア〳〵〳〵、わしが頭をこないに、チエ、情ない、此やうなどえらい瘤を拵らへて、チエヽ、もしや癒らぬその時は、嚊に愛想を盡かされうか、どう内方へ去なれうぞ、チエヽ〽しやくり上げたる泣き上戸。

岸　〽エヽ、やかましいわえ、贅六め、吠えやアがる事アねえ、ナヽなんのこつたえ、これ、瘤の一そくや二そく欲しかアおれがくれてやらア〽とあせる鉢卷縮りがねえ。

淸　〽エヽこの足腰のなぜ立たぬ、われが泣たでおりやないた〽と怒れば側から吹出だし〽ムヽヽ、ハヽヽ、ムヽ、ハヽ、ムヽヽ、ハヽヽヽヽ、おんやおや〳〵こりやどうだ、おらア生得邊部邊土の、山家もんのでおんぢやりやすが、そんげなハヽヽ、理窟があんべいかの、ホヽヽハヽヽヽハヽヽヽ、どてつ腹が病めるやうだ、アイタヽ

タヽ、アイタヽヽ、ハヽヽ、ムヽヽ、なおよにもかお
よにもしどもなや〽浮かれ次手に繰出せ〳〵。
　ト三人生酔の振りあつて
清〽長い日足も八ツ山沖で、釣に餘念も中容替り、俄か
に一天眞くろ黒。
岸〽そりやこそ疾風だ、こいつは堪らぬ、南無や讃岐の
金比羅大權現、助け給へと云ふ間も荒浪。
清〽命から〳〵唐天竺か、流れ寄つたる岸には南京、お
早うお出でと云はれて氣が付き。
岸〽見れば横濱波止場の堅めに、つどゝん鐵砲・悔り
尻餅。
清〽あいた狐で。
岸〽ちよちよよんがよいやしよ〽えゝ化かされた。
　トよろ〳〵、早き振りあつて、薄雷の音になる。
清〽折しも鳴り出すはたゝ神。
岸〽軀が大事と夕立の〽雨に追はれて
　ト三重、雷鳴の音、雨車鳴り、船頭・剃身笠かざし、
下手へ走り入る、上下の淨瑠璃臺、櫻の林にて消す事。
正面の張り物、二つに折れ、櫻の盛り、飛鳥山の書割
りになる　日覆より櫻の吊り枝を下ろし、よろ〳〵道
具納まる。ト下手櫻の林打返す。爰に岸澤連中居並び、
直ぐに淨瑠璃になる。
〽昨日今日、花の盛りに飛鳥山、空も長閑に幾群れか、
王子をかけて日暮の、暮れるを惜しむ花見連。
　ト合ひ方、鳴り物になり、向うより、稽古娘おみつ、
花見の拵らへ、花簪、揃ひの手拭、岸澤の紋付きし
青傘をさし、出て來る。
〽お師匠さんのお揃ひに、遅れて一人生娘が、まだ春寒
に人目をば、いとふ櫻の大和屋に。
　ト花道にて振りあつて、向うより佐四郎、袴の形、小
猿を脊負ひ、鞭竹を持ち出て來り、花道にて、兩人、
絡みし振りになる。
〽道から連れに成駒の、小付け兒雀の猿引が、引くは持
前袖袂、云はぬ色なる山吹の、下道傳ひ來りける。
　ト兩人、振りあつて、舞臺へ來り
佐四　時に姐さん、お前は岸澤のお弟子だね
みつ　アイ、今日はお師匠さんのお花見で、飛鳥山から王
子をかけ、お母さんと參りましたが、日暮から皆さんの、
後になつて遅れましたが、早う逢ひたいものぢやわいな
ア。

佐四　イヤ、それなればお案じなさんな。外と違つて一方道、道の間違ふ氣遣ひはない。シタガ、お連れのお母さんも、先へお出でなすつたのか。
みつ　イエ〳〵、後でござんすが、何をして居なさんすか、早う來て下さんすりやよいに。
佐四　そんなら爰で待ち合して、一緒にお出でなさるがいい。併し、この美しい娘御を、一人で置くは險呑だ。お母さんのお出でまで、わたしが一緒に居て上げませう。
みつ　それは嬉しうござんすわいなア。
佐四　アヽコレ、爰に酒でもあればいゝが、只マジ〳〵としても居られまい。
みつ　丁度幸ひ、そのお猿に、なんぞさして見せなさんせいなア。
佐四　イヤ、太夫は疲れて居るゆゑ、私しが代りにやりませう。
　ト佐四郎、猿を脇へやり、前へ出て
〽この太夫がこの間、隣りの女猿と轉び寐の、うまい最中に男猿が歸り、おのれ間男猿逃がさぬと、云ふより早く門の口、松の梢に駈け上がり。
　トこれより、かんからを打込み、輕業模樣の振りになる。
〽達磨大師の座禪の形、さて又ぶらりと下がり藤、蜘蛛の巣がらみ八つもぢり、ばつたり落ちて捕へられ、牛蒡燒いて叩かれた。
　ト佐四郎、よろしく振りあつて
〽浮かれて踊る向うより、猿に所縁の曲馬乗り。
　ト鳴り物、ツヽカケになり、向うより魁藏、腰附き馬の拵らへにて、出て來り、花道にとまり
〽それ駒に三箇の大事あり、陰陽の轡、五箇の秘事、ぐつと呑み込みあふりかけ、鐙ふんばりもう一とちろり、兎角後引く癖馬なれど、飼葉に世話も七種なづな拍子どり。來りける。
　ト魁藏、よろしく振りあつて、舞臺へ來り、輪乗りに乘り廻し納まる。
みつ　申し、あの人に聞いて見て下さんせ。
佐四　オツト、よし〳〵……申しえ、お前來なさる道で。
　ト魁藏、顔見て
魁藏　ヤ、これは猿廻しの佐四郎さん、此方へ流しに來なすつたか。
佐四　アイ、飛鳥山の花を見ながら、海老屋と扇屋を當に

初演當時の繪番附

來ました。
魁藏 イヤ、その花よりも美しい、物云ふ花のこの姐さん先刻日暮でお目にかゝつたが、爰にお出でなすつたか。
みつ お母さんが後からゆゑ、待ち合して居ますわいなア。
魁藏 左樣でござりましたか……見れば外にお供もなし、佐四さん、うまくするな。
佐四 ナニ、おらアそんな手際はない。お母さんの來るまで付合つて居るのだ。
魁藏 なんにしろ、年頃と云ひ、師匠は名に負ふ式佐さん、定めて淨瑠璃も巧からう。
みつ イエ〳〵、わたしや不束ゆゑ、一人彈きも出來ぬけれど、只御贔屓ばつかりで。
魁藏 エヽ、うまくお云ひだ。淨瑠璃ばかりか、どこもかしこも、油の乘つたうまい最中。
みつ それはお前のお目違ひ。
トおみつ、手拭で芝翫を打つ眞似をする。
〽ほんにわたしは不器用に、節も廻らぬ藪鶯、やつと調子も青柳の、その糸の名の十八に、まだ二つ三つ合ひの手も、眞似て師匠の撥癖を、寫す流れの岸澤や、四季の淺ひも恥かしい、芽出し紅葉のおぼこ者。
トおみつ、手拭を遣ひ、振りあつて、魁藏出て
〽それは大きな嘘の皮、疾に誰れかとかせかけて、しつぽり根締めにしたん棹〽いえ色戀と云ふ事は、心中ものゝ淨瑠璃に、語るばかりで白糸の、心は淸い瀧の川。
ト魁藏、おみつ、振りあつて、これより、をかしみのクドキになる
〽その辨天に輪をかけて、ても美しい硝子を、これが譬の逆さ川、ぞつと巢鴨にハックショウ、つい戀風に浮か浮かと、狂ふ心の駒込から、思ひ染井で又王子、たとへ狐であらうとも、こん〳〵これが遁がさりよかと、しなだれかゝれば燒餅に、小猿が飛び付き引つ搔けば、あいたゝ田端の西行庵、布袋られぬぢやないかいな。
ト此うち、魁藏、娘を捕へ、をかしみ口說き、よき程に、佐四郎、この中へ入り、よろしく振りあつて、小猿、魁藏をば引ッ搔く。これにて納まる
魁藏 エヽ、太夫め、ひどく引ッ搔いた。ア、痛い〳〵。
佐四 あんまりお前が、こじつけるからだ。
魁藏 それだと云つてこのお娘を、見遁がして置けるものか。カウ、佐四さん、取持つてくんねえな。

三世坂東三津五郎所演「曲馬」の踊

佐四　隨分取持つて上げようから、先づお前の身上がりの馬の藝をして見せなせえ。
みつ　ほんに、それが見たうごんざすわいなア。
魁藏　イヤ、お好みならばなんなりと。
佐四　サア〳〵、時代に、所望だ〳〵。
魁藏　さらば御覽に入れようか。
ト魁藏、扇を持ち、物語り模樣になる。
〽抑〻宇治の合戰に、先陣後陣を爭うて。馬の腹帶のびたりと、騙して佐々木が乘り勝てば、梶原いらつて早川に、馬諸ともに押流され、浮いつ沈んつ眼を廻せば、高綱見兼ねて脉を取り、家の定紋四つ目屋の、長命丸を服ますれば、景季むつくと起き上がり。
ト此うち、物語りの振り、佐四郎を遣ひ、よき程より、をかしみになり、馬を取り、バッタリ倒るゝ佐四郎、藥を服ませる思ひ入れ。魁藏、藥の利きたる思ひ入れにて、ムックと立ち上がり、シャッキリなる。これよりをかしみになる。
〽棒を呑んだる如くにて、むつくりしやんと橋の、小島が崎より一散走りに、むく〳〵しやんとおつたてば、
ト魁藏、シャッキリとなつた儘の振りあつて、手を開きつゝ立ち居る。佐四郎出て
〽これぢやならぬと高綱が、水がかければぐにや〳〵ぐにや〳〵。
ト佐四郎、張子の馬柄杓にて、水をかける思ひ入れ。これにて、魁藏、グニヤ〳〵となる。
〽程が過ぎればむく〳〵〳〵。
トまた佐四郎、水をかける。
〽ぐにやらぐにや〳〵むく〳〵むつくりこ。
トよろしく振り。
〽むく〳〵しやんと立つものは、銅の鳥居に石燈籠、立看板に帆柱、ぐにやらぐにや〳〵する物は、さらしこんにやく心天、上州博多に安女郎〽狐を馬の物語り。
ト魁藏よろしく振りあつて、おみつを引出し
魁藏　サア〳〵、今度はお前の番だ。なんぞやつてお見せなせえ。
みつ　イエ〳〵、わたしや出來ぬわいなア。
佐四　出來ずばわたしも共々に。
魁藏　三人一緒に。
三人　ヨイ〳〵〳〵。
ト三人、一時に肌を脱ぎ、花傘を持ち、手踊りにな

る。
〽王子土産と男の心、替るが早い花曇り、それば〱
とやつて來た、おや今の間に日が出たは、これが狐の嫁
入り、さつさ振り込め、よんやさ。
ト納まる　時の鐘、風の音、
〽早入相の鐘諸とも、梢の花の散り〲に、おのが家路
へ。
ト小猿、曲馬の馬を腰へ付けて駈け出す。佐四郎は猿
を逃がしてはと行きかける。お光、共に行かんとす
る。軋讓は附き馬を持つて行きしと三人慌てゝ曲撥に
て上手へ入る。下手の太夫座を段幕にて消す。後の遠
見、上へ引いて取り、後より紅白の段幕を張り、長唄
連中の雛段を押出し、上手折り廻し網代塀、紅葉の立
ち木、日覆より、同じく吊り枝を下ろし、よろしく道
具納まる。管絃になり、仕丁六人白丁形にて、下手よ
り出て來り
仕一　如何に方々、神寳のその一つ、村雲の御鏡紛失なし
洛中洛外云ふに及ばす
仕二　五畿七道へ配符を廻し、草を分けて御詮議あれど、
皆くれ行くへの知れざるは
仕三　譬への燈臺元暗し、都の内に隱れ忍ぶ、曲者あるに
極まつたり。
仕四　それに付けても合點ゆかぬは、新參の仕丁の太郎又、
一癖あり氣な面魂ひ。
仕五　いま盜賊にて名の高き、霧太郎が同類なるか。
仕六　但しは赤松滿祐か、殘黨餘類の者なるか、詮議仕出
さば大きな手柄。
仕一　關白樣より莫大な、御褒美を下されば、必らずとも
にぬからぬやう。
五人　心得ました。
仕丁　いづれもござれ。
ト矢張り右の鳴り物にて、六人、上手へ入る。これに
て正面の段幕切つて落す。長唄囃子連中居並び、前彈
きあつて
〽三千歳に、なるてふ桃の雛壇に、姿を映す林間の、溫
め酒も色に出て、文字も嬲と夕映えや〽對の仕丁の紅葉
狩。
ト誂らへセリ上げ鳴り物になり、眞中に女仕丁勝見、
振り袖、白丁の上をかけ、熊手を持ち立ち身、上手に
太郎又、下手に次郎又、兩人とも仕丁の拵らへにて、

眞中に三足の竹へ德利をかけ、紅葉を焚いて居る見得よろしく、セリ上げ留めの木にて、下手段幕切つて落す、岸澤連中居並び、直ぐにかゝる。

岸〽花の吹雪にあらねども、木の葉の雨のばら／＼と、降り積む庭の朝淸め。

唄〽片寄せ／＼掻き集め、焚いてこぞりて思惑へ、當る手先をおつとゞめ。

岸〽まだその道も白張に、思ふ事さへ云ひ兼ねて、餘所に顏をば御垣守。

唄〽衞士の焚く火を顏に焚く、初の戀路に踏み迷ふ、女子心の果敢なさに。

岸〽花の都の名木を。

唄〽開かまほしやと寄り添へば。

岸〽熊手押つ取り身を構へ。

ト此うち三人よろしく振りあつて、太郎又、前へ出て熊手を持ち、キッとなる。これより鞨鞁もやうの拍子になる。

唄〽面白の花の都や、筆に書けどもよも盡きまじ。

ト此うち、太郎又、振りあつて納まり、勝見、前へ扇持ち出る。

唄〽先づ東には名にしおふ、祇園淸水音羽山、落ちくる瀧の嵐にて、地主の櫻のちら／＼／＼。

ト勝見、振りあつて、次郎又、前へ出て

岸〽西は松の尾梅の色、神樂の鼓鳴瀧や、その名高雄の夕紅葉。

唄〽南は伏見淀川に、岸の蟹を水車。

ト太郎又、振りあつて、以前の仕丁六人、出かゝる。これより、拍子になり、仕丁を相手に立廻りの振りになる。

岸〽浪にせかれてくる／＼／＼。

唄〽北には比叡の都富士。

岸〽鞍馬の花や小野の雪。

唄〽飽かぬ眺めの。

岸〽け

唄〽し

岸〽き

唄〽かな。

ト此うち立廻りよろしくあつて、トゞ太郎又、懷より錦の袋入りの鏡を落す。次郎又、これはト取上げるを太郎又引ツたくり、懷へ入れる。次郎又、勝見、詰め

寄り

次郎　正しく今のは村雲の御鏡。

勝見　所持なすからは曲者たらん。

次郎　察するところ、赤松の、残黨なるか但し又。

勝見　霧太郎が手の者なるか。

太郎　イヽヤ、わしは仕丁の太郎又、赤松の霧太郎のと、そんな者に近付きはねえ。

次郎　イヤ、隠すとも隠させぬ。汝が素性を見出さん爲、仕丁にやつせし我れこそは、今川伊豫之助仲秋。

勝見　同じく妻の柏木なるワ。

次郎　サア、包まず本名

勝見　明かしてしまや。

太郎　イヽヤ、名乗る名は持たねえ。

〽聞へし素性を若松、隠し持つたる寶物、それをと寄るを拂ひ退け。

ト次郎又、勝見、懐へ手を入れようとする。拂ひ退けまた以前の仕丁二人かゝるを投げ退け

太郎　エヽ、名乗るまじとは思へども、仕丁とまでに姿を替へ、詮議なす心にめで、名乗つて聞かせる、よつく聞け。赤松則政に合體なし、謀叛を企つ我れこそは、斯波左衛門義照なるワ。

ト仕丁かゝり、引抜き、時代の肌脱ぎになる

次郎　さてこそな。

太郎　村雲の御鏡奪ひ取り、十が九つ仕負ふせしに。つらね唄〽あら口惜しやこの年月、企みし事も仇し野の〽仇となり行く身の栂の尾。

ト仕丁、かゝる。次郎又、勝見、立ちかゝり

岸〽後の名いとふ清瀧に、いどみ爭ふ猛夫は。

唄〽これぞ歌舞伎の花紅葉。

岸〽めざましかりける次第なり。

トよろしく、立廻り。太郎又、眞中に、上手、次郎又。下手、勝見、左右に仕丁、引張りの見得。頭取出て

頭取　先づ今日はこれぎり。めでたく打出し。

幕

風曲五色の花籠（終り）

恩愛瞔關守——宗清

操の常磐と夢にしら雪

文政十一年十一月、市村座上演、「貢玉雪源氏贔屓」の三建目淨瑠璃で、いつもの顔見世式とは變り、至極アツサリした常識的な筋の所爲か、今に廢らず殘つてゐる。この場が居所變りになると鞍馬山の場になつて、淨瑠璃は牛若丸の夢であつたといふ趣向、それからだんまりになるのであつた。安政三年に四世菊五郎が再演した時も矢張り同じ趣向で、この時出來たのが今の長唄「鞍馬山」である。顔見世狂言そのものが、この時分からもう變りかけてゐたらしい。この作者は奈川本助で、常磐津は小文字太夫と岸澤式佐、振附に西川扇藏、役割は、常磐御前は岩井粂三郎、宗清が三世坂東三津五郎で、挿入した番附でもわかる通り、三津五郎は宗清を老人の拵らへで勤めたらしい。今は白塗りの若い武士で演じるのが例である。これから變つた鞍馬山では、粂三郎が二役牛若丸、三津五郎が高野聖覺淨、坂東簑助の惡源太義平の三人がだんまりになつたので、三津五郎は二役變るため、特に老人に作つたものであらう。

恩愛瞔關守（宗清）

木幡の里新關の場

役名 ━ 彌平兵衞宗清、一子、今若丸。一子、乙若丸。常磐御前。

常磐津連中

本舞臺、三間の間、雪の積りたる山の張り物。眞中二間高足、本緣付きの屋體、子持ち筋の銀襖。前側障子立て切り、板廂に紫ふせん蝶の幕を打ち、上の方、松の立木、日覆より蔦の絡みし松の吊り枝、下の方好き所に紅梅の立幹、誂らへの高札を立て、下の方淨瑠璃臺、隱しながら矢來の張り物。陣屋門、この道具雪たつぷり積り、舞臺前花道とも雪板澤山、雪布を敷き、總て、山城の國木幡の里新關の體、一セイ雪颪しにて、幕明く。

ト頭取出て淨瑠璃役人觸れあつて入る。

ト時の太鼓になり、上手より、軍兵二人、小手脛當の形、六尺棒を突き、出て來り

軍一 如何に方々、先達て亡び失せたる左馬頭義朝が妻常磐御前、三人の子供を連れ、爰彼所に忍び居るとの風聞。

軍二 それゆゑこの木幡の里に新關を立て置き、その關守は御主人彌平兵衞宗清さま、源氏の落人見付け次第、討取れとある淸盛公の嚴命。

軍一 我れ／＼は時代りに張り番の役目。怪しき者と見るならば、引ツ括つて御前へ出さば、天晴れの御褒美。

軍二 手柄は仕勝ち、必らずともに、ぬかりなきやう。

兩人 キツと番頭仕らう。

ト上下に扣へる。知らせにつき、下手の張り物打返す爰に常磐津連中居並び、淨瑠璃になる。

〽君命うけて宗清は、身を片絲の夜の關、守れば敵も夜嵐も、矢竹心の矢屛風に、隔て嚴しき板廂。

ト障子開く。爰に宗清、烏帽子大紋、好みの形、兵書を讀みゐる見得。雪颪し。

宗清 降つたる雪かな。野も山も皆白妙と、いつか頭に積る雪、寒さに負けぬ宗清が、六波羅よりの上意を受け、

左馬頭が枝葉の子供、見附け次第に首打てと、淸盛公の厳しき掟、その制札に、松を手折つて松を助くと、內府重盛どのゝ詞を賜ふは、何さま心ありげな御諚。兎にも角にも關守は、話し相手の無いので退屈。睡魔を避くるこの兵書、治世に亂を忘れぬ爲、彼の孫康が雪あかり。ドリヤ友人を、開いて見ようか。

ト兵書を讀むこなし。

〽故鄕を出でしにまさる淚かな、夢に別るゝ枕とは、實に定家が詠み歌も、身に吳竹の伏見なる、知るべの方を導ねんと、紫竹を出でて後や先。

トこの淨瑠璃へかすめて雪颪し、衍をかむせ、向うより、常磐御前、かつしき鬘、白の着附けへ誂らへ小忌衣やうの物を着て、市女笠を被り、赤子を懷へ入れ銀張りの杖を突き、今若と乙若、兒髷、振り袖、刺貫小さ刀、塗り笠、杖を突かせ、手を引き、よろしく出て、花道へとまる。雪頻りに降る。

〽歩み習はぬ道芝の、雪の劍に裳さへ、紅さそふ照り草の、今は果敢なき常磐の前、勞はしや今若と、乙若君を兩袖に、包めど餘る憂き事の、世を牛若は懷に、氷る乳房を抱き寐の、顏を見るさへいとゞ猶、歩み疲れておはしける。

トよろしくあつて、常磐御前、躓くを、今若、勞はる思ひ入れ。

今若　母樣、危なうござります。必らず怪我して下さるなや。

常磐　オヽ、よう云うてたもつた。紫竹の里を出でしより便りに思ふは其方ばかり。アヽ、思へば昨日は昔にて、鏡が石に蔭たのみ、三人の子供を儲けても、御運拙なき源の、この行く末は埋れ木の、また來る春に逢ふ事もあらう程に、必らず平家の侍ひに、見咎められぬやうしてたもや。兎から云ふうち、伏見の里へ間もあるまい。サア〱、二人とも、もそつとぢや程に、辛抱して歩いてたもや。

〽云へど乙若、頭是なく。

乙若　もう歩く事は、否ぢや〱。

常磐　これは又、どうしたものぢや。今にねんねさす程に聞分けて歩くものぢや。あれ見や、向うの雪明りで、鳥羽の畷や木幡の里。

〽やがて木幡の山越えて、馬はあれども步行裸足、君を思へば行くぞとよ、歩く者には花紅葉、花の手車手を引

いて、歩みかゝれば雪風に、笠を取られじ突く杖の、雪に涙も玉鉾の、その道もせを行き悩む。

ト常磐御前、赤子をあやす事あつて、二人の子供の手を引いて、やう／＼花道の附け際まで来る。この様子を聞いて軍兵両人、木戸を明け出て、常磐を透し見て

軍一　ヤア、夜中と云ひ怪しい女。見れば幼な子を大勢連れ、さてはこの關を越え、伏見の方へ行くのだな。

軍二　爰は木幡の新關、清盛公の嚴命にて、宗清どのゝ嚴しき固めは、義朝が殘黨詮議の爲。

軍一　女は元よりその幼な子、通す事はさて措いて、うぬらが素性を聞くまでは、そこ一寸も動かさぬ。

軍二　いづくの者か有りやうに、女めキリ／＼

兩人　行乗つて通れ。

ト きつと云ふ。此うち、雪頻りに降る。常磐、二人の子役を圍ひ、思ひ入れ。

常磐　妾は元より都の市人、伏見のあたりへ知るべあつて尋ぬるうちにこの大雪。二人の子供に道はか行かず、思はずも日を暮らしたり。どうぞ情にこの關を。

軍一　イヽヤならぬ。さう吐かす程猶怪しい。

軍二　幼な子と云ひ、形恰好、引ッ括つて御前へ引く。

兩人　女め、うせう。

ト兩人、常磐を引立てようとする。宗清、思ひ入れあつて

宗清　ヤレ待て兩人。

軍兵　ハ、ア

トこれにて、兩人、扣へる。

子供を連れた女とな。源氏の餘類に似合ひの注文。身が直々に、糺してくれう。

〽何か思案の宗清が、氷る足駄に善惡の、邪正の道を踏み分けて、關の戸ぼその庭傳ひ。

ト軍兵一、段の前へ下駄を直す。宗清、袴の裾を高く上げ、下駄を穿き、軍兵二、傘をさしかけ、軍兵一、雪洞を持ち、先へ立ち、花道の附け際まで来て、宗清、常磐をよく／＼見て

〽賤しからざる上臈の、供をも連れず只一人。褄はづれと云ひ、年格好。ハテ、媚やかな。

〽きつと眺めて居たりしが。

ト宗清思ひ入れあつて

殊に三人の幼な子を伴ひしが、疑ひもなき源氏の落人、

常磐　エ、そんなら妾に三人の子供があるゆゑに、その疑

ひ。子のある女子はいづくにも。
宗清　イヽヤ云はれな、その云ひ拔け……コリヤ、者ども、
大事の落人、子供諸とも關所の庭へ〳〵
ト此せりふを云ひながら、宗清、上手へ來て、床几に
かゝる。
兩人　心得ました……女め、立たう。
〽是非なく〳〵も荒奴に、引立てられて常磐の前、隙も
あらばと遠近の、たつきも知らぬ關の庭、巣を放れたる
鶯の、吹雪に迷ふ風情なり。
ト常磐の前、子役兩人、軍兵に圍まれ、チリ〳〵と舞
臺眞中へ來る。宗清、思ひ入れ。
宗清　コリヤ女、よつく聞け。あれなる高札を諸所に立て
置き、この木幡の里に新關を構へ、源氏の落人詮議ある
條、心得あつて參りしか。
常磐　イエ〳〵、なんのマア、左樣な事は存じませぬ。
宗清　知らずば仔細、云ひ聞かさん。
ト誂らへ小鼓の入りし合ひ方。宗清、思ひ入れ。
いま四海漸く穩かなりと雖も、先達て亡び失せたる、左
馬之頭義朝、大勢の子供等あつて、所々方々に漂泊なし
殊に五條の雜仕、常磐が腹に三人の男子ある由。

〽生け置きなば後日の憂ひと、新關を立て置かれ、見附
け次第に首討てと、
淸盛公の嚴命。兎やかくとあらがはずと、常磐御前と白狀
いたせ。
〽樣子問はれて塞がる胸。
ト常磐、思ひ入れあつて
常磐　そんならアノ、三人の子供があるゆゑに、その疑ひ
も子供ゆゑ。子のある女は、いづくにも。
宗清　アヽ云はれなその云ひ譯。子供の事はさて置いて、
云はずと知れた芙蓉のまなじり、國色の聞えある常磐御
前、外にあらう筈がない。身が引立てゝ、六波羅どのへ
常磐　すりや妾をどうあつても……ほんに思へばこの身の
濡れ衣、是非もなき事ぢやなア。
宗清　斯くなる上は籠中の鳥、逃げるとて逃がしはせぬ。
併し、その身ばかりか三人四人、さぞかし命惜しからん
……幸ひ〳〵。
〽傍に立てし高札の、文字は文なき雪の梅、色こそ見え
ね知る人の。
ト宗清、立てたる高札を拔き取つて
コレ、この高札をよつく見よ。松を手折つて松を助けよ

初演當時の繪番附

と、忝なくも内府重盛公、お心あり氣なこの高札。
〽操にかけし詞詰め、返事を松の高札に、手折るとも又
助るとも。
この宗清へ仰せなれば
〽生けては置かぬ落人の。
素性を明かし真直ぐに、常磐御前と白狀いたせ。
〽退引きならぬ一言に、情も籠る詞の綾。
ト宗清、キッと云ふ。常磐の前、思ひ入れ。
常磐　イエ／＼、たとへ何程仰せあるとも、妾はその常磐
とやらではござりませぬ。
宗清　この期に及び益なき繰り言、素性を明かして助かる
か。もし常磐なら手にかける。また松ならば助くるとも
思案極めて白狀いたせ。
常磐　それぢやと云うて、この身の覺えない事を。
軍兵　云はずば餓鬼めを刺し殺さうか。
常磐　ア、コレ、早まるまいぞ。
宗清　然らばこの場で白狀いたすか。
常磐　サア、それは。
兩人　サア／＼／＼。
宗清　疾く／＼身元を白狀いたせ。

ト　きつと云ふ。
常磐　ハア、。
ト泣き落す。
軍一　白狀せずば。
軍二　この餓鬼めを。
ト子役へかゝる、常磐留めて
常磐　ナウ待つてたべ二人の衆、如何にも妾はその常磐。
兩人　さてこそな。
常磐　とても遁がれぬこの身の行く末、サア、宗清どの、
早う手にかけ、殺してたべ。
ト手を合せる。
今若　イニ／＼、母様は。
ト常磐を圍ふ。
乙若　怖いわいなう。
ト常磐へ縋る。
常磐　オヽ、尤もぢや、道理ぢやが、宗清どのゝ眼力に、
見顯はされしこの常磐。とても開かぬ源氏の運命。サア、
潔よう母諸とも……南無阿彌陀佛。
宗清　よい覺悟、觀念なせ。
〽拔き放したる氷の刃、峯の吹雪に照り添ふる、光は夜

半の月魄と、見紛ふうちにこは如何に、刄物は外れて谷蔭の、岩の狹間に雫散つたり。

トこの文句のうちに、宗清、刀を抜き、常磐へさし付ける、子役兩人見て、常磐に縋る。常磐、子役を退け、宗清へ體を差しつける。子役また縋る事二三度あつて、ト宗清、子役を退け、常磐へ刀をさしつける　思ひ入れあつて、後の松の枝を切る　雫パッと散る。常磐思ひ入れ。

常磐　ヤ、こりや自らを何ゆゑに。

宗清　松を助ける制札の、掟嚴しき清盛公、松の操を破れと云ふ、謎が解くればその松の……ナ、松の操も雫諸とも、解けよとある君の嚴命。

常磐　すりや、自らに松の操を。

宗清　色替へぬ松、色替へる桜。

常磐　して、三人のこの子供は。

宗清　小枝も共に。

常磐　雫を拂うて。

宗清　直さまこれより。

常磐　そんなら妾も。

宗清　サ、參らうか。

〽いざ御供と宗清に、助けられたる幼な子の、その源は谷の音、峯の樹と音づれて。

ト宗清、常磐、子役兩人、二重へ上がる。

軍兵　すりや、子供らを。

ト立ちかゝるを、宗清、抜打ちに、兩人を切る。

〽南柯の夢は覺めにけり／＼。

ト宗清、血刀を後へ隠す。常磐、子役兩人を圍ふ。この見得。大ドロ／＼にて、道具替る。

恩愛瞔關守（終り）

今様 須磨の寫繪——須磨

行平と松風村雨の傳說は、近松の「松風村雨束帶鑑」から始まつて、義太夫や顔見世狂言に幾多の脚色を見るが、これはそれらとは關係なく、單に一幕の舞踊劇としたもので、今日でも曲も振も大流行である。清元も、その前年新らしく流儀を開いたばかりなので、非常に緊張して作曲した所爲か頗る巧く出來、主演者の嵐三五郎も評判の惡い人だつたが所作だけは非常に上手だつたので、それから一斑の稽古に殘つて今日に至つたものであらう。作者は二世櫻田治助で、文化十二年五月の市村座に初上演。清元は延壽太夫に清澤万吉、振附は藤間勘十郎、役割は、行平と此兵衛が早變りで三世嵐三五郎、松風が二世市川團之助、村雨が岩井粂三郎であつた。行平と此兵衛は一人の俳優が演じるのが本來なのであるが、普通の師匠では別人でやる事もあり、近頃は略して、前の行平の件をクツてしまふ事もある。

今樣須磨の寫繪（須磨）

須磨の浦の場

役名──海女、松風。同、村雨。在原の行平。漁師、此兵衞。

清元連中

本舞臺、向う一面の海原の遠見。上手、一間の藁家葺き、眞中に松の大樹。舞臺前、浪板所々、下手、清元連中の出語り臺。岩組みの打返し。日覆より、松に蔦の絡み、吊り枝。すべて、須磨の浦濱邊の模様。一セイ、浪の音にて、幕明く。

ト頭取、出て、口上觸れあつて、チョン／＼にて、太夫座打返す。清元連中居並び、前彈きにかゝる。

〽聚樂の御所の御遊とて歌舞伎召されて淨瑠璃も、小野のお通が松風に、さて村雨は佐渡島の、お國ときめて行平は、伏見山三が役廻り。

トこれにて行平眞中に烏帽子を持ち、立ち身、左右に村雨、松風、蜑の形、汐汲み桶を持ち、三人よろしくセリ上がる。

〽面白や、なれても須磨の夕まぐれ、餘所目にそれと白浪の、寄する渚に戀渡る、蜑には惜しき姉妹が、互ひに思ひ在原の、君に手枕川島の、いつしか深う鳴海潟、爰は鳴尾の松蔭に、羨ましくも住む月の、出汐をいざや汲まうよ。

〽女子業には、おゝ恥かしや、裾を絡げてかいやり捨てて、脛もあらはにぞんぶりこ／＼、浦の海松や石蓴は儘よ、千鳥鷗があれ囀いて。

〽晝は濱邊になアえ、汐なれ衣、夜は殿御と濡れ衣、こちや／＼知つて居る。

〽暮れをえ松風なアえ、別れの鐘には涙村雨袖絞る、こちや／＼知つて居る〽あゝ辛氣〽しんき辛苦を汲み分けて、見れば月こそ桶にあり、これにも月の入りたるや、月は一つ、願は二つ滿汐も、戀の重荷と思へばほんに、憂しと思はぬ汐路かな。

ト三人よろしく振りあつて

行平　わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に、三歳この方住み馴れて

松風　汐汲む業の暇波、お宮仕への嬉しさも

村雨　云ふに云はれぬわたしらが、賤しい身にて幾夜半か

行平　結ぶ緣の行平も。

〽哀れ古へを〽思ひ出づれば懷かしや、雲井の上にありし時、月の御花の宴、冠り裝束いかめしう、座に連なれど上の空、よい間にそつと局待ち、彼れも我れらを待ち侘びて〽眺ればいとゞだに戀しき人の戀しきに〽謎とかこちし爪音に、つんてんころりとさせもが露の、命かけたる中々も、今日ばかりとぞ田鶴も啼く、疑ひゆゑに勅勘受け、今さすらひの憂き住ひ。

ト行平、かこつ振り、兩人、これに搦み

〽その漂浪とやらなればこそ、こんな浦端へお出でもありて、夢にも知らぬお姿を、見上げ申して女氣に、身にも及ばぬ戀をさへ〽須磨のあまりにやる方も、渚の小舟漕ぎ寄せて〽心のたけをつげの櫛、さしもよしある御方と〽逢瀨嬉しき明暮れに〽思ひは同じ戀草を、結びあふせて芦の家の〽假初め枕冥加ない、御睦言に引替へて、今の仰せは憎らしい、わたしばかりは變らじと寄り添ふ

村雨〽松風が、中を隔てゝこれ妹〽姉を差措きまんがちな、行平さまはこのわしが〽いや〳〵なんぼ姉さんでも、こればつかりは面々しがち〽いやそりやならぬ〽いえわたしと〽常睦まじき姉妹も、色に澤立つ濱千鳥。

ト此うち、村雨、松風、爭ふ振りあつて、この時、千鳥、正面へ差し金にて澤立つ仕組み。行平、こなし。

行平　ハテ、風もあらぬに群れ居る千鳥、聲呼び交し立ち騷ぐは、さしくる汐の時なるや。

村雨　珍らしさうに、そをれマア。

松風　なぜ其やうに

兩人　仰しやるのぢや。

行平　サア、これはアノ……オヽ、それ〳〵、二人が角目立ちやるを見て、千鳥が笑ふ戀諍ひ、仲睦まじう、わつさりと。

松風　浮いて踊りの

兩人　手を揃へ。

〽一夜寢る身を比翼と思ふや〽立つ名もまゝの川千鳥〽緣も深き友千鳥、夕浪千鳥約束の、月にも雲の村千鳥、一人憂き寢の島千鳥とは、知らぬ男のにく小夜千鳥、焦れ焦れて磯千鳥、通ふ千鳥の浦傳ひ。

ト此うち、三人、手踊り模樣、よろしくあつて

行平　サア／＼、これで仲直り。右と左に松風村雨、先へ庵で待つて居や。

兩人　そんなら必らず

行平　二人の戀人。

兩人　行平さま。

行平　サア／＼、行きや／＼。

兩人　アイ／＼。

〽君が仰せに否もなう、打連れ庵へ。

ト松風、村雨、よろーく上手へ入る。

行平　アヽ、可哀やなア。今日こそ歸洛の迎ひ船、この事二人に打明けて、いはゞ名殘も盡きまじと、包むがうちにこの千鳥、立ち騷ぎしはさし來る汐と覺えたり。最早出船の時至りしか。せめて二人へ筐には、これこの松を行平と、思うて心を慰めくれよ。つれなき者と思はんが、勅免の上猶豫は恐れ、其うち傳手に呼び迎へん。オヽ、さうぢや。

〽さらばの聲も汐曇り、しめる心を取り直し、御船さしてぞ出で給ふ。

ト此うち、よろしく烏帽子狩衣を松へ掛け、こなしあつて向うへ入る。

〽斯くとも知らず姉妹は、纏れし髮もつい解けやすき、千筋結ぶの女同士、伊勢二見ヶ浦なくも、見ゆる鏡に顏と顏。

ト此うち、屋體の伊豫簀上がる。内に村雨、松風の髮を直しゐる。

松風　コレマア、行平さまは、こちらに先へと仰しやつてさうしてあれにもお見えなされぬは。

村雨　大方隱れてわたしらに、氣を揉ませて笑はうといふ思し召しでござんせう。

松風　アレ妹、合點のゆかぬあの松に、行平さまの烏帽子狩衣。

村雨　ほんに、どうしてあの松へ。

〽心ならねば走り寄り、松にかけたる二品を、としや遲しととり／＼に。

ト兩人、松の立ち木へ寄つて、件の狩衣、烏帽子、以前の認めし短册を取上げて、兩人こなし。

松風　立別れ因幡の山の峯に生ふる、松としきかば今歸りこん。

村雨　立別れ因幡の山と遊ばしたは

松風　ムウ、もしや都へ此まゝに。
村雨　エ、。
松風　滿汐待ちが出舟の習ひ、先刻の男は、こりやどうも。
村雨　そんなら姉さん。
松風　妹、おぢや。
〽いざと互ひに褄引上げ、馳せ行く向うへ、剃下げの‥‥。
ト兩人、身拵らへして、ツカ／＼と花道へ行きかける。カケリ、バタ／＼になり、此兵衛、一散に出て、花道にて、兩人と入れ替り、ドッコイと留まる。
〽奴のこの／＼此兵衛が、留めた手足も節くれし、拗ねた心の松の木男、酒と女に目がくれて、顔に似合はぬ色上戸、爰で押へた姐え達、手元三升に三つ扇、ちよつと相なら石五器で、二つ輪靑い桐の文字、どうでごんすとしなだるゝ。
ト此兵衛、二人を相手に振り。
松風　こりやア、誰れぢやと思へば此兵衛さん。
村雨　急ぎの用がある程に、ちよつと通して下さんせ。
兩人　下さんせ。
此兵　オットその用知つて居る。あの歸洛の行平が、後を慕うて行くのであらう。
兩人　エ、。
松風　すりやモウ行平さまには
此兵　オ、疾に都へ行つたわやい。
松風　エ、、、。ホ、ホイ。
〽はつとばかりに松風は、正體もなく伏し沈む、妹も供に涙ぐみ。
村雨　エ、、つれない行平さま、三歳が程の憂さ戀を、仇に都へ去ぬるとは。
〽えゝ曲もなや胴欲な、なんぼつれないお心ぢやとて、云ひ交したる言の葉を、こなたは忘れず待ち侘びて、ともどもお供と村雨が、行くを引留め。
此兵　ア、コレ／＼、譬へそさまが清姫もどきでやらかしても、行平は疾に出船。追ひかけたとて走つたとて、なんの今更間に合はう。そりや惡い／＼。
〽なんぼそさまが蜑の子ぢやとて、五町や十町は泳ぎもなろが、潜りもしようがの、とても行かりよか浪の上、そこらを、おれが才覺で〽沖の洲崎に茶屋立てさせて、登り下りの松を待つ〽やれこれ田樂そばなら茶。
村雨　エ、、おかしやんせ、其やうな事は知らぬわいなア。

七代目市川海老蔵の此兵衛

此兵　われがそれ程思ふもの、もう留めもせぬ。おれが出船であと追ひかけ、恨みの丈を。
村雨　嬉しうござんす。そんなら直ぐに、とは云へ姉さん。
此兵　ハテ、色は仕勝ちぢや。爰構はず。
村雨　アイ〳〵。
〽飛び立つばかり甲斐々々しく、眞砂を蹴立て一散に、御跡慕うて走り行く。
此兵　ヤレ嬉しや、これで邪魔は拂うて退けた。これからはコレ松風、心を付けろ。松風やアい〳〵。
ト呼び生ける。松風、立ち上がり、キヨロ〳〵こなし。
〽呼ばれてふつと松風は、心付くよりうろ〳〵と、筐の狩衣抱きしめ、筐こそ今は仇なれこれなくば、忘るゝ隙もありなんと、詠みしも理りや、猶思ひこそ深かりし。
松風　深き思ひの行平さま、なぜに物をば仰しやらぬ。サア、昨夜の後の睦言を、聞きたいわいなア〳〵。
此兵　ハア、可哀や此奴は、氣が違つたな。
松風　オヽ、氣違ひぢや〳〵。春と夏との氣違ひは。
〽笑ふ山邊に啼く郭公、ほぞんかけたと走れば走る、蝶も菜種に物狂ひ。
此兵　ハア、こりや行平に捨てられて、氣が違つたな。コレ、爰にも一人色男。エヽ、畜類め、うまいものおやなア。
〽日頃口說くにぴんしやんと、其方はつれない糸なき三味よ、引くに彈かれぬ我が思ひ、てんつてん〳〵天と誓文、堪らぬ〳〵、臙け汐家の夕煙り、さつさ立つわ、なそさまと浮名も立つわいな、よんやな好い首尾で。
松風　エヽ、なんの、行平さまより外の男は。
此兵　コレ〳〵、なんぼそもじがさう云うても、もう爰には居らぬあの行平。
松風　爰でないとは、コレ〳〵、あそこに、あの松こそは行平さま。例へ暫しは別るゝとも。
〽待てば來んとの御歌を、せめて頼みに松風が、狩衣ちやつと身に纏ひ、心の憂を慰めに、ありし詞を其まゝに
〽この松風はなんとした、えゝさては我らを他所にしててつきり外に色事か、有明の月のよすがに、忍ぶ約束合ひ圖の文を、示し候べく候かしく、大方そんな事であろ、待たるゝ身より松風やい〽あいと返事もどつちよ聲、つか〳〵側へ寄り添へば〽ちやツと飛び退 狩衣の
〽袖を捉へて、これなんおやいな、わしが色の黒いのは、
●所柄とて汐風に、吹かれて育つ磯馴れ松〽抱いて根上が

り松でもあらば、嬉しかんろの日を待ちし、かひもあるではないかいな〽今は誰れとてわくらはに、問ふ人もなき須磨の浦、一人殘つてそもやそも、あられうものか情なや、いで追ひ付かん、駈け行くを。

ト松風、狂亂の振りあつて行かうとするを、此兵衞とめる。

〽昔へ荒浪忽ちに、惡魚の餌食とならばなれ。

此兵　エヽ、可愛さ餘つて、憎さが百倍。

〽戀しき人に淡路島、通ふ千鳥の翅をかつて、空をもかけり灘をも凌ぎ、逢はで置くべき女の念力・邪魔さんすなと引退いて、行くをとどむる藪力、爭ふはずみに此兵衞が、我れと我が手に急所の當身、見向きもやらず馳せ出す所へ、〽同じ仲間の惡者ども、どつこいさせぬと突ッ立ち上がり。

ト漁師兩人、櫂を持つて出て支へる。

松風　こりや、其方衆も邪魔しやるか。

漁一　オヽ、知れた事、此兵衞が、惚れ込んで居る松風ゆゑ。

漁二　おいら二人が取持つのだ。松風・やる事は

兩人　ならないぞ。

松風　小癪な留立て。これ程思ひ込んだる一念、行かいで置かうか。そこ退さや。

兩人　滅多にさうは

松風　なにを。

兩人　どつこい。

〽思ひは堅き望夫石、それは筑紫の松浦潟、これは播磨の須磨の浦、磯打つ浪の自ら、松に吹き來る風も狂じてどう／＼／＼、さつ／＼さつと降りしきる、村雨と聞きしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん、松風ばかりや殘るらん。

ト浪の音、誂らへの鳴り物にて、兩人を相手に面白き立廻りあつて、どつこいトなる。此兵衞も起きて一つになり、四人、よろしく引ッ張りの見得・浪の音、一セイにて、

幕

今樣須磨の寫繪（終り）

梅柳とりくむ
廓の綾錦

花競霞猿隈——杜建

顔見世にも浄瑠璃の一幕があるのは型になつてゐたが、春の曾我狂言にも缺かさず所作のあるのが吉例だつた。それも大抵、大詰の對面の前へ附け。その所作が切れると對面になるのが通例で、本篇もその通りである。天保十二年正月、河原崎座に書き卸したもので、二枚目形の訥升を朝比奈に、荒事の海老藏を梶原で踊らせるのが趣向である。春だけに、顔見世浄瑠璃が妖精を中心とするのに比べて、どこまでも華やかだ。殊にこの曲は杜建といふ姿が非常に華々しく、大評判であつた。正本には「初霞五色の彩隈」と賦されてゐたが、上演の際、斯う改まつたのである。作詞は中村十助、常磐津は文字太夫と岸澤式佐、振附は西川巳の助役割は朝比奈が澤村訥升、舞鶴が岩井紫若、おでんが中村大吉、景季が七世市川海老藏であつた。

花競霞猿隈（柱建）

祐經新館の場

役名━小林の朝比奈。同妹。舞鶴。梶原源太景季。懸想文賣り、おでん實ハ京の小女郎。

常磐津連中

本舞臺、三間の間、眞中、吉例升組み上げ、障子の屋體、見付け金襖に錦の緞帳、彩入りの幔幕を書きし結構な模樣。蹴込み金張りつき綺麗なる模樣よろしく、上の方、小間垣、網代の源氏塀。此うち紅白梅の枝咲き出でたるを、繪心に飾りつけ、日覆より見事に紅白梅の吊り枝澤山下ろし、下の方、白梅、錦のだんだらの幔幕張り詰め、すべて祐經新館の體。狂言羯鼓の鳴り物にて幕明く。

ト直ぐに頭取出で、淨瑠璃名題太夫連名役人替名の口上觸れあつて、其ため口上左様にて、下の方の幔幕切つて落す。

ト爰に常磐津連中居並び、前彈きにかゝる

〽四夷八荒を草切りし、鎌倉山の勳しは、實に泰平の星月夜、その恩澤に輝かす、紋の庵に木瓜は、今日新玉の殿づくり、花の人呼ぶ呼子鳥。

ト淨瑠璃切れる。あと賑やかなる鳴り物になり、舞臺眞中に舞鶴、鶴の丸、かちんの素袍引ッかけ、振り袖衣裳、小結ひ烏帽子、中啓持ち、片手に三つ扇、五色の裂れ、建前の貝を飾りたる大柱を突き立て、これを抱へて立ち身。上の方に朝比奈、厚綿の鶴の丸の羽織衣裳、大小にて、右の手に大きなる建前の鏑矢を突き立て、左の手にて柱立の五色のなへ綱を捉へし見得。下の方に景季、出島鬘、厚綿、羽織衣裳、矢筈の紋ぢらし、好みの拵らへにて、同じく建前の雁股の大きなる矢を突き立て、右の手にて同じく五色のなへ綱を引ッ張つたる見得、三人よろしく柱建の見得にてセリ上がる。

〽神と君とを取分けて、三つの惠みを三つ扇、髭と髭とが初紋も、あたりを願ふ柱建て。

初演當時の繪番附

景季　さうだ〳〵。舞鶴どのも、兄いのおどけ口で、思ひ入れ笑ふがいゝワ。この景季も朝比奈と同じ事、横道な事がきつい嫌ひ、それゆゑ親仁や弟の平次も、しよつぷりの忌々しさ。好んで勘當受けて居たれど、今度祐經どのが大頭どのから、一﨟職を許されて、新たに立てた梅ケ谷のこの別莊、五色を象る筋隈に、蟇目の魔除けは矢筈の紋、舞鶴が三つ扇で、丁度揃つた柱建て、それからの思ひつきで、役にさゝれた今日の出合ひ。

朝比　それと云ふのも日頃から、曾我贔屓の源太どのと、この朝比奈、役目を幸ひ入込んだも、虎少將へぶち込んで、兄弟二人を祐經どのへ、是非逢はさうと、何かの魂膽。

舞鶴　そりやわたしとても同じ事、云はず語らず三人が

梶原　斯う落ち合つた曾我贔屓。

朝比　成る程、こいつは新らしい春だわえ。

〽四方を眺める四方拜、それかあらぬか梅が香の、霞を分けて向うより。

ト好みの鳴り物。花道よりおでん、好みの拵らへ、懸想文賣りにて、紅梅の枝に結び文を澤山つるし、これを擔ぎ出で來る。

〽戀の魁花に鳥、また笹鳴きの鶯ながら、今日新造の柱建て、それを祝ひの譽め詞、お邪魔であらうとその中へ丁度日柄も大吉の、色香こなして歩み來る。

トよろしく振りあつて、舞臺へ來る。皆々立ちかゝり

朝比　イヤア、御大慶々々々。今日新造の柱建て、それを祝ひ壽きに、のたくりつん出た女中さん、どこの者かとよく見りやア

梶原　おぬしやア大磯の文使ひ、舞鶴屋のおでんでないか。どう云ふ事で今日爰へ。

でん　サア、あの大磯でも大盡株の祐經さん、まだその上に輪をかけて、一番のお職とやらにならしやんしたゆゑ、この梅ケ谷へ內を立て、新宅披露の今日とても、柱建てがあるとの事。それでわたしもお馴染み甲斐、舞鶴屋と云ふ緣引きから、わざと祝ひに出かけても、賤しい形では大方に、御門を容易に通すまいと、思ひついての懸想文。これも一つは今日爰へ、お目見得なさんすお大名さん方に、花魁達より屆け物、早う上げうと走つて來た。ア、辛どやなう。

トこなし。

舞鶴　道理こそ、さばけた女中さんと、思ふに違はぬ廓の

お方。ほんに、ようマア來て下さんした。有やうは、この舞鶴も、殿達二人のその中、如何に役目と云ひながら、豆煎りにでもならうかと、大抵氣兼ねした事ぢゃござんせぬ。サア、これからお前を相手に頼み、祐經さんの見えるまで、樂遊びせにゃならぬわいなア。

でん　ハイ〳〵、そりモウ、わたしから願ふ所。どうぞお相手になされて、いつまでも爰にお置きなされて下さりませ。シタガ、春遊びと云うてから、女子二人で何をマア。

景季　追ひ羽根か、双六か。

朝比　イヤ、そりゃ貝合せであらう。

でん　ホヽ、譯もない。

朝比　イヤ〳〵さうだ。コレ、聞きやれ。

〽先づ初夢の寶船、浪乘り船の音きしる、とうの眠りの枕紙、男女の取り組みは、正月二日姫はじめ。

ト朝比奈、振りあつて、おでんを連れて出る。おでん、振りになる。

〽振り出し始めは日本橋、五十三次宿々を、筆に色どる繪双六、箱根八里はお葛籠馬や乘りかけて、越せど越されぬ大井川、ナア、エ、島田金谷の旅籠屋に、赤前垂れの夕てりや、吉田通れば二階から招くさ、招く緋鹿子糸鹿子。

景季　これで正月の祝儀が濟んだり。心濟まぬはコレおでん、おぬしが搖げて來た懸想文。花魁方の屆け物と思ひの外、コレ〳〵。

ト梅の枝を出し

コレ、源太さまへ小女郎、朝比奈さまへ小女郎、舞鶴さまへ小女郎とは、なんの事だ。

でん　サア、斯うなるからは、何をかお隱し申しませう。元わたしは河津さま御在京のつれ〴〵、御不便ありし風折が腹に、出生した京の小女郎と申す者。工藤の爲に河津さま、敢へなくお討たれ遊ばせし、その無念さは如何ばかり。せめては曾我の兄弟の、助けとなりてともども〳〵に、望み叶へんその爲に、大磯の廓へ入込み、姿を變へしも、祐經さまのお側に仕へて、折を窺ひ何かの手引と、それゆゑ參つた今日の仕儀。わたしがお願ひを、モシ、お叶へなされて下さりませいなア。

朝比　ヤア〳〵、そんならこなたは、祐安どのが京在藩の折、馴れ馴染んだ風折が腹に出生の

でん　京の小女郎でござりますわいな。

舞鶴　そんなら曾我の御兄弟、腹は變れど御惣領の
景季　さうとは知らず、賤しい文使ひと思つたは出損なひ、堪忍しやれ〳〵。爰にはあらぬ仇人の、側へ近寄り兄弟の、手引の爲に相見んと、それ程に苦勞するとは、男も及ばぬ大丈夫、流石は河津の胤だなア。
朝比　コレ、丁度今日この三人が、法を書いて。曾我兄弟を新入りの、角力の中へ取交せて、祐經へ逢はせる魂膽。その折こなたも共々に
舞鶴　それ〳〵、それでは御兄弟にも、よい後立て。とは云へ、物に用心する祐經さん、肌を許してお側へは。
朝比　オット、それには幸ひ、酸いも甘いも承知の小女郎、酒の興から取入つて、浮かるゝ話しでまろめ込み、何でも好きなは廓の所謂。
舞鶴　もと祐經さんは都の武士、京の女郎が好きと云うたら
景季　差詰め京が詳しい小女郎、この梶原も神崎通ひで、都の名ある色町は
朝比　何がどうした……おきやアがれ。
でん　朝さん、梶原さんも知つてと聞いて、手を詳しう傳授して下さんせ。

朝比　大磯ならば酌人の、虎少將が扣へて居れど、キッとこの場で廓のしこなし、その相槌は妹舞鶴。
舞鶴　知らぬながらも、そんなら爰で。
　　ト此の時向うにて
呼び　祐經參上。
舞鶴　ナニ、祐經どのが。
景季　はや別莊へ入り來るとや。
舞鶴　その前方に小女郎さん。
でん　何事もよいやうに。
景季　ハテ、物數云はずに
朝比　サア、去なしめせ〳〵。
〽互ひに胸の末廣や、傘をさすなら春日山、その狂言の山々も、云はず語らず舞鶴が、案內につれて魂膽の、樂屋へこそは。
　　ト舞鶴、案內して先におでん、兩人へこなしあつて付添ひ、よろしく向うへ入る。
〽何思ひけん梶原が、鎧取出し立ち上がり、大小ぼつ込み駈け出す、向うへ廻つて小林が。
　　ト景季、風呂敷包みの逆澤潟の鎧を取出し、引ッかたげ、大小さして行かんとする。朝比奈、見て悔り、こ

れな変へる。

景季　ドレ、おれも續いて行くべいか。

朝比　コレ待て、源太兄い。ぬしやアおれ一人居殘りにして、どこへ行くのだ。

景季　イヽヤ、いま祐經が來たとあれば、曾我の兄弟の二人も、定めて見えるは必定。この逆澤瀉を屆けさせ、次手に祐經に逢はせうと思ふ心で。

朝比　それでおぬしやアかん出すのか。コレ、そりやアこの髯が役廻り。だが、肝心の願ひある兄弟なれば、毛を吹いて疵物にさせちやア百日の萱。心にかゝるは氣早の時宗、それゆゑ舞鶴に小女郎を連れさせてやつたのも、事ないやうにと思ふがゆゑだ。もし荒氣を出して駈け込んだ時は、と押への鶴、抑へて居るおれ樣に、遠慮もせず、コレ景季、おぬしまでが短氣を出しては面倒だ。なんと止まつちやアくれめえか。

景季　イヤ／＼否だ。日頃に似合はぬおぬしの留め立て。こりやア工藤が怖いのか。イヤサ、曾我贔屓の梶原が、腕を擦つてノメ／＼と、見て居やうか。爰放せ。

朝比　オヤ、おやつかな。いつもの梶原たと思つたが、おさア矢ツ張り時宗だな。時宗でも、鬼神でも、腕に覺えの小林が、留めかゝつたらどこまでも、春の吉例猿隈の一イ三ウ三升のお兄いさん、分けて今年は初霞、初役同士の睦ましく、丸にいの字の朝比奈に、預けて留めてくんさるなら、かつちけ茶の葉に蝶々だアもサ。

景季　エヽ、面倒な。爰放せ。

朝比　イヽヤ、留めた。

景季　放せ。

朝比　イヤ、留めた／＼、おツ留めた。

景季　なにを。

〽廓で云へば帶引きなれど、今年や一番新しく、柏か峠に髭角力、いゝや矢ツ張りも一番、捻つて木遣りで引いてくりよ。

〽ヤ、これなア、銀の簪伊達にはさゝぬ、よい／＼きりし前髮なんで櫛を横にさす、えいやらえ、よいさ、よいやな。

〽とても留めるなら拍子にかゝつて留めてくりよ。

〽彼の山寺の大寺の、あれはゑん／＼。

〽鐘の撞木が生木にて、これはゑん／＼。〽撞く度每にしくら／＼、えいとんな。〽えんや／＼あれはさのサアよいとな。〽あれはゑん／＼、また／＼これはゑん／＼

ゑいこのゑんやらなア。〽引くはいつものソレ中の綱、正月だけに福引か、鐵棒めんぼう二本棒、靜かに引くは御所車、強いは猿の水車、くるりくる〳〵風車、おつとまだある上戸は後引く、新子藝者は名札引く、屋臺囃子のお祭りにや、牛が綱引く、えんやりよい。〽まさり劣りも勇士と力士、力競べや腕競べ、兩虎の挑みふしくれし、阿吽の仁王顏の隈・互ひに咲かす花競べ、目覺ましかりける次第なり。

ト段切り一杯に朝比奈・景季の睨いだる羽織を・兩人引き合ひ、草摺の見得よろしくチョン〳〵の知らせにつき・誂らへ大太鼓入りの鳴り物になり。

よろしく幕

花競霞猿隈（終り）

錦着戀山守 ―― 犬神

江戸の顔見世には、よく狐の化身が現はれたものであるが、その狐に對して、犬を出した事が三四度ある。犬では形が附かないので、いつも犬神の術を使ふ惡人といふ事にしてある。現に、いま長唄に殘つてゐる「犬神」も、狐と犬の爭ひである。この淨瑠璃も同じ趣向で、畑惡八郎が犬獅子の術を使ふといふのが筋である。犬神の狂言で脚本が殘つてゐるのはこればかりだ。寛政十年十一月、中村座の顔見世狂言「花三升吉野深雪」の四建目淨瑠璃で、作者は福森久助である。犬神の次にある一場は、俳優の爲に設けた幕で、この時、一座手無人なので、既に隱退した市川白猿（五世市川團十郎）が口上だけに出たのと、白猿の孫海老藏（後の七世市川團十郎）の初舞臺の披露を兼ねたのである。この時の常磐津は文字太夫に岸澤古式部、振附は市川七十郎、役割は、忠顯が岩井喜代太郎、玉琴が岩井粂三郎、おすみが山下万菊、おやまが中村千之助、おきじが中村七三郎、おゆきが岩井吉太郎、榊葉が中山富三郎、惡八郎が市川高麗藏、菊水が四世岩井半四郎、正行が市川海老藏であつた。

錦着戀山守（犬神）

忠顯閑居の場
元黑谷の場

役名——千種之助忠顯。義貞妹、玉琴姫。黑木賣り、おすみ。同、おやま。同、おきじ。同、おゆき。神子、榊葉實ハ岡崎のお辰狐。畑懸八郎時景實ハ犬神の精。楠の妻、菊水。楠多聞之助正行。

市川白猿。

常磐津連中

本舞臺、三間の間、正面九尺の亭屋體。三方伊豫簾うしろ一面の山幕、上下寒菊の花壇。左右の柱、紅葉、日覆より舞臺一杯の紅葉の吊り枝を下ろし、下の方、太夫連中居並び幕明く。

ト直ぐに淨瑠璃役觸れあつて、前彈きにかゝる。

〽面白き、人を呼び出す時雨月、濡れたいまゝの紅葉葉に、堅い岩間も角とれて、今日ぞ色増す戀の山山。

ト賑やかなる摺り鉦入りの鳴り物になり、花道より黑木賣りの女四人、やつし、おしよぼからげ、てんぐ柴を頭へ戴せ、一對の小原女にて出て來り、花道にとまる。

〽營みに、身を捨てゝこそ八瀨の里、黑木に白き白粉も、嫁入り盛りの小原女が、きりゝとしやんと褄からげ、黑木買はんせんかいなア、柴を召せ／＼流し目に、

トこの文句のうち、皆々舞臺付け際へ來り、揚げ幕の方を招く。また摺り鉦入りの鳴り物になり向うより玉琴、同じく黑木賣りにて、柴を頭へ乘せ、牛の綱を引いて出る。この牛に忠顯、羽織衣裳、若衆方にて、煙草をのみながら、横乘りに乘つて出る。花道の中に留まる。

〽見らるゝ人も世をうしの、背に乘せられし色の罠、かけしや袖を引き連れて、戀の山下、情の中に、云ふに岩井の愛嬌は、誰れも御影の麓なる、草の戸近く賣り來る。

トこの文句にて皆々本舞臺へ來り

忠顯　紅葉葉を分けつゝ行けば錦着て、家に歸ると人や見

るらん、錦も及ばぬ賤の女子ども、あの眞如堂の前から、牛の脊を借るゝのみならず、これまで送つてたもつたで道の勞れもなう、閑居の庵へ歸つたと思へば、此やうな嬉しい事はない。シタガ、其方衆は、さぞ草臥れたであらう。

ト忠顯、牛より下りる。

すみ　なんの私しどもは、お前さんをお送り申して參りましたゆゑ

やま　洛中洛外を、營みに歩きました、勞れもどこへやら。

きじ　それ／＼、お前さんのやうなお方なら、唐天竺までも

ゆき　送つてあげたい心でござんすわいなア、

忠顯　イヤ／＼、なんの某がやうな者を。

四人　イエ／＼、ござりますぞえ。

忠顯　そりや、どこに。

四人　妾にお出でなさんすわいなア。

ト玉琴を忠顯が前へ突きやる。

忠顯　この女子が、アノ某を。

すみ　思し召さいでわいなア。

やま　このお方は、あなたにお云ひ號けの、玉琴さまでござんすわいなア。

忠顯　ヤヽヽ、すりやアノ、義貞の妹御の

玉琴　玉琴でござります。此やうなあられもない姿で、お恥かしうござりますわいなア。

すみ　もうお年頃の姫君樣、今日はお迎ひのお輿、明日は御沙汰があるかと、待つに甲斐ないこの所へ御閑居、あんまり埓が明かんさかい、執權船田どのと相談して、此方から押しての輿入れ。イザ、姫君樣、兼ねてお約束の聟引出、禁庭より申し請けたる干珠の名玉、あなたへお上げなされませいなア。

玉琴　この名玉は、神功皇后三韓御凱陣の折柄より、内侍所に秘めありしを、尊仁王子さま奪ひ取らせ給ひ、密かに神泉苑にお隱しありしを、いつぞや篠塚が計らひにて事なう取り戻せし功とあつて、新田の家へ下し置かれしばつかりに、この名玉と黄金作りの太刀を以て、稻村が崎に龍神を祈り、鎌倉を亡ぼせし大功の品なれども

すみ　聟引出に進せられんと、遣はされたるその名玉、お受取りあつて

玉琴　御祝言なされて下さりませいなア。

忠顯　成る程、一旦契約いたせし事なれば、左やう申すは理りながら、今は勅勘のこの忠顯。人々の聞えもあれば結ばぬ緣と諦めて下されいの。
やま　ハテ、それが諦めらるゝ事ならば、此やうに姿をやつして、なんのお出でなされませう。
きじ　殊にお家の執權、忠臣の畑六郎左衞門どのに引きかへて、弟御の畑惡八郎とやら云ふお人、未だ部屋住ゆゑ、御家中に知つた者はなけれども
ゆき　いつぞや鎌倉合戰の砌り、手柄をした者には、褒美は望み次第と仰しやつたを聞き
すみ　東勝寺とやらで、きつい手柄を顯はした、その御褒美に、あらう事があるまい事が、このお姫樣を女房にしたいと、叶はぬ願ひを兄御が聞きつけ、勘當されましたとの事。
やま　すりや、名さへ怖い惡八郎が、どのやうな妨げをせまいものでもないと、姫君樣のきついお案じ。
きじ　モウ／＼、斯うして參つたからは、どうしてお館へお連れ申されませう。
忠顯　ぢやと云うても。
ゆき　此方も、ぢやと云うてもでござります。

すみ　こりやマア、困つたもの。どうぞ斯う云ふ所へ、誰れぞ來て、あなたのお心を解いてくれる
やま　よい取持ち人が
皆々　ありさうなものぢやがなア。
〽千代かけて、神をいさめの神樂月
ト大太鼓入りの鳴り物になり、花道より榊葉、振り袖ひらり帽子、千早、神子の形にて、鈴と扇を持ち出て來る。
〽端出ではす齒も白緒の千早、振つたる鈴しめは、やんもしろや美しや。
ト合ひ方になり、花道より惡八郎、やつし頭巾、輪袈裟、法印の形にて、扇と錫杖を持ち出て來る。
〽後から月待ち臺町や、田町にござる法印と、唄ふも色に蘇民書き札、戀は女子の錫杖に、振られた晩は難行苦行、昔の行者の一心に、ちよつとあたつて巳待ちながら、美しまひも夕しでの、神子に山ぶは放れぬなん／＼中山に、連れて爰へも高麗屋、浮きに浮かれて來りける。
皆々　ヤア、よい所へ神子と山伏どの、こなさん方に賴みたい事が。
惡八　オツト、皆までのたまふな。斯う云ふ所へ來るから

は、取持ちと云ふ事は、おいらより御見物様方が御承知だ。ドレ〳〵、一祈り祈つて上げませう。
榊葉　アレ、まんがちな。お前は暫らくで、何れも様へお目見得をさんしたゆゑ、マア、わたしから先へして下さんせ。
惡八　イヤ〳〵、淨瑠璃の出面、御贔屓はおれから先へ祈らにやアならねえ。
榊葉　ハテ、さう云はずと。
惡八　エヽ面倒な。いつそ虎拳で勝負をしよう。
榊葉　こりやよいわいなア。
兩人　サア〳〵。
ト兩人虎拳をして、惡八郎、負ける。
榊葉　それ見やしやんせ。これではわたしが恩ひろなし。お二人のお心の解けるやう、竈の神をいさめうか。
〽やんれもーろの荒神の、お前を見れば松植ゑて、黄金の井戸に水も湧き出で松もろともに、内も御繁昌、末繁昌の千代のお神樂。
惡八　ヤンヤ〳〵。シタガ、そんな事ぢやア、この色事は丸くなるまい。ドレ、これから愚僧が頭役へ御祈禱念じ進らうか。

〽當日念ずる本尊は、てんと大事の突き出しを、お床でしつぽり愛染明王、その御器量に辨才天、身仕舞ひ部屋はぞんざいてん、遣り手は十面七面堂、牛と云ふ名で牛頭天王、宵から上るは得大勢至、酒の上ではくどう明王、泣いて別れの鳥越明神、雨の宮には笠森稻荷で、留めた晩には根津權現、それで口舌も住吉明神、さんげ〳〵ぞつこん正直娘の初戀、これなアどうする奇妙頂禮。
やま　ヤレ〳〵、御苦勞でござんした。シタガ、こりやお二人の御祈禱でも、ゆかぬさうでござんす。
きじ　いつそ、御自身に仰しやりませいなア。
玉琴　おやと云うても。
すみ　サア、そこが今日の趣向。矢ッ張りあなたは八瀬の里の賤の女。ナ、御合點でござりまするか。
玉琴　そんならアノ、わしは賤の女で。
榊葉　それ〳〵、マア、お前さんは一體。
惡八　どこのお方でござりますぞえ。
玉琴　サア、それはの。
〽わしが在所はなア、京の田舎の片ほとり、薪に花を折り添へて、黒木可愛いノヽ小原木可愛い〳〵の可愛い殿御を留め木の薰り、薰り床しと寄り添へば〽男女の席

も忠顯卿〳〵さる頃都の合戰に、官軍の惣大將

忠顯　隱岐の國より攻め上り、花を飾りし軍勢も、大内山の晴れ軍

〽勇めや勇めと軍配の、風に從ふつばなの穗先、敵は落ち葉のばら〳〵と、さしもの六波羅ぼつ下し、喜ぶ甲斐も情なや、故郷へ歸る錦の旗、失せさせ給ふも我が誤まりと、仇なる人の讒言に、今は勅勘の御影山、露さへしげき草の庵、結ぶ緣は叶はぬと、行かんとするを。

玉琴　コレ、モシ、斯うした姿で參りしも。

〽仇や浮氣な事かいな、ほんにお顏も水鏡、振分け髮の云ひ號け、いつか〳〵と嫁入りを、待つに甲斐なき世の亂れ、早うお姿見まほしく、お百度參り代參り、夏書の額に手拭も、比翼の紋が嬉しうて、お禮申したお祖師さん、妙見さんより猶更に、緣を結びし神さんは、さうしたつれないお心に、さぞや迷惑してゞあろ、思ひやつてと口紅も、綻びかゝる室の海、咲かせて見たき風情なり。

榊葉　御尤もでござります。お道理でござります。それ程に仰しやつても、お得心ないからは、いつそ思し召し切らるゝが

玉琴　エヽ、。

榊葉　サア、マア、御緣談の事は思し召し切られて、ハテあなたと帶紐解いてしつぽりと、およればよいぢやござりませぬかいなア。

玉琴　緣の事は思ひ切つて、帶紐解いて寢いとはえ。

榊葉　サア、奧樣にならうと思し召すから、むづかしうござります。君傾城なら一夜二夜のお情は、おかけなされて遣はされませいなア。

忠顯　これは怪しからぬ事を聞くものぢや。今こそ勅勘の身なれ、頭の中將まで經上り、一天の君の臣として、浮かれ女なぞの契りは大内へ恐れ。

榊葉　ホヽ、大内々々と仰しやれども、大内も廓も、あまり違うたものぢやござりませぬぞえ。

惡太　成る程、こりやア神子どのが云ふが尤もだ。愚僧も元は關東生れ、江戸の吉原で花をやつたものだが、行つて見りやア似たやうなものだ。

忠顯　待て、二人の者ども。例へに引くも恐れ多い、大内に廓。その大内の年中行事、心得の爲、又は大内を敬ふ爲、この場で話し聞かさうや。

惡太　そりやア有り難うござります。左樣なら私しどもも吉原の年中行事、お心得の爲、又は通になつて野暮を退

ける爲に、この場でお話し申しませうか。
忠顯　こりやよからう。してまた大内と廓、似たと申す、その趣意は。
惡八　サア、そりや何でござります。先づ大内が南向きなら
榊葉　吉原は北向き。
玉琴　内裏上臈、
惡八　はし女郎。
忠顯　雲客あれば
榊葉　お客あり。
惡八　禿があれば
玉琴　女の童、
惡八　寢ず番に
玉琴　衛士。
榊葉　さて大門に
忠顯　四方門。
〽先づ元旦の四方拜〽二日は廓の禮日にて、賑ふ門の松飾り、去年の嘘さへ新玉に、又つく羽根や手鞠唄、羽子板づらな振り袖も、笑顔こぼるゝ梅が枝の、殘んの雪も德若に、御全盛とは客も榮えて初子の日、白馬の節會の、

〽めでたや〳〵、春の初めの春駒なんぞは、夢に見てさへよいとや申す〳〵。
ト大小拍子舞ひ。
忠顯　駒が勇めば初午に、家名〳〵の提灯は
玉琴　稲荷參りに裏茶屋の
惡八　地色もまゝに
榊葉　奈良の京、
〽春日祭りを御車の、廻れば巴の曲水や、桃の節句を咲き替へて、櫻が中の仲の町。
ト拍子舞ひ。
忠顯　吹雪は花の更衣、夏の御座にて移り行く
榊葉　端午の仕着せ染めて濃き
玉琴　赤と黒との裝束も
惡八　左右に分けて。
四人　競べ馬。
〽競馬は治世の術にして、その爭ひも埒の内、眞先駈けて乘り出す。
ト兩人、競馬の拍子少しあつて
〽いづれ劣らぬ月花は、勝負の木さへ分け難き。
忠顯　隙行く駒の早ければ

榊葉　氷室の貢まだ解けぬ。
玉琴　雪も田甫の富士詣で。
惡八　これも紋日と盂蘭盆會。
〽軒に花咲く燈籠は、吉原ばかり月見月。
榊葉　八朔白無垢。
玉琴　內證講。
忠顯　重陽の宴。
玉琴　菊の宴。
惡八　廓遊びの
榊葉　全盛は。
ト祇園囃子になり、女形皆々、早乙女になる。
〽祭禮を俄と稱ふ廓の花〽いざや早苗をとり〳〵に〽植ゑい〳〵早乙女、笠買うて着しよにな、笠買うてたもるなら、皆一對の見事え〽思つて通ふにおさんどなア、眠るの誠、ねごいのか、ぢらすのか、げんぢよめ〳〵〽今のげんぢよ節はどこから流行るの、のふとさんがの間の名代の、お杉とおたまが友綱取るとて問ひますの、げんぢよめ〳〵〽さて十月は夜講、のんだん達摩の緣でがな、裏の麥畑へおつころばいてかつころばいて、オヤ〳〵オヤ〳〵、子が出來た、孫產む曾孫產む、いんのこ〳〵、亥の子五節の生粹は。
榊葉　蜜柑の火燒。
忠顯　鬼やらひ。
惡八　春待つ餅に
玉琴　臼ひく。
榊葉　注連ひく。
皆々　見世をひく。
〽引くものにとりては。
トこれより手踊り。
〽花車、ひいて嬉しき姬小松、いつそ浮名の立たうと儘よ、君が袖をも引くわいな、それ〳〵それもさうぢやいなア〽月の眉、ひいて床しき花あやめ、とても濡れたる仲ぢやもの、主の心も引くわいな、それ〳〵それもさうぢやいなア〽一座興にぞ入りにけり。
榊葉　サア〳〵、もう否應なりませぬ。
すみ　この御祝儀に法印さんも、お臺所で酒にさんせ。
惡八　そんなら、おれをまき鰑か。
皆々　サア〳〵、早う〳〵。
〽早う〳〵に忠顯卿、つい投げ入れも閨の花、簾の內にぞ冬籠り。

ト この途りにて忠顯、玉琴は亭屋體へ入り、チヨンと簾おりる。惡八郎は下座へ入る。榊葉・紙を簾の内へ入れるをかしみなどあるべし。

きじ　ヤレ〳〵、世話でござんした〳〵。

すみ　あれ程までごはい千種之助さまが、お姫樣としつぽり御緣になるやうになつたも、お前の働らき、嬉しうござんすわえ。

榊葉　ナンノイナア、わたしよりお前方が、きついお骨折り。お杉役も大抵なものぢやないわいなア。

すみ　それ〳〵、わたし等もホツとした。シタガ、御祝言の杯もせいで、およるとはきついお床急ぎ。ほんに、杯といへば、用意して手につけて來た、三つ組や雌蝶雄蝶、あなた方の杯は、わたし等が御名代に、爰で開かうぢやござんすまいか。

やま　それがよいわいなア。幸ひ、この女中さんにも、何かの禮。

きじ　一つ上げるがよいわいなア。

榊葉　そりや有り難うござんす。此やうなおめでたい酒は、また一入でござんすわいなア。

やま　お前も酒がなると見えやんした。サア〳〵。

　ト 手につけて來た銚子杯をそこへ出し

きじ　わたしが始めて上げうわいな。いつそ面倒でござんすに依つて、この一番の杯にせうわいな。

すみ　サア〳〵、飲んで女中さんに上げさんせ。

きじ　合點ぢやわいなア。

　ト 飲んで榊葉にさす。榊葉、飲んで杯をおすみにやる。

すみ　こりや一つ押へたわいな。

榊葉　でも、あまり急でござんすが。

ゆき　マア、飲ましやんせいなア。

　ト 榊葉、飲んで、杯を置き

すみ　あまり見事ぢや。も一つ飲ましやんせ。

榊葉　そりや、あまり無理でござんせう。

皆々　マア〳〵、飲ましやんせいなア。

　ト これより捨ぜりふにて、酒盛り事よろしく、皆々榊葉に強ひる事。ト ゞ榊葉、醉ひたる思ひ入れ。

榊葉　モウ〳〵、御免なさんせ。きつう醉ひましたわいな醉ひましたわいな。

すみ　なんの、まだ〳〵、そればかりの酒に、もう一つ二つはよいわいな。

榊葉　イエ〳〵、もうお免しなさんせ。
きじ　ハテ、めでたい酒ぢやわいなう。
ト四人の女形、榊葉を取卷き、大きな杯を持たせ、酒をなみ〳〵とつぎかける。榊葉、大いに醉ひたる思ひ入れ。四人の女形、捨ぜりふにて、これを强ひながら、フッと杯に寫つたる、榊葉が顏を見て驚ろき
すみ　ヤア、この杯に寫つたる
やま　女中さんの。
ト雷序の頭を一つ打つ。
皆々　この顏は。
榊葉　なんとえ。
トどろ〳〵雷序にて、坐つた儘、榊葉をセリ下ろす。皆々ギョッと思ひ入れ。
きじ　合點のゆかぬ今の女子。
すみ　コレ…密かに我が君へ。
黑四　ござんせ。
ト本神樂になり、四人の女形、思ひ入れあつて下座へ入る。薄ドロ〳〵になり、上の方へ惡八郎、以前の形四天にてセリ上がる。惡八郎、思ひ入れあつて、簾の內を窺ひ
へ妖は德に勝たずとは、賢き道に夕闇の、空定めなき人心。
惡八　兼ねて心をかけた玉琴姬、干珠の玉を掣引出に、押しかけて來た千種之助が閑居。隙を窺ひ忠顯めを一討ち。名玉も玉琴も人知れず。それよ。
ト身繕ひなして、簾の內へかゝらうとする。始終本神樂。この時、薄ドロ〳〵にて、以前の所へ、榊葉、四天にて上がり、ツカ〳〵と惡八郎を支へにかゝり、少し恐れる思ひ入れあるべし。ドロ〳〵、本神樂やむ。惡八郎、榊葉を見て
惡八　オヽ、こりやア先刻の女中。いつの間に爰へ。
榊葉　エ。
ト思ひ入れ。
惡八　合點のゆかねえ、怪しい女でござるわえ。
榊葉　ホヽヽ、なんのわたしが、合點のゆかぬ事があらう。怪しいはお前。
惡八　エ。
ト思ひ入れ。
榊葉　爰には何してござんしたえ。
惡八　サア、なにサ、美しいお若衆に、美しい姬の新枕。

こりやアお釋迦樣にも氣が惡くあるまいか。それでこの
籬の間を、まぐろの透見よ。

榊葉　成る程、さう云はしやんすりや、憎うもござんせぬ
わいなア。

惡八　そんならアノ、おれを憎くも思はねえか。

榊葉　なんの憎う思うてよいものか。と云うても、お前の
心も知れもせぬに。

惡八　コレ、面白をかしく云ひ廻すが、そして、おれが心
が知れりやア、どうする。

榊葉　知れた事、女房になるわいなア。

惡八　コレ、そりやアほんの事か。

榊葉　なんの嘘を云はうぞいなア。シタガ、お前のやうな
者が、お内儀さんがなけにや、深い色事か、深い馴染み
が、なうては叶はぬわいなア。

惡八　いんにや、モウ、地色と云つちやアきついもの。二
三年こつち、した事がない、と云つちやアあんまり色氣
がねえから、正直に云ふが、ちよつとした女郎に、馴染
みがあるばかりよ。

榊葉　そりやア、あの江戸の吉原の座敷かえ。

惡八　いんにや。

榊葉　そして、何ぢやえ。

惡八　恥かしながら、辰巳の一切り、ちよん〳〵幕よ。

榊葉　エヽ、そんならアノ深

惡八　後は云はず、天晴れころりの呼び出しよ。

榊葉　又あつちは嫌味がなうて、さつぱりとした遊びでご
ざんす。わたしもちつとのうち、娘分になつて、あの里
に居やんしたが、大抵よい所ぢやござんせぬ。

惡八　そんなら、こなさんも、あつちに居た事があるか。

榊葉　ある段か、お前も定めし知つて居やしやんしさうな
ものぢやがな。

惡八　そりやア、おれが見世に居た時分の事だらう。

榊葉　サア、そのお前が馴染みの子供衆に、逢はしやんし
た話し、聞きたいわいなア。

惡八　乘り地を語つて話さうか。

榊葉　面白い事でござんせう。

惡八　面白い段か。雨の降る夜も風の夜も、行き立つて來
た日にやア、番頭どのゝ耳に入り、つけのぼせにならう
と儘。

〽新地の風を乘り切つて、河岸呼ぶ聲も船頭に、太鼓持
たる〽四つ明けは〽潮來出島に十二の橋が、どれを渡ろ

か思案橋、ちよいと來なせが縁の端、實に二人が仲町は、嘘な佃も取措いて、心の帶を常磐町、堅い石場も居續けに、板頭ぢやないかいな、逢うたお旅も重なれば、辛苦新地の鞍替へに、主を焦れて松井町、又の御見に辨天を、かけた心も知りながら、あた胴慾と取亂す〽見兼ねて中へこりやどうぢや、野暮な口舌は置き炬燵、のぼせる事も夏炭團、頭を張つた辻番の、繁くなるのも戀ならし。

トこの文句のうち榊葉、惡八郎が懷中へ手を入れる事あつて、この切れに惡八郎が懷より錦の旗を引き出し、持つて行かうとする。惡八郎、留めて

惡八　待て、女め。話しに事よせ、錦の旗に心をかける奴。怪しい奴でござるわえ。

榊葉　こなさんも、この一品を取り隱し、千種之助さまを付け狙ふ樣子。

惡八　それを知つたら、覺悟。

ト摑みゝる。ちよつと立廻り。

〽あわやと見やるその折柄、一間に薫る蘭奢待、その名香に髣髴と、朧か夢か忙然たり。

トこの淨瑠璃のうち、薄ドロ／＼にて惡八郎、榊葉、香に聞き入つたる思ひ入れ。鼓の合ひ方になり、簾上がる。内に忠顯、香臺に香爐を乘せ、香を炷いて居る。

忠顯　ハテ、心得ぬ兩人がこの場の有樣。帝より賜はりし蘭奢待の名香を燻らせば、香に引かされて、アレ／＼アレ、正體もなきその風情。何さま怪しき二人が身の上。仔細糺すは千珠の名玉、それよ。

ト懷中より蓦明の名玉を出して、兩人に差しかざすと光明輝き、大ドロ／＼にて、惡八郎榊葉、左右へ飛び退き、兩人一度に引拔きになる。

忠顯　これは。

〽それ狗を以つて龍と稱す、烏龍白龍の名、煩惱の犬神の、戀に亂るゝ亂菊や、北斗を拜す通力も、名玉の威德に恐れ、我れと顯はす恥かしや。

ト三味線入りの雷序になる。始終ドロ／＼。

さてこそ顯はす兩人が姿。陰獸陽獸の身を以て、何ゆゑ我れに近寄るや。

惡八　何ゆゑとは、我れこそ畑六郎左衞門が弟、畑惡八郎時景。いつぞや鎌倉合戰の砌り、勳功に依つて賞は望みたるべしと、義貞の軍令ゆゑ、東勝寺へ亂入なし、高時の首討つたる功に、千珠の名玉、まつた玉琴姫を妻になさんと望めども、云ひ號けなりとて、名玉も姫も汝へ送

元黒谷の舞臺面
(歌舞伎年代記所載)

り、功あらば望み次第と、番つた約を違へた義貞。主従の縁切つて、身退くとは云ふものゝ、元の起りは汝ゆゑ、さてこそ我が家に寵愛なす、犬獅子と云ふ一物を、神に祈り、習ひ覺えし犬神の妖術も、蘭奢待と名玉の徳に、姿を顯はしたか。殘念な。

ト忠顯に立ちかゝる。忠顯、名玉をさしつける。大ドロノヽにて惡八郎、恐れてかつぱと伏す。

忠顯　小癪な事を……して又、汝が身の上は。

榊葉　わたしは岡崎の、お辰狐でござります。わたしの父母は、千年劫經る白狐にて、その千珠の名玉、内侍所に秘めあるうちは、守護の役ゆゑ、諸國の狐の司の官、然るにいつぞや義貞さま、その名玉を申し下ろせしその後は、役目なければ、無位無官の野狐となつて、朝夕歎いて居りまするを。

ヘ孝にとゞまる子の身として、側で見る目の痛はしく。親の大事さ大切さに、愚智な畜生三昧も。人間樣も。

ヘ別に變りは夏草の、また來る春を樂しみに、姿をやつし來りしも。

この事お願ひ申さん爲。それゆゑにこそ、あの惡八郎が盗み取りし錦の御旗、奪ひ返しましてござります。何卒これを差上げませう程に、一つの功とも思し召され、名玉は元の稻荷の神へ、お預けなされて下さりませいなア。

ヘ身をひれ伏して願ひしは、哀れにも又しをらしき。

忠顯　さては錦の御旗は時景が、奪ひ取つて所持なせしか。

ト惡八郎、跳れ起きて

惡八　玉琴姫に戀慕の恨みは汝ゆゑ、盗み取つたる錦の旗返し與ふる上からは、その名玉も玉琴も、この時景に渡せ、エヽ。

忠顯　小癪な。軍の賞に女を望むは、彼の犬戎國の遠き例しはイザ知らず、及ばぬ事ぢや。それに引きかへ錦の御旗、奪ひ返せし其方、望みの名玉遣はす事は、新田の聞え。ソレ、近寄つて盗み取れ。

トそこへ投げてやる。

榊葉　すりや、この名玉を私しに。エヽ、有り難うござります。

ト取つて押頂く。忠顯、錦の旗を受取る。

惡八　いんにや、それをやる事はならねえ。

榊葉　忠顯さまに敵對ふ其方、名玉手に入る上からは、今より神使の神通にて、やわか妨げさすべきや。

ト玉を差上げる。ハッと光明さす。大ドロノヽ

忠顯　いまだ玉の光明は、玉藻が身より放ちたる、光りも同じ輝耀たり。それは古へ、これは目前。兩介に勅あつて、野干は犬に似たればとて、百日追ひし犬に習ひ、惡八郎を成敗いたす、覺悟なせ。

惡八　小癪な事を。

三人　どつこい。

〽犬追ふものにあらねども、矢たけ心や弦音に、弓張月も水の上、手にも取られぬ靈光石火、こなたは野干の通力自在、はつとともせる狐火に、道を照らしていなうやれ、我が故郷へ歸る身も、心ゆるさぬ犬神は、名に負ふ爛ツ犬獅子と、玄惠が筆を其まゝに、寫すも恐れ有り難き、歌舞伎の花と祝しける。

トこの文句のうち、名臣と旗を枷に、いろ〳〵立廻りあつて、三人、正面の屋體の上へ上がる。この時、風の音頻りにして、忠顯が持つて居る錦の旗、風にて虚空へ飛び去る。三人、これをキツと見上ぐる。賑やかなる鳴り物にて、三人、乘つたまゝ、この屋體を中二階鏡板まで引き上げる。チヨンと山幕下ろす　紅葉の吊り枝を上へ引き上げ、櫻の吊り枝下りて來る。これと一緒に正面へ大きな櫻の幹、下りて來る、錦の旗は矢張り日覆に舞うて居る。

大薩摩〽それ、せきぜん不動空の色、雲を欺むく一陽の、惠みに開く返り咲き。

ト賑やかなる鳴り物になり、菊水、烏帽子、素袍の上を引ツかけた形にて、三寶に一卷を乘せ、床几にかゝり、正行、小結ひ烏帽子、素袍にて、中啓を持ち、扣へ居る。この見得にて兩人をセリ上げる。

〽誠や花の座頭と、呼ばるゝ幹も櫻井の、宿の教へを今爰に、寫す姿の勇ましや。

ト淨瑠璃切れる。コイヤイになり、菊水、正行、旗をキツと見上げて

菊水　ハテ、心得ぬ。所は洛外元黒谷、返り咲きなる櫻が下、夫楠、櫻井の宿にて、一子正行に教訓せよと、傳へられし示しの條々、申し聞かする折に望んで、一迅の風につれ、空に閃めく一品は

正行　見る山々の紅葉葉の、染まる錦に引きかへて、正しくあれは錦の御旗。

菊水　帝より先達て、千種忠顯へお預けありしを、紛失なせしと聞きつるが

正行　今この所へ吹き來るは

菊水　奪ひし者の穢れをいとひ
正行　御旗の德を顯はせしか。
菊水　何にもせよ
正行　今に始めぬ神國の
菊水　奇特を正に
兩人　見る事ぢやなア。
　ト風の音にて、錦の旗、舞臺へ舞ひ下がる。菊水、手早く取つて
菊水　誠にこれこそ、紛ふ方なき錦の御旗。今歸り來らせ給ふは、御聖運の全きしるしか。アラ／＼／＼、有り難やなア……これにつけても、父上御教訓の條々、正行慥かに承はれ。
正行　ハツ。
　ト鼓の合ひ方になり
菊水　ソレ、獅子は子を生みて三日過ぐる時、數千丈の谷底へこれを投ぐる。その子、獅子の氣分あれば、教へずして中より歸り、死する事を得ず。況んや其方、幼年たりと雖も、慥かに聞け。いま北條一家亡び失せ、一旦四海は治まるゝ雖も、もし君に弓引く朝敵起らば、見事金剛山に引き籠り、宸襟をやすめ奉る手段ありや。

正行　仰せにや及ぶべき。敵寄せ來らば、命を養由が矢先にかけ
菊水　義を韓信が忠に比すや。
正行　名を惜しむこそ武士の常。
菊水　して謀り事に。
正行　帷幕の内にめぐらし
菊水　勝つ事は。
正行　千里の外に顯はす。
菊水　大敵と見て
正行　恐るべからず。
菊水　小敵と見て
正行　侮るべからず。
菊水　サア、小敵と見て侮るべからずとは申しますれど、當顏見世の座組は、外芝居から見ますれば、餘りの小勢。あなた方への申し譯は、達つて相賴みまして、市川白猿、口上申し上げまする。東西々々。
　ト爰にて白猿、口上能辯にあつて納まる。この口上の切れに、襷鉢卷の軍兵出て
軍兵　正行、うぬを。
　トかつてかゝるを、白猿、その刀を引ッたくり、首を

ポンと切る。

菊水　これは—

ト白猿心付きたるこなしにて

白猿　こんな事をするではなかつた。私しは素人、御免下さりませう。

ト刀を投げ出して平伏する。拍子。

幕

錦着戀山守（終り）

夜の鶴雪毳

うぶめ

前項「犬神」と同じく、「花三升芳野深雪」の大切浄瑠璃である。顔見世狂言の吉例で、二番目は世話から時代へ返る仕組み。初めの「鈴ヶ森の段」では、呉羽の前が錦の御旗を持つてゐるので、六部姿の長崎次郎に殺される。次の大森村では、小山田太郎が太郎作となつて、隠れてゐる。次郎が泊る。女六部が泊る。これが楠の妻の菊水である。顔見世らしいだんまりほどきや、聟入り嫁入りの騒ぎがあつて、太郎次郎は本名を現はして立廻りになると、道具が廻つて、この浄瑠璃になり、呉羽の前の亡霊が、姑婦女の姿で現はれるといふ趣向である。この作者は福森久助。常磐津は兼太夫と岸澤式佐、振附は市川七十郎。役割は、小山田太郎が坂東簑助、長崎次郎が六世市川團十郎、呉羽の前の亡霊が四世岩井半四郎である。昔の荒事の一形式たる「卒塔婆引」が組みこんであるのが面白い。

夜の鶴雪髦（うぶめ）

大森村の場

役名――小山田太郎高家。長崎次郎高繁。戸野兵衛娘、呉羽の前の亡靈。

常磐津連中

本舞臺、三間の間、正面、一面の山幕、左右の柱、柳櫻の立木、日覆より、柳櫻こき交ぜの吊り枝、返り咲きに雪積りたる景色。爰に、次郎、太郎、凜々しき形にて、結構なる肌脱ぎ、大なる榜示杭を互ひに引張り、卒塔婆引きの見得にて、道具納まる。日覆より、雪降つて來る。

太郎　ヤア、長崎次郎高繁、最前より勝負を決せんと、挑み爭ふ雪の中、力は互ひに互角の勝負、晋の豫讓の例しを引き、最前討つた義貞公、あれにて恨みは晴つらん。いま官軍一人にても、味方の欲しき時節、心を改め新田に仕へよ。

次郎　ヤア、新田に仕へよとは穢らはしい。我れ時行どのを守り立て、三ッ鱗の旗上げなす、今ぶッ放すは惜しき若者。命を助ける恩返し、北條家へ降參なせ。

太郎　そんなら汝も

次郎　われも。

太郎　勝負を決せぬ其うちは

次郎　降參などゝは思ひも依らぬ。

太郎　面白い、そんならこの場で、一勝負。

次郎　われが負けたら味方に付けるぞ。

太郎　汝が負けたら新田の旗下。

次郎　味方に取るか。

太郎　敵へ降るか。

次郎　善惡邪正。

太郎　イザ。

次郎　イザ。

太郎　イザ。

トこれより、角力の合ひ方になり、兩人、面白き立廻りよろしくあつて、トゞ長崎次郎、仕込みを抜き放し

て、太郎に切つてかゝる。大ドロ〳〵、赤子の泣き聲頻りにして、次郎、太郎、目眩みて倒れる。下の方の山打返しにて、太夫三味線並び居る。ドロ〳〵をドロンと打切る。

〽實に世の中は仇浪の、寄る邊はいづく雲水の、身の果いかで知らざりし。

ト薄ドロ〳〵、寐鳥、雪頻りに降つて來る。吳羽、誂らへの白の振り袖衣裳にて、赤子を抱き、花道の中程へセリ上がる。

〽御いたはしや吳羽の前、一念既に亂るれば、迷悟三界出でやらぬ、名殘もをしの夫戀し、戀し子ゆゑにとぼとぼと、心の闇に迷ふなる、涙身を知る雨やさめ、積り積りて降る雪の、消えて果敢なき玉の緒も、柳の糸に繫がれて、爰にも夜の鶴ならで、いと哀れなる立ち姿。

トこの文句のうち、吳羽、いろ〳〵あつて、太郎が側へ來る。始終、寐鳥、薄ドロ〳〵。

吳羽　申し〳〵

トこれにて、太郎、心付き起き上がり、吳羽を見て

太郎　ハテ、合點のゆかぬ。いま長崎次郎と勝負のうち、夢の如くに放心なし、前後を忘ずるその折柄、申し〳〵と呼んだるは。

吳羽　アイ、わたしぢやわいなア。どうぞこの子を、抱いて下さんせいなア。

太郎　待て。人里遠きこの山中、雪間を分けて來る女、合點がゆかぬ。狐狸妖怪の類ならん。その俗姓を明かすまいか。

吳羽　イヤ、全く妾は其やうな者ならず、熊野八庄司のその一人、戶野の兵衞が娘、吳羽の前ぢやわいなう。

太郎　ヤ、その吳羽の前さまとな。應塔の宮さまに思はれ奉り、只ならぬ御身と承つたが。

吳羽　サア、抱き參らせしは、その若宮ぢやわいなう。

太郎　すりや、それが宮の御胤の、若宮樣でござりまするか。して又あなたは、この吾妻へお一人では、よもやあるまいが、お出でなされた御樣子は。

吳羽　サア、それはな。

太郎　御女儀の御身で、この吾妻へ、お越し遊ばすお心の内。

吳羽　並大抵の事と思うて下さんすか。宮樣にお目にかかるを樂しみに、海山越えて、はる〴〵と。

〽尋ね木曾路の旅枕、早うお顏の都をば、霞とともに立

出で、いつか近江や美濃果も、どう信濃なる淺ましや、戀の峠も碓氷とは、緣の事ぢやと氣にかゝり、思ひに遂げぬ上野を、越して、吾妻の逢ふ瀨さへ、月の武藏の浮れ節。

〽鳥かなこが夜があきよが、天道さんの出ぬうちや歸しやせぬと、彈く三味線のいとしさも、罰か報いか忍び路を、仇なる人に隔てられ、お姿さへも道芝は、燒野の雉子つまゑうて、鳴く音悲しき身の上と、嘲ち給ふぞ道理なる。

太郎　段々の御嘆き、御尤もでござります、お道理でござります。さりながら、定めてお聞きも及ばれん、私しこそ小山田太郎、應塔の宮の御行くへも、存じて居りますれば、お供いたして、お逢はせ申すでござりませう。何に致せ、若宮樣の御尊顏を。

　ト抱きにかゝる、赤子泣き出す故抱き取り

オ、、誰がよく〳〵。

　トあやす。

〽ねんねこせい〳〵、ねんねが守りはどこへ行た、山を越えて里へ行た、里の土產に何貰うた、でんでん太鼓にふり鼓、起上がり小法師、くるり〳〵肩車危ない合點ぢや合點ぢや、花見に行こな、東山や西山、なんな南に北山の、鄙の踊りは對の手拭、しやんと着て、踊る振りの面白や。

〽仇なおいそれちよと惚れよ、しなの跡で彼れこれヤレコラサ、お惡かろ、しんぐいぐいあれな都の花の山、子であるかるゝ女夫とも、云はれんものを情なや、つれなや憎やその人の、太刀にとゞまる俤の、魂呼子鳥遠近も覺束な氣に見えにけり。

　ト薄ドロ〳〵少し、吳羽の前、苦しむ。

太郎　合點の參らぬその御嘆き、仔細包ますお明かしなされて下さりませ。

吳羽　サア、それは。

〽今は何をか包まん、自らこそ、人手にかゝつてこの世を去り、娑婆に亡き身の果敢なくも、宙宇に迷ひ來りしは、この子を賴まん爲ばかり。

　トどろ〳〵寐鳥。

太郎　ヤ、、、すりや人手にかゝつてお果てなされ、今

〽この世に亡き身とな。して、何者の仕業、敵は誰れ、

吳羽　我が密通にて放心させし、長崎次郎、邪慳の刃にかかれども、神の御末の若宮、御運強く、お命に恙もなく、

抵口より御誕生、何卒この若を都へお供し、父宮にお預け申し、行く末頼む小山田太郎。

太郎　すりや、敵は長崎次郎、眞二ツ。

　ト立ちかゝるを留めて

呉羽　いやとよ、彼れこそ自らが所持したる、錦の旗を奪ひ取り、肌身離さず居るからには、取戻さぬ其うちは畏れあり。

　ト呉羽の前に赤子を渡し

太郎　悪事重なる長崎次郎、御旗を奪ひ返した上は、あなたの恨みは晴らさせ申さん。さりながらこの若宮、忍んで都へ御供するにも、女房に乳はなし、何卒あなたも御一緒に。

呉羽　いやとよ、雲井に近きの御方ゆゑ、夫婦は二世と云ふなれど、近付く事はならぬわいなう。

太郎　ちやと申して、一夜さでも、乳房尋ねて若宮の

呉羽　コレ、それが叶ふ事ならば、譬へ一日片時でも。

〽子を持つて知る親の恩、七十五度泣くと云ふ、譬へは物の數ならず〽かゝる歎きは古への、阿部の童子が母上も、それは信田の生き別れ、尋ね來よとの筐の歌、また逢ふ事もありなんに、如何なればこれ限り、逢ひ見る事もなき別れ、なんと見捨てゝ行かれうぞ、必らずまめで成人し、父宮様の力となり、朝敵退治に母が名を、上げても數へ盡されぬ、可愛の者やいとしやと、柴竹も染まる涙には、岩井の水もまさるらん。

太郎　すりや、これが親子一世の別れでござりまするか。

呉羽　冥途へ赴くこの身の辛さ。いま別るれば未來永劫、顔見る事はならぬわいなう。アレ〳〵、最早閻王の使ひ嚴しく、行かねばならぬか。名殘惜しや、可愛やなア。

〽いま一度見たし抱きたしと、立寄れば、こはなんとせん、あの世この世と隔たる罪障、最早別れのあら堪え難や、刃の罪に修羅の太鼓、目にこそ見えね、踏む足元は猛火の煙り、恐ろしなんども愚かなり。

　トどろ〳〵にて、呉羽の前、苦しむ。次郎、起き上がつて

次郎　呉羽の前か。幽靈、又うせたか。付添ふうぬが魂ひの、太刀にとゞまる佛丸、降魔の利劍、立去れ〳〵。

太郎　呉羽さまを手にかけし、強惡不道の長崎次郎、御旗を渡して觀念なせ。

呉羽　積る恨みの數々を、思ひ知らせん、思ひ知れ。

「うぶめ」の舞臺面
（歌舞伎年代記所載）

〽獄卒悪鬼に等しき次郎、討つてかゝるを追ひかけ追ひ詰め、山へ登れば劔につん裂き、谷に下れば紅蓮の氷、白無垢却つて唐紅ゐの、錦の御旗業通にて、取り得し上は新宮を、いよ〳〵頼むと云ふ聲ばかり、溟々濛々らうらうと、姿は消えて失せにけり。

トこの文句のうち、呉羽の前、櫻の鐵杖にて修羅の立廻り。ドロ〳〵にて、長崎次郎が懐中より、錦の旗、連理引にて顯はれ、太郎が手へ入る。好き程に、下座より、軍兵大勢出て、大廻しの立廻りあつて、眞中に、呉羽の前、左右に次郎太郎詰め寄り、捕り手、前へ棹に並び

皆々　どつこい。

ト見得好く。

次郎　先づ今日はこれぎり。

ト打出し。

幕

夜の鶴雪鬘（終り）

戻り駕の
俤うつす
俄のにしきゑ

姿花鳥居の色彩 ——新戻り駕

文化二年五月、中村座の曾我祭である。曾我祭の事は別項に詳記したが、この年の中村座は春から大入續きで、一日も休みなしに興行を續けたので、吉例の曾我祭は舞臺にまで餘興を出し、戻り駕を女で行く趣向にしたので「女戻り駕」は實にこれが最初である。尤も當時は「新戻り駕」と稱されて、後から女戻り駕が幾つ出來ても廢らず、今にこれのみは曲も振も存してゐる。序曲として曾我の夜討を添へたのは、曾我祭の追善の意である。この詞章の作者は初世櫻田治助、常磐津は伊勢太夫に岸澤古式部、振附は藤間勘十郎、役割は、祐成が中山文七、時宗が尾上紋三郎、近常が坂東利根藏、お菊が四世瀬川路考、お山が五世尾上半四郎たよりが森田勘彌であつた。

姿花鳥居の色彩（新戻り駕）

裾野狩屋の場
曾我祭の場

役名――曾我十郎祐成。曾我五郎時宗。本田次郎近常。藝者、お菊。同、お山。禿、たより。

常磐津連中

本舞臺、向う竹矢來、この内に狩屋の屋根、庵に木瓜の幕を張り、上下一面の山幕。高欄、霞にて見切つたる富士、誂らへの通り、爰に、武者六人、いづれも胴丸陣羽織、小手、脛當、白鉢巻、武者草鞋にて、銘々弓鎗などの得物を引ッ提げ居る。勢子二人、獸物を青竹に括り揩ぎ、割り竹を持ち、下の方に扣へ、ドンチヤン、勢子太鼓にて、幕明く。

武一　如何に方々、兼ねて頼朝公仰せ出たされたる、この富士の裾野の御牧狩り。

武二　久しい噂も時節來つて、在鎌倉は申すに及ばず、諸國の大名、この富士ヶ根に狩家をしつらひ

武三　狩場のお供も慰み半分、晝は深山の猪猿獸物。

武四　夜は大磯化粧坂、女狩りやら猪狩りやら、これと云ふも惣奉行の、祐經どのが通り者ゆゑ

武五　それ〳〵、これから今打ち留めた、あの猪を手料理で、色酒と出かけませうか。

四人　こりや面白い。洒落ませうか。

武一　アイヤ、この度の御遊覽も、治世に亂の忘れぬ頼朝公の御勵し。色とやら洒落とやら、遊び事ではござりませぬぞ。

五人　サア、そりやア。

武一　夜分は銘々狩屋の堅め。

武二　然らば、いづれも。

四人　ござりませう。

トどんちやんになり、この人數下座へ入る。直ぐにカケリ、雨車、時鳥の聲にて、花道より、祐成、時宗、烏帽子、半素袍、誂らへ夜討の形にて、松明を振り立て、出て來り、直ぐに本舞臺へ來て、あたりを窺ひ、

時宗　幕の紋を松門にて透かし見て
この狩家こそ、左衞門祐經。
ト行かうとする。
祐成　ヤレ時宗、早まるな。この年月の念願屆き、今日の今宵の五月闇、敵祐經の狩家まで、忍び入つたる上からは
時宗　十八年の恨みの刃は、小弓に小矢の昔より、待ちに待つたる父の敵。
祐成　討つと思へば五月雨の、いま降る雨と諸ともに、嬉し涙に引替へて、曾我に殘せし母上は、鬼王團三が先づこの由を、お話し申さばさぞお嘆き。
ト向うを見て、ホロリとする。
時宗　お心弱い果報者人、父への孝を立てんとすれば、母への嘆き、両方全き事はござらぬ
祐成　それよ、虎は死して皮を止め、人は死して名を殘す。一萬騎の祐經と、我れ〳〵兄弟、比べがたなき弓と弦。打ち難き敵を討たば
時宗　末世の龜鑑、武士の本望、
祐成　とてもこの身は裾野の露、
時宗　今宵目指すは敵祐經。
祐成　本望遂げしその上は
時宗　辛く當りし奴ばらを
祐成　返す刀に切つて切り死。
時宗　死んでも三途の
祐成　瀬踏みして
時宗　未來の父に
祐成　御對面。
時宗　この世は假の
祐成　短か夜を
時宗　せめて名殘の
祐成　水杯、ソレ。
トこいやいになり、祐成、松明を舞臺へ突き立て、烏帽子を取つて、前の流れの水を汲み、一口呑み、思ひ入れあつて
如何に時宗、承れ、萬夫不當と呼ばれたる、父河津どの〻敵、左衞門祐經を、兄弟揃うて本望遂げん、幸先祝ふ水杯。一の太刀は斯く云ふ祐成、二の太刀を、見事討てよ〳〵。
ト時宗に渡す。時宗キッとなり、これも松明を舞臺へ突き立て
時宗　云ふにや及びませう。折も烏帽子の杯も、水も溜り

ず。
　トぐつと呑んで
討ちまする。
祐成　オヽ、頼もしゝ／＼。心揃ひし兄弟も、七度契りて
兄となり
　ト時宗が顔を引寄せて見る。
時宗　六度結びて弟と、生るゝ縁はありながら
　ト祐成が顔を見上げる。
祐成　憂きを見するも
時宗　祐經ゆゑ。
　トきつとなるを、祐成、コレと抑へて奥を見込む。時
鳥啼く。
祐時　時鳥、名をも雲井に揚羽の蝶。
時宗　千鳥友呼ぶ兄弟揃うて
祐成　遅れな時宗。
時宗　兄者人。
祐成　續け。
時宗　ハツ。
　ト諸になる。
〽寄せかけて、打つ白浪の音高く、鯨波をつくつて騷ぎ
ける。
　トこれにて、兩人、松明を振り立て、下座へ入る。
　ト奥にて
大勢　夜討だ／＼。
　ト大バタ／＼にて、狩場の仕出し、いろ／＼思ひ付き
にて、逃げて出て、うろたへ、東西へ別れて入る。
　ト奥にて
祐成　年來の敵左衞門祐經を
時宗　曾我兄弟が討取つたり。
　トありや／＼の聲、大勢。ドンチャンにて、前の矢來
を引いて取る、向う祐經の狩家、算を亂したる體。時
宗は大童、抜刀。黒彌吾、彌太郎、左右に詰め寄せ
黒彌　御所の黒彌吾。
彌太　加藤彌太郎。
時宗　小癪な。
　ト大太鼓入りの鳴り物にて、よろしくタテあつて、ト
ド時宗、兩人を切り仆す所へ、三郎出て
三郎　愛甲の三郎。
　ト名乘つて打つてかゝるを、祐成、三郎に手を負せ
る、三郎、逃げて向うへ入る。時宗、これを追つて同

じく向うへ入る。始終大バタ〳〵。下座より、祐成、
大童にて出るな、海野太郎、付いて出て來り
太郎　海野太郎だ、祐成覺悟。
ト切つてかゝる。立廻りに祐成、切り仆す。所へ平馬
之允、出て來り
平馬　平子の平馬之允、十郎覺悟。
ト切つてかゝる。祐成、平馬之允を相手によろしくタ
テあつて、ドッコイと留まる。所へバタ〳〵にて、向
うより、時宗、取つて返し
時宗　ヤア、兄者人か。
祐成　時宗、このうへは。
時宗　大祖父伊藤、仇敵、賴朝であるめ。
トきつとなる。所へ幕明きの勢子大勢、本田近常出て、
兩人を取卷く。
大勢　動くな。
時宗　なにを。
近常　ヤレ兄弟、早まるな。今月今宵、祐經どのは討たる
る覺悟、側へ狩場を騒がしたりとも、助命あるやう賴朝
公へ、願ひ置かれた。
祐成　イヤ〳〵、譬へ助命を願ひ置かうが、斯くなる上は
存命なさうや。兼ねて仁田の四郎忠常に契約なせば、彼
の者の手にかゝり、この十郎は討死の覺悟。
時宗　この時宗もその通り、五郎丸に詞を番へば、彼れに
搦め捕られた上、刑罰に兼ねての覺悟。
平馬　イヤ、彼奴等が手柄にせうより、この平子が搦め捕
つて
近常　そりやならぬ。兄弟覺悟で命を果さば、武勇と云ひ
孝子の者ども。この裾野へ荒人神と勸請せよと、賴朝公
の嚴命。
祐成　すりや、我れ〳〵が靈魂を
時宗　荒人神と祀らんとな。
近常　君へ恨みは散せられよ。
平馬　神も佛も頓着はない。ソレ、者ども、鐵砲でぶち殺
せ。
勢子　覺悟。
ト勢子大勢、種ヶ島を構へる。祐成、時宗キッとなる
大ドロ〳〵にて、兩人の素袍の蝶千鳥、拔け出でし心
にて、相引の蝶千鳥を目覆へ引上げ、中空に舞ふ。勢
子、眼眩みて倒れる。
平馬　これは。

祐成　紋は體を表はす。神と祀らん嚴命堅く

時宗　はや靈魂の蝶千鳥か。

近常　かゝる奇瑞を見る上は、直さま曾我の兩社と崇め、祭禮を行はん。方々用意。

ト奥にて

大勢　ハヽア。

祐成
時宗　忝ない。

皆々　どつこい。

ト いづれも見得、太鼓謠ひ、大ドロ／＼にて、蝶千鳥翩翻として、この道具ぶん廻す。蝶千鳥は日覆へ引上げる。

道具廻ると、誂らへの通りの飾りになり、祝儀の謠にて、下座より、座元、三津五郎、頭取出て來て、直ぐに居並び口上になる。

三津　高うはござりますれど、御免を蒙りまして、これより申し上げまする。先づは勘三郎芝居、御贔屓とござりまして、斯樣にお歴々樣方、早朝より賑はしうお入り下されまする段、座元勘三郎、若太夫明石七三郎を始めまして、瀬川路考、我れ／＼に至りまするまで、惣座中如何ばかり大慶至極に存じ奉りまする。分けて申し上げまするは、當春狂言、全盛虎女石の大名題、當る五月まで打續き、表看板に差出し置きまする事、偏へに御贔屓お取立てのお庇を持ちまして、古今稀れなる大入大繁昌仕りましたる儀にござりますれば、誠に曾我兩社の神慮にも叶ひしと、即ち十番斬に取組み、曾我祭りの趣向をお目にかけまするやうにと、これに居ります勘三郎へ申し付けましてはござりますれども、何事も餘り古めかしう、曾我祭りとは申しまするものゝ、心ばかりの俄の趣向、戻り駕籠の淨瑠璃を、ちよつと御覽に入れまするやうにござりまする。

ト これにて、淨瑠璃太夫役觸れあつて

これと申すも、御贔屓のお庇を以て、御宿元へお歸り遊ばされましても、春狂言より續きましたる曾我祭りの俄の御評判、よろしくなし下されまして、又々明日も賑々しう、御見物にお出で下さりまするやう、偏へにお願ひ申し上げまする。先づは淨瑠璃俄の始まり、其ための口上、左樣に思し召し下されませう。

ト この口上の切れに、渡り拍子になり、正面の襖を打返すと、常磐津太夫連中居並び、直ぐに鳴り物打上げ

〽浄瑠璃になる　御輿太鼓のあしらひ。

〽紫陽花も帷子時の曾我祭り、皐月の花踊り[illegible]、菊も四
つ手を杜若

　ト摺り鉦入りの浮いた合ひ方になり、花道より、お菊
お山、曾我祭りの形にて、後へ扇を差し、手拭を頭り
に置き、誂らへの四つ手駕籠を担ぎ、息杖を持ち出て
来て、花道の中にて

〽おつと投げ杖やれこれ小袂、おれこみぢや、合點ぢや、
かた山ぢや、合點ぢや、駕籠もおろせが色で葺く、孔雀
長家の一夜泊、ほんのり顔に紅の花、三谷通ひにや夜も
日も分かぬ、茂れ松山の細道、六拍子踏むとて我が身を
見れば、六拍子踏むとて我が身を見れば、月に浮かるゝ
友鳥、氣も上りの清搔に、引立てられてこれはいさ、
おさ／＼／＼、面白さうに来りけり。

　トお菊、お山、舞臺へ来る。矢張り御輿太鼓のあしら
　ひあるべし。

やま　モシ／＼、太夫さん、なんぼ曾我祭りの俄の思ひ付
きぢやと云うて、お前もわたしも、此やうな形で出ては、
どうも浄瑠璃に出ても、あなた方のお慰みになるやうな
事はなりますまいぞえ。

きく　サア、わたしもあなた方の御意見が、どうあらうや
らと思うたゆゑ、あの座元さんへも斷わり云うたれど、
そこが俄の思ひ付きぢやあらう程に、マアなんぢやあら
うと、文字方の戻り駕籠に、お前と二人出いとの事。サ
ア、これからは、どうしたらよからうぞいな。

やま　サア、わたしぢやというて、どうして思ひ付きがご
ざんせうぞいなア。

きく　そんならマア、なんぢやあらうと、あの駕籠に禿衆
を呼び出して、なんぞ好い俄の趣向を、問うて見ようぢ
やないかいな。

やま　こりや好い思ひ付きでござんすわいな。俄に吉原の
禿衆は當り前、早う爰へ呼びませうかいな。

きく　それ／＼。モシ／＼、禿衆、ちよつと爰へ

兩人　出て下さんせ。

〽應へさへまだ夏草に置き添はぬ、露も笑顔にこぼれて
は、姿愛らし禿菊。

　ト此の文句にて、駕籠の内より、たより、禿の形にて
出る。

たよ　わたしになんぞ、御用でもござんすかいなア。

きく　サア、早速ながら、お前をちよつと見た所が、あの

文久元年三月中村座上演

岩井粂三郎の藝者　三世澤村田之助の藝者

吉原の禿家でござんせう。なんと俄に出ては下さんせぬかいな。
たよ　さう云はしやんすお前方はえ。
やま　今日は路考に半四郎、コレ、この形で淨瑠璃に出たが、俄の趣向ぢやわいな。
たよ　そりや、けうといわいな。そんならお前は。
きく　春狂言に戻り駕籠。
　ト これより、たよりを相手にして淨瑠璃になる。
〽ほんに二人も昨日まで、虎少將と名を月の、夕の酒の二日醉、もつれた中に情立つて、祐成さんの殿振りに、騙されて咲く室の梅、薫り床しき格子先、吸付け莨も人違へ、おや馬鹿らしいぢやないかいな〽わたしも春の役割に、妹女郎の嬉しさは、心ばかりで狂ふ蝶、初の座敷が嫁になり、不粹な客の千鳥足〽きやぼうすどん情なし手なしの癖として、惡洒落云うたり大通出だちが憎らしい、どう云ふ理窟か氣が知れぬ〽また癇癪の惡酒は、禿にじれるばかりなり、禿々と澤山さうに、云うておくれなあの花魁の、譯見習うて書く文を、田甫から來て蚊帳覗く更けて螢の行くへさへ、いつそ色氣があるものを、勤めする身の樂しみは、引け四ツ過ぎの戀の晝、田町にござる法印さんの、守りお札に身の願ひ、叶はぬ時はたんとしよと、泣くがしよざいか時鳥。
兩人　きついものでござんすわいな。
　ト 扇にてあふぐ。
たよ　モシ〳〵、お二人さん、このマア曾我祭りと云ふ事は、いつから始まつた事でござんすぞいなア。
きく　サ、それはモウ五六十年後の事、爰の芝居で元祖柏莚さんが、男達の踊りに出やしやんしたが、曾我祭りの始まりと云ふ事ぢやわいな。
たよ　そんなら曾我祭りの始まりは。
きく　この堺町からぢやわいなア。
〽またたぐひ荒人神の御社は、曾我中村に立ち給ふ。
　ト これより、おやま、息杖を腰に差し、役觸れを載せたる三方を取つて、淨瑠璃にかゝる。
〽時宗さんには腕白の、盛り過ぎたる角額、市川流の筋隈に、逆澤瀉と聞えたる、錣引提げ大太刀も、流石名に負ふ江戸の花、かゝる所へ小林が。
　ト 人寄せになり、おきく、駕籠に敷きたる毛氈を、素袍のやうに肩に掛け。朝比奈の思ひ入れ。
〽鶴も素袍の紋日とて、無理に留めたる強ひ酒、時宗苛

つて立ち上がり、倶不戴天の父の仇、やあれ祐經通がさじと、また立ち上がる力足、押せどしやくれど仁王立ち、動く氣色はなかりけり、あの怖らしい顔わいな。
きく　留めた。
やま　放せ。
きく　留めた／＼、おツ留めた。
トこれより、大太鼓入りの鳴り物になり、草摺曳の模様いろ／＼あつて、鳴り物を卸す。
〽これぢや行かぬと朝比奈が、留める手管の流行り唄、枕此方寄れ此方寄れ枕、枕寄らねば身も寄らぬ、やれこりやようしよし／＼、とても留めなよら花に鳥。今日は俄の一踊り。
トこれより、太鼓地の踊り、三人にてあるべし。
〽全盛の、廓と聞けば芝居にも、太夫格子に引舟の、名も有り難いぢやないかいな、初會の座敷三番叟、外へはやらじと張り弾く、勤めの弓に御贔屓は、嬉しい事ぢやないかいな、中座の毛氈棧敷にも、春より續く花紅葉、嬉し／＼も有り難き、里の俄に曾我祭り、囃し立てたる當り年、賑はふ芝居ぞめでたけれ／＼。
ト淨瑠璃段切打上げる。直ぐに渡り拍子になり、道具廻る。これより、花車、祇園囃子、廻るといろ／＼俄ありて雀踊り納まる。トまた渡り拍子になり、正面打抜き、中二階、曾我兩社の宮を飾り附け、子役、白丁の形にて、御輿を舁いて出て來て、正面に据ゑる。大ドロ／＼になり、日覆より、以前の蝶千鳥下りて來る、これにて、皆々居並び手を打つと。
三津　先づ今日はこれ切り。
ト曾我祭り、打出し。

幕

姿花鳥居の色彩（終り）

生木偶花洛名所――活人形

音羽の山や瀧ざくら
常磐の眺め松本が
妙手になびく柳の糸竹

明治四年六月、中村座に上演された、一種の風俗描寫舞踊である。その年、淺草の奥山で、松本喜三郎が作の、三十三番活人形の見世物が大變な評判であつたところから、それを當込んで、活人形通りの舞臺を見せたものである。上の「熊野」は、明治二年の七月に當座で出したものなのであるが、人形に清水寺の場があるので、それを其まゝ再演したのである。空也上人の一群れは人形通りで、たゞ氷屋や仲居は景物である。氷屋はその頃出始めたもので、早速取込んだのであるが、氷の製造云ひ立ての文句が、今の日で見ると頗る呑氣で面白い。この脚本は稿本で、實際の舞臺ではこの氷屋は省略されて、遊客と小原女の踊に代つたやうであるが、氷屋の方が如何にも明治初年の樣が見えて面白い。詞章は三世櫻田治助と三世瀨川如皐の合作、常磐津は文中に文字兵衛、富本は豐洲と名見崎德治、振附は花柳壽輔、役割は、宗盛と佐保七が坂東彦三郎、熊野と音七が五世尾上菊五郎、朝顏とお梶は市川門之助、空也上人が尾上芙雀、婆が中村仲太郎、後家が尾上梅五郎、おりゑが市川女寅、金太が尾上幸藏、口上が中村荒次郎、番附賣りが尾上菊之助であつた。

生木偶花洛名所（活人形）

清水花見の場
四條河原の場

役名──平宗盛。熊野御前。池田の朝顏。空也上人。中反坊。瓢簞坊。後家、おつや。姉小路の娘、おりゑ。婆、きのじ。丁稚、金太。氷屋、晋七。同、佐保七。仲居、祇園のお梶。

常磐津連中
富本連中

本舞臺、一面、網代幕、日覆より櫻の吊り枝。上の方、段幕、下手、紅白布交ぜの段幕の太夫座。爰に頭取、淨瑠璃、觸れ書を三方に載せ、座に着く。大拍子にて、幕明く。

ト頭取、淨瑠璃名題、太夫連名、役人觸れよろしくあつて入る。網代幕、切つて落す。

本舞臺、三間の間、瓦葺き屋根、裏垂木朱塗りの軒面付けし、淸水觀音堂の舞臺の上。極彩色、枡組み、彫り物、唐戶など誂らへの通り、本釣り鐘、風の音にて、道具納まる。

ト道具幕、切つて落し、爰に常磐津居並び

〽それ淸淨觀の瀧水は、戀想の堀に灌ぐなる、誓ひも弘き奧山に、妙法華の容彩る粧ひや。

トこれをセル出しの、鳴り物。眞中に宗盛、上の方に朝顏、かつしき、十二單衣。下手に熊野御前、十二單衣。緋の袴、檜扇を持ち、かつしき、能本行の畫面にて納まる。

〽榮華は盡きぬ宗盛公、熊野御前を伴うて、盡きぬ名殘りとさながらに、都の春の惜しまれて、咲き行く花を尋ねんと、同じ車に法の道、淸水寺の花舞臺。

宗盛　如何なる宿世の緣なるか、二世と契りし熊野御前、斯く親みしも三歲越し。

熊野　君のお情嬉しさは、女官の服もこの身の曠れ……月には雲の障りとやら。

朝顔　遠江の池田より、御前迎ひに参りしかど、せめては今日、花見のお供。

熊野　割りなき君のお詞に

朝顔　随ひ参つて旅の憂さ。

宗盛　心も晴れて。

三人　この眺め。

〽春前に雨あつて、花の開くること早し〽秋後に霜なうして落葉遅しと夕紅葉〽外山しげ山春の色、實に長閑なる東山、東と聞けば懐かしや。

〽南を遥かに眺むれば、大悲應護の花の雲、棚引く色も妙なりや、熊野權現もたり氣の〽その名も同じ三熊野の。

ト朝顔、宗盛、悋氣の振り。熊野御前、クドキ模様になる。

〽爰に召されて冥加なく、この世を語らふ戀衣、鴛鴦の衾の幾夜半か、重ぬる夜の睦言に、その嬉しさのいやまさる〽束の間隔つ東路に、身は東とても戀しさの〽心は爰に有明の、月の桂の花のりと〽離れ難なく見えけるを。

ト宗盛、熊野御前、兩人よろしく、朝顔、入つて、酒宴を勸め、紛らすこなし。

〽酌參らする杯と、共にめぐらす舞ひの袖、かざしの花や五つ衣。

ト酒宴あつて、朝顔、宗盛より扇を受取り

〽斯くて都へお供せば、又とや御意の如何ならん〽東をさして行く道の、やがてぞ君に逢坂の〽關の戸ざしも心して〽明け行く後の山見えて、花を見捨てる雁金の。

ト三人とも立別れの振り、思ひ〳〵。

〽それに越路よ我れは又、東に歸る名殘かな〳〵。

ト三重になり、誂らへ鳴り物。三人の姿を幕にて隠す。

本舞臺、すべて、祇園の鳥居先、門前町續き、遠見の書割り、活人形招きの通りの書割り、道具建てに納まる。右の鳴り物打上げ。

ト知らせに付き、太夫座の段幕、切つて落す、爰に富本連中居並び、前彈きちよつと。直ぐに空也上人その外、活人形畫面合せの、婆、後家、丁稚、娘、空也の弟子中反坊瓢簞坊、花道より出て、振りあつて、舞臺へ來る。此うち、淨瑠璃。

富本　〽謠ふも舞ふも法の聲、あゝなんぞいの、假初の憂世ばかりの戀だにも、一夜の情あるならば、惜しまぬ命今更に、永くもがなと思ふ慾、思ひ捨てても諸人よ、ああ

なんまいだ、なんまいだへ踊り念佛に誘ひつれ。

ト此うち、各々花道にて振りあり、空也上人は坊主鬘黒衣、胸に鉦押しの鉦鼓をかけ、撞木を持ち、鹿の毛の頭付きし杖を突き出る。これと共に好みの子役一兩人、里の子にて、瓢を叩き、同じく空也の弟子、黒衣襟に瓢簞を結び、綱の先を引ッ張り、やつし振り袖の娘、丁稚、股引、風呂敷を背負ひ、なかしみの拵らへしたる後家、婆、花道に並び、綱の元に十一面の靈像招ぎの如く、白木造りの厨子、車に載せてあり、これを引きながら、めん／＼振りよろしく。

へ浮氣信心綯ひ交ぜの、綱手の先は中反坊、なアまいだアなんまみだへなんの餘念もないのが菩提、迷ふがゆゑに三界城、十方空也上人の、昔を爰に寫し繪や、曳けや佛の御手の糸、六波羅寺の權化とて、響らく車を停めけり、

トこの淨瑠璃のうち、花道にて、よろしくあつて、舞臺上手を大詰に廻り、ト、上手へ娘又は子役のうちより盆に御庭を載せ、空也上人、形の如く立ち、婆きのじ、像を拜む。後家おつや、丁稚金太、娘おりゑ、繩を引き、弟子中反坊、瓢簞坊、綱をかたげ、活人形招きの見得。キッパリと納まる。此うち、橋がゝりより、口上、好みの拵らへ、着流し、袴にて、これと共に、番附賣り、絣の紺纏、大紋、丸に二の字、新門の付印きし、柿の十露盤染め、三尺、腰に扇を差し、白足袋、麻裏草履にて、活人形番附の畫ら、綴本を大分持ち右口上の役人に手を引かれ出て、口上云ひ兩人下の方に住ひ、拍子木を三つ打ち、これにて鳴り物打上げる。右口上の役人、あら子の思ひ入れ、京談にて、思ひ入れあつて

口上　東西、最初御覽に入れましたるは、十六番清水の體にござりまする。又この人形十七番、六波羅密寺、即ち招きの體にござりまする。細工人は松本喜三郎、とんと生きて居るやうにござりまする。お目留められて御覽下さりませう。殘り三十一番、御覽に入れ奉りまするが、末々までは程長い儀と申し、大暑の砌りにござりますれば、凉しい道具に替らせ、即ち四條河原な凉みの道具にさし替へて御覽に入れます。

ト、また拍子木を打ち、輕業の鳴り物、地へ取り、これにて口上云ひは下手へ入る。

本舞臺、向ふ二の手三の手に奥の鏡板まで、西京四條河原の夕涼みの景色、川瀬の涼み臺、朝顔、雪洞を所々に照らし、また茶屋の掛け行燈、紅彩色の團子提灯、或ひは川向う、料理屋所々の寮、二階へ燈火を照したるを見事に飾り、上の方へ畫心に三條の橋を見せる書割り。すべて誂らへの如く、日覆へ櫻を引上げ、一面柳の吊り枝、上方の騷ぎ、辻打になり、道具納まる。

トこれまでいづれも人形の見得よろしくあつて

りゑ　申し上人樣、御修行を上げませう。

ト盆に載せし布施お捻れりを出す。

中反　これは御奇特、忝なう存じまする。

トこれにて、金太こなしあつて

金太　ヤレ〳〵、とんだ仕置に逢ふものだ。

りゑ　それでもな、人形ぢやと思うて居れば、其やうに暑うもなかつたわいなア。

中反　サヽ、そこが觀音妙智力、なんと有り難いではござらぬか。

つや　成る程、妙智力に有り難い。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

きの　そりやモウ、有り難い事は有り難いが、內太股が、ぴつしよりになつたわいの。

瓢簞　エヽ、其やうな事云うても、力を入れて引くのは愚僧ばかりぢや。

金太　ナニ、ぐさうつきなさんな。おいらはどのくれえ骨を折つたか知れねえ。

つや　イヤ〳〵、瓢簞坊どのが綱の先を持つて、眼を剝いて振返つた見得は、奇妙であつた、南無阿彌陀ぶ〳〵。

空也　サア〳〵、涼しうなつたれば、これより那智山紀三井寺。

りゑ　粉川寺より和泉へ越えて

つや　槇の尾の寺、藤井寺。

金太　大和に榮螺の壺坂寺。

きの　おかでら長谷寺、ほんにおふけな觀音樣。

空也　由來を語つて、聞かせませうか。

ト空也上人、撞木を持ち、こなしあつて

〽そも山跡の昔の京、長谷の御寺の濫觴は、延喜四年の花見月、花に長谷寺里の子へ、相手拍子に鳴る瓢へやろかおまそかへさア取つて見やれ〳〵、手鞠櫻や花紅葉、今日九重に匂ひぬる、花も紅葉に生ひ茂る。

ト空也上人、よろしく、これへおりゐ、その外よろしく相手に立たせる。これより、おりゐ立つて

〽若草山の木の間蔭、弓手は佐保の川淀に、いとしらしさの篝火は、忍び逢ふ瀬の闇の夜を、焦れ寄る邊の便りぞと〽鹿の仇には奈良坂や、盛春日の星明り、おつと引寄せつれ〳〵と、嬉しや髭を三笠山。

トおりゐ金太絡んでよろしく、トおつや、前へ出て

〽おつとそこらは空即是色、色即是空、なんでも喰ふ、朝の出がけにや豆茶粥、佛供養も花の下、くうでん建立この頃は、時候構はず醍醐寺、三面八臂の佛に習ひ、身を粉の辰巳三室戸に、世を宇治の寺瓢簞に、拍子取るので鉢叩き、野暮は少しも岩間寺。

〽あゝなんまいだ〳〵、勿體ないが聞かしやれ、おらが前には淡海の、堅いとこそ云へ石山の、月に三度のお詣りも、後生菩提は後にして、この世で栄耀栄華の望み、面白い物三井寺の、おかねがたんと山城に、兎角六角どこまでも、それさへあればよし峯の寺、尤もぢやあろまいか、あゝなんまみだ〳〵。

ト空也上人代つて

〽ほんにお前は正直な、空信心のお婆さん、慾を播磨の清水だけ、六千手の御佛へ、願をかけたら近いうち、摑み取りがあつたなら、手々が千本人先へ、儲けさんせうエ、竹生島。

〽諸願滿足美濃の國、三十三番谷汲に、打ち納めたる話し草。

中反　すゝむる功德の方便に

金太　爰は四條に川涼み。

つや　極樂世界のこの涼しさ。

りゐ　好い眺めでござんすなア。

金太　サア、爰に貰盆があるから、一服上がりませ。

瓢簞　お上人様も、この床几で。

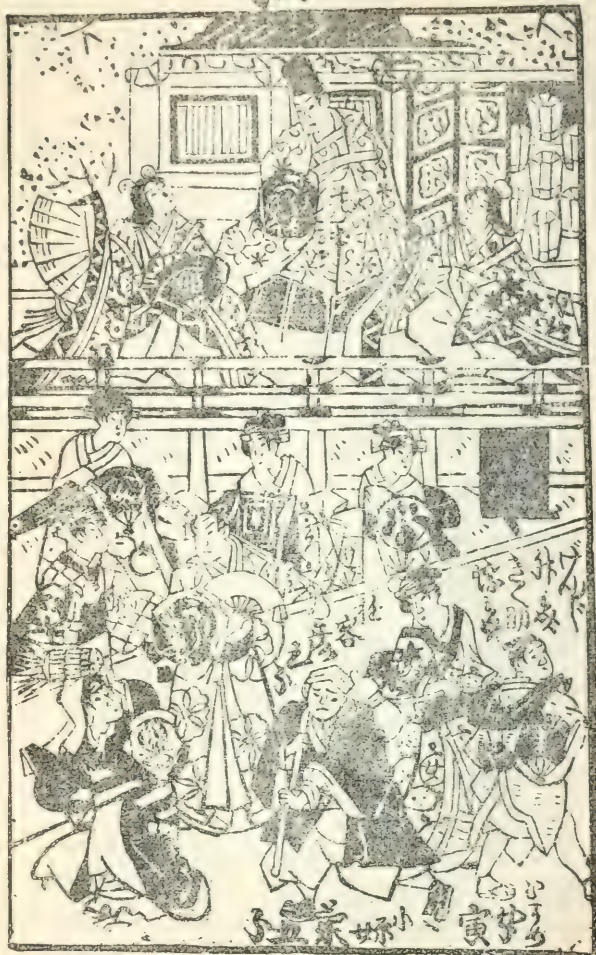
ト床几へこなし。

空也　さらば休息いたさうか。

ト皆々よろしく居並ぶ。

〽淺き流れの涼風に、四條河原の賑ひも、正中の刻の汐先を。

ト右のうち、晋七、佐保七、好みの浴衣、華美模樣、好みの平括け、おしよぼからげ、紅染めの襷をかけて白手拭、當節仕出し西洋仕方水の商人、白木エイチヤ格子の小さき誂らへの荷へ、拵らへ物のギヤマンの皿、

初演當時の繪番附

砂糖壺、鉢へ青葉、これへ氷の拵らへ物、本硝子の小皿類出し置き、これへ縮緬ごらうの染めわけ暖簾、誂らへの如く、兩肩にて擔ぐ。誂らへにて、これを兩人かたげ、扇を持ち、麻裏草履にて出て、花道に荷を片寄せ振りになる。

〽深山氷室の六月櫻、峯の音羽や唄へ唄へ三味小唄、浮れ拍子や祇園町。

ト鳴り物のあしらひよろしく、兩人振りあつて、揚げ幕の方を見返りよろしく思ひ入れ。この文句のうちにお梶、好みの鬘、派手なる帷子、緋の前垂れ、仲居の拵らへ、駒下駄、暑中見舞ひの團扇を好みの如くしてこれを持ち出て、直ぐに花道にて

〽通ふお客の皆様へ、暑さ見舞ひの月に祠を、さすが團扇の角丸く。

トお梶、この振りあるうちに、音七、佐保七、こなしあつて、これよりお梶に絡んで振りになる。

〽おゝ、あなたお馴染みこれからは、商梅幸せうチヤウくらと、つい道連れになる瀧野、新車薪水新西洋、見えさへ涼しい氷苺。

ト各々振りあつて

音七　西洋新製。

　ト扇を持ち

兩人　夏氷、名代々々。

〽粋に連れ立つ涼しさを、擔うて川邊を來りける。

ト佐保七、先肩になり、音七、お梶、よろしく舞臺へ來る。此うち、舞臺の皆々捨ぜりふにて

皆々　ヤア〳〵、好い男の二人連れ。

りゑ　派手な姿のお女中さん。

　トお梶、空也上人を見て

かぢ　ほんに、空也寺のお上人様、今日は涼みにお出でなされましたかえ。

中反　オゝ、おことは祇園のお梶女郎。愚僧がこれへ參つたは。

　ト厨子へこなしあつて

觀世音へ勸化がてら。

瓢箪　同行の信者達を伴うての通り道……この間は、お前のお世話で

中反　拙僧方へ過分の布施物、忝なうございます。

かぢ　これはお禮で、お恥かしうございます。

つや　そんなに噂に聞きました、名の高い

りゐ　祇園のお梶さんは
兩人　こなさんの事でござんしたか。
瓢箪　さうして、お梶さんは、今日どこへし
かぢ　今日はお馴染みの客さん方へ、暑中見舞ひの戻りが
け……この二人の衆と連れ立つて。
中反　して、あの仁は、何でござる。
佐保　ヘイ〳〵、一體私しは、東國者でござりまするが、
上方見物に參りまして、遊んでばかりも居られぬ所から
思ひ付いた際物商人。
香七　丁度時節も水無月の、神輿洗ひの日が賣出し。メリ
ケン傳法冷水。
兩人　お求めなされて下さりませ。
金太　オイ〳〵、氷屋さん、メリケン傳法と云ふが……お
らアこの間、錢を出して三杯しめたぜ。
香七　イヤモウ、兎角さう云ふのがお客樣。今日はこの邊
へ廣めの爲。
佐保　代錢はマア後で。
兩人　サア、一杯づゝ、お振舞ひ申しませう。
ト始終注打ちにて捨ぜりふよろしく、佐保七、香七、
荷の上に並べし硝子の丼へ氷を入れしを盆に載せ持
ち出る。
中反　サア〳〵、御遠慮なく上がりませ。
瓢箪　これは〳〵、矢張り氷室で圍うたものか。
何しろ、お初穗を本尊樣へ供へませう。
ト觀音の厨子へ一つ供へる事。金太、その外捨ぜりふ
あつて丼を取る。きのじ、しやしやり出て
きの　コレ〳〵、わしも氷のお呼ばれに預かりませう。
中反　でも、きのじ婆樣は、この氷を
つや　年寄りの冷水ではないかえ。
きの　でも、最前から咽喉が乾いてならぬわいの……併し、
後で代料は、高い事を云ひはせぬか。
香七　廣めの爲に、お振舞ひ申します。
きの　振舞ひとあれば、皆さん、たんと呼ばれなさんせ。
トよろしく啜るこなし。
かぢ　さうして、この氷は、冬から貯へて置くのでござん
すかえ。
佐保　イエ〳〵、この暑さを見かけて
香七　拵らへますが、新製秘法でござります。
空也　ハて、後世恐るべし。この炎暑の中で、新たに水を

氷らすとは

つや　どう云ふ仕方か、その製法の、氷の云ひ立て。

かぢ　ほんに、昔の外郎賣り、富士の白酒賣る者の、その云ひ立てが紋切り形。

空也　どう云ふ仕方か。

皆々　聞きたいなア。

佐保　その詳しいお話しを申しませうにも、口不調法な私しが申さうより。

ト音七へ思ひ入れ。

お主から皆様へ。

音七　どうして〳〵。マア、兄貴から口開けを。

皆々　その來歷は。

ト扇を佐保七、持つて

佐保　オヽ、それよ。

ト思ひ出したるこなし。

〽あのや碗久にあらねども、天地乾坤混沌未分、日毎の酒の大呑みに、數獻酩酊どろんけん、少しアメリカ强酒國〽三伏の炎暑凌がん爲。

ト合ひ方、鳴り物入り。音七も出て兩人になり

〽アートルレイスと云ふ夷人〽二つの鼎に湛々と湛えし水の引力を、取りも直さず傳信機〽走らす蒸氣の鐵砲やたら、此方はくわつ〳〵と熱くなり、此方は冷えるに從つて〽氷るかね合ひ妙キテレツ〽窮理未發を傳習し、英佛イタリヤおしなべて、珍重珍物夏氷。

トこれより文句の都合にて、居合す皆々を引出し、相手に使ふ仕組み、振りよろしく御工風。

〽氷おろしの甘味にて、一口召せば襟元から、ぞつと惚れ〳〵涼風に〽お女中さん方お若い衆、心の駒の御用心〽年寄り方も冷水の、謂はれ因緣御出家も〽雪の山路みお釋迦樣、戀が菩提と目出鱈目に、きこし召せとぞ興じける。

ト佐保七音七にて、よろしく納まる。

空也　氷の謂はれ、聞いて一興。

きの　面白い事であつたわえ。

空也　愚僧が宗旨の和讃とても、人を導く方便なれば、

中反　狂言綺語も讃佛乘。

佐保　これからは祇園の姐御お梶さん。

音七　色氣のあるお話しが、承りたうございます。

かぢ　なんのわたしが、それよりは。

トおりゑへこなしあつて

姉ケ小路のお孃さん、何かおやりな。
りゑ　どうしてわたしより。
つや　お梶さん、是非共に
皆々　所望ぢや／＼。
かぢ　皆さん、平にお許しえ。
　ト團扇を持ち、こなし。知らせに付き、上の太夫座取り常磐津連中居並び
常〽惜しめども、どうで浮名の龍田の紅葉、夕日の雨にそぼ濡れて、濡れ色深き戀の淵、比べこしなる山の端の〽月に叢雲花紅葉、邪魔する風をいとふのも、そこが極意の戀の秘事、もしさうおやないかいな〽媚めかし。
　トお梶、よろしく納まる。
佐七　イヨ／＼、有り難いと申します。
かぢ　サア、これからはお前方二人が
中反　さうして、貴公達は、東京者と見える。
りゑ　東のお方は又格別。
きの　コレ／＼、吾妻男さん、話し相手がたくば、わたしが相手をしてやりませう。
金太　それ／＼、お婆さん、お前の相手は茶呑み友達。
きの　また差出居るか。おのれが何を知り居つて。

きの　吾妻男の色事話し。
　ト嫉らしき思ひ入れ。
佐七　何を云ふにも、相手に賴むお女中さんは……見かけた所が
佐保　祇園町のお梶さん……また姉ケ小路のお娘御。
兩人　マア、女中方から出鱈目に。
かぢ　そんならどうでも、わたしが相手に。コレイナア、商人さん。
富〽聞けば東は生粋と、噂に聞いて非の頭、磨き上げたる玉川の、産物とやらの俠ひ肌。
　ト此うち、おりゑも立つて、兩人、佐保七、晋七へクドキになる仕組み。晋七、佐保七、よろしく、双方心々、ト居合す銘々を引出し、皆々を絡んで思ひ／＼。おつやもあしらひ、をかし味ある振り、いろ／＼あつて、面白き振りの工風あるべし。
常〽殿御らしうて眞實が、見え透く肌は京の水。
　トこれより、佐保七晋七はおりゑお梶へ戯むれかゝる心の振りになる事。
富〽磨き上げたはこちとらが、東の色に比べては。
常〽あれ其やうな口合ひで、あそこや爰で惡性に、流れ

渡つて叉爰で、賜らしやんすか知らねども
富〽何のおなぶり迷子札〽鉦や太鼓で探しても、こんな緣は傘の、骨になるとも知恩院。
常〽天井拔けに神佛、賴んでめぐみ蝙蝠傘に〽儘よ三度笠横道な。
富〽願ひ成就も觀音の、十が一面さま〳〵な、手事の糸の緣結び
常〽戯れた戀路ぢや
富〽ないかいな。
トよろしく銘々を絡んで、クドキよろしく納まる。
ト皆々こなしあつて
空也　中々一興。
中反　面白い事で
つや　あつたわいなア。
かぢ　これからは二人の商人さん、商賣物の氷の云ひ立て。
兩人　ナニ、氷の云ひ立てだえ。
ト困りしこなし。
かぢ　氷盡しが
皆々　所望だ〳〵。

音七　さらばお話し申しませうか。
常〽年立返る春風に、窓の梅が香ほの〴〵と〽筧の樋にまん丸う、拔けた氷のひもかゞみ
富〽末世の鏡は河岸に、ぞつと素肌の冷たさも、辛い辛抱親大事
常〽孝の惠みか氷の上へ、躍り上がつた出世魚。
トこれより、佐保七音七兩人にて、面白き氷盡しの振り事よろしく
富〽お萬どこへ行く油茶貰ひに、高い駒下駄びらうどの鼻緒
常〽かつくりこと踏み飛ばし、辷つて轉んだ緣先に、張つた氷の思へば憎や〽愚痴をこぼした水油。
富〽太郎どん次郎どんの、犬めが仕合せへろ〳〵と。
ト音七、氷を入れし籠へ布巾をかけ、兜の見立て、誂らへの道具入れる事。
常〽池にうつらふ狐の姿。
ト好みの鳴り物あしらひ、合ひ方、廿四孝四段目の當て振り、兩人よろしく
富〽姬の念力法性の、兜を守護なす諏訪の御神。
ト合ひ方、をかし味の狂ひよろしく

常〽狐渡らぬその先に〽氷の上を一散に。

ト音七、宙乗り心の振り、佐保七、後見のこなし。両人、面白き振りよろしく

富〽飛び越す鳥居の玉狐、玉の汗ではあるまいか。

ト振りよろしく納まり

常〽繰り返すなる文月に。

富〽當り芝居ぞ勇ましき。

富常〽當り芝居ぞ勇ましき。

ト皆々チラシ、よろしく引ッ張りにて居並び

頭取　先づ今日はこれぎり。めでたく打出し。

幕

生木偶花洛名所（終り）

宇治八幡祭市川

―― 宇治祭

これも顔見世淨瑠璃の一つで、天保元年十一月、河原崎座上演「一陽來復澁谷兵」の四建目淨瑠璃である。初めは「稻荷森甲冑緣起」といふ淨瑠璃名題が附いてゐたが、上演の際に本曲のやうに改まつた。序幕に宇治の禪寺で暫を見せ、後に遠藤盛遠の狂言を附けたので、間の所作も宇治の世界にし、祭を見せたものであらう。菊之丞を非常に働らかしてあるのが目につく、この頃の菊之丞は全盛並びなき女形だつたのだ。作詞は二世瀨川如皐らしい。富本は豐前太夫と名見崎德治、振附は西川扇藏、役割は宗盛と茂次兵衛が澤村源之助、雷姫とおさわが五世瀨川菊之丞、菊王が市川高麗藏、出來作が市川壽美藏、侍從が市川富瀧・朝顏が嵐龜之丞・寶六が七世市川團十郎であつた。

宇治八幡祭市川（宇治祭）

利久八幡の場

富本連中

役名――平の宗盛。牛飼ひ、茂次兵衛。熊野御前實ハ信頼妹雷姫。かしづき、侍從。同、胡顏。わつぱ菊王。仕丁、出來作。牛飼ひ、寶六。同女房、おさわ。

本舞臺、三間の間、上の方、高足通しの二重。向う金襖、番立、襖の松の模様、この屋體の内、毛氈を敷き、獅子頭、銅拍子など飾りあり、尤も欄間へ紫ふせん蝶の幕を張り、軒口へ巴の紋付けたる團子提灯を提げ、御簾の上げ下ろし。ズッと上の方、櫻の立ち木、同じく吊り枝、下の方、太夫座、これに富本連中居並び、すべて、宇治利久八幡祭禮の模様、

早神樂にて、幕明く。

ト頭取、出て、口上あつて入る。直ぐに前弾きにかゝる。

〽寶にや歌舞伎も新玉の、宇治の若葉や江戸の花、神に誓ひを結ひ綿の、丸にいの字の月雪花に、友睦まじき袖笄月。

ト誂らへのセリ上げの鳴り物になり、眞中に宗盛、羽織衣裳、紫の罷き袱紗、中啓を懐に、紅梅の枝に短册を付けたるをかたげ、この下に雷姫、廣振り袖の形、菊の花を持ち居る。ズッと上に寶六、やつし袖なし、三尺帶にて、紅葉の枝に酒樽と大杯を付け、これより、三人、この見得よろしく、舞臺眞中へセリ上げる。

〽しげれとは、戀の松山浪越えて、おのがわやくに草も木も、靡きやすさのとりなりは、男盛りか色盛り、平家の愛に御大將、諸事は身共が宗盛と、大度の外に粋とやら、假名で覺えて字に書いて、忍んで一人寄のみの、間夫の關戸の色びさし、通ひくるまの音近く、生酔ひ癖の云ひ兼ねて、そこを見て取る機轉者、牛ちやなけれど生え立つて、小ちれの鞭を合圖との、つい打ち兼ねて手持ちなく、お側へひたと月の顏。

ト此うち、三人、振りよろしくあつて

寶六　ハヽヽヽ、お大將様、爰は宇治の利久の八幡様、御田の早苗取越して、宇治の茶摘みと一時に、これと申すも平家の御威勢。

宗盛　それゆゑにこそ、皆の者が、練り物とやらに出仕いたすげな。これもはる〴〵東より、下向なしたる熊野が慰み。

雷姫　ア、勿體ない我が君様。あなたのお側へ參りたく、殊には願ひに願ひしお館、只いつまでも、お目かけられて下さりませ。

〽過ぎし花見の清水に、見初められたり、見初めたる、お寐間の伽の夜な〳〵に、二つ枕の草紙にも、君召す仰せ有り難く、由縁の手綱引締めて、寐ぬ夜の友の長煙管、そつと覗いてついで見て、他所の口舌の居睡りか、雲井育ちの上臈も、地下の女も戀とやら、情とやらの二道に、女心の淺はかな、花の都に遠江、池田の里を出でしより、添ひ寐するのが嬉しうて、ほんに思へば憎い程、可愛らしいぢやないかいな。

寶六　ドレ、マア、祭をお目にかけませう。

ト舞臺のツゲの木を持ち、向うへ向ひ、これを打つ。

屋體囃子になり、向うより、菊王、棒茶筅赤ッ面、角つなぎの上下衣裳、脊中に好みの大紋を付け、摑み股立ち、大小、太緒の草履、襟に紅染めの手拭をかけ、黑骨の扇子片手に、金棒を引いて出て來る。

ト同じく後より、出來作、好みの鬘、衣裳着流し、丸絎け、太緒の草履、手拭を被り、衣裳の上に黑の衣を引ッかけ、薄肉、茶筌うりの梵天をかたげ、花道にとまる。

〽我れも菜の葉に重年の、花より今年のお取立て、御贔屓町のお惠みを、すてつぺんからお先き物、引擔いだる向う見ず、三本足らぬ猿田彦、御輿も重く舁き出して、いよ愛嬌を鳥兜、向うに活けた紅梅の、根〆めにちよつと鉢叩き、しながら淸き金棒引き、むかしやおんばの日から傘、水道にさらす野暮の垢、實のなる花の二葉より、鼻の高いが親讓り、打連れ立つて來りける、

出來　こりやア我が君、熊野御前、いつの間にかは牛飼ひ寶六。

寶六　これは又、お二人様、お祭の御趣向。でもお出でが遲かつた〳〵。

菊王　イヤモウ、御機嫌御公達の御見物で、引ッ張られ、

思はず遲來。まだ／＼我れ／＼より色氣のある、練り子をこれへ呼び出して。

出來　オヽイ／＼。

　ト向うより、侍從、朝顏、振り袖、矢の字結び、御主殿の腰元風にて、緋縮緬の前垂れ、手拭をかむり、茶摘み籠を提げ、早足に花道にとまる。

〽宇治は名所色づく畑の、好い摘み盛り、戀の手出しはまだ初昔、こちは濃い茶のあたつきばかり、樁は藝者樂素顏で粹で、御所の勤めの寒椿、こなたへこそは浮かれ來る。

　ト侍從、朝顏、本舞臺へ來る。

朝顏　我が君の御前やら、熊野の御前のお指圖にて

侍從　女子だてらの邪魔者、お免し請けて此やうな

寶六　色の世の中、イヤ、大事ござりませぬ／＼。色達がお出でなら。

菊王　これから酒と洒落ませうか。

宗盛　オヽ、こりや／＼これは好い／＼。

　ト寶六、以前の酒樽を出し

寶六　八幡樣の御神酒の御裾分け、我が君さま、こりやどうござりませうな。

雷姫　幸ひのこのお神酒を、これにて一つ。

寶六　サア／＼、これはお神酒に上げた上、お大將樣への熊野御膳から、頼まれ物。それゆゑ誰れにも手も付けさせず、お大將の旦那へ、契りに召上がりませ／＼。

宗盛　熊野が持たせの酒とあらば。

　ト杯を取上げる。寶六、酌をする。

出來　御前には、御前所に、御酒も御用意ござらうに。

宗盛　構ふな／＼。斯うして飲むこの酒は又格別。

出來　これを思へば我れ／＼も、吸ひ筒でも持參いたさうに。

菊王　幸ひ爰に盛切りの、あつたかさうなぶツかけ二杯。一つ宛せしめようぢやアござりませぬか。

　ト朝顏に抱き付く。

朝顏　エヽ、惡洒落は止しなさんせいな。

出來　燒き餅か。我が君、あの通りでござりまする。

宗盛　サア／＼、この酒を飲め／＼。

皆々　このお流れを私しどもへ。有り難うござります／＼。

　ト皆々樽の傍へ寄添ふな

寶六　イヤ／＼、女はならぬ／＼。

　ト朝顏、侍從、兩人を押退ける。菊王、出來作、隔て

る。

宗盛　イヤ、この上もない、好い心持ちに醉つたわえ。

〽いたづらも、うつりにけりな色衣、てんと八幡ての昔、抱いて育てた律義者、齡も人に竹の内、片手に杖を九十九髮、名も高砂の雪の松、御母君御凱陣の、應神帝を降誕ある、深き思ひを人や知る、さア〱こちへと寶六が情の軒にや臥し給ふ。

ト寶六は、雷姫と宗盛の兩人を神樂堂へ入れ、御簾を下ろし

寶六　オツト、閉帳々々。

ト出來作、立ちかゝる。

内陣へは切手が入ります。こいつは餘ツぽど味な心持ちになつたわえ、女房は宇治川へ雇にれ、内へ行つても埒明かず、こんな惡魔は。

菊王　案じなさんな。女除けの惡魔は。

出來　ほんに神樂のこの獅子で。

ト獅子を持つて來り、皆々肌を脱ぐ。

朝顏　二人揃うて舞ふ時は

侍從　取りも直さず女夫獅子。

ト侍從、菊王を相手に獅子を持ち、よろしくあつて

〽天の鈿女の色仕掛け、面羞ながら此方から、神の心を籠鞠の、拔けつ潛りつかね事の、茶碗の緣の廻り氣な、寄せて手元へ引付けて、乘せて見せたり投げて見て、そこが手事の粟餅々々。

アそんれ中身はそこだぞ、一人寢る夜は月夜の闇、當ても渚にひよつくりひよつと、首を延ばして縮めて浮いて、見る〱よんべ夢見たな、しよんがいな、黄金花咲く木に餅がなる。あれわさ、これわさ、どつこいさのさ、年は豐年穗に穗が咲いて、そこで庄屋どん時觸れ出して、村の正月しよんがいな、面白や、かゝる所へ。

トどん〱烈しく、皆々向うを見る。

〽馳け來る注進。

ト矢張りドン〱烈しく、お澤、向うより、高からげ木綿唐草の着付け、柿の袖なし羽織、この上より扱帶を締め、陣笠を持ち、一散に本舞臺まで走り出て來る。

さわ　御注進々々。

ト皆々住ひ、寶六、思ひ入れあつて、大拍子に腰をかけ

寶六　アヽ、誰れかと思うたら、味方にあらぬおらが内方。軍の樣子は、なんと〱。

さわ　ハヽア。

〽なんと／＼と呼はつたり、堅固に守る平等院、不意の軍に引いた／＼、聲かけられて味方の勢ひ、しまりなけれど鉢卷も、投けてすつぽり法師武者、銅鑼鐃鈸杢魚やら、ふせ鉦打つて攻め念佛、斯うあらうとは味方、勢ひ、用意も宵の浮かれ酒、院代どのゝ腹立ち上戸、なに平家から押寄せた、撞木持つてぽつ拂へ、力んで見ても腰立たず、側に納所の泣き上戸、こなたにいつか十夜の夜、おひへ一枚袈裟一つ、ひよつと軍に切られたらと、しくしく泣くを、ハヽヽヽ、機嫌上戸の大和尚、こいつは妙だ／＼、ハヽヽヽヽ、闇が好いとて袖褄ひいて、木の根枕におつ轉ばして、おどけ交りに恥かしい、まゝの川端、構ふ事はない、草取るとてな袂を引かれ、鍬を枕におつ轉ばしておどけ交りに恥かしい、まゝの川端、構ふ事はない、をかしらし、おさらばさらばと二股の、どちらへ付かくか旗色の、かゝる軍は氣遣はし、飛ぶが如くに。

寶六　必らず怪我して給んなよ。

さわ　合點ぢや。

〽あいたしこ、これはさのよい、走り行く。

トおさわ、向うへ走り入る。ドン／＼にて、皆々思ひ入れにて

菊王　サア／＼、こいつは大變。いつの間にかは味方が

出來　御沙汰なしに不意の夜討ち。

朝顏　併し、此方が勝軍なら

侍從　我が君樣にもお喜び。

寶六　どちらに負け勝ちがあつても構ひはないが、雇ひ旦那の敗北とは、ハテ、是非もないなア。

〽是非も內證のすて育ち、折もこそあれ牛飼ひ茂次兵衞、

トどん／＼烈しく、向うバタ／＼になり、茂次兵衞、木綿やつし、裁附け、肌を脫ぎ、鉢卷をして、陣笠を持ち

茂次　御注進々々々。

ト寶六、思ひ入れあつて

寶六　誰れかと思つたら、おらが隣の茂次兵衞か。軍の事ならたつた今、嚊アどのに詳しく聞いてしまつた。

茂次　ソレ、そんならおれより先へ。でも、折角來た。もう、一遍御注進々々々々。

寶六　これは迷惑。して、軍の樣子は、なんと／＼。

茂次　ハア。

〽されば〳〵、雇ひ旦那の忠綱どの、昔なア、これな、昔し〳〵の猿と蟹、甲羅に似せて敵方の、穿ちの穴を呑み込んで、一旦勝ちは取つたれど、どう云ふ事の駈引きか、負け腹恥を柿の種、腹が北山時雨やら、焼めし一つの兵粮と、取替へたのが氣の後れ、とつぱさつぱの中よりも、敵の向うに一來法師、筒井の上妙身を堅め、薙刀杖に突つ立つて、身輕に御免と頭の上に、一足飛びぢや、どなたも左樣ぢや、さて〳〵、あれはさて、これはさて、この度の軍は、兜の眞向鐵砲でぽんと、打たれてハイトウ、どんぶり川へ放し龜、なれども宮は七度まで、馬より撞とをちこちの、御油斷あるな寶六どのと、大息ついて注進なす。

茂次　さうして居ずとマア内へ。

ト寶六の手を取る。

寶六　そんならおぬしも。サア、一緒に。

〽牛は牛飼ひ連れ立つて、元來し道を遲牛が、もう〳〵歸ろと夕間ぐれ、足踏み鳴らし急ぎ行く。

ト寶六、茂次兵衛、ドン〳〵烈しく向うへ入る。皆々思ひ入れあつて

出來　お聞きあつたかいづれも。高倉の君の忘れ形見を、宗盛公人質として御養育。

侍從　あやかり者の源氏の人質。

朝顔　我が君樣の若君同樣。

菊王　何は兎もあれ勝軍。さは云へ二度目の注進は、味方の少し敗走と。

出來　そこは軍の千變萬化、何ゆゑ宮の御計略。

〽抑々治承の夏の頃、君に由なき御謀叛を、勸め參らす源三位、椎を拾ひしその昔、弓は袋に太刀は鞘、大內一の上臈に、向う黑闇眞菰とて、礫軍が寶となり、合圖の時計關の聲、前代未聞の夜軍は、目覺ましくも又勇ましさ。

ト出來作、よろしく振りあつて

出來　おてまへ方は君のお側へ。

侍從　左樣なら、お二人樣。

菊王　サ、ござらつしやい。

〽お側勤めの朝顔侍從、御寢所へこそ走り行く。

ト侍從、朝顏、思ひ入れあつて、下座へ入る。

出來　何は兎もあれ我が君樣へ、軍の樣子を申し上げん。

菊王　我が君樣には只今の樣子、それにて

出來　お聞きなされましたか。

初演當時繪番附

ト この時、御簾巻き上がる。内に雷姫、宗盛、よろしく住ふ。屋臺の上の方、屏風を立て、床を敷き、抱き子を寢かしてある事。

宗盛　思ひがけなき今宵の夜討。宮のお行くへ。なれども味方の勝利とは、ハテ喜ばしい。

菊王　いま平氏の勢ひ、飛ぶ鳥も落ちる御威道。

出來　清盛公の嚴命に、違背いたさば死刑の罪。

宗盛　それゆゑにこそこの程より、虜となせしこの幼な子正しく雲井の御胤なれど

雷姫　東西分かぬ若みどり、我まゝ非道に可愛や現在。

宗盛　ヤ。

ト 思ひ入れ、

雷姫　イヤ、可愛盛りの御顔ばせ。

宗盛　心と詞の轉倒は、慥か源氏の

雷姫　エ、。

宗盛　現在血筋が他人の似寄り……ハテナア。

ト ぢつと思ひ入れ。凄き合ひ方になり、宗盛、こなしあり

ハテ心得ぬ。最前熊野が持たせの神酒の流れ、酌むと等しく

出來　眼前氣が閉ぢ、手足の痺れ。

菊王　五臟の惱亂。

ト 三人、苦しきこなし。雷姫、これを見て

雷姫　苦しい、。さうであらう／＼。御身が呑みし神酒こそ、南蠻秘法の毒ぢやぞよ。

三人　ヤア、

出來　すりや、毒酒を以て我が君樣を。

宗盛　我れを詭かる、憎くき女。覺悟せい。

ト 宗盛、苦しきこなしにて、切つてかゝる。ちよつと立廻つて、雷姫、抱き子を懷に入れ

雷姫　語つて聞かさん。よつく聞け。

ト きつとなる、宗盛、始め、皆々思ひ入れ。大小入りの誂らへの合ひ方になる。

誠我れこそは、右衞門の頭信頼が娘、兄義朝が亡び失せしも平家の所行。この恨みを晴さんと、明暮れ思ふ其うちに、平家の公達、おことが慕ふを幸ひに、日頃の恨みの兄の仇、又二つには人質になり給ふ、この若君を取返し、宗盛始め二人の武士を、手も濡らさずに討取る妾が計略、なんと膽が潰れたか。

出來　さてこそ源氏の廻し者。

宗盛　熊谷と侮はる、おのれ國賊。

ト思ひ入れあつて、切つてかゝる。ちよつと立廻り、雷姫、宗盛を當てる。出來作、菊王、當人切つてかゝる。ドロ／＼にて日覆より雲下がる。この時、雷姫、靜かに上を見ながら、本舞臺へ下りる。

雷姫　ハテ心得ぬ。いま人質となり給ふ若君を、取戻せし折も折

ト出來作、菊王を相手に雷姫、立廻る。

動きもやらず雲立ちは、白きは源氏の旗の色。赤きは亂をなす兆し。

〽妙なりや、異香薰じて花の浪、ねんねこせいねんねこせい、ねんねがお守りはどこへ行た、名をも雲井に揚巻の、山を越えて里へ行た、里の土産に何貰うた、その紫の若みどり、松吹く風に薰るらん。

ト雷姫、兩人を相手に立廻りあつて、兩人をポンと切る。

ト向う揚げ幕にて、遠寄せの頭を打込む。雷姫、思ひ入れあつて

ハテ心得ぬ、貝鉦太鼓。妾が素性を知つて、我れを取卷く合圖なるか。何にもせよ、これより宇治川へ參じ、武士の手本に討死せん。オヽ、さうぢや。

トきつとなり、肌を脱ぎ、長刀を持ち、花道へツカツカと行く。この時、御簾卷き上がる。宗盛、これを見て、そろ／＼下りて

宗盛　ノ待て。

ト雷姫、行く。

イヤサ、右衞門の頭が娘雷姫、マア待て。

ト雷姫、立留まり

雷姫　虜となりし我が君を、取り得て歸る心の咎め。我れを呼ふにはなかりしか。ハテナア。

ト思ひ入れあつて、又行きにかゝる。

宗盛　敵に後を見するのは、源氏の武士の教へなるか。申し聞かせう仔細あり。マア／＼待て。

ト雷姫、振返り見て

雷姫　さ云ふ御身は、宗盛ならずや。

トきつとなる。宗盛、ツカ／＼と花道へ來り、雷姫と入れ替り、兩人、キツと見得。誂らへの大小入りの合ひ方になり、宗盛、せりふを云ひながら、雷姫をヂリヂリと押し戻す。

ヤア／＼、疾より汝が心を探るに、只者ならぬ面體骨柄

さては源氏の由縁と察し、人質として高倉の君の、御胤を餌となし、その俗性を試せしに、案に違はぬ雷姫。汝が色香に迷ふと思はせ、一旦壽酒に死せしと見せしも、先を潜つて賽六が、入れ替へ置きし誠の神酒。雷姫の企みのほぞ、見出せし上は籠中の鳥、降參なせばその通り、異議に及ばゞ人質の、この若君を殺害せうか。

雷姫　サア、それは。

宗盛　降參なすか。

宗盛　サア。

當人　サア〳〵〳〵。

ト本舞臺へ來る。

雷姫　降參なぞとは穢らはしい。小癪な。覺悟しや。

トこの時、菊王出來作も立ちあがつて雷姫。

出來　

菊王　捕つた。

トかゝる。

出來　さては汝等も

菊王　汝如きの瘦せ腕に、やみ〳〵切らるゝ菊王ならず。

出來　死せしと見せしも見出す計略。斯くなる上は潔く、尋常に

兩人　繩にかゝれ。

雷姫　小癪な事を。

宗盛　者ども、ソレ。

軍兵　ハア。

ト下座より軍兵大勢出て、雷姫を取卷き

動くな。

〽一座和合の顔見世や、いつか並ぶる河原崎、賑ふ花の礎は、めでたかりける次第なり。

ト上に雷姫、立ち身。下に宗盛、出來作、菊王、立ち身。軍兵、横に取卷き、引張り。

よろしく幕

宇治八幡祭市川（終り）

朧とは
梅を見せたる
月夜かな

鴫立澤虎礎——朝比奈三番叟

本篇も、江戸には數限りなくある、曾我淨瑠璃の一種で、文政五年の二月、河原崎座に書き卸した曾我狂言「松梅鶯曾我」の四建目である。この時の立作者は南北であるが、この場は松井由輔が南北の筋立てに依つて書いた。炬燵を枷に十郎と虎が色模樣、舞鶴屋傳三が廻禮歸りの醉態、髪梳き、いづれも斯種の淨瑠璃には型のやうになつてゐる趣向だが、朝比奈に三番叟を舞はせただけが見附けものであらう。この時の清元は延壽太夫に齋兵衛、振附は藤間勘兵衛、役割は祐成が三世尾上菊五郎、虎が四世市川門之助、傳三が二世關三十郎、朝比奈がこの時下つて來た尾上蟹十郎であつた。蟹十郎は菊五郎の弟子で、前觸れのよかつただけに、この大役を振つたのだが、やらせて見ると丸で駄目なので、この後からは詰まらない役をあてがはれるやうになつてしまつた。菊五郎の十郎は殆んどお家の役といつてもよく、これは非常に評判がよかつた。

鴫立澤虎礎（朝比奈三番叟）

祐成別莊の場

役名——曾我十郎祐成。大磯の虎。同禿、千鳥。
大磯廓傳三。小林の朝比奈。

清元連中

本舞臺、正面屋根飾りしたる亭屋體、向う床の間、更紗の暖簾口、風雅なる仕立て、數寄屋障子をたてきり、この左右庭の心。手洗鉢、石燈籠、植込み、四つ目垣、梅の吊り枝、同じく立ち樹、花の盛り、いつもの所に枝折り戸、松飾りを取附け、上の方淨瑠璃臺、爰に清元連中居習び、すべて鴫立澤祐成別莊の體。鳥追ひの合ひ方、通り神樂にて幕明く。

ト頭取出て、淨瑠璃の役觸れあつて入る。直ぐに前彈きにかゝる。

〽君が代の齢へ壽ぐしるしとて、色添ふ門の若みどり、春より先に春の來て、扇々や寶船、戀の港につながれて、いつ解けやらぬ氷面鏡、向ふ笑顏や玉櫛笥。

ト鳥追ひの合ひ方に通り神樂をかむせ、正面の障子を引拔く。內に朝比奈、鏡臺に向ひ、大磯の虎、朝比奈の髮を結うてゐる。千鳥、禿にて、櫛を拭いてゐる。三人この見得よろしく納まる。

〽ゆかしき主を待つ身より、待たるゝ人としつぼりは、今日大磯の虎が君、我れらは蔭隈小林も、離れぬ仲の毛むくじやら、ちよつと御見と寄添へば、廓に馴れたる禿松、なんでありんす馬鹿らしいと、ひぞるもぞるも育ちから、小癪者ではないかいな、まだうら若き梢にも、殘れる雪を置き炬燵、誰が痴話筥と附けぬらん。

とら　ほんに、朝さんとした事が、いつに變らぬおどけ口、その上わたしを捕へてじやら〳〵と、氣の輕いお方でござんすな。

千鳥　モシ、お前、今のやうに串談しなんすと、祐さんに云ひつけるぞえ。

朝比　アヽ、コレ〳〵、祐成にそれを云はれて堪るものか。やう〳〵の事で御當地へ下り、御贔屓お取立てにあ

づかるまで、祐成を力に當分の居候ふ。それゆゑまた、ひめはじめは元より、髪結ひ床の初剃りも、むづかしいゆゑ、虎を頼んで髪月代、なか／＼いゝ心持ちになつたわえ。

千鳥　太夫さんはきついもの、よう似合うたわいなア。

朝比　時におぬしも寒からう。幸ひの置き炬燵。サア／＼、あたれ／＼。

とら　そりやさうと、この祐さんは、どこへ行かしやんしたえ。

朝比　サア、聞いてくれ。祐成は大晦日の晩に、阿母の所へ歳暮に行つたが、一夜明けてもまだ歸らぬは、掛取りが煩さいゆゑ、逃げたと見える。但し片貝といふ云ひ號けあれば、てつきりそこへのめくり込んで、ひめはじめでもしてゐるか。

とら　エ、、祐さんは、そんなら片貝さんの内へ行かしやんしたかえ。さうとは露知らず、エ、、腹が立つわいなア。

朝比　さては此奴、焼き餅だな。併し焼き餅は正月の當り前。

千鳥　今に祐さんも、お歸りでありんせう。

朝比　其やうに氣を揉まずと、幸ひの銚子、杯。重詰で一杯やる氣はないか。

ト朝比奈、銚子、杯、重詰を出し、虎の側へ持つて行く。

とら　イエ／＼、もう酒どころではないわいなア。

千鳥　モシ、其やうに氣を揉みなんすと、又いつもの

二人　癪が起らうぞえ。

とら　それぢやというて、わたしや腹が立つわいなア。

ト　いろ／＼氣の揉める思ひ入れあつて、門口へ行く。

〽拗ねて見せるが戀の癖、東風へなびくと名のみはよけれ。

聞けば聞くほど腹が立つ。主に限つて其やうな事はあるまいと思うたが、矢ッ張りわたしが油斷かね言積るしげ／＼に、互ひに變るな變らじと、云ひ交せし仲ゆゑに

〽よそに二人が睦言も、笑はれ草かしみ／＼と、癪にさはるや科もなき、煙管あたりも戀なれや。

トこの文句のうち、虎、門口にて、いろ／＼思ひ入れある。朝比奈は酒を飲む、千鳥、酌をしてゐる。虎件の杯を取り、手酌にて酒を飲み、また此方へ來て煙草盆を引寄せ、焦れて、トゝ煙管を煙草盆へ打ちつけ、煙

へ身を外け、思ひ入れ、兩人、この體を見て氣の毒なるこなしあつて、また兩人酒盛りよろしく、双六なぞしてある。

〽色の習ひと世の諺も、ゆうべの雨にしつぽりと、濡れて戻りし祐成が。

ト向うより祐成、羽織衣裳、安下駄をはき、大磯花菱屋といふ傘をさし、醉うたる體にて出る。

〽戀の重荷と傘を、かりの枕も捨てられぬ、今朝はのぼのと迎ひ酒、しかも模樣の千鳥足、つるり〳〵、つる〳〵つる、鶴の餌ばみの畔道を、つるりと木履踏みとめる、そろ〳〵とそれ〴〵跡へ來る人は、これぞ古今の捻ぢ上戶、招けばオヽイ大磯屋。

ト跡より大磯屋傳三、上下にて、一本差し、禮者の姿首へ年玉の入つたる包みを引かけ、生醉のこなしにて出る。

〽傳三も今日は年禮と、首に掛けたる年玉は、供と旦那の二人前、わびた世界ぢやないかいな、うまの合うたる酒の友、こなたは正に色上戶、醉うたとさ〳〵〽あぶない。

祐成　合點ぢや。

〽あぶない。

傳三　合點ぢや。

〽互ひに語り睦まじく、打連れ立ちて來りけり。

ト兩人花道にてよろしくあつて、トヾ祐成先に舞臺へ來り

祐成　思ひがけない途中の雨。其方もわしも、既に濡れやうとしたが、どうやら空も晴れたさうな。

傳三　左樣でござります。よい所であなたのお目にかゝり、お庇で濡れずに參りました。

祐成　これまで來れば氣遣ひない。互ひに無事でめでたい春、何がなしに祝うて一杯、飲まうぢやないか。ア、此方へ入らつしやれ〳〵。

傳三　有り難うござります。私しも祝うてお年玉、末廣かりの扇。

ト扇箱を出す。

祐成　これは忝ない。サア傳三、入らつしやい。

ト兩人門口を入り

コレ、いま戾つたぞ。サア、酒を持て〳〵。

朝比　兄イ、待ち兼ねた〳〵。

千鳥　祐さん、今お歸りかえ。

朝比　コレ、内にも客があるに、今までどこに居たのだ。

祐成　サア、大晦日の夜、母者人の方へ歳暮に行き、思はず一夜を明したゆゑ、直さまあちこちへ年禮、なんとよい手廻しか。その歸りに傳三に逢うて、それから同道して、いま戻つた。

朝比　ヤア、そんなら傳三は禮に來たのか。

傳三　ハイ、左樣でござります。朝比奈さま、明けまして、結構な春でござります。

祐成　コレ、朝比奈、いま聞けば、内にも客があると。アヽ、聞えた。千鳥が來てゐるからは

朝比　知れし御事。コレ、おぬしに、逢ひたいと、先刻から來て待つてゐるワ。

祐成　そんなら虎が來てゐるか。ドレ、どこに……ヤア、太夫か。ようマア、來てたもつたなう。

傳三　イヤア、虎太夫、さては、ひめはじめの押賣りに來をつたな。エヽ、畜生め。

祐成　太夫、炬燵の火がよくは、わしもあたらう。

　ト炬燵へかゝらうとする。虎、ツンとして此方へ來る

これはどうぢや。何を其やうに腹立てるのぢや。サア、機嫌直して一服のみや。

　ト烟草吸ひつけて出す。

とら　イエ／＼、わたしや烟草は嫌ひでござんす。

祐成　こりや、太夫の機嫌をそこねたさうな。皆の者、よいやうに、詫び言してくれ／＼。

傳三　オツトそこらは大磯屋、グツと呑み込み仲直り。モシ、太夫さん、どうぞ有馬の水天宮、そんなひぞりは、よしの木さいかち、さりとはつれない／＼は奴の挨拶。

一番立てゝおくれいな。

　ト虎の側へ行く。

とら　エヽ、阿房らしい、なんぢやいなア。

傳三　南無三しまつた。

千鳥　モシ、太夫さん、機嫌直して、祐さんに御挨拶を

とら　アヽ、この子とした事が、わたしや祐さんとやらいふお方に、近附きはないわいなア。

祐成　これはどうぢや。わしぢやわいの。祐成ぢや、其方は大分醉うたさうな。幸ひ爰に袖の梅がある。コレ千鳥、早うそれを汲んでおぢや。

千鳥　アイ／＼。

　ト火鉢にかけたる藥罐の「袖の梅」を、茶碗に汲んでくる。祐成取つて

祐成　サヽ、一口飲みや。
とら　イエ／＼、わたしや醉うてはゐぬぞえ。お前こそ片貝さんとやらと、さいつさゝれつ、お樂しみであらうのに。
祐成　ハテ、よい機嫌らしい事を。この祐成は曾我へお預け。二品の寶紛失ゆゑ、鬼王もろとも日夜の艱難。その上祐信さま、母人には、囚人同然のお身の上。それも時節なりや、もう仕方がない。まゝの皮よ、兎角我れらは、そもじの顔さへ見ればよいなう。
とら　そりや大方門違ひでござんせう。外の女中さんに、其やうな事云はしやんせいな。
祐成　これは又迷惑な。云ひ交した其方を退けて、外の女と、惡性してよいものかいなう。
とら　でも、云ひ號けの片貝さんと
祐成　なんのマア疑ひ深い
とら　アレ、まざ／＼しい、あの顔わいなア。
へいつしかに、うつろひやすき心とは、兼ねては知れど何のその、女子心はさうぢやない。過ぎし夜すがの初會から、好いたらしいと思うても、傍輩衆や内外の手前、好かぬお方と口ではいへど、いつか穗に出て人さんに、なぶられたさの樂しみは、これも苦界の憂とやら、あれ見やしやんせ門の松、女夫が仲に去年の雪、解けて寢る夜の注連飾り、羨ましうはないかいな、どうぞお前を實にして、末は妹背の語らひと、思うて暮らす甲斐もなうそもこの頃のしなしぶり、つれない男と寄添へば。
祐成　太夫、そりや何を云やる。その恨みなら、此方から云はにやならぬ。こゝな狐傾城め。狐なら稻荷の宮居、神すゞしめは、オ、それよ。
へまづ衣更着の初午は、家毎に軒の行燈に、繪空音なる口合も、祈年祭りの賑ひと、鄙には米の種びたし、米衆といへる仇人に、鼻毛よまれぬその先と
　これまで度々化かされて、末の約束、起請の嘘に、かきのめされた我れらより、書入れさせた、神々は
へ一に權現二に玉津島、三に下がり松四に鹽竈よ、天の橋立切れ戸の文珠、文珠さんはよけれども、切るといふ字が氣にかゝる、サッサ、何としよかどしよかいなへ陸をゆきかふそゝり唄、十露盤絞り頰かむりへ親兄弟にも見放され、赤の他人の傾城に、可愛がられう筈がよい、なぞと聲する鶯や、しかも今年は正月が、二つ並んだ枕橋、三圍あたり夜の殿、ちらりと見えし狐火は、オ、

初演當時の繪番附

恐ろしと身を縮め、行かんとするを引とゞめ〽これ待たしやんせ祐成さん、さう云はんすりやわたしこそ、云はねばならぬと思ふ仲、戀いさかひと見て取つて、二人を左右に小林、千鳥。

朝比　ホツト待つたり、先刻にから見てゐたが、さうまで惚れ合つた二人が仲も、明の方となつたゆゑ、こいつは切る氣だな〳〵。

千鳥　それといふのも、祐成さんが惡性ゆゑ、どうやら切れさうぢやわいな。

とら　ぬしの惡性を聞いたからは、わたしや切れにやならぬわいな。

祐成　わが身が切れる氣なら、此方も切れるぞ。

とら　わたしも切れる。

祐成　おれも切れる。

ト此せりふを聞いて傳三、ムッとしたる思ひ入れにて皆々を掻きのけ、ズッと眞中へ出てドッサリ坐り

〽モシ、どなたもお詞の鼠だが、チヽチウと待つてくんなせえ、今聞けば切る〳〵といふが、おれが上下が古いといふのか。〽ふる物にとりては、女郎衆の勤め、とてもふるなら春の雪、解けて寢よとの嬉しさに、夢も結ばぬ明がらす、可愛々々は久しいものぢやないかいな〽浮氣浮氣で根つからさつぱり氣が知れぬ、これが誠であらうぞいな〽それを今更笑ふとは、あゝ恨めしの人々と、管まきかける酒の癖、まだ醒めやらぬ風情なり。

朝比　傳三は、まだ醉が醒めぬさうだ。

千鳥　お前、なんで其やうに腹立てなんすえ。

傳三　なぜ切る上下だと云つたのだ。

朝比　なにサ、ありやアおぬしが上下の事ではないよ。

傳三　そんなら今切れると云うたは

朝比　サア、切るといつたは凧の事。奴も今度初下り

千鳥　モシ、傳三さん、いはゞめでたい初春ぢやわいなア。

〽その仇言も酒の粋、悋氣もいはゞ可愛さが、過ぎて心の厚氷、つい解けかゝる春の風、門に立てとゝ松竹の、影に禿が手鞠唄。

トこの文句のうち、朝比奈、千鳥、傳三をなだめ、千鳥は鞠を突くといふ思ひ入れ、朝比奈も同じ思ひ入れ。ト、朝比奈の頭を鞠の思ひ入れにてよろしくあつて、羽子板を出し、逢ひ羽根を突く。これより羽子板を抛に、大太鼓入り、草摺の見得になり、祐成、千鳥へ指

鬮して、よろしくあつて、朝比奈、千鳥よろしくあつて納まる。

獨唄〽宵の口舌は無理なさゝめ言、つい云ふ事も惜しや別れの鳥逢、又の逢瀬をまつや子の日の、野邊に數々心土筆の、筆に菫も、それがほんに文ぢや一イ二ウ三イ四ウ、夜毎々々に通ひ廓の戀の夜すがも、人目忍びてあかぬ契りな、只晦かけて祈る誓ひも緣ぢやえ。

ト朝比奈、千鳥よろしく納まる。

ト虎、この中へ出て

オンド〽緣は異なもの野中の梅に、初音きかせよ人來鳥〽花を一本忘れて來たが、跡で咲くやら開くやら、よいやさよいやさ。

トこれより傳三、虎の振りになる。

〽こちの爺さは左が好きで、夜さり〳〵に呑も〳〵と云やる〳〵、機嫌上戸だホホホツと、笑はば法華經と囀るは、わや〳〵鶯百千鳥。

ト兩人よろしく納まる。

皆々　あの太鼓は

トどんちやんになる。

朝比　兼ねて範頼どの、これなる虎に打ツ惚れてゐるゆゑ度々口說けど承知せず

祐成　大勢の人夫を差向け、手籠めになさん計らひよな。

とら　そんなら爰へ

傳三　アヽ、コレ〳〵、そりやア料簡違ひ。範頼さまはお歷々、そんな理不盡はなさるまい。

皆々　でも、あの太鼓は

傳三　サア、今年は漁が當りゆゑ、若い衆が寄つて、濱手の祭りでござります。

皆々　そんならあれが

傳三　サア、獅子の音頭に、よい聲かけて

〽ヤア、曳けや〳〵よい中の綱。

ト傳三、ひよつとこの面をかむり出て

〽あのや姐さんちよと惚れて、文の代りに鍬やつた、はれたとそれが判じ物、にらの畑の庄屋眼、爺さん婆さん撞木の手、子よりも、可愛いゝ孫の手色の手承知の手、しめたら合點ぢやないかいな。

と傳三よろしくあつて

傳三　サア、音頭ぢや〳〵。

〽しめろやれ、しめて寢た夜は枕が邪魔よ、枕拍子に浮れうならば、可愛々々の合槌は、あひにあひ持つ槌の音、

いとしけりやこそしんと打つ、憎て打たれうかその鼓、たんぽゝの、花が見事に咲いたよの〳〵、節も興じて面白や。

トこの文句にて五人手踊りよろしくある。始終ドンドン聞える。

朝比　サア〳〵、太夫が機嫌が直つたさうな。

傳三　此やうな時は寸善尺魔。

千鳥　ちつとも早う

三人　二人一緒に

二人　それぢやといふて

朝比　エヽ、小ぢれつてえ。

〽しや面倒なと小林が、二人をかしこへ押やれば、傳三が機轉仲人役、流石それしやを見習うて、禿が屏風引廻す、いかなる夢や結ぶらん。

ト三人して祐成と虎を屏風の中へ入れる。

朝比　エヽ、畜生め。

三人　ハヽヽヽヽヽ。

傳三　まづ二人が納まれば、此方も安堵。これで双方浪風なし。仲人は宵の程、わしはモウ、お開きに致しませう。

朝比　イヤア、傳三が眞面目になつた。酒が醒めたら、飲み直しはどうだ。

千鳥　ほんに、それがようありんせう。お酌をしようかえ。

傳三　イエ〳〵、まだ方々でござりますれば、春長にゆるりと參りませう。

朝比　そんならどうでも

傳三　杯はお預け申して

朝比　又そのうちに大磯屋

千鳥　コレ、危ないぞえ。

傳三　朝比奈さま、永日お目にかゝりませう。

〽然らば永日々々と、醉ひもどうやら春雨の、あそこや爰のぬかるみを、ひよいと飛んでは身を輕う、元來し道へと。

トこの文句にて傳三は向うへ、朝比奈は千鳥に囁き、奥へ入る。千鳥殘り、屏風の外にある火鉢の火を煽いでゐる。この時向うにて

四人　ヤイ來いエヽ。

トどん〳〵のやうな通り神樂になり、向うより中間四人、若松を染めたる駕籠看板、陸尺の形にて出て來り

陸一　兼ねて範頼公、大磯の虎に、首ッたけ惚れてはござれども
陸二　祐成と、ふ蟲があるゆゑ、今に色よい返事がないと
陸三　殊の外のお腹立ち。それゆゑ我れ〳〵この如く、姿をやつしこの所へ、虎が來てゐるを幸ひに
陸四　引立て來れと仰せを受け、次手に戀の敵たる、祐成ぐるみ、合點か。
三人　心得た。
陸一　何かの手段は、コレ
ト四人囁き合ふ。通り神樂になり、皆々舞臺へ來る。
許さつしやりませ。この別莊は、梅の花盛りと聞いたゆゑ
陸二　供待ちの見物に來た。
陸三　どうぞ庭を
陸四　見せて下さい。
千鳥　これは〳〵、どなたもようお出でなさんしたが、今日は主さんがお留守ゆゑ
四人　ならぬと云ふのか。
千鳥　アイ、どうもわたしが自由にも
ト陸尺一・千鳥を見て

陸一　ヤア、わりやア虎が禿の千鳥ぢやアないか。
千鳥　して、お前方は
陸二　コレ〳〵千鳥、今日爰へ、大磯の虎が來てゐるのであらうの。
千鳥　イエ〳〵、わたしや其やうな事は
陸三　知らぬとは云はせない。
陸四　なんでも爰と目を附けたが
陸一　あの屏風の中が物臭い。
千鳥　アモシ、滅多な事を
陸二　そんなら虎はどこにゐる。
千鳥　サア、わたしやどこやら
陸三　知らぬと云へば屏風の中が。
千鳥　サ、それは
皆々　サア〳〵〳〵
陸四　面倒な。ソレ、踏んごめ。
三人　合點だ。
千鳥　アコレ
ト四人踏み込まうとするを千鳥さゝへる。立廻りのうち屏風を皆々引退ける。内に虎は以前の形。その側に朝比奈、祐成の羽織をかぶりゐるを、皆々は祐成と心

得

陸一　さてこそ爰に二人の奴ら。

ト兩人をよき所へ引出す。

千鳥　モシ、滅多な事を

陸二　戀の敵の十郎祐成。

陸三　虎もろともに範頼公へ

ト立ちかゝり、引立てようとする。この時朝比奈、ちよつとさゝへ、四人を見事に投げのける。皆々起きながら

陸一　待て〳〵。祐成は色男の弱蟲と聞いたが。

陸二　今日は強勢な力になつたぞよ。こいつは人間業とは思はれぬ。

陸三　それ〳〵、こいつは慥か節分の、福は内外の豆蒔きに

陸四　追ひ出されたるごろつきの

陸一　そんなら、うぬには

四人　鬼か。

へうんにや。

四人　人か。

朝比　ウムヱ、。

へ和田が三男小林の

朝比　朝比奈だもサ。

ト朝比奈、來たる羽織を取つてキッと思ひ入れ。皆々見て

陸一　イヤア、祐成と思ひの外

陸二　つん出た奴をよく見れば、義盛に勘當された、驕ッ咬りの小林だな。

陸三　さては祐成を落しやり

陸四　替へ玉の奴の化け物。

陸一　なぜ邪魔方と

四人　つん出たエ、。

朝比　やかましいわえ、木偶の坊めら。親仁の義盛に勘當うけ、祐成の内に居候ふ。斯ういふ時に働らくが、喰ひつぶしの當り前。うぬら、じたばたすると、鹽辛にして食つてしまふぞ。

四人　イヤア。

とら　ほんに朝さん、よい所へ。こりやマア、どうしたら

千鳥　よからうぞいなア。

朝比　此奴らはおれが受取つた。この間に早く大磯へ

三世尾上菊五郎の
やつし楠成の錦繪

とら　そんなら此まゝ
朝比　ちつとも早う
四人　われをやつては
ト行かうとするを、朝比奈、四人をさゝへる。虎と千鳥は花道へ行き、舞臺を見て思ひ入れあり、向うへ入る。
〽危ふき事を虎口とは、おのが名に呼ぶ友千鳥、千里一飛びかいしよげに、廓をさして、
陸一　この上は、跡追ひかけて手に入れなば
陸二　範頼公のお喜び。
陸三　喜びありや三番叟。
陸四　朝の出がけに幸先よし。
陸一　外へはやらじあの色香。
陸二　手活けの梅や翁草、
陸三　彼奴を引立て、手柄は仕勝ち。
ト四人追ひ駈けようとするを、朝比奈さゝへ
朝比　さうは千歳これからは、刃向ふうぬらを雪解けの、泥にまぶせて黒き尉。
陸一　ところを此方が腕かぎり
陸二　取つてひしぐは式三番。

陸三　骨をひしぐは
陸四　笛鼓。
朝比　鈴振る、袖振る
四人　拍子に乘つて
朝比　外へはやらじと、おんもふ。
ト立廻つて件の羽織を肩に引掛け、三番叟の見得にてキッと思ひ入れ。
〽式三番のいはれを問へば、天照神に住吉春日、これ天地人の三方なり、翁の謠にちりやたらりは眞言祕密、また千歳は七つの拍子、初めに六つの拍子を踏むは、たれ日の本の六十餘州、踏みかためたる形にて、日の本は三足の、烏にたとへし烏飛び、戀の種蒔きこなたこそ／＼、外へはやらじと取附いて、流石いなには袖打拂ひ、納むる手には袂をとゞめ、千秋樂には所體を作る、萬歲樂には小褄をしやんと、池の汀に舞ひ遊ぶ〽げに有り難き神風や、花は散らさず色見えて、鳴立澤へ春の來て、動かぬ御代の礎と、今もその名を殘しける。
ト右の文句にて朝比奈、四人を相手に三番叟の立廻り見事にあつて納まり、トゞ四人をひしぎ、朝比奈キッと見得よろしく、片シャギリにて

鴫立澤虎磯（終り）

幕

雪振袖山姥——娘山姥

これも數限りなくある顔見世淨瑠璃の、その又中でも數多い、山姥物の一種で、山姥を娘姿で見せ、後に白髮に化させる趣向で、筋が後日の山姥となつてゐる所が見附けものである。型の如く頼光の色模様の前淨瑠璃も附いてある。どの山姥にもこの前淨瑠璃が附いてゐるが、これは山姥の方が出場人物少なく、舞臺面が淋しいから、それと對照させる爲に、いつも添加されるのである。文化元年十一月、河原崎座の顔見世狂言「四天王楓江戸粧」の四建目で、立作者にはこの時鶴屋南北がなつたのであるが、この淨瑠璃の作は南北と立川焉馬の合作になつてゐる。山姥の方が焉馬なのであらう。常磐津は綱太夫に、三味線は岸澤小式部と式佐の一日替り、振附は西川扇藏。役割は金時が初世市川男女藏、頼光が尾上榮三郎、花園姫と山姥が中山富三郎、照葉が市川男寅であつた　初演ぎりで打絶えてゐたが、先年中村福助の羽衣會で、清元の地に直して復活した事があつた。

雪振袖山姥（娘山姥）

三島明神の場
足柄山の場

常磐津連中

役名――源の頼光。傾城。錦木實ハ花園姫。坂田公時。禿。照葉。足柄山の山姥。丹波太郎鬼住。仕丁、鷲峯。同、熊武。狼の丸市。月の輪熊藏。猪の牙平。小猿の六平。

本舞臺、三間の間正面高足の土手、この上に石垣朱塗りの玉垣、五色の幕を張り、左右の杜卷き梅楓の大樹、日覆より紅葉の吊り枝、下の方に高足の土手、同じく段幕、すべて伊豆の國三島明神の景色。こゝに熊武、鷲峯、粕烏帽子、仕丁の形にて、舞臺眞中の紅葉の立ち樹に、銚子を吊り、落葉を焚き、酒を飲みゐる見得。大拍子の神樂にて幕明く。

鷲峯　ヤレ〳〵、これで心から温まつたわえ。

熊武　ソレ〳〵、おぬしが云ふ通り、林間に酒を暖め、紅葉を焚きなんぞと、しやらくさい事はとりおいて、もう一杯引ツかけねえか。

鷲峯　イヤモウ、強的に温まつた。時におぬしと、この鷲峯が、宮奴となつてこの社へ入り込んだも、下向なしたる頼光めを、

熊武　コリヤ。

ト思ひ入れあつて

おぬしもおれも、丹波太郎鬼住どのゝ頼みに任せ、この關東へ入り込みしも、花園姫を引ッ浚はん爲ばかり。

鷲峯　折よく今日この所へ、頼光社參なすとの事。窺ひ寄つて姫もろとも

熊武　必らずぬかるな。

鷲峯　合點だ。

熊武　來い。

ト山颪し、時の鐘になり、兩人思ひ入れあつて下座へ入る　爰にて頭取、淨瑠璃役觸れあつて、納まる。知らせに附き、前彈きになり、上の段幕を切つて落すと

〽常磐津連中居並ぶ、淨瑠璃にかゝる」

〽改まる、頃は貞元神樂月、今日を歌舞伎の日の始め、月の笑顏や初舞臺、天正月と壽を、祝ふや梅の浪花津を、又東路へ踊り咲き、櫻に紅葉こきまぜて、錦色どる花の顏見世。

ト花やかなる鳴り物になり、上の方に賴光、廣袖羽織衣裳、紫の置き頭巾、長煙管を持ち、庭下駄をはき、傾城錦木實は花園姬、裲襠、紅葉の枝に短册の附けたるを持ち、駒下駄、八文字道中の見得。かむろ照葉、振り袖の拵へにて、結構なる莨盆を持ち、駒下駄ばき坂田の公時、市川流の古風なる拵へ、着流し、大小の上へ白丁の上を引ッかけ、粕烏帽子、紅葉にて葺いたる長柄の傘をさしかけたる見得、淸搔めいたる鳴り物にて、この四人を一ぱいにセリ上げる。鳴り物打ち上げる。淨瑠璃。

〽賴光公に故鄕より、はる〳〵來ぬる旅ごろも、東の空のしたりして、步行路を急ぐ道もせに、爰も三島の神垣や、御武運祈る心願を、かけ來る心意氣、重ね扇に抱き柏、比翼に附けし櫻川、姿は御守殿御所風を、戀なればこそ八文字、廓を爰に全盛の、太夫は松の位山、あかぬ眺めも色見えて、綠なりける女の童、禿と呼べど廓馴れし、互い返事の長局、聲細殿にこませもの、父公時は赤いもの、ほんに眞赤な面見世は、新酒新川新入りを、新車で爰へ木挽町、ひきかけたりや赤男、ふし瘤立ちし赤松は、花に緣ある男振り。

賴光　山の名も、もる程もなく村時雨、下葉の色は露に染まらん。勿體なくも命により、東へ下るこの賴光、爰は都に事かはり、伊豆の三島の神垣に、照葉かゞやく風景は、實にも山路の錦ぢやよなア。

花園　錦着て、故鄕へ戾る我が君の、お跡慕うてかちはだし、踏みも習はぬ花園が、とり形さへも不束な、見よう見眞似の八文字。

照葉　廓をこゝに花魁の、禿はかのもこのもより、又みどりとも、夕化粧、床にはぬしの手沾けにて、梅でありんす初舞臺。

公時　舞臺一面紅葉は、もみぢ色どる赤ッ面、男女の目から見てみれば、傾城なりのお姬樣、旦那に餘ッぽど色時雨、濡れる仕掛けと見たゆゑに、機轉きかせて公時が、長柄をちよつと相傘の、赤いはきとく氣の附いた……たんと皆さん、餘ッぽど通ぢやござりませぬか。通大高雄

も及びなき、爰も紅葉のまつ盛り。

頼光　樹々の錦に折よくも、一村雨のはら〳〵と

照葉　梢木の間も濡れ色に

花園　濡れにぞ濡れし山の端も、濡れてぞ歸る惡性者。

公時　これぞ旦那の濡れ修行。

頼光　色ある樹々の

四人　眺めおやなア。

公時　ほんに時雨もやんださうな。ドレ〳〵、傘をとりおいて、

　ト長柄を方寄せ

　時に合點の參らぬは、花園姫さまのこのお姿、頼光さまのお館へ、傾城なりの御來臨は、こりやアどういふ御趣向だの。

頼光　成る程、公時が云やる通り、頼光とははる〲と任に下るとは表向き、誠は將門純友が張寄り〳〵蜂起なすとの訴へ。朝敵退治のその爲に、公時一人召し具して、忍びの歩行のその路次に、思ひがけなき花園どの、一年逢はぬ其うちに、廓出たちの全盛に、ハア、俄とやらの思ひ附きか、何とも某、合點がゆかぬて。

花園　エヽ、また其やうな憎て口、自ら事は父のお指圖にて、あなたとは云ひ號けありしかど、正盛どのゝ横戀慕といひ、殊更あなたは東へお下り、未だ輿入れなき自ら、お目もじ致すも心に任せず、花園で逢ふ時は、禁庭の咎めを思ひ、路次までお出迎ひ申せしも、花園ならぬ傾城姿、いつぞや御所の簾の隙、垣間見しその折から、思ひに絕えかね一首の歌。

頼光　その短冊は我れとても、肌身離さず、コレ〳〵

　ト懷中より守り袋と短冊とを出し

「夢にだに見えてもせめて初櫻、君ならずして誰れかわきみん。」

花園　その時あなたの御返歌に「まれだにも聽く鶯の初音さへ、春を待たるゝ思ひなるかな」コレ此やうに、大事にかけて居りますわいなア。

　ト紅葉の枝の短冊を見せる

公時　色をするにも、歌をよむにも、おいらは四六の簾へ上つても、鼻唄も知らねえから、念佛か題目より外にゃらねえ男だ。コレ、女郎の側で使はれる、禿とやら、蕪菜とやら、てめえ知つたやうに、取持ちを、やらかせやらかせ。

照葉　そんならわたしが、あのお客の側へ連れ申しんせう

サア、花魁も來なんしよ。
ト花園姫を突きやる。花園姫恥かしさうに
花園　ア、コレ、自らは
照葉　エ、馬鹿らしい、いつそモウ自烈たいにヨウ。
頼光　ア、コレ、爰ではどうも
花園　叶ひませぬか。
頼光　サア、それは。
〽勅に應じて頼光が、國家の亂れを鎭めん爲、東へ下向の忍びの旅、はや關東には將軍太郎、一揆の企て櫛の齒を、引くが如くに都へ訴へ、すはや大事と聞く時は、かの桝花女より賜はりし、ひやう羽おい羽の二つの矢、らいせふとうの弓携へ、たとへば鬼神變化たりとも、神力應護の射術の程、よつぴき放す矢面に、梢木の葉がちらちら〳〵、花の吹雪か峯の雪、やがて消えゆく殘黨餘類、源氏は榮ゆる盛りの色、心安かれ花園どのと、のたまふお顏うち眺め、それ其やうな勇ましい、そのお話しを聞く度に、嬉しさも又物安し、いとしあなたにそもやそも、なんと別れてゐられうぞ、自らとても共々に、連れてやいのとばかりにて、縋りついたるわりなさに、姿は粹な川竹も、とり亂したる御所育ち、かこち給ふぞ道理なり。
ト花園姫、頼光へ縋りつき、思ひ入れ。公時立ちかゝつて
公時　オヽ、たがよ〳〵。コレ〳〵、小じよく〳〵、お姫の花魁どのが、氣を揉んで癪でも發しては、後で手こずる禿の役だ、てめえ、いゝやうに、介抱しろ〳〵。
照葉　わたしやそんな事は、知りんせんにヨウ。
公時　知りんせんで濟むものか。わりやア禿ぢやないか。コレ、禿々。
〽かむろ〳〵、袖振る禿、派手なとりなり廓育ち、莟みの花もいつしかに、照葉も時の羽子板は、夢の心地と手品よく、ひとごにふたご見事にえ、いとしらしうてなまめきて、花の吹雪に追風や、色香をこめし振りの袖、愛敬こぼれ可愛らし。
ト紅葉の枝を羽子板に見立て、照葉よろしく所作ある
頼光　ヤンヤ〳〵。禿の照葉が今の振り事、ア、面白い事であつた。あの禿の振り事で思ひ出した。廓の道中、そのしこなしを、サア公時、見たいものぢやわいなう。
花園　ほんに仲の町とやらで、傾城の道中姿、外八文字のくり出し歩み。

公時　アヽ。その道中とやら、旅立ちとやらを、この公時が太夫にして

賴光　さしづめ我れらが若い者、姫がその夜の大盡風。

照葉　禿は矢ッ張りわたしかえ。

花園　傾城の道中を

公時　さらばこぢつけ申さうか。

ト清搔になり、公時は女かむりに手拭をかむり、太夫のこなし。照葉附いて、照葉の羽子板を持ち、賴光は長柄をさしかけ、若い者の見得。花園姫は扇を額にあて、大盡のこなし。この人數花道へ行き、しやんと留まる。

〽廓の柳のたをやかに、しやんときりゝと一つ前、小褄をとりが十重八重、けふ九重に匂ひぬる、君が移り香それぞとは、姿たぐひも大盡の、見て見ぬ振りの流し目は、色に仕掛けて此方から、誠を明かす眞實を、疑うてばし下さんすか、これ恨めしい腹が立つ、憎い仕様とばかりにて、叩いつ泣いつ胸づくし、とるもこなたの田舍客、まじめに腹を田作りや、在所でいせきとつん出るは、なか〳〵氣樂で氣散じぢや、そこで年貢をはかるときや、人手をかりて小唄ぶし。

ト花園姫と照葉、手踊り。

〽酒はてんとくさ、何であふるべいていな、やれさてさて、尤もぢや、さすが押へべい、肴が無い、おやゝれ醉うたでおんぢやるさ、いけぬ口舌、おりやくすぐるべいとの、つて〳〵つて〳〵〳〵、このほんかえ、かゝはてんこちないこと忍ぶべいてな、やれさて〳〵尤もぢや、雨かしぐれべいか、如才がない、あやくれおゝさておんぢやるさ、月の曇りなら宵から寢よとの、つて〳〵〳〵つて〳〵、このよいかえ。

トよろしく振り納まる。

公時　こいつは餘ッぽど面白かつた。時に我が君、姫君を傾城に仕立て、此やうにじよなめく所を、胸惡どもに見られては、御身の大事。君には關東へ御下向、姫君にはこれより一先づ、池田のお館へお歸りあつて、御尤もに存じまする。

花園　すりや自らは賴光さまに、逢うたばかりでアノ、爰から都へ。

公時　御歸館あつて然るべう存じまする。

花園　アレ、我が君樣、公時があのやうに云うてぢやわいの。

頼光　イカサマ、公時が申す一條、尤もながら、頼光思ふ仔細あれば、何事もわし任せにコレ、きな／＼と思はぬがよいわいの。コリヤ、公時、それへ出い。

公時　ハア、御用でござりますかな。

頼光　如何にも。其方はこれより直ぐに、其方が出生なしたる高山こそ、西に當つて聳えし峰。いま其方が名に呼んで、公時山と下世話にいふ、彼の深山に分け入つて、母山姥にめぐり逢ひ、頼光問ふべき仔細あれば、在所をもとめ、立歸つてよからう。

公時　すりや、何と仰しやります、母に逢うて參れとかな。

頼光　如何にも。

公時　イヽヤ、そりやア否でござる。なんぼ怪童丸が生れ故郷、伊豆の深山に來ればとて、侍ひになつた公時が、母の隠れ家を尋ねて逢ひに行つたと云はれちやア、卑怯未練とさみされん。殊更平の正盛、花園さまに心を掛け、このあたりに家來をさし越し置くと聞いては、猶々お側は離れられぬ。わしやア行く事は、否だ／＼、否でござるぞ。

頼光　すりや公時は、身が詞に背くか。

公時　サア、全く背きは致さぬが

頼光　我が詞を背かずば、かの深山へ立越え、ほのかに聞いたる朝敵の、黨に組みなす山賊野武士、山谷に忍びある由、母の在所をもとむる次手、彼れらが詮議を致して參れ。

公時　アヽ、そんなら母の在所を尋ねた上、君に敵たふ謀叛の奴ら、深山に隠れ忍ぶゆゑ、その詮議と仰しやるか面白し／＼、母の便りは兎も角も、山家に忍ぶ惡黨めら、一々首を引ッこ抜き、お土産に仕らう。コレ、禿とやら公時が行つた跡は、旦那のお側で御用を聞けよ。

照葉　アイ、氣遣ひなしに行きなんしよ。

公時　これからちよつと一走り、おれが名に呼ぶ公時山、雲霧聳えたあの嶮岨。

へ主命もだしがたけれと、山道岩角踏みしだき、難所惡所も故郷ぞと、霧立ちのぼる高山へ、母の便りと公時は、勇む心をおし隠し、慕ひ行くこそ殊勝なれ。

ト かけりにて、公時思ひ入れあつて向うへ入る。

頼光　サア、これからは公時は居らず、心に思ふあらましを、これにて聞きたいものなれど、云ひ號けばかりにて、輿入れもなき花園どのに、心のたけをつもらるゝも如何。これより別れてあの都へ、立歸つて下されぬか。

花園　エヽ、お胴慾な我が君様、あなたを焦れ慕へばこそ、君傾城に姿を變へ、これまでお跡を慕ひしに、此まゝ館へ歸れとは、モシ、そりやお情ない、賴光さま。

〽そもやあなたを垣間見し、桃の節會のその夜さは、ほんに朧ろ月の影、好いた水干直垂れの、衣紋をつくし美をつくし、脇目もふらず驕振りに、迷ふわたしが心根を、推してたべと寄り添ふを、禿照葉がかい取つて、エヽコレ花魁そのやうな、廓口說きがあるかいな、口舌は野暮と兩方を、丸う納める氣轉きゝ、茶屋の迎ひの來ぬうちに、それ／＼早うとすゝめられ、ついそれなりに仲直り、互ひに顏を三つ蒲團、わりなき床のむつの花、廓の戀路やつもるらん。

トこの文句にて、照葉は二人を取持つ振りあつて、トド花園姫を賴光へ突きやる。これにて兩人思ひ入れあつて寄り添ふ時の太鼓になり、向うより丹波太郎鬼住、上下、高股立ちにて、仕丁四人を從へ、鋲打ちの女乘り物を擔ぎ、足早に出て來り、直ぐに舞臺へ來て

鬼住　花園姫のお迎ひ。

ト扣へる。賴光見て

賴光　ヤア、其方は丹波太郎鬼住、よくぞ在所を存じたり。して、都よりの迎ひなるか。

鬼住　賴光公には朝敵の輩、誅伐のため關東へ、御下向と承り、池田の息女花園姫、姿を變へて同じ東へ、忍びの旅路心許なく、まつた御大切の御身にて、不義の疑ひかゝる時は、互ひにお家の大事と申し、世の人口を思ふゆゑ、晝夜を急ぎ只今到着。イザ、姫君にはこれより直ぐに早々御歸館あられませう。

花園　すりや、自らはこれより直ぐに、アノ都へ

鬼住　サア、お乘り物へ。

ト駕籠をよき所へ直す。

賴光　父君よりの迎ひとあれば、違背あつては不孝といひ、賴光の身に後日のお咎め。迎ひの輿を幸ひに、姫には一先づ都の館へ。

花園　それぢやというて折角に、尋ね逢うた甲斐もなう、どうマアあなたへお別れ申して。わたしやあなたのお供して、いづくへなりとも。

ト立ち寄るを、鬼住制して

鬼住　ハテ、それでは戀しう思し召す、賴光さまの御身の不爲。

花園　そんなら此まゝ自害して

ト鬼住が刀へ手をかけ、自害せんとする。鬼住立廻つて留めるはずみに、懐中より密書を落す。

鬼住　お聞分けなき姫君様、拙者がお供するからは、何しに悪しく仕らん。承引あつて、お館へ。

頼光　太郎に任せて何事も

花園　そんならお別れ申しまする。必らず共にお變りなう

頼光　やがて迎ひを遣はすぞよ。

花園　それ楽しみに

鬼住　急ぎの御歸館。憚りながら女の童も、御乗り物へ。

頼光　花園どの

花園　我が君様

鬼住　イザお立ちあられませう。

〽いざ御立ちと鬼住は、姫の供して一散に、旅宿へこそは。

ト花園姫照葉、乘り物へ入る。鬼住、仕丁に目くばせし、乗り物を舁き上げ、一散に向うへ入る。頼光殘つて

頼光　ハテ、返す／＼も、不便な姫が心根ぢやよなア。

ト時の鐘。この時落ちてある密書を見附け拾ひ取り

ハテ／＼「鬼住へ、辰夜叉より」……ハテ心得ぬこの書狀、ナニ／＼「兼ねて申し越し置いたる花園姫こと、頼光が色香に迷ひ、關東へ下りしとの條、急ぎ彼の地へ赴き、姫を都へ連れ來り、花山院へ隱し置き、まつた側仕への女の童こそ、懐仁君に疑ひなし、其方連れ來るに於ては、恩賞たるべし、月日」……さてこそ太郎鬼住は、辰夜叉よりの廻し者であつたるか。さうとは知らず花園姫を。ホ、ホイ。

ト當惑の思ひ入れ。山颪しになり、向うより鬼住、大わらはにて一散に駈け戻り、本舞臺へ來り、大息ついて

鬼住　ヤア、我が君これに御座ありしか。花園姫の御身の大事、出來いたしてござりまする。

頼光　ナニ大事とは、してその樣子は。

鬼住　只今姫をお供なし、歸館の道は嵯峨川より、並木にかゝる繩手にて、俄に山手に風起り、黒雲一むら見ゆると其まゝ、異形の變化現はれ出で、姫の乗り物奪ひ取り、跡をくらまし消え失せしは、鬼神の仕業に疑ひなし、手がゝりとても變化の業、面目もなき身の越度、申し譯には拙者が一命

頼光　斷つとも姫が在所知れんや。コリヤ、氣遣ひ致すな

その手がゝりは知れてある。
鬼住　ナニ、手がゝりがござるとな。
頼光　即ちこれに。
ト密書を投げやる。鬼住取つて、ギツリりして
鬼住　ヤ、こりやコレ、どうー
頼光　うろたゆるな太郎鬼住、最前汝が懐中より、落し置いたる悪事の密書、辰夜叉御前に頼まれて、姫を花山の古御所へ、虜になしたであらうがな。かゝる證據が手に入る頼光、未だ武運に盡きざるしるし。サア、眞直に白状いたせ。
鬼住　さういふ密書をウカ〳〵と、落し置いたはこの身の誤まり、如何にも頼まれ花園は、辰夜叉御前へ渡したり、この上は頼光どの、こなたの御首申し受ける。兩人、ソリヤ。
鷲峯 熊武　心得ました。……頼光、動くな。
ト物蔭より熊武、鷲峯出て、頼光を取卷き
熊武　鬼住どのに頼まれて、間者に入り込む御嶽の熊武。
鷲峯　御嶽の鷲峯兩人が、附け廻したる頼光どの。
熊武　おいらに首を
兩人　渡さつしやい。

頼光　小癪なる匹夫が一言、速かにそこ退ゝまいか。
鬼住　ぬかるな兩人、合點か。
兩人　心得ました。……頼光、捕つた。
ト梅の花槍を押ツ取り、突いてかゝる。頼光立廻りあつて
頼光　すりや、どうあつても
鬼住　梅の花槍花やかに、命を鳥毛に引替へて
頼光　振つて振り込む梅ケ枝の
熊武　槍はちよん〳〵
鷲峯　女郎衆に持たせて
鬼住　ソリヤ。
ト立廻りよろしくあつて
皆々　よいやさ。
〽行列揃へてお國入り、對の道具に大笠、伊達笠、先箱、蓑箱、褄折りの、打ち物並びしお供の大きさ、陸尺六人徒歩四人、手を振る押へは腰を振る、殿さゆらりとお馬の手綱を斜に構へ、道はたゞぼゝかつくりそつくり、見事な花槍へ八重一重咲く梅ケ枝に鶯の、花を散らさで來啼くは憎や、今宵しつぼり逢ふ宿梅と、その約束はありながら、花を散らすは憎てらし、ほんに思へばさうかい

な、花の嵐の山路かな。

ト頼光、熊武と鷲峯を見事に投げのけ、鬼仕切つてかかるを、花々しく所作あつて、トゞ四人、向う正面の二重舞臺へ上り、キッと見得。カケリ、山颪しになり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、茅葺きに伊豫簾をかけたる屋體。竹簀、大木の松、すべて足柄山奥の景色。矢張り太夫連中上の方に居並び、この道具納まる。

ト合ひ方にて、淨瑠璃の前彈きにかゝる。

〽登り〳〵たる高山、いづれの時にか盡きん、先はいづくに生ひ茂る、樹木の嵐山彥の、音にたぐへて物凄き、峯より峯に白雲の〽大薩摩がかり かゝる所へ向うより、登る坂田の公時は

トこの文句切れると、花やかなる鳴り物になり、花道より公時、羽織衣裳、大小にて、紅葉の枝に酒樽と大杯を結び附け、これを引ッ擔ぎ出る。よき所へ留まる。

〽紅葉照り添ふ顏の色、酒も山々谷々を、踊に覺えの大丈夫、あぶない〽浮れに唄の出放題、樣と時々醉うた醉うた千鳥足、斯の猩々もかくやとばかり、笑ひ戲むれ來りける。

公時 ヤレ〳〵、久し振りで親里へ、歸りしんざん幽谷も、嬉しさにツイ打忘れ、やら〳〵と爰までは來たが、慥かにそれと

トあたりを見て思ひ入れあつて

ウ、、、、爰だ〳〵、この山中の一つ家といひ、目當ては違はぬあの松の樹。さりながら、滅多にも入られまい。……頼みませう、頼みませう。

ト内にて

山姥 遠近の、たつきも知らぬこの山中、松吹く風の音信より、とふ人稀れなる我が住家へ、案內乞ふは、誰れ人なるや。

〽柴の戸の、跡見ゆばかり枝折りせよ、忘れぬ人のかりにこそ、訪ふも嬉しと立ち出づる。

トこの文句のうちキッカケにて、屋體の簾を卷き上げる。この内に山姥、白無垢の振り袖、蔦の模樣を縫はせたるさゞげ附きの衣裳、さら毛の好みの鬘、若き山姥の拵らへにて

〽姿は若き振り袖に、結ぶ親子の緣の絲、賤の苧環くりよせて、裾もまとふや蔦かつら、步む巖の門の口。

坂東三津五郎の公時　　中村福助の山姥

（羽衣會所演の舞臺面）

トこの文句にて山姥、二重を下り來て、門口にて兩人顏見合せ

山姥　其方は怪童丸ぢやないか。

公時　母樣。

山姥　快童丸、マア、よう來てたもつたのう。マア〱、此方へ入りや。

公時　アイ、やう〱尋ねて來ました。

ト兩人平舞臺へ來る。

山姥　ほんにマア、大きうなりやつた。そしてマア、きつい肥りやうぢや。酒を飲みやるかや。

公時　アイ、あんまり飲みませぬが、一升や二升ぐらゐは、朝のうちに飲みました。酒といへば、幸ひ持つて來た酒、御免なされまし、一杯たべませう。ドリヤ。

〽遠慮會釋もなみ〱と、大杯の續け飲み、紅を奪ふや蔦紅葉、重ね〱て足る事も、知らぬ上戸に見えにけり。

トこの文句のうち何杯も重ねて飲む。だん〱醉うたることなし。

山姥　其やうに酒のんでもよい、のかえ……見れば、旅支度も無う、都三界からこの東へ、下りやつた譯はどうぢや。この母はどうも合點がゆかぬ。

公時　エ、、、、ナナなんでござります、アノ、今日爰へ參つたこの形が、ハ、、、、こりや尤も。さらばお聞かせ申さうか。拙者儀は只今にては、源の頼光の家臣、坂田兵庫之助公時。

山姥　ハテ、立派な侍ひになりやつたの。嬉しい〱。

公時　エ、有り難いね、お喜びかえ。この度主君には、關東へ忍びの御下向、その御供を仰せ附けられた。なんと解りましたか。ハ、、、、。

山姥　そんならアノ其方は、頼光さまのお供して來やつたのかいなう。

公時　サア、爰に一つの曰くがござるて。將門が餘類の奴ら、謀叛を起すとの事。いやな奴ね。此奴らを詮議のため、又、何萬騎押し寄せても、この公時がお供すれば、たゞ醉つて申すのではないが、イヤ醉つて云ふぢやアないが、氣遣ひのキの字もない。もしこの山奥に隱れ住むかと、尋ねる次手に、母に對面して參れとの事、有り難えね。ハ、、、、、所で參つた。よしかえ〱。えいか。ア、、もう一杯飲まう。樽底叩く舌鼓だ。

山姥　オ、、それ聞いて落ち着いたわいのう。小さい時か

ら人に勝れたれど、この氣まゝ我まゝ者、もし御主人樣のお氣にばし逢うて戻りやつたかと、ほんに大抵案じた事ではないが、それなれば嬉しいわいの。

公時　モシ／＼、この公時には父親もなく、生れた所も知れぬと云ふ奴があるが、マア第一外聞が惡い。親の名は何といひました。

山姥　其方の父御は、坂田の藏人時行どのというて、元は禁裏北面の侍ひ。この妾が身の上も、云はねば詳しう知らぬ筈、恥かしい事ながら、都九條の里に、八重桐というて流れの身。

〽夜な／＼通ふ川竹の、憂き節しげき中々に、そも突き出しのその日より、初めて一座の御見の時、どう云ひかけたらよからうと、心に袖を敷妙の、枕の床の睦言は、思ひの外にあちらから、嬉しい事の數々が、積る三年の其うちに、あそこの樣子、爰の茶屋、面白さうに話しても、居やしやんしたと聞く時は、はや癇癪の胸づくし、鷄の鳴くまでこれ男。

公時　なんだ。

山姥　エヽ、なんぢやとはアノ、まざ／＼しい顏わいなう。

〽今日はとりわけ朝早う、ござんす筈ぢやないかいな、その約束もどこへやら、外に浮氣なお前とは、知らずわたしは朝夕に、思ひ出すとはまだな事、忘るゝ隙のないゆゑに、客の座敷も上の空、背中合せて聽く時鳥、ないて明かしてゐるものを、あんまりむごいとばかりにてつめる痕さへ紫の、ゆかりの色も恥かしや。

ト振りあつて公時を抓る。

公時　オヽ痛え／＼／＼。もう／＼それで譯が知れました。そんな生ぬるい事はよしにして

ト云ひながら山姥の振り袖をヂロ／＼見て

まだ解らねえ事もある。お前の顏かたち、昔より若くなつて花やかな形恰好、どうも合點がゆかねえ。……ムウかの太郎樣のおかみさまか。

山姥　エヽ、何云やる。其やうにこの母の、姿が何で

公時　何でどころか、振り袖を着てゐる山姥が、錦繪にもあるものか。

山姥　そんならこの姿が、其方は心得ぬと云やるのか。

公時　そればかりぢやアござりませぬ、どういふ譯だと、御見物樣方もサ。

山姥　成る程、合點のゆかぬは尤も。母がこの有樣、そんなら云うて聞かさうかいなう。

〽そも足柄の山住ひ、木の實につなぐ玉の緒の、あるかなきかの命さへ、自然と長き仙術に、その面影は變らねど、夜晝わかぬ山姥の、四季折々の眺めには、春は梢に花の振り袖、夏は涼しき蟬の羽衣、秋は冴えゆく月に浮れこ、夜すがら明かす山めぐり、冬は深山に雪の振り袖、邪正一如と見る時は、柳の緑

山姥　花は紅ゐのいろ〳〵。

〽狂言綺語の戯れも、讃佛乘の因ぞかし。

公時　ムウ、それで譯が知れました。そんならお前は、山姥とやらにならしやつたか。アノお前が

ト公時泣き出す。

山姥　コレ〳〵、何が悲しうて其やうに泣くぞ。

公時　おらア山姥ぢやア否だ〳〵。

ト足摺りして又泣く。

山姥　これさ、よい子ぢや、泣くな〳〵。ドレ、鼻かんでやりませう。サア、ちんと云や〳〵。

ト鼻をかんでやり

オヽ、よい子になつた。サア〳〵、何ぞうま〳〵貰うてやりたいが、山中の事なれば自由にならぬ。木の實さへなき冬籠り。

公時　コレ、母樣。

山姥　オヽ、何ぢや。

公時　乳呑まう。

山姥　オヽ、この子とした事が、泣かずば褒美に乳呑まさう。

ト思ひ入れあつて

サア〳〵、もうよい。必らず駄々を云ふまいぞや。過ぎし頃、其方に別れてより、獨り住みの淋しさに、跡に殘りし持ち遊び箱、其方と思うて明暮れに、大事にして、これ爰に。

ト箱の中より、竹に入れたる蝶、太鼓、鼓、鬼の面をだん〳〵に取出し

〽蝶よ花よと寵愛に、蝶々とまれや菜の葉にとまれ、そりやとまつた、でん〳〵太鼓は嵐の音、鼓は瀧野屋音に聞く、めぐり近江や湖水は、富士を產み出す親と子と、眺めにあかぬ持ち遊び、箱に散り敷く紅葉ぼや、松の木蔭に隱れんぼ、怖い顏する鬼の面、欲しかサアやろサア取つて見やれ〳〵、子を取り子取り、どの子が目つき、あの子を呼んで、おまんに抱かしよ、あの子どこの子、いたいけな事云うた、殿御が欲しいと唄うた、そもさて

も和御寮は、誰れ人の子なれば、定家がつらか離れがたや
なう、舟端に乘せて神崎へ、てもさても和御寮は、踊り
手が見たいか、踊り手が見たくば、北嵯峨へ、お下りやれ
の、對の帷子をしやんと着て、踊る振りが面白や、餘念
他愛もねん〳〵ねんよ、明日はとうからおひになれ〳〵
宵の過ぎたる醉ひこゝろ、しばしは時も移すらん。
ト公時樣子取つて肱枕の風情あるべし。薄ドロ〳〵に
なり

山姥　うたゝ寢して、風ひくまいぞや。
〽折から谷峯動搖して、どつと吹きくる風につれ、不思
議や今まで綾かと見えし袖袂、木の葉衣も破れはてし、
山姥とこそなりにけり。

公時　さては誠の姿を現はし、我れを諫めん御所存なるか。
〽眞如の月も澄みわたる、親子のきづなにからまれし
と、人の譏りも恥かしく、我れは元より山樵の、山路を
通ふ花の蔭、休む重荷に肩をかし、月もろともに山を出
で、里まで送る時もあり、又ある時は山めぐり。法性の
峰に登りては、上求菩提の道に出で。

山姥　無明の谷深く下りては
〽下化衆生を許して金輪際に至れり、たま〳〵逢ひし暖う
の女は
〽たゞ鬼女とのみ恐るれど
〽人を助くる業をのみ、これ山姥がつとめなれ〽一世の
對面これ限り、とはいふものゝこれがマア、名殘惜しや
いとほしや、離れ難なや此方寄れと、幼き者に云ふ如く、
涙の雨や瀧津瀬の、淵に水をやまさるらん。斯くてはあ
らじと立ち上り
ア、我れながら未練なり。如何に公時、今にも謀叛の
者あらば、討ち亡ぼすべき手段あるや。

公時　ハア、仰せにや及ぶべき
〽かねて謀叛の聞えある、相馬の太郎良門なんど、何萬
騎にて寄るとても、いひ甲斐もなき葉武者のともがら、
もし大軍にて押し寄せなば、君を守護なし討つて出で、
馬の蹄にかけぬけて　近附く奴原かい摑み、かき首ねぢ
首人つぶて、落花微塵に折り散らさん、コレ〳〵コレ、
氣遣ひあるな、名を萬天に上げんものと、勇みに勇む有
樣は、健氣にもまた勇ましき。

山姥　オヽ、頼もしゝ〳〵。その心を聞くからは、母が思
ひも晴れ渡り、身は雲水の山姥と
ウタヒ〽暇申して歸る山路の〽鬼女が有樣、見よや〳〵と

峰より峰、呼ぶは谺か輪回を離れぬ親と子の、妄執の雲の
ト此うち山姥は舞かゝりになり、公時の止むる袖を振り拂ふ風情あるべし。
へ晴れるは白旗、源氏の榮え、賑はふ人の足柄山、山又山に山めぐり、山又山に山めぐりして、行くへも知れずになりけり。
トどろ／＼にて、上より練りの雲下りて山姥を隱す。この時下座より丸市、狼の縫ひぐるみ、牙平は猪の縫ひぐるみ、熊藏は熊の縫ひぐるみ、六平は猿の縫ひぐるみ、いづれも一對の形にて出て來て、公時にかゝる。公時見事に投げる。皆々起き上がり、縫ひぐるみの面を取つて見得よく居並び

四人　動くな。

公時　こりやアうぬ等は何奴だ。

丸市　何奴とは知れた事、山賊夜盜を渡世にして、この足柄山ごもり、狼の丸市とはおれが事だ。形は瘦せても口は叉、耳まで酒も呑み仲間、うぬをメめ子の兎にしろと、猪熊どのに賴まれた、しかも四人の頭分。

牙平　牡丹といへば看板に、僞りのねえ吸ひ物の、一杯くはせたこの獸物、誠を噓に鐵砲の、あたる程猶荒れ出して、岩をも突き拔く猪牙平。

熊藏　苦いは熊の膽黑丸ず、指で丸めて公時でも、只一呑みと受け合つた、褒美の金の山割りを、取らうと思ひ月の輪熊藏。

六平　盜人仲間に手の長い、猿とは猿猴遠方から、木挽町まではる／＼と、谷の淸水か瀧野屋の、跡にちよつくり栗藏が、柿の蔕でも蜜柑でも、仲間に入つた小猿の六平。

丸市　おいらが目先へかゝつちやア、もう百年目と觀念して、サア尋常に腕

四人　廻せエ、。

公時　ハ、、、、、、、こいつらは大きな聲で、遠吠をしやアがる。畜生の皮をかむつた、四足に近え山賊めら、一疋づつは面倒だ、どいつも一度に、來い／＼／＼。

ト誂らへの鳴り物になり、よろしく立廻りあつて、トゝ四人「ドッコイ」と留まる。山姥、いつもの鉢卷、木の葉の姿、蔦の搦みし梅の枝を持ち、ふり出しにて松の上に現はれ

山姥　猶々行く末守るべし。

公時　ハア、有り難やなア。

へ盡きせぬ色に常磐津の、松の梢に有り難や、千代萬世

と河原崎、親も親なり子も子なり、天晴れ稀代の若者なりと、貴賤上下おしなべて、感ぜぬ者こそなかりけり。

トよろしくあつて、段切り打上げる。片シャギリにて、

幕

雪振袖山姥（終）

道行四季のながめ ——蔦の精

京坂の所作事の例として、この一篇を挿入して置く。舞踊方面では京坂は江戸に比べて發達が遲かつた。人形淨瑠璃に習つて、長い狂言の中には、大抵一幕の景事は入つてはゐたが、古い所では大抵宮薗、文化文政へくると江戸唄といつて、長唄も常磐津も富本も引つくるめて一つの曲としたやうなものを地としてゐたので、大抵道行にきまつてゐて、拍子本位の輕妙な踊なぞは見られなかつた。稀れには江戸から太夫の上つた事もあるが、大抵江戸役者に附屬して行つたもので、大抵はこの曲のやうなものだと思へば間違ひはない。この道行は寛政六年の一月、大坂角の芝居へ書きおろした「けいせい青陽鶏」といふ狂言の六ツ目で、作者は辰岡萬作である。この狂言は宇都の宮釣天井を豊臣時代へ持込んだ有名な狂言で、馬切りの場は今に殘つてゐる程だが、その中に「大久保武藏鐙」の五色の蔦の一件を持込み、本場の蔦の精を出したので、この場の園菊は序幕では唐の女で、瀬川采女を慕つて日本へ渡り、傾城になるといふ趣向。この二人が地理の一卷紛失の爲、都落ちをした道行なのである。地は、宮古路世里太夫に宮古路二尾太夫、三味線は岸むら兵輔、一挺二枚といふ淋しいものである。役割は、采女が中山楯藏、園菊が中村のしほ、蔦の精は嵐小六、この小六は京坂での踊り手だつた。

道行四季のながめ（蔦の精）

宇都の山の場

役名＝瀬川采女。傾城園菊。賤の女、照葉實ハ蔦の精。

宮古路連中

造り物、一面の山、小高きところに見事なる松。上より吊り枝、蔦かつらしげく、うち二筋は早房にて谷へ落ちる仕掛け、花道鳥屋際より兩方、菜種畑、舞臺端しからみ、菖蒲杜若の盛り。上の方太夫座、幕明けると雪降る。すべて四季の景色取合せよろしくあるべし。采女・園菊萬歳の姿にて出る。

〽徳若に御萬歳と、御代も榮えましんます、愛敬ありける新玉の、年立かへる朝より、水も若やぎ木の芽も咲き榮えけるは、誠にめでたきこの御代、何とて沈む戀の淵、瀬川采女は園菊に、思ひ重ねし旅ごろも、はる〳〵爰に八つ橋の、昔の跡に袖濡れて、甲斐なき三河萬歳と、姿形に二世三世、相性いらぬ好いた同士、いとし男といつまでも、離れぬ願ひ掛川や、清き流れに岩清水、弓矢の神といふ島田、つとにぞ早くおき出で、世との嵐や蘆屋の里、來てこそ見たれ烏帽子山、麓の野へは秋の原霞が中の櫻花、卯の花あやめ六つの花、ちり〳〵ぱつと散る風情、四季も一目に見る夢の、ア、浮き世ぢやなア、行き〳〵て、駿河の國に到り、我が到らんとする道は、

采女　楓しげり合ひ、いと暗うして、すゞろなる目を見方にまで

〽見せる辛さと引寄せて、ゆふしも結ぶ蔦の葉に、露し涙もおき添ふる、ほんに不思議な二人がえに、、唐で見初めて日の本で、枕かはした恥かしさ、そちや唐人の胤なれども、和國で生れそして又、人となりしは唐ころも、着つゝ馴れにしお前を慕ひ、又もこの地へ返り咲き、名も園菊と突出しより、外では解かぬ二重帶、二人が仲を隔て垣、いひさかれたる法界の、悋氣も何の儘の皮、船にしかられ、禿にまで、氣がねするのも逢ひたさの、琴三味線で、峰崎さんや中川さんが、彈き唄はんとた何

ちやぞえ、この世はおろか盡未來、手を引き合うて行く奈落、底の底まで必ずえ、見捨さんすな見捨てじと、しげる道草踏み分けて、おふさきるさの旅人に、咎められじと立ならひ、有り難かりける秋津洲の、國民榮ゆる繁昌の、商ひ神は蛭子三郎、誕生ましますその時に、何だか熱湯を口から出し、はつたか口よりぬる湯を出し、産湯をひかせ奉り、錦が千反、俵が千反、金襴緞子の産着をめさせ、天の岩戸はあし分けの、くりゝ／＼ぐりゝぐりくる／＼船に乘せ奉り、海を譲りに受取り給ひ、西の宮の戎御前、命長棹いともかしこに釣り針おろし、おらめで鯛を、釣り／＼釣つた姿の、やれしほらしや、唄ひおどけに舞ひ納む。

ト橋がゝりより、代官大場、捕り手出で

代官　ソリヤ。

捕手　動くな。

ト兩人を取卷く。

采女　我れ／＼は三河萬歳、何ゆゑのこの狼藉。

代官　ヤア、吐かすまい。宿々に忍びを置き、采女園菊と慥かに見屆け、附け出した。物な云はせそ、打つて取れ

ト　これより采女タテになり、皆々を追ひ散らし、園菊を連れ、行かうとする。方々にて、アリヤ／＼と云ふ

采女　はや東西を圍まれたれば、行くへなし。……園菊、あの蔦かつらを力草に、思ひ切つて谷底へ。

園菊　合點でござんす。

ト兩人、岩臺へ上がり、かつらに取附き、かゝる捕り手を切り、園菊、早房にて谷底へ飛び込む。采女も飛び込む。始終雪降るト、返し道具。

造り物、奥深に宇都の山の體。松蔦かつら澤山にあり。上手の太夫座廻ると、藁葺きの庵になり、よき所に岩石、これに松蟲の鉦三つ並べてあり。眞中に竹の簀戸、この際に采女園菊谷底へ落ちたる見得にて、簀戸ともにセリ上がる。

采女　さて／＼、ひやいな事であつた。其方に怪我はなかつたか。

園菊　イヽエ、氣遣ひして下さんすな。さりながら、日は暮れる、行先き知れぬこの山中。

采女　さればいの、微かに見えし灯影を力に、たどり附いたこの一つ家、どうぞ寄宿を頼んで見よう。

ト戸より入り

率爾ながら、ちとお頼み申したい。我れ〳〵は旅の者、
道に踏み迷ひ、難儀いたしまする。
園菊　苦しうなくば、どうぞ一夜を、明かさせて下さりま
せ。
両人　申し、申し。
照葉　旅人の、道に迷ひ給へるとかや。さぞ便なくも思す
らん。
ト庵の内より
ウタヒ〽實に我が身も便りなき、浮世に秋の色見えて、あ
さげの風は身に沁めども、胸を休むる事もなく、あら定
めなの生涯やな。
トこの道の間に、照葉、好みの形にて庵より出て
照葉　人里遠きこの庵、月影ならぬ闇の内、如何でお宿
を申すべき。
采女　よしや旅寝の草枕、今宵ばかりの假り寝せん。
園菊　只々宿をかし給へ。
照葉　流石思へばいたはしや。とく〳〵御入り候ふべし。
ウタヒ〽扉を開き招ずれば、草の庵にせはしなき、旅寝の
床ぞ物憂さよ。
ト二人を伴ひ、上座へ招じ、照葉よき所へ坐る。

采女　無禮なる申し事、お聞き入れ下され、忝なう存じま
する。
園菊　お嬉しう存じます。
照葉　イヤサ、不自由さへ御合點なら、いつまでも御逗留
は苦しからず。
采女　イヤナニ、御亭女、あれなる石の上に、鉦鼓を三つ
置かれしは、如何なる仔細。
照葉　あれこそ鉦鼓三羽とて、三つを拜する事の候ふ。
采女　してその三つとは。
照葉　日月星の三光。
園菊　神道にては
照葉　三社の託宣。
采女　さて、佛道にては
照葉　三尊佛、利益を祈るその爲に、三つの鉦鼓を朝夕に、
うつの山邊の賤の女も、打ちくつろいで
采女　お互ひに
照葉　夜とともお話し
三人　申しませう。
采女　さて又、この所を宇都の山と申すいはれ。それはし
ばしば聞き傳へた事もござりますれど、所の御方なれ

ば、猶〻詳しいお物語り。

園菊　我れ〳〵が家土産に、承りたう存じまする。

照葉　イカサマ、旅泊のお眠りさまし、あら〳〵語り申すべし。

ト、トモロの囃子になり、チョン〳〵にて後の山、東西へ引かるゝ、出囃子大勢、屋體ともにセリ出す。采女、下へ廻る。照葉、眞中にしやんと構へる。

そもこの山を宇都の山と名けし事は、そのかみ景行天皇の御子、日本武尊、そも〳〵賊徒を亡ぼせと、その神勅に、近江路や

へ瀬田の高橋踏み鳴らす、駒の足なみカッシ〳〵、勝つ色見する秋の山、木木の梢も紅葉して、なくや男鹿の妻戀ふる、聲にもつれてきり〴〵す、つゞれさせてふ啼く暮れに、萩の上風吹きそひて、同じうつりに置く露を、こぼしもやらぬ俤は、さながら秋の小夜なりと、冴えゆく月の鏡山、光りを磨、湖も、越えて戀ひとてあれ夕月の、窄いで夜寒に鳴海潟、宿にころりは岡崎女郎衆、池鯉鮒の市藏ぢやないかの、おろしませんかいの、休まんせ泊りぢやないか泊らんせ、午の刻だがうぬが目にや見えないか、ほてつ腹め、なぶりくさるかどう〳〵〳〵

どうぞいの〳〵、道中早めて、おじやれ寐にとつて解へ前垂れの、赤坂吉田白須賀ちよいと越えて新居今ぎれ、船に召せ〳〵ヤッシッシ〳〵シッ〳〵〳〵、蛤召さんか蛤々、遠州濱松は廣いやうで狹い、横に車がヤンレヤレ、こりや一町も二町も三町も四町も五町も六町も七町も八町も九町も十町も、横に車が二挺立たぬ、よいわいなよいやな、曳馬の里とその昔、夕ばえ山の村時雨、濡れて澤渡る雁金の、落つるへいさん、ひやう〳〵と、汐の干潟は入海の、濱名の橋はこれかとよ、小夜の中山八町鐘甲乙しどろに拍子をかしく打ち鳴らし。夢になりとも、逢ひたや見たや、夢になりとも、夢に浮き名はさんさよも立たじ、よしなや、さしやのそれがあぢぢやいな、浮き世ぢやの、それがあぢぢやいな、よそには何と菊川や、ぱつと浮名の散るや櫻の里過ぎて、流れ名高き大井川、先き〳〵と咲きかゞり、藤枝岡部所々の名物買うておあし、つく〳〵手鞠、この一イ二ウ三イよ、府中江尻に末とん〳〵、とんと打つたる雄松浪、三保の松原、むら立ちくる敵の勢ひ、射かくる矢先きバラ〳〵〳〵、打たんは神力擁護の太刀、逃ぐるを追うて武藏野や、敵の大勢火を放つ、時に帝のお腰の太刀、忽ちひとり拔け出

初演當時の繪番附

で、燃えくる炎、かるたせや、これ草薙の御劍、鞘に納まる御代太平、荒き夷をやす〳〵と、宇都の山とはこの時より、名け初めたる事ぞやと、今見る如く語りける。

照葉　それより帝に白鳥と化し給ひ、一つの蔦かづらを貯へ、この谷へ落し給ふ。それより世にひろがりて、茂り合うたる蔦の細道。

釆女　それゆゑにこそ、蔦といふ字は草からに

園菊　鳥と書きしは實に理り。

釆女　かゝる詳しき物語り、

園菊　覺えてござるは故あるお方

釆女　お名がゆかしう

兩人　存じまする。

ウタ〽何をか包み參らせん。

照葉　御身の母君、この山に名にある蔦をめで給ひ、唐土までも携へて、誠に上なき御寵愛、惠みにほこる蔦かづら。

〽その精靈にありけるぞや。

計らざりしに情けなや、兄帝の逆鱗にて、切り枯らされんとしたりしを、御身に代へての園菊さま、助け給はるその大恩、返さんものとそれよりは、御身に附添ひ奉りいつぞや御室の御所に於て、陸尺女の姿と化して、奪ひ返せし地理の卷、五色の蔦。

ト二品を園菊に渡し

再び御手に返す上は、これまでなりや、早おさらば。

〽夢か現か宇都の山の、その蔦かづら果敢なくも、形うもれて失せにけり。

ウタヒ〽うせにけり。

ト大ドロ〳〵にて、切り穴へセリ下ろす。

釆女　受けし恩義を返さんと、蔦の精靈顯はれしは

園菊　この二品を我れ〳〵に、渡さん爲で

兩人　あつたよなア。

ト捕り手大勢、凛々しき形にて、槍にて二人を圍み

捕手　動くな。

釆女　小癪な奴ばら。漂泊しても瀬川釆女、ならば手柄に突きとめい。

ト面白き合ひ方にて、槍のタテいろ〳〵あつて、兩人危ふくなるところへ、上より蔦のまとひし松の吊り枝トンと下りて兩人を隱す、捕手、ウロ〳〵して

捕手　どこへうせた。なんでもこの中

皆々　合點ぢや。

ト双方より槍を入れて、蔦かつらを突くと、大ドロドロにて、吊り枝の中より照葉、好みの形、凄き拵へにて、半身現はし出で、睨む。皆々驚く。松引き上げると、照葉立ち身にて印を結び、捕り手を悩ます。皆々空を突いたり、ひとりでに返つたり、いろ／＼あり。始終ドロ／＼。ト照葉、皆々を引寄せ、キッと見得になると、チョン／＼にて浪幕を切つて落す。見事なる岩、岩幕に添うてセリ上る。西の方に藁葺きの東屋をセリ上げる。この中に采女、園菊、旅姿にて、菅笠にて顔を隠し寝てゐる見得。夜明けの鐘鳴る。上手の庵まはると、元の太夫座になる。

〽梅吹きおろす朝あらし、ふつと目覚めて起き上がり。

采女　行き暮れて、この處にまどろむうち、不思議の夢。

園菊　そんならお前も

采女　其方も見たか。

園菊　二人一緒に同じ夢。

采女　蔦の精靈顯はれ出で、慥かに地理の一巻を

ト側にある一巻を見附ける。園菊は蔦を取り

園菊　五色の蔦、現在こゝにあるからは

采女　すりや、正夢であつたよな。

兩人　エヽ、忝ない。

園菊　二品が手に入るからは、これより都へ引返し

采女　身の云ひ譯も……園菊、おぢや。

〽さア／＼早くと打連れて、出づる朝日ともろともに、都の空へと。

ト文句のうち、岩の間より綟子張りの朝日を筋かひにセリ出す。

兩人花道へ行く。

幕

道行四季のながめ（終り）

弓張月の
射るにまかせて

神樂諷雲井曲毬 ――どんつく

弘化三年正月、市村座に書きおろした、風俗描寫舞踊の一で、三世櫻田治助の作、彼れが得意な物の一つで、太神樂といふ春の景物を捕まへ、どんつくといふ所作には珍らしい役をあしらつた爲、非常に歡迎されて今に殘つてゐる。初演の折は、この前に賴政鵺退治の場があつて、それから居所替りで、この踊になつたので、名題の角書にその意を籠めてある。田舍者の荷持ちを使つたのは、演者の歌右衞門の下男に、この通りの田舍者があつたので、それをモデルに使つたのださうである。度々上演されてゐるが、その時々の俳優の都合で、太神樂以外の人々は、上演の都度違ふのが例で、從つて常磐津の詞章にも增減がある。爰へ出したのは初演のものである。この時の常磐津は文字太夫は式佐、振附は西川巳之助、役割は、元太夫が十二世市村羽左衞門、どんつくが四世中村歌右衞門、三次が三世關三十郎、お秀が坂東しうか、お房が藤川花友金兵衞が中村芝十郎、福吉が中村福助、おいろが坂東玉三郎であつた。

神樂諷雲井曲毬（どんつく）

日本橋の場

役名――太神樂の親方、元太夫。太鼓打ち、三次、どんつく、甑六。若旦那、金兵衞。藝者、お秀。同、お房　白酒屋、福吉、同、おいろ。

常磐津連中

本舞臺、二間の淺黄幕。爰に頭取居並び、口上済みの上、曲撥にて幕落す。

ト正面、御高札の場。上の方、擬寶珠の橋の袂を取り付け、向う黄合扇々谷屋敷々々の様な見せ、後ろお城の遠見よろしく、爰に甑六、太神樂の荷物昇ぎ、雜段引にて木籠と毬を持ち、元太夫、一本差し、刺貫、太夫の形、幣を持ち、三次、太鼓打ち、ぱつち尻端折りの拵らへ。金兵衞、若旦那の廻禮形。お秀、お房、藝者やよろしく見得にて居並ぶ。直ぐに常磐津淨瑠璃になり

〽鹿島浦にはなア、コレワイナ、鹿島浦には寶ヶ船がつん着いた、港小娘後ろ髷比丘尼、人のお方も袖を連れておやもサどうした、瑠璃や硨磲瑪瑙金銀琥珀、珊瑚眞珠もさでもて拵ふ、いとしおさんに伊達さす惠み、これも鹿島の神の告げ。

ト皆々よろしく振りあつて

金兵　おれまでが、ツイ浮かれて踊るやつサ。

元太　その位ゐ身を入れて見物して下さらにやア、張合ひがござりませぬ。

三次　その上、お前さんは、女がお好きと見えますからねねえ、お房さん。

ふさ　ほんに、この頃しにせの、あの白酒屋さんなら、お相手によからうわいな。

甑六　あんでも、酒と女がねえならば、おんらア國元へ歸るんだもし。

ひで　お前が歸つては困るわいなア。オヽ、噂をすれば影とやら、アレ〳〵、向うへ白酒屋さんが。

皆々　ほんに、オヽイ〳〵。

トこれにて出の合ひ方になり、向うより白酒屋福吉、

同じくおいろ、やつし對の形、袖無し羽織、手拭をかぶり、好みの誂らへ形にて、白酒の荷を差擔ひ、出て來る。

〽色は白酒ほんにほんのりと、雪の裏梅三重襷、かけたらどうしたえ、娘島田のナ髷ゆはひ、よい仲同士の荷ひ賣り、拍子とり〳〵歩み來る。

金兵　ヨウ〳〵、美しいな〳〵。

甁六　ヨウ、美しいか〳〵。

元太　よく尻馬に出たがる男だぜ。それだから、どんつくと云ふのだ。ちつと嗜なめ。

三次　オイ〳〵、どんつく、其方へ行け〳〵……時に白酒屋さん、この旦那が惣仕舞ひにしてやると仰しやるが、なんと白酒の云ひ立てを、聞かせて下さるまいか。

ふさ　ほんに最前から、待つて居たわいなア。

福吉　なんのお前さん、古めかしい、お子樣方も皆御存じの云ひ立て。

いろ　云はいでならずは、お前よいやうに。わたしや恥かしいわいなア。

姥六　あに恥かしい事があるだんし。エヘン、そも〳〵富士の白酒ちうものは、昔し〳〵。

元太　そりや、また尻馬に出やアがつた。それだから、どんつくと云ふのだ。イヤ、どんつくには困るぜ。ア、、情ねえ。

甁六　おやげねえこんだ〳〵。

元太　カウト、路銀を拵らへて、國元へ歸してえものだ。

甁六　それがハア、えつちの奥の手だんし。

元太　オイ〳〵、誰れの事だと思ふよ。

甁六　エ、、知れた事、おのしのこんだんべい。

三次　エ、、おきやアがれ、どんつくめ、サア〳〵、早う。

金兵　何しろ、初心の白酒屋に、口開きをしろと云ふのが此方が無理だ。ドレ、おれが口開きをしてやるべいか。エ、イ。

〽春は屠蘇酒家毎に、禮者も廻る千鳥足、ヤアトセイヤアトイセ踊り見惚れてお花見を、ついで一拳菖蒲酒、狐獵人庄屋の日待に、お江戸藝者が彈く三味に〽廻る日の、春に近いとこ老木の梅の、若やぎて候しをらしやしをらしや、薫り床しと待ち佗びかねて、さゝ鳴かける鶯の、來ては朝寐を起しける、さりとては氣短かな、いま帶しめて行くわいな、ほうほけきやうとい人さんぢや。

ひで　サア、この上は白酒屋さん、早う聞きたいわいな。

ト是れにて福吉、團扇を持ち前へ出て

福吉　左やうならばお好みに任せ、エヘン、抑々富士の白酒は。

〽つらねも古き並松に、衣を掛けてとろ〳〵と、つい寢姿に打ちこんで、下界男の氣短かな、天人引寄せ抱きつきの、桂男と共稼ぎ、沖の鷗と新家の女夫、ヤレヨイヤレヨイ、實も身と身をサア離れぬ仲と、いつか締めたる岩田帶

ふさ　ほんに、面白かつたわいなア。

金兵　ヤレ〳〵御苦勞々々。併し、肝心の太神樂を見てえもんだ。どうする〳〵。

皆々　所望だ〳〵。

元太　イヤモウ、これぱつかりは、否とも云はれぬ

三次　サア〳〵、商賣々々。

甑六　ハイ、賣商々々

〽千早振りにし昔より、神をいさめの曲太鼓、八百や萬の、手をつくし、音も冴え渡る庭神樂、これも神力加護毬や〽來た〳〵もてこいな、よい〳〵、肩に受け身の流し持ち、ヨイサ、拔けつ潜りつ、ひよいと止まつた〽柳に燕、籠に手毬のしやんとこい、落ちたら恥よ、落したら拾ふ袋もち。

ト太神樂の振り、よろしくある。

金兵　ヤレ〳〵、御苦勞々々。

三次　オイ、どんつく、お主の國にやア、こんな面白い事はあるめえの。

甑六　ほんね、やれ〳〵、井の内の蛙ッ子、でえ海を知らずの例へ。よき國でこそあれ、おらが方で品やる事は、いどッ子に出來るもんだし。

元太　コレ、江戸ッ子の出來ねえといふ事があるものか。

甑六　すんだらやるから、眞似事して見さろ。エヘン。

甑六　エヘン……イヤ、どんつく〳〵〳〵どどんがどん。

〽そさまえゝならおんらもえゝ、それで世の中どどんがよい、どんつく〳〵〳〵〳〵どゞんがどん。

元太　へ、、、、。なんの造作もねえ。

甑六　すんだら、おらと同士にやつて見さろ。シタガ。次第に早くなる所が傳授だア。江戸ッ子には出來るもんだんし。

元太　ナニ負けるものか。エヘン

兩人　イヤ、どんつく〳〵〳〵、どどんがどん。

〽そ樣えゝなら、おんらもえゝ、それで世の中どんとよ

い、どんつく〱〱〱どどんがどん。

ト段々に早めて踊る。此うちソッと甑六抜けて、藝者の掛けたる床几へ割込み、指さし笑ってこなし。よき程に

甑六　オイ〱〱……、コレ、どんつくの親玉。

ト太夫の脊中を叩く。

ひで　それはさうと、そのどんつくの唄にも、なんぞ謂はれのある事でござんせうな。

甑六　あるの段か。ひッつまんで話して聞かせべいか。

ひで　こりや聞き事ぢやわいなア。

甑六　さらば物語りすべいか。エヘン

〽そさまえゝなら、おんらもえゝ、それで世の中どんとよい、どんつく〱〱〱どどんがどん。

〽あれを見さいな、あい〱山の彼方から、そさま手管に乗せられて、うからうつ惚れこんで、おんべりすぎたアえ、ほんね〱よ、銭落したで溝さへ陥つてうツぱしる、こいつもどんつく邪慳な〱、人さ誹ろと馬の耳に風よ、すいせ〱、あゝ、ぢんつく〱どんつくどんつくどん、サア、ちげねのねの〱眞中ぢや。

ト甑六よろしく田舎者の振りある。

ふさ　御苦勞々々々。そのお前の田舎振りの形を取らうと思つても、どうして〱、迚も及ばぬわいなア。

甑六　たまげたんべえな。

三次　サア〱、これからお前方の色事話しが、聞きてえ聞きてえ。

ふさ　其やうな事は知らぬわいなア。

ひで　イエ〱、知らぬとは云はせないよ。マア、わたしが相手になつて、エヽモ、コレ

トこれよりお房、お秀、口説き模様。金兵衛も絡む事。

〽なまじ斯うせぬ初めなら、思ひ切る瀬があらうのに、さりとはむごい胴慾な、そりやつれないおやないかいな、主を待つ身の小夜更けて、月も朧に立ち明かす、影のうつるをお前かと、ぢつと引寄せ寄り添えば、え、厚皮なようもよう、主ある者を引寄せて、我がもの顔が憎らしいと、縺れ口舌のその中へ。

トよろしくあつてとまりに、甑六、おかめの面を掛け鈴を持つて中へ割つて入り、鈴を振り立てる。これにて左右に別れる。二上りになり

〽やんもしろや、爰も高天が原なれや。

元太　オヤ〱、こりやアおかめさん、お釜〆のかえ。

初演當時の番附

〽オヤ〳〵、誰れだと思つたら、下町の神主さん、きついお見限りだね。
お前、髪がとんだよく出來たね。なんと云ふ風だえ。
〽これかえ、こりや荒神さまのお供へ風さ、この間もね、あのお母さんがねえ〽おかめ〳〵と澤山さうに、云うておくれ毛そゝげ髪〽直してあげうと簪に、お前の紋の松茸は、癪の蕾ぢやと初めて知つた、外の木の子の味知らず。わたしもするのさ。
なにを。
〽お嫁入りを。
そりやアさぞ嬉しからうね。マア、何しろ寄つておいでよ。
ト引ッ張る。
〽あれさおよしよ、お放しよ、好かねえねえ。
ト振り放す拍子に、啞へ面落す。翫六、慌てゝ取つて逆に冠り、衣紋を直す。
オヤ〳〵、お前、いつおめかさんと名を替へたえ。
〽あれさ、人聞きの悪いよ、おめかだのなんのと云つておくれでないよ。
それでも、おかめの顔が逆さまになつて居るから、おめかではないかえ。
ト啞へ直す。
翫六　ドレ……エ、、あんちうこんだ。
〽どうせうね、わつちや嫌だね〽洗ひ髪の投げ島田を、根からふつつり切つて、男の膝に叩きつけ〽今度から浮氣をすると、芝居のお化ぢやないけれども、ひうどろひうどろと化けて出る〽情なし女め、外の男は振向いても見まいと、程のよい口車に、つい乘せられて、登りつめたが此方の行どまり。
ト翫六は面を取り、元太夫は赤の手拭を冠り、二人にて振りある。
〽黒々だんべい、赤々だんべい、派手を見らす鯨帶、雲の稻妻、光るが朱鞘に黒伊達羽織、まだも目に立つ黒助稻荷の、赤い鳥居が、すぽぽん花火の眞の闇、熊に金時、日の出に烏、赤と黒との色競べ、これも神事の一躍り。
ト皆々總踊りとなり、三下り。
〽千代の縁を結ぶの神の、仲人島臺、梅松竹の杯は、嬉しい仲ぢやないかいな。悪魔降伏千代萬歳、めでたき春とぞ祝しける。

拍子(ひやうし)トよろしくあつて皆々引張(みな／＼ひつぱ)りの見得(みえ)、通(とほ)り神樂(かぐら)にて

幕

神樂諷雲井曲毬（終り）

奴髱三升羽子板――頼風狂亂

これも顔見世淨瑠璃の一つで、文政四年十一月、市村座の「何種龜顔觸」の四建目に出した常磐津ものである。この時、扣へ櫓であつた玉川座は沒落して、本櫓の市村座が久し振りに再興した。その第一回興行だつたので、この所作の初めに座元や座頭が並んで口上があり、座元羽左衞門はまだ子供であるが、その爲に舞臺へ出て山王の猿を踊つたのである。顔見世淨瑠璃としては別に特徴もないが、頼風を狂亂にしたところが稍變つてゐる點であらう。この作者は二世瀨川如皐で、常磐津は小文字太夫と岸澤古和左、振附は藤間弘町、役割は、頼風が坂東彦三郎、八郎が市川雷藏、谷平が大谷馬十、女郎花が岩井かほ世、宗貞が七世市川團十郎、山王の猿が十二世市村羽左衞門であつた。

奴凧三升羽子板（頼風狂亂）

洛陽大慈閣の場

役名……小野之助頼風。大筆八郎照綱。白拍子、女郎花。奴、谷平。義峯宗貞。山王の猿。

常磐津連中

本舞臺、正面三間の間、結構なる朱塗りの高欄附き、清水觀音舞臺元六尺程の高さ、よろしく、舞臺上の方に音羽の瀧、鳥居、玉垣、朱塗りにて綺麗なる仕立て。下の大黒柱、梅の立ち木、日覆より吊り枝、寒紅梅の盛り、すべて洛陽大慈閣のかゝりよろしく、高欄の内に常磐津連中居並び、管弦にて幕明く。

トめでたき謡にて下座より座元羽左衛門、座附き麻上下同じく、男女藏、麻上下にて附添ひ、頭取三方に役人揃れを載せ、持ち出で來り、舞臺よき所に並よく居並び、各々御見物へ辭儀よろしくあつて、男女藏、再興のお禮口上よろしくあり、頭取、淨瑠璃名題、役人替名、太夫連名觸れあつて、男女藏、その爲口上左やうにと、いつもの通りよろしく、直ぐに淨瑠璃、前彈きにかゝる。右三人下座へ入る。

〽出ていなば、心かろしと人や見ん、人や咎めん數ならぬ、身におほけなき卷き羽織、昔男の風俗を、寫すも袖の振り合せ、振りもよしやの丹前奴の、この〳〵折待ち得たる、花の顔見世に立ばえ。

ト賑やかなる三味線入り、丹前やうなる鳴り物にて、舞臺先眞中へ頼風、剃立て卷き羽織、大小の形にて、病ひ鉢卷、誂らへの梅の枝を擔ぎ、物狂ひ丹前の立ち身、上の方に宗貞、下の方に、八郎、兩人とも誂らへの長奴、一本差し、草履を持ちたる見得よろしくセリ上げる。

〽來いよ、ネイと一聲かけしや袖の、濡れにぞ濡れし濡れたらとても、任せぬ戀の物思ひ、鳥に浮かされきぬぎぬの、夜明けの明星東へちろり、西の山々茜さす、色は昨夜の茶碗酒、うん呑みぐん呑みや、おらが爲の、吉野初瀬の花よりも、紅葉に浮名龍田山、夜半にや君が露の丸寐の恨みさへ、無くて七癖七所、渡り奉公月雇ひ、

やつちやしばがきうい奴、こらさ、あゝから〳〵、ちく
とんぺい、腕に覺えの六法に、今日お目見の江戸の花、
咲き升三升の二人連れ、お召しに隨ひ、ネイ〳〵〳〵、
かつつくばうでぞ扣へける。
ト三人よろしく、丹前模様よろしくあつて
八郎　ヤンヤ〳〵。出來た。手譽めもお二人様、一人は、
無茶の酒氣違ひ、一人は形も一對の、奴姿も浮世の様、
御體ない良峯の、宗貞さまともあらうお方が、世を忍
ぶ御身の上なればこそ
宗貞　如何にも。かゝる出立ちにて、人目を忍ぶも、何卒
して、紛失なせし野守の鏡、尋ね出さんその爲に、下部
姿と窶せば窶す。
頼風　主も家來も奴と奴、小野之助が草履取り、するは慮
外も氣違ひ水、おれもウカ〳〵どうして爰へ。
八郎　お出でなされた道すがら、洛中洛外縱横に
頼風　歌人は居ながら名所古跡。
宗貞　その歌人も罪なくに
八郎　廓の酒の移り香を
頼風　小袖にとめし浮れ女の
宗貞　色の名どころ。

八郎　諸分けの名所。
宗貞　物に准へて
三人　話さうか。
ト三人よろしく前へ出る。
〽わくらはの、問ふ人あらば須磨の月、明石の笘やほの
ほのと、俤つかむ石山に、映す湖水の秋の月、八つの眺
めの名所は。
トこれより大小入り、拍子舞ひになる。
宗貞　知るも知らぬも逢坂の、關も屆かぬ春秋の、紋日數
へし柴屋町。
頼風　しば〳〵通ふ日せき笠、雨の袖がた三笠山、なる星
月の名所も
宗貞　雪にも紛ふ花吹雪、志賀唐崎の一つ松
頼風　待つ夜に雨の閨の戸を
宗貞　合圖合ひの手彈く三味の、かびも凍ゆる比良の雪。
頼風　雪の時酒、とけしなき
〽口說くひよりに小夜中更けて。
曉告ぐる三井の鐘、恨みて泣いて片思ひ。
宗貞　堅田に雁の玉章や、日文投げ文矢橋の歸帆。
八郎　勢田の夕日のまばゆくも、負けぬ悋氣の負け惜しみ。

頼風　それで粟津の朝直し、無理に別れのきぬ〴〵に。

ト拍子舞、よろしく、謡がゝり浄瑠璃にて

〽鳥はもつかは鐘ゝ鳴れ、あれ山鳥の〳〵、つくづく法師、小法師。

山、あなたに、アレ〳〵〳〵。

八郎　ド〳〵〳〵。

〽これも願ひの滝詣で、誰れゆゑ運ぶ心の奥を、汲んで水仕の洗濯盥。

ト摺り鉦入りの合ひ方になり、花道より女郎花、絹やつし肩襷、頭へ手拭を巻き、駒下駄にて、洗濯盥の中へ晒しかけを入れ、抱へ出て来る。頼風、これを見て

頼風　よりさ、頼風に酒の意見なめ、早く追ひ返せ。

ト腹立てる。酒興の模様。宗貞、八郎へ目配せする。

八郎心得、ツカ〳〵と花道へ行き

八郎　ヤア、待ち兼ねた〳〵。旦那が酒の癇癪も、お前が遅さに焦れ〳〵だ。

〽我れも昔の女郎花、今は田舎の正徳正直、伊勢に七月名古屋に三月、白峰越路の雪の中、歩ゆめど急けど捗らず、道の遅れをお叱りなうて、今日お目見得の有り難さ、願ひ叶うて清水の、舞台なれざる不束は、此方も同じ盲目蛇、雷蔵つゝく杖に放れた座頭の坊、坊主が憎けりやけさからお世話に成田屋の、お庇お礼も云ふ程くだな、道草話しウカ〳〵と、語り尽きてぞ戻り来る。

ト両人、花道よろしく、振りよろしく本舞台へ来る。

宗貞　イヤモウ、待つたとも〳〵。遅いと叱りは叱るもの、まだ草臥れも退くまいに、めでたい顔見世なればこそ、我れ〳〵よりは皆様へ、ちよつとお礼の引合せ。

トこれより宗貞、よろしく引合せ口上、女郎花お目見得口上よろしくあつて

八郎　サア、これからは旦那の御機嫌。

宗貞　ハテ、云ふまでもない、最前から、木男ばかりの真中へ

女郎　ほんに思へば恥かしらしい。お馴染ちやとてろくろくに、二丁町へは初々しい、かほ世と名さへお覚えない、三つ扇の紋は隣り町、本店からの仕着せ物、もの見事な不器用者、これからどうぞ、いつ〳〵までも。

宗貞　知れた事だよ、外へは遣らじと二三番、神の彦三に結んだ縁。

八郎　お側へちやつと頼風さま……そこらで口舌を

両人　やつたり〳〵。

頼風　ヤ。

八郎　ソリヤ、行つたり。

ト女郎花を無理に頼風が側へ突きやる。女郎花、モヂモヂこなし。

〽小野の江の、朽ちても朽ちぬ契りとは、今ぞ引かるゝ袖の香の、まさる思ひは黄金花、花橘の縁の花〽かは世花とて似たりや〳〵、由縁も花の江戸の色、紫色に抓られた、爪の極印これ爰に〽えゝ憎らしい、そりや餘所の花魁さんと、口舌のひぞり、おゝさ立派に胸づくし、取つた方から涙ぐみ、女子の愚痴も誰ゆゑに、小野さまなつた今更に、一時くねる女氣の、顏にまかるゝ手拭に、紅絹袋や垢揩りの、喰ひついて解く結び目、騙されたのか笑はれて、それで世帯が持たれるか、こりや又なんのこつた、九尺二間も二人寐りや、我が家らしの金盥、かなで云うちが脊から閉めて、根板も丈夫な店請け親分、人別町内、碗振舞ひ、茶菓子文句の潮來ぶし〽ても並べける口八丁、口は耳まで鬼が島、數の寶はなに〳〵ぞ。

ト これより揺り鉦入りの踊りになり

〽隠れ簑笠しのぶに嬉し、それが浮名の花丁字、移り香とめしかけ香の、延命袋、打出の小槌、打ち出せ打ち出せ金襴緞子、どんと云うて渡した。

ト三人よろしく

〽又も柳に風狂ひ、招く尾花の袖ならで、小野とは云はじ小野之助、走れば走る宗貞も、共に人目を忍ぶ山、〽またこし方の道芝屋、東路指して走り行く。

ト かけりになり、頼風、花道へ行く。宗貞これを留める。立廻りよろしく、頼風、振り外して向うへ入る。宗貞、これを追うて入る。八郎、女郎花殘り

八郎　思ひがけない白拍子、女郎花とてこなさんは、頼風さまの御寵愛、そぐはぬ形で、どうして爰へ。

女郎　來たはわたしが心の願ひ。頼風さまをお諫め申し、お叱り受けて九條の里へ、戻つて居るも御身のお爲、どうぞお酒の止むやうにと、この清水へ瀧詣で。

八郎　それに又、その洗濯物は。

女郎　サア、コリヤ道の人目をいとふ、心の垢も清める爲。

八郎　エヽ、それ程の心中者。おれなら捨てゝは置かぬになア。

ト女郎花が腰を叩く。

女郎　大筆さん、お前も酒に醉うておやなア。

八郎　醉うたらどうおや。

初演當時の繪番付

ト ぢつと寄り添ふに、女郎花よろしく突き廻し
〽昨夜夢見た、そさまにちよつと、あいなア、覺まして
あがり、框で小膝の骨打つた、たまげたよ、おや〱〱
〽うらが在所ぢや流行りもの、庄屋の山畑三段七畝、根
つ子枕の浮名に立つた、ほんに如才もなうてから、おど
け交りの憂はらし。
ト 兩人よろしく、をかし味の振りあつて、向うにて
四人 女房呼んだら、川へぶち込め〱。
ト 渡り拍子になり花道より奴四人、白襦袢の形、番手
桶を持ち、谷平、襦子奴、赤ッ面の拵らへ、一本差し、
附いて出て來り
谷平 ソレ。
ト 顔にて敎へる。四人、バラ〱と舞臺へ來て、八郎
を取卷き
奴一 大筆八郎、遁がれはない。
奴二 行くへ知れざる義峯宗貞。
奴三 在所を吐かして
奴四 尋常に腕廻せ。
四人 繩かゝれ。
大筆 小癪な餓鬼めら、わい等が際に、臺座動かす八郎な
らず。
谷平 物な云はすな、打つて捕れ。
四人 合點だ。
ト かゝる。八郎、見事に千鳥に取つて投げ、早神樂にて
四人を下座へ追ひ込む。八郎、これを追うて入る。女
郎花、續いて行くを、谷平、ツカ〱と來て引き戻し
谷平 姐え、おぬしは見たやうな。オヽ、ソレ、慥か女郎
花。
女郎 イヽエ、わたしは。
谷平 それでもおらア名にめでゝ
女郎 折れるばかりぞ男郎花。
谷平 引ッ立てゝ行く。うしやアがれ。
ト 女郎花、盥を肩に、兩人ちよつと所作模樣。
〽仇も情も白眞弓、流石女子の危ふさ怖さ。
ト よろしく、谷平、切つてかゝる。ドロ〱になり、
兩人悶絶して倒れる。ドロ〱打上げる
〽猿山に生じて林に棲む、實さへ花さへ生ゆるなる、ま
して猿のりん〱たる、神德自在の立ち姿。
ト 大ドロ〱にて、花道よき所より山王の猿、緋鹿の
子の袖なし、劍立て烏帽子、金の幣白を擔ひたる見得

にてセリ上がる、谷平女郎花、心附いて起き上がり、
猿を見て悄け、兩人顔見合せ、よろしく
〽二人は現他愛なく、招く手元に浮かれ寄る、拍子とり
どり聲をあげ。
ト太鼓入りになり、猿、踊りながら本舞臺へ來る。
〽やれ由の／＼、谷の清水は夜毎に增して、名も高し名
も高し。
ト踊りのうち谷平、浮かれ寄つて
〽爺さまの野良廻り、思はれや／＼、しろりやしろり、
やつしろりと、ぬめらしやんすな、おゝやれ、さてものさ
てもの、枝に止るはしをらしや。
谷平　うしろ姿をお目にかきや。
女郎　子持ちの薙髪、お目にかきや。
兩人　さつても、妙な品物め。
〽瓦橋とや油座の、一人娘にお染とて。
谷平　お染と云つたら立つたりな。
〽年は二八の細眉毛。
兩人　それ久松と口舌の段。
ト口論になる。女郎花、谷平、以前の手桶より桃を出
してやる事あつて

〽あれ又あんな無理わいなア、昔思へば逢にぬかましぢ
やもの、ましか猿か恥かしや〽船の內にはなにとおよる
ぞ、內には／＼船の內には、なにとおよるぞ／＼、苫を
敷き寐の舵枕、猿の小猿のめでたや、踊るが手元／＼、
辰巳午や、春の駒はきぬ牧育ち〽獅子と申すは、すみ／＼
すみ／＼住吉八幡、普賢文殊の召されたる、おのが好き
とて柿蜜柑、梨子もあるのみ桃栗毛、馬に赤貝の／＼、
眞紅の手綱に泥障を打つて、かけとん／＼乘りかけとん、
二疋か三疋乘り手が一人、はいどう／＼はい／＼／＼、
浪の打ち際に、ざんぶと寄せては、えい／＼はい、のん
ほのんいよ勇む駒曳き。
ト鳴り物、誂らへの通り、いろ／＼あつて、猿よろし
く馬貝の拍子、その外、面白き事あつて納まる。谷平
これに立ちかゝり
谷平　合點のゆかぬ變化の小猿。ヤレ來いやい。
トどん／＼になり、以前の四人、下座の方より、バラ
バラと出て來り
四人　やらぬヮ。
ト猿へかゝる。ドロ／＼になり、猿、以前の幣帛にて
鳴り物替り、立廻りよろしくあつて、とまる。

猿　善きかな〳〵。我れはこれ、日吉山王二十一社の神勅にて、宗貞小町を守護なす上は、汝等が横難、やはかあるべきや。

女郎　エヽ、有り難やなア。

〽實に山王の日吉の手綱、濃き紫も江戸の色、花の顔見世勇ましき、櫓の榮えぞ祝しける。

トさらしになり、舞臺先の眞中に猿、岩臺に乗り左右に、女郎花、谷平、立ちかゝりアリャ〳〵の聲賑やかに

四人　どつこい。

トこの見得よろしく。　めでたく幕

奴髭三升羽子板（終り）

廓文章——吉田屋

歌舞伎の「夕霧名殘正月」や「夕霧七年忌」淨瑠璃の「三世相」等を經て、寶永七年七月に「夕霧阿波鳴戸」が竹本座へかゝつた。作者は云はずと知れた近松門左衛門である。夕霧の狂言の中では、これが一番行はれた。その序幕が吉田屋で、即ち本曲の原作であるが、原作では阿波の大盡が實は平岡左近の妻お雪でこれが夕霧の身請けをして歸るのが云はゞ發端になつてゐる。これを「廓文章」といふ一幕物に改作上演したのは、いつの事であるか、判然しない。「廓文章」の義太夫の文句や節附けが其八ツクリであるのを見ても、大阪から來た事は疑ひないが年代が解らない。安永九年だといふ說もある。江戸でも夕霧の淨瑠璃は隨分澤山あつて、中にも常磐津の「其扇屋浮名戀風」や富本から淸元に傳はつた「春夜障子梅」などは今に傳はつてゐるが、これらは何れも通し狂言の一部へ、吉田屋を利用しただけであつて、調べて見ると伊左衛門が怪我の團三郎であつたり、吉田屋の幕が劇中劇になつてゐたりするので、決して獨立した一幕ではない。江戸で今日のやうな吉田屋をやつたのは、文化二年八月中村座が最初であらう。三世坂東三津五郎の伊左衛門に四世瀬川路考の夕霧、竹本だけであつた。爰へ收錄したのは安政元年三月中村座所演の脚本で、伊左衛門の八世片岡我童、夕霧の岩井粂三郎、喜左衛門の坂東彦三郎、お梅の尾上菊次郎であつた。他はその時の都合で、竹本を中心に、常磐津の事もあり富本にも淸元にもなる。

廓文章（吉田屋）

新町吉田屋の場

役名――吉田屋喜左衛門。阿波の大盡、藤屋伊左衛門。扇屋の夕霧、喜左衛門女房、お梅。

竹本連中
常磐津連中

本舞臺、向う吉田屋と記せし長暖簾、左右格子造り、一面に注連飾り、すべて新町吉田屋表がゝりの體、爰に若い者十人、揃ひの半纏にて餅を搗いてゐる。この見得、鏝の合ひ方、通い神樂にて幕あく。と皆々餅を搗く事よろしくあつて

若一　サア／＼これから後は搗入れの曲搗き、マア、一服のまうぢやあねえか。

若二　いつもは引舟やヽりてが、打交つて餅搗すれど

若三　お大盡樣の惣揚げで、おいらが寄つてこの餅搗。

若四　家の嘉例に搗き上げて、後は出入りの大一座で

若五　飲み放題の底拔け上戸で、藝盡しの物まくり

若六　去年も藝のうまい者に、おやまさんが岡惚れしたから

若七　今年も腕に撚をかけ、どうか思ひ付かれたいものだ。

若八　思ひ付かれるはよいけれど、もしそんな事が店へ知れると

若九　出入りは云はずと上つたり。矢ツ張りこりやア持ち役で

若十　惚れられないのが互ひの仕合せ。先づそれよりは御馳走に

若一　なるのがいつち安心だて。今日惣仕舞ひのお客の内では、阿波のお客が此方の見當だ。

若二　なんでも阿波大盡樣の御馳走なら、粟餅がよからうわい。

皆々　違えねえ。ハヽヽヽヽ。

ト皆々床几にかゝり、煙草をのんでゐる。賑かなる唄になり、花道より阿波の大盡、好みの羽織、着附け花染めの置き手拭にて、後より仲居四人、赤前垂れにて

若い者二人、禿二人、附添ひ出て來り、花道にて

「一朝寢する旅人もあり年の暮」と、誰れやらが句にありしが、其紅梅の色褪に、難波の女郎見まほしく、遥けき阿波より年籠り廓、名高き夕霧太夫と、晴れて逢ひたき我が望み。囃子仲居が取持ちで、色の音締も吉田屋に、今日で五日の居續けも、君に逢瀬を、コレ、働らいて呉れ。頼むぞ頼むぞ。

仲一　主がさほどに御執心で、遠い阿波から難波津へ、お登りなされたお心は、ても戀知りの大盡樣、

仲二　この新町にも名の高さ、太夫さんも多い中で、扇屋の夕霧さんへ、登りつめてござんすあなた。

仲三　その御心もじ汲み分けて、どうぞ首尾して太夫さんを、逢はせたくは思へども

仲四　過ぎし秋の半から、御病氣でござんしたゆゑ

若一　そこを押してもどうかなと、旦那さんもおかみさんも、氣を揉んでござりましたが

若二　張りと意氣地の太夫さん、心が解けて今夜こそ、よい吉左右が

皆々　ござりませう。

大盡　この上ともに、頼むぞ〳〵。

仲一　何は兎もあれ、マア〳〵あれへ。

皆々　サア、お出でなされませいなア。

ト右の唄にて皆々舞臺へ來る。餅搗き皆々前へ出て

若一　これはお大盡樣

皆々　ようお戻りなされました。

ト大盡、床几へ腰をかけ

大盡　オヽ、若い者どもには顏揃ひだな。して、餅搗はもう濟んだか。

若一　ハイ、殘らず濟ましてござりまする。イヤモウ、當年の餅搗は、この吉田屋へ旦那樣の御逗留にて

若二　毎日の下され物で、皆一同に勵みがつきました。

若三　勵むと申せば、唯今も搗納めの一と臼は

若四　私しどもが受持つて、杵こね取りの拍子事、

若五　旦那へお目に

皆々　かけたうござりました。

大盡　それは見物事であつたなう。併しながら、世間では年の暮の忙しいその最中を、幾日も〳〵居續けするとは、夕霧太夫に逢ひたさゆゑ。

トこの時暖簾口より、仲居五出て來り

仲五　これは旦那樣、只今お歸りでござりましたか。モシ

お喜びなされませ。內方の餠搗を幸ひに、家の旦那が自身に參り、夕霧さんを無理矢理に頼みましたれば、流石名うての太夫さん、今日は幸ひ氣合もよし、吉田屋夫婦の顏を立て、行かうと云うてござんすわいなア。

大盡　ムウ、それでは夕霧が來ると申すか。

若一　モシ、お大盡樣、上首尾で

皆々　ござりませうがな。

若一　夕霧樣がお出でとあらば、これから奧でいつもの通り

若二　大座敷での大酒盛、飮んだり喰つたり

皆々　貰つたり。

大盡　コリヤ〳〵、皆まで云ふな、承知ぢやわえ。

ト祝儀をやる。

皆々　これは有り難うござりまする。

若一　これがほんの、濡れ手で粟のお大盡樣。

若二　夕霧さまと只お二人。

若三　仲吉田屋の離れ家で

若四　今日餠搗の杵ともなり

若五　臼ともなつてしつぽりと

若六　千代も替らぬお床入り。

皆々　おめでたうござりまする。

大盡　エヽ、煽てるなえ〳〵。

仲一　サア、お大盡樣には奧座敷へ

大盡　皆も一緒に。

皆々　サア〳〵、お出なされませ。

ト所作の切れにて大盡先に、皆々暖簾口へ入る。鳴り物打上げ、竹本の出語りになる。

〽冬編笠の赤ばりて、紙子の火打ひざのさら、笠ふき凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれば古への、花は嵐の頭に、今日の寒さを喰ひしばる、はみ出し鍔も神寂びて、鐺つまりし師走の月、胡散らしくも吉田屋の、內を覗いて。

トこの文句のうち、花道より伊左衞門、誂らへの編笠紙衣の形にて、扇を持ち、一本差しにて出て來り、門口へ來て

伊佐　喜左衞門、內にゐやるか。喜左〳〵。

〽鼻に扇の橫柄なり、男どもが飛び出て

ト暖簾口より以前の若衆十人出て來り

若　ハイ〳〵、喜左衞門內に居りまするが、どなたでござりまするな……なんだ、此奴は風の神の酔狂か。

若二　鳥嚇しを見るやうな態をして

若三　喜左衛門に逢ふも凄まじいわえ。
若四　百貫目も這ふ大蟲のやうに吐かしやアがるが
若五　奴はマア、どこの小屋からうしやアがつた。
若六　あらう事かあるめえ事か、人の門へ立ちながら
若七　冠り物も取らねえで、横柄な物の云ひやう。
若八　圖々しいにも程のあつたものだ、
若九　ちつとは目先を利かせて云へ。
若十　イケふざけた
皆々　奴ではねえか。
〽棒まかれたと云ひければ。
伊左　なんぢや、百貫目が、其やうに貧いものかの。ハテ、喜左衛門と云ふべき者が云ふ程に、コレ、逢はせてたもいなう。
若一　此奴、様々なごたくを吐くな。よいワ、逢ひたくば逢はせてやらう。
皆々　オヽ、こんな目に逢はせてやらう。
〽竹箒振り上げる、喜左衛門飛んで出で。
ト皆々有り合ふ竹箒、鞴くろみなどを持ち立ちかゝる。
奥より喜左衛門羽織袴にて出て
喜左　アヽ、コレ／＼、待たぬか。今日は餅搗のお祝ひ日に、わいら、何を騒ぐのぢや。そんな物を振上げて、もし瑕でもついたら、どうしようと思ふ。アレ、合點のゆかぬ身形なれば、もし強請りものかもしれぬもの、兎角騙して歸すがよい、滅多な事をせまいぞ。
トこちらへ來り
ハイ／＼、喜左衛門は私しでござりまするが、逢はうと仰しやるは、マア、どなた様でござりまする。
〽笠を覗いて。
ヤ、あなたは。
伊左　喜左、わしぢやわいなう。
喜左　藤屋の若旦那、伊左衛門さまでござりまするか。
伊左　懷しさに逢ひに來ました。
喜左　それはマア、ようお出でなされました。
ト若い者に向ひ
それ見ろ。これだによつて、おれが常々から云はない事か、滅多な事をするなと云つけて置くではないか。あなたをどなたと思ふ。おれが大事の旦那様だ。鉢巻も取り肌も入れて、お詫び言を申せ。氣のよい旦那様ならばこそよいが。ハイ／＼／＼、お赦しなされて下さりませ。
若一　ハイ／＼、只今のは私しどもが不調法。

若二　大事のお方とも存じませず
若三　とんだ粗相を致しました。
若四　どうぞ今日の所は眞平御免
皆々　なさりませ。
伊左　そんなら今のやうに叩きはせぬな。
皆々　どう致しまして。
伊左　さうしてアノ呵りはせぬな。
皆々　どう致してあなた樣へ。
伊左　そんならいよ／＼あやまつたな。
若一　あやまりましたとも／＼。近年にない大あやまりを
皆々　致しました。
伊左　ちつとさうもあらうわいなう。
喜左　サア／＼、早く奥へ行つて、お吸物の支度でもしろ
皆々　へイ／＼、畏りましてござりまする。
　ト若い者皆々、奥へ入る。
喜左　ほんに困つた奴等ではあるわえ。ハヽヽヽ。さて
お珍しい、どうしてマア。モシ、あなたが御逼塞と承は
り、奈良伏見までお尋ね申しました。よう今日はお出で
なされました。サア／＼、此方へお入りなされませ。
〽袖引寄すれば。

伊左　アヽ、コレ／＼喜左、さりとては、紙衣ざはりが、
荒い／＼。
〽引けば破るゝ、摑めば跡に師走浪人、昔は槍が迎ひに
出る、今はやう／＼長刀の、草履を脫いで編笠の、中の
座敷に通りけり。
ト踊り地を冠せ、兩人思ひ入れあつて奥へ入る。知ら
せに付き、前の大格子を引いて取る。
本舞臺、三間の間、平舞臺、下手、伊豫簾淨瑠璃臺
正面上の方、一間の床の間。續いて三尺の違ひ棚。
この下襖の出入り、上手縁に襖の出入り。この内
一間の障子屋體、又この內塗り骨の障子屋體。よき
所に置き炬燵、蒲團をかけある事。矢張り踊り地に
て道具納まる。
ト下手の襖より以前の仲居四人、座蒲團、煙草盆、手
炙り火鉢、外に煙草盆一つ持つて出て、茶を出す支度
する事あつて、奥へ入る。これにて喜左衛門を先に伊
左衛門出て來り
喜左　ヤレ／＼、マア、御機嫌ようお出でなされましてお
めでたう存じまする。今日は又さぞ表はお寒うござりま

中村芝翫の伊左衛門

したでござりませう。サア／＼、炬燵へおあたりなされませ。

伊左　オヽこりやよい所へ炬燵が出來てゐる。置炬燵ぢや。オヽ暖い／＼。

　ト炬燵へあたる。

喜左　イヤ又、この冷えます事は。さぞお寒うござりませう。オヽ幸ひ。

〽羽織をふわと打ちかければ。

　ト側に有合ふ亂れ箱の羽織を着せる。

伊左　イヤモウ、寒晒しの伊左衞門を、いたはつての深切忝ない。志しを戴きませう。

〽戴いて着る有様を、喜左衞門つく／＼見て。

喜左　成る程浮世と申すものは。誰れあらう、藤屋の伊左衞門さまともあらうお方に、この喜左衞門が上げます羽織、たとへ蜀紅の錦、二重づるの古金襴でも、戴いて召しませうか。ほんにあなた樣のお心を思ひますると、熱い涙が滾れまする。

〽日頃しばたゝくぞ誠なる。

伊左　ア、コレ／＼喜左、わが身も猝のやうにもない、どうしたものぢや。ア、愚痴なぞや／＼。人は知らずこの伊左衞門。いま此やうな姿になつたも、さら／＼口惜しいとは思はぬ。なぜと云や。例へて云はうなら、重い材木でも、牛馬が負うては珍らしうない。それを猫か鼠が持運びしたら、これはと人も手を打たう。丁度マアそんなもので、斯うして紙衣一枚で、七百貫目の借錢負うてびくともせぬ所は、恐らく藤屋の伊左衞門、申し憚いが日本に一人の男。そこで總身が金ぢやによつて、いから冷える。オヽ寒む／＼。

喜左　總身が金とは有り難い。喜左衞門が餅搗に、總身が金のお大盡樣。やがてあなた樣の御勘當も赦りまして、元のやうにおなりなさるは今の間。アヽめでたい／＼。コレ、お梅、まだ蓬莱は飾らねど、正月の心で、三方飾つて持つておぢや。早う／＼。

うめ　アイ／＼。

〽あいと女房が楪葉に、ほながをかしき橙、柑子、蜜柑や何や榧かち栗。

　トこの文句のうち女房お梅、好みの拵らへにて、喰積を持ち、仲居、廣蓋に銀の銚子、三つ組の杯臺ともに載せ、小さき重詰など持ち出て來り、喜左衞門「お梅珍らしいお方が來た。當てゝ見ろ」といふ捨ゼリフい

ろ〳〵あつて

伊左　コレお梅、わしぢやわいなう。

うめ　オヽ、これは〳〵、伊左衛門さまでござりましたか。ようマアお出で遊ばしましたなア。お前様の事を、承はりまして、大抵や大方、お案じ申した事ではござりませぬ。太夫様から日々のお文なれど、どれにお出で遊ばすやら、毎日々々お噂申して居りましたが、此やうな嬉しい事はござりませぬ。ほんにマア、ようお出でなされましたなア。

伊左　其方も變る事がなうて、めでたいなう。

うめ　有り難うござりまする。

伊左　そのめでたい次手に、尋ねたい事があるわいなう。

ト夕霧の事を云ひ出し兼ねる捨ゼリフ、いろ〳〵あつて

深切な二人の衆、蓬萊とまでは氣が附いたが、最前から夕霧が事を、これ程も云ひ出さぬは、この頃餘所で噂を聞けば、わしが事を氣に病んで、煩うてゐるとの事、もしや無常の夕霧と消えはせぬか。喜左衛門、どうぢやぞいの。コレ内儀、云うて聞かしや、どうしたぢや。わしに嘆きをかけまいと思うて、それで云はぬのか。コレなんの泣かう、泣きはせぬ。おりや笑うてゐる程に、云うて聞かしてたもいなう。

〽泣かぬ〳〵と云ふ聲も、氣遣ひ涙にごりける。

喜左　成る程、先程から太夫様の事を申しませぬは、私しの不調法、さう思し召すは、御尤もでござりまする。

ト喜左衛門、女房を下手へ招き

コレお梅、旦那へお話し申してくれ。

うめ　なんのわたしより、お前、旦那へお話し申したがよいわいなア。

喜左　こんな事は男より、女の方がよいものぢや。

うめ　ハテ、それは男役ぢや、こなさん云うたがよいわいなア。

喜左　男の女のと、なんで差別があるものか。内を納めるは女房の役ぢや。おぬしから云うてくれ〳〵。

うめ　ハテ、お前云はしやんせいなア。

喜左　イヽヤ、おぬしから云やれといふに。

トお梅を伊左衛門の方へ突きやる。

うめ　云ひ難い事といふとわたしばかり。

ト云ひながら伊左衛門と顔見合せ

ホヽヽヽヽ。モシ、お喜びなされませ、夕霧さまも秋中は、お氣色も惡うござりましたが、この頃は段々と、

お心持も治つてござりまする。それに又、餘りお內にばかりお出でなされますのは、却つてお氣が盡きやうと存じまして、幸ひ奧のお客がお賴みで。

伊左　エヽ。

うめ　サア、無理にお賴み申しまして、お客へ今日初めてそれでアノ太夫さんも、奧へお出になつて居りますわいなア。

伊左　エヽ、そんならアノ、夕霧は氣色もようて、客へ來てゐると云やるか。そりやアノ、ほんの事かいなう。

うめ　ほんか嘘か、あの障子から奧を覗いて御覽じませ。

伊左　すりやアノ夕霧が、ムウ。

〽伊左衞門は急いたる顏色。

ト上手の障子を一重あける。此うちに夕霧と客人の影法師映る。伊左衞門、いろ〳〵こなしあつて

〽暫し詞もなかりしが。

ほんに、ずんと氣色もよいさうな。わしや又、あんな事ぢやないと思うてゐたに、氣合のよいはよけれども、成る程恐らく天地開け始めてより、傾城の誠と、座頭の逹眼鏡は見た事がないといふが、それに違ひはない。コレ其方衆の心にも、わしが今日爰へ來たは、定めし夕霧が顏を見たさに來たであらうと、思やる所も恥かしいが、さうではない。惣嫁のやうな傾城めに、微塵も心は殘らねど、知つての通り、彼奴が腹から出た悴、丁度もう今年で七つ。遣手の玉が才覺で、里に遣つたと云ふけれど、いま思へば里に遣つたもみんな僞はり。大方捻ぢ殺して捨て居つたであらうわいの。

兩人　どう致して滅相な。

伊左　イヤ〳〵、あんまり違ひもあるまい。これを思へば、傾城買より紙屑買が、ましであらうわいの。

うめ　そりや又なぜでござりまする。

伊左　なぜと云や。金銀を出して、彼方から取るものとては狀々ばかり。ようマア積つて見や。七百貫目の紙屑では、富士の山の張拔が出來るであらう。埒もない事思ひ出し、大事の紙衣の袖を、コレ、此やうに淚で濡らした。アヽ、繼目の離れぬ其うちに、さらばお暇いたしませう。

ト立ち上がるを

うめ　マア〳〵お待ちなされませ。其やうにお腹をお立てなされまするな。折角お出でなされましたに、マア、御酒でもおあがりなされませ。

伊左　イヤ〳〵、酒も飲みたうない。アタ腹の立つ、歸り

ませう〳〵。
ト振り切つて花道の方へ行き思ひ入れ。喜左衞門夫婦、
氣の揉めるこなし。
とても歸るなら、もう一遍廻つて歸りませう。
ト舞臺へ戻り、三人顏見合せ
ハヽヽヽヽ。
喜左　へヽヽヽヽ。
うめ　ホヽヽヽヽ。
三人　ハヽヽヽヽ。
伊左　コレ、喜左衞門、ひよんな事云うて、餅搗の祝ひ日
ぢやのに、忌々しいの何のと云うて。氣にかけたもんな
や。
喜左　どう致しまして、左樣な事が。
伊左　そんなら腹立ちはせぬな。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。
喜左　サア、御機嫌が直つたら、お銚子を早く持て來や。
うめ　アイ〳〵、お燗もつけて置いたわいなア。マア、ご
ゆるりと召上がつて下さりませ。サア〳〵、旦那、お一
つ召上がつて、久し振りにてこちの人へ、お献しなされ
て下さりませ。
伊左　そんならめでたう飲んで献さうか。

ト杯を取上げ一口飲んで
イヤ〳〵、酒を飲んでは居られぬ。矢ッ張りわしは、歸
りませう〳〵
ト此方へ來て、いろ〳〵こなし。
イヤ〳〵、こりやどう思うても爰には居られぬ。歸つた
方がましであらう。去んだものであらうか。爰にゐやう
か。行かうか行くまいか。いつそ炬燵へあたまつてこま
そ。
ト炬燵へ入り、手枕なして寢るゆゑ、喜左衞門お梅、
氣の毒なる思ひ入れ、
喜左　これだからおれが云ふまいと思つたに、てまへが夕
霧太夫の事を云つたからだ。
うめ　それでもお前が、云へ〳〵と云はしやんすゆゑ、わ
たしが云うたのに。
喜左　それだといつて、あのやうにみんな云はずとよい事
を。口から出任せ、つべこべと云ふからだ。お枕を持つ
て來やれ。
うめ　アイ〳〵。
ト襖の蔭より枕を持ち出て、伊左衞門にさせる。喜左
衞門、お梅に囁く。

そんなら奥の、首尾を見合せ
喜左　早く〳〵。
うめ　アイ。
　ト矢張り踊り地にて奥へ入る。喜左衛門、思ひ入れあつて
喜左　イヤモウ、いつに替らぬ旦那様の御氣質、この喜左衛門が爲には、福の神とも崇めにやならぬ、大事のお方、昔に變る今の御不自由。それを苦にもなされぬは、流石大家の旦那様、やがて御勘當お詫びの時節もござりませう。マアそれまでは千萬日も、御逗留なされて下さりませ。
〽心殘して奥へ行く、跡見送りて伊左衛門。
　ト喜左衛門、思ひ入れあつて奥へ入る。伊左衛門起き上がり、あたりを見て
伊左　此やうになつた伊左衛門を、喜左衛門夫婦が志し忘れは置かぬ、嬉しいぞよ。それに引替へあの夕霧。アア、それも變りしこの身の姿、變らぬは廓の賑ぎおやなア。
　ト下座の獨吟になり
唄〽憂しと見し、流れの昔なつかしや、可愛男に逢坂の、

關より辛い世の習ひ。
ヨウ〳〵、彈いてさま〳〵。ほんに、あの唄を聞くにつけ、去年の月見はあの奥座敷で、太夫と二人樂んだ、あの時の面白さ。ほんに彼奴に限つては、あのやうな水臭い氣であらうとは。
唄〽思はぬ人にせきとめられて、今は野澤の一つ水。
イカサマナア、戀も情も世にある時。此やうな形をして、腹を立てたり拗つたりしても、誰れも何とも思ひはせまい。こりや矢ツ張り思ひ切つて歸りませう、さりながら、喜左衛門夫婦の者の志し、逢はずに去んではこの胸が
唄〽すまぬ心の中にもしばし、澄むは由縁の月の影。
　ト此うち又障子より覗く事あつて思ひ入れ。其まゝ炬燵へ入る。知らせにて常磐津の出語りになる。
常〽無慘やな夕霧は、流れの昔懷しく、飛び立つ心奥の間の、首尾はくちせぬ縁と縁、胸と心の相の山、間の襖の具合よく。
　ト此うち夕霧襠裲なり、好みの拵らへにて奥より出て來り
常〽明け暮れ戀しい夫の顔、見るに嬉しく走り寄り、我が身を共に襠裲に、引纏ひ寄せとんと寢て、抱き締め締

お寄せ泣きけるが。

夕霧　伊左衛門さん、目を覚まして下さんせ、モシ、わしや頼らうてなア。

當〽疾に死ぬる筈なれど、今日まで命長らへしも、神佛のひかへ綱、これ懐かしうはないかいな、顔は見たうはないかいなと、揺り起し／＼抱き起せば。

竹〽とつて突退け、

ト伊左衛門、起きて夕霧の手を拂ひ

伊左　コレ、こゝな夕霧どのとやら、夕飯どのとやら、こなさんのやうに、節季師走悠々閑と、結構な閑な身の上とは違ひまする。この伊左衛門はナ、七百貫目といふ借銀を負うて、夜昼稼ぐ忙しい身の上。こんな時に寝ぬと寝られませぬ、必らず邪魔して下さりまするな。アヽ眩、な悠嫁どの。

竹〽ころりと轉けて空鼾。

夕霧　伊左衛門さん、お前、何云はしやさんす。わたしや其やうに云はれる覚えはござりませぬ。恨みがあらば云はしやんせ。サア、聞きませう、何ぼでも、寝さしはせぬ／＼。

伊左　アヽ、コレ／＼、側へ寄つてもらひますまい。勘當受けても藤屋伊左衛門、今のやうに奥の客に、踏まれたり蹴られたりする、傾城に近付きは持ちませぬ。アノ眩な萬歳傾城どの、萬歳ならば春おぢや、通りや／＼。

竹〽通りや／＼と云ひければ。

夕霧　ムウ、この夕霧を、萬歳傾城とわえ。

伊左　萬歳傾城の譯を知らずか。知らずば云うて聞かさう。コレ、侍ひの足にかけて蹴られるを、萬歳傾城といふわいやい。

竹〽誠にめでたう候ひける。

しかも足駄履いて蹴るやら。

竹〽年立ちかへる足駄にて、誠にめでたう候ひける。

併しながら、何も身すぎぢや、どんなよい衆に蹴られても損はゆかぬ。アヽ、慾を知らねば身が立たぬ。

竹〽慾若に御萬歳、年立かへる足駄にて、誠にめでたう候ひける。

侍ひも蹴れば町人も蹴る、町人も蹴れば伊左衛門も蹴る。蹴る／＼／＼。コレ、喜左、餅でも米でもやつて去なしや。

竹〽譯も涙の捨て詞、煙草引寄せ吹く煙管、そらさぬ體にてゐたりける。

常〽夕霧涙もろともに、恨みられたりかこつのは、色の習ひといひながら、それは浮氣な水淺黄、思ひ染めたその日より、こんな縁が唐にもあろか、派手な浮名が嬉しうて、人の誹りも世の義理も
竹〽白紙に書く文にして
常〽返事とる手も心急き
竹〽口舌の床のよしあしも
常〽嬉しいにつけ悲しいに、つれて忘れた事はない。
竹〽それにお前の悪性を、わしが案じは移り氣な、外にもしやと云ひがゝり
常〽去年の暮から丸一年二年越に音信なくそれは幾世の物案じ、それゆゑにこの病、痩せ衰へたが目に見えぬか
竹〽煎藥とねり藥と
常〽鍼と按摩でやう／＼と、命つないでたまさかに、逢うてこなんに甘えうと、思ふ所を逆さまな、こりや酷らしいどうぞいの。
竹〽憎やと膝に引寄せて。
常〽さすりつ。
竹〽泣きつ聲をあげ、
常〽譯も、
竹〽性根も、
常〽なかりけり。
ト文句のうち、口紅の長文を使ひ、よろしくある。踊り地、バタ／＼になり、奥より喜左衛門お梅、仲居皆皆出て來り
うめ　申し／＼お二人樣、お喜びなされませ。阿波の大盡樣と申しまするは、あなたの御家來忠七さまと申す方にて、あなたのお内の首尾も直り、追つけこれへ打揃うて、お迎ひにお出でなさるとて、裏口よりお歸りなされましたわいなア。
伊左　なんと云やる。そんなら内の首尾が直つたと云やるか。
喜左　何に致せ、此やうなおめでたい事はござりませぬ。
ト向うを見て
と申すうち、もうそこへ。オ、イ／＼。
ト呼ぶ。早渡りになり、藤明きの若い者十人、千兩箱を銘々持ち、後より着流しの若い者も出て來り
皆々　エッサッサ／＼／＼。
ト舞臺へ來り、よき所へ積み上げる。ト此うちにお梅奥より、祝儀包みを澤山、亂れ箱に載せ、持ち出て來

ろ。

うめ　サア〳〵皆の衆、御祝儀が出たゆゑに、お禮申したがようござんす。

　ト皆々へやる事。

皆々　これは有り難うござりまする。

伊左　オヽ、めでたい〳〵。延喜に一つ〆めてたも。

　ト皆々手を打つ事よろしくあつて

皆々　おめでたうござりまする。

〽家内が勇む勢ひに、つれて本陣伊左衛門、喜びの眉お開くや門松が、名も萬代の春の花、見る人毎をそつらねける。

　ト鳴り物を止め、皆々引張りよろしく見得にて

幕

廓文章（終り）

戻駕色相肩――戻り駕

戻り駕といふ趣向は、寛延元年中村座の春狂言で、海老藏の景清と、長十郎の重忠とが、駕籠舁きにやつしての仕草が初まりと云はれてゐるが、實はそれ以前にもあるので延享元年十一月市村座で、尾上菊五郎の常磐御前を宗十郎の宗兵衛と宇左衛門の宇兵衛が駕籠に乘せて來る趣向がある。先づこれが初めらしい。それを所作に取組んだのが本曲で、天明八年十一月の中村座「唐相撲花江戸方」といふ顏見世の四建目淨瑠璃、これが二番目へ筋を引く趣向であつた。非常な當りで、以來絶えず上場され、今に流行を極めてゐる。顏見世淨瑠璃としては最も興行度數の多いものであらう　この作者は初世櫻田治助で、常磐津は文字太夫と鳥羽屋里朝、振附は西川扇藏、役割は次郎作が初世中村仲藏、與四郎が四世松本幸四郎、たよりが松本米三郎であつた。唄の冒頭に「年の三歳を待ちわびて」とあるのは、仲藏が三年ぶりで大坂から歸つて來た事を當込んだものである。

戻駕色相肩（戻り駕）

洛陽紫野の場

役名――浪花の次郎作 實ハ石川五右衞門。東の與四郎 實ハ眞柴久吉。禿、たより。

常磐津連中

本舞臺、一面の平舞臺、すべて紫野の體よろしく、日覆より紅葉の吊り枝、通り神樂にて幕明く。

ト頭取出て、淨瑠璃名題、太夫連名、役人替名の觸れあつて入ると、下手の張り物を打返し、爰に常磐津連中居並び、淨瑠璃になる。

〽新玉の、年の三歳を待ちわびて、待たるゝ顏に待つ顏な合せ鏡の蒲團さへ、色でもてるか四つ手籠。

ト合い方、鳴り物入りになり、向うより與四郎、次郎作、いづれも袖無し羽織、駕籠舁きの形、四つ手駕籠を擔ぎ、出て來る。

〽花が人呼ぶ浮氣の花か、月に浮るゝ浮氣な月に、浮きに浮かるゝやれ月花に〽折れこみぢや〽合點ぢや〽下戶は酒手で萩の花〽呑みこんだ〽樣はなる口、こちや色上戶、紅葉も風にやつし事、拍子とりどり來りけり。

ト振りあつて舞臺へ來り、駕籠を下ろし、兩人、前へ出て

與四　ヘエン、罷り出でたる者は、東の與四郎と申す、駕籠舁きにて候ふ。

次郎　ヘエン、罷り出でたる昔は、浪花の次郎作と申す、えらい駕籠舁きにて候ふ。

與四　ア、コレ〳〵、なんぼおぬしが、浪花々々と云うても、江戶のやうな紫にあるまいが。

次郎　イヤ、なんぼこなさんがさう云はんしても、江戶に又、大坂のやうな揚屋はごんすまい。

與四　ア、仲の町の燈籠が見せたいわい。

次郎　そんなら又、住吉天滿高津の祭、あのやうな賑はごんすまい。

與四　事も愚かや、御殿山に飛鳥山、上野のやうな櫻があ

三世尾上菊五郎の與四郎

るか。
次郎　ア、傳法院の鶏が見せたいわい。
與四　そんなら又、江戸のやうな結構なお屋敷があるか。
次郎　サアそれは、
與四　しやつとでも云つて見ろ。
次郎　ヤ、こいつはあやまつた。
與四　ちつとさうもござるまい。ハヽヽヽヽ、何の役にも立たぬ事を。いかい白痴な。時に棒組み、あの山々の景色を見やれ。
次郎　ドレ／＼……成る程、ア、いゝ景色だ。あれを眺めて、さらば一服いたさうか。
〽鶯は鐘山に生じて雄心自ら同すとかや〽ふりさけ見れば雪ならで、おのが羽こぼす白鳩や、雲か煙草の薄煙り、輪になる梅に鶯も、まだ笹啼きの揩火打ち、石より堅い棒組みに、角の取れたる息杖は、五枚銀杏に三つ銀杏、好い相肩の戻り駕籠。
ト兩人、煙草のむこなしあつて
與四　なんと次郎作、おいらが乗せて來た振り袖は、マアなんであらうな。
次郎　あれは島原の傾城、小車太夫の禿サ。
與四　そんなら爰へ呼び出して、島原の廓の話しを、聞かうぢやあるまいか。
次郎　それはよからう。サア／＼、姐さん、爰へお出／＼
〽谷の戸明けて鶯の、まだ里馴れぬ風情にて、面はゆげなるその素振り。
ト駕籠よりたより、禿の形にて出て
たよ　申し、爰はマア、何と云ふ所でござんすえ
與四　爰は紫野といふ所サ。時に姐さん、なんと、島原の廓話しを、話して聞かせる氣はないか。
たよ　サアそれは。
與四　その代り、おれも江戸の吉原の色事を、後で聞かせるワ。コレ、棒組み、おぬしも新町の話しをする氣はないか。どうだ／＼。
次郎　さう云へば、おれも又、新町では花をやつたものよ、この駕籠舁きに引かへて、紋日物日の出立ちは、腰巻き羽織一つ前、よしや男の丹前姿、ゆりかけ／＼廓通出立ち、ア、見せたいわい。
與四　さうであらうよ。とても事に、その話しか、聞きたいな／＼。
次郎　成る程、話して聞かさうが、肝心の大小が無い。

與四　オットそこらは合點ぢや。
ト息杖を二本取つて出す。次郎作、これを大小のやうに差して
次郎　さらば話して聞かさうか。
〽これも昔らし風俗と、其まゝ取つて掴みざし。
ト丹前の合ひ方になり、次郎作に禿附き、六法の振りあり
〽また昔へに立返り、振つて振り出す花吹雪、ふり出すふり出す花の雪よの、腰卷き羽織雲の帶、上の町、どつこいト下の町、どつこい、中の中のノヽ中の町。
ト振りあつて
〽棲に焦れて吉原の、薫りゆかしき一つ前、どつとはめて、どうした、流石東の男山。
次郎　來いよ。
與四　ネイ。
ト與四郎出て、振りになる。
〽おゝは元來使はれ者よ、今度この度召された、機轉きかせて智慧の輪出して、やるぞ白紙、文箱ぢざう〽衆生清度に色がある、晩にござらば窓からござれ、窓は廣かれ身は細かれ、忍び來る夜のその風俗は、戀の奴の通り者。
サア、これからは、相方の女郎が無くば話されぬわえ。
次郎　コレ、この子が禿でなくばなア。
たよ　そんなら、わたしが禿ゆゑ、その相手にはなられぬかえ。オヽ、辛氣。
〽禿々と澤山さうに、云うておくれな譯見習うて、やがて惡性を島原の、ませより染むる藍の花、外で弄られ內では這かれ、ほんに身も世もあられ降る、雨の柳の出口まで、幾度通ふ小夜千鳥、なくが所在か味氣なや。
トたより、振りある
次郎　ヤンヤノヽ。どうも云へぬ。これでマア、京大坂の話しは濟んだといふものだ。サアノヽ、これから江戶の吉原話しを、與四郎、賴むワノヽ。
與四　先づ、おれが色事といふは、江戶町でなし、二丁目でなし、角町京町小見世でなし、河岸でなし。
次郎　そして、どこぢや。
與四　恥かしながら、鰒汁よ。
次郎　ハヽア、鐵砲か。
與四　あやまるの
次郎　サア、その話しが、聞きたいノヽ。

與四　問はれて云ふも恥かしいが、廣袖であらうが、細帶であらうが、逢ひたいといふ日にやア闇雲よ。雷門にも柳橋にも、猪牙も四つ手も多けれど、奴を思へば日和下駄で、帶を締め直して、ズッと駈け出すせうがにやア。〽地廻り筋に轡絞る、對の手拭頰かむり〽月待ち日待ち臺町や、田町にござる法印さんの、守りお札や占屋さんよく相性も木性と火性、吸ひつけ煙草の火皿さへ、鐵砲見世の氣散じは、短かき夜半をきりぎりす、枕も床も上草履、浮氣同士の仇くらべ、廻らば廻れ女氣の、口舌せぬ日も茶碗酒、こは馬鹿らしいおやないかいな。

ト與四郎よろしく振り。

次郎　アヽ、成る程、きついものだ。イヤ又、新町の揚屋といふた、別なものよ。太夫天神、引舟がよひ、限りの太鼓を打つまでは、それは〱賑やかな事。なんと話して聞かさうか。

與四　こりやア面白からう。サア〱、所望ぢや〱。〽先づ揚屋の數は十二軒、十二因緣を表したり、九品の淨土の九軒町、瓢簞町の名に浮かせ、彌陀の西口つきぶしの、唄三味線の音樂に、虛空に花を降らせつゝ、歌舞の菩薩の揚屋入り、戀の山崎、名も高島屋、色の世界に住吉や、通ひ馴れたる新町の、井筒にかけしやまと唄、ゆかりのはしの兼好が、酒に底なき杯も、直ぐには受けぬ橫町の、童子と開けば茨木屋、手許みやこと捻ぢ上戶、あれ曉の明星が、西の扇屋、東にも、ちらりちらりちらりと千鳥足、生野暮薄鈍情なし手なしの癖として、惡洒落云うたり大通仕打はあるまいか、どういふ理窟か氣が知れぬ。

トこれより與四郎と二人の振り事。

〽と太夫が心を引いたれば、そこで彼奴めもむつとして、コレ、この胸づくしを此やうに、取つた方から濺ぐみ、そりやマアなんの事ぢやいな、わたしやお前に打込んで、身を盡したる浪花潟、梅よりすいな殿振りに、馴されて咲く室のやみ、春も屛風の冬籠り、抱いてねじめの三味線も、いとし男へ進へ唄〽やがて東へ行く身ぢやものを、袂に露を置炬燵、蒲團の內の惡洒落が、この紫の江戶自慢、擴めしやんしよか、とても邪慳な氣に惚れた、女子心の一筋は、これこの癖と手を取りて、引寄せ入るゝ懷の、內より取出す錦の香爐、こたたに出づる連判狀。

ト振りのとまりに、次郎吉は系圖の一卷を、與四郎は

香爐を落し、互ひに取上げ見て

次郎　こりやコレ違判。

奥四　千鳥の香爐。

兩人　それよ。

ト兩人、互ひに一品を拾ひ取り、キツとなる。たより出て

たよ　アヽモシ

〽錦おるてふ木々の色、濡れてふる夜の色見草、時雨に染める後朝は、可愛らしいおやないかいな、可愛らし、可愛らしさと夕日映え。

ト兩人、所作ダテもやう。

〽たよりは物馴れ、言馴れて、煙管を時の杯と、二人が仲に差出せば、互ひに我れから我れからと、早くも心解け合うて、目元に含む笑の眉、開くや花の親見世は、額もしかかける次第なり。

ト兩人、立廻りあつて、二人見合ひ、中にたより入り引張りの見得、よろしく、道具轉變にて、

幕

戻駕色相肩（終り）

今やう高野物狂

――高野物狂

謡曲の「高野物狂」は狂亂物として淋しい所爲か、一向芝居の方には入つて來なかつた。恐らくこれが初めてゞはなからうか。弘化四年十一月、市村座の顔見世狂言「源家八代惠剛者」の中へ作り込まれたもので、多田の藏人が能師竹之進と僞り、宗盛の館へ入込んだが、平家方ではそれを知つて、妻と娘を捕へ置き、藏人に「高野物狂」を舞はせながら、面前で責めるといふ筋で、ソツクリ「艷競石川染」石田の局の趣向を持つて來たのである。作者は三世櫻田治助で、藏人は十二世市村羽左衛門が勤めて評判がよかつた。そこで明治元年二月、守田座で「富貴自在魁曾我」といふ、いろ〳〵源平時代の寄せ集め物をやつた時、この一幕を切り離して附けた、爰へ收錄したのは二度目の所演の脚本である。この時は藏人が中村芝翫、待宵が坂東三津五郎、小櫻が坂東吉彌で、岸澤は三登勢太夫と式佐、振附は花柳壽輔であつた。

今やう高野物狂（高野物狂）

宮島假御所の場

役名――近藤判官職近。瀬尾六郎盛國。左大辨鳴明。唐使、ダリン。舘の六郎榮利。物川藏人實ハ多田藏人行綱。同妻、待宵。同娘、小櫻。

岸澤連中

本舞臺、向う一面の網代塀、上下紅白の梅林、日覆より、同じく吊り枝。爰に紺看板の中間三人、竹箒手桶を持ち、立ちかゝり居る見得。白囃子にて、幕明く。

三人　よんやしよ。

中一　サア／＼、これからは此方の體だ。梅でも見ながら一服やらう。

兩人　それがいゝ／＼。

ト三人、下に居て

中一　時に、今日は、なんでこんなに方々掃除をするのだ。

中二　サア、深い樣子は知らねえが、清盛さまが禁庭へ、出家になりたいと願ひを上げ、その返事もないうちに、この宮島へ來てしまつたと云ふので、わざ／＼爰まで内勅とやらが來るに依つて、それでこんなに掃除をするのだ。

中三　内勅と云ふのは、草鞋でも作るのか。

中一　解らねえ奴ぢやアねえか。内勅と云ふのは、禁裏様から内證のお使ひだワ。

中三　内證の使ひぢやア、碌な事ぢやアあるめえ。大方申し兼ねたが、少々づゝ御無心ぢやアねえか。

中二　馬鹿を云へ。こちとらぢやアあるめえし、そんな仕事があるものか。

中一　オヽ、その仕事で思ひ出したが、まだ仕殘した仕事がある。能舞臺の庭先も、綺麗に掃除をしろと云ひ付かつたぜ。

中二　違ひねえ／＼。今日は能役者、物川藏人が、清盛さまが御剃髪なさるゝ御祝儀だから、佛に縁のある、高野

詣でとやらの能があると云ふ事だ。
中三　おれ達も草臥れて居るから、高野詣でなら明後日にすればいゝに。
中一　なんだかてめえの云ふ洒落は、唐人の寐言で、ちつとも解らねえ。
中二　カウ、唐人と云やア、今日は唐人も來るとよ。
中三　この節、唐人は珍らしくねえ。
中一　併し、なんだかいろ／＼な者が舞ひ込むぢやアねえか。
中二　また用をきかねえうちに、早くしまつて、別當の臺所で一杯やらう。
兩人　それがいゝ／＼。
ト三人、下手へ入る。これにて、道具幕、切つて落す。
本舞臺、一面、御簾の道具になる。
ト向う揚げ幕にて
呼び　お勅使、お入り。
ト直ぐに、東の揚げ幕にて
呼び　唐使の來着。
ト上手にて
盛國　お勅使、唐使、一時の入來。近藤氏にもお出迎ひ。
廣近　心得ました。
ト下がり葉、唐人囃子になり、上手より、盛國、侍烏帽子、赤ツ面、半素袍、大小。廣近、同じ拵らへにて出て、兩人、上下に扣へる。此うち、向うより、左大辨鳴明、冠り装束、附け太刀、笏を構へ、沓を穿き仕丁、朱の爪折傘をさしかけ出る。外に仕丁、沓臺を持ち、半素袍の雜掌四人、前後を圍ひ出る。これと一時に東の揚げ幕より、ダリン、唐使の拵らへ、異形なる沓、冠にて、下官、瓔珞の下がりし傘をさしかけ、外に下官三人付添ひ、一人は朱塗りの臺へ唐裝束を入れし箱を持ち、後より、六郎繁利、衣裳上下、大小にて附添ひ出て、双方花道にとまり
盛國　これは／＼、お勅使鳴明卿には、遠路の御入來。
廣近　唐使ダリン卿にも遥々の來着。
盛國　かた／＼お役目。
廣近　御苦勞千萬に
兩人　存じまする。
鳴明　高倉の宮内勅に依つて、罷り越したる左大辨鳴明、方々出迎ひ大儀にこそあれ。

盛國　ハハツ、主命に依る出迎ひの我れ〳〵、お勅使樣の有り難きお詞。

廣近　それに付いてもダリン卿、來着に付き、路次の警固の役目として、館の六郎業利どの。

兩人　御苦勞千萬に存じまする。

業利　これは〳〵、何れもにも、お勅使唐使待ち受けの役目、御苦勞千萬。拙者とても主命受けて今日の役儀、さりながら、お勅使は猶更の事、唐使とて大切なるお客人、粗略ならざる警衛の某、この儀お察し下さるべし……何はしかれ唐使には、出迎ひの主へ、御挨拶あつて然るべう存じまする。

トダリン、思ひ入れあり

ダリ　波濤順風とうらい〳〵。

下官　臧場隆榮大都督。

ダリ　業昌目出度し。

下官　大入々々

盛國　何は然れ、お勅使始めダリン卿にも遠路のお疲れ。

廣近　いざ先づこれへ、お通りあつて

兩人　御休息遊ばされませう。

ト矢張り右の鳴り物にて、兩花道の人數、舞臺にて、入れ替り、鳴明、上手、ダリン、下手、皆々よろしく住ふ。

業利　ハツ、鳴明卿にはお勅使のお役目、御苦勞千萬。拙者事は清盛の近臣、館の六郎業利と申す者、お見知り置かれ下さりませう。

鳴明　ホヽ、オヽ、勅使を重んじ、過分の挨拶。鳴明、祝着に思ふぞよ。

業利　ハツハア。

鳴明　して、清盛には、未だ出家は召さるまいな。

盛國　主人清盛落髮の儀は、今日申の下刻なれど、未だ事調はざると申すは、あれなる唐使入來の儀。

鳴明　ナニ、唐使入來を相待つて、清盛落髮なすと申すは餘國の下知を受けての儀か。

ト少し血相を替へて云ふ。

業利　アイヤ、畏れ入つたるそのお疑ひ、中々持ちまして餘國の下知を受くるには候はねど、唐使を待つて落髮なす時は、兼ねてお聞きも及ばせられん、清盛嫡子重盛事、唐土へ三千兩の黄金を送りし謝禮として、彼の地より小松どのへ、王服の捧げ物、まつた清盛落髮も、重盛菩提ゆゑ、內府存生の砌りより、信仰ありし當宮島の辨財天、

これへ詣で、重盛が筐となりし唐服を着用なして落髮。然らば殊更、佛意に叶ふ道理と、それゆゑの儀にござりまする。

鳴明　すりや、唐使には、その王服持參よな。

ダリ　見覽持參、その通り〳〵。

ト唐服の入りし箱へ指さして云ふ。

下官　中明け見い〳〵。

ト箱の蓋を取らうとする。

鳴明　ア、、イヤ〳〵、一見なすに及ばねど……ア、、それに付けても、いま清盛入道なし、宗盛とのへ政務を讓るその時は、例へ宗盛聰明にもせよ、未だ若手、四海の守り……イヤサ、守る治世も平家の武德、彼れこれ思ひ合すれば、只惜しむべきは重盛どの。

繁利　仰せの如く、小松どの御存生にあるならば、いよいよめでたき平家の御代、それに甲斐なくならせ給ひしは、臣等が歎き如何ばかりと、憚りながら御推量下さりませう。

ト少し愁ひの思ひ入れ。鳴明も落淚のこなし。盛國、廣近、思ひ入れあつて

盛國　いくら人に惜しがられても、命數來つて死ぬ程御不運。それに引替へ宗盛卿、例へ御舍弟に生れても、清盛公落髮あれば、云はずと跡目は宗盛公。いくら智者でも賢者でも、諺に云ふ死ぬ者貧乏。宗盛公は御果報人。

廣近　左やう〳〵。餘り聖人賢人も、行ひ過ぎれば馬鹿とやら、要らざる佛者に惑はされ、平家菩提の爲などゝ、無駄な黃金三千兩、異國へ送り給ひしは、なんの眞似だか合點が參らぬ

鳴明　いやとよ兩人、其方達が頑なに思はゞ、さも存ずべけれ、これ皆重盛が深き智略、平氏菩提とあつて、異國へ金帛を送りしは、全く我が朝の仁德を、異國へまでも輝かし、鉾を用ひず靡かせん

ト、ダリンと顏見合せ、思ひ入れあつて、この時、音樂になる。

イヤサ、浪風立たぬ世の治まり。神をいさめの舞樂の調べか。

繁利　あの鳴り物は主人清盛、落髮の嘉儀とあつて、能役者の物川藏人を召され、佛門に入る祝ひなれば、高座詣での能の催し。まだその刻限にはあらねども、お勅使にも、物見の間へお入りあつて、暫らく御休息遊ばされませう。

鳴明　然らば其方が詞に任せ、暫時休息いたすであらう。
繁利　左様ござらば
三人　お勅使様。
鳴明　皆の者。
三人　ハツハツ。
鳴明　唐使大儀。
　ト、ダリンへちよつと會釋して、下がり葉になり、鳴明、先に、雜掌付添ひ上手へ入る。
繁利　さてハヤ唐使には、最前よりさぞかし御退屈。路次の疲れを御保養の爲
盛國　兼ねて設けの御酒宴を、爰にて召されば御一興。
廣近　用意の酒肴。
兩人　急いでこれへ。
　ト奥にて
女八　畏まりました。
　ト管絃になり、官女八人、酒肴を持ち、出て來り
官一　今日唐使のお出でをお待受けとして、兼ねて用意の九獻の土器、その取り〴〵のお肴も、見ぬ唐土の古事に
官二　酒は池田の貢ぎ物、肉の林にいや増る、
官三　佳肴珍味の品々の、數を盡して今日爰へ

官四　持參の品々、いざ聞し召し
皆々　遊ばされませう。
　ト繁利、こなしあつて
繁利　イヤナニ、ダリン卿、方々をお待遇とあつて、夥多の官女が齎らせし、これなる酒肴、爰にて暫時の酒宴遊ばされ、然るべう存じまする。
ダリ　妙であかりき、さん妙〳〵。
廣近　ソレ、方々、お酌〳〵。
　トこれにて、官女皆々、杯をダリン、下官の前へ持ち行く、酌をする事、皆々酒を呑む事あつて、ダリン、官女を見て、思ひ入れあつて
ダリ　含色眼中閨中よかりきホウシン。
下官　半白半赤。
皆々　美艶々々。
　ト皆々女形の器量を譽める。
官一　ほんにマア、何を仰せらるゝやら、私しには解し難い。湖月源氏の手爾葉より
官二　どうやら解らぬあのお詞
官三　異國のお方といふものは
官四　替つたもので

皆々　あるわいなア。
　ト思ひ入れ。繁利、思ひ入れあつて
繁利　成る程、これは初めて聞かるゝ唐音は、官女達に解し難きは尤も。いま唐使の申されしは、其方達が粧ひを唐使賞味のお詞‥ありや其方達を、お誉めなさるのでござる。
盛國　ナニサマ、玉簾れ深きその内に、常に居らるゝ官女達に、唐使のお詞。
廣近　解らぬも尤も。初めて聞きし我れ／＼さへ、通辯なくては解し難い今の一言。
盛國　これが下世話に云ふ
廣近　唐人の寝言とやら
　ト此の時、ダリン、下官、皆々思ひ入れ。
皆々　ハックション／＼。
　ト嚔をして、よろしくをかし味。肩を打ち、いろ／＼あつて
ダリ　大杯急廻、引風悪しゆゑん／＼。
　ト思ひ入れあつて、有り合せし杯を取上げる。これにて、官女、酒を注ぐ。ダリン、引かけ呑んで
ホウ‥‥妙かん／＼頓杯々々。
　トよろしく杯を皆々へ廻す事。これにて、下官皆々、酒を呑み、よろしく納まる。
盛國　イヤハヤ、誠に世話の焼けたお客人。取持ちせうにも我れ／＼が詞は通せず、小松どのが平家菩提の為とあるなら、いま日本那智高野、諸寺諸山へ、寄付すべきに、不自由たらしく異國まで、祠堂に送りし金ゆゑに、かゝる唐使の来朝も、云はゞ國帑の大きな費えサ。
繁利　アイヤ、唐使来臨のこの場にて、出る儘の雑言、盛國どの、扣へ召されい。
盛國　イヽヤ、扣へ申さぬ。我が朝の寶を異國へ渡すは、云はゞ日本の恥と申すものだ。
廣近　いま日本は平氏一統の世となれば、日本の恥は平家の恥だワ。
盛國　それを何でも好い事と心得、重盛公へ阿諛つても、逝去召されしその上は、最早叶はぬ繁利どの、それでも貴殿あらがひ召さるか。
繁利　イヤ、あらがひは仕らぬが、重盛公を蔑みする詞、殊に今日爰へ持参せしは、いま貴殿も申せし如く、小松どのゝ送られし、彼の黄金三千両の納受の書翰、まつた聖王即位の装束を、重盛卿へ送り越せしに、萬里の波濤に

時日移りし其うちに、御逝去あれば清盛公にも、愛情深く思し召され、せめては追福の爲とあつて、聖王即位の装束を、着服あらんと今日の仰せ。それをそしるは清盛公を嘲る同然。それでも兎斯う云ひ召さるか。

兩人　サア、それは。

繁利　我が君今日着服の装束へ、批判召さるゝ廣近盛國、今日唐使を旅館より誘引なし、装束を持參いたせしは、清盛公の重き嚴命。それでも拙者が誤りか。

兩人　サア、それは。

繁利　但し御兩所、云ひ分ござるか。

兩人　サア。

繁利　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

繁利　御兩所、御返答は如何でござる。

ト三人よろしく思ひ入れ。この時、ダリン、こなしあつて

ダリ　筆者に張野暮らんしきい仲よか〳〵。

ト立ち上がり、双方を宥める思ひ入れ、女形皆々こなしあつて

官一　お詞には候らねども、何やらお客人のきつうお心遣ひの様子、只何事も

皆々　この場限りに。

繁利　官女達の詞に任せ、如何にも此まゝ。これと申すも主命を、重んずるより詞の爭ひ……何は格別、ダリン卿には今一献。

官一　ドレ、お酌をば

八人　致しませう。

ト長柄を取上げる。ダリン、皆々も早く呑めと思ひ入れ。

ダリ　ト、酩酊く々々。

下官　のうはいすいらん、よかりき〳〵。

繁利　ダリン卿始め方々には

廣近　別當方にて暫時休息。

繁利　然らば拙者は御装束、衣紋司へ手渡し申さん。ダリン卿には別殿へ。

皆々　先づお越しあられませう。

ダリ　任進宮中。

皆々　ゆこらい〳〵。

ト唐樂になり、ダリン、先に下官二人、繁利、女形、皆々付添ひ上手へ入る。盛國、廣近、殘り、思ひ入れ

廣近　あつて瀬尾どの。

盛國　コリヤ。

トあたりへ思ひ入れ。

兼ねて貴殿と申し合せし如く、御父清盛公、佛門に入り給へば、天下の政治は申さずとも、宗盛卿は知れた事。荷擔の我れ／＼、立身出世は心の儘。それに付けても先達て、お捕へになりしあの待宵親子の奴等、我れ／＼手を替へ品を替へ、いくら責めても白狀せねど、慥かに親子は源氏の餘類。

廣近　あの待宵には宗盛卿、深く御執心なさるれど、得心せぬは能役者、物川藏人に娘の面體、その身その儘よつく似たるは、彼奴も曲者、慥かに源氏の討ち洩らされ。必定夫婦に疑ひなし。

盛國　今日能の催ふしも、宗盛卿の思し立ち。藏人が面前にて、女郎親子を責め問ひなば、いくら物川名人なりとも、自然と體を崩すは必定。そこを見定め、有無を云はさず、搦め捕らん此方の計略。

廣近　それに付けても、最早お能に間もあるまい。

盛國　これより直ぐに女郎親子を、引摺り出して一詮議。

廣近　拙者も共々。

盛國　ぬかり召さるな。

廣近　心得ました。

盛國　ござらつせえ。

ト兩人、キッと見得。早舞になり、上手へ入る。あと知らせに付き、御簾を切つて落す。

本舞臺、三間の間、破風造り四本柱、中足の能舞臺、上下、下座口、下の方、橋がゝり、欄干付き大柱、揚げ幕、この前、一二三の松。奧へ寄せて、岸澤連中居並び、上の方、柴垣の内、紅白梅の植込み、日覆より、同じく吊り枝、好き所に綵細工の松を置き、幕の内より、向う鏡通りに囃子連中、黒裝束日入りの着付け上下にて居並び、今樣始まりと呼ぶ、一セイにて、道具納まる。

謠〽誘はれし花の行くへを尋ねつゝ、風狂じてや狂ふらん。

トかけりになり、藏人、袖の狹き素袍、上下、袖脱ぎかけ、病ひ鉢卷にて、櫻の枝に小結び烏帽子を付けたるをかたげ、中啓を持ち、揚げ幕より、走り出て、橋

初演當時の繪番附

がゝり一の松にとまる。

〽朝もよし、紀の關越えて名に聞きし、これや高野の山深み、我が古里を思ひ出の、猶我が主君戀しやと、狂ひ狂うて登るらん。

ト　よろしく舞臺へ來る。

〽尋ぬる人を道の邊の、便りの櫻折あらば、などかは君に逢はざらんと、三位の松に掛け烏帽子。

ト　櫻の拵らへ付けたる烏帽子を松へかけ、よろしくあつて、フト心付き

藏人　なう〱、それに在します御方は、主君春光どのにては候はぬか。

〽君の行くへをそこはかと、尋ねさ迷ひ分け登る〽花山口の櫻花、かざして稚兒が瀧津瀨に、俤うつす鏡石、愛しとしめて逢はぬ夜は、悋氣蛇柳柳髮、誰が櫛の齒にかかるとも、無明の橋と二世かけて〽汲みやしつらん〽玉川や。

ト　この時、上手の奧にて

盛國　いそふれ、方々

盛近　キリ〱歩め。

ト　時の太鼓になり、橋がゝりより、待宵、着流し、好みの拵らへ、木綿繩に縛められ、奧女中一人、襷にて梅の枝を持ち、繩元を扣へ出る。上手より、盛國、大紋脫ぎかけ、股立ちにて出る。上手、梅園の蔭より、小櫻に繩をかけ、足輕、割り竹を持ち、引立て出る。後より、廣近、黑素袍、股立ちにて、付添ひ出て

足輕　下に居ろう。

ト　盛國、廣近、床几にかゝる。小櫻、藏人を見上げ

小櫻　ヤ、あなたは。

待宵　ア、コレ。

ト　目交ぜで押へる。藏人、恟り思ひ入れあつて、氣を替へ。

藏人　なう〱、これは道通りの狂人にて候ふ。

盛國　今樣聞らく。

藏人　ハツ。

ト　扣へる。

廣近　ヤイ、小びつちよめ。西八條は元より、この宮島の假御所でも、上臈方より外、奧入りはさせぬ掟嚴しきに、君の御座所へ、何用あつて忍び入つた。

盛國　サア、とち女郎め、最前より手を替へ品を替へ、云ひ聞かすに、宗盛卿のお心に隨はぬ、正しく源氏方の出

縁あつて、入込んだに違ひあるまい。夫の素性云はさにやおかぬ。

奥女　サア、眞直ぐに

兩人　白狀いたせ。

ト打ち据ゑる。

小櫻　サア、お廊下續きの奥殿ゆゑ、どのやうな結構な所やらと、思はずウカ〳〵參りました。御免なされて下さりませ。

待宵　下樣の身を以て、奥御殿まで參りましたは、新參の不束、我が身で我が身の詰所を忘れ、ツイ迷入りを致しました。元より夫も親もない身の上ゆゑ、御奉公に上がりました、これより外に申し上げます事は、ござりませぬわいなア。

盛國　イヤ死太いめんなごめ、只心なく參りしとは、云ひ譯暗い。

廣近　さう吐かしやア背骨を割つて

奥女　斯うして云はす。

足輕　白狀いたせ。

兩人　白狀いたせ。

ト奥女中、簓の枝にて、待宵をこぢ上げる。足輕、割り竹にて、小櫻を打ち据ゑる。この時、向うバタ〳〵になり、上下侍ひ、走り出て

侍ひ　ハツ、申し上げます。兩人の拷問に構はず、藏人には今様を、勤めよとの御上意にござります。

盛國　畏まつたとお受け申せ。

侍ひ　ハツ。

ト引返して入る。

盛國　如何に藏人、宗盛卿には、アレ、正面の御簾の内に御上覽なるぞ。

廣近　この者どもが拷問に構はず、只今の後を

兩人　早く〳〵。

藏人　ハツハツ。

ト兩人へこなし。

待宵　ヱエ、口惜しい。とても責められ死ぬならば、たつた一言可愛やと。

小櫻　そのお詞を冥途の思ひ出。

盛國　何ゆゑ猶豫、疾く今様を始めぬかえ。

廣近　イザ、拷問。

奥女　キリ〳〵白狀。

ト打ち据ゑる。

待宵 小櫻　あれえ。
藏人　オヽ、可哀や……可愛の七ツ子が。
足輕　キリ／＼白狀。
ト打ち揺ゑる。藏人、オ、と思ひ入れ。
〽いたいけな事ぞうた、殿御が欲しいと謡うた、吉野初瀨の花よりも、戀しき我が子二世の妻。
ト愁嘆の振りあつて
限りなき世に。
〽限りある〽誘ふ夕べの仇嵐、とても散るべき花の手車に、乘せて渡ろの妹脊の川を〽それは冥途の三津せの川に。
待宵　チエヽ、お嬉しう
小櫻 待宵　ござりまする。
盛國　ナニ、嬉しいとは。
〽三世の契り遂させねば、これまで尋ね紀伊の國、高野の山の蔭頼む、主君に逢ふぞ嬉しき。
盛國　ヤア、最前よりの立振舞ひ。さては能師と云ひしは僞はり。
廣近　源氏の餘類に違ひねえ。おのれを落こして。
ト廣近、足輕、舞臺へ來り、藏人にかゝる。ちよつと立廻つて
藏人　オヽ、斯く見顯はさるゝ上からは、名乘つて聞かす我れこそは、清和の嫡流、多田藏人行綱。
待宵　連れ添ふ待宵、娘の小櫻。
皆々　さてこそな。
トこの時、藏人、廣近の刀を拔き、足輕を切り返し、待宵、小櫻の縛めを切る。待宵、盛國の差添を拔き取り、打つてかゝる。盛國、拔き合せ、廣近、小櫻を抱き上げ
廣近　當座の人質。
盛國　ぬかるな友達。
廣近　爰構はずと。
廣近　合點だ。
〽隱し持つたる用意の白刃、受けつ流しつあしらふ難波、なんなく刀打ち落され、逃げるを袈裟切り拜み打ち、目覺ましかりける。
ト早舞ひになり、廣近、小櫻をひん抱き、一散に向うへ入る　あと盛國、藏人と立廻り、待宵、廣近と立廻り、キッとなつて。大太鼓入り、誂らへの鳴り物にて

幕

今やう高野物狂（終り）

女夫酒替奴中仲

鞍馬獅子

安永六年十一月、市村座の顔見世狂言「稚兒華表飛入狐」の大切淨瑠璃で、可成りに古い物でありながら曲の上に舞踊に、今に廢らない名作である。作者は中村重助で、非常な評判ではあつたが、大分長いので、いま殘つてゐるのは太神樂と狂女の前半「取縋られて太神樂」の件までゞ、爰までは完全に傳存されてゐるが、あとの狐の件は廢れてしまつたのである。初演の富本は、豐前太夫に名見崎德治、振附は西川扇藏、役割は、靜御前に三世瀨川菊之丞、喜三太に初世中村仲藏、雄狐に九世市村羽左衞門、雌狐に初世中村富十郎、といふ、舞踊の名手ばかりであつた。その後、天保九年十一月の森田座に「鞍馬獅子其雛形」といふ淸元が出た。原曲を短かくして、常夜の前と太神樂の踊にした。この時の型が今に殘つてゐるのである。いつの頃變つたか、今では靜御前を卿の君と變へて演じるのが例であるが、後の狐の件が無ければ、芝居の筋に關係はないので、卿の君でも靜御前でも同じ理窟であるが、これは勿論靜御前が正しいので、前幕に熊坂長範隱れ家の場があつて、長範は娘靜の爲に自殺する。惡人から牛若が死んだと僞はられ、靜は狂氣して、牛若の形見だと云はれた長刀を持つて驅け出る幕があつたのである。

女夫酒替奴中仲（鞍馬獅子）

御裳濯川の場

役名──靜御前。太神樂・角兵衛 實ハ御廐の喜三太。山田ヶ原の雌狐。日向ヶ嶽の雄狐。

富本連中

本舞臺、すべて御裳濯川の體。日覆より紅葉の吊り枝、山颪しにて幕明く。

ト頭取、口上觸れあつて入ると、下手の振り物を打返し、富本連中出語り。

〽嵐の誘ふ花の雪、散れば狂いて棚騒〽雪に飛んで散亂し、羽風に似たる白妙も、狂ふ狂女の姿かや。

ト此うち向うより靜御前、病ひ鉢卷、長刀を持ち、物狂ひの體にて出て來り、花道にて振りあつて

言御 コレ、その人に物問はう。妾が尋ぬる公達の

〽綾の狩衣たをやかに、十六七の細眉に、鐵漿くろ〲と粧ひし、お兒の旅におふ事の、もしやちらりと三日月ならば、教へてたべの里人と、うつゝ涙に譯もなき。

ト よろ〱く振りあつて、本舞臺へ來り

ヤヽ、なんぢや。我が君様は鞍馬にぢや。

〽鞍馬の里は八瀬小原、小原木可愛い〱、可愛い小原女曳く牛に、戀しき人を打乘せて、引いて行きましよ我が故郷へ、小原木可愛い〱〱な、可愛い可愛いと啼く鳥に、憎や添ひ寐を起した。

ト狂亂の振り。

ホヽヽヽ。おゝをかし。いち足早に逃げて行たか。ホヽヽヽヽ。笑へ〱。

〽妾も人が笑はなん、さもし恥かしこの姿、小春へ殘る亂菊の、とりなり寫す水鏡。御裳濯川や八十瀨川、所は伊勢の神風に、つれて聞ゆる神樂唄。

ト揚げ幕にて

角兵 惡魔を拂つて、そつこでせい。

ト獅子の合ひ方になり、向うより角兵衛、太神樂の形、獅子を擔ぎ、出て來り

〽諸國めぐりに天照らす、神を商ふすぎはひに、襟に掛

けたる曲太皷、頭に獅子の二人前、一つに寄せて、打つたり舞うたり、月の朔日十五日、大晦日も元日も、股引かけの旅神樂、我れと浮かれる道草に、獅子の眞似して來りける。

ト獅子の振りあつて舞臺へ來る。靜御前見て

靜御　コレ、里人々々、爰へ來てたも／＼。

ト角兵衞恟り思ひ入れ。

〽太神樂は、側へ寄り。

角兵　見れば、お若い女中の只一人、お前方のやうな美しいお方の側へ寄つたなら、どんな太皷の、ばちが當らうか知れぬ。

靜御　ヤ、コレ／＼、其方の頭のは、そりや何ぢや。

角兵　エ、これかえ。こりやア獅子サ。

靜御　フウ、その獅子わしに貸してたも。エヽ、これを貸してくれい。

ト取らうとする。

角兵　これをお前にあげては、わしの鼻の下が干上がる。

靜御　そんならわが身、舞うて見や。

角兵　合點々々。お望みに任せつゝ、さらば神樂を、囃さうか。

ト これより神樂の踊になる。

〽そも／＼神樂のその初め、天の岩戶の屛風の内の、天の鈿女の魂膽に、神の心をとり離し、手練手管の眞實に枉木のかつらよりかけて、しなだれかつら玉かつら、長啼鳥の常闇に、しつぽり汗を角兵衞獅子、獅子はお家のてれつくてん〽つく／＼見れば、てんと堪らぬ品ものめ、誰れと寢て來た亂れ髮、どこの岩戶の睦言を、問はまほしやと寄り添へば。

ト靜御前へ抱きつく。

〽元より狂氣のうろ／＼と、長刀取つて打ちかゝる、おつと危ない鼻の先、受ける曲撥三尺の、劍に表す業物は、これぞちまきの玉鉾に、追ひ立てられて太神樂、逃げる拍子に狂ふ獅子、こなたは戀の物狂ひ。

ト靜御前、長刀にて打つてかゝる。角兵衞、恟りして逃げ、これより獅子をかむり、誂らへの合の手にて狂ひあり。

〽狂ふは獅子の冬牡丹、獅子とらでんのとふ／＼とも、逢はで果てなん我が夫の、鞍馬の方と聞くものを、鞍馬の方はいづくぞと、そこはかとなく、走れば走るうつゝなき、止むる男を振り袖に、拂ふ羽袖や飜へる、賤の小

田行くりかへし、昔を今に戀しさの、戀には廻もあるものを、戀らて行きたや逢はせてと、口説いつ泣いつ正體なく、取縋られて太神・樂乘りかゝつたる灘の舩、寄るべかねにし風情なり。

トよろしくあつて靜御前・角兵衛に縋り

靜御　サア〳〵鞍馬へ、連れて行てたも〳〵。

角兵　サア、鞍馬へ連れて參りませう。鞍馬の道は東の方から西の方・……ヤア、向うから二人商人。あれに便つて道を問ふべし。兎やかう云ふうち商人が、來るワ〳〵。

ト賑やかなる鳴り物になり、向うより酒賣りの男、饅頭賣りの女、一對好みの商人形、酒と饅頭の荷をかたげ、出て來る。

〽そのや重荷なな、さても輕々と、日永の村を賣り歩く、餅と酒とは二柱、伊勢の伊の字はいとしいいの字、色に出でそよ薄紅葉、西へ散ろか、東へ散ろかあれ明星が茶屋すぎて、爰等でさらば杖つき坂、袖を引かれる立場酒・醉うた醉た〳〵醉うたとな、あゝ危ない〳〵、あゝこれはきつい醉ひやうの、宵からおじやれが赤前垂れで、間や黑津の門の暖簾に、豆屋とかいて、業平なら入らしやんせいた。

〽えゝ〳〵きついくらひどれ、それ商ひ物の饅頭の、白子が砂に鳴の海、それで人が桑名四日市、よふぶの市にあらねども、ずんど濁らぬ酒賣りの、酒は賣れども生れつき、下戸で嬶が餅を食ふ、それで名代の女夫饅頭、妹脊酒。

〽こちらは酒が得物にて、御亭が酒を吞み次第、りうはくりんも底拔けの、醉うた他愛をおこそ村、又しても〳〵性の惡いと握られて。

〽あたゝゝゝ、あゝ久しぶりの握り餅、や、又外の女とは握り心が格別、てんと〳〵有り難い、いよこゝなさかくさの觀音樣め。

〽ほゝゝゝゝ、あゝさう云うて下さんすりや、わしも嬉しうござんすよ、よいかえ、醉はぬぞえ、もゝずんと醉はぬによつて、わしや餅屋さ、よいかいな、それおやによつて、お前の酒をわしが吞む、よいかえ、吞んだによつて醉はぬぞえ、醉うたと云はんすと、又その酒をついとこぼしてのけたらば、そりやこそ深い、川は鴨川飛鳥川、小褄からげて、ぞんぶりこ、ぞんぶりこ〳〵、ぞんぶり〳〵ぞんぶりこ、おゝつめた、おゝさむ、冷える朝霜朝霞、それをいとふが酒の德、どれその酒をと、

ひよろ／＼荷箱へこけかゝる〽あゝ危ないと起す手に、鳥が教へたしめ心、いかないつかな石薬師でも、瑠璃の壺より酒の壺、解けて流れて和泉川、父と母との仲々も、下戸と上戸の二道を、かけて商ふ女夫同士、大谷小谷打過ぎて、禰宜が五十鈴の聲につれ、御社近く歩みくる。

ト花道にて振りあつて兩人、舞臺へ來る。角兵衛、見て

角兵　コレ／＼、商人、先刻にから待ちかねた。此方へ來やれ／＼。さて、貴様達は夫婦かやの。

酒賣　夫婦とも／＼、亭主は伊勢屋酒賣りなり。

女房　女房は日向屋、饅頭賣りなり。

角兵　ヤア、饅頭賣り、酒賣り、その酒と饅頭の効能。この所で、聞きたい／＼。

酒賣　先づ酒の効能といつぱ、唐土にては

女房　アヽ、コレ／＼、まんがちな、その酒の効能も、わしが云ふわいなア。さて／＼、東西々々。

〽酒は百味の親玉にて、先づ春旦の屠蘇の酒、桃の雛酒曲水の、流るゝ霞とよみ歌や、ゆふし御見の二日酔、紀の貫之が酒瓶の、かめはやしほのふむ酒に、八岐の大蛇おのが身を、酒に呑まるゝ身の果を、御代の神棚酒德利、二つ離れぬ女夫酒、それで伊勢路の名物ぢや。

ト女房、よろしく振りある。

酒賣　また此方も、そんなら饅頭のいはれを云ふべし。東西東西。

ト酒賣り、前へ出て

〽昔々大和路に、しみ／＼ひつこい女夫あり、あか佛とて守り詰め、雨の降る日も日の六月も、ぴつたりくつたり抱きついて、顔と顔とに肌と肌、袖と袖とに物云はせ、二人が仲の子のやうに、誓紙そめたる名に寄せて、夫婦饅頭まん丸い、お腹に嬰兒のうまし國〽混沌無類、根元名代〽上々諸白〽上々饅頭飛び切り〽飛び入りすつしおし〽積みこめ〽くみ込むめつためたり、口から出次第酒機嫌、跡は他愛でしまひける。

ト酒賣りに女房摘んで振りある。このとまりに靜御前急に駈け出して

靜御　サア／＼／＼、鞍馬へ行かう／＼。我が君様に、逢はせてくれいや。

酒賣　アヽ、申し／＼、お前はお若いが、こりや狂氣なされましたな。コレ／＼、其やうに取逆上せてはなりませぬ。心を鎭めて、ドレ／＼、私しが積を押してあげませう、

ト後より抱きつく。女房、ムッとして

女房 コレ〳〵、こちの人、お前はマア、若い娘の子を捕へ、何をさしやんすぞいなう。わしや、腹が立つ、腹が立つ。

酒賣 イヤ〳〵、こりや病氣の介抱するのぢや。

女房 イヤ〳〵〳〵、聞かぬ、聞きませぬ。こなんのやうな惡性が、滅多無暗に磯せゝり、知らぬと思うてゐくさるが、よう知つてゐるわいなア。

〽これは迷惑、其方ならでかはしまの、枕二つはおれが胸に、知つてゐるではないかいやい。

女房 枕が物を云ふなれば、問うて聞きたい。サア、爰へ出して下さんせ。

酒賣 ハテ、それがどうして云はるゝもの。〽枕は木枕膝枕、自體おのれに惚れてゐる、男山のてん迚りを、括り枕でいゝ折枕、悋氣するなら手枕で、顔はり枕ふみ枕。

ト酒賣り、腹立ちの振り。角兵衛出て

〽これは短氣な酒屋どの、餅屋もあんまり強過ぎる、わしに免じてこの喧嘩、酒にせうではあるまいか〽酒は元よりすき顔、惡性男に構はずと、わしに呑ませて下さんせ〽餅屋の癖に食ひどれ、われに呑ませた酒のかけ、三萬三千三百三十、二文も貸されぬサア寄越せ。〽横に寐るのが女房の役、なんのそれをやるもので、酒屋の癖に餅食ひどの、こちらのかけが三萬三千三百三十、二文も貸されぬ、さアおこしや、おこしやおこしやとせり立つる。〽中に狂女は譯もなく、ずんと立つて太神樂か、胸ぐら取つて、これ男。

靜御 なぜにお腹を此やうに、いたづらしやつた擬つけた、斯うした身容になる上は、爰をとつとゝ連れて退さや。〽連れて走りやとせがまれて、藪から棒が出て、悋氣の枝が咲くわいの〽枝どころか角までが、生える女房は去つてのけ〽去つてやるからきり〳〵と、去り状おこしやと投げちらす、腹立ち紛れの投げ打ちや、のぼり詰めたるもみぢ葉の、醉うて首振る鈴鹿山、鬼殺しとぞ知られけり。

ト四人、入り亂れて振り。この時、酒の荷の中にて、赤子の啼き聲する。角兵衛、恟りして立ちあがる。夫婦はこれを隔て

酒賣 ア、コレ〳〵、この荷の内には、人には見せぬ袖

初演當時發行の錦繪　初代中村仲藏の喜三太

三世瀨川菊之丞の靜御前　初世中村富十
郎の饅頭賣　九世市村羽左衞門の酒賣

角兵　笠、雪の笠。
女房　そこを拂つて開く傘。
酒賣　止むる袂。
靜御　扣ふる袖。
四人　それは乙女の衣笠や。それ〳〵
　そつこでせい。
ト四人、惣踊りになる。
〽傘をさそなら時雨の里を、思ひかねては行く千鳥、思ひかねては行く千鳥、さりとは〳〵移り氣な〽傘をさそなら雪降る里へ、思ひかねては行く千鳥、思ひかねては行く千鳥、さりとは〳〵上の空、揃ふ手笠もくらべこし。
ト靜御前、こなしあつて
靜御　サア〳〵、我が君樣は逢はせてくれい、くれいやい。
角兵　サア〳〵、逢はせませう〳〵。逢はせませうから、とつくりと心を鎭めて、コレ、この鏡を御覽じませ。
ト懷中より神鏡を出して靜御前を映させる。これにてドロ〳〵、靜御前、正氣になりし思ひ入れ。角兵衞、思ひ入れあつて
角兵　申し、お心が附きましたか。
トこなして靜御前、顏を上げ

靜御　爰は、いづくぢや。
角兵　爰は伊勢路の御裳濯川。
靜御　我が君樣お果てなされしと、聞くと其まゝ、ウットりとなると思うたが、いま明鏡が自らの、頭に映らせ給ふと等しく、心のハッキリとなつたは
角兵　そんなら狂氣はさつぱりと
靜御　平癒したわいなう。
角兵　ハア、忝ない。
靜御　さりながら、我が君樣がお果てなされ、跡に殘つてなんとせうぞいなう。
角兵　アヽ、イヤ〳〵、その牛若さまには、奧州の秀衡方に御安泰。
靜御　ナニ、我が君樣は、御無事でましますとや。して、さう云ふ其方は何者ぢや。
角兵　拙者は源氏譜代の郎黨、お厩の喜三太清次と申す者牛若君の仰せを請け、權現堂の荒鐵、名鍛冶に打たせよと、諸國を巡る太神樂、そつともお氣遣ひな者ではござりませぬ。
靜御　ムウ、喜三太であつたか。して、あれなる二人の者は。

角兵　ト角兵衛、思ひ入れあつて
最前より明鏡に、寫る姿は醜影、年知らぬ岡部の里
の人間はいざ、答へぬ先に狗ぞ咎むる。惡魔を拂ふ獅子狛
犬。

靜御　狗に恐るゝ二人の形。

角兵　サア、眞直に顯はすまいか。

ト これにて酒賣り夫婦、思ひ入れあつて

酒賣　ハア、、恐ろしや、勿體なや。その明鏡の威德とい
ひ

女房　獅子狛犬の恐れに依つて

酒賣　恥かしい我れ／＼が

兩人　身の上を。

〽問はれて辛き草の床、晴るゝ時なき露の玉。

酒賣　鏡の威德に身の上を、あからさまに申しあげます。
それ我れ／＼は天津彥火の、にゝぎの尊に仕へ奉り、渡
會の郡、山田の原に年經て栖める、末社の狐でござりま
する

ト雷序を打込む。引拔きにて、狐の姿になる。

〽素盞雄尊、白鳥と化し給ひ、熱田の方へ飛び給ふ、御
影、鏡に寫りしゆゑ。

ト ちよつと振りあつて

御名を白鳥の名鏡。守護するは某し、假初めの怠りより、
牛若君の手に渡りし名鏡、奪ひ返さぬ其うちは、官位も
削られ、只の狐の淺ましさ。これなる者に契りを籠め、
再び官に進まれず、戀ひ慕ふ身は野狐人倫、いづれ隔て
はなつびきの、胸の炎は螢火の

〽澤にうつらふ影を見て、我れは化けたと思へども、月
の鏡にあり／＼と、形を顯はし恥かしや。

ト 振り。女房も思ひ入れあつて

女房　私しは日向の國、姥ケ嶽に明神に仕ふる、女狐でご
ざりまする。源太丸さまの乳房の笛に引かれて、思ひ設
けず源九郎どのと二世の語らひ。サ、なんぼ畜生の身で
も、輪廻には

〽引かれ／＼て引とめられて、迷うてばつかり居りまし
た。

ト これも引拔き、狐の形になる。雷序。

〽野狐の身ぞとも白綾の、錦の袖に抱きあげ、この年月
の姥狐、乳房の笛の添ふ上は。

ト 酒荷の中より赤子を出して抱き

何卒靜さまの養ひ君となされ、育て給はらば、源家の運

は守りの我れ〳〵。夫の願ひの神鏡、賜はるものなれば、これに増したる喜びは
〽ござりませぬと平伏して、喜び涙の玉あられ、人間よりは哀れなり。
ト赤子を見せてこなし。
角兵　聞き及びし、牛若さまの御胤、源太丸さま、さては汝が養ひしか。
静御　この上は源九郎、汝が守護のこの明鏡、今の功によつて下し置かるゝぞ。
ト鏡を酒賣りに渡し、赤子を受取る。兩人喜ぶ思ひ入れ
酒賣　ハア、有り難やなア、この上は源家の運命、例へば平家の大勢が、嶮岨の山へ立籠るとも
〽我が通力は若君に附添ひ、例へば鵯一の谷、嶮岨をよぢて逆落し、勇む駒鳥鷙の、小枝を傳ふ春の日の、赤旗白旗錦して、陸には源氏の矢先を揃へ、さし詰め引詰め射て落す、赤間ヶ關壇の浦、浪に漂ふ泡沫の、哀れ平家は傾むく運、源氏は秀る御威勢、疑ひあるな人々と、告ぐる吉事ぞいちじるき。
ト酒賣り、物語りの振り、よろしく納まる。
静御　オゝ、出かした〳〵。六韜の三略も
角兵　戻れば
静御　戻る
酒賣　我が故郷。
女房　夫婦もろとも
酒賣　草隱れ。
女房　嬉しき中にも悲しみは、その和子樣、眞實の子のやうに、お育て申し、いま別るゝは静さま、名殘が惜しうござりますわいなア。
〽千種の種の花の君、別るゝ事の悲しさと、振返り見返り見返り伸びあがり〽妻が寄れば〽夫が隔て〽夫が寄れば〽妻隔て〽名殘は盡きじ夢野なる、鹿より哀れ草隱れ、露も洩らさぬ故郷へ、別れてこそは歸りけれ。
トよろしく三重、段切りになり、眞中に酒賣り夫婦、飛び去りの見得。上手に静御前、子を抱き、下手に角兵衛、獅子を持ち、引張りの見得になる。
酒賣　東西、先づ今日はこれぎり。
めでたく打出し。

幕

女夫酒替奴中仲（終り）

かのんの紋
あつらへつ
扇賣り

花兄弟壯士春駒 ——曾我萬歳

曾我淨瑠璃の一種で、朝比奈が春駒、曾我兄弟が萬歳才藏、虎が扇賣りといふ、すべて春の景物を揃へてあるので、四人しか出ないでも非常に賑やかな所作である。しまひに草摺を附けたのも吉例通りといつてよい。同じ曾我淨瑠璃でも、前の「柱建」なぞと違つて、どこか鷹揚な、如何にも化政度らしい所がある。文化七年正月の中村座「江戸春御攝曾我」の大詰、例に依つて對面の前奏曲をなしてゐるものである。作者は二世瀨川如皐、富本は豐前太夫に名見崎德治、振附は市山七十郎、役割は、祐成が澤村源之助、時宗が初世市川男女藏、朝比奈が二世關三十郎、虎が四世瀨川路考で、當時の評判淨瑠璃であつた。

花兄弟壯士春駒（曾我萬歳）

荏柄天神の場

役名＝＝曾我十郎祐成。曾我五郎時宗。大磯の虎。
小林の朝比奈。

富本連中

本舞臺、三間の間、向う一面に紅白咲分けの梅の並樹、この前に、誂らへの草土手、左右の大柱、梅の立ち木、日覆より吊り枝、隨分見事に仕立て、舞臺先に土手板、これにも春草のあしらひ、綺麗によろしく、好き所に白木の般若櫃、注連引きたるを飾り付け、すべて、鎌倉荏柄天神の境内、梅林盛りの景色よろしく、幕の内より、正面草土手の上に、富本連中居並び、通り神樂にて、幕明く。

ト頭取出て、淨瑠璃の名題、役人觸れ口上あつて、直ぐに前彈きにかゝる。

〽心に籠む、願ひの品、實に兄弟は今樣の、今日の曠れとや髭かざる、松に朝日の初霞、若やぐ春ぞ豐なる。〽

ト賑やかなる人寄せ、誂らへの鳴り物にて、舞臺前、上の方に、祐成、羽織袴、小さ刀、素袍の上を打かけたる拵らへにて、折烏帽子を携へ、扇を持つたる萬歳の見得、下の方に、時宗、袖なし羽織、頰冠りにて、小鼓を持ちたる才若の立ち身、眞中に、朝比奈、羽織衣裳、鎌ぼう猿隈の小林の形にて、大春駒を引きかたげ、大杯に身を持たせたる見得。三人よろしくセリ上がる。

〽治まる御代の時津風、千代に八千代の御最屓も、替らぬ色を江戸の春、幾萬歳の花の兄、年々才若春駒を、春の初めの初役に、似合はぬ顏の猿隈も、凄まじかりけるお取立て、一本の柱は丸にいの字の色上戸、二本の柱は憎からぬ、愛嬌市川伊達懇五郎、三本の柱は三十郎、三階松を首尾の松、その椎の木も恨みのたけ、おせやれ男の子、しつちやつぽう、はらゝつぽう、春を壽く袖風流・めでたうこそはさむらひける。

ト三人よろしく振りあつて

朝比　ヤレ、草臥れた〳〵。今日はなんでも兄弟に、祐經がしやツ面を見せべいと、仕付けもしない今樣の、恥かしらしい役廻り。せりふ廻しも上の方の、尾張屋はどうぞ出すまいと、ビッショリ汗になるやつサ。

祐成　オヽ、成る程、初々しさは我れ〳〵も、當社荏柄の天神へ、大姫君の御祈願にて、今樣勤める今日の役目。その傅きの祐經へ、對面なすには好き手段と、和田どのの勸めに兄弟とも、心にもなきこの姿。

時宗　兄貴は大礒化粧坂で、舞ひ子の振りも見やう見眞似この時宗は箱根育ち、我まゝ氣まゝも祐經に、逢ひたい見たい念願で、雇はれて來た才若市。

朝比　コレ、何事もこの髭へ、てつぽうづの云ひ付けで、今日對面の湊へ、灣を付けるまでの舵取りだ。必らず誰れが何と云はうと、今樣の役人、小林が雇ひ萬歲だと云つて居やれ。

時宗　でも、口惜しいこの態で、河津の三郎祐安が、忘れ形見と名乘らうか。

祐成　ハテ、名乘り合ふ時節まで、只何事も堪忍して、忍ぶがその身の德者に

朝比　萬歲春駒めいた

時宗　梅の梢の法法華經、

朝比　惠方の薫る明烏。

祐成　どうも云はれぬ

三人　景色ぢやなア。

　ト三人、こなし、向う揚げ幕の內にて

とら　扇めしませ、扇々。

　ト通り神樂、摺り鉦入りの出の合ひ方になり、花道より大礒の虎、着流し、手甲、頰冠り、女商人の形にて、黑塗りの地紙箱を肩に載せ、扇を持ち出て來る。

〽東風吹くや、春の物とて年玉の、扇めせ〳〵京扇、粹なきどのゝ營みも、間夫に扇の謎かけて、浮氣な風の宿りさへ、色商人の手取り者、どこの品物蓬萊さは、それしやと誰れも御影堂、名物名代末廣に、御慶めでたき新玉の、明けて好い春好い殿達に、扇めせとこ賣り來る。

　ト虎、花道にて、振りよろしくあつて、本舞臺へ來る。

三人、これを見て

朝比　出來た〳〵。最前から男ばかりで、おれ一人氣を揉むも、無理か濱村屋、三年越しの馴染みだけ、勝手の知れないこの朝比奈。早く爰へ來て、處置ツ振りを教へてくりやれ〳〵。

とら イエ〳〵、あれからお二人の萬歳風流、朝さんの春駒の今様の面白さ、思はず見惚れて扇賣り、わたしが勤める約束も、出しほを忘れて居たわいなア。

朝比 ナニ、嘘ばつかり。海道一の大磯の全盛虎御前を、今日法樂の今様に、扇賣りとは手取り者。

とら サア、その扇の數々を

祐成 聞くも一興、語るも花。

時宗 花を飾るは商ひ

朝比 怯めず臆せず、くぜれ〳〵。

〽扇は漢土が初めにて、世界の風を手の内に、じつとしめたる戀中も、閨の扇の睦言は、てんと替らぬ東海の、三國一を懐へ、おきまど見せる黄昏に、花の夕顔白々と、朧月夜の檜扇に、色に逢ふ夜の目せき笠、かざす離の袖扇、丁子匂ひに天地金、阿古女扇の三重がさね、見初めた縁の綺麗扇、元の白地か淺黄地に、ざつと墨繪の一筆がらみ、辛い別れは思ひもせいで、可愛々々の中四座扇、寶生雲に觀世水、色の要ぢやないかいな。

〽さらば我れらもそろ〳〵やわ〳〵、才若はやす萬歳扇、かつかるめでたき寶の君へ、數のお馬が參つた、お馬に取りては甲斐の國、都留の郡の連錢葦毛、かす毛にかけあふり、手綱ゆるがず鞍あぢしめて、しつとん〳〵しと〳〵〳〵、勇む心は春駒の、夢に見てさへよいとや申す〳〵、大寄せ小寄せの廓の名取りは、千山七越花窓月岡、袖浦市川一座にずらりと、お直りなされて大寄せ吉原大紋日。

ト清搔になる。時宗、以前の大杯を春駒の先へ付け、朝比奈へさしかける。朝比奈、傾城の思ひ入れ。虎、才若の鼓へ扇をさし、箱提灯に提げる。祐成、扇をかざし、大盡の思ひ入れにて、皆々花道へ行く。

〽袖に薫りを瀧姫や、渡りに丁度禿渡し、てんと玉菊粧ひ姿。

ト投節にて、よろしく本舞臺へ來て

祐成 でも、突出しの御全盛。こりや三浦屋の小林どの、その舞鶴に釣られぬうち、さらばお暇いたさうか。

朝比 コレ待つた。

〽わしが心を歌川しやんす、お惡かろ、この朝妻は戀ゆゑに、細くやつれし糸瀧や、深くぞ思ひ染川の、いつか氣儘に花扇、逢はぬ夜たゞは一夜も千春、逢うたその夜は磯山脊山、たんと話しも在原なれど、あれ美佐山の明け渡り、空に一筋小紫、口舌篠原つい住の江の、又の御

初演の繪番附

見と松の戸を、明けるは茶屋の朝迎ひ、寐覺めの顏どり機嫌取り、おし付けあなたの花妻と、瀨川押へて詞の八汐、連れて巣立の雛鶴や、賤機ならでばた／＼と、廊下を傳ふ瀨川の、割れても末の堅めとて、大姬君とおふけなき、比翼の袖のいたづらな、曲輪に立つ名うたはれて、ほんに悋氣ぢやないけれど、敵持つ身の情ない、世に憚らぬ惡性と、恨み泪は虎が雨。これぞ勤めの誠なる。

トこの文句のうち、クドキ模樣にて、虎、地紙の箱の内より、證據の袖を出して、祐成へ打ちつける。祐成、ヂッと思ひ入れあつて

祐成　ヤヽ、覺えなきこの片袖。すりや、祐成が身の上を。

朝比　大姬君と祐成が。不義の證據と、この中大藤内めが廓へ來て觸れて歩いたこの片袖。

時宗　まだその上にこの時宗、箱根下山の折柄に、紛失なせし友切丸、曾我へ心を寄せらるゝ、大姬君の計らひと鎌倉どのゝお疑ひ。

とら　それゆゑにこそ無實の罪、免がせ給ふこの荏柄の、天滿宮へ御祈誓あり、今日今樣の御催ほしゝ

祐成　、おぬしもウカ／＼せずと、大姬君との不義でない證據に、ナア時宗。

時宗　それ／＼、よもや兄者人、折角敵祐經へ、對面なしても世の人の口。

祐成　イヽヤ、無實の科は、幸ひ荏柄のこの境内、神に懺悔をする時は、心濁らぬ身の潔白。

とら　そりや、どこまでも二世かけた、わたしが證據。勤めの間夫。

祐成　外へは移らぬ虎が許、その夜の首尾も睦言も

とら　忘れず話す、互ひの懺悔。

時宗　して、その二人が馴初めは。

〽名に大礒の里通ひ、いでその頃は睦まし月、しかも二日の春若き、廓は後着の着衣はじめ、船乘初めの二挺立ち、柳橋より押出して、北へ／＼と急がるゝ、猪牙は礒石の劍先に、當る紋日の嫌ひなく、通ひ馴れても衣紋坂、作る所體の初心さに、とつと云うて囃された、

〽もしもやそれと見返り柳、まだうら若き仲の町、茶屋が見付けて、これは／＼旦那、ようこそ／＼、先づは年始の御祝儀と、笑顏を重ね組重に、屠蘇の機嫌の賑はしく、打連れ立ちし揚屋入り、新造禿とり／＼に、囃し立てたる遣り羽子手鞠。

ト是より摺り鉦入り、太鼓地になり

〽一つとや、人目の關に中澤村の、それが苦界のうき瀬川、逢ひ瀧野屋の願ひさへ、なぜに屆かぬ我が思ひ、ほんに粹さへ愚痴になる、恥しらしい事わいな。

ト四人、踊り模様よろしくあつて

〽それ〳〵、それで中吉原、勤めの意氣地祐成も、虎に引かれて大磯の、神のいがきや奥座敷、茶屋船宿に若い者取込む菖蒲に朝比奈が、ざつと捌いた取持ち顏、いづれ手管も色の世に、通り者とぞ見えにける。

ト朝比奈、取持ちの模様よろしく、時宗、不行儀なと支へる。立廻り、祐成、こなしよろしく、朝比奈、連れて行けと顏にて教へる。虎、ニツコリ思ひ入れあつて、祐成を無理に連れて下座へ入る。この模様、文句一杯によろしく、時宗、これを見て、ムツと思ひ入れあつて

時宗　エ、生憎い。時も時、今日念願の祐經へ、いで時宗こそ見參せん。

ト飾りつけの夜着櫃を打割り、大小凛々しく、逆澤瀉の鎧を引ツ抱へ、花道へ行かうとする。朝比奈、捌り思ひ入れあつて、これを支へ

朝比　待ちやれ、兄イ。逆澤瀉は鬼王が、苦勞苦患で取返した。祐成が身の云ひ譯。それをおぬしがかッ拂つて、どこへ行かうと思ふのだ。

時宗　云ふにや及ぶ。この日頃、敵に名乘り逢はざりしも、重代の鎧紛失ゆゑ。念なう手に入る逆澤瀉。祐經が屋敷へ、立越えて、祐信さまの身の明りと、共に本望、そこ放せ。

朝比　イヤ、そりやアお惡からう。今日の今様は、なんの爲。兄弟一緒に祐經へ、對面させよと、てゝつぽうの和田義盛の云ひ付けだ。朝比奈爰になくば知らず、髭が意見だ。マアとんまれ。

時宗　しや事をかしや小林、江戸市川の荒事は、皆御存じの生えぬき五郎。惡く妨げひろぐが最期、この頃流行る選取り見取り、ゑんてん見世へ投げ出すぞよ。

朝比　おやつかな。にしやアおれを、三十八文だと思ふかえ。

時宗　面倒な、退け。

朝比　イ、ヤ留めた。

時宗　放せ。

朝比　留めた〳〵。コレ、兄い、爰は一番この髭に、免じ

て留まつてくんさるなら、忝け名代の草摺も、初小林の皮切りだもサ。

時宗　朝比奈、放せ。

朝比　とんまれ〳〵、おツ留めた。

ト草摺の鳴り物にて立廻り、よろしくあつて

へとまらんせ〳〵、隣のおじやれが唄ふを聞けば、竹に雀はしな好くとまる、主もその氣で一夜は爰に、水の垂れるよな前髪樣と、話ししながら寐とござる、しやほんにつんつん口舌で去なうでな、去なしやせぬ、どうでも斯うでも去なしやせぬ。

ト時宗、朝比奈、鎧を柳の草摺の禮樣よろしく

へいづれ劣らぬ力士と勇士、松の古木に紅梅の、勝色見するその風情、自在は鬼が人の山、春の今樣今爰に、目覺ましかりける次第なり。

ト時宗、朝比奈、段切りの見得よろしく、片シヤギリにて

幕

花兄弟壯士春駒（終り）

戀安達花の夜嵐——安達ケ原

安達ケ原の鬼の傳說は、義太夫に作り込まれてゐるぎりで、所作事の方には一向に影響しなかつた。これなぞは舞踊の方面では最初の方であらう。すべて能がゝりで、しかも大砕けに砕けてゐる。文久元年正月、守田座「相生源氏高砂松」これは馬琴の賴豪阿闍梨怪鼠傳を脚色したもので、默阿彌が竹川正忠の件、治助が唐絲と清水冠者の方を受持つたが、この淨瑠璃はその大詰である。手塚の妻唐絲が今様師となつて入込み福晴を討たうとする趣向、しまひの立廻りに舞ハタラキを利用したなぞ上手である。作は勿論三世櫻田治助で、富本は豐前太夫と名見崎德治、振附は花柳壽助、役割は、唐絲が市川小團次、重忠が嵐雛助、爲久が中村鶴藏、園原が尾上菊次郎、娘子が中村歌女之丞であつた。

戀安達花の夜嵐（安達ヶ原）

鎌倉御所能舞臺の場

役名＝秩父庄司重忠。石田判官爲久。傾城、園原 實ハ猪間光實妻かをる。重忠室、嫩子。手塚の妻唐糸。

富本連中

本舞臺、雨落ちへかけて所作舞臺を置き、向う京間三間、松を描きし鏡の間、これに隔てゝ笛座、シテ柱を取付け、舞臺前、破風を下ろし、大臣見付けの柱を略したる心に飾り付け。下の方、奥へ入れて橋がゝり、この前一二三の松よろしくすべて、鎌倉御所能舞臺の模様。眞中に、紙張りの檜木を組み、三方緞子の戸帳を巻き下ろし、藁屋根の棲を見せ。本行の東屋。囃子座に、腰元六人、狂言紋を染め出したる一對の腰元にて、笛、太鼓、大鼓、小鼓、拵らへ物を扣へ居並び、上手、竹の間、上に富本連中、狂言紋の上下にて居並び、直ぐに前彈きになる。

〽岩根踏み、重なる花を分け捨つる、山伏修行それならで、色香を慕うて戀衣、日も重なれば陸奥の〽安達が原に着きにけり〽宿りもがなと佇みて。

ト誂らへの鳴り物になり、重忠、羽織衣裳、紫袱紗の露受け、小さ刀を差し、立ち身。側に爲久、角頭巾衣裳、狂言袴、扇を持ち、床几にかゝり、上手に、園原、振り袖、やの字結び、腰元の形にて、僧ワキの心、市女笠を持ち、下手に、嫩子、同じく腰元にて、銀張りの杖を持ち、扣へ居る見得、よろしくセリ上げる。

重忠　急ぎ候ふ程に、これは早陸奥への安達が原に着きにけり。

爲久　オット待つたり。それには捨身の山伏修行、旦那はそれに引替へて。

嫩子　諸國を巡る色修行、女子のお供は迷惑ながら

園原　花の東へ下り來て、戀の所譯を久々にて、拜見するもこの身の仕合せ。

重忠　なんでも今宵は好い女子に、行き合ひたいものぢやが。
爲久　愚僧も姫より好い女子に、行き合ひたいものぢやが。
嫩子　アレ／＼、向うに灯の光りが見えますする。
園原　早う行て、宿を借らうぢやござりませぬか。
爲久　サヽ、お急ぎなされませ。
〽急ぐとすれど若草の、振りの袂に夜の道、色ある軒に辿り來て。
ト爲久先に重忠、兩人の女形に戯むれながら、下手へ廻り、シテ柱の前に居並び、爲久、屋體の内へこなしあつて
如何にこの家の内へ、案内申し候ふ。
三人　案内申し候ふ。
ト此うち、緞帳の内にて
唐絲　山路に日暮れて耳にみてるものは、樵歌牧笛の聲、音にのみや冴え渡るらん。
〽内に主は微かなる、細布麻の糸車、廻るつらさを片寄せて
ト淨瑠璃よき程に、緞帳を卷き上げる。爰に唐絲、褐食かつら、鉢卷、裾端折りにて、金張りの絲車を置き、三足の火焚にねりくりの火を灯し、後に二枚折り屏風を立て、よろしくあつて
ナニ、御案内とは。
〽心ならずも立出づれば。
爲久　したり、頼うだお方に持つて來い。モシ、主は中肉中年増、今夜の宿を取り當てました。
重忠　ナニ／＼、これは諸國色修行者にて候ふ……と此やうに問うては相談がなるまい。見らるゝ通りの足弱連れ。
園原　どうぞ一夜を明かさせて
嫩子　下さりませいなア。
〽餘儀なき頼み如何にせん、兎やせん傍へ張交ぜの、短册取つて差出せば。
トよろしくあつて、屋體の内の二枚折り屏風の短册を剝がし、恥かしきこなしにて出す。
爲久　ヨウ、なんぢや……住み馴れし、身も住み兼ぬるこの頃や。
唐絲　夢も結ばぬ春の夜嵐。
重忠　それは都の嵯峨の奥。
園原　これは東の陸奥。
嫩子　一夜を頼む一樹の蔭。

爲久　一河の流れ、これも他生の
唐絲　假初めならぬ
五人　佛果の緣。
〽浮寐ながらの草枕、これへとこそは招じけれ。
ト會釋して、四人を上手へ直す。
重忠　さて早速に承りたいは、定めて主の女性には、御亭主がござらうが。
爲久　大きにお世話だ。何もお旦那の構つた事があるものか。
園原　主あるお方に
嫩子　滅多な事を。
重忠　これはしたり、そこが修行ぢや。既に釋迦牟尼佛でさへ、檀特山へ登る道に、阿羅ら仙人に擲たれ叩かれしは、幾度ぢやと思ふ。譬へ御亭があつて、間男見付けたと云つて襟髮を捉へ、鼻をこすられてもいとひはない。
爲久　猫ぢやあるまいし。
唐絲　ホヽヽヽ、そのお心遣ひはござりませぬ。御覽遊ばす見目容姿、男は持つまいと、里を離れたやもめ住ひ。それに引替へ都より、お下りの道すがら、さぞ面白い事でござりませう。せめて今宵はお話しなりと。

爲久　オヽ、易い事。サア／＼姐え達、お宿のお禮だ。色修行の荒ましを
園嫩　すりや、私しどもが。
重爲　サヽ、話したり／＼。
ト嫩子出て
〽その名所も有明の、月の都に住み侘びて、惡所島原新町は、云ふも更なる男の木辻。
ト園原、出て二人になる。
〽聞いて心も墨染の、勤の身程野暮になり、もし室の津に咲く梅の、その移り香を鞆の里。
トこれより、重忠、前へ出て
〽こりや天人に餌差し竿、屆かぬ悋氣下の關、二人が仲を丸山の、丸う納めて歸りがけ、江口燗酒さす杯を、又も乳守にくだかけの、鷄にせかれて曉は、別れの鐘の撞木町、雨の古市岡崎の〽矢矧の橋は長けれど、逢うたその夜の短さよ、よい／＼／＼よんやさ。
ト爲久、前へ出て
〽好い程にして東なる、花のお江戸の吉原は、闇も月夜と夕波に、浮かれて乘り込む山谷の小船、三味線形の翅駕籠、押せやれ男の子、えいさア、修行の身なればいづ

くでも、色事一遍上人の、流れを汲んで三國から、敦賀の湊出羽なる、酒田に色のかゝり船。

トよろしくあつて

唐絲　てもマア、面白いお話しで、過越し方を思ひ出し、この年月の憂を忘れましたわいなア。

重忠　過越方を思ひ出すとは、さてはそもじは、それ者と見えるな。

唐絲　なんのマア、この黒塚に生れたまゝ、糸取る事より知らぬ賤の女。

爲久　きう云へば都方では、見た事のない糸とる道具。

重忠　そりや、なんと申しまするな。

唐絲　サア、これは桛かせ輪とて、卑しき賤の手なれ草。

爲久　どうぞ聞きたいの話しの種。

唐絲　糸とる業を、

重爲　サア〳〵、所望おや〳〵。

トこれにて、唐絲、桛がせを前へ出し、麻の根を持ち立ちかゝる

〽憂き事を、麻生の糸の苧環は、昔を今に繰り返し、五

白露置つる霜の月。

〽紺屋仕事のきりはつたり、てう〳〵、からりころり、

環四つ手打つ拍子とり、謳うた唄の聲々に。

ト太鼓地になり

〽春は梢に咲くかと待ちし梅が笑へばあれ山笑ふ、二子羽子板の音も好く、ひとごにふたご見渡せば、桃や櫻の彌生山、衣ほすてふ天が子の、いとし川狩り夏もたけ、秋はさやけき二度の月、時雨るゝ空を水仙の、笑うて霜にしつぽりと、冷たき足を太股で、温め酒の寒椿、それも浮氣の一盛り。

重忠　さてこそ正體を顯はしたり、こりやモウ捨てゝは置かれぬ。ちよつとお側へ。

ト寄るを隔てゝ

爲久　オツト、滅多に寄つたら、そこらあたりに、直に角が生えませうぞえ。

ト園原を差し、兩手の指にて角を拵らへる。唐絲、我が事かと思ひ

唐絲　なんとえ。

爲久　アレ〳〵、あそこに二人が張り番。

唐絲　ホヽヽヽ、此方の事かと思ひました。何は兎もあれ、餘りの夜寒。上の山へ行て、粗朶を取つて參り、焚火を致してあげませう。

重忠　それは何よりの馳走。それから後で、どうぞしつぽり。

唐絲　オホヽヽヽ、そりや此方から申す事。

爲久　ヘヽヽ、畜生め。

園原　早う戻つて

嫩子　下さりませ。

〽主はとつかは裾引上げ、行かんとせしが立戻り。

唐絲　あなた方、妾が戻るまで、あの閨の内を、必らず御覽なされまするなえ。

重忠　ナニ、閨の内を見ては惡い。アノ閨の……さては御亭か忍び男か。

爲久　ソレ御覽なせえ。主のある女中に、じやら／＼。まだどうもしないからいゝが、どうもした日にやア、七兩二分や八兩二分で濟むものか。馬鹿々々しい。

唐絲　そんなら必らず。

爲久　わしが付いて居るから、決して誰れにも見せる事ではない。

唐糸　ドレ、焚く物を取つて參りませうか。

〽閨に心を奥と外、山路をさして急ぎ行く。

ト緞帳へこなしあつて、橋がゝりへ入る。

爲久　ヤレ／＼、危ない事であつた。戻つて來るまで、あの女中が、閨の中を覗くなと云はずに居やうなら、こちらまでが間男の側杖を食ふ所であつた。先づ一體、お前樣が學問に疎いからだ。

重忠　たわけ面め。學問と色事とは譯が違ふワ。

爲久　イエ／＼、違はぬ。お前樣は、女子さへ見りやア引寄せて。

〽論語同斷魂膽も、せずに口說くは不料簡、子の曰く、間男と云つたら、なんと小學ぞ、ちんぷ中庸これ孟子、書經は我れらが付き添へば、さうは左傳と云ふものゝ、禮記にかけたが色事は、春秋立てゝ千字文、儒者馬鹿らしいではないかいな。

ト惡身にて意見のこなし。これより園原、入れ替り。

クドキになる。

〽その惡性を始めから、知つて覺悟でお供して、胸の鏡を延べ紙に、包むとすれど香箱の、お前に云はれ亂れ髮。

ト此うち、園原、こなし。

〽結ぶ寐卷の入れ髮も、末はかもじと云はれたら、こぼれ松葉の簪の、叶ふと云ふ字が嬉しうて、高島田わげ縺れ毛の、解けぬ思ひぞわりなけれ。

ト爲久、重忠の手を引き合ひ、顔見合せ

爲久　エヽ、何をさつしやる。おれは淸僧、女は嫌ひ。何にしろ、あの女はどこまで焚き物を取りに行つたか。爰は風が吹き通してお寒からうに。

重忠　あの女子の戻るまで、二人を連れて、あの閨の内へ行つても、大事あるまいではないか。

爲久　さればでござりまする。主のある女を摘むのではなし、御持參物を抱いて寐るは、誰れも咎める事もあるまい。

園嫩　それぢやと申して。

爲久　ドレ、ちよつと瀬踏みを。

〽門口を駈け戻り、

ト爲久、緞帳の内へちよつと入り、バタ〳〵音して出て來り

ヤア、萬歳樂〳〵々々。助け舟〳〵。

重忠　コレ〳〵、それでは地震か、津浪か、判らぬわいの。

園原　心を靜めて、譯を聞かして

嫩子　下さんせいなア。

爲久　コ、コレ、月明りで閨の内を、よく〳〵見ましたが、どこも彼所も眞赤な血だらけ。右の脇には人の死骸。左の方には胴骨を積み上げて、その匂ひプン〳〵。エヽ〳〵、胸が張り裂けるやうでござりますわいの。

重忠　ヤヽヽ、さうとは知らず宿借りて、かゝる憂き目を陸奥の

園原　安達ヶ原の黑塚に

嫩子　鬼籠れりと詠じたる

爲久　エヽ、さう云ふ詠み歌がござりますか。それに斯うした一つ家に泊るとは、身知らずなお方ぢや。それと云ふも、あの年增に心があるゆゑ。

嫩子　こりやマア、なんとしたら

園原　よからうぞいなア。

重忠　旅人を泊めて逃がすまい爲め、定めて四方を眷屬どもに、取卷かせたに違ひはない。

爲久　どつちへも逃がさずに、取つて食ふ思ひ付きだらうが、なんの旨くもない物を。

園原　と云うて爰に居ようより

嫩子　遁がるゝだけは遁がれようではござりませぬか。

重忠　オヽ、支度しや。

爲久　サア〳〵早う。

〽早う〳〵も歯の根は合はず、ためらふ向うへ枯れ柴を、

初演當時發行の草双紙口繪　中村鶴藏の爲久

市川小團次の唐糸　尾上菊次郎の關原

嵐雛助の重忠

抱へて戻る夜更け道、何氣ない程猶怖く。

ト此うち、橋がゝりより、唐糸、以前の拵らへ、柴を抱へ出て、舞臺へ來り、爲久、出合頭に顏を見て

へゝゝゝ、只今お歸りでござりましたか。

唐糸　枯れ木を尋ね、きつう暇取りましたわいなア。ドレ、さし焼べてあげませう。

〽知るや知らぬや爐の傍へ、行かんとせしが振返り、旅人の體をきつと見て。

さて驚きなさる有樣は。フム、ソレ。

〽眼血走り一散に、閨を目がけて走り入る。

トこなしあつて、ツイと緞帳の眞中へ駈け入る。皆々こなし。この時、薄ドロ〳〵になる。

爲久　アゝ、桑原々々。先へ食はれるかして、惣身がムヅムヅして參つた。

重忠　エゝ、氣の弱い。

園嫩　早うござんせいなア。

爲久　立ちませぬ〳〵。拔けました〳〵。

重忠　そんなら一人殘つたがよい。

爲久　エゝ、情ない。どうぞ負つて下さりませ。

嫩子　アレ〳〵、腥い風が吹いて來て來たわいなア。

園原　こりやモウ叶はぬ事かいなア。

〽足の踏みどもあらばこそ、駈け出さんとなす折から。

ト緞帳の内にて

唐糸　ヤア〳〵旅人、見るなと云ひし閨の內、明らさまになせしこの恨み、逃げるとてナニ逃がさうや。

ト早笛、大ドロ〳〵になり、緞帳を切つて落す。唐糸、白頭、鬼女の面をかけ、上衣脫ぎかけ、大がまの着付け、鐵杖を持ち、ツカ〳〵と出て、四人を討たうとして上手に振り上げ、キッと見得。

〽思ひ知らせん思ひ知れと、閨打ち破り立ち昇る、火焰の煙り眼も眩み、野風夜嵐どう〳〵〳〵、鳴神稻妻容に滿ち、鬼一口と立ち上がるを、いら高の珠數押し揉んで、

〽見我身者、發菩提心、聞我名者、斷惡修善、聽我說者、得大智慧、智我身者、卽身成佛と、責めかけ〳〵祈り祈られて、忽ち弱りたお〳〵〳〵、もの凄まじき夜嵐の音に紛れて。

ト四人を相手に能がゝりの修羅模樣よろしくあつて、キッと見得。これにて、鬼女の面をかなぐり捨て

唐糸　一門の仇、賴朝覺悟。

ト隱したる懷劍を拔いて突きかゝるを、爲久・重忠、

ちよつと支へキツト見得。

重忠　ヤア、小ざかしき敵呼はり。斯くあらんと察せしゆゑ。

爲久　この爲久と云ひ合せ、汝を僞はり、賴朝公と名乘りしは

重忠　秩父の庄司重忠なるワ。

唐糸　チエ、口惜しや、汝等如きを相手に取るも、云ひ甲斐なしと思へども、主君の敵は石田爲久。先づおのれから。

爲久　なにを。

ト ちよつと立廻り。

重忠　ヤア、女を相手に大人氣なし。貴殿は君の御前へござれ。

唐糸　卑怯な兩人。覺悟おしやれ。

爲久　小癪な事を。

重忠　いそふれ方々。

皆々　心得ました。

重忠　かゝるも共に。

爲久　サヽ、お來やれ。

ト 早舞ひになり、重忠、爲久、園原、下手口へ走り入る。

唐糸　いづくまでも。

ト 行きかけるを、嫩子、長押に掛けし長刀を持ち、ちよつと支へる。

嫩子　ヤア、動くまい唐糸とやら。斯うした事を察せしゆゑ

腰一　不束ながら今樣の、役に立つたる我れ〳〵始め

腰二　汝を召捕るその爲に、笛のひしぎに折り重なり

腰三　鼓の調べは呵責の捕り繩。

腰四　大膽にも君に刃向ふ横道者。

腰五　太鼓の音よりとんだ曲者。

腰六　指す手引く手もあらばこそ、サア尋常に

六人　腕廻せ。

唐糸　チエ、、譬へ爲久が計略に落ちるとも、其方達風情に搦め捕らるゝ妾ならず。誠は旭將軍の身内にて、一騎當千と呼ばれたる、今井の四郎兼平が妹、手塚の太郎光盛が妻。ならば手柄に搦めて見よ。

嫩子　その舌の根の乾かぬうち

六人　心得ました。

ト 銘々十手にてかゝる。ちよつと立廻つて、双方キツ

と見得。

へまた顯はるゝ業通自在、得たりや得たりと振り上ぐる鐵杖の勢ひ、雲に跨り地を潜り、恨みを報はで置くべきかと、勢ひ込んで飛びかゝるを、行力祕密の利劍の切尖三十番神眼に遮ぎり、忽ちに弱り果て、足元はよろ〳〵よろ、積る惡業諸人の、安達ヶ原の黑塚に、隱れ住ひしも淺ましや、恥かしの我が姿やと、云ふ聲猶も凄まじく、形は消えて。

ト太鼓地、鐵輪やうの立廻りになり、六人を相手に面白きタテよろしくあつて、嫩子、入れ替り、長刀と懐劍にて立廻り。トゞ唐糸を眞中に、兩人上下に向ひ、六人、棹に取卷く見得。大太鼓入りの鳴り物にて、よろしく

幕

戀安達花の夜嵐（終り）

松の舞臺の式三番
梅の浪花の假狂言

修綠笑遠山 —— 大坂假

嘉永四年頃、大坂から江戸へ下つて來た茶番の一行があつた。初め兩國へ葭簀張りの小屋をかけて、膝栗毛の滑稽をやつてゐたが、非常に當つて、後には一座が寄席へ出るやうになり、益々大入を續けてゐたが、仲間割れがしてみんな大坂へ歸つてしまつた。この假を所作にしたのが、本曲で、安政四年正月市村座で、鼠小僧初演の節、中幕風に入れたもので、臺本にもある通り、初め常磐津の式三番をやつて、引拔いてこの曲になつた。一種の風俗描寫淨瑠璃である。寄席の藝を役者が眞似なくてもよからうと、内部では不評であつたが、見物には大きに受けた。作者は篠田瑳助、常磐津は小文字太夫と岸澤古式部、振附は花柳勝次郎、役割は、尼牛を坂東彦三郎、琴玉を河原崎權十郎、梅菊を四世尾上菊五郎、歌梅を中村歌女之丞、梅吉を中村梅花、竹次を市村竹松、久助を市川小團次であつた。

修綠笑遠山（大坂俄）

三浦屋敷の場

役名——俄師、信濃屋尾半。同、初音亭琴玉。同下男、久助。藝者、梅吉。お小姓、歌梅。同、竹次。踊の師匠、尾上梅菊。

常磐津連中

本舞臺、一面、網代塀の幕、梅の立ち木、日覆より吊り枝。爰に若い者、袢纏、股引の形、升金と云ふ印の衣裳葛籠を脊負ひ、これを紺看板のかけ襟の中間四人、水手桶、竹箒を持ち、立ちかゝり居る。早舞ひにて、幕明く

中一　コレ〳〵、其方は賤しい形をして、お庭近く

四人　下がれ〳〵。

若者　モシ〳〵、そんなに仰しやりますな。私しは升金と申します、衣裳屋の若い者でござりますが、今日この三浦のお屋敷樣へ、俄師をお召しでござりますゆゑ、その衣裳を持つて參りましたのでござります。

中二　ア、其方は俄の衣裳を持つて來たのか。その俄はこの頃大層評判だが、どうぞ見たいものだ。

中三　その俄、去年の暮、猿若町の大よしへ出た時、行つて見たが、面白いものよ。

中四　今日お館へお召しなされたは、新玉、尾半、琴玉なぞと云ふのだ。これらがその中で上手だと云ふ事だ。

中一　さうして今日は、なんの俄をするのだか。衣裳屋、其方は知らないか。

若者　左樣でござります。衣裳は先から書付に致して參りますから、何々が出ますと云ふ事は承りませんが、お好みで曾我の對面が出ますさうでござります。

中二　先刻役人衆が、番組を書いたのを、おれが爰へ持つて來た。

ト懷より、淨瑠璃觸れを出す。

中一　ドレ〳〵、何が書いてあるか。コレ、衣裳屋、其方、平常讀んで居るだらうから。讀んで聞かせてくれろ。

若者　ハイ〳〵、畏まりました。

四人　東西々々。

ト若い者、書き物を開き

若者　淨瑠璃名題……。

ト中間一、取つて

中一　淨瑠璃太夫……。

中二　相勤めまする役人。

若者　右の役人殘らず罷り出で相勤めまする。いよ〳〵この所、淨瑠璃始まり、左樣に御覽下さりませう……と斯う口上を申します。

中一　どうか頭取に似て居るやうだ。

若者　何を仰しやります。

中二　成る程、これで樣子が解つた。

中一　サア、掃除をしまつたらば、部屋へ行つて一杯やらかさう。

中二　兎角酒と女でなけりやア夜が明けねえ。

若者　どうぞ私しをお錠口へ、お連れなされて下さりませ。

中人　そんなら、おいら達と一緒に來るがいゝ。

一四　サア〳〵、來やれ〳〵。

ト調べにて四人先に、若い者附いて奧へ入る。知らせに付き、道具幕。切つて落す。

本舞臺、三間、破風作り、松の畫の能舞臺、青竹の手摺り付きの橋がゝり、この後、淨瑠璃臺。これに常磐津連中舞臺正面に囃子連中、烏帽子、素袍にて居並び、すべて、この道具、誂らへの通りに納まる。

ト淨瑠璃置き物あつて、誂らへの鳴り物になり、眞中に翁、上に、千歳、前に面箱を置き、下に、三番叟、三人を舞臺眞中へセリ上げ、鳴り物打上げ、淨瑠璃に本行二三番振りよろしくあつて、鳴り物になり、正面、松の張り物打返し、囃子連中を隱し、この道具一面居所替りになる。

本舞臺、一面、平舞臺、向う銀地、梅の木に短冊の附きたる帶入り襖、欄間、同じく銀地上下折廻り、鍍金かな物打つたる塗り椽、杉戸出入り、下の方、梅の立ち木、日覆より吊り枝、淨瑠璃臺その儘、誂らへの通りに道具納まる。

トこれと一時に、尾半、琴玉、熨斗目、狹き肩衣、裁付け、好み假の拵らへ。久助、ぼつと鬘、萠黃不持ち

の紋付き、田舎者供の形に引拔き、向う揚げ幕より、歌梅・竹次、文金髷、振り袖、手附きの茶盆を持ち、後より、梅吉、藝者の拵らへ、菓子入りの提げ重を持ち出て、舞臺と一時に花道へとまる。直ぐに、淨瑠璃になる。

〽梅の魁好い初春の、お座敷仁輪加猿若の、二丁目に立つ品物に、供のおしなと浮かれて惚れて、小當り地口當振りも、汗を吹出すをかしさを、笑ふ小姓の振り袖は野暮なやの字の鶯茶、ほうほけきやうの中入りや。

トよろしく振りあつて、花道の三人、舞臺へ來る。

尾半　これは猿樂町の梅吉さん、今日はお執持ち、御苦勞でござります。

梅吉　私しよりお前樣方、大きに御苦勞樣、お上にも殊ないお喜びでござります。

琴玉　數なりませぬ俄師の、私しどもが、お歷々樣方のお座敷へ召されまして

尾半　斯樣に拙ない藝道も、御覽に入れまするは、誠に冥加至極もない事でござります。

歌梅　只今御褒美を下さいます。マア、ゆつくりと中入りをなさんせいな。

竹次　皆さん、お煮花をお上がりなされませ。

梅吉　サア、お菓子をお取りなさんせいな。

ト茶と菓子を兩人へ出す。

兩人　有り難うござります。

トこの時、久助、下の方より見て

久助　モシ〳〵、女中さん、おんらにも茶と菓子を下さい。

歌梅　ほんに、心が付きませぬ。お前はお供の人でござんしたなア。

尾半　コレ、久助、どうしたものだ。てまへ達が爰へ出る所おやアない。お次へ下がつて居ろ〳〵。

久助　お前も解らん事を云はつしやる。今日はお座敷行きだと云ふから、なんでも結構なお座敷を拜見のうして、旨い物をしこたま喰はうと樂しんで、重い荷物を脊負つて來たのだ。そんな根性骨の惡い事を云はねえものだ。

琴玉　これサ〳〵、てめえ達のやうな、賤しい田舎者が、お座敷へ出て、もし粗相でもあると濟まない。お次へ行け。

久助　コレ〳〵、田舎者だと云つて、そんねえに安くしないものだ。これでもおんらア國ア、田地田畑の

百反餘もある、お百姓の若旦那樣だ。江戸を見べいばつかりに、下司奉公をし申すけれど、讀書算筆は云ふに及ばず、男の嗜なみ、謠の二三十番も稽古した男だ。お殿樣の前へ出て、謠を一番うたつて聞かせますべい。

琴玉　コレ、お屋敷樣で、ナニ謠がお珍らしいものか。馬鹿な事を云はねえものだ。

久助　それでも、あんまり人を見くびるから、ごせ腹が病め申す。

槇吉　マア、其やうに腹を立てぬもの。サア／＼、お茶を呑ましやんせ。

ト茶菓子をやる。

久助　イヤ、お前さんは解つた人だ。忝なうござります。

ト菓子を食ひながら、下の方にある、七種の俎板を見て

爰に俎板の上に、なんだか猿曳き道具が並んで居るが、こりや何だな。

歡作　それは今日、七種の御祝儀を囃したを、お年男の役人衆が、忘れて行つたのでござんせうわいなア。

〽陽で榑の明け立に、五つ所紋の杏葉梅、香りゆかしく立出で、

ト上手の杉戸より、尾上、詰め島田、裾模樣、やの字帶、お狂言師の拵らへ、銚子杯を持ち、近習一人、黒塗り臺の物を持ち出て

尾上　ほんに皆さん、今日は大きに御苦勞でござんすなア。

尾半　これはお師匠さん、私しどもより、さぞ今日はお草臥れでござりませう。

尾上　子供衆の踊りの支度で、がつかりと致しましたわいな……サア、お二人さん、お上から御酒を下さいます。頂戴なさんせいな。

ト臺の物を眞中へ出す。

兩人　ハイ／＼、有り難うござります。

竹次　私しがお酌を致しませう。

ト尾上、杯を始め、酒盛りになる。久助、これを見て

久助　コレ／＼、お師匠樣とやら、わしらも戴いてもようござらうな。

ト前へ出る。

琴玉　また出るよ。どうも困つた者だ。

尾上　お供さんでござんすか。お前はこれがようござんせ

う。

ト茶碗へ酒を注いでやる。

久助　こりや有り難うございます。お師匠様は美しいものだなア。

ト酒を呑みながら、尾上へ見惚れる思ひ入れ。

尾上　モシ、お二人のお小姓様方は、お師匠さんのお弟子でございますか。

梅吉　ハイ、お二人ながら尾上さんのお弟子、踊りで此方へお上がりでござんすわいな。

琴玉　左樣でございませう。モシ、あなた、なんぞ踊りを一つ拜見いたしたうございます。

歌梅　どう致しまして、お上に踊りがございまするのに、私しどもがどう致しまして。

尾上　ハテ、大事ござんせぬ。御酒のお肴になんぞ一つ、舊冬お年忘れに、私しが拵らへた、四季の扇がようござんせう。

歌梅　左樣なら、どうでもでございますか。

尾上　梅吉さん、お前さん相手になつて下さんせ。

梅吉　畏まりましたが、どうやら忘れて居ますぞえ。

兩人　サア／＼、お願ひ申します。

ト歌梅、梅吉、扇の振りになる。

〽かざす扇の花の丸　春は木毎に咲き初むる、梅の振り袖さん／＼櫻、夏は卯の花藝者の化粧、秋の七草萩薄、どちらが妻で思ひ物、冬は時雨に數散る紅葉、雪の素足の八文字、しをらしいではないかいな。

ト兩人、よろしく、此うち、奥より、近習一人出て、尾上を奥で召しますと云ふ思ひ入れ。尾上、心得奥へ入る。久助、見て

久助　ヤンヤ／＼、うまいものだなア。

兩人　誠に有り難うございました。

梅吉　サア、竹次さん、今度はお前の番ぢやぞえ。

ト竹次を前へ出す

竹次　そんならわたしが。オヽ恥かし。

〽めでたや／＼、春の初めの双六なんぞは、奴が槍を振出しに、行列揃うた日本橋。

ト竹次、花槍を持ち

〽振りやれお振りやれ、振り袖、可愛ゆらしさの花の槍、手元見事に振りやれ／＼、さつさよやまかせ、さつさ好い子の伊達な宿入り。

トよろしくある。

兩人　ヤンヤ〳〵、好く出來ました〳〵、

ト奧より、尾上、出て

尾上　モシ、お二人さん、踊りの方がこの次に、七種が出ましで、その後がお前さん方の、曾我の對面を先へ出せとの事でござります。

尾上　その對面は、切りに致します積りで、まだ仲間の者が揃ひませぬ。

尾半　それでも、お上のお好みでござります。

尾上　お好みとあれば是非がござりませぬ。人數が足りませぬ。お前さん、憚りだが助けて下さりませぬか。

尾半　そりや、わたしで濟む事なら。さうして何の役でござります。

琴玉　私しが祐經で、この男が朝比奈、兄弟が足りませぬ

どうぞ十郎をお願ひ申します。

尾上　てんぽの皮、やつて見ませうわいな。

琴玉　そこで五郎がないが、梅吉さん、どうぞお願ひ申します。

梅吉　どうしてわたしにそんな事が、

琴玉　左樣なら、あなたお願ひ申します。

歌梅　わたしなぞは、どう致しまして出來ませう。

尾半　ほんに好い事がある。あの久助が、毎日見て居るから出來さうなものだ。

琴玉　さうサ、謠を謳ふと云ふから、ちつとは出來やうも知れねえ

尾半　コレ〳〵、久助や、いま對面が先へなつた所で、まだ仲間の者が來ねえから、てまへ每日見て知つて居るだらう。五郎の替りをしてくれねえか。

久助　それ〳〵、それだから人を安くしねえものだ。そりや五郎でも十郎でも、祐經でもサ、對面一通りなんでも出來申す。

琴玉　そいつア妙だ。そんならてまへ、キツと出來るか。

久助　そのくれえな事が、出來ねえでどうするものだ。

尾半　どうも不安心だ。一遍稽古して見よう。

琴玉　さうサ、後の所は兎もあれ、呼出しから杯の所を、一遍云ひ合せて見やう。

尾上　どうぞ私しも、稽古をして下さんせ。

尾半　冗談ばつかり……そんならお師匠さんが十郎で、久助が五郎だ。

久助　ハヽア、美しいお師匠さんと兄弟の役か。イヤ、有り難いこんだ〳〵。

ト無性に喜ぶ思ひ入れ。

琴玉　ほんに、まだ虎少將がねえ。モシ、あなた、どうぞお願ひ申します。

歌梅　どう致しまして、これは梅吉さんがよろしうござります。

琴玉　左樣なら梅吉さん、お願ひ申します。

梅吉　ハイ〳〵、どうなと二人で間に合せませうわいな。

尾半　サア〳〵、稽古にかゝりませう。

〽そぐはぬ形と取り〳〵に、稽古の席ぞ定まりける。

ト琴玉、捨ぜりふにて、衣裳葛籠へ毛氈をかけ、思ひ入れあつて

琴玉　イザ、祐經どのには設けの席へ。

尾半　役目でござれば、上座御免。

〽坂東一や鎌倉へ、大名の風俗に、奥床しくぞ見えにける。

ト尾半、思ひ入れあつて、葛籠の上へ住ふ。

琴玉　時に祐經どの、今日今樣を勤めた二人の役人に、逢つてやつちやアくんさるめえか。

尾半　外ならぬ小林どのゝ推擧。急いで爰へ呼び出し召されい。

琴玉　そりや忝ねえ……ドン〳〵〳〵……。

ト前へ出て

それに扣へし二人の者、工藤左衛門祐經とのが。

〽逢うてやらうと許しの色は、かたじけ茄子の辛子漬、鼻を通し矢當り的、おめず臆せずエヽコレ、恥かしからず。

急いで爰へ、のたくりつん出ろエヽ。

ト琴玉、よろしくある。久助、うつかり尾上に見惚れて居る。

尾上　サア、久助さん、花道で返事をするのぢやわいなア。

久助　オヽイ。

尾上　エヽ、さうぢやない……畏まつて候ふ。サア、わたしと一緒に出るのぢやぞえ……テヽテンノヽ。

ト尾上、扇拍子に三味線にて、三重を云ひ、これへ合ひ方をかぶせ、尾上、祐成の思ひ入れにて、前へ出る

久助、後より、尾上に見惚れながら出る。

琴玉　ヤ、ドッコイ。

ト尾上、久助へ教へながら、不器用に見得をする。久助、矢張り尾上の顔を見て居る。

初演當時の繪番附

尾上　モシ、わたしの顏を見ずと、祐經さんの顏を見て睨むのぢやわいな。

久助　ほんにさうだけ……ヤ、ムウ。

　ト不器用に睨む。

琴玉　ヤ、ドッコイ。

尾半　いま小林が推擧せし兩人は、ハテ健かな若者ぢやなア。

　ト尾上、また久助へ囁く。久助、呑み込み

久助　親の敵の祐經觀念。

　ト不器用に立ちかゝる。

尾上　アコレ。

　ト押へて、尾上、振りになる。

〽明け初むる初緣とて霞が峯へ、棚引いて候、山々の、笑うて見せぬ顏打守り、その癇癪が主の癖、狎れて空寐を搖り覺ます、さりとは自烈たや、身仕舞ひしかけて來たわいな、すげない殿さんぢや。

　ト尾上、祐成の思ひ入れ。久助、不器用に立ちかゝるを押へながら、よろしくある。

琴玉　コレ、兄イ、おッこてえろ／＼……時に祐經どの、二人の者に杯をして、やつちやアくんさるまいか。

尾半　如何にも、杯を致すであらう……誰れかある、銚子杯これへ持て。

歌梅
梅吉　アイ、合點でござんす。

　ト三保神樂になり、歌梅、梅吉、銚子杯を前へ持つて出る。尾半、杯を取る。梅吉、注いで呑む思ひ入れ。

尾半　先づ祐成へさし申さう。

尾上　頂戴いたすでござりませう。

　ト梅吉、取次ぎ、尾上、呑んで尾半へ杯を戻す。尾半、呑んで

尾半　五郎やアい。

　ト云へども久助、ウッカリして居る。

琴玉　これサ、久助、なんだ、なんだ、と返事をするのだ。

久助　なんだ。

　ト大きく云ふ。

琴玉　エ、恟りする。

尾半　杯くれう。ズッと參れ。

久助　戴きますべえ。

尾上　コレ、必らず粗相のないやうに。

久助　合點だ／＼。

　ト始終尾上、敎へる事。久助、思ひ入れ。

今日は如何なる吉日で、日頃逢ひてえ見てえと願つた甲斐あつて、花待ち得たる今日の對面、杯頂戴いたすでござる。

ト久助、せりふ、謠のやうになり、不器用に見得をする。梅吉、酌をしながら

梅吉　とんと謠のやうぢやわいな。

ト尾上また敎へる。久助、杯を捨て、杯臺へ手をかける。

尾半　親に無くとも子は育つ。コリヤ、親を討たれて無念なか。

久助　さん候ふ〳〵。

尾半　口惜しいか。

尾上　もつときつう睨みなさんせ。

トこれにて、久助、グツと睨み、力餘つて尻餅をつく事。

琴玉　コレ、そこを一番、おつこてえろ〳〵。

ト奧より、歌梅、鮨の鉢を臺に載せて持ち出て

歌梅　モシ、お二人さん、お上からおすもじのおすべりを下さいます。

ト前へ出す。

尾半　これは有り難うございます。中休みに頂戴しようぢやアないか。

琴玉　意地の汚ない男だ。マア、稽古して後がいゝぢやアねえか。

ト此うち、久助、鮨を見て

久助　戴きますべえ〳〵。

ト取つて食ふ。此うち、奧にて、七種の鳴り物聞える

尾半、臺より下りて

尾半　コレ久助、お上からおいら達へ下すつた物を、なぜ先へ食つた。

久助　なにサ、五郎の替り役をすれば、同じ役者だ。食つたがどうしました。

琴玉　イヤ、田舍者と云ふものは、失禮を知らないものだぞ。

久助　失禮は知らなくつても、五郎の役を知つて居るからいま幕が明くのに、間に合ふぢやアないか。御大層な事を云はないものだ。

尾半　此奴、主人に向つて、口答へする太え奴だ。

琴玉　われがやうな者は、斯うしてやるワ。

ト久助の頭をぶつ。

久助　こなた、おれがどたまを叩かしつたな。
尾半　オ、、叩いてもいゝ。おれも斯うする。
ト頭を打つ。
尾上 歌梅　モシ、お二人さん、料簡しなさんせ。
梅吉　もう堪忍してやらしやんせいな。
琴玉　ナニ、打ッちやつて置きなさいまし。癖になりま
す。
久助　何が癖になるのだ。
兩人　エ、喧ましい。斯うして／＼。
ト兩人、久助の頭を打つ。
久助　そんなに二人が叩かつしやれば、おれも叩きます
ぞ。
兩人　何を此奴が。
トこれより、三人立廻りになる。奥は始終七種の囃子
聞える。
〽叩くとならば七種なづな、打つは菘と振り上げる、鼠
麹御免と振り切る蘿蔔、いゝや度々たびらこされて、ど
んな佛の座興でも、堪忍袋のおや／＼／＼、綻びかける
芹合ひに、打つは拍子かたん／＼狸が打ち納めた腹鼓、
ト三人、以前の七種の道具にて、奥の七種へ合せて拍
子模樣の立廻りの振りよろしく、尾上、女形兩人、留
めて
梅吉　モシ、お二人さん、もう堪忍してやりなさんせ。お
前も主人の事ぢや、あやまらしやんせ。
久助　イヤ／＼、あやまりませぬ。こんな無慈悲な主人な
ら、此方から暇を取つて歸ります。
歌梅　これはしたり、其やうな事を云はずとも、料簡しな
さんせ。
久助　イヤ、料簡ならぬ。歸ります／＼。
ト振り切つて行かうとする。尾上、留める。
尾上　イエ／＼、お前を歸しては、對面の幕が明かぬで、
お差支へ。わたしが留めるわいなア。
久助　イヤ、放さつせえ／＼。
尾上　留めた／＼。留めたわいなア。
トこれより、草摺模樣のクドキになる。
〽留めたその夜の氣苦勞は、嫌な座敷の首尾越えて、昇
る階子の化粧坂、立てし屛風は戀の閨、帶解き胸の肌と
肌、なんにも云はず抱き〆めて、束ねた髮と亂れ鳥、し
かけ模樣の草摺に、朝居なんしと無理無體、帶引きとむ
る床の內、自烈たいではないかいな。

トよろしくあつて、久助、振りになる。
〽かゝる所へ葛西領なる、篠崎村のな、彌作どの、坊さまは、雨降り揚句に修行に出かけて、右に珠數持ち左の方には、大きな木魚横たに抱へて、これ南無からたんのう虎ヤア〳〵、おらが嬶アがづばらんだ、隣の内儀さんこれもんだや、なんの彼のと修行は好けれど、遥か向うから十六七なる姐さんなんぞを、ちよいと見初めて、えいこのよい〳〵〳〵よいとこな、よつぽど男にや野良男。
トよろしくあつて、此うち、奥より、近習、出て、梅吉を連れて入ろ。尾半、琴玉、煙草をのみ、互ひに吸ひ付け合ふ事あつて
尾半　吸ひ付け莨で思ひ出した。
琴玉　つく物には何々。
ト尾半、琴玉は早き振りになる。
〽つく物に取りては、連れに頼んだ座頭が杖つく、犬が吠えつくシ畜生、わんつく噛み付くアイタヽヽ、喰ひ付く、やつと遁がれて箕摩の渡し、それ船がつく、鳥が巣につく、薄暗がりのひうどろ〳〵〳〵、お化がとつ付きやオ、怖や、お泊りならばもうちよつと、こちらとお手に取りつく、びつこ引き〳〵宿へつく、よたつくお洒落がとつ付く、ひつ付く、ひつきり枕が耳をつく、内のお嬶がけがつくまごつく、きよろつく御亭めは寺へかつこむ、鐘をつく、今度いつもの村の正月、子供が羽根つく鞠つく、かつぐで氣が付く、春名のお杢、篠をたばねてつくやうな雨に、やつとお江戸へ佃ふし、さアをかしらし。
ト兩人、よろしくある。奥より、梅吉、出て
梅吉　モシ〳〵、お師匠さん、支度が好くば對面を始めさせよと、お急ぎでござります。
尾上　サア〳〵、皆さん、お支度〳〵。
尾半　ハイ〳〵、畏まりました……サア、今の後をもう一遍、サア〳〵、久助。
久助　さん候ふ〳〵。
琴玉　エヽ、そこぢやねえ。幕切れだ〳〵。
尾半　祐成時宗。
久助　祐經どの。
琴玉
尾上　ハテ珍らしい對面ぢやなア。
皆々　〽笑うて見得る駿河路や、その初夢の富士かつら、俄茶

番の對面は、賑はしかりける次第なり〳〵。

ト尾半、久助、琴玉、眞中に、梅吉、竹次に久助に腰を押へさせ、對面の見得、歌梅、ッケ、尾上、拍子木を打つ。三重カケリにて、賑やかに、

よろしく幕

修綠笑遠山（終り）

難波土産にやうがましくも
あやつりの三番叟

柳絲引御攝——操り三番

三番の所作は芝居道でも一種の式樂として重々しく取扱はれてゐたが、後にはそれも平易化されて、可成り和らかい踊になつてゐた。卷頭に載せた「舌出し三番」なぞは、その中でも最も行はれたものであるが、その三番を、人形で見せようとした趣向がこの所作である。人形も操り人形で行つた所が、ちよつと覘ひ所である。嘉永六年正月、河原崎座で嵐璃珏が、大坂下りのお目見得に演じたもので、作詞は篠田瑳助だが、趣向は大坂に以前からあつて、璃珏が自慢の出し物だつたといふ。いつの頃からやつたものか解らぬが、本曲が出來てからは大坂でもこればかりを使つてゐる。この稽古の時璃珏が、これは江戸には無いから大坂から三味線彈きを呼んでくれと云つたのを、杵屋彌十郎がその曲の大體を聞いて、そんな曲なら江戸にもあると云つて、即座に操り式の三味線を作曲して、在來の曲らしく聽かせたので、璃珏も納まつたといふ逸話がある　この時の長唄は芳村孝次郎・杵屋彌十郎、望月太左衞門等、振附は西川扇藏、役割は、翁が坂東しうか、千歳が坂東竹三郎・三番が嵐璃珏であつた

柳絲引御摂（操り三番）

能舞臺の場

役名――翁。千歳。あやつり人形の三番叟。

長唄囃子連中

本舞臺、一面の松羽目、破風づくり、能舞臺のかゝり、向う雛段に長唄囃子連中居並ぶ、下手に三番叟と書きたる大きなる箱を据ゑ、片シヤギリにて幕明く。

ト頭取出て、口上觸れあつて入ると、直ぐに賑やかなる唄になる。

〽天照らす、春の日影も豐にて、さす手引く手の一さしは、昔を今に式三番、ありし姿を狩衣に、竹田が作の出立ちばえ。

トこれにて下手橋がゝりより、翁、吉例の拵らへ、千歳、面箱を携へ、出る。

〽たら〳〵たらり〳〵ら、たらりあがりらゝりどう〽千代の初めの初芝居、相河原崎賑はしう、人の山なす蓬莱に、鶴の羽重ね總の尾の、長き榮えを三つの朝、幸ひ心に任せたり。

ト翁よろしくあつて、千歳出て

〽鳴るは瀧の水〳〵、鳴るといふのは好い辻占よ、天津乙女の樣が許、絶えずとうたり絶えずとふのが誠なら、日は照るとも濡るゝ身に、着つゝ馴れにし羽衣の、松の十返り百千鳥、絶えずとうたりありうどう。

ト翁出て

〽その戀草は千早振る、神のひこさの昔より、盡きぬ渚のいさご路や、落ちくる瀧の末かけて、結ぶ妹脊の好い仲同士に、天下泰平國土安穩、今日の御祈禱なり。

ト翁、一くさりあつて、よろしく、翁送りになり、翁入る。千歳も共に入る。爰へ口上出て、三番叟の箱を明け、人形の三番叟を引出す。よろしく操り人形の思ひ入れ樣々あつて、揉み出しになる。

〽おゝさへ〳〵、喜びありや、我がこの所より、外へはやらじとぞ思ふ。

初演當時の鸚鵡石の表紙

トよろしくあつて
〽天の岩戸を今日ぞ開けるこの初舞臺、千代萬代も〽花のお江戸の、とつぱ偏へにお取立て、おこがましくもお目見得に、ほんに鵜の眞似烏飛び。
ト振りのうち、絲の搦みしこなしなぞ、誂らへの通りあり
〽難波江の岸の姫松葉も茂り、爰に幾年住吉の、神の惠みのあるならば、君に扇の御田植、逢ふとは嬉し言の葉も、濱の眞砂の數々に、讀むとも盡きぬ年浪や〽なじよの翁は仇つきものよ、つい袖引いて靡かんせ〽さうも千歳仲人して、水も漏らさぬ中々は、深い緣ぢやないかいな〽面白や。
ト三番の振りよろしく
〽相生のまつ夜の首尾に逢の松、ほんに心の武隈も、岩代松や曾根の松、あがりし關の睦言に、濡れて色增す唐崎の、松の姿の若緑。
ト手踊り模樣よろしく
〽千秋萬歲萬々歲、五風十雨も穩やかに、惠みを願ふ種蒔きと〽謡ひ奏で〻祝しけり。
ト鈴の段よろしくあつて納まり、人形の見得、片シャギリにて

幕

柳絲引御摺（終り）

積戀雪關扉
——關の扉

天明四年十一月、桐座の顔見世狂言「重重人重小町櫻」の二番目大切淨瑠璃である。讀んで見れば、在來の顔見世淨瑠璃に常套の型で、別に作として優れてゐる所もないのだが、作曲がよく出來てゐる爲か、屢々上演されて今日まで舞臺に繰返されてゐる。狂言の筋も在り來りで、この前に宗貞の弟安貞が、外れ矢の爲に贄となり、女房墨染が初花のやうに車を曳いて歩く場がある。墨染は小町櫻の精である。小町櫻が伐られる事になつたので、墨染は安貞に別れを惜しんで消える所は葛の葉のやうである。安貞は後に追手を受け兄宗貞に代つて死し、折から飛んで來た鷹に片袖を結んで放ちやるのが、淨瑠璃の場へ出て來るのである。作詞は劇神仙こと寶田壽來、作曲は鳥羽屋里長、出語りの常磐津は兼太夫に岸澤式佐、振附は西川扇藏、役割は、宗貞が二世市川門之助、小町と墨染が三世瀨川菊之丞、關兵衛が初世中村仲藏であつた。猶別項「一松色達作駒」を御參照願ひたい。爰へ收めた脚本は天保初年度のもので、初演の臺本は見出し得なかつたのが殘念である。初演は恐らくこの跡に、黒主の見出しが附いてゐたのであらう

積戀雪關扉（關の扉）

逢坂山新關の場

役名 ━━ 義峯少將宗貞、小野の小町姫、傾城、墨染實ハ小町櫻の精。關守り、關兵衛實ハ大伴黒主。

常磐津連中

本舞臺、一面の淺黄幕、雪颪しにて幕明く、

ト頭取出て、口上觸れあつて入る。直ぐに常磐津淨瑠璃になる。

〽待ち得て今ぞ時に逢ふ〳〵、關路をさして急がん。

トこれにて淺黄幕切つて落す。

本舞臺、三間の間、逢坂山新關の體、雪つもりし見得。上手に一軒の屋體、伊豫簾下ろしあり、うしろに櫻の大木、下手よき所に關の戸、雪颪しにて納まる。

ト眞中に關兵衛、頭巾、袖無し、杣の拵らへにて、薪に倚り居眠りゐる。

〽昔々昔噺のその樣に、しば〳〵似たる柴苅りも、關屋守る身の片手業、柴をたばねてかいやり捨て、五尺いよこの手拭五尺、五尺手拭中染めた、しよんがえ〽木樵の唄も世をいとふ、身につまされて偲ばしく、忘る心に取敢へず、手馴れし琴を調べける〽恨めしや我が縁、

ト此うち關兵衛、柴をこなす思ひ入れ。よき頃に伊豫簾上がる。二重に宗貞、羽織衣裳にて琴を調べてゐる、雪颪しになり、向うより小町、振り袖、肩簑、姫の拵らへ、笠を持ち、杖を突き、出で來り、花道にて

小町　ハテしをらしい、調べの音色おやなア。

〽かゝる山路の關の扉に、さしも妙なる爪音を、聽くにつけても身の上を、思ひ出せば錦の戸帳、玉の臺に人となり、翡翠の簪たをやかに、ある人は花の、雨に綻ぶ化粧とは、女子をのぼす懸け詞、今はそれにはひきかへて、草の衣や袖せばき、姿を隠す簑笠や、杖を力にたど〳〵と、關の扉近く歩み寄る〽宗貞琴を鎮め給ひ、

ト小町姫、舞臺へ來る。宗貞、思ひ入れあつて

宗貞　雪降れば、冬籠りせし草も木も、春に知られぬ花ぞ咲きける。なんと關兵衛、どうも云はれぬ景色ではないか。

關兵　成る程、この雪を肴に、一つたべたらようござりませう。

〽話しのうちに小町姫、關の外面に立ち休らひ。

小町　申し、ちと御案内申しませう。

宗貞　アレ、關の扉に、誰れやら案内があるぞや。

關兵　ナニ、案内とは何者だ。

〽關兵衛が關の扉明けて

ア、貴様は女だな。この夕暮れに供をも連れず只一人、この關へは、なぜ來たのぢや。

小町　アイ、わたしや三井寺へ參詣の者、關を通して下さんせ。

關兵　成る程、通りたくば通しもやらうが、手形があるか。

小町　其やうな物は、ござんせぬわいなア。

關兵　手形が無くば通す事は、ならぬ〳〵。

宗貞　コレ、其やうに云はずとも、この大雪にさぞ難儀であらう。料簡して、通してやりやいの。

關兵　さう仰しやれば、通してもやりませうが、コレ女中、そんならおれが尋ねる事があるが、それを一々答へるか。

小町　成る程、わたしが覺えてゐる事なら、何なりとも答へませうわいなア。

關兵　先づ第一、合點がゆかぬ。

小町　そりやマア何がえ。

關兵　サア、その譯は。

〽一體そさまの風俗は、花にもまさる形かたち、桂の黛青うして、又とあるまいお姿を、お公卿さん方お屋敷さん、多くの中で見初めたら、只は通さぬ筈なれど、そこを其まゝ捨て置くは〽生野暮薄鈍、情なしくなしを見るやうに、惡洒落云うたり、大通仕打もあるまいが、どういふ理窟か氣が知れぬ、氣が知れぬ。

〽いやとも我れは戀衣、はや脱ぎ捨てゝ烏羽玉の、墨の袂もたらちねの、後の世願ふ菩提心、褐衣の身にて候ふぞや。

〽ほう、詞は殊勝に聞ゆれど、菩提の道に入りながら、なぜ黑髮を剃らぬのぢや。

〽姿は世をもいとはゞこそ、心でいとうてゐるわいな。

〽して煩惱とは。

〽菩提なり。

〽提婆が戀も。
〽觀音の慈悲。
〽また般特が愚痴ぢや。
〽文殊の智慧。
〽智慧も器量も取なりも、類ひなき身を百歳の、姥になるまで獨り寐は、惜しい事ではないかいな。
ト二人、互ひに振りあつて
〽お日にかゝるも初深雪、凌ぐ木蔭もいとしやと、關の扉を押し開き、こちへ〳〵と通しける。
ト關兵衞、小町を木戸の中へ入れる。小町、宗貞を見て
小町　ヤア、お前は宗貞さま、お懷かしうござりましたわいな。
宗貞　これはマア思ひもよらぬ。爰へはどうしてござつたぞ。
小町　さればいなア、いつぞや布留の御寺にて、お別れ申したその後、王子さまの橫戀慕、是非に入内とありしゆゑ、館を出でゝ此やうに、身を忍んで居りまするわいなア。
宗貞　それはさぞ、憂艱難をさつしやられたであらうなう。

某とても同じ身の上、コレ、この所は先帝の御陵ゆゑ、移し置いたる御愛樹のあの櫻、非情の物とはいひながら、崩御を悲しむあまりにや、薄墨色に咲きたるを、其方の歌の德に依つて、盛りの色を增したれば、小町櫻と云ひ傳ふ。その名に愛でゝ少將も、一樹の下に侘び住居、思へば果敢ない緣ぢやなア。
トこれにて關兵衞も思ひ入れあつて
關兵　そんならあなたが、小町さまでござりましたか。これは〳〵、少將さまにも、さぞお喜びでござりませう。これからは打寬ろいで、その馴染めの戀話し、お聞かせなされて下さりませぬか。
小町　イヤモウ、この身になつて、今さら語るも面伏せ。
宗貞　さはいへ迷ひの雲霧を、懺悔に晴らすも悟り道。
小町　そんなら戀の世語りを
關兵　早う聞きたい。所望だ〳〵。
〽その初戀は去年の秋、大内山の月の宴、その折柄に垣間見て、思ひに堪えかね一筆と、書き初めしより明暮れに、文玉章の數々は、なんと覺えがあらうがの。
〽その水莖にこま〳〵と、僞はりならぬ眞實を、聞く嬉しさも押包み、戀ひ焦れても母さんは、一旦誓ひを立て

市川新車の小町姫

し身の、色に心は引かれじと、思ひ返していなせをも、云はぬは云ふに増す穗の薄。

〽小野とは云はじ戀草に、百夜通うて誠を見せて、忍び車の榻に行く、やつし姿の夜の道、いつか思ひは山城の木幡の里に馬はあれども。

〽さつても實ぢや眞實ぢや、一里あまりをわくせきと、そんなら駕籠にも乘らずにか。

〽君を思へば歩行はだし。

〽月にも行き〽闇にも行き。

〽さて雨の夜に行く思ひ、きり／＼すは我が戀を、思ひ切れとの辻占も、祝ひ直して行く夜の數も九十九夜、今は一夜ぞ嬉しやと、待つ日になれば先帝の、崩御と聞くに身の上の、戀も無常と立かはる、君の菩提を弔らはんと、位を辭していそのかみ、布留の御寺に夜もすがら、御經讀誦の折も折。

〽わたしもその時母上の、後の世祈る志し、一夜籠りに思はずも、お顏を見るよりぞつとして身にこたへ、後生菩提もどこへやら、捨てゝ二人が一つ夜着、枕並べて寐たれども、ア、いや／＼／＼、立てし誓ひは破られずと、つい其まゝの憂き別れ、思へば果敢ない緣ぞと、喞つ涙の流れては、關の清水やまさるらん。

ト宗貞小町、よろしくクドキの振りある。關兵衞、中を隔て

關兵　アヽ、哀しいはお道理／＼。何もかもこれからは、この關兵衞が呑み込んで居りまする。

小町　そんならお前に賴むぞえ。

關兵　サア、それで極まつたといふものだ。仲人はこの關兵衞、四海浪靜かでもあるまい。ハテ、どうしたものであらうなア。オヽ、それ／＼、この關守りには毎年七夕祭があるが、その祭になぞらへて、あなたは、牽牛お前は織女。

關兵　オヽ、それ／＼、秋と冬とは變れども、年に一夜の天の川。

小町　とわたる星になぞらへて

關兵　七夕祭に、かゝらうか。

〽實に織姫のかざしの袖、秋の錦を織り機の、中に想の字を現はし、砧の上にゐんれつの聲、頻りに隙なき機の音、きりはたり、てふ／＼、賤が手業やことわざの、内に關兵衞懷中より、落せし割符を小町姫、手早く取れば。

ト振りのうち、關兵衞、兩方の袂より割符と勘合の印

を落す、小町は割符、宗貞は印を拾つて

宗貞　ヤ、これは。

關兵　それは。

ト引ッたくる。

小町　これは。

關兵　それは。

ト取らうとする。小町娘、手早く隠す。

宗貞　それとは。

關兵　それ

小町　それ

三人　それ〳〵〳〵、そつこでせい。

〽戀おやあるもの渡らでおこか、渡らばさうして斯うしてと、目つま透間をなに白川の、橋を渡ろか船にしよか、橋と船とは戀の仲立ち、ほんにたゞ

ト三人手踊りあつて

〽なか〳〵に初めより、馴れずば物は思はじ、忘れは草の名にあれと、忍ぶは人の俤へ、たまに逢ふ瀬の七夕も、せめて一夜はあるものを、一期添はれぬ憂き戀は、つれないこの身とばかりにて、流涕こがれ泣き給ふ。

〽ア、これ〳〵、こりやマアどうでござります、その歎きを見まい爲、今宵しつぼり露霜に、色づく紅葉の橋渡し、所詮仲人は宵の程、我れらは奥で酒の燗、長居は恐れと走り行く。

ト關兵衛よろしくあつて入る。トヒョになり、白斑の鷹、差し金にて下りて、石にとまる。宗貞見て

宗貞　ヤア、あれは正しく青來の鷹。足に何やら附けたるは

ト側へ寄つて、鷹の足に附けたる片袖を取つて

この片袖に血汐を以て、二子乘舟と記せしは、古へ衛の孔じゆが、兄に代つて死したる唐歌。さては弟安貞は

小町　お前に代つて、お果てなされましたといなア。

宗貞　不便の者の、身の果ちやなア。

ト片袖を石の上に落すと、鶏笛になる。

ハテ、合點のゆかぬ鶏の聲。仔細ぞあらん。

ト以前の關兵衛が斧を以て石の下を掘し、鏡を出して見る。小町、手に取つて

小町　これこの鏡の裏に、生けるが如き鶏の形、血汐の穢れに聲を上げしは、紛ふ方なき大伴家の重寶、八聲の名鏡。篁さまよりお渡しありしこの割符と、最前陽守が落せし割符と、これ斯う合せて見る時は

ト割符を出して宗貞に見せる。
宗貞　鏡山といふ文字。何にもせよ、合點のゆかぬはあの關守、後に殘りて猶も樣子を窺はん。其方はこれより立歸り、烽火を合圖に、關の四方を圍まれよと、篁へ傳へてたも。
小町　そんなら、わたしは
宗貞　小町どの
小町　宗貞さま
宗貞　片時も早う。
〽片時も早うと宗貞が、詞に任せ小町姬。戀しき人に別れても、また逢坂の山傳ひ、雪踏み分けて急ぎ行く。
ト小町、思ひ入れあつて、向うへ入る。宗貞、よろしく二重へ上がり
〽今宵も既に降りしきる、雪の翅の羽風をも、音靜かにや更けて行く、正に先帝御亡き跡を、とひ奉る後夜の讀經、猶も回向を忘れもやらず、誦するも弟安貞と、心ばかりの手向け草。
ト宗貞、回向のこなしあつて、以前の片袖を取上げ
ア、さりながら、血汐に染みしこの片袖、身に添へ持たば、先帝への畏れあり、如何はせん。……オ、それそれ。
ト床の間に立てかけし以前の琴の下へ隱す事。
〽その間に奧の一間より、一杯機嫌で關守は、銚子杯携へて、足もひよろ／＼歩み出で。
ト關兵衞、大杯と銚子を持ち、醉うたるこなしにて出て來る。
〽えゝい、世の中に酒ほどの樂しみはないわいの、ヤア、お前はまだ寐ないか、イヤサ、なぜ寐なさらぬよ、して、この花嫁御は、どこへ行つた、ハヽア、彼奴床急ぎだな、エヽ、急ぐやつさ、コレ、お前も行つて寐なよ、寐ぬは損だ、ばさらんだ、あれはさのえい、これはさのえいと戀の淵、もしも嵌まる氣で四つ紅葉。
ト關兵衞、醉うたる振り、いろ／＼あり
宗貞　成る程、わしは行つて寐やうが、其方はきつい醉ひやうぢや。ア、危ないぞや／＼。
ト云ひながら關兵衞の懷へ手を入れる。その手を押へて
〽あゝ、こりや何をするえ、おれが懷へ手を入れて、ドヽどうするのだ。
サア、これは。

中村芝翫の關兵衛

〽イヤ、どうするのだよ。エヽ、聞えた〳〵、紙が無いといふ事か、神も末社も打連れて、めでた〳〵の若松様よ、枝も榮えて葉も茂る、おめでたや、千代の子おめでたや、千秋萬歳ばんぜい〳〵〳〵萬々歳、ハア、いざさせ給へと押しやられ、始終を胸に宗貞は、心殘して奥へ入る。

ト宗貞、思ひ入れあつて奥へ入る。

〽跡は手酌の一人酒、ア、さぞ今頃はしどけ松山、エイ、ア、えゝ氣味だぞ、こりや命を掻きむしるわえ、どれもう一杯、酒にうつらふ星の影。

ト酒をつぐ。よき程に日覆より七曜星を繰り下ろす。關兵衛、その影が杯へうつるを見て、キッと思ひ入れ。

關兵　この杯中に鎭西の、輝やく影は寅の一天、今月今宵三百年に當る、この櫻を切つて護摩木となし、斑足太子の塚の神を祀る時は、大願成就心のまゝ。この斧を以て、立ち所に、ドレ

〽かしこの石に斧の刃を、押し當て〳〵磨ぎ立つる、音はさう〳〵とう〳〵と、闇を照らせる金色に、玉散るばかり物凄さ。

ト大鉞を出して石に刃を磨ぎ立てるこなし。いろ〳〵あつて

この斧の刃を試むるは、幸ひなるあの琴。

ト駈け寄つて琴を二つに切る。以前の片袖出る。關兵衛、これを取上げると、大ドロ〳〵にて關兵衛の懐より勘合の印出て櫻の樹へ飛び去る事。關兵衛、思ひ入れあつて

ハテ心得ぬ。この片袖を手に取れば、我が懐中の勘合の印、櫻の梢へ飛び去りしは、いよ〳〵怪しきこの櫻木、何にもせよ、ソレ

〽切らんとすればたぢ〳〵〳〵、暫し心も消え〴〵に、斧に縋りて茫然たり。

ト關兵衛、斧にて櫻の樹を切らうとする。大ドロ〳〵にて關兵衛、切り兼ねるこなし、散々にあつて、トゞ斧に倚つて眠る事。大ドロ〳〵消える。

〽幻しか深雲につもる櫻かげ、實に朝には雲となり、夕には又雨となる、巫山の昔目のあたり、墨染が立ち姿。

ト大ドロ〳〵消えると大ドロ〳〵にて櫻の蔭より墨染女郎好みの拵らへにて出る。

〽仇し仇なる名にこそ立つれ、花の蕾のいとけなき、禿

立ちから廓の里へ、根ごして植えて春毎に、盛りの色を
山風が、來ては寐よとの兼ね言も、消り定めぬ泡沫の、
水に散りしく流れの身。
ト墨染、關兵衛の懷中へ思ひ入れあつて、よき所に立
つと、ドロ〳〵にて關兵衛、心附き、墨染を見て、思
ひ入れ。

關兵　ヤア、いづくともなく見馴れぬ女、この山蔭の關の
扉へ、いつの間に、どこから來たのだ。

墨染　アイ、わたしやアノ、撞木町から來やんした。

關兵　ムウ、何しに來た。

墨染　逢ひたさに。

關兵　そりや誰れに。

墨染　こなさんに。

關兵　ナニ、おれに。そりやなぜ。

墨染　色になつて下さんせ。

關兵　エ、何がどうした。

墨染　サア、恥かしい事ながら、わたしや見ぬ戀にあこが
れて、雪をもいとはず、はる〴〵と爰まで來たほどに、
どうぞ色よい返事を、して下さんせ。

關兵　こりや有り難い、と云ひたいが、どうも合點がゆか
ぬわえ。

墨染　お前もマア疑ひ深い。そこが歌にも云へる、櫻咲く
櫻の山の櫻花

關兵　咲く櫻あり、散る櫻あり

墨染　思ひ〳〵の、人心ぢやわいなア。

關兵　さう聞けば有りさうな事。何にもせい、いま日の下
に二人とない、器量なら風俗なら、口から云はれぬ撞木
町の太夫職が、色で逢はうとは、こりや大きに仕合せが
直つて來たわえ。そんならいよ〳〵、これからは

墨染　いつまでも可愛がつて、秀鶴の千代八千代、友白髮
まで添ひとげて下さんせ。

關兵　それは近頃忝ない。時に太夫さん、お前のお名わ
え。

墨染　墨染と云ひやんす。

關兵　ナニ墨染……あの櫻の名も、元は墨染。

墨染　エヽ。

關兵　ハテ、えゝお名でございますの。それは兎もあれ、
ついにおれはマア、女郎買ひをした事がないが、廓の駈
引き。

墨染　馴染みのしこなし間夫狂ひ、實と

關兵　嘘との
墨染　手管の所詮。
關兵　裏茶屋入りの魂膽まで
墨染　そんなら爰で、話そかえ。
ト思ひ入れ、清掻になり、墨染關兵衛、花道へ行き、
笠をさしかけ、道中のこなし。
〽行くも返るも忍ぶの亂れ、限り知られぬ我が思ひ、月夜も闇もこの里へ、忍び頭巾で格子先、行きつ戻りつ立ちつくす〽向うへ照らす提灯の、紋は菊蝶てうどよい、首尾と思へど遣り手が見る目。
〽待つたぞや。
〽おゝ、よう來なんした、逢ひたかつたも目で知らせ、暖簾くゞりて入る跡を。
〽殘り惜しげに差覗き、ア、さて、待たせるぞ〳〵と、獨り呟く程もなく。
〽簾の内より小手招ぎ、ふわりと着せる襠の、裾に隱れて長廊下、毒蛇の口を遁がれし心地、ほつと一息つく鐘も、引け四つ過ぎて床の上。
〽ヤア、まだこの溜まりの覺めぬのは、先刻に歸つた客でもよもやあるまい、こりや外に出來たわえ、どこのどいつか知らねども、お年が若うて好い男で、お金もたんと御所持なされた色男樣と、しつぽりとお契りなされたでござりませうの、エ、腹の立つ。
〽ホヽヽ、こりやをかしい、覺えもない事云ひかけて、口舌の種にさんすのかえ。エ、憎らしいとふつつり抓れば。
〽アイタ〳〵、痛いわい、ア、こんな所に居やうより、歸りましよ〳〵。
〽これいなア〽身はいろ〳〵の形がたち、足中を爪立てちよこ〳〵、ちよこ〳〵足を爪立てゝ。
〽ハアこれはしたり、莨入れを忘れて置いた、アままよなんとせう、アイヤ〳〵、うか〳〵して、まつ毛でもよまれては、怖い事〳〵、どれ、とは思へども、アどうせうなア、イヤ〳〵〳〵、思ひ切つて、どうでも歸らう。
〽これ。
〽去なうやれ、我が故郷へ歸ろやれ。
ト兩人、傾城と客のこなし充分にある。
〽立舞ふうちに落ちたる袖、これはと墨染取上げて、抱きしめつ身に添へつ、床しき夫の形見やと、人目も恥ぢず泣きければ。

嵐吉三郎の黒主　　澤村訥升の墨染

ト此うち關兵衞、以前の片袖を落す。墨染これを取つて、「ハア」と思ひ入れ。關兵衞も思ひ入れあつて

關兵　ヤア、其方は何を泣くのぢや。

墨染　サアこれは……オヽ、それ〳〵、この片袖は、餘所の女中さんから書いて寄越さんした、起證ぢやの。

關兵　イヤ、そりやア片袖だ。

墨染　イエ〳〵、起證でござんせう。

關兵　オヽ、成る程、起證だ。

墨染　エヽ、お前はなア。

〽これ此やうに初めから、起證誓紙を取交し、深いお方がありながら、隱して置いて又わしに、色で逢ふとはようもよう、騙さんしたが憎らしい、さうとも知らず慕ひ來て、見れば果敢なや片袖の、血汐の文字はなき跡の、形見と思へばいとゞ猶、これ懷かしい悲しいと、詞に色は含めども、心の劍穗に現はれ、立寄る女を、はつたと睨めつけ。

關兵　最前よりこの片袖に、心をかくる怪しき女、樣子を明かせ、なんと〳〵。

墨染　オヽ、この片袖は夫の血汐、それのみならず、最前我が業通にて手に入りし、勘合の印を所持するからは、樣子があらう。本名明かせ、なんとぢや。

關兵　斯くなる上は何をか包まん。我れこそは中納言家持が嫡孫、天下を望む大伴の黑主とは、おれが事だわやい。

ト引抜き、公卿の姿になり、キッと見得。

墨染　さてこそな。

關兵　我れに恨みをなさんとする、そも先づ汝は、何者ぢや。

トこれにて鼓唄になり

〽なう去りし恨みのあればこそ、そも人間の業受けて、女子とは見すれども、小町櫻の精魂なり。

ト引抜き、見得。

墨染　我れは非情の櫻木も、人界の生を受くれば、七つの情も備はつて、五位之助安貞どのと、契りし事も、情なや。

〽不慮の矢疵に玉の緒も、絕ゆるばかりの折も折、御兄君の身に代り、敢へなくこの世を去り給ふ、夫の形見の片袖に、引かれ寄る身は陽炎姿〽我が本性の櫻木は、邪慳の斧にかゝりしぞや、報いの程を思ひ知れと、有りあふ櫻を苛責の笞、はつたと睨む有樣を〽ヤア小癪なと無二無三、斧取り直して打ちかくれど、凡人ならぬ精靈の

業通自在の身も輕く、ひらり／＼／＼、飛びかふ姿は吹雪の櫻、霞隱れや朧夜の、水の月影手にも取られず。

ト關兵衛は斧、墨染は櫻の枝を持つて、よろしく所作ダテあり

へ見えみ見えずみ又現はれて、今ぞ即ち人界の、輪廻を離れ根に還る、しるしを見よやと云ふ聲ばかり、形は消えて櫻木に、春もかくやと歸り花、雪を踏み分け踏みしだき、水に戻れば墨染の、小町櫻と世に廣き、あまねく筐に書き殘す。

ト立廻りあつて、トゞ眞中に兩人、よろしく引張りの見得になると

關兵　東西、先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し。

幕

積戀雪關扉（終り）

咲くからは
龍頭へとゞけ
山ざくら

鐘恨重振袖 ―道成寺

能から出發した所作事の中で「道成寺」は最も多く扱はれ、數十の種類が出來たものである。その初めは榊山小四郎といふ俳優が踊つたもので、その地の一部は今だに地唄に「語り道成寺」として殘つてゐる。江戸では初世瀨川菊之丞の演じた「傾城道成寺」が最初で、これも今日にその曲は傳へられてゐる。菊之丞に次いで有名なのは初世中村富十郎で、彼れが寶暦三年三月中村座に踊つた「京鹿子娘道成寺」は各種の道成寺のうち最も好評を博し、今日猶盛んに流行してゐる。本集へ收める道成寺は、なるべく古いものをと搜したが得られず、遂に本曲を載せる事にした。この「鐘恨重振袖」は、安永八年三月、大坂角座に於て、「袖簾播州廻」の大詰に附けられたものである。すべて昔の道成寺は、獨立したものは少なく、大抵一日の狂言の一部で、筋は連絡してゐたもので、本曲も「袖簾播州廻」の中の、加古川三平の妹お光が、嫉妬に死ぬ所がある。その亡靈が白拍子になつてくるといふ趣向になつてゐる。初世中村富十郎が卽ち白拍子で、住職は嵐三十郎、下僧は藤川八藏と小川吉太郎とであつた。道成寺としては古い方の形式のものと思はれる。

鐘恨重振袖（道成寺）

月照寺鐘供養の場

役名——月照寺住僧。陀佛坊。阿佛坊。白拍子。

造り物、上手に櫻の木、上に吊り物、櫻の下げ枝見事に下がりある。上手に釣り鐘吊りある。下手に、櫻の木、右の釣り鐘に赤白綱紐の綱、釣り鐘より吊りつけある。上手、淨瑠璃の出語りの高床几。見附け一面に格子、右は腰高の金、見事なる模樣。淨瑠璃太夫二人、三味線彈きゐる。

ト幕明ける。

トひしぎにて橋がゝりより月照寺住僧、紫の衣、刺貫仕持の冠り物、手に水晶の珠數、中啓を持ち、出で來て、舞臺の眞中に立ち、正面を切り、右謠ひ

住僧　これは播州月照寺の住僧にて候ふ。さても此たび尾上の鐘と申すは、人皇十五代神功皇后、三韓より御凱陣の砌り、献じ奉るといへども、應仁の亂世に、海神の業によつて、海底に沈めしところ、高野山の大塔の鐘とあるによつて、これを引き上げ勸進すといへども、不思議やこの鐘尾上々々と鳴り渡つて、再び高野山よりこの所に返し納め候ふ程に、鐘の供養いたさばやと存じ候ふ。

ト右打し、脇座に直り

如何に兩僧。

阿陀　御前に候ふ。

ト正面の前に直る。

住僧　鐘を櫻木へ引き上げてあるか。

陀佛　さん候ふ。鐘を稍にゲッと上げ候ふ。

住僧　今日吉日にて候ふ程に、鐘の供養を致さうと存ずるにて候ふ、まつた仔細あつて女人禁制にてあるぞ。かんまへて一人も入るゝ事、堅く兩僧へ申し渡しあるぞ。

陀阿　畏まつて候ふ。

ト兩人手を突く。

ト住僧しづ／＼向うへ入る。

陀佛　なんと阿佛坊、今のこと聞いたか。お師匠はいかいたはけではないか。今日の鐘の供養に、女人禁制といふ

事があるものか。なんとマア、時代な者ぢやぞや。
阿佛　サイナウ、あのやうに女子を嫌うたら、どこぞでは
罰が當らうぞや。
陀佛　イヤモウ、來世はろくなものには生れまい。
阿佛　とは云ふもの丶、云ひ附けなれば番をせずばなるま
い。
陀佛　ハテ、あの和郎の仰せを背かれはせまい。
阿佛　どこの國にもゐるに極つてある、女子を入れなとい
ふやうな、阿房臭い事があるものかい。
陀佛　コリヤ、何ぼう腹立てゝも、云ひ附けなればしよこ
とがない。
阿佛　そんなら觸れずばなるまい。
ト橋がゝりの方に向ひ
如何に面々、承り候へ。當所に於いて鐘の供養の御座
候ふ間、志しの方々は參られ候へ。又さる仔細のあつて、
女人は堅く禁制と仰せ出だされてあるゆゑ、一人も參ら
れ申さず。その分心得候へ〳〵。
トひしぎになり、次第打つ。
ト本式の通り、二段頭打つ。
ト出語り三味線彈きかける。

ト大小やむ。
ト淨瑠璃太夫語りかける。
ト白拍子、振り袖の形にて花道より出る。
〽月は程なく入り汐の、煙りみちくる小松原、急ぐとす
れど戀風の、振り袖重く吹きたまり、ひらり帽子のふは
ふはと、緣を祈りの神ならで、鐘の供養へ物好き參り、
あぢな娘と人前に、笑はゞ笑へ百千鳥、君と寢し夜のき
ぬぎぬの、あかぬ別れの悲しさを、思へば憎くや世の中
の、鐘も碎けよ鐘突きの、情けないぞや恨めしと、忘る
るひまも涙川、戀の氷にとぢられて、身を切り碎く憂き
思ひ。
〽戀をする身は、濱邊の千鳥、夜毎々々に袖絞る、しよ
んがえ、君に逢ふ夜は梢の烏、可愛々々と引寄せて、し
よんがえ、交す枕の睦言に、又の御見はいつかはと、
心盡しの年月は、門に小松の立つ朝より、梅が香匂ふ窓
の内、櫻も散りて早苗取る、螢の夕べ五月雨に、蚊遣り
ふすぶる軒のつま、秋風そよと暮れはてゝ、田の面に落
つる雁の聲、げに月ならば十三夜、菊の下露妻戀ひかぬ
る、男鹿や女鹿の薄氷、これ皆戀の四季のおり、君と比
翼の床の内、語り明かさぬ夜半もなし、別れ惜しめど明

けの鐘、はや鳥の聲、科なき鐘を恨みにし、その數よむ
とも知らぬ眞砂路を、獨り喞ちて行く道も、急ぐ心かま
だ暮れぬ、日も高砂に着きにけり。
ト本舞臺へ直る。阿佛坊、不思議さうな顏して
阿佛　陀佛坊、何かは知らず、よい匂ひがして來たが、其
方の鼻へは入らぬか。
陀佛　何ぢや。よい匂ひがする。
阿佛　どうもいへぬ匂ひぢや。
陀佛　鳥叉で鰻でも燒くのか。
阿佛　滅相な。下作な匂ひではない。なんの事はない、日
本國が鼻の先へ寄るやうな匂ひぢや。
陀佛　イヤ、何も匂ひはせぬぞや。
阿佛　あの匂ひがせぬか。
陀佛　ドレ〳〵。
ト思ひ入れあつて
おれが鼻へは微塵も入らぬ。
阿佛　この匂ひが鼻へ入らぬとは、果報拙ない坊主ぢやな
ア。
ト此うち、ツと白拍子を見て
陀佛　ホツト、いま鼻へ入つたぞ。

阿佛　なんと、どうもいへまいか。
陀佛　ほんに、これは心地よい匂ひぢや。鼻を取つて行く
やうな。
阿佛　なんと、陀佛坊。これはマア何の匂ひであらうな
う。
陀佛　これは慥かに赤貝を伽羅で煮しめた匂ひぢや。
阿佛　イヤ〳〵、赤貝ではない。これは時分がら、蛤の煮
ざしぢや。しかもすべ〳〵とした、蛤のよい物の煮ざし
ぢや。
陀佛　この赤貝も慥かに白拍子ぢや。しかも山の薯入れて
貝燒きにする匂ひぢや。
阿佛　イヤ〳〵、違うた。忝なうもこの蛤は、手入らずの
生蛤ぢや。しかも振り袖のかざぢや。なんと、愚僧が
嗅ぎ出したに違ひはあるまい。
陀佛　ハテ、意固地な。白拍子も、娘も、ついに見た事も
あるまい。
阿佛　イヤ、人を侮つた事云ふな。愚僧もこの身にならぬ
先に、娘を抱いて寢た事もある。慮外ながらしかも手入
らずを、抱いて寢た。われこそ白拍子も娘も見た事もな
うて。サア、そんなら娘か、白拍子か、賭にせう。

陀佛　面白い。なに賭にせう。
阿佛　ホイ、現金がよい。今朝二人、庄屋の法事に行て貰うたお布施を賭に致さう。
陀佛　現金とは面白い。サア〳〵、出せ〳〵。
ト兩人百づゝ出し
云うて置かぬ事は惡い。おりやいつまでも白拍子ぢやぞよ。
阿佛　おりや娘も娘、しかも振り袖ぢやぞ。
ト兩人橋がゝりへ行き、透かし見て、陀佛坊恟りして
ソリヤ、振り袖ぢやぞ
陀佛　南無妙法蓮華經。
阿佛　オット、お布施取り山ぢや。
トひッたくり取る。
陀佛　エヽ、口惜しい。併し、女禁制とあるによつて、振り袖は來ぬ筈ぢやが。
白拍　如何に、案内申し候ふ。
陀佛　案内とは、白拍子にて渡り候ふか。
阿佛　娘にて渡り候ふや。
白拍　これはこの國の傍らに住む、白拍子にて候ふ。
陀佛　ソリヤ、白拍子ぢやワ。

阿佛　南無妙法蓮陀佛。
ト頭掻く。
陀佛　オット、お布施を有り難山の大將、おれ一人。
トまた布施を引ッたくる。
阿佛　エヽ、口惜しい。折角してやつた物をたくられた。
エヽ、緣なきお布施は度し難しぢやなア。
陀佛　さてはいよ〳〵そもじは、白拍子に違ひないかや。
白拍　さん候ふ。この國の傍らに住む白拍子にて候ふ。と云うては堅いわいなア。聞けば、この所にて鐘の供養があると聞いたゆゑ、どうぞお二人を賴みやんす程に、供養を拜まして下さんせいなア
阿佛　知らぬ〳〵。その白拍子でも百銅しまうたものぢやえ。
ト云ひ捨てゝ上手へ入る。陀佛坊、表へ出て白拍子が顏見て
陀佛　サア〳〵、拜まさう。サア〳〵、お入り〳〵。
ト思ひ入れ、阿佛坊、陀佛坊を引き退け
阿佛　ヤア、尾籠千萬な。今日の鐘の供養に、女人は堅く禁制と云ひ附けられたぞ。それに女を內へ入れるとは、生臭坊主めが。勿論女猫でも入れる事はならぬぞ。コレ、

初世中村富十郎の白拍子

そこな女性、お庭を踏めば同じ事ぢや。それから拜んで置いたがよい。エヽ、こゝな道樂者、お師匠樣へ申し上げ、ひどい目にあはすぞ。

陀佛　アヽ、これは、誤まつた〳〵。これぢや〳〵。

ト拜む。

阿佛　ヤア〳〵、白拍子とやら、この所は女禁制。

白拍　ハアヽ。

ト俯向く。

兩人　叶はぬ〳〵。

陀佛　エヽ、思ふ事叶はぬゆゑ、禁制々々。

阿佛　エヽ、おれが思ふやうなら、男を禁制にして女を放樂にしてやりたい。

白拍　イカサマ、法師は木折とはよう云うたものぢやなア。むごらしい坊さん達ではあるわいな。固意地ばかりで、浮世の諸譯を知らんせぬさうな。其やうな野暮ではよい寺へは坐られぬぞえ。ちと修行して粋にならんせいなア。ほんに、偏屈な坊さんではあるわいなア。

陀佛　コレ、阿佛坊。なんと無禮すぎた女ではないか。こなたやおれを、何にも知らぬ發意坊主ぢやと思うてゐるさうな。一つ、不審持つて參らう。

阿佛　よからう〳〵。女めをギツチリ詰まらしこまさう。

ト阿佛坊。白拍子が側へ行き、仔細らしう

既に梵網經に曰く、女の手より物を取れば、五百生が間、手なき者に生るゝ、但しお布施は苦しからず。外面如菩薩内心如夜叉。……「忘れても、手には取らじないが栗の、ゑむたる事の落ちもこそすれ」迷ひの一つ、恐るべし恐るべし。

陀佛　イザ、愚僧も一不審を持つて參らう。既に大威德の陀羅尼に曰く、契り短かき髮の毛には、大象も繫がるると云ふ傳へ、後腹やまずによい者は、若衆々々と說かれたり。

白拍　なんぢや。若衆がよい。なんぼう若衆を贔屓さんしても、つゞまるところは女がなければ、成佛はならぬぞえ。ハテ、若衆も、女子も、男女の隔てありとも、胸には變る人形もなし。

阿佛　提婆の惡も

白拍　觀音の慈悲。

阿佛　儒佛の工夫も

白拍　文珠の智慧。

阿佛　惡といふも

白拍　善なり。
陀佛　煩惱といふも
白拍　菩提なり。
阿佛　佛もあれば
白拍　衆生もあり。
陀佛　衆生あれば
白拍　白拍子もあり。
阿佛　柳は
白拍　緑、禿の名。
陀佛　花は
白拍　紅ゐ、女郎の名。
阿佛　さて緑の子は
白拍　舞ひ子なり。
阿佛　イヤ、鶴なり。
白拍　コレ、天蓋とは
陀佛　生鯖なり。
阿佛　十文の比翼の鳥は
白拍　そりや何の事ぢやえ。
阿佛　汝知らずや、河原の妹背なり。
白拍　そんなら坊さん、これは如何に。

ト握り拳を見せる。
陀佛　オット、皆まで云ふまい。坊さん手の内入れうと云ふ事か。
白拍　違うた〳〵。
阿佛　握り飯と云ふ事か。
白拍　なにを。そんな事ぢやない。この手の内は雀ぢやわいなア。
陀佛　エヽ、聞えた〳〵。雀百になつても踊り忘れぬといふ事か。
白拍　なにを。この手の内の雀、生きてゐるか、死んでゐるか、それ積つて見さんせと云ふ事ぢやわいなア。
阿佛　ドッコイ、その手は食はんぞ。その雀が、生きてゐると云うたなら、締め殺し
陀佛　死んでゐると云うたらば、生けて放さうといふ、その手はたべぬ〳〵。
白拍　ソレ。
ト手を開き見せる。
陀佛　こりや何にもない。
白拍　サア、無いと云へば無し、有りといへば有る。色即是空、空即是色。

中村芝翫の白拍子　（國貞の作）

中村芝翫の白拍子　（鞨鼓の件）

阿佛 魔佛一如。
陀佛 善惡不二。
白拍 性は善なり、性は惡なり、定めなきこそ浮世なれ。
阿佛 觀ずれば、如夢幻泡影、如露亦如電。
陀佛 諸行無常。
白拍 是生滅法。
阿佛 生滅滅已。
白拍 寂滅爲樂と聞く時は、鐘の供養は廣大無邊。平に爰を通して拜ませて下さんせ。坊さん達、賴むぞえ。
陀佛 さつてもようしやべる女子ぢや。
阿佛 どうでも生粹の骨頂ぢや。拜ましてやらずばなるまいが、只はならぬ。白拍子とあれば、舞が一指、見たい見たい。
白拍 供養さへ拜まして下さんす事ならば、舞を舞うて見せやんす程に、坊さん、賴むぞえ。
陀佛 さあらば、某が心得を以て、供養を拜ませ申さうずる間、面白う御舞ひ候へ。
白拍 アレ、嬉しや。涯分舞ひを舞ひ候ふべし。
ト太鼓一とうに、鳴り物、此うち囃子方皆々、長上下、並よく並ぶ。

謠〽嬉しやさらば舞はんとて、あれにまします宮人の、烏帽子を暫しかりに着て、既に拍子を進めけり 次第〽花の外には松ばかり、暮れ初めて鐘や響くらん

ト これより亂拍子になる。

次第〽塔の山はげしきひやうきと響きしゆゑ、再び爰に返せしより、尾上の鐘とは名附けたりや高砂の

ト急の舞になり、三段舞を打ち上げる。三味線へ引き取り、直ぐに唄になる。

〽鐘に恨みは數々ござる、初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり、晨鐘の響きには、生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響くなり、聞いて驚ろく人もなし、我れも後生の雲晴れて、眞如の月を眺め飽かさん。

〽云はず語らぬ我が心、亂れし髮の亂れしも、つれないは只移り氣な、どうでも男は惡性者〽櫻々と唄はれて、云うて袂の譯二つ、勤めさへ只うか／＼と、どうでも女は惡性者、東育ちは蓮葉な者ぢや、え手鞠唄〽戀のわけ里武士の道具は、伏せ編笠で、張りと意氣地の吉原、花の都は唄で和らぐ、しき島原に、勤めする身は誰れと伏

見の翠簾、煩悩菩提の撞木町より、難波四筋に通ひ木辻に、禿立ちから、室の早咲き、それがほんに色ぢや、一二三より夜露雪の日、下の關路も、共にこの身を馴染み重ねて、中は丸山、只丸かれと、思ひ染めたが縁ぢやえ。

〽梅とさん/\、櫻は、いづれ兄やら弟やら、分きて云はれぬなア花の色、西も東もみんな見に來た花の顔、さよオ、エ、見れば戀ぞ増す、さよオ、エ、可愛らしさの花娘。

〽戀の手習ひつい見習ひて、誰れに見しよとて紅鐵漿つけよぞ、みんな主への心中立て、おゝ嬉し/\、末は斯うぢやになア、さうなるまでは、とんと云はずに濟まそぞえ、と誓紙さへ僞はりか、嘘か、誠か、どうもならぬ程に逢ひに來た、ふッつり悋氣せまいぞと、嗜なんで見ても情なや、やア/\/\、この女子には何がなる、殿御殿御の氣が知れぬ/\、悪性な/\氣が知れぬ、恨み恨みてかこち泣き、露を含みし櫻花、さはらば落ちん風情なり。

〽面白の四季の詠めや、三國一の富士の山、雪かと見れば、花の吹雪か吉野山、散りくる/\嵐山、朝日山々を

見渡せば、歌の中山、石山の末の松山、いつか大江山、生野の道の遠けれど、戀路に通ふ淺間山、一夜の情有馬山、いなせの言の葉、あすか木曾山、待乳山、わが三上山、祈り北山、稻荷山、縁の結びし妹脊山、二人の中の黄金山、花咲く、えいこの/\姥捨山、峯の松風、音羽山、入相の鐘を筑波山、東叡山の月の顔ばせ三笠山。

〽只頼め、氏神さんが可愛がらしやんす、出雲の神さんと約束すれば、つい新枕、里に戀すれば浮世ぢやえ、深い仲ぢやえと云ひ立てゝ、こちや/\/\、よい首尾え憎らしいほどいとしらし。

〽吉野初瀨の花紅葉、いつも色よくなア咲き初めて、紅をさすが品よく、なりよく、襷の〻字の賤が業、しをらしや、さつき五月雨、早乙女々々々田植ゑ歌、早乙女乙早女田植ゑ歌、裾や袂を濡らした、サアサ、いとゞ思ひの亂れ髮。

〽不思議や/\この鐘を、花の姿のうしろ髮、思へばこの鐘恨めしやと、龍頭に手を掛け飛ぶぞと見えしが、引ツかついでぞ失せにけり。

ト此うち三人立廻りあつて、よろしくあつて、三人キツと見得にて

打出し幕

鐘恨重振袖（終り）

歌舞伎十八番の内 **勸進帳**

勸進帳

謠曲の「安宅」は、淨瑠璃に種々と脚色されてゐたが、歌舞伎としては元祿十五年二月、中村座上演の「星合十二段」を以て嚆矢とする。初代市川團十郎作の脚本で、團十郎自ら辨慶に扮し、義經と卿の君の供して關へさしかゝると、和泉の三郎が咎める。そこへ朝比奈が出て助けろといふ趣向だつたさうである のち安永二年十一月、中村座の顏見世狂言「御ひゐき勸進帳」にも安宅の關の場があつて、四世團十郎が荒事の辨慶を見せ、大當りを取つた。七世市川海老藏が市川家の歌舞伎十八番を選定した際、「勸進帳」をも加へたが、彼れが古劇を選んだのは溫古知新の意味で、いづれも當時に向くやう改作上演する意思であつた。依つて「勸進帳」も能樂を寫した舞踊劇に書き直させ、當時としては頗る澁い舞臺を見せたが、初演には餘り迎へられず、九代目團十郎に至つて大成され、看客にその眞味を悟らせたものである 詞章の作者は三世並木五瓶、長唄の作曲は四世杵屋六三郎(六翁)、振附は西川扇藏、長唄は芳村伊三郎、岡安喜代八、杵屋長次郎、杵屋六三郎、望月太左衛門等。役割は、辨慶に七世市川海老藏、富樫に市川九藏、義經に八世市川團十郎、常陸坊に市の川市藏、片岡八郎に市川黑猿、伊勢三郎に市川赤猿、駿河次郎に市川海猿、番卒に尾上菊四郎、市川箱猿、大谷萬作等であつた。

この脚本揭載を許された堀越家の好意を謝す。

勸進帳（勸進帳）

安宅の關の場

役名——九郎判官義經。常陸坊海尊。伊勢三郎。片岡八郎。駿河次郎。富樫の左衞門。士卒三人。武藏坊辨慶。

長唄囃子連中

本舞臺、一面に所作舞臺を敷き、正面は松を畫いたろ羽目、この前の雛段に長唄囃子連中居並ぶ。左右は、若竹を畫いたろ羽目、片シヤギリの鳴り物にて幕開く。

ト富樫の左衞門、士卒三人を率ひて出る。

富樫　如何に、者共あるか。

士卒　御前に候ふ。

富樫　斯樣に候ふ者は、加賀の國の住人、富樫の左衞門にて候ふ。さても、頼朝義經、御仲不和となり給ふにより判官どの主從、作り山伏となり、陸奧へ下向のよし、鎌倉どの聞し召し及ばれ、斯く國々に新關を立て、山伏を堅く詮議せよとの嚴命によつて、某、この關所を相守る。方々、左樣心得てよからう。

士甲　ハツ、仰せの如く、この程も怪しげなる山伏を捕へ梟木に掛け並べ置きましてござります。

士乙　隨分、ものに心得、我れ〳〵、御後に扣へ、もし山伏と見るならば、御前へ引き据ゑ申すべし。

士丙　修驗者たる者、來りなば、即座に繩かけ、討取るやう

士甲　いづれも警固

三人　いたしてござりまする。

富樫　いしくも各々申されたり。猶も山伏來たりなば、謀計を以て虜となし、鎌倉どのの御心安んじ申すべし。方方、この儀、キッと番頭仕れ。

三人　畏まつて候ふ。

ト よき程に、座に着く。

〽旅の衣は篠懸の〳〵、露けき袖やしをるらん。時しも頃は如月の〳〵、十日の夜、月の都を立ち出で丶

ト花道より義經、笈を脊負ひ、網代笠と、金剛杖を持つて出でよき所にとまり

〽これやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも、逢坂の山隱す、霞ぞ春はゆかしける、浪路はるかに行く船の、海津の浦に着きにけり。

トこの唄にて、常陸坊海尊、伊勢三郎、片岡八郎、龜井六郎、後より武藏坊辨慶、いづれも山伏の姿にて出で來り、花道にとまる。

義經　如何に辨慶、道々も申す如く、行く先々に新關あつては、所詮、陸奧までは思ひもよらず。名もなき者の手にかゝらんよりはと、覺悟は疾に極めたり。さりながら、各々の心もだし難く、辨慶が詞に從ひ、斯く強力と姿を變へたり。面々、計らふ旨ありや。

常陸　さん候ふ、帶せし太刀は何の爲、いつの時にか血を塗らん、君御大事は今この時。

伊勢　一身の臍を固め、關所の番卒切り倒し、關を破つて通るべし。

龜井　多年の武恩は、今この時。

駿河　それこそ望む所なれ。いでや關所を

四人　踏み破らん。

辨慶　ヤアレ暫らく、御待ち候へ。道々も申す如く、これは由々しき御大事にて候ふ。この關一つ踏み破つて越えたりとも、行く先々の新關に、かゝる沙汰のある時は、事を求めて破るの道理、容易くは陸奧へ參り難し。それゆゑにこそ、兜巾篠懸を退けられ、笈を御肩に參らせ、君を強力に仕立て候ふ。兎にも角にも某へ、御任せあつて、御痛はしくは候へども、御笠を深々と召され、如何にも草臥れたる體にもてなし、我れ／＼より後に引下がつて、御通り候はば、なか／＼人は思ひもより申すまじ。はるか後より御出であらうずるにて候ふ。

義經　兎にも角にも、辨慶、よきに計らひ候へ。各々違背すべからず。

四人　畏まつてござりまする。

辨慶　さらば、皆々候ふ。

四人　心得申して候ふ。

〽いざ通らんと旅衣、關のこなたに立ちかゝる。

トこれにて皆々舞臺へ來る。

辨慶　如何に申し候ふ。これなる山伏の、御關を罷り通り候ふ。

ト士卒は顏を見合せ

初演當時上演前に發行された錦繪

畫工が想像で描いたため舞臺服裝とも違つてゐる

士三　ナニ、山伏のこの關にかゝりしとや。
富樫　なんと、山伏のお通りあると申すか。心得てある。
ト立つて來り、辨慶に向ひ
ナウ〳〵客僧達、これは關にて候ふ。止り候へ。
辨慶　承はり候ふ。これは南都東大寺建立の爲に、國々へ客僧を遣はさる。北陸道を、この客僧、承つて、罷り通り候ふ。
富樫　近頃殊勝には候へども、この新關は山伏たる者に限り、堅く通路なり難し。
辨慶　心得ぬ事どもかな。して、その趣意は。
富樫　さん候ふ……頼朝義經、御仲不和にならせ給ふにより、判官どのは、陸奥秀衡を頼み給ひ、作り山伏となり、下向あるよし、聞し召し及ばれ、國々へ斯く新關を立て、某、この關を承る。
士甲　山伏を詮議せよとの事にて、我れ〳〵番頭仕る。
士乙　殊に見れば、大勢の山伏達。
士丙　一人も通す事
四人　罷りならぬ。
辨慶　委細承はり候ふ。そは、作り山伏をこそ留めよとの仰せなるべし。誠の山伏を留めよとの、仰せにてはよもあるまじ。
士甲　イヤ、昨日も山伏を、三人まで切つたる上は
士乙　たとへ誠の山伏たりとて、容赦はなし。
士丙　たつて通れば、一命にも及ぶべし。
辨慶　さて、その切つたる山伏首は、判官どのか。
富樫　アヽラむづかしや、問答無益、一人も通す事
士三　罷りならぬ。
ト上手へ來り、富樫、葛桶にかゝり居る。
辨慶　言語道斷、かゝる不祥のあるべきや。この上は、力及ばず。さらば最期の勤めをなし、尋常に誅せられうずるにて候ふ。各々、近う渡り候へ。
四人　心得て候ふ。
辨慶　いで〳〵、最期の勤めをなさん。
〽それ山伏といつぱ、役の優婆塞の行儀を受け、即心即佛の本體を、爰にて打留め給はん事、明王の照覽はかり難う、熊野權現の御罰あたらん事、立ち所に於て、疑ひあるべからず、唵あびら吽けんと、珠數さら〳〵と押し揉んだり。
ト此うちノットにて、辨慶、眞中に左右へ二人づゝ別れ、祈りよろしくある　富樫、思ひ入れあつて

明治八年九月新堀座上演

富樫　近頃殊勝の御覺悟。先に承はれば、南都東大寺の勸進と仰せありしが、勸進帳の御所持なき事は、よもあらじ。勸進帳を遊ばされ候へ。これにて聽聞仕らん。

辨慶　なんと、勸進帳を讀めと候ふや。

富樫　如何にも。

ト辨慶、思ひ入れあつて

辨慶　心得て候ふ。

〽元より勸進帳のあらばこそ、笈の内より往來の、卷き物一卷取出だし、勸進帳と名附けつゝ、高らかにこそ、讀み上げゝれ。

ト　笈の内より一卷を出し、押し開き

それ、つら〳〵おもん見れば

ト富樫、勸進帳を差覗く。辨慶は、見せじと隱す。

大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隱れ、生死長夜の永き夢、驚ろかすべき人もなし。爰に中頃の帝おはします、御名を聖武皇帝と申し奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみ難く、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く、思ひを、善途に飜へし、盧遮那佛を建立し給ふ。然るに、去んじ壽永の頃燒亡し畢んぬ。かゝる靈場絶えなん事を歎き、俊乘坊澄源、勅命を蒙むつて、無常の關門に涙を落し、上下の親族を勸めて、彼の靈場を再建せんと諸國に勸進す。一紙半錢奉財の輩は、現世にては無比の樂みに誇り、當來にては數千蓮華の上に座せん。歸命頂禮稽首、敬まつて白す。

ト卷き物を納め、キッと見得。

〽天も響けと讀み上げたり。

富樫　勸進帳聽聞の上は、疑ひあるべからず。さりながら、事の次手に問ひ申さん。世に佛徒の姿さま〴〵あり、中に山伏は、いかめしき出立ちにて、佛門修業は訝かしし、これにも謂れあるや如何に。

辨慶　その由來いと易し。それ、修驗の法といつぱ、所謂台藏金剛の兩部を旨とし、嶮山惡所を踏み開き、世に害をなす惡獸毒蛇を退治して、現世愛民の慈愍を垂れ、或ひは難行苦行の功を積み、惡靈亡魂を成佛得脫させ、日月清明、天下泰平の祈禱を修す。かるがゆゑに、內には慈悲の德を納め、表は降魔の相を顯はし、惡鬼外道を威伏せり。これ、神佛の兩部にして、百八の珠數に佛道の利益を顯はす。

富樫　して又、袈裟衣を身にまとひ、佛徒の姿にありなが

ら、常に戴く兜巾は如何に。

辨慶　即ち、兜巾篠懸は、武士の甲冑に等しく、腰には彌陀の利劍を帶し、手には釋迦の金剛杖にて、大地を突いて踏み開き、高山絶所を踏横せり。

富樫　寺僧は錫杖を携ふるに、山伏修驗の金剛杖に、五體を固むる謂れはなんと。

辨慶　事も愚かや、金剛杖は、天竺檀特山の神人、阿羅々仙人の持ち給ひし靈杖にて、胎藏金剛の功德を籠めり。釋迦いまだ、瞿曇沙彌と申せし時、阿羅々仙に給仕して苦行したまひ、やゝ功積る。仙人その信力強勢を感じ、瞿曇沙彌を改めて、照普比丘と名けたり。

富樫　して又、修驗に傳はりしは。

辨慶　阿羅々仙より照普比丘に授かる金剛杖、かゝる靈杖なれば、我が祖役の行者、これを持つて山野を經歷し、それより世々にこれを傳ふ。

富樫　佛門にありながら、帶せし太刀は只、物を嚇さん料なるや、誠に害せん料なるや。

辨慶　これぞ替山子の弓に等しく、嚇しに佩くの料なれど佛法王法の害をなす、悪獸毒蛇は云ふに及ばず、例へ人間なればとて、世を妨げ、佛法王法に敵する悪徒は、一殺多生の理によつて、忽ち切つて捨つるなり。

富樫　目に遮り、形あるものは切り給ふべきが、もし、無形の陰鬼陽魔、佛法王法に障化をなさば、何を以て切り給ふや。

辨慶　無形の陰鬼陽魔は、九字眞言を以て、これを切斷せんに、なんの難き事やあらん。

富樫　して、山伏の出立ちは。

辨慶　即ち、その身を、不動明王の尊容に象るなり。

富樫　頭に戴く兜巾は如何に。

辨慶　これぞ、五智の寶冠にて、十二因緣の襞を取つてこれを戴く。

富樫　掛けたる袈裟は。

辨慶　九會曼荼羅のかきの篠懸。

富樫　足にまとひしはゞきは如何に。

辨慶　胎藏黑色のはゞきと稱す。

富樫　さて又、八つのわらんずは。

辨慶　八葉の蓮華を踏むの心なり。

富樫　出で入る息は。

辨慶　阿吽の二字。

富樫　そも〳〵九字の眞言とは、如何なる儀にや、事の次

手に問ひ申さん。なんと〳〵。

辨慶　九字は大事の神秘にして、語り難き事なれども、疑念の晴らさんその爲に、說き聞かせ申すべし。それ、九字の眞言といつぱ、所謂、臨兵鬪者皆陳列在前の九字なり。正に切らんとする時は、正しく立つて齒を叩く事三十六度、先づ右の大指を以て四縱を畫き、後に五橫を書く。その時、急々如律令と呪する時は、あらゆる五陰鬼煩惱鬼、まつた惡魔外道死靈生靈、立ち所に亡ぶる事、霜に熱湯を注ぐが如し。實に元品の無明を切るの大利劍莫耶の劍もなんぞ如かん。武門に取つて呪を切らば、敵に勝つ事疑なし。まだこの外に修驗の道、疑ひあらば、尋ねに應じて答へ申さん。その德、廣大無量なり。肝にえりつけ、人にな語りそ穴賢々々。……大日本の神祇諸佛菩薩も照覽あれ、百拜稽首、かしこみ〳〵謹んで申す云々、斯くの通り、

〽感心してぞ見えにける。

富樫　斯く尊き客僧を、暫時も疑ひ申せしは、眼あつて無きが如き我が不念。今より某、勸進の施主につかん。番卒ども、布施物持て。

士三　ハア、。

〽士卒が運ぶ廣臺に、白綾袴一重ね、加賀絹あまた取揃へ、御前へこそは直しけれ。

ト此うち士卒は白木の臺へ、加賀絹と白綾袴地を載せ丸鏡と袋入りの砂金を載せて出で、富樫に見せよき所へ並べる。

富樫　近頃些少には候へども、南都東大寺建立の勸進、即ち布施物、御受納下さらば、某が功德、偏へに願ひ奉る。

辨慶　こは有難の大檀那、現當二世安樂ぞ、なんの疑ひあるべからず。重ねて申す事の候ふ。猶我れ〳〵は、近國を勸進し、卯月半に上るべし、それまでは嵩高の品々、お預け申す……さらば各々、御通りあれかし。

四人　畏まつて候ふ。

辨慶　いで〳〵急ぎ申すべし。

四人　心得申して候ふ。

〽こは嬉しやと山伏も、しづ〳〵立つて步まれけり。

ト辨慶先に、四人付いて花道へかゝる。義經、後より行きにかゝるを、士卒の一人、富樫に囁く。富樫、思ひ入れあつて

富樫　如何にそれなる强力、止まれとこそ。

トこれにて、皆々キツとこなし。

辨慶　ヤ、慌てゝ事を仕損ずな。
へすはや我が君怪しむるは、一期の浮沈爰なりと、各々後へ立歸る。
ト各々立歸る。此うち辨慶も急ぎ舞臺へ戻つて、義經に向ひ
こゝな強力め、何とて通り居らぬぞ
富樫　あれは、此方より留め申す。
辨慶　それは何ゆゑ留め候ふな。
富樫　あの強力が、ちと人に似たりと申す者の候ふ程に、さてこそ只今留めたり。
辨慶　ナニ、人が人に似たりとは、珍らしからぬ仰せにこそ。さて、誰れに似て候ふぞ。
富樫　判官どのに似たると申す者の候ふゆゑ、落居の間留め申す。
辨慶　ナニ、判官どのに似たる強力め、一期の思ひ出な、ウム、腹立ちや。日高くば能登の國まで越さうずると思ひしに、僅かの笈一つ背負うて、後に下がればこそ、人も怪しむれ。總じてこの程より、やゝもすれば判官どのよと怪しめらるゝは、おのれが仕業の拙きゆゑなり。ムウ、思へば憎し、憎し〳〵、いで物見せん。

へ金剛杖をおつ取つて、さん〳〵に打擲す。
ト辨慶、金剛杖にて義經を打つ。
通れ。
へ通れとこそは、罵りぬ。
富樫　如何やうに陳ずるとも、通す事
士三　罷りならぬ。
辨慶　笈に目をかけ給ふは、盜人さうな。
トこれにて、四人立ちかゝるを
コリヤ。
ト留める。富樫、士卒もこれを見て、立ちかゝる。雙方よろしくあつて
へ方々は何ゆゑに、かほど賤しき強力を、太刀かたなを拔き給ふは、目だれ顏の振舞ひ、臆病の至りかと、皆山伏は打ち刀を拔きかけて、勇みかゝれる有樣は、如何なる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えにける。
ト此うち、辨慶、金剛杖を持つて、雙方を留める事よろしくあつて、キッと見得。
まだこの上にも疑ひの候はゞ、この強力め、荷物の布施もろともに、お預け申す。如何やうとも糺明あれ。但しこれにて打ち殺し申さんや。

九世市川團十郎の

武蔵坊辨慶

富樫　これは先達の荒けなし。
辨慶　然らば、只今疑ひありしは如何に。
富樫　士卒の者が我れへの訴へ。
辨慶　御疑念晴らし、打ち殺し見せ申さんや。
富樫　イヤ、早まり給ふな。番卒どものよしなき僻目より判官どのにもなき人を、疑へばこそ、斯く折檻もし給ふなれ。今は疑ひ晴れ候ふ。とく／＼誘ひ通られよ。
辨慶　大檀那の仰せなくば、打ち殺しても捨てんもの、命冥加に叶ひし奴、以後はキッと、愼み居らう。
富樫　我れはこれより、猶も嚴しく警固の役目。方々來れ。
三人　ハア。
〽士卒を引き連れ、關守りは、門の內へぞ入りにける。
ト富樫先に、士卒附いて、上手へ入る。と下の方より辨慶、義經の手を取り、上座へ直し、敬ふこなしある。義經も憂ひながら
義經　如何に辨慶、さても今日の機轉、更に凡慮の及ぶ所に非らず。兎角の是非を問答せずして、たゞ下人の如くさん／＼に、我れを打つて助けしは、正に天の加護、弓矢八幡の御託宣かとも思へば、忝なく覺ゆるぞ。
常陸　この常陸坊を初めとして、隨ふ者ども關守りに、呼びとめられてしその時は、こゝぞ君の御大事と思ひしに
伊勢　誠に源氏を守る正八幡の、義經公を守らせ給ふ御しるしの顯はれし上は、陸奧下向は速かなるべし。
龜井　全くこれは、武藏坊が智謀にあらずんば、免がれがたし。
駿河　なか／＼、我れ／＼が及ぶ所に非ず。
四人　驚き入つてござる。
辨慶　それ、世は末世に及ぶといへども、日月いまだ地に落ち給はず。御高運、有り難し／＼。さはいへ、計略とは申しながら、正しく主君を打つ杖の、空恐ろしく、千斤をも上げる某、腕も痺るゝ如く覺え候ふ。アラ、勿體なや／＼。
〽ついに泣かぬ辨慶も、一期の涙ぞ殊勝なる。判官、御手を取り給ひ。
ト皆々憂ひ思ひ入れ。
義經　如何なれば義經は、弓馬の家に生れ來て、命を兄賴朝に捧げ、屍を西海の浪に沈め
辨慶　山野海岸に、起き臥し明かす武士の
〽鎧にそひし袖枕、かたしく暇も波の上、或る時は船に浮び、風波に身を任せ、また或る時は山脊の、馬蹄も見

えぬ雪の中に、海少しあり夕浪の、立ちくる音や須磨明石、兎角三年の程もなくなく、いたはしやと萎れかゝりし鬼薊、霜に露置くばかりなり。

ト辨慶、よろしく物語りやうの振りある。

四人　とく〳〵退散。

〽互ひに袖を引きつれて、いざさせ給への折柄に。

ト辨慶先に、皆々立上がり、行きにかゝる

ト上手より、又々士卒、三方に土器を載せ、瓢箪の吸筒を持ち出で來る。後より富樫・出で來り

富樫　なう〳〵客僧達、暫し〳〵。

トこれにて皆々入れ替り、よろしく住ふ。

さても某、山伏達に聊爾を申し、餘りに面目もなく覺え麁酒一つ、進ぜんと持參せり。いで〳〵、杯參らせん。

ト土器を取上げる。士卒、酌をする。富樫、呑んで辨慶へさす。

辨慶　有り難の大檀那、御馳走頂戴仕らん。

〽實に〳〵これも心得たり、人の情の杯を、受けて心をとゞむとかや

ト杯を受け、よろしくあつて

〽今は昔の語り草、あら恥かしの我が心、一度まみえし女さへ、迷ひの道の關越えて、今また爰に越えかぬる、人目の關のやるせなや、アヽ、悟られぬこそ浮世なれ。

ト此うち士卒を相手に、杯事あつて、トゞ葛桶の蓋を取り、兩人の吸筒の酒を殘らずつぎ、グッと飲み干し醉うたる思ひ入れにて

〽面白や山水に〳〵、杯を浮べては、流に引かる曲水の手まづさへぎる袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。

辨慶　先達、お酌に參つて候ふ。

富樫　先達、一差し御舞ひ候へ。

辨慶　万歳ましませ〳〵、巖の上、龜は棲むなり、ありうどゝど。

トこれより本行の舞になる事よろしく

〽元より辨慶は、三塔の遊僧、舞ひ延年の時の和歌。

ト此うち、振りあつて舞の二段目になる。

〽これなる山水の、落ちて巖に響くこそ、鳴るは瀧の水瀧の水。

ト此うち、振りあつて舞の三段目になり

〽鳴るは瀧の水、日は照るとも、絶えずとうたり、とくとく立てや立つか弓の、心許すな關守りの人々、暇申してさらばやとて、笈を押取り肩に打ちかけ

ト大小片シヤギリになり、辨慶、振りのうちに、皆々に行けといふ思ひ入れ。これにて義經先に、四人附いて向うへ入る。辨慶、笈を脊負ひ、金剛杖を持ち、富樫に辭儀して立ち上がる。

〽虎の尾を踏み、毒蛇の口を遁がれたる心地して、陸奥の國へぞ下りける。

ト よろしく辨慶、花道際へ行き、舞臺へ富樫・士卒殘りてこれを見送る。この見得にて、拍子、幕。幕を引き付けると鳴り物になり、辨慶六法にて向うへ入る。

幕

（この脚本を上演又は轉載の際には堀越宗家の許諾を要す）

勸進帳（終り）

編纂校訂責任　渥美清太郎
鈴木　侃

日本戯曲全集・第二十七卷
歌舞伎篇。第六回配本

編纂者檢印

昭和三年十月十二日印刷
昭和三年十月十五日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋　六四五一二
振替東京　一六一七五

製版所　新倉東文堂

（神田區・松下町・七番地・明治印刷株式會社印刷）